

---

# とある最強の水分支配 《hydro command》

晃甫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある最強の水分支配《hydro command》

### 【Nコード】

N0444Q

### 【作者名】

晃甫

### 【あらすじ】

学園都市

東京都西部を開拓してつくられた人口二三〇万人が住む科学の街。

そんな学園都市に住む一人の少年、一条凧いちじょうは学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）の第六位、『水分支配ハイトロコマンド』を有する能力者。

そんな彼には御坂美琴という従妹いとこがいて、一方通行や垣根帝督、削板軍覇が親友で、『ファルコン』という組織をつくったりと、もの

すごい人間関係を築いている。

これはそんな彼のお話 ……

主人公チートっばいです。

原作完全無視、キャラ崩壊などありますが、それでも構わねえと思  
っていただけの方はよろしくお願ひします。

\*\*\*

第1話

夏休み編

第8話

大覇星祭編

第16話

死角潜入編

第20話

修学旅行編

第36話

一端覧祭編

第51話  
能力消失編

現在1話から改稿中です。

現在12話まで改稿。

第1話 水使い【acqua|master】(前書き)

思いつきで書いた小説です。

文章力など皆無ですがお付き合いして頂けたら幸いです。

2011・09・16

改稿しました。

## 第1話 水使い【aqua|master】

総人口二二〇万人。

その人口の実に8割が学生という学生の街。

### 《学園都市》

東京都西部を開拓し、実にその三分の一の面積を占める。

技術水準が外界と比べて二、三十年進歩している科学の街では、学生に対して『記憶術』や『暗記術』などと銘打って超能力の開発が行われている。

これは、そんな学園都市に住む1人の少年の物語。

「動くんじゃない！　殺されてえのか！！」

……どうしてこうなった。

少年は今まさに目の前で行われている犯罪の現場を前に、ただひたすら大きなため息を吐いた。

うだるような暑さが容赦なく体力を奪う。夏休み前日の放課後、

たまには外食でもしようかとファミレスに向かうも、財布を確認してみれば見事に閑古鳥が鳴いていた。

仕方なく近くの銀行で金を下ろそうと店内に入った途端、見るからにやばそうな輩の一人に銃口をつきつけられ店員さんと同じく人質の中へ。

とどのつまり、完全に銀行強盗達の犯行現場に出くわしてしまったわけである。

「……ッだあゝ、ホントついてねえ」

縄で縛られたまま深い溜め息をついた少年、一条 凧いちじょう なぎは犯人を見て頂垂れた。

こんなことになるなら今月はもう少し節約しておけばよかった、などと後悔してももう遅い。

「はやく金をつめる!!」

銀行強盗の1人が金を詰めている店員に向かって怒鳴る。何をそんなに焦っているんだと言いたくなるがそれも仕方のないことだろう。既に従業員の一人が警備員アンチスキルに通報してしまったのだ。ウカウカしていたらあつという間に御用である。

見た限りならば強盗は3人。

「はあ……ほんとついてねえな」

本当ならば今頃はエアコンがガンガン効いたファミレスで優雅にランチと洒落込んでいた筈だ。それを目の前の銀行強盗3人に打ち砕かれたと考えたら、何だか無性にムシヤクシヤしてきた。

よし、やってしまおう。

そう心に決めた凧は人質が集められた場所でスツと立ち上がる。  
銀行強盗の1人がそれに気が付き、

「おら動くんじゃないやねえよガキが！！ ぶっ殺すぞ！！」

と最早テンプレと化した言葉を言い放つ。

「やってみれば？」

こちらとしても多少頭にきているので向かってくるのならば迎え撃つつもりである。いつの間にか凧を縛っていた縄はほどけていた。

「かっこつけちゃって、本当はびびってんだろお！？」

……イラッ

ダメだ、もう頭きた。

銃口を突き付ける強盗の1人に向かって凧はスタスタと歩いていく。

「バカがッ！！ 死ね！！」

男は叫び、そして引き金が引かれた。

その場にいた誰もがこの後に起こるであろう最悪の事態を想像し、目を逸らした。



しかし、  
ドパアンツ！！

その銃口から弾丸が発射されることはなく、銃を持っていた強盗はどこからか発生した大量の水と共に壁へと激突した。そのままズルズルと地面に倒れ、意識を手放す。

「なツ、テメエ能力者か！！」

「ああそつだ。能力者なんてここじゃ対して珍しくないだろ？」

凧は強盗に向かって言い放つ。

『超能力』。

ここ学園都市の学生は全員もれなく超能力開発なるものを受けている。それによって発現する能力には個人差があるが、その発現した能力は無能力者（レベル0）から超能力者（レベル5）までの六段階に分けられ、高位能力者であるほど、学園都市内では力を持つのだ。

「チツ、こつなつたらテメエには消し炭になつてもらうぜ！！」

そつ言つと強盗の1人が手の平から炎を出した。

（『パイロキネシスト発火能力者』か……）

「どつだ、びびつたか！？ レベル3だぜ！！」

何やら自慢気に能力を見せびらかしてくる強盗だが、凧は特に警戒したりということもせず、寧ろバカを見るような目で、

「あー……、お前はアホですか？ 戦う前から能力相手に見せるやつがどこにいるんだよ」

やれやれといった表情で強盗を嘲笑する凧。

「ッ……この野郎がッ！！」

激昂した強盗は手の平に出した火の玉を凧に向かって投げつける。

「残念だったな、強盗さんよ。相性が悪かった」

凧は手を火の玉のほうに向けて何かを放つ。

すると火の玉はジュツという音を立てて消えてしまった。

「な……てめえ『水使い（アクアマスター）』か！！」

「御名答。アンタの能力じゃどうやったって俺は倒せねえよ」

凧は図上で巨大な水球をつくり、それを発火能力者の強盗のへと投げつける。

大量の水が詰め込まれた水球の質量は高さ十五メートルからコンクリートブロックを落とされるようなものだ。

それが発火能力者の強盗に激突、破裂した。

しばし目の前の光景を眺めていた凧だったが、ふと我に帰って目

の前の惨状に顔を青くする。

「やべ……やりすぎた」

店内は水浸し、人質もずぶ濡れだ。

……あれ？

こいつらの他にもう1人強盗いなかったっけ？

不思議に思つて周りを見回すと、銀行の外に走っていく強盗の姿。どうやら車で逃走を図るつもりらしく、近くに駐車してあった車のドアロックを無理矢理外して車内に乗り込んだ。

「あの野郎お、逃がさねえぞ」

凧が銀行からでて強盗を捕まえるべく車を追おうとした瞬間、目を開けていられない程の閃光が視界を覆い、数瞬遅れて轟音が響き渡る。

うつすらと目を開けてみれば目の前の空中をまるで竹トンボのようにクルクルと回転していく強盗が乗り込んでいた車。その車はキレイに回転しながら凧の目の前に落ちてきた。

「うおッ!？」

いきなり降ってきた車に思わず体をビクツとさせる。

車内に乗っていた強盗は口から泡を吹いて気を失っていた。

先程の閃光と轟音の正体を知るべく、凧は車が飛んできた方角へと視線を向ける。

見れば道路には深い溝ができており、今もその名残が融解した熱で煙が立っていた。

そして更にその先には、常磐台中学の制服を着た少女。

「うわ……」

思わず頭をかかえる凧。

そこには彼の天敵、御坂美琴が右腕を突き出して立っていた。彼女は凧に気が付いたようでズカズカとこちらに歩み寄ってくる。

「あ！ ちょっと凧なんなのよあれ！！」

詰め寄ってくる美琴が言う。

こいつは俺の2コ下の従兄弟、学園都市第三位のレベル5、学園都市最強の電撃使い（エレクトロマスター）であり超電磁砲レールガンの異名を持つ少女。

こいつの能力は俺にとって最大の天敵だ。

「いや、銀行強盗が外に逃げたみたいだったから追いかけて外にきてみれば、お前が超電磁砲をぶつ放してるところに遭遇してな」

「はあ……、強盗くらいちゃんと捕まえときなさいよ、凧だってレベル5なんだから」

ここ学園都市には軍隊とも対等以上に戦える火力を持つ超能力者（レベル5）が七人存在する。

一人は御坂美琴。そして学園都市第六位のレベル5、水使い（ア  
クアマスター）の一条凪。  
又の名を『ハイドロコマン水分支配』。

学園都市を舞台に、彼の物語が始まる

第1話 水使い【acqua|master】(後書き)

要望・感想などありましたらどうぞよろしく願います。

第2話 長点上機学園【School Life】(前書き)

筆がのっています(笑)

2011・09・16

改稿しました。

## 第2話 長点上機学園【school life】

「ああ、もう疲れた」

昼休みの教室で一条凧は机に突っ伏して盛大な溜め息を吐いた。

昨日は結局あの事件の後、ジャッジメント 凧紀委員とアンチスキル 警備員に捕まり、さんざん事情聴取された。

幸か不幸か水浸しにしてしまった人質の何人かが証言してくれたため大事には至らず、自分が“あの組織”に所属しているということとを伝えたら暫くして解放してもらえた。

そのせいで今日はひどく眠い。

凧が通う高校、

長点上機学園。

学園都市で五本の指に入るこの高校は能力開発分野において学園都市ナンバーワンの地位を築いている。殆どの能力者が強能力者（レベル3）かそれ以上、また能力でなくても一芸に秀でていれば入学することができるが。

そんな頂垂れている凧に近寄ってきたのは金髪と茶髪が入り雑じり、まるでホストのような少年。

「おい凧、どーしたんだ？」

声をかけてきたのは同じクラスで小学校時代からの親友である少



年、垣根帝督。

彼も凧と同じく学園都市に七人しか居ないレベル5。その第二位、<sup>ダーグマター</sup>『未元物質』を有する能力者だ。

「ああ帝督……昨日銀行強盗捕まえたら俺まで風紀委員とか警備員たちに捕まっちゃまってさあ……」

だはーッ、

と一際大きな溜め息を吐く。

「お前そんなことやってたンかよ」

凧の隣に座っている同じクラスの親友、一方通行が言う。

彼も凧や帝督と同じく学園都市に七人しかいない超能力者、その頂点に立つ少年である。

「しかたねーだろ！？ 銀行入っていきなり銃口突き付けられたんだからよ！！」

「銀行強盗捕まえるなんて良い根性してるぜ凧は」

途中から会話に加わっていたクラスメイトであり親友、学園都市第七位のレベル5、削板軍覇が凧を何故かヘッドロックしながら楽しそうに言う。

『ギブ！ギブ！』と軍覇の腕をタップする凧など無視して軍覇は楽しそうに会話をしている。

この四人が在籍しているという事が、長点上機学園が能力開発分野において学園都市ナンバーワンに君臨する理由だ。

七人しかいないレベル5の四人がこの長点上機学園に所属しているのである。（しかも1年次から全員が同じクラス）

学園都市に七人しかいない超能力者であるこの四人は、学園都市の平和を守るために『ファルコン』というチームを組んでいる。

レベル5で構成された『ファルコン』は当然周りへの影響も強い。結成から一年経った今では風紀委員、警備員と並んでファルコンと言われるまでになった。

だが一般の学生は『ファルコン』というグループがあることは知っていてもそれが風たちであるということとは知らない。顔が割れていないほうが色々都合がいいからだ。

そんな四人が、今日から夏休みだというのに学校に集まった理由、それは。

「なあ、<sup>レベルアップ</sup>幻想御手<sup>↑</sup>って知ってるか？」

軍覇のヘッドロックから解放された風は先程までのグダグダした秀困気など微塵もなく、真剣な表情へと切り替わっている。

「話だけならな。確か使うと能力レベルが上がるってやつだろ？」

隣の机から椅子を持ってきた垣根がそれに座りながら言う。

なぜ風がこんなことを言うのかというと、昨日の事情聴取の際に風が『ファルコン』の一員であることを知った警備員の語尾にやた

ら『じゃん』をつける巨乳のお姉さんが幻想御手事件の調査を秘密裏に依頼をしてきたのだ。

「そいつが今出回ってて、能力レベルが上がって天狗になったバカどもが一般人を襲ったりして被害をだしてるらしいんだ」

「そいつらを見つけて幻想御手の情報を聞き出すってのかア？」

一方通行が面倒くせエと言わんばかりの表情を浮かべて言う。

「ああ、どつやら副作用もあるらしいからな。はやいところ黒幕を捕まえねえとやばい」

「根性で見つけ出すぜ！」

こうして意見がまとまった四人は長点上機学園を離れ、学園都市の街中へとくり出した。

『ファルコン』の暗躍が始まる。

第2話 長点上機学園【School Life】(後書き)

いかがだったでしょうか…？

第3話 波乱の夏休み【trouble in summer】(前書き)

ノリノリで書いてます(笑)

-----

2011\*04\*01

改稿しました。

### 第3話 波乱の夏休み【trouble in summer】

一条凧、一方通行、垣根帝督、削板軍霸ら『ファルコン』は長点上機学園のある第一八学区を離れ、多くの学生が集まる第七学区へと向かう。

「でも幻想御手<sup>レベルアップ</sup>なんてモン使ってどオしよってんだ？」

ダルそうに頭を掻きながら大通りを歩く一方通行が言う。

「強い能力を使ってみたってののは学園都市の学生なら一度は願う夢みたうなもんだからな。それが目の前にあつたら使いたくなつちまうんだろ」

一方通行の少し前を歩く凧が言う。

もちろん凧も、始めから超能力者だつたわけではない。

彼が初めて学園都市に来たのは小学校一年生するとき。科学者だつた両親が進んだ技術が日常にある場所で育てたいということでの街にやってきた。

最初の身体検査<sup>システムスキャン</sup>ではレベル2、異能力者だつた。

超能力者という存在に憧れていた凧はレベルを上げるために先を目指し、努力して努力して、ようやく今の超能力者という位置にのぼりつめたのだ。

故に、簡単にレベルが上げられるというその幻想御手という代物が許せない。

使いたくなる気持ちも解らなくはないが、それでもやはり越えて

はいけない一線というものがある。

チーム『ファルコン』は二手に分かれて搜索を開始。  
一方通行と風、帝督と軍覇はそれぞれ逆方向に向かった。  
学生の多くが住む第七学区は夏休み初日とあって人が多く通りも  
混雑している。

デパートやファミレスなど店内は人でごった返し大変なことにな  
っているだろう。

そんな街中を歩く風と一方通行。  
灼熱の太陽が二人を容赦なく照らし、ジワジワと体力を奪ってい  
く。

「暑い……」

「だらしねエなア風」

「……お前は反射使ってるから暑くねえかもしれないけど俺は生身  
だからな」

暑さにもものともせずスタスタ歩く一方通行を恨めしそうに見なが  
ら風も人混みの中を進んでいく。

「本当にそんなモン使ってるやつらがいるのかよオ？」

「確証はないけど、被害がでてるのも事実だしな。ガセではないだ  
ろうな。確証もねえけど」

「どうやってソイツ等を探し出すんだ？」

「それなら良い場所を知ってる」

ニツ、と笑う風に一方通行はついていった。

風と一方通行がやってきたのは、風紀委員第一七七支部。  
本来は嚴重にロックされている筈の扉なのだが、まあそこはレベル  
5二人の力でどうにでもなる。

「よっ、初春」

勝手にロックを解除して内部へと足を踏み入れた。

「風さんッ!? 勝手にロック解除しないでくださいよ!!」

慌ててこちらを見たのは頭に花飾りをつけた少女、初春飾利。

「まったくですわ。お姉様と同じようなことをなさって、やはり従  
兄弟ということですね」

奥からティーカップを持って出てきたのは常盤台の制服を着たツ  
インテールの少女、白井黒子。

彼女たちは風紀委員ジャッジメントであり、治安の維持が仕事の警備員アンチスキルが介入し  
づらい校内の治安を守るのが仕事だ。

そんな風紀委員になぜ風が出入りしているのかというと以前、成  
り行きで自分が美琴の従兄弟であると美琴に紹介され、しかもレベ



ル5ということまで知られ、

それを知った白井がしつこく勧誘してくるうちに何だか仲良くなっていたからだ。

「なあお前ら、幻想御手って知ってるか？」

「幻想御手って、今学生の間ではやっているやつですよね」

「そうだ」

「ダマシイ虚空爆破事件って知ってますか？」

キーボードをカタカタと叩きながら初春が言う。

「あのぬいぐるみとかにアルミ仕込んで爆発させるってやつだろ」

「はい。それに実はレベルアップが絡んでいるのではないかと言うのが私たちの見解なんです」

「バンクにも適応する能力者がいないんですよ」

「それで幻想御手を使って急速にレベルを上げた奴の犯行って見るわけか」

思考する凧と白井を余所に、初春がおずおずと尋ねてきた。

「あの……、凧さん」

「ん？ なんだ初春」

「その凧さんの後ろにいる方は……？」

初春は凧の後ろで腕を組んで立っていた一方通行を見ている。

「ああ悪い悪い。紹介してなかったな。クラスメートの一方通行だ」

「ま、よろしくなア」

「一方通行って…、あの学園都市第一位の！？」

仰天する初春。

まさかレベル5とは思っていなかったであろう。  
隣にいた白井も驚いていた。

「……第一位つつつても研究者どもの利潤や研究価値で序列されるからよオ。そんなに超能力者同士で力の差は無エよ」

実際一方通行は間違いなく学園都市最強の座に君臨しているが、  
凧の方を向いて皮肉じみた調子で呟く一方通行。

「まあ俺なんかは水分子の操作だからな。研究価値はそんなに高くないんだよ」

「だから第六位なんですなえ」

ほえ、と関心したように初春が言う。

「という事は序列と実力は別なんですか？」

白井が尋ねる。

「そんなことねえよ。一位と二位は実力的にも別次元だ。あとは七位も実力は上位だな」

「オマエもだろうが風」

「ちょ、面倒だから余計な口出しすんなよッ!!」

「どっついうことなんですか?」

……ほらみる、食いついてきちまったじゃねえかよ……。

キラキラした眼差しでこちらを見てくる初春を見て頭を抱える風。

「風さんは第六位なんですよね? 風さんてそんなに強いんですか?」

一方通行はくるりと風のほうを向く。  
その目は風に語りかけていた。

面倒くせエから全部しゃべるぞ、と。

あまり能力について他人に知られるのは好ましくはないが、まあ初春と白井なら他言はしないだろう。

「コイツの能力はなんだか知ってるか?」

「水使い（アクアマスター）ですよね」

「それはあくまで能力の分類であって正式名称は違エ、まああの常盤台の超電磁砲の元が電撃使い（エレクトロマスター）ってなってるのと同じだな」

「お姉さまの超電磁砲はもはや共通語みたいなものですわね」

なんかくねくねしながら喜んでいる白井。美琴を溺愛しているよ  
うだが仲良くなってみてわかった。

こいつは変態だ。しかもかなり厄介な。

「風の能力の正式名称は“水分支配”ハイドロコマンド。水分子さえあればそれが全  
て操作できちまうつつう能力だ」

「それが凧さんの実力とどう関係あるんですか？凧さんには失礼で  
すけどそんなにスゴい能力には思えないんですけど……」

ぐさっ

初春……言ってくれるじゃないか……

「水分子が操作できるってのは研究価値で見ればそこまで珍しくは  
ねエが凧は水分子さえあればその“全て”を操れる。ここが重要だ」

「全て……」

むう、と顎に手を添えて考える初春の代わりに白井が言う。

「……ということは血液もなんですか？」

「そつだ。コイツはあらゆる水分子を操作できるからよオ、闘つたら厄介この上ないぜ」

さらに、

「空気中には水分子が大量に充満してるからなア、無意識に俺が無害と認識しちまつてるものは反射もできねエ、それを弄くられたら俺でもヤバいかもなア」

「そついうものなんですか」

初春が感嘆の眼差しを凧に向ける。

「やめる初春、そんな目で俺を見るな」

「何照れてンだよ凧イ」

「照れてねえよ!」

「ということとは実際は凧さんはかなり上位のレベル5ということになりますわね」

「……そんなのはやってみないと分からないけどな」

「序列もあてにはなりませんのね」

「難しいんですね」

無邪気な笑顔を向けて言う初春。なんだか心が洗われていくよう  
な……

「って言っても俺と軍覇以外はほぼ実力通りに序列されてるけどな」  
凧が一方通行の隣に立って言う。

そして今ようやく思い出したかのように、

「お前らヒマか？」

「まあ見回りくらいですけど…」

「よし初春、セブンスミスト行くぞ。白井もどうだ？」

「わたくしは虚空爆破事件の調査がありますので遠慮しておきます  
わ」

「そっか。ならしかたないな。一方通行も付き合い合えよ」

「ちよつと待て」

一方通行がほんとにイヤそうな顔で凧にストップをかける。

「何で俺まで凧たちに付き合い合わねエといけねエンだよ」

「何だよ照れんなよ（笑）」

さっきの仕返しとばかりに今日一番の顔で一方通行に反撃する凧。

「そもそも此処には幻想御手の情報聞きに来たんだろうが。俺は他  
をあたる、行きたきや勝手にいけ」

「仕方ねえなあ、なら俺と初春はセブンスミストに調査に行くことにしよう。いくぞ初春」

「は、はい!？」

テンパる初春をよそに凧は第一七七支部を出て一方通行とは逆方向に向かう。

「まったく凧の野郎、何しに来たんだか解らねエじゃねエか」

ブツブツと文句を垂れながら大きな通りを歩いていると、

「……あん？」

ふと目についた光景に一方通行が不審な目を向ける。

視線の先には不良どもにカツアゲされているらしき細身のメガネの少年。

「どこまで科学が進歩してもああいうバカ共は絶滅しねエンだな」

一方通行は善人ではないので助けるようなマネはしない。  
平然と目の前を横切った。

一方通行は気づかなかつた。  
カツアゲされていた少年の目が異常なほどの憎悪に満ちていたことに。





第3話 波乱の夏休み【trouble in summer】(後書き)

— 応超電磁砲と禁書の原作には触れていくつもりです。

## 第4話 虚空爆破【graviton】

少年は強さを求めた。

何者にも屈伏されることのない強さを。

そして手にいれた。

無能な人間どもをねじ伏せられる強さを。

(ふふふ…ははは)

少年が通りを歩いていると、一組の男女が大型チェーン店、セブンスミストへ入っていくのを目撃した。

女の腕には忌々しい風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の腕章がついている。

(丁度いい……)

少年、介旅初矢は進路を変更してセブンスミストへ向かう。

(そろそろ最大出力で僕的能力を試してみたかったんだ…!!)

「ところで凧さん、一体何を見るんですか？」

半ばムリヤリ連れてこられた初春だが、実はちょっぴり嬉しかったりする。

一条凧は（実は）相当に女子からもてる。

一八〇センチという長身と整った顔立ち、そして長点上機学園というエリート。

親友である垣根帝督と町を歩いていたら以前どこかの事務所からスカウトされたぐらいだ。

もちろん初春も例外ではない。

周りから見ればデートと見られてもおおかしくないシチュエーションに内心心臓バクバクだ。

「そーだなあ、幻想御手の聞き込みもしないといけないけど、とりあえず飯だな」

時間はそろそろ午後２時をまわろうとしているが、いろいろあって凧は昼食をとっていない。

「あ、そういえば私も昼食まだでした」

「なら丁度いいな、奢ってやるよ」

「え！？ そんないいですよー！！」

「気にすんなって、そこらのやつよりよっぽど金は持ってるからよ」

レベル5はその研究一つのために専用の施設がつくられるほど貴重な人材だ。

それゆえ研究資金やプロジェクト参加の報酬などが収入となる。その額はものすごいことになっている。

断っていた初春も渋々了承してくれた。今どきおごるなんて言ったら飛びついてくる奴らばかりなんだが、初春は律義だ。

セブンスミストの一角にあるレストラン街に行き、凧は適当に店に入る。

「凧さん！？　ここ超高級のステーキ屋さんですよ!？」

「ああ、美味しいもん食いたいだろやっぱ」

「私なんかがこのお店に入る日がくるとは……!!」

二人は入口にあったノレンをくぐり店内に入る。

「いらつしやいませ、現在席が混み合っております相席になってしまつんですがよろしいですか？」

「構わねえよ」

かりこまりました、と言った店員さんの後についていく。

相席だろうが食べれば問題はない。

ほどよく冷房の効いた店内を進み、案内された席に…

「……………」

凧は無言で立ち止まる。

「あ、佐天さんに御坂さん！」

相席の相手は、御坂美琴と佐天涙子だった。

しかたがないので。本当に仕方がないので。  
美琴と凧、佐天と初春が向かいあって席につく。

「お二人はどうしてセブンスミストに？」

「まあ日用品とか買いにね。昼食もまだだったし」

「私は御坂さんがおごってくれて言うからついてきた！！」

「まったく何で美琴がいるんだよ……………」

「凧が後から来たんじゃない」

「ついてねえ……………」

と美琴とそんな話をしていると唐突に佐天が。

「ところでさ初春」

「なんですか？」

「そっちの男の人って彼氏？」

「ブハツ!!」

と、飲んでいた水を噴き出す初春。顔は真っ赤だ。

「ち、違いますよ!! 私たちは調査に来たんです!!」

「一条凧だ。よろしくな。」

「私は佐天涙子です。それってあの長点上機の制服ですよね？」

「ああ。長点上機も常磐台と同じで制服着用が義務付けられてるからな」

「凧さんはただのエリートではないんですよ佐天さん!!」

顔を真っ赤にしていた筈の初春がいつの間にか復活してない胸を張るように言う。

「なになに!?!」

「なんと凧さんはあのレベル5なんです!?!」

「マジ!? じゃあ今私たちの前にはレベル5が二人もいるってこと!?!」

なんか向かい側で勝手に盛り上がってくれちゃってますが、こっちはそれどころじゃありません。

只今美琴に思いっきりビリビリ喰らってます。しかも二人には気づかれないように。

なんか今日の美琴は機嫌が悪い。  
なんかあったのか?

そうこうしてるうちに注文した料理がきて、四人で美味しく頂いた。

ちなみに風が四人分料金を払わされたのはここだけの話。

昼食を食べ終わり、セブンスミスト内をブラブラと歩き回る4人。

「じゃあ俺たちは聞き込みとかやらないといけないから」

と美琴と佐天と別れる。

「まずはどこから回りますか？」

「そうだな、なるべく学生、それも悪そうなやつらに……」

言っている最中、

正面から小さな女の子が走ってきた。

「お姉ちゃん！」

「どうしたんです？ 迷子ですか？」

「うんとね、お兄ちゃんがお姉ちゃんにこれ渡してって」

渡されたのはカエル（のような）ぬいぐるみ。

くく

凧の携帯が鳴った。

ポケットから取り出して液晶を見れば白井からだ。

「どうした白井」

「凧さん、虚空爆破事件の続報ですの！ どうやら犯人は風紀委員を狙っているみたいですよ、セブンスミスト内で重力子の加速が確認されました！今すぐそこから避難してください！！」

風紀委員、セブンスミスト……。



ふと初春へと視線を向ける。彼女の腕には風紀委員の腕章。

（狙いは初春か！！）

初春のもとへ走りだした瞬間、ぬいぐるみがバキバキと音を立て収束していく。

それに気づいた初春はぬいぐるみを投げ、女の子を抱く格好でかばう。

「やるしかねえか……！！」

そしてぬいぐるみは爆発した。

外からでもわかる爆発に、外で見ていた介旅は満足気に笑う。

「いいぞ……だんだん大きな力を使えるようになってきた。このままいけば無能な奴らを吹き飛ばす!?」

突然の背後からの衝撃に吹き飛ばされる介旅。起き上がって見ると、

「よっ、用件は言うまでもないよな。爆弾野郎」

学園都市第六位の超能力者、一条凧が立っていた。

「……な、なんのことだかさっぱり……」

「まあ威力はなかなかだが、誰もケガ1つ負ってねえぜ」

その言葉を聞いた瞬間、驚愕する介旅。

「バカな！！ 僕の最大出力だぞ！？」

「へえ」

それを聞いてニヤリと笑う凧。 直後に介旅はバツが悪そうにうるたえる。

「い、いや、外から見ても凄い爆発だったから……とても助からないんじゃないかって！！」

カバンから一本のスプーンを取り出して攻撃態勢に入る。

しかし、  
パキンッ

「な……！！？」

介旅が持っていたスプーンは一瞬で凍り、砕け散った。

「ハイドロコマンド  
水分支配……！！」

凧は介旅を押し倒し、白井から借りていた拘束用の手錠を取り付ける。

「……いつもこうだ」

「あ？」

「なにをしても、……僕は力にねじ伏せられる……!!」

「……………」

「お前みたいのが悪いんだよお!! 力のあるやつは、みんなそうだろうがあ!!」

ブチッ

凧がキレた。

ゆっくりと右手を振り上げ、そのまま介旅の顔面を一発ぶん殴る。

「甘えてんじゃねえ!!」

呆氣にとられた介旅が凧を見る。

「なんの努力もしないで……、周りのせいにして……!! てめえのはただ逃げてるだけじゃねえか!!」

凧の言葉に言い返せない介旅。

「力が欲しいんなら、まず努力をしろ……!!」

そう言って立ち上がり、その場をあとにしようとする風。

「……あ、そうだそれともう一つ」

振り返って介旅に問う。

「幻想御手って知ってるか？」

第4話 虚空爆破【graviton】（後書き）

凧がどうやって爆発からみんなを守ったかは次回に。

第5話 ファルコン【three|only|four】(前書き)

ここから原作ブレイクが始まります(笑)

## 第5話 ファルコン【the only four】

陽も暮れ、漆黒の夜空には星が輝いている。

時刻はそろそろ午後九時を回ろうとしており、既に学生などの姿は通りから消えていた。

そんな中、凧たち『ファルコン』の四人は第一八学区にある彼ら専用の建物に集まっていた。

専用の建物といっても大それたものではなく、高級アパートの一室をレンタルしているだけだ。

「そつちは収穫あったか？」

「ダメだあ。わざと路地裏ばっか通ってチンピラどもに絡まれてみたけど空振りばっかりだわ」

部屋に備え付けてある冷蔵庫から冷えたカフェオレを取り出しながら、凧の問いに答える垣根帝督。

現在四人は部屋の中央にあるテーブルを囲んで作戦会議中だ。

「お前らはどうだったんだ？」

テーブルに突っ伏した状態で軍覇が凧たちに言う。

「ああ、何か凧が情報手に入れたみたいだぜ」

一方通行が楽しげに風のほうを見て言う。

……どうやらこいつは完全に俺が初春とデートしたんだと思いでやがる。

「……ああ、実はセブンスミストで幻想御手レベルアップを使った能力者の犯行があった」

「犯行つて、爆破事件のやつか？」

「そうだ。たまたまそいつの犯行場所に俺たちがいて、目の前で爆発させやがったからよ」

「まア風の能力なら楽勝だよなア」

「風の能力つてほとんどチートだよな」

帝督が言いながら風に笑いかける。

……いやいやお前らの能力も充分チートだろうが、と密かに思う風。

「で、結論から言うけどレベルアップは音楽ソフトだった。その曲を聴くとおそらく同じ系統の能力者の演算能力が追加されてレベルが一時的に上がってるんだな」



彼らは学園都市に七人しかいない超能力者である。  
それはつまり学園都市の中で最も頭の良い七人であるということを示している。

当然、会話の内容もとんでもなく高くなる。

「てことは製作者は使用者に代理演算させてなにかやりたいってことだよな」

「AIM拡散力場に干渉して能力を自分のモノにするとかなア」

「となるとそれを統制しているメインブレイン主要電腦があるはずだな」

「ああ、おそらく幻想御手の製作者はそれだけの演算能力を集めて成し遂げたい何かがあるんだ」

「ところで凧はどうやってその爆発からみんなを守ったんだ？」

垣根帝督がおもしろそうに凧に聞く。

「お前らだって知ってるだろ。俺の能力は水分子の操作だからな。爆発して炎が燃え上がる前に爆発する瞬間のアルミ分子に水分子を結合させて強制的に融点を上げて凍らせただけ」

「相変わらずデタラメな能力だよな」

「お前らの能力も十分デタラメだあ！！」

自分ばかりがつつかれついに叫ぶ一条凧。だがそんなことを三人

は聞いぢやいない。

「……その製作者ってのはもうわかってるのか？」

さつきまでとは違い真剣な顔になる垣根。

「それはもう分かってる。もともとは木山春生っていう大脳生理学者が開発したものらしいんだが一週間前に関連書類ごと丸ごと盗まれてる。」

「盗んだヤツは？」

「木山の元部下で名前は黒木要仁くろき せうじん。どうやら私的理由での犯行みただ。」

「盗むなんざ根性のない野郎だな」

「名前が割れてんなら話は早エな」

「見つけ出してとっちめるだけだな」

「……いくか」

昼間の高校生という身分は捨て去り、『ファルコン』という組織に身を置く四人が夜空の下を暗躍する。時刻は午後九時を回ったところ。彼らの目的は至ってシンプルだ。

レベルアップーのデータを持ち出した黒木を捕縛し、この事件を  
終わらせること。

凧を始めとする四人はとある研究所へと向かった。

第5話 ファルコン【the|only|four】(後書き)

今ちょっとシリアスなんですけど

この話が終われば

コメディ満載の一端覧祭をやってみたいと思っています。

が、

どうでしょうか…？

第6話 多重多才【m a r c h | s k i l l】(前書き)

お気に入り登録が増えてはしゃいでいる私(笑)

## 第6話 多重多才【m a r c h | s k i l l】

満天の星が輝く空をかける四人の影。

それらはビルの屋上から屋上へと跳び移ってはとんでもない速さで移動していく。

彼らが目指すのは第二学区のとある研究所。

そこにレベルアップを学園都市中にばら蒔いた張本人、黒木要仁がいるはずだ。

「夜中に仕事って何かカツコよくな？」

そんな呑気なことを言っているのは学園都市第二位の超能力者、垣根帝督である。

「何だア帝督？ ハシヤいじまってるのか？」

一方通行が帝督を茶化す。

「そんなんじゃないよ」

「オイオイ頼むぞ。これって重要案件なんだから」

なんだか先行きが不安になってくる風。

移動を開始してから二十分弱。

そうこうしているうちに目的の研究所が見えてきた。

「いくぜ」

風の一言と共に、彼らは地上に舞い降りた。

\*\*\*\*\*

「くそっ!!」

巨大なコンピュータ、メインフレーム主要電脳の前で焦っているのは白衣のような研究服を着た三十代半ばの男、黒木要仁。彼こそが一連の事件を起こした張本人である。

(まずいぞ……、あれだけの人数の演算能力を回収してもまだ不足してるなんて……!! もう時間もない……!!)

黒木がモニターの前で試行錯誤していると突然部屋に赤いランプが点灯し、非常事態を知らせる警報が鳴り響く。

「なんだ!? 一体なにが!?!」

「黒木さん！」

そう言っつて部屋に入ってきたのは黒木の部下だ。

「一体なにごとだ!？」

「この研究所にわけのわからないガキどもが四人侵入しました!！」

「なんだと!?! 見張りのやつらは何をしているんだ!！」

「全員気絶させられています!！」

『何だと!?!』と言っつた黒木はモニターを操作して各場所の監視カメラの映像をモニターに呼び寄せる。

そこに映っつているのは、監視員を次々に気絶させて一直線にこの部屋まで向かっつてくる四人の男の姿。

この映像では顔まではつきり見えないが、かなりの実力者たちだろつ。

「くつ!!! まさかこんなに早く突き止められるなんて……!！」

黒木の焦りの色が濃くなり、額にはうっすらと汗も滲んでる。

もう時間はない。どこの誰かは知らないが、私の計画の邪魔はさせない。

黒木は心を決め、侵入者たちを迎え撃つ態勢にはいる。

もはやこの男をとめられるものはいない。



もしもいるとしたら……

\*\*\*\*\*

凧たちは一直線に主要電腦メインブレインを目指す。

あらかじめこの研究所内部の地図を入手し、最短ルートを頭に叩きこんであるため迷ったりといった心配は一切ない。

侵入してからおよそ10分程で研究所の一番奥、主要電腦があるのであるう部屋の前まで来た。

この一室だけ他の研究室と比べて明らかに扉は防犯設備が嚴重だ。

侵入者に対して入ることを拒み続けているかのような扉に立つ4人。普通の人間がいくら集まったところで決して開くことのなさそうな金庫室にあるような扉はしかし、たった一発の蹴りによって激しく陥没し、そのままの勢いで扉が完全に蹴破られ破壊される。

一方通行が脚力をベクトル操作したのだ。

勢いよく破壊された扉の先には、数人の研究所員たちと大きなモニターに映し出されている様々な情報を吸収している主要電腦メインブレイン、そしてモニターの前で4人を見つめる男、黒木要仁。

凧が三人より一步前にでて黒木に聞いたです。

「お前が幻想御手レベルアップを学園都市中に流した黒木要仁で間違いないな？」

「ああ、私が黒木だ。以後お見知りおきを。」

どこか余裕のある素振りに違和感を覚える風。こいつは何か俺自分たちに対抗する手段を持っているのか？ 風たちはわざと監視力メラの前で見張りを倒してみせ、黒木の無抵抗拘束を狙っていた。だが今の黒木はあきらかに余裕がある。演技ではなく、本当に余裕で風たち四人に勝てると思っている顔だ。

「帝督」

小さく垣根に合図を送る風。それに気づいた垣根が軽く頷く。

次の瞬間、垣根の能力によって造られた石ころほどの球体が黒木要仁のもとに飛んでいく。

だが黒木は動じることはしなかった。

いつのまにか黒木の周囲一メートルほどにバリアのようなものが展開され、球体を弾いていた。

それを見て4人は驚く。

「……能力者!?!?!」

大人が能力開発を行ったという話は聞いたことがなかったが、今使ったのは間違いなく能力だ。

「いっておくが私は君たちみたいに能力開発なんてしちゃいないよ。誰が好き好んであんなことしなくてはならんのだ」

四人の心を見透かしてしるかのように語る黒木。

彼の表情には自信しかない。

「能力開発をしてないのに能力が使えるだと？」

削板が思考を巡らせる。

「あいつが嘘ついてんじゃねえのか？」

そう言うのは垣根だ。

確かにその線はある。だが風はやつが嘘を言っているようには見えないし、第一嘘をつく必要などないと思うのだ。

「……待てよ」

一方通行が何かに気づく。

「幻想御手つてのは能力者の演算能力を同系統の能力の演算能力が補助することでレベルが上がるんだよなア」

ここで風たちも気づく。

「製作者が代理演算能力を使用して能力を使ってるのか!？」

不可能な話ではない。幻想御手によって集められた学生の演算能力は全て主要電脳に収集されている。

そこに製作者である黒木が自由にアクセスして能力を使用するということは可能だ。

元は木山春生が自分の脳波パターンで造られた幻想御手を、黒木が自分の脳波パターンに切り替えているとしたら、今起きている状

況にも説明がつく。

「素晴らしい!!」

それをあつさりと認めた黒木は四人を褒め称える。

「たったこれだけの情報で、たったこれだけのヒントで、私の能力使用の謎を解いてしまうなんて！ 君たちは頭がいいなあ。」

絶対的な上からの意見。黒木は確信している。自分が負けないと。

「ならもしかして他の能力も使えるんじゃないか？」

垣根が言うことも最もだ。

自由にアクセスできるならば、好きなときに好きな能力を使うことが出来るはずだ。

「まさか……デュアルスキル多重能力者!？」

凧が驚く。

一人に対して一つの能力。

これが学園都市に住まう能力者の当たり前のルールのようなものだ。

研究者たちがどれだけ研究しても多重能力者を生み出すことが出来なかった。

しかし、

黒木にはその可能性がある。

「私の能力は事実上不可能とされているアレとは別物だ。言うなれば多才能力者マルチスキルと言ったところかな」

黒木は目で他の研究所員たちに合図をしてこの場から離れさせる。これでこの部屋にいるのは凧たち四人と黒木だけだ。

凧は一呼吸おいて言う。

「お前、幻想御手なんて危険なものを学生にばら蒔いて何がしたいんだ」

「君たちには関係のない話だ」

「それによって傷付いている人間だっているんだぞ……」

「大きな事を成すためには多少の犠牲は必要だ

黒木の全く悪びれる素振りのない返答についに凧がキレる。

「……つぎけんじゃねえ！！ てめえの勝手な都合で学生を巻き込みやがって！！」

他の三人も同意見のようで、静かに黒木を見据えている。

「ほう。止めるつもりか、この私を！ どの馬の骨かもわからんガキどもが！！ やれるものならやってみる！！ 貴様らが束になつてかかってきたところで私には勝てん！！」

「言われなくてもやってやる……!!」

凧の目は怒りに満ちていた。

黒木はまだ知らない。

この四人が学園都市の頂点に君臨する能力者たちだと言っことを。

第6話 多重多才【march skill】（後書き）

感想などお待ちしています。

第7話 「弱くない」【aierisist】(前書き)

一応この話のクライマックスです。



## 第7話 「弱くない」【a i l | r i g h t】

第二学区のとある研究所の一室で『ファルコン』のメンバーである凧たち四人と黒木が一直線に睨み合う。

「いくぜツ!!」

そう叫んで勢い良く飛び出したのは学園都市第七位の超能力者（レベル5）にして、『世界最高の原石』とさえ言われる少年。

削板軍覇。

「すごいパンチ!!」

理屈は本人でさえも超大雑把にしか理解できていない正体不明の衝撃波が黒木を襲う。

（こいつら……、かなり高レベルの能力者なのか……？）

軍覇の攻撃に眉をひそめながらも黒木はその衝撃波をさっきとは違った盾のようなものでガードし身を。

「むっ!?!」

自らの攻撃が防がれたことで若干ショックを受けた軍覇に代わって前に出たのは。

「どいてな軍覇。俺がやる」

学園都市第二位の超能力者（レベル5）、垣根帝督。

瞬間、垣根帝督の背中からは三対6枚の純白の翼が展開される。現世に顕現した天使のような印象を受ける翼それをはためかせ帝督は飛んだ。

「食らいやがれ」

帝督の翼から無数のレーザー光線のようなものが無数に発射される。対し、黒木はそれを避けようとはせず、軍覇の攻撃を防いだ能力で盾を形成しもう一度構える。

だが。

「かかったな」

帝督がそう呟いた瞬間、黒木の展開した盾はレーザー光線にあったという間に貫かれ、黒木の右肩にまで達した。

「うがアアあぁッ!? 何故だ!? この盾はそんなレーザー光線如きに貫通されるほど軟弱では……!!」

右肩から流れる血液を左手で押さえながら額に大粒の汗を浮かべる黒木に、帝督はいつもの調子で言う。

「残念だったなあ、俺の未元物質ダークマターに、その常識は通用しねえ」

「ダ、未元物質!?!」

黒木が帝督が言ったその言葉に反応する。どうやら『未元物質』

という能力がどんなもので誰の能力であるかということは認知しているようだ。

「……まさか、お前があこの学園都市第二位の……!?!」

黒木の声心がなしか震えている。先程までの自信に満ちた表情が揺らいでいるのが傍目で見てもよくわかる。

「気づくのが遅せーよ」

笑う垣根帝督の隣では、一方通行がすでに戦闘態勢に入っていた。

「多才能力者たアおもしれエじゃねエか。ちつたア楽しませるよオマルチスキル?」

一方通行は振り上げた足を思いっきり地面に叩きつける。脚力のベクトルが操作され、ただそれだけの動作のはずなのに周囲に烈風が吹き荒れる。

その圧倒的な速度と威力に能力を使用するヒマもなく烈風に吹き飛ばされ、モニターの下に激突する黒木。

どうやらいくらマルチスキルと言っても元の脳波パターンのレベルが低いと扱える能力のレベルもそれに比例するらしい。

今の黒木はどう頑張っても大能力者（レベル4）。超能力者（レベル5）には届かない。

ここにきてようやく黒木は四人の名前と身分を頭の中から探し出した。

「……第一位の一方通行に、第二位の未元物質、第六位の水分支配に、第七位の最大原石まで……」

余りにもそうそうたる顔ぶれに、黒木の表情から完全に自信は消え失せていた。

いくら何百万単位の能力者の演算能力を利用することが出来ても超能力者（レベル5）と呼ばれる七人とその他とでは天と地ほどの差があるのだ。勝てる道理など、有るはずもない。

「黒木」

凧の呼びかけに黒木の肩が大きく上下する。顔が完全に引きつっている。

「一刻もはやく幻想御手で集めた能力者たちの演算能力を解放しろ。お前のせいで幻想御手を使った学生たちが意識不明になってるんだ」

「……ふ、ふはは」

何かに吹っ切れたのか突然笑い出す黒木。

「私は間違ったことはしちやいない……。誰だって願う夢を叶えてやっただけなんだよ」

それは最早独り言のようにブツブツと呟いていてだけで、凧たちの耳には届かない。

「私の夢も叶えられて、なおかつみんなの夢も叶う……。一石二鳥じゃないか……。そうだ、私は間違っただけなんかない、私は正しいこ

とをした!!」

発狂したかのように叫びだした黒木。狂っている。そう形容するのが適切なほど、黒木は狂気に染まっていた。

自分が正しい。

自分が全て。

まるで神にでもなったかのような行いに凧のフラストレーションは溜まりに溜まり、そして、それは爆発した。

「黒木いい!!」

凧が全力で能力を使用しようとしている。それを察知した三人はいち早く凧から離れ距離をとった。

「オイオイ凧のやつマジ切れだぞ」

「ここにおいても巻き込まれそオだな」

「俺も黒木みてえな根性なしは大っ嫌いだ!!」

凧の周囲には人の目には見えない超極小の水分子が集まってきている。

準備が整うまでおよそ一分。

「お前の夢ってなんなんだよ、黒木」

「お前らみたいな能力者をこの世から消し去ることだよ!! だが安心しろ、別に殺そうってわけじゃねえ。この集まった代理演算能力を使って超能力が使えなくなる音楽を開発し学園都市中に流すんだよ!! そうですねえ能力をかさにきたム力つく野郎なんていなく

なる！！ みんな平等で平和になれるんだよ！！」

もはや黒木にまともな感情はない。

あるのはただ嫉妬と憎しみのみ。

「お前らはレベル5だから気にもしないだろう！！ たかだかレベル3でしかないやつは、己の力を誇示するために低レベルの奴らを襲う！！ 低レベルの奴らはなにも悪いことなんてしていないのに！！ 俺はそんな可哀想な子どもたちをたくさん見てきた！！ だから守ってやるんだよ、俺が！！」

黒木はきつと本当に子どもたちを守ろうとしているのだろう。それは凧にも理解できた。実際そんな出来事が頻繁に起こっていると、いつの聞いたことがあるし、そんな間違っただ行いをしている輩がいるなら凧もすかさず止めさせるだろう。

しかし、凧は言う。

「……それはただのお前のエゴだ」

「なっ……！！？」

「お前が子どもたちを勝手に弱いと決めつけて、勝手に守らなくてはと思ってるだけだ」

その言葉を聞いて黒木が激昂する。

「お前らはレベル5だからそんなことが言えるんだ！！」

「最初から超能力者（レベル5）だったわけねえだろうがッ！！」

「……！！」

「わかるか黒木、俺たち学生はお前に守られなくちゃならないほど、弱くないんだ！！」

準備はととのった。

殺したりはしない。

身動きを封じさせてもらう。

- 研究室全体の気温が下がってきているように感じる。  
壁の端は凍りだしていた。

パキンッパキンッ

と少しずつ氷が部屋を覆っていく。

「な、なんだこれは！？」

「アブソリュートダウン  
絶対氷結」

凧がそう言ったときには既に部屋は完全に氷に覆いつくされ、黒木も肩まで氷漬けにされていた。身動きなど取れるわけもなく、ただそこに磔にされている。

「幻想御手を解除しろ」

凧の言葉に、もう黒木は齒向かうことはしなかった。

\*\*\*\*\*

翌日、

四人は借りているアパートに戻っていた。

あの後黒木が演算能力すべてを主要電脳メインブレインから解放し、使用者たちも意識を回復しているそうだ。黒幕である黒木はその後警備員アンチスキルに連行され、こうして幻想御手事件レベルアップは幕を下ろした。

「あー夜通しは疲れたなあ」

テーブル備え付けの椅子にどっかりと腰を下ろし欠伸をしながら眠そうに言う垣根。

奥のソファではすでに一方通行は眠っている。  
ベッドは軍覇が一人でダブルサイズを占領してしまっているためソファに寝ているのだろう。

帝督の対面に座っている凧も睡魔に襲われていた。

「眠てえ、……能力フルに使つと体力使うんだよなあ……」



幸いすでに夏休みに入っているので学校に行く必要もない。ぐっすりと眠ることができる。

押し寄せる睡魔に身をまかせ、尻はテーブルに突っ伏してそのまま眠りにつく。

真夏の太陽は今日も悠然と輝いていた。

第7話 「弱くない」【a i i | r i g h t】（後書き）

とりあえず一段落。

さてお次は、

私がやりたくてやりたくてしかたなかった文化祭の予定です（笑）

第8話 大覇星祭【most | greatest】（前書き）

やっぱり大覇星祭もやりたかったので一端覧祭のまえにこの話にします。

## 第8話 大覇星祭【most | greatest】

大覇星祭。

年に一度学園都市に所属する全学校が合同で行う超大規模な体育祭だ。開催期間は九月下旬の七日間。要するに能力者が繰り広げる大運動会である。

通常は一般人は学園都市に入場することはできないのだが、大覇星祭期間中に限っては親族や友人は学園都市に入場することができ、外部のテレビなどにも中継される、紛れもなく世界最大の運動会だ。

また、この大覇星祭に限っては能力の全面使用が推奨されているため消える魔球や燃える魔球なんてものはザラであり、外部からの注目度ももちろん高い。

種目は学校単位のものから個人単位のものまで多岐に渡り、個人種目は上位三位以内に入ると表彰される。

しかし、見ていて楽しい観客とは違い選手たちはそれどころではない。

なにしろ大覇星祭で優秀な成績を収めると学校に多額の援助金が与えられるので生徒たちはガチだ。故にに能力を抑えることなく全力で使用する。

そんな競技場で競技をするのだから常に大怪我の危険に晒されるわけだ。そんな戦地のご真ん中のような場所で楽しめる筈もなく、生傷の絶えない生徒が続出する。

当然高位能力者ならばそんな心配はしなくてもいいのだが、レベルの余り高くない学校の生徒たちは開催前からどんよりとした空気を全身に纏うこととなる。

そんな様々な心境を胸に、大覇星祭は開幕する。

学園都市中の生徒が各学校の体操服に身を包み指定された開会式の会場へ向かう。なにしろ学園都市中の生徒が集まるのだから、一つの会場で済むはずもなく、大小合わせて三〇〇近い会場で巨大モニターによる開会式が行われることになるのだ。

その中の開会式会場の一つに凧たち四人が所属する長点上機学園が集まっていた。

周りにいる学校の生徒たちは何やら長点上機の生徒たちにチラチラと視線を向けている。しかしそれも当然と言えば当然だろう。

何しろ長点上機学園は昨年五本指の一角、名門常盤台中学を破って総合優勝している学校だ。

当然周りからは注目されている。

「……あっちい〜」

灼熱の太陽の下、帝督が既に限界と言いたげな表情でぼやく。  
九月に入ったといってもまだまだ夏を思わせる太陽にジリジリと  
肌をやく日光。

「根性がねえなあ帝督」

そんな中体操服の上いつもの学ランを羽織ったスタイルの軍覇  
が帝督に言う。

「お前それ見てるだけで暑苦しいんだけど」

「根性で暑さなんざ吹き飛ばんだぜ!!」

「いや吹き飛ばねえよ……」

彼ら四人は長点上機学園の列の一番後ろに並んでいる。

本当は名前順なのだが、わざわざ人混みの中に突っ込んでいくの  
は自ら死地に向かうただのバカだと結論を下し、四人全員が後ろに  
並んでいる状態だ。

正直凧もあまり大覇星祭は気乗りしていない。

いくら能力の全面使用が推奨されているといってもそれはせいぜ  
いレベル4までの話だ。凧たちレベル5が全力なんて出したものな  
ら競技場の一つや二つ消し飛ばさるう。そうならないために、彼ら  
レベル5には能力制限が掛けられているのだ。

いつも根性だなんだ言っている軍覇でさえそこまでのやる気が起  
きていないようだし、一方通行に限っては既に帰りたいオーラ全開  
である。

そうこうしているうちにようやく連続一五人の校長の話とお喜び電報五〇連発が終了し、いよいよ大覇星祭一日目が始まる。

はつきり言ってやる気のない凧たちは開会式が終わると同時に長点上機学園に戻るため北口のゲートへと向かう。

「ちょっと待ちなさいよ凧」

しかしそんな凧に待ったをかける声が背後から掛けられる。不意に後ろから聞こえた声に凧はイヤそうに振り返る。

「私たちこれからすぐ競技があるのよ？それが何で北口に行っちゃうのかなあ？」

そこには笑顔でそう言っている少女。だが、よく見ると額には青筋がたっている。

「いやだから競技に向かおうと……」

「競技会場は南口のほうなんだけど」

「……………」

一瞬の沈黙の後。

「……………間違えちゃった」

バコオオン！！という破壊音が会場に轟いた。それは少女の渾身の右ストレートが凧の顔面にクリーンヒットした音だった。

「痛ってーな！ 何すんだよ楓！！」

「アンタたちがさぼろうとするからよ」

殴られた頬に手を当てながら猛然と抗議する凧に対して冷徹にも  
言い放つ少女。

凧たちの正面で腕を組んで睨んでいるこの少女、たちはなかえで橘 楓。

彼女は凧たちが所属する長点上機学園2-Aのクラスメイトであ  
り凧の部屋の隣に住んでいる幼なじみだ。

身長は一六〇そこそこ。

顔立ちもよくショートヘアの茶髪もスポーツ少女のような印象を  
与えている。

「ほら最初の種目は鬼ごっこよ。準備だってあるんだから早くしな  
さい」

「だってつまんねえじゃん！ 俺たちが全力でやったらどうなるか  
楓だってわかってんだろ！？」

「そうは言ってもしょうがないじゃない。凧たちが出ないと勝てな  
いし、昨年優勝の意地があるし」

「そんな意地犬にでも食わせとけよ」

「先生や生徒会の人たちだって凧たちに期待してるんだからしっか  
りしてよー！」



「そんな期待されても……」

昨年高校一年生だった凧たち四人はその実力を遺憾無く発揮して長点上機学園を優勝に導いた。

他の生徒たちはあの四人がいれば楽勝だろうと安易に思っているようだが、実際はそんなに甘くない。

まず昨年二位の雪辱を誓う五本指の一角、常盤台。第三位のレベル5である美琴と第五位のレベル5、食蜂が在籍する常盤台は間違いない最大のライバルだ。

そして同じく五本指の一角、

おうらいおつかがかん  
王来王華学館

第四位のレベル5が在籍するこの学校も優勝候補の一つで、優勝争いに加わってくるのは間違いないだろう。

更には残る五本指も虎視眈々と優勝を狙っているのだ。そうやすやすと優勝できるはずがない。

「いくわよ凧」

半ばムリヤリ体操服を掴まれ南口から会場に連れていかれる凧。

「なんてゆーか……」

「見せつけてくれるなア凧のやつ」

「青春だな」

とかなんとか好き放題言っている三人に楓は振り返って。

「あんたらもよ」

結局楓に連れていかれた四人だった。

長点上機学園の第一種目は男子による『鬼ごっこ』だ。

第七学区と第一八学区の間にある第五学区全てを使って行われるこの競技。基本的なルールは建物の中に入らないことと一般人を傷つけないことだ。そのためこの競技には一般人に対する干渉制限がかけられている。

鬼ごっこ、という言葉だけを聞けば小さい頃よくやったあの楽しい鬼ごっこを連想させるが、これはそんな生易しい種目ではない。

学校内で選ばれた三〇人の中の十人が鬼となり、対戦校の逃走二〇人を先に捕まえたほうが勝利となる。

二〇人全員を捕まえないといけない。鬼にとって地獄なのはこ

だ。つまり全員捕まえないと種目が終了しないのだ。

ちなみに去年の鬼ごっこでは終了まで四時間以上かかった。さらにある程度の能力使用が認められているので鬼と逃走者が戦うことにもなる。タッチされなければ鬼を返り討ちにしても良いということである。

長点上機学園の相手は能力開発とスポーツに力を入れているらしい進学校だ。

見たところレベルもなかなか高そうである。

作戦会議の結果、凧と帝督は逃走役。一方通行と軍覇は鬼をやることになった。

一方通行が逃走役なら永遠に捕まらないだろうがそれだと時間がかかる恐れがある。短期決戦のための配役だ。

「選手はこちらに集まってくださいーい！！」

大霸王祭実行委員の高校生が参加者を第五学区の中央広場に集める。

「それではいきますよー……」

実行委員の少女は運動会では定番のピストルを高々と掲げ残った手で耳を塞ぐ。

一瞬の間。

「はじめっー！！」

空砲が天に向かって放たれる。それを皮切りにまず各学校の逃走

役の生徒が第五学区バラバラに散らばって逃げる。  
それから百秒後、鬼たちが追いかけるのだ。

ちなみに逃走役同士で戦って倒した相手を連れて見方の鬼まで連れていくなどもルール上認められている。

そして百秒後、一斉に鬼たちも散らばり、『鬼ごっこ』が開始された。

この種目は昨年優勝の長点上機学園が参加していることと能力バトル全開のスリリングな鬼ごっこが見られるこの競技が観客たちに大変人気があるということで第五学区の至るところに設置されたカメラと上空の飛行船からの映像、実況などにより全国に放映される。

一日目の目玉種目であるといってもいいだろう。観客は第五学区内にあるサッカー場のようなスタジアムの巨大な液晶モニターで競技を観戦するのだ。

鬼ごっこ開始から数分。第五学区を特に警戒もせずウロウロと歩く風。

その左腕には腕時計のようなものを装着している。

これは相手の鬼が半径二〇メートル以内に接近すると反応するレーダーだ。

ちなみに鬼たちは逃走役に反応するレーダーをつけている。

「鬼の姿はない、か」

鬼ごっこが始まりそろそろ十分ほど経つが未だに鬼が現れる気配はない。

（たまたまいないほうに俺が逃げたのか？）

そんなことを思いながら角をまがると、対戦校の生徒とぶつかった。

その生徒は鬼ではなく逃走者だ。

逃走者同士や鬼同士はリーダーに反応しないのでこういうことはよくある。

特に何をするというわけでもなくそこを立ち去ろうとする風だが。

「待てよ」

進行経路を塞ぐ対戦校の少年。見たところ一年生のようだ。

「まずはアンタを倒して鬼のところに連れていく」

恐らくこの一年生は風が誰だか分かっていない。

長点上機学園にはレベル5がいる、ということくらいは知っていたかもしれないが、まさか目の前にいる相手がそうだとはい夢にも思っていないのだろう。

もし分かっていたのならこんな真似はしないはずだ。

テレビ中継されているせいなのか風の行く手を遮る少年はなんだからカメラを気にしているようで視線を飛行船やカメラに時折向けている。

面倒だなあ。

率直に風は思う。

この少年が風よりも強いことはないだろうがいちいち相手にしないではいけないのが厄介だ。

こちらとしては早くこちらの鬼たちが向こうの逃走者を捕まえてくれるのを祈るだけなのだが。

「まあいいや。俺だって売られたケンカくらい買うさ」

何と言っても大覇星祭初日の第一種目だ。観客たちのためにもここは少しくらい盛り上げておかないと。

そんなことを考えつつ風が笑う。

それを挑発と受け取った少年が風に向かって炎の剣を作りだし、風へと向かっていく。

（応用力高いな）

そんなことを考えて炎の剣に反応しなかった風だが、その炎の剣が身体に触れることはない。

何時の間にもやら風の周りには無数の水球が漂っており、それが集まって炎の剣を鎮火したのだ。

「なっ!?!」

自らの持つ炎の剣が瞬く間に鎮火されたことで焦る少年。

「安心しろ、ちょっと寒いだけだから」

次の瞬間には少年の肩から下見事に凍り漬けにされ、身動きがとれなくなっていた。

「うわぁッ!?!」

一瞬の出来事に困惑する少年。気付いたら凍り漬けになっているのだから手の打ちようがない。

「お前、一体何者だよ!?!」

目の前で悠然と立つ凧に問い掛ける。

「ハイドロコモンド水分支配の一条凧」

その言葉を聞いてようやく目の前の相手が誰だか理解した少年は、あっさりと抵抗することを諦めた。

凧は近くのベンチに移動して腰を下ろし携帯を取り出して画面をスクロール、目当ての人物を見つけて通話ボタンを押した。

「もしもし軍覇か? 一人逃走者を捕まえたから来てくれ。場所は今から送る」

このような見方同士での携帯による情報交換は認められているため、この鬼ごっこは言うなれば超未来的鬼ごっこと言った情報戦でもある。

数分後、やってきた軍覇によって氷漬けにされている少年は捕まり脱落した。

長点上機学園

逃走者：残り18人

対戦校

逃走者：残り16人



第8話 大覇星祭【most|greatest】（後書き）

なにかいい競技などありましたら頭の貧困な作者にアイデアをください；（泣）

## 第9話 追って追われて【escape and chase】

大覇星祭期間中の学園都市は一般の来場客やテレビ局などの報道関連の人間でとても賑やかだ。

そんな学園都市の一角、第五学区では第一種目、『鬼ごっこ』の競技中だ。

「『現在長点上機学園がリードしています』」  
という実況の声が巨大なモニターから流れている。第五学区のスタジアムのモニターだけでなく各学区のモニターからも随時放送されているので視聴率もかなり高い。

そんな第五学区を、鬼役である一方通行が歩いていて。

とても鬼のようには見えない。通りのど真ん中を我が物顔で歩くその姿からは探そうという気が全く感じられない。

「ツたく楓にムリヤリ参加させられてこっちはいい迷惑だぜ」

特に逃走者を待ち伏せしようともせず、かと言って走って追いかけるということもせず、道のど真ん中を闊歩する一方通行。

「ああ？」

腕を見ると装着したレーダーが反応していた。近くに敵の逃走者がいるようだ。しかもその反応は一直線に一方通行のもとへと向かってきている。

「んだア？血の気の多い野郎オが鬼を潰しにきたみてエだなア」

退屈しのおぎにはなるか、と考えた一方通行は僅かに口角を吊り上げる。すると前方から一人の少年が走ってきた。見るからにやっつやるぜ的な雰囲気を全身から漂わせている。

「お前、長点上機学園の鬼だよな！？」

その一言で一方通行はこの少年が一年生であることを確信した。二、三年生は一方通行や凧たちのことは昨年の大覇星祭で顔を知っているのでこんな自殺行為のようなことはしたりしない。

「だったらどうすんだ？」

「俺たちの学校が勝つためにお前を倒させてもらう」

おそらくモニターを見ているこの学校の応援をしている生徒たちは全力でモニターに静止の声をあげていることだろう。だがもちろんこの一年生にそんな声が届くわけもない。

「いいぜ。やってみろよ」

両手を広げて挑発する一方通行。暇つぶしが見つかって嬉しいのか悪そうな笑みを浮かべている。

「調子に……乗んなよ！！」

思いきり振りかぶった一年生は野球の投球フォームのような動作で一方通行に向かってなにかを投げつける。

(……へエ、こいつ電撃使い(エレクトロマスター)か)

一年生が放った電撃の槍を見ながら一方通行は思う。見たところレベル3程度のものだろう。

動こうとしない一方通行に対して一年生は勝利を確信したのだろう。向こうで何やら騒いでいる。

だが。

次の瞬間雷撃の槍は一年生の頬を掠めて飛んでいった。

「……え？」

わけがわからない一年生に対して一方通行は首を鳴らしながら退屈そうに告げる。

「世間知らずのガキが、いい気になってんじゃねエぜ」

一年生は諦めず、もう一度同じ攻撃を一方通行に向かって放つ。しかしやはりその攻撃は一方通行に当たる直前で跳ね返り自分のもとに飛んでくる。

「なんだ……？ お前、何なんだよ……！？」

「お前に言っただってわからねエよ」

一方通行はそこら辺に落ちていた小石を広い下手投げで軽く投げる。ゆっくりとした動作で投げられたその小石はしかし音速ほどの速度で一年生の真横を通過した。

「ッ ……!!」

絶句する一年生。

その場から動くことができない。

一方通行はゆっくりと一年生に近づいていく。蛇に睨まれた蛙状態の少年は逃げることもできず、ただ呆然と立ち尽くすことしか出来ない。

目の前に、一方通行がやって来た。

その細い腕をゆっくりと伸ばす。

そして。

恐怖の余り目を瞑っていた少年が目を開けると、そこには自分の肩に手をおく一方通行の姿。

一方通行は反射を解除して一年生にタッチしていた。

「ハイハイタッチ、まったく面倒くせエ」

不機嫌そうにそう言った一方通行は一年生を置いてどこかへ行ってしまった。

競技審判の高校生に連れていかれる一年生は後になって彼が学園都市第一位の超能力者であることを知った。

「ハッハー！！ タッチだ少年！！」

「だあゝ！ くっそお！！」

体操服に何故か白ランを羽織った少年、削板軍覇が前方を逃げていた対戦校の逃走者を捕まえた。

軍覇はものすごいスピード（音速を超える）で追いかけてくるのではつきり言ってみつかつたら最後、捕まるのは目に見えている。

「なかなか根性ある走りだったぜ少年」

捕まえた相手に対して親指を立て爽やかな笑みを浮かべて相手を讃える軍覇。

（……コイツ一体何者なんだ！？）

軍覇の正体を知らない逃走者はただ呆然とするしかなかった。

「『鬼ごっこに参加している生徒に現在の進行状況をお知らせします』」

各場所に設置されたスピーカーから第五学区全域に実行委員会の

お知らせが入る。

「『ただいまの状況、長点上機学園の逃走者、残り13名、高校の逃走者、残り6名。競技時間は現在一時間十三分です』」

「あと六人！？ まじかよ……！！」

建物の物陰で息を潜める対戦校の生徒。

さつきから近くに鬼の反応があり迂闊に出回れない状況に置かれている。

「くっそ誰だよ辺りをうろついでる奴は……！！」

若干いらいらしながら周りを警戒していると、すぐそこを通りかかる一人の影。

(……オイオイ嘘だろ、あいつは……)

視線の先には長点上機学園の体操服を着て、更に上から学ランを羽織るといふ謎のスタイルの少年。

(削板軍覇……！！ 学園都市第七位のレベル5じゃねえか……！)

軍覇の存在を認知した途端、鼓動がはやくなる少年。彼は二年なので昨年の大覇星祭での軍覇たちの活躍は知っている。

(冗談じゃねえ！ 何でこんな大物と当たっちゃまうんだよ……！)

見つければ捕まることは目に見え、絶望しかない彼だったがふと気がついた。

(待てよ……？ こいつは第七位なんだからレベル5の中で一番弱いんだよな……？ だったら俺にもチャンスがあるかもしれねえ……！！)

彼がこう思うのは自分の能力に少しばかりの自信を持っていたからであり、中継カメラの存在が彼をさらに積極的にさせたからである。

「待ちな！」

勢いよく隠れていた物陰から飛び出し、軍覇の前に立ち塞がる。

「削板軍覇だな。俺は自分の学校の勝利のためにお前を倒す！！」

そんな相手の台詞を聞いて、軍覇は笑う。

「いいな。そいつは根性のある台詞だ」

まず動いたのは対戦校の少年。周囲一帯から鉄屑やら金属やらが彼の手に集まり即席の刀を形成する。

「俺の能力はレベル4の磁力強化。ハードマグネット食らいなッ！！」

少年は軍覇に向けてその刀を降り下ろす。

「ッ！？」



しかし、既に目の前に軍覇の姿はない。

「なかなかいい能力だな、ソレ」

背後からの声に振り返ってみると、既に軍覇は攻撃態勢に入っている。

「すごいパンチ」

軍覇が右拳を突き出した。突如、謎の衝撃が彼を襲い、数メートルぶっ飛んだ後そのまま気絶してしまった。

「ハイ、タッチっ」と

軍覇は気絶した彼の肩に手をおき、その場から走り去った。

「あゝもう面倒くせー!!」

帝督は現在絶賛逃走中である。彼をを後ろから追っている鬼の数、

総勢六人。

半分以上の鬼が帝督を追っているということになる。

帝督が能力を使えば簡単に鬼を撒くこともできるのだが、そうするとその鬼たちが他の逃走者に標的を変更してしまう。

帝督のミッションはできるだけ多くの鬼を引き付け、追い付かれず引き離さずの絶妙な距離で逃げ回ることなのだ。

「待ちやがれ〜！」

鬼の一人が帝督に叫ぶ。おそらくこの生徒は帝督がどの程度の力量なのか知らずに追っている。

大方能力も使わず逃げ回っているのを見てコイツなら捕まえられそうだとでも思ったのだろう。

「待ちやがれだあ〜？」

イライラが募る帝督。ついには我慢できずに携帯を取り出し、電話をかける。直ぐにそれは繋がった。

『なんだよ帝督。任務はちゃんとこなしてるか？』

電話の相手は凧だった。向こうは既に粗方片付いているのか受話器越しには凧の声以外何も聞こえない。

「もう大変だよ！ イライラが半端ない！！ あいつら俺なら倒せるところってやがる！！」

走りながらも大声で叫ぶ帝督にまだまだ大丈夫そうだなと密かに思っ凧。

『だがまあそうだな。向こうの人数も大分減ったし、そろそろ引き付けなくてもいい頃だ。いいぜ帝督、殺さない程度になら暴れても』  
「それを待つてたんだよ！！」

ニツと笑って通話を終了し、立ち止まって鬼たちの方々へと振り返る。それと同じように鬼たちも立ち止まる。その顔を見ると全員が血気盛んな顔。

どうやら誰も帝督の素性を知らないらしい。

「よおお前ら、俺なら捕まえると思っただろ？」

ポケットに手をつ突っ込んで不敵な笑みを浮かべる帝督。

「お前逃げ回ってばかりだったからな」

それを受けて笑いながらそう言う鬼たち。

「…………ム力ついた」

散々逃げ回る役目をやらされた上に名も知らない一介の生徒たちからのこの物言いに帝督の脳内では沸点を超えた。

無言のまま帝督が手を前に突きすと、突然鬼たちの足元に黒い空間が出現し、みるみる鬼たちが沈んでいく。

「な、なんだあ！？」

理解不明な出来事に慌てふためく鬼たちをよそに帝督は告げる。

「今お前らの足元にあるのは小型のブラックホールみたいなもんだ。呑み込まれたら生きて帰れねえぜ？」

「……………！？」

一瞬で凍りつく鬼たち。そしてようやく彼らは自分たちの目の前にいる人間が誰なのかを理解する。こんなものが造りだせてしまうのは学園都市中を探しても彼しかない。

「これは……………未元物質！？　じゃあまさかお前……………垣根帝督か！？」

「気づくのが遅すぎんだよお前ら」

帝督は鬼たちの足元に生成していたブラックホールを消して彼らを解放する。

「どっつする？　まだやるか？」

学園都市第二位を目の前に戦意を喪失しない者は一握りだけだろ  
う。

鬼たちが帝督を捕まえるのを諦めたとほぼ同時、一方通行が対戦校の最後の逃走者を捕まえて鬼ごっこは長点上機学園の勝利で終了した。

その様子を第七学区の中心街の巨大モニターで見ていた少女。  
腰まで届きそうな茶髪を靡かせながら、彼女は薄く笑みを浮かべ  
その場を後にする。

彼女の体操服の胸あたりには王来王華学園の校章が描かれていた。

第9話 追って追われて【escape | a | d | c | h | a | s | e】(後書き)

次はなんの競技がいいでしょう。

第10話 昼休みの話題【tea|time】(前書き)

すみません！

一度投稿しましたが削除して大幅に変更して投稿し直しました；

## 第10話 昼休みの話題【tea time】

第一競技の『鬼ごっこ』を勝利で終えた凧たちは第五学区をあとにして長点上機学園に戻って来ていた。

「あゝ疲れた……」

鬼ごっここの競技時間二時間〇六分の間ほとんど走りっぱなしだった帝督が自分の机に突っ伏しながらばやいている。敵を引き付けながら捕まらないように逃げ回るといふのは精神的にキツイものがある。

ちなみにこの競技時間は過去最速だったりする。

時刻はそろそろ正午に差し掛かるところで今から午後二時までには昼休みとして時間が設けられ競技は行われない。

人によつては久しぶりに会った家族と外で食事をしたりといった人もいるが凧たち四人は全員が教室にいた。

「聞いたか？ 女子の借り物競争常盤台が圧勝だったよ」

実は長点上機学園は男子の鬼ごっこだけでなく女子も平行して第七学区周辺を使って借り物競争が行われていたのだ。

「ああ超電磁砲だろ」

「ああ凧の従妹の」



「まあ美琴は勝つだろうな。あいつ昔から勝負事に関して異常にこだわるから……」

そんな他愛ない話をしてしていると不意に教室の扉が開き、実行委員の仕事も一段落ついた楓が入ってきた。

その瞬間に顔を見合わせる一方通行、帝督、軍覇。何やら『いいこと考えた』的な薄ら寒い笑みを張り付けて。

「俺ら昼飯食いに食堂いつてくるわ」

「あ、なら俺も……」

「……いいからお前はそこにいろ」「……」

まるで打ち合わせでもしていたかのようなタイミングで同時に三人に釘をさされ、座ったまま取り残された凧と楓。幸か不幸か、現在教室には二人以外誰もいない。

「鬼ごっこ勝つたんでしょ、さすがレベル5」

「まあな。楓も二位だった？」

「超電磁砲には負けちゃったけどね」

「美琴は異常だからしかたねえよ」

「従妹にそんなこと言っちゃダメでしょ」

「……………」

「……………」

何やら気まずい雰囲気がある。その場を支配している。そんな雰囲気をぶち壊したのは楓だった。

「あ、あのね……………」

「ん？」

「あの、お弁当……………作って……………きたんだけど、よかつたら、食べる？」

凧と楓は所謂幼なじみというやつである。学園都市に来る前からの古い友達。近くに居すぎて恋愛感情などに発展することはない

……………答だ。

（おかしいおかしい。何時もの楓はこんな可愛らしいやつじゃないだろもつとガサツで短気でだけどたまに見せる笑顔がかわいくてああああああ！）

凧の思考回路は意味不明にショート寸前だったが決して表情には出さない。

「あ、ああ。わざわざ作ってきてくれたのか？」

「ち、違つわよ！ たまたま……材料が、余つたから……」  
ツンデレですか。

そんなどーでもいいことを考えながら凧はもらった弁当を開ける。  
中身はかわいらしいお弁当だった。  
それをゆっくりと口々に運ぶ。

「……どう？」

「うん、うまい」

ホツとする凧と、内心ドキドキの凧。

二人は静かな教室で黙つたまま時間を過ごす。  
そんな二人は笑顔だった。

とそんな二人を教室のドアの隙間から顔を覗かせて眺めているの  
は上から帝督、一方通行、軍覇だ。

「だーもー！ くつついちまえよいい加減！」

「見せつけてくれるなア」

「凧にもっと根性があればなあ」

ものすごいヒソヒソ声で会話する三人。

「だいたい凧にだけ弁当もってくる時点で気づけよ凧！」

「あいつは鈍感だからよくわかってねエンだよ」

「だめだなあ凧」

言いたい放題の三人が二人の様子を見守っていると、

「あの……」

背後から声をかけられた。

「垣根先輩、お昼食べましたか？」

話しかけてきたのは一年生の女の子二人だ。ちなみに三人とも全く面識はない。

「いや、まだだけど」

「あの！ よければ私たちとご一緒しませんか？」

「いいね、いくよ」

二つ返事で見知らぬ少女たちと中庭へと消えていく帝督。これがイケメンの力なのか、と軍覇と一方通行は納得する。

「あの野郎オ、ほんと見境ねエな」

「帝督はモテるからな」

すると、

「あの……」

降り返ってみればまたまた見知らぬ少女が一人。

「削板先輩、お昼ご飯一緒に食べてもらえませんか……？」

「俺か？ 構わねえよ」

そして帝督と同様に軍覇も消えていく。

「ッたぐどいつもこいつも」

愚痴をこぼす一方通行の携帯が振動する。

「ああ芳川か、今から行く」

そう言った一方通行は携帯を仕舞い、長点上機学園の校門に向かう。

そこには芳川という白衣を着た女性と小さな少女の姿。その少女は大きなバスケットを持って一方通行に向かってぶんぶん手を振っている。

こうして四者四用のそれぞれの昼休みは過ぎていく。



第10話 昼休みの話題【tea|time】(後書き)

今回はコメディ風を意識したんですが…

第11話 夜の薦め【more|active】(前書き)

ユニーク3000突破!

感謝感謝ですm( ) ( ) m

ではお楽しみください。



## 第11話 夜の薦め【more|active】

午後の競技も無事に終了し、大覇星祭一日目の競技種目は全て終了した。

そう、競技はである。

現在の時刻は午後五時半ごろだが、六時半からは花火などを大量に打ち上げて行うナイトパレードが開催される。

学園都市に住む多くの学生にとって完全下校時刻を過ぎていても警備員アンチスキルに目をつけられない数少ないイベントだ。

ほとんどの学生はこのナイトパレードを見に行く予定でいる大覇星祭の目玉イベントの一つでもある。

が、しかし。

そのナイトパレードに長点上機学園の生徒は誰一人として参加しない。

理由は至極単純、ナイトパレードよりも重要なイベントが長点上機学園では行われるからだ。

それは 。

「『さあ皆さん、毎年恒例のアレやりますよー！』」

『うおおおおー！』という男子生徒の野太い大合唱が体育館全体に反響する。

長点上機学園の体育館に集まる全校生徒。体育館のステージ上には生徒会のメンバーが集まり何やら後ろには巨大な掲示板が。

「『第一五回！！ 長点上機学園男女人気ランキングin大覇星祭』！』」

『うおおおおー！』とさっきからうるさい体育館最前列に陣取っている男子のみなさん。彼らが所謂負け組であるということには誰もツッコまない。

「『もうすでに皆さん知っているとは思いますが説明をしたいと思えますー！』」

生徒会長を務める女子生徒が掲示板をバンと叩いて説明を始める。

「『これは長点上機学園の男子は女子に、女子は男子に投票するものではない！言えは今日の大覇星祭を見てカッコイイ！とかかわいい！とか前からいいと思ってた！などの個人意見を集計し、それを元にランキングにしたものです！』」

『うおおおおー！』  
『キヤーー！』

男子だけでなく女子までハイテンションになってきた。

「『この長点上機学園には男子553人、女子476人が在籍しています。その中で男女各トップ10を発表したいと思います!!』」  
そんな生徒会長の言葉を体育館の隅で聞いている凧、一方通行、帝督、軍覇の四人。

ちなみに昨年は一年生ながら二位以下に圧倒的な票差をつけ帝督が一位だ。

「毎年みんなテンションあがるよな」

「まあランクインすると商品もらえるからな」

凧と帝督が壁に寄りかかり話している。

「こんなのだオだっていいんだけどよ」

一方通行は興味がないと言ったような素振りを見せる。  
が。

「ん〜？ その紙なんだよ一方通行」

凧が一方通行の眺めていた紙を横から取り上げる。

「あッ！ 凧てめ返せ!!」

「なにになに〜？」

一方通行から取り上げた紙にはランクインしたときにもらえる商品の種類が記載されていた。

「ははくん、一方通行だって興味津々じゃねえか」

「違エよ！ それはあれだ、落ちてたから……」

なにやらアタフタしている一方通行に対して紙をヒラヒラさせながらニヤニヤする風。

やはり一方通行だって年頃の男子。

周りの女子からの視線は気になるようだ。

「『ではまず男子のランキングから見てみましょう！』」

生徒会長は掲示板の前に立つ。掲示板には1〜10位と書かれていて、その右側は上の紙がめくれるようになってる。

「『まずは第10位！！ 2・B、川崎拓！！』」

一斉に歓声があがる体育館内。名前を呼ばれた川崎は照れ臭そうにステージ上へ上がって商品をもらっていた。

同時に最前列に陣取る男子たちからは舌打ちが続出。

ちなみに商品はランキングが上位な者ほど良いものがもらえる。

今川崎がもらったのはお菓子詰め合わせだったが、昨年一位の帝督がもらったのは小型船舶だった。

次々と発表されていく男子のランキング。それを聞いてうなぎ登

りにテンションの上がる男子もいれば、この世の終わりのような表情で頂垂れている男子の姿も。

それを見て凧は思う。

これが勝組と負組か。

「『さあ続いて第6位の発表です!!』」

生徒会長が掲示板からペラッと6位の枠の紙をめくる。

「『2-A、一条凧!!』」

「……は？」

ポカンと口を開けたまま固まる凧。その隣で一方通行と軍覇が幽霊でも見たかのような顔で凧を睨み付けていた。

「凧イイイ!!」

今にも襲いかかってきそうな一方通行の怒号が響く。

「なんか余裕だなと思ってたら、そういうことだったのか」

軍覇が全て悟ったかのように腕をくんで納得している。

「いや! えっ!?! 俺!?!」

全く予想していなかった展開に頭がついていかない。とりあえず

ステージ上に呼ばれたので小走りでそちらに向かう。

ステージ袖にいた生徒会もやっている楓になぜか睨まれた。

??? なんか楓機嫌悪いな。

「『ええと一条君に投票した女子たちによると、レベル5なのに優しいしカッコイイ、気どっていないなどの意見がよせられていました』」

目の前で何やらキヤーキヤー騒ぐ女子と凧でめー裏切りやがったなというクラスの子の恨みの籠った罵声が絶妙のバランスで混ぜり合っている。

なんだかさらに楓の機嫌が悪くなっているような気がする。

第6位にランクインした凧は商品として大型の液晶テレビをもらった。

帝督たちのところに戻って一方通行と軍覇にあちこち殴られる凧だがそれ以上に人気のある生徒がすぐそこに一人。

「『さあいよいよ第1位の発表です!! 実は私も彼に投票しましたー!!』」

女子のランキング第2位に入る(後ににわかったことだが)ほどの美人生徒会長のまさかの爆弾発言に密かに想いをよせていた男どものガラスのハートは戦車に踏み潰されたかのように粉々になる。

「『第1位!! 2-A、垣根帝督!! なんと女子の半数ほどが

投票するほどの圧勝！！ 二年連続の1位です！！」

帝督がステージに上がると女子のテンションはこの日最高潮、男子のテンションはこの日最低を記録する。

帝督の隣に立っている生徒会長の顔はほんのり赤くなっており、それがさらに負け組男子の神経を逆撫でしている。

今年の一位の商品は一体どこにそんな金があるんだと全員がツツコミたくなる真っ白なポルシェだった。

ちなみに余談だが、男子人気ランキングで軍覇は13位、一方通行は17位であった。

帝督と凧に隠れているがなかなかモテているこいつら二人。

「『さあ男子の発表も終わり次は女子の発表に行きましょう！！』」

女性の生徒会長にかわってマイクを持った男子副会長が会を進行させていく。ちなみに人気ランキングは229位だ。

ここにきて息を吹き返す男ども一同。

長点上機学園は男女ともにレベルが高い生徒がそろっているのどこかの撮影会と言っても押し通せてしまっくらいなのだ。

「『それでは行きましょうまずは第10位

』」

凧たちは相変わらず体育館の隅で固まっている。毎年上位に入っ

てくるような生徒は決まっているので改めて見なくても大体の予想はつくのだ。それに先程から女生徒たちが凧たちを遠巻きに囲んでおり動こうにも身動きがとれない。

「まさか今年はポルシエとはなあ」

ポルシエのキーを人差し指でくるくる回しながらケラケラ笑う帝督。

見た目ホストのような少年に外国の高級車はものすごく映える。

まさか始めから帝督に渡すつもりでポルシエ用意してたんじゃないだろうな生徒会。

「まあ凧は凧の順位が気になるどころだよなあ？」

「なっ、なんで俺が凧の順位気にしないといけないんだよ！」

「わかるぜ凧、惚れてる女が上位にいてほしいという気持ちと他の男どもが凧を狙ってるって困るって気持ちとの板挟みなんだよな」

帝督が凧の肩に手をおいてなにやら『みなまで言うな』的雰囲気です語りかけてくる。

「だから別にそんなんじゃないやっ！」

必死に反論する凧を余所に進行していく会。そして聞き慣れた名前が耳に飛び込んできた。

「『 第4位、2 - A、橘楓! -! 』」



「…………は？」

自分の名前が呼ばれたときよりも信じられないといった表情でステージを見る風。

楓は少し恥ずかしそうにステージ上上がって商品（何かの小切手）を受け取る。

「橘ってあんな人気あったんだなあ」

隣で帝督が意外そうに言う。

「まあ普通にかわいいし誰にでも優しいしな」

軍覇も同調するようにして続く。

「先輩や後輩も狙ってるって噂だぜエ？」

一方通行もそれに乗っかり風を追い詰めていく。

グサッ

グサッ

グサッ

風の心に突き刺さる三人の言葉。

（え？ え？ あいつってあんな人気あったの？ てゆうか4位って。いっつも一緒にいたから全然知らなかった……）

頭の中でもんもんとしたものを抱え込みながら苦悩する風。

それを見た三人は確信する。

あ、こいつ完全に惚れてるな。

人気ランキングの発表も終わり、生徒たちは未だ続いているナイトパレードへと繰り出す準備を始める。

ナイトパレードなるものに、一人だけで行こうとする者など居るはずがない。なら誰と行きたいのか。決まっている、好きな人だ。

というわけで現在彼氏彼女はもちろん、これを機に仲を深めようとする生徒たちが体育館内でおのおの絶賛声掛け中だ。それはまるで巨大な合コン会場のようで、当然のことながら人気ランキングトップ10に入っている生徒たちは異性からのお誘いを受けまくっている。

凧や帝督はもちろん、凧のもとにも何人も男たちの姿が。

それを見た凧は、行き場のないイライラを感じていた。

(なんなんだよこの気持ち……くそっ)

凧の目の前にも十数人の女子がナイトパレードに誘ってきてくれているのだが、そんな女子の声は全く耳に入らず、凧は向こうの凧しか見ていない。

凧は男に囲まれて困っているようだった。

そのとき、ふと。

凧と楓の視線が合った。

それが凧のなにかを刺激したのか。

突然凧は目の前の女の子たちにごめんねとだけ言い残し、楓のもとに向かった。

\*\*\*

(うう困った……)

楓は男子生徒10人ほどにナイトパレードと一緒にいつてほしいと誘いを現在進行形で受けている状態だ。

楓自信4位に入っているなんて夢にも思わずパニック寸前になっていたりする。

(どっしょお……)

ちらつと向こうを見ると凧が大勢の女の子たちに囲まれていた。

凧が6位だったことにびっくりだが、まさかあんなに人気があったなんて。

(凧のやつ、でれでれしちゃって)

楓自身も似たようなものなのだが、最早頭がない。

こんな状況にあっても気になるのはやはり幼馴染のアイツで、時折そちらに視線を送ってしまう。と、そのとき、そんな幼馴染と目が合った。

(え……??)

意中の幼馴染は女の子たちをその場に残してまっすぐこちらに向かってくる。

(え？ え？)

\*\*\*

なんかガマンできなかつたんだ、楓が他の男といるのが。まっすぐ楓のもとに向かいながら自分の行動力にびっくりしている凧。

楓のもとまで向かうとむらがる男たちを掻き分け、楓の目の前でやってきた。

「な、なんなの……？」

突然のことについていけない少女の腕をグイッと掴んで男たちから離れる。

「……いくぞ」

「え？」

極力楓の顔を見ないように先をみながらそう告げて、凧は楓の手を引いたまま体育館の外へと歩き出す。今の自分は顔が真っ赤になっっているに違いない、そう確信しながらも楓の手を離そうとしないのは、誰にも取られないように、という深層心理からなのだろうか。

それを見ていた大量の女の子に囲まれている帝督。

「やるじゃん凧」

あの鈍感野郎にしちゃあ上出来だとも言うつように口笛を吹いて、帝督は彼らが体育館から消えるのを見送った。

凧がいきなり私の腕を掴んで男子たちから引き離れた。突然のとでわけがわからないけど、本心では嬉しかったりする。

「ちよつ、凧！ なんなの!？」

そう聞いても凧はなにも言わず、ただ手を引いて歩き続ける。

校門あたりまでできてようやく、凧はその足を止めた。

凧は無言のまま立っている。その頭の中では、

(やべー!! よく考えたら俺とんでもなく大胆なことしてんじゃん!!!( ))

テンパリまくってまともに凧の顔を見ることができない。

「凧………?」

不意に凧が話しかける。

「あの………ありがとう………」

顔を赤らめながらお礼を言う楓。

その表情を見た瞬間凧は完全にK・Oされた。

「あ、いや気にすんなよ」

もう既に花火は打ち上げられているらしく、空は大量の花火で彩られている。

「……ナイトパレード、いくか？」

緊張しながらもなんとかどもらずに言えた凧。

「……うん」

楓もそれに頷いて応じた。

そうして二人はナイトパレードへ向かう。無意識のうちに繋がれた両手は離されなのまま。

そして、夜は更けていく。

第11話 夜の薦め【more|active】(後書き)

ようやく1日目終わりましたね；

第12話 ド派手に【show | time】（前書き）

短くてすみません；

なかなか進んでいく方向が定まらない大覇星祭（T | T）



## 第12話 ド派手に【show time】

九月二十日。

大霸王祭二日目となる今日も真夏を思わせる厳しい日差しが容赦無く降り注いでいる。

一日目終了時点で一位は常盤台中学、二位は超僅差で長点上機学園、それに次ぐ三位は王来王華学園となっている。

今日はその二位の長点上機学園と三位の王来王華学園の直接対決があるため、競技会場である第一八学区のスタジアムには大勢の観客が押し寄せていた。

競技開始まではまだ幾らか時間があるのにも関わらず既に観客は満員になりつつあり、観客の数に比例してそのボルテージも上がっているようだ。そんなスタジアムの控え室に、いつもの四人はいた。

「なア風、昨日あれからどオなっただよ」

昨日の体育館での風の大胆な行動をばっちり目撃していた一方通行がイイ顔をしながら風を問い詰める。

「い、いや何もなってねえよ!!」

あるとしたら手をつないでナイトパレードを一緒に見たくらいで、本当になにもない。昨日なんとなく自分は楓のことが気になっていると感じ出した風は、それだけでもう限界だったのだ。

「本当かあ？ 怪しいなあ」

ニヤニヤする帝督がまだ詰め寄る。彼は昨日周りの女子三〇人ほどとナイトパレードに行ったが、実はあのあと例の爆弾発言生徒会長と二人きりでデートしていたりする。

「凧、根性だせよ」

軍覇が凧の肩にポンと手を置き、宥めるように言い聞かせる。それに耐えきれなくなった凧は、

「いい加減にしろよお前ら！！ 何もねえって言ってんじゃん！！」

キレることしかこの状況を打破する方法が見つからなかった。

『二日目第一種目、長点上機学園対王来王華学館の棒倒しをはじめます』

場内アナウンスが流れ、一気に場内が盛り上がる。

この棒倒しは男女混合で行われ各校選抜二〇人で相手の棒を先に倒したほうが勝ちになるととても単純シンプルなものだ。

が、能力の使用が推奨されている学園都市にとって、それは最も厳しいルールでもある。何せ棒を倒すためならば互いに能力全面使用だ、怪我をしない生徒のほうが少ないくらい、この競技はハードなのである。

長点上機学園の二〇人は凧、一方通行、帝督、軍覇を含めたメンバーだ。ちなみに、楓はこの時間他の競技の審判が割り当てられているので棒倒しには参加していない。

一方の王来王華学館は五本指の一角、殆どの生徒がレベル3以上のエリート学校だ。そしてその中で女王に君臨しているのが、

「来たわね長点上機のレベル5」

控室を出てスタジアムにやって来た凧たち四人を見つけて口角を吊り上げる少女。

学園都市第四位のレベル5、『原子崩し（メルトダウン）』の麦野沈利だ。

彼女はこの王来王華学館の頂点にして絶対女王。

「なんだよ沈利、やる気まんまんじゃねえか」

そんな麦野の態度を見て帝督がからかう。

実はこの二人、幼少のころからの幼なじみだったりする。

「今に見てなさい帝督。今日こそアンタを倒すから!!」

決め台詞的なものを吐く麦野。なんかもうすでに負けフラグが立ってしまっているのは気のせいなのだろうか。いや、気にしたら負けか。

「そっぴや沈利って王来王華だったんだな」

帝督繋がりで凧もいくらか麦野と面識があったため、一応顔見知りなのだ。

「ああ、あいつは厄介だぜ。なんせ俺に今まで一度も勝ったことないから自棄<sup>ヤケ</sup>になってやがるからな」

ケラケラ笑って言う帝督だが、第四位相手に負けたことがないというのは普通の人間ならばまず不可能。流石は第二位の超能力者（レベル5）だ。

「なら沈利の相手は帝督に任せる。俺と一方通行は相手の棒をとりに行くぞ。軍覇は自分たちの棒を守ってくれ」

「任せろオ」

「根性で守るぜツ！！」

作戦は決まった。

先陣を切って道を切り開くのは風、一方通行の両名。

守備について自陣の棒を守るのは軍覇。

そして最大の障害になるであろう第四位を相手取るのは帝督だ。

観客たちはレベル5がこの会場に五人もいるということに派手な戦いを予想し、すでに歓声が上がっている。

「オイオイ盛り上がってるなあ観客たちは」

帝督が周囲を見回して言う。一万人はいるだろうか。

「大方俺らが派手な戦いでもするのを期待してンだろオよ」  
「どうする風？」

まだどのように責め倒すかは決まっていなかったため、軍覇が凧に指を示を求めてくる。

凧はしばらく顎に指を当て考えこんでいたが、

「……いいじゃないか」

ニヤリ、と凧が笑う。それは笑顔ではなくイイ顔で、悪巧みをしているようなものだった。

「観客が期待してんなら、その期待に応えてやろうぜー!」

本日の作戦。

ド派手にかませ。

作戦は決まった。

相手がレベル5ならば遠慮は無用。会場がそれに耐えられればの話だが。

手加減を知らないレベル5たちが、棒倒しで暴れだす。

第12話 ド派手に「show-time」(後書き)

次はド派手にかまします！

第13話 派手な棒倒し【vs LEVEL5】(前書き)

麦野のキャラがいまいち掴めない；

### 第13話 派手な棒倒し【vs LEVEL5】

棒倒し開始の合図と同じ、凧と一方通行は走り出した。相手は5本指の一角、王来王華学館。

「行くぜ一方通行!!」

「おオ!!」

まず手始めに俺好みのステージにしようか。

そんなことを考えた凧は1度たち止まり右手を競技場の人工芝の上に置く。

「…凍れ。」

瞬間凧を中心に地面を氷の膜が広がっていく。あっという間に競技場全体がアイススケートのリンクのように氷一色に染められた。

アイス・ロウ  
「氷層!!」

そのド派手な能力に沸く会場内。作戦通りの派手さである。

「見方側まで凍らせなくてもよかったんじゃないか?」

見れば見方も氷に足をとられ滑っている者もちらほら見受けられる。



「まあいいか。」

一方通行は足の裏の裏のベクトルを操作して氷との間にある空気の層を排除する。

それによって氷で滑ることがなくなるのだ。

「さア……ド派手にいこうぜエ。」

一方通行が跳躍、敵陣に突っ込んでいく。数秒後、大きな衝撃とともに敵の生徒5人ほどが紙切れのように宙を舞った。

「いいね一方通行。」

ニヤリツと笑った凧も再び走り出し敵陣へと向かっていく。

凧の眼前には二人の王来王華学館の生徒。

1人は手から炎を、もう1人は目の前で姿を消した。

『パイロキネシスト テレポーター 発火能力者に空間移動能力者が。レベルは4級だな。』

冷静に状況を分析した凧はまず発火能力者の相手を行う。

「くらえ！」

敵が手から巨大な炎を投げってくる。

いつぞやの銀行強盗とは話にならないくらいの火力だ。おそらくこの攻撃力を買われて敵陣突破に採用されているのだろう。

しかし、凧は学園都市に7人しかいない超能力者（レベル5）。しかも水使い（アクアマスター）である。

発火能力者からしたら最悪の相性である。

凧は表情一つ変えず飛んできた炎を眺める。

凧が手を出すとそこから丸い水の盾のようなものが形成され、その盾に炎は衝突しジュウウという蒸発音を立てて消えていく。

「な！まさかお前、ハイドロコマンド水分支配か！？」

「最初のパフォーマンスで気づけよ。」

苦笑いをしながら凧は突きだしていた腕を敵へと向ける。

「フリーズ瞬間冷凍。」

「え！？」

気がついたときには敵の少年の腕と足は氷りついていた。

「これ以上凍らされなくなかったら、動くなよ？」

それを聞いて諦めたのか少年は肩を落とした。

まず1人。

凧が思った瞬間、テレポーターである少年が背後にテレポートしてきた。完全にとった。テレポーターである少年はレベル5を倒せるという事実には笑いが止まらなかった。

が、

彼の拳は空を切る。

「は？」

意味がわからないと言った表情で尻を見る。

「残念だけど、お前がどこにテレポートしてくるかわかってるんだよな。」

「！！！？」

ますます意味が分からないという表情になる少年。

「しょうがないから説明してやるよ。」

競技中にも関わらず説明を始める尻。

「俺は水分子を操作する能力者だ。水分子は空気中にごまんとあるからな、お前がテレポートするときに見える空間のわずかな歪み、それによって押し退けられる水分子を感知することもできるんだよ。」

簡単に言ってくれるがそれはつまり彼には死角がないと言うことだ。どこから攻撃を仕掛けようともその動作によって押し退けられた水分子を感知されてしまっただけは攻撃が当たることはない。

「反則だろ……」

テレポーターは諦めたようだった。

「さてと、」

凧が周囲を見回すと前方では一方通行が派手に暴れ回っている。棒を倒すのも時間の問題だろう。そして右のほうを見ると、

- - 帝督と沈利が戦っていた。

\*\*\*\*\*

「うおっと!」

帝督は麦野の攻撃を間一髪のところでかわし態勢を立て直す。

「危ねーな沈利!!当たったら死んでたぞ今は!!」

「どうせ当たらないでしょうが!!」

麦野の手から放たれる彼女の攻撃、「原子崩し（メルトダウン）」が帝督に向かって何発も放たれる。

「だから普通なら死ぬぞこれは!!」

避けながら叫ぶ帝督。なんだかんだで余裕はありそうだ。麦野のメルトダウンによる熱で二人の周囲の氷は溶けている。

「ったくちよこまかと!!逃げるな帝督!!」

また一発、メルトダウンナーが放たれる。  
しかし帝督は今度は避けなかった。

ドオオオン！！

激しい音と共に一瞬で会場が2つの意味で熱気に包まれる。

「危ねーなあ。」

帝督は無傷だった。その背中から純白の翼を出現させて防いでいたのだ。

「沈利い、いい加減諦めろって。お前じゃ俺には勝てねえって。」

「うるさい！！」

なおも続けられる麦野の攻撃にもともせず一直線に突っ込んでいく帝督。

一瞬で麦野との距離を0にする。

「！！！！」

「まだやるってのか？」

麦野の顎に自らの指を置き、囁くように言う帝督。そのときの麦野の顔が真っ赤になっていることに彼は気づかない。

その時、

ワアアアア！！

という観客たちの歓声が会場内に響く。

帝督が見ると一方通行が棒を倒したところだった。

「俺たちの勝ちみたいだな沈利。」

「…！」

麦野は悔しそうに帝督を睨む、なんだか捨て台詞を吐き捨てて自陣へと戻っていった。

「お疲れさん一方通行。」

労をねぎらう風。

「まア楽勝だ。」

首をコキコキと鳴らしながら戻ってくる一方通行。自陣を守っていた削板も最終ラインで敵を足止めしていたようで自分たちの棒は無傷だった。

「お疲れさん。」

4人は拳をぶつけ合った。

その様子の中継で見ていたのは常磐台中学のエース、御坂美琴。

「さすが風ね、まさか会場全部凍らしちゃうなんて。」

彼女はこれから常磐台選抜20人対 中学選抜200人での玉入れに参加する。

常磐台と言えば学園都市屈指のエリート校、そんなところと普通の一般中学がまともにやり合って勝てるわけがない。よって自然と人数的なハンディが生みだされることとなる。

が、それでも意気消沈しているのは200人もいる中学だったりする。

「オーホッホ！彼らからは負け戦の臭いがしますわ。」

常磐台は常磐台で負ける気はさらさらない。

『ま、私だって負ける気はないけどね。』

彼ら200人が意気消沈している理由は相手が常磐台であると同時にもうひとつ、

「っしやあ行くわよお！」

超がつくほどの戦闘狂、学園都市第3位のレベル5、“超電磁砲”がいるからだ。

- 十数分後、彼らは見事に撃破され、常磐台が圧勝した。



第13話 派手な棒倒し【VS LEVEL5】(後書き)

次は常磐台と対決予定です！

第14話 最終競技【final round】(前書き)

なかなか競技の描写がうまくいかない…。  
文才がないことを痛感します；

## 第14話 最終競技【final round】

大覇星祭最終日。

長かった世界最大の運動会も残すところあと数種目、生徒はもちろん観客や教師たちさえ熱気の渦に包まれていた。

今日までの成績では長点上機学園がトップをひた走っているが、今日の結果次第では現在2位の常盤台が逆転優勝する可能性も残されている。

近年稀に見る大接戦なのだ。

そんな常盤台にとって逆転優勝するために必ず勝たなくてはならない相手、長点上機学園。

最終日はこの2校の直接対決があるのだ。

勝てば文句無しで優勝の長点上機学園、勝てば逆転優勝できる常盤台中学。

この競技を観戦するために第7学区の競技会場には朝から大勢の観客たちが集まっている。2日目の長点上機と王来王華の対決を見に集まった観客の2倍はいるだろう。

競技開始は午前10:00

現在時刻午前09:31

開始の時は近い。

\*\*\*

「これに勝てば文句無しで優勝だな。」

ここは長点上機学園控え室。ここに生徒総勢50名が集まっている。

「相手は美琴たちか、なかなか厳しい戦いになるかもな。」

凧は自らの従兄弟であり天敵、御坂美琴を思い浮かべながら言う。

「凧の能力とあいつの能力は相性悪すぎるんだよなあ。」

帝督が軽くストレッチしながら凧に言う。

御坂美琴は凧にとって最大の天敵だ。

それは美琴が“電撃使い（エレクトロマスター）”であるからだ。最強の電撃使いと最強の水使い、頂点同士がぶつかった場合どうしても電撃を水はよく通す。レベルの差がある電撃使いならば何の問題もないのだが学園都市第3位の電撃使いとなれば話は別だ。凧は能力の使い方を考えなくてはならない。

下手に水を使って攻撃されるとかえって利用されかねないのだ。ゆえに一方通行に勝てる凧であっても美琴には苦戦する。

だが、苦戦はしても負けることなど凧は考えていない。

「正面きって倒すだけだぜ。たとえ美琴でもな。」

\*\*\*\*\*

「今年こそは優勝させてもらうわよお。」

こちらは常盤台中学の控え室。超電磁砲こと御坂美琴はたたならぬ闘志を燃やしていた。最終競技を残して優勝圏内、ここまでできたならば勝つことしか考えていない。

「…お姉さま？加減というものを少しは考えてくださいな。」

美琴の隣でやや顔を引きつらせているのはツインテールが特徴の少女、白井黒子。

「相手は凧なのよ？加減なんて必要ないじゃない。」

「相手ではなくて会場が持ちませんの！！そうでなくても向こうには4人もレベル5がいるんですよ！？それが本気でぶつかったら会場なんか消し飛びますわ！！」

ゼーハー言いながら絶叫する白井。確かにこれから行われる競技に参加する人間はほとんどレベル4以上、さらには5人のレベル5、激しい戦いになることは間違いない。

「大丈夫よ、会場まで壊したりしないから。」

ニコニコと白井に言う美琴を見ながら白井は思う。

『ものすごく嫌な予感がしますの…』』

\*\*\*\*\*

『さあいよいよ最終競技が始まります！』

会場のモニターから流れる実況が競技開始を告げる。

『この会場では事実上の優勝決定戦、長点上機学園V S 常盤台中学  
を実況します！！』

そして会場の左右の扉から両校の生徒が入ってくる。  
その数総勢100人。

長点上機学園側の風、一方通行、帝督、軍覇は最前線で準備している。

「さあ、最終決戦だぜ。」

帝督が意気揚々と常盤台を見ながら楽しそつに言う。

「強敵だよな常盤台。」

軍覇が屈伸しながら敵陣を眺める。

「勝つんだから誰とやったって同じだぜ。」

一方通行はただ前を見据える。

「勝たせてもらうぜ美琴。優勝するのは俺たちだ。」

凧は真っ直ぐに視線を向ける。その先にはこちらを見つめる美琴の姿。

『勝つのは私たちよ、凧！』

双方の準備が揃ったところで競技審判である実行委員会が競技の説明に入る。

『7日目第3種目は“学校対抗リレー”です！！』

なんだかもうテンションがすごいことになっている実況席の実行委員。彼は知っているのだ。この競技がリレーという競技とは程遠いモノであるということ。

両校の選抜50人が陸上競技用の400mトラックを1人1周し先にゴールした方が勝利。ここまではどの学校でもやっているような平凡極まりないリレーだ。

が、しかし、

何と言ってもここは学園都市。

競技に参加するのは超能力が使える生徒ばかりなのだ。

ゆえにリレー中に能力を使用するのが全面的に認められている。ただし能力が使えるのはリレー選手として走っている時に限って限定される。待機している選手や既に走り終えた選手はリレー中の選手

に対して能力による介入は認められていない。

つまりはリレー中の二人による一騎打ちということだ。

それともうひとつ、このリレーには絶対的なルールがある。

それは“地面を走る”ということ。

つまり白井のような空間移動能力者が<sup>テレポーター</sup>一気にバトンタッチ、ということは禁止なのだ。

これが毎年棒倒し、鬼ごっここと並んで観客たちから絶大な人気を誇る大覇星祭の三大競技の一つ、学校対抗リレーだ。

さらに今日は学園都市の5本指に数えられる長点上機と常盤台という能力レベルが非常に高い学校同士の対決、それも優勝決定戦ときたものだから観客たちの熱狂はすさまじいことになっている。

まもなく競技開始――

「すごい盛り上がりだなあ。」

凧は周囲を見渡してそのあまりの観客の多さと熱狂ぶりに驚いていた。

「そりゃまあ何たってリレーだからな。」

爪先をトントンと地面に叩きながら靴を履いている帝督が凧に言う。



「燃えてきたぜえ!!！」

凧たちのすぐ後ろで暑苦しいほど闘志をみなぎらせているのは軍覇だ。

「暑苦しいぞ軍覇。」

軍覇の隣で暑苦しそうに言うのは一方通行だ。

「頼むぜ軍覇。」

「任せる凧!!！」

50人によって行われるリレーで勝つにはどこに高レベルの能力者をいれるのが重要だ。相手への能力で攻撃ができる以上、そこでどこまで差がつけられるかによって勝敗は左右される。

だからこそ第1走者は学園都市第7位、削板軍覇が走る。彼音速以上の速さで走ること最初で最初に差を広げておきたい考えたのだ。

『第1走者は集まってくださいーい!!——』

長点上機の第1走者軍覇と常盤台の第1走者である少女がスタート位置につく。

そのスタート位置には200m、つまり半周のハンディが設けられ

ている。

片や女子中学生、片や男子も含む高校生、この程度のハンディは身体能力を考えれば当然と言えば当然だろう。

『位置について ……』

二人がスタート姿勢にうつる。

『よい ……』

一瞬の静寂。

『ドンッ！』

実行委員会の空砲が合図となり軍覇と常盤台の少女が一齐にスタートする。

軍覇は持ち前の身体能力を生かしみるみる少女との差を詰めていく。だが常盤台も黙ってはいない。

突然軍覇が走るコースが隆起しだした。

「うおっ！？」

驚く軍覇をよそにそれを見て微笑む少女。彼女の能力は“ディルトハンド土壌操作

”のレベル4。

土を自由に操作できる能力だ。

彼女のコースは全く変化がないのに対して軍覇のコースはカーペットをはらった時のように波のような隆起が押し寄せる。

少女はそろそろ第2走者へとバトンタッチすべく最終コーナーを曲がる。軍覇との差は100m。常盤台が有利に進む。

と思われたが、

「なめんじゃねえ!!」

根性の男軍覇はこの程度で食い止められるような男ではない。

「らあっ!!」

思いっきり跳躍し隆起していないコースまで一気に到達する。

「うそ!?!」

驚愕する少女との差は30m、一気に逆転圏内へと追いつける。

そこで常盤台の少女は第2走者へとバトンタッチ、その差を開きにかかると。それから遅れること数秒、軍覇もバトンタッチ、第2走者が走り出す。

最終的に軍覇は200mあった差を20m前後まで詰めた。十分な戦果と言えるだろう。

「お疲れ。」

トラック内側で大の字に寝そべっている軍覇に声をかける風。

「あとは頼んだぜ。」

「ああ。」

第2走者は常磐台が若干差を開いている。ここからが本当の勝負になるだろう。

「まあ任せろって。」

長点上機のレベル5の中で次に走るのは第14走者である垣根帝督だ。

長点上機としてはそれまでに少しでも差を縮めておきたい所だ。

「俺がサクツと追い抜いてやるから。」

手をヒラヒラさせながら待機場所へ向かう帝督。

『さー現在第11走者が走っていますが若干常盤台中学がリードしています！！』

実況席から異様に上がったテンションを抑えることなく実況する実行委員。

『ですが14走者には長点上機が誇るレベル5の垣根選手がスタンバイしています！勝負はまだまだ分かりません！！』

「おつ、そろそろ来るな。」

スタート位置の前で準備しながら状況を見守る帝督。今13走者が走り出したところだ。

今走っている常盤台の少女は肉体強化系なのだろうか中学生の少女とは思えない速さで疾走していく。長点上機の生徒も能力を使って攻撃しているがその攻撃が置き去りにされる程彼女は速い。

「はあ、こりや大変だな。」

軽く溜め息を吐いて頭を抱える帝督。

だがその動作とは裏腹に口元はニヤついている。

「…おもしれえ。」

帝督の目の前を14走者の常盤台の少女が走っていく。

それから待つこときっかり5秒。長点上機の選手が帝督へバトンを渡す。

「いくぜ。」

前方を走っている少女はすでに第2コーナーに差し掛かっている。

帝督との差は50m程度。

「ひっくり返してやるよ。」

程度は自らの足元に能力を発動させる。

彼の能力、未元物質はこの世に存在しない物質を創りだすことができる。

それを応用すれば、こんなこともできる。

ドンッ！！

と帝督が地面を蹴るとまるでロケットのように加速し飛んでいく（正確には超大股で走っている）。

「なっ!?!」

ギョツとした表情で振り返る常盤台の少女。一瞬で帝督が彼女に追いつき並走する。

「やあ彼女。」

「一体どうやって!?!」

「簡単なことさ。自分の足元に擬似的なベクトル操作を行えるような空間を創った。」

「そんなことできるわけが…!!」

「残念だが、俺の未元物質に常識は通用しねえ。」

「っ!!」

唇を噛む少女を置き去りにして帝督は彼女の前に躍り出る。長点上機が逆転した。

『逆転されちゃったじゃない…!!』

トラックの内側で状況を見ていた美琴は悔しそうな表情を浮かべる。美琴の出番はまだまだ先だ。今のうちにフラストレーションを溜めておいたほうがいいだろう。

「大丈夫ですわよお姉さま。」

美琴の隣に立っていた白井が言う。

「私がすぐに逆転してさしあげますわ。」

「って言ってもあんたテレポートできないじゃない。」

「そんなの無くても楽勝ですわ。私は風紀委員ジャッジメントの訓練を受けていますのよ？体力には自身がありますわ。」

それに、

と白井は付け加える。

「テレポートできないのは自分だけなんですのよ？」

口元を吊り上げながら笑う白井の様子を見て御坂も気づく。

「あんたまさか……」

「ルールには禁則事項に記載されていませんわ。大丈夫ですの。」

そう言っつて白井は美琴から離れスタート位置へと向かった。

『さあ状況は変わって長点上機がリードしていますねー。常盤台中学としてはもう1度逆転したいところですよ！！第22走者が最終コーナーを曲がりまもなく第23走者へとバトンが渡されます！！』

白井は第23走者だ。隣には長点上機の23走者。見た感じバリバリの体育会系といったところか。

『むさ苦しいのは苦手ですよ…。』

少々げんなりしながらバトンを待つ白井。先に隣でバトンを受け取り長点上機の男子生徒は走り出した。

「白井さん！」

最終コーナーを曲がってきた常盤台の生徒が白井にバトンを渡す。

「あとお願い！」

「了解ですよ！」

白井はバトンを受け取り走り出した。

その先には長点上機。

『まずは…。』

白井は全速力で走る。

『追い付かなければ話になりませんわね！』



長点上機の体育会系男子は絶句した。  
なぜなら線の細い常盤台中学の少女がいつの間にか自分の隣を走っていたからだ。陸上部で短距離を専門にしている自分にたった半周程で追いつくなんて尋常ではない。

「ごめんあそばせ。」

「ああ!？」

白井は体育会系男子の肩に触れた。

「……………は?」

瞬間、いつの間にか男子は白井の遙か後ろを走っていた。

『あいつが速すぎるってわけじゃねえ…まさか!?!』

「テレポートか!?!」

凧がトラックの内側で気付いた。

「白井め、自分じゃなくて相手をテレポートさせるなんて考えたな…。」

「何呑気なこと言ってんだよ凧。逆転されちまっただろうが。」

隣にいた一方通行が忌々しそうに言う。

「そうだなあ、まあそういうことだから。任せた一方通行。」

「他人任せかよオイ。」

「信用してるんだよ。」

笑う凧をよそに一方通行は待機場所へ向かった。

『今のは白井選手のレポートですね。相手に使用してはならないというルールはないため問題はないそうです!!』

様々な能力の応酬に沸く観客たち。

「初春、ポップコーン買ってきたよ。」

その一席に初春と佐天はいた。

「ありがとうございます。」

「にしてもスゴいよねえ、さすがは名門で感じ?」

「白井さんがさっき走ってたんですよ。」

「まじ!? 見逃したあ〜!」

「でも凧さんや御坂さんはまだ走ってませんねえ。」

「御坂さんはアンカーだって昨日言ってたよ。」

「御坂さんは常磐台のエースですからね。」

完全にエキストラと化した二人。

ちなみに彼女たちの通う柵川中学は全競技が昨日の時点で終了しているため今日は閉会式だけなのだ。

「あー!!」

不意に初春が大きな声を出した。

「どうしたの初春？」

「今から走る長点上機の人一方通行さんですよ！」

「一方通行ってあの学園都市第1位の!？」

「はい、以前凧さんと一緒に177支部に来たことがあったので。」

「初春ばかりそんな有名な人と知り合いなんてずるいぞー!!」

そう言いながら初春のスカートをめくる佐天。

瞬間、初春の顔が真っ赤になる。

「ひゃわああああ?!」

「お、今日は「めくらないで下さい!!」「かあ。」

そんなことはつゆしらず、競技は進んでいく。

「さて。」

一方通行は最終コーナーを曲がった長点上機の生徒を見ていた。

「差は30mってどこか。」

前方をすでに走っている第40走者の女子を見ながら一方通行は思う。

「ま、余裕だな。」

バトンを受け取った一方通行は脚力のベクトルを操作し弾丸のように進んでいく。あっという間に少女に追いつき、そして抜き去る。一瞬で順位が入れ替わった。

そのままのスピードを保ったまま400mを走りきり次の走者へバトンを回す。

常磐台との差は20m、終盤にきて再び長点上機がトップに躍り出た。

『また逆転されちゃったじゃない!』

その状況を見て心中穏やかではない少女、御坂美琴。

『だいたいアイツが出てればもうちょっと楽だったはずなのに!』

ここで言うアイツというのはツンツン頭のことではなく、美琴と同じ常磐台に所属する学園都市第5位のレベル5、メンタルアウト心理掌握のことである。

彼女は常磐台最大派閥の頂点に君臨する生徒であり曰く、「あんな汗をかくような競技には参加したくありません」とのこと。

レベル5が1人いるのといないのでは戦力が大部違ってくる。

つまり今日までほとんど美琴1人の力だけで常磐台は勝ち続けてきたということである。

『向こうにはまだ風がいるのよね、厳しいわねえ。』

現在第44走者がトラックを走っているが美琴はアンカー、それまでに差が開きすぎているといくらレベル5と言っても逆転するのは困難になってしまう。

『どうにかそれまでに逆転、いやせめて差を詰めてもらわないと。』

美琴の思いを知ってか知らずか、第44走者である常磐台の金后光子は自らの能力を使って長点上機との差を縮めていた。

「差が縮まってきたな…。」

軽くストレッチをしながら風は戦況を見つめていた。

おそらく美琴との一騎打ちになるだろう。能力使用もセーブしていはやられてしまう。

「おもしろいじゃん。」

凧は笑う。

「ギリギリの勝負、勝つのは俺たちだけ。」

第45走者へとバトンが渡る。

決着の時は近い――

第14話 最終競技【final round】(後書き)

感想など頂けると作者はテンションがすごく上がります。

第15話 対超電磁砲専用【only for the railgun】前

大覇星祭編完結です！

駄文なのは勘弁してください…



第15話 対超電磁砲専用【only for the railgun】

第45走者である両校の二人が走りながら能力による攻防を繰り広げている。

長点上機の生徒はレベル4級の念動力<sup>テレキネシス</sup>、常盤台の少女はレベル4級の風力使い（エアロマスター）だ。

「くらえ!!」

「甘いわよ!!」

一進一退の攻防は決着することなくそのまま第46走者へと引き継がれる。

勝負の行方はおそらくアンカーに託されることになるだろう。

「いい勝負じゃない。」

「俺たちで決まりそうだな。」

凧と美琴は隣に立って走順を待っていた。

「今年は勝たせてもらっわよ?」

「やれるもんならやってみな。」

周りの人が見れば両者の目から火花がバチィッ!!と散っているように見えたかもしれない。

『さあ今第49走者へとバトンが渡りました!!両者の差はほとんどありません!!これはアンカーの勝負になりそうです!!常盤台中学のアンカーは御坂選手、長点上機のアンカーは一条選手、二人ともレベル5というこれ以上ない好勝負が見られそうです!!』

最終コーナーへと差し掛かる両者を背に、凧と美琴がスタートラインへと足をかける。

ほんの僅かに長点上機が足一步分リードしているか。

そして49走者から凧へとバトンが渡される。そのコンマ数秒後、美琴もバトンを受け取り走り出す。

両者のスタートはほぼ同時。

場内からは大歓声が巻き起こる。これから行わるであろうレベル5同士の勝負に早くも興奮しているのだろう。

「…っ待ちなさいよ凧い!!」

美琴が前髪から青白い雷撃を凧へと放つ。

「誰が待つかよ!!」

背後に迫っていた雷撃を空気中の水分を凍結させた氷の壁を身代わりにすることで避ける凧。

すると凧は美琴が走るコースに走りながら手を伸ばし、コースに触れる。

「くらえ！」

瞬間、美琴のコースだけが綺麗に凍り、アイススケートのリンクのようになる。

「おわ!？」

一瞬の出来事に足を滑らせ危うくコケそうになる美琴だが、持ち前の運動能力でカバーし態勢を持ち直す。

「簡単に勝てると思うなあ!!！」

美琴が凧のコースへ向かってトラックの内側（天然芝）から砂鉄を操作し、砂鉄の剣を形成して凧へと振るう。

「まじか!!！」

背後から迫りくる死の剣撃（比喻ではなくリアルに）に凧は背筋が冷たくなるのを感じた。

「こんなところで死ねるかあ!!！」

瞬間的に巨大な水の盾を形成しその盾にそこらへんに何故か落ちていた金属板を包む。砂鉄の剣は水の盾に衝突したが突き抜けて凧を襲うことなく金属板の周囲で蠢いているのみだ。

「なんでそんなもんが落ちてんのよ!？」

「ご都合主義万歳!!！」

第3コーナーを間もなく通過する2人、残すところあと1000m弱。

「こんのお…！」

急停止して前方を走る凧に照準を合わせ、ポケットからコインを取り出す。

それを確認した凧も立ち止まる。

「…オイオイ、こんなところでそんなもん撃つたら…」

「避けたら会場に迷惑かかるわよ？」

「それ以前に俺が迷惑だ…！」

凧のそんな切実な願いには耳も貸さず、美琴はコインを弾く。

ピイン

という音とともに宙を舞ったコインはやがて重力に逆らえず落下を始める。

「やるしかねえか…！…！」

凧が決意した瞬間、

美琴の指から音速の3倍ほどのスピードで撃ちだされた超電磁砲レールガンが凧に向かって一直線に飛んでいく。

そして…

ドオオオン…！！

会場全体を揺らすかのような轟音とトラックを埋め尽くす砂煙が会場を支配する。

『やば…、ちょっとやりすぎたかしら…』

美琴から風までの直線上のトラックは黒焦げ、天然芝は大きくめくれあがっている。

さすがに風でもこの一撃は対処しきれない。

「…あつぶねえ。」

……はずだった。

「え!?!」

全力で撃つたはずの超電磁砲。しかし、自身の目の前には風が悠然と立っていた。

だが何故か風はずぶ濡れだ。

「一体どうやって…!?!」

美琴の超電磁砲は風にとって相性最悪の一撃のはず。それを知っている美琴だからこそその驚きが隠せないでいる。

「これが美琴の対超電磁砲専用の技、アイスブレット“氷解分散”だ。」

「!?!」

「お前の超電磁砲は空気中の水分子に伝播されて発射されるからな。ならその水分子を一ヶ所にまとめてそいつをなくしちまえばいい。」

「まさか…!」

「ああ、だから俺は目の前で空気中の水分子を手当たり次第に集めてそいつを纏めて凍らした。水分子がないなら超電磁砲の威力も落ちるからな。その氷を盾として使わせてもらった。当然一瞬で超電磁砲の熱で溶けちまうからこの通りずぶ濡れになるけどな。あとは威力の落ちた超電磁砲をコインごと凍らせるだけでいい。」

「計算済みだったってわけね…」

「美琴に負けるのは癪だからな。」

二カッと笑った凧は再び走り出す。それに美琴も続いたが1度開いた差を縮めるのは難しい。

そして……

『ゴオオオオル!!長点上機学園の一条選手がフィニッシュ!!この瞬間長点上機学園が史上初の2連覇を達成しました!!』

実況の声とともに場内が大歓声に包まれる。レベル5同士の戦いが予想以上に激しかったことが大きな要因だろう。

「今日は完敗だったわ。」

リレーを終えた美琴が凧のもとへとやって来て言った。

「でも見てなさい！！次は勝つから！！」

「バァン！と宣戦布告をされた凧だがまあいつものことなので軽くスルーする。

「無視すんなよコラァ！」とか何とか聞こえているが気づかないふりをして会場を後にする。最後まで美琴は何か喚いていた。

「お疲れ凧。」

一方通行、帝督、軍覇が凧のところへやって来て労う。

大覇星祭はこうして幕を下ろした。

結局2位に甘んじた常盤台中学が来年こそはと再び闘志を燃やしているのはまた別のお話……。

第15話 対超電磁砲専用【only for the railgun】(後)

次からは少しギャグを入れた日常の予定です。  
その後一端覧祭といった流れですかね。



間話 祝勝会の罭【t r a p | t o | f a i l】(前書き)

なんだこの話：

書いていてわからなくなってきました；

## 間話 祝勝会の罠【trap|to|fall】

大覇星祭が終わった日の翌日、凧は長点上機学園の教室で目を覚ました。

ふと隣をみれば未だに爆睡している一方通行と帝督、教卓の上で何故か爆睡している軍覇、いつもは綺麗に並べられた机もムチャクチャな配列になってしまっている。

……まあこの辺は100歩譲ってよしとしようじゃないか。

問題、というか重要なのはだ――

……何故に俺の体の上で凧が眠っている？？

『ちょっと待てええ！！何だか可笑しいことになってるぞ！？落ち着け！落ち着いて思い出せ俺！！昨日何があったんだ！？』

――昨日。

「大覇星祭優勝を祝って乾杯!!」

「乾杯!!」

大覇星祭で優勝した長点上機学園、さらに言えば凧たちが所属している2-Aでは担任の澤村（男・独身28歳）の公認も得て祝勝会を行っていた。

凧たち4人のおかげで優勝できたような部分もあるので、特別にこの祝勝会の費用は学校もちだ。

「よしお前らよくやった!!今日は好きなだけ騒いでいいぞ!!」  
教卓に立ち熱弁する担任澤村は自ら率先して楽しもうとしている。

「澤ちゃん」

帝督が担任を呼ぶ。

「なんだ垣根。」

澤村が教室の一角にいた帝督のもとへと歩みよっていく。

「せつかくの祝勝会なんだからさあ……」

「…フム、なるほど一理あるな。」

他人には聞こえないようにヒソヒソと話し合う様はどこかの越後屋

のようだ。

「よし俺に任せろ。」

そう言うと澤村は一旦教室から出ていった。

「澤ちゃんに何吹き込んだんだよ。」

帝督の隣に座っていた風がなんかものすごい良い笑顔をしている帝督に聞く。

「まあ見てろって。いいモン持つてくるだろうからよ。」

その時は意味が分からなかった風だったがその15分後、担任澤村が再び教室に入ってきたときにすべて理解した。

「よーっしや騒ぐぞー!!」

勢いよく教室の扉を開け中に入ってきた澤村の手が持っている大きな袋。

なんだかとてもなく嫌な予感がした風だったが見事にそれは的中してしまう。

- 袋から出てきたのは酒、酒、酒、酒、酒

果てにはどこから仕入れたのか樽まで用意していた。

「教師が生徒に酒飲ませていいのかよ…」

げんなりしている風の隣で帝督は渾身のガッツポーズ。「さすが澤ちゃん話がわかる!!」とかなんとか言いながら担任が持ってきた50種類以上はある酒が並ぶ教卓へと足を運んでいる。

「いいんですか？澤村先生。」

クラスでは優等生である風のお隣さん、橘楓は少し心配そうに酒を見ながら確認をとる。

まあそれが普通の反応だよな、帝督みたいのがイレギュラーすぎるんだ。

と風が考えていると、

「今日は祝勝会なんだぞー橘。今日ぐらい軽く法律を破ったところで問題なしだ!」

『いや、問題はあるだろ…!』

心の内でツツコミを入れる風。

「そうですね、大丈夫ですよね。」

『おい!?!』

直後盛大なツツコミを入れるハメとなった。

「さあ今日だけは俺が許す!飲めお前ら!?!」

澤村の一言によりクラスのテンションがさらに上がる。ここ学園都

市は学生の街であるがゆえに酒は高いしまず学生は買えない。つまり学園都市に来てから誰も酒を飲んだことがないのだ。

それが大覇星祭優勝という口実によって酒が飲めるというチャンスに恵まれたのだ、誰もがテンション上がるだろう。

現にすでに帝督は教卓からウイスキーや缶ビールを数本かつさらって凧の横で飲み始めている。

「かー！うまい！！」

「お前は親父か！」

「何言ってるだよ凧、こんな時くらい飲んだって罰あたんねえよ。ほら。」

そう言っって缶ビールを投げ渡してくる。

しかたなく缶ビールを開け一口飲む。

「……うまいな。」

「だろ！？」

これが不味かったんだなあ…、わたくし一条凧は残念なことに酒にハマってしまったわけで、

「他のはどんなんだ？」

「また教卓の取りにいくか。」

完全に帝督と同化してしまい二人で酒を取りにいく始末。

見れば一方通行は窓際で1人ちびちびと熱燗をやっているし、軍覇に至っては月 冠のビッグサイズをらっぱ飲みしている。

他の生徒も思い思いの酒を手にとり楽しくやっているようだ。

『まあなんだかんだで楽しいしいいか。』

凧はそんなことを考えていた。

\*\*\*\*\*

1時間後 - -

「よっしや凧次はこれだあ!!」

「おっしやああ!!」

完全に出来上がってしまった。

今凧と帝督が開けているのはアルコール53度のウォッカだ。それを小さなグラスに注いで飲みほす。

「くかあ!!くるねえ!!」

「ウォッカってこんな強いんだなあ!!」

どこのオツサンのようになってしまった二人だが、他のクラスメイトたちも例外ではない。

皆一様に顔を赤く染め、目はなんだかトロンとしている。

澤ちゃん(担任)に至ってはすでに教室の端で一升瓶を抱えて夢の

中だ。

一方通行は6本目の熱燗に手を伸ばし、軍覇はその樽の中の日本酒に顔を突っ込んでゴクゴク飲んでいる。

普段の凧ならツツコンでいる場面なのだがあいにく彼も今日はそちら側であり、歯止めをかける者は誰もいない。

教卓の上の酒を順番に帝督と二人で開けていると不意に制服の裾を掴まれた。

「？」

何かと思い後ろを振り返ってみればそこには顔をうつすら赤く染め、潤んだ瞳で上目遣いという最強コンボを叩きだしていた凧だ。

「…凧？どうした？」

普段の凧ならノックアウトされているであろうシチュエーションなのだが彼は酔っている。故に状況判断が現状に追いついていないのだ。

「……………」

無言で凧を見つめ続ける凧。さすがに酔っているといえども凧の異常に気づく。

そしてわかった。

凧の後ろには空になったボトルが散乱していた。その数10以上。



「ちよっ！おまつ！飲みすぎだろおおお！！」

楓はそのまま凧の首に手を回し抱き合っような態勢になる。

『まずいまずいまずい！！いくら酒入ってもこれはまずい！！』

急に動揺しはじめる凧。だが楓はそんなことを気にせず……

「わぁー、お星さまいっばあい。」

「……は？」

凧の顔を真正面から見つめお星さまがどうとか言い出す元優等生。彼女は完全に崩壊してしまっている。

「凧…一旦離れる。」

「やぁ！！」

より一層強くなる力、自然と体は密着し、なんだか軟らかいものが当たっている感触がある。

「お前酔いすぎだつて…。」

「……凧のばかぁ！！」

いきなりそう叫んだ楓は足がもつれたのか倒れそうになってしまっ。それを助けようと凧が手を伸ばす。……が悲しいことにあれだけ酒を飲めば当然彼も酔っているわけで足がおぼつかない。

結果、二人ともが倒れ、凧の上に楓が覆い被さるような構図が出来

上がる。ちなみにこのとき風は机の角で頭をぶつけていた為倒れたときには既に意識がなかった。

\*\*\*\*\*

『あちゃ〜……………』

回想を終えた風は現状をやつとのことと把握する。教室はものすごく酒臭い。周りのクラスメートも皆爆睡中だ。軍覇はとうとう樽に顔を突っ込んだまま眠ってしまったようだ樽からだらしなく体が垂れている。

「痛つてえ…。」

二日酔いと机の角にぶつけた痛みとが頭に襲いかかる。なんとかして起き上がりたいのだが、自分の肩には楓の頭がちょこんとのつておりスヤスヤと寝息をたてている。その寝顔はものすごく可愛い。

流星に起こすのは躊躇われたので風はしばらくこの態勢のまま天井を見つめる。

『これ皆が見たら間違いなく誤解されるよな…』

顔をひきつらせながら楓の顔を見る。

その無邪気な寝顔がなんだか愛おしくて頭を撫でた。

「ふう…ん。」

びくう！！と風の体が硬直する。一瞬起きるのかと思ったが再び眠りについたようだ。

「焦った〜。」

風は苦笑する。

なんだか幸せな気分だ。

現在時刻は午前04:12

もう少しだけこのままでもいいかなあと思った風は静かに楓の肩を抱いて日の出を待った。

間話 祝勝会の罫【t r a p | t o | f a i l】(後書き)

次からはまともな話です。

第16話 常盤台の依頼【What's request?】(前書き)

お気に入り100件突破!!なんだか夢みたいです。ありがとうございます。

導入なので短いです；  
ではお楽しみ下さい。

## 第16話 常盤台の依頼【What's request?】

大覇星祭も終わり、学園都市にもようやくいつも通りの雰囲気に戻った。

あの祝勝会后澤ちゃんこと担任の澤村が学園長からこっぴどく叱られたのは言うまでもない。

そんなある日の日曜日。

凧は常盤台中学にいた。

凧だけではない、一方通行や垣根帝督、削板軍覇もいる。

遊びに来た、というわけではもちろんない。ここにはファルコンとして依頼を受けてやってきたのだ。

凧たちファルコンの4人は校門で常盤台の教師と会い、そのまま校長室へと足を運ぶ。

「常盤台ってなんか城みたいだな。」

帝督が内壁の装飾を見て感嘆の声をあげる。さすがは学園都市屈指の名門といったところだろうか。

「ここが校長室になります。」

案内してくれた教師が軽くお辞儀をして立ち去っていった。

コンコン、

「入りなさい。」

ガチャツ

と風は扉を開けて室内へと足を踏み入れる。

「お久しぶりです校長。」

「おや、背が伸びたんじゃないかい？」

親しげに常盤台の校長と話している風を見て他の3人の頭上には？マークが浮かぶ。

「おい風、知り合いだったのか？」

軍覇が小声で尋ねる。

「ああ、校長とは俺が中学のときから美琴繋がりで色々よくしてもらってるんだ。」

「なにウチ（常盤台）のエースの知り合いなら無下にもできなかつただけさ。」

ガツハツハと豪快に笑い声をあげる校長。なんとというかお嬢様雰囲気いっぱいの常盤台の校長とはとてもではないが信じられない。

「まあ立ち話もなんだ、みんな座りなさい。」

言われた4人は皮製のソファにそれぞれ腰掛ける。

「それで？わざわざ常盤台が俺たちに頼むほどの依頼ってなんなんですか？」

途端、校長の表情が先程までとは一変、険しいものとなる。

「キルダイバー“死角潜入”というのを知っているか？」

耳慣れない言葉に4人は顔を見合わせる。

「実はここ1週間常盤台から機密書類が盗まれ続けている。」

「!?!？」

常盤台は学園都市有数のエリート校だ。その機密書類となれば個人情報はもちろんのこと設備の位置情報や操作、常盤台中学が乗っ取られてもおかしくないようなものまで存在している。それが盗まれたとあればただ事ではない。

「知っているとは思うがウチの防犯設備は他とは比べ物にならないほど整っている。だが奴は監視カメラや赤外線センサーにも引っかけらんのだ。」

「それで俺たちにそいつを捕まえてほしいと？」

「まあそういう事だ。幸いまだ外部に情報は漏れてはおらんし、お前らは学園都市が誇るレベル5だろう、キルダイバー死角潜入なるやつを取っ捕まえてくれ。」

「わかりました。」



「ああそれと。」

話を終えて校長室から退室しようとして席を立ったところで校長が付け加える。

「お前ら4人明日から毎日常盤台で監視な」

「はあ!!!?!」

「オイオイ明日から俺たち学校あるんだぞ?」

帝督が校長に喰ってかかる。

「ああそれなら問題はない。私は長点上機の学園長とは旧知の仲だな、事情を説明したらお前ら4人は問題が解決するまで出席停止の措置をとるそうだ。」

「……………」

もはや言葉も出ない4人。どうやら観念するしかないようだ。

「よろしく頼むぞ。」

豪快に笑う校長を背にどんよりした4人は校長室を後にした。

\*\*\*\*\*

翌日――

凧たちは常盤台の校舎内にある空き教室に集まっていた。月曜日とあって生徒たちは登校している。窓から見えるのは体育の授業だろうか体操服でなにやら競技中の生徒たち。

「はあ…せつかくお嬢様学校に堂々と入れるつてのに…。」

帝督が何だか遠い目だ。そこに凧が一言。

「なんか校長から生徒たちに俺たちが来てるのは伝えてあるらしいから別に出回つても平気だぞ？」

「どオセ生徒がいる間にもいろいろ調べなくちゃなんねエンだからな。」

一方通行は首をゴキゴキ鳴らしながら常盤台の事務員に淹れてもらったコーヒーを飲んでいいる。相当おいしいのか1人で既に1リットル近く飲んでいた。

「まじか！ならさっさといこうぜ！」

帝督はなんだか急に「ご機嫌だ。どうやら隠れてコソコソ動かなくてはいけないのがイヤだったらしい。いやきつと本心は常盤台中学の女子だな。」

「まずはどこから探す？」

軍覇が凧に問いかけると凧は机の上に見取図を広げた。

「これが常盤台の見取図だ。監視カメラは1Fごとに16台、全部で128台だな。それと玄関、渡り廊下、体育館に1台ずつ、校庭には2台、赤外線センサーは全部で20箇所を設置してある。」

簡単に説明していく凧は見取図の上で指を這わせ場所を指示している。

「まずはどこに死角があるのか調べないと話にならねえ。だから一先ず別れて各階の監視カメラ、赤外線センサーをチェックしてくれ。」

「なら俺は1階にしとくぜエ。」

「俺は2階な。」

「なら3階か!!」

「じゃあ俺は4階ってことで、行くぞ。」

一方通行が1階、帝督は2階、軍覇が3階で凧は4階、それぞれが死角<sup>キルタイバー</sup>潜入を捕まえるために動き出した。

彼らの長い長い1日が常盤台中学で幕を開けた……。

第16話 常盤台の依頼【What's request?】(後書き)

久々にファルコンとしての任務です。

第17話 其々の調査【check | the | TOKI WADAI】(前書き)

なんだか話がまとまらないまま進んでいきます(笑)

ではお楽しみ下さいm( | | )m

第17話 其々の調査【check | the TOKI WADAI】

私立常盤台中学校。

学園都市内で5本指に数えられる超エリート校の校舎内に同じく5本指の1校である長点上機学園の生徒、一条凧はいた。

「はあー、さすがお嬢様学校だな。なんつー設備してやがるんだ。」  
設備的には長点上機も似たようなモノのだが隣の芝は青く見えるといったように他校の設備がものすごくよく見えている凧。

彼は現在北舎の4F、1年生の教室があるフロアの監視カメラや赤外線センサーをチェックしている。

ほぼ5m間隔に1台ずつ監視カメラ、10m間隔で赤外線センサーが配置されている様はまるで要塞だ。  
女子中学ということもあって厳重になっているのだろうがいくらなんでもコレはないと思う。これでは生徒たちのプライベートなどないのではないのだろうか。

「このフロアに死角になりそうなところはないよな。死角キルタイパー潜入がない様子もないし。」

あらかたチェックを終えた凧が南舎へと行こうとした時、

「あ、あの……」

不意に背後から声を掛けられる。

「？」

振り返ってみると移動教室だったのだろうか教科書を抱えてこちらをじっと見つめる生徒が3人。

このフロアにいるということは1年生だろう。

「何？」

とりあえず3人に話しかけてみる。

「あの、長点上機の一条先輩ですよね！？講師として常盤台に来てるんですね。」

講師？

ああ、あの校長俺たちのことは講師ってことにして中に入れてるわけか。

「大覇星祭のときからすごいと思ってました！！」

目をキラキラさせながらこちらを見る3人。なんか恥ずかしいな…。

「ここで何してるんですか！？」

右側にいた少女が尋ねてくる。

「うん？…あゝ、まあ見学かな…？」

講師として来ているのにまさか監視カメラを調べているなんて言うわけにいけないので凧は咄嗟にそんなことを言う。

「なら私たちの教室に案内しますよ!!」

「はい？」

腕をぐいぐいと引っ張られて彼女たちの教室へと連れ込まれる。どうしてこうなった？

今は2時間目と3時間目の間の休み時間なのでクラスにいる生徒たちは次の授業の準備をしたり友達と話をしていたりしている。とそんな教室の中に1人、見たことのあるツインテの少女。

「白井!？」

その声に反応した黒子は声のした方を向いて凧の姿を認めると驚いていた。

「凧さん!？」

まさかの出会い(ほんと御免被りたい)  
白井に会えば風紀委員ジャッジメントに入れたの何だのうるさいのだ。

「何でこんな所にいるんですの!？」

「あ…、何だ。まあ講師としてな。」

講師と聞いて納得がいったのか黒子はフム、と顎に手を添えている。



「で凧さんは何をしにこの教室へ？」

「……」

答えようのない質問をぶつけられる凧。

連れてこられたからとしか言いようがないのだがそれはなんとなくマズイだろう。答えに困っていると3人のうちの1人が咄嗟に、

「一条先輩は今日授業するんだよ！！」

……………。

「えええええええ！？ちよつとおおお！？」

「…凧さんが講師として授業するってことですか？」

ゆめてくれ白井。

そんなジト目で俺を見ないでくれ。

「いいじゃない。」

「先生！」

凧と女子3人の後ろから声をかけてきたのは次の授業を担当する予定の先生だ。

「一条くん、話は聞いているわ。まああなたなら授業をしてもいいんじゃないかしら。生徒たちもいい刺激になると思うし。」

ここで言う先生の聞いているとは調査のことだろう。

「いやでも……」

凧は困惑している。

こんなつもりではなかったのだから当然だろう。

「『賛成！』」

……何故こんなことになった。

結局授業をすることになってしまった。先生は後ろで見守ってくれるようなのでまあなんとかなるだろう。

クラスの生徒は白井以外全員が凧をキラキラした目で見つめている。まあ長点上機であれだけ活躍したレベル5がいるということだけでも興奮しているのだろう。が、

「一条先輩！！御坂様の従兄弟というのは本当ですか！？」

この話題があるため余計に食いついてくるわけだ。

「ああ、美琴とは従兄弟だ。」

キヤー！！

と沸く教室。

凧にはまったく理解できないがとりあえず授業を進めることにする。この時間はレベルについての授業なのでいろいろと説明を始める。

「えーみんなも知ってると思うけど能力者は6段階にレベル別けされる。レベル0の無能力者からレベル5の超能力者までだな。」

「一条先輩。」

1人の生徒が挙手して風質問する。

「一条先輩は彼女いますか!?!」

「は?」

授業とは全く関係ない質問なのだが何やらほとんどの生徒が風を一点に凝視している。

「いや、いないけど。」

答えないと話が進みそうになかったのでそう答えた。するとガバツと身を乗り出して挙手をし出す半数程の生徒。

『これじゃ授業になんないじゃん…』

ヘルプの視線を後ろの先生に向けると苦笑いが返ってきた。助けてくれるつもりはないらしい。

「はい! 一条先輩の能力を生で見たいです!!」

1番前の席、つまり教壇に立っている風の目の前にいた生徒の1人が勢いよく立って風に詰め寄る。

「ええ…?」

「あらいいじゃない、レベル5の能力を見る機会なんてなかなかいんだし。」

……いや先生、常盤台中学には2人もレベル5がいるじゃないですか。

「「お願いします!」「」

流石にクラス全員からそう言われては断れない。凧は右手を軽く上げて軽く振る。すると空気中の塵や極小の埃などが凧の能力によって凍らされ、教室内でありながら幻想的なダイヤモンドダストを創りだす。

「すーい…」

生徒の1人が思わず感嘆の言葉を洩らす。他の生徒たちも皆一様に頭上を見上げる。

『あ、もうこれ完全に授業進まないわ。』

結局凧は授業が終わるまで質問責めにされまともに話をするこゝろえできなかった。

\*\*\*\*\*

『なんだこの展開。』

2階をチェックしていた垣根帝督も実は凧と同じような状況に置か

れていた。

彼が現在いるのは2階にある大きな講義室。監視カメラなどの死角をチエックしていたところを3年生に見つかり、腕を掴まれて（尻と同様な流れのため以下同文）

「しっかし皆お嬢様って雰囲気ばんだな。」

大きな講義室をぐるりと見回して帝督は言う。

「じゃあ垣根くん、あとよろしくね。」

先生はそれだけ言って講義室から出て行ってしまった。

『はあ、どうするかなあ。』

3年生のこの授業は能力が周囲にもたらす影響についてらしいのだが、帝督自身の能力が未元物質ダークマターという規格外すぎる能力なためどう説明したらいいのかわからないのだ。

「垣根先輩。」

思索していた帝督に1人の生徒が話しかける。

「大覇星祭を見ていて思ったのですが垣根先輩の能力は何なのか？」

全員が帝督を見る。

一般的には普通の生徒は帝督たちがレベル5だということは知っていても能力の詳細までは知らない。

「俺の能力は未元物質ってモノだ。」

名前を聞いてもよくわからないのか生徒たちは首を傾げている。

「まあ平たく言えばこの世に存在しない物質を創りだしちまう能力だな。」

授業だった時間はあつという間に垣根帝督の能力講座に様変わりしてしまった。

帝督はふと窓から外を見る。今日もいい天気だ。

『…何やってんだろうなあ俺。』

一人ごちていた。

\*\*\*

「ここも異常はねエな。」

1Fのチエックをしていた一方通行は北舎、南舎の監視カメラ、赤外線センサーを全て調べ死角を探し当てていた。

『死角潜入はやっぱりこのルートを通ってんだな、重要書類がしまわれてる金庫室に行くには絶対通るからなア。』

一方通行は死角潜入が通っているであろうルートを通りながら校長室の向かいにある金庫室へむかう。ちなみに校長室、金庫室は3Fにある。

「おう一方通行。」

金庫室の前まで行くと3F担当だった軍覇も合流する。

「やっぱこのルートしかねえよな。」

「ああ、俺も根性で探したがこのルートしか浮かび上がらないな。」

おそらく死角キルダイバ潜入は各監視カメラの僅かな死角、赤外線センサーの少しの歪みを巧みに避け金庫室へ出入りしているということだ。金庫室の前と内部にも監視カメラはあるがそれにも引つかからないところを見ると犯人は間違いなく常盤台内部の人間だろう。

「てエことは後は犯人を炙り出すだけだな。」

「でも教師たちにはこのことを既に教えてるんじゃないのか？」

「あああの話は嘘だ。凧や帝督は教室に連れ込まれて教師と接触する可能性があるから言わなかったが教師たちにも俺たちは講師つづ形で常盤台にいることになってる。」

「じゃあ教師たちはまだこの事は知らないんだな。」

「そオいうことだ。」

二人はもう1度金庫室の扉を見る。

「凧と帝督にも連絡だな。今夜あたり絶対犯人は動くはずだ。」

「ああ。」

一方通行と軍覇は話をまとめる。

未だに教室から出ることができない凧と帝督をさておいてファルコンと犯人との闘いが始まるうとしていた。



第17話 其々の調査【check|the|TOKI WADAI】(後書き)

凧と帝督はハーレムだ(笑)

第18話 死角潜入【kill|diver】(前書き)

すでにお気づきの方もいると思いますが、サブタイを変更してみました。

見づらいようでしたら直すつもりですので意見などよろしくお願います。

## 第18話 死角潜入【kill|diver】

「…お前らマジで教室に連れ込まれてたのかよ。」

金庫室の前に集合した4人。一方通行はなんだか制服がヨレヨレになっている凧と帝督を見て若干顔がひきつっている。

『冗談のつもりで言ったんだがなあ…。』

内心ちょっと悔しい一方通行。彼だって男だ。ちやほやされて悪気はしないだろう。

「いや…、大変だったんだって。」

「まさか講義までさせられるとは思ってなかったぜ。」

なんだかニコニコな帝督に比べ本当に疲れたような表情の凧。おんなじことになってもこつも捉え方が違うのかと一方通行は思う。

まあ一言で言ってしまうえば、帝督はタラシ、凧は鈍感。

「ルートはもう分かったのか？」

「ああ、凧たちのチェックも含めたがここまで来るのに死角だけで移動できるのはコレしかねえ。」

「なら、決まりだな。」

凧と一方通行は確認をとり金庫室の扉を見る。

「ここに来れるのは、内部の人間だけだ。」

「動くなら恐らく下校時刻を過ぎてから、さらに言うなら見回りが終わった後だな。」

「ああ、だから動くのは夜、見回り直後だ。」

4人は意見をまとめ控え室として用意されていた空き教室へ戻っていった。

\*\*\*\*\*

Side 白井黒子

「風さんが常盤台にいるなんて腑に落ちないですの……。」  
とある教室で頭を悩ませていた白井。  
やはり納得いかなかったようだ。

「黒子ー、お昼行かない？」

そんな白井を誘いにきた常盤台のエース、御坂美琴。

「お姉さま！！私をわざわざお誘いに！？」

さつきまでの真剣な表情はいったいどこへ行ったのか百合全開の変態風紀委員。

「だあー！！抱きつくなああ！！」

ビリビリと電撃を浴びる白井。それで正気に戻ったのかどうかは定かではないがふと白井が美琴に尋ねる。

「お姉さま、凧さんが常盤台に来ているのはご存知で？」

「凧が！？聞いてないわよそんなの！！」

「お姉さまにも何の連絡もないんですの…」

これは御坂美琴にも言えないような理由があるのではないだろうか。そう考える白井はなかなか鋭い。

するとお姉さま、もとい美琴がカエル型なんとまあファンシーなの携帯を取り出して通話ボタンを押す。相手は言うまでもないだろう。

Side out

凧たち4人は常盤台の食堂で昼食をとっていた。さすが名門お嬢様学校というだけあって単なる学校の学食とは格が違う。

一般的な高校の学食が400〜700円程度であるのに対してここはすべて3000円以上、長点上機でもこんなに高くない。

しかも生徒たちがそれを当たり前のように注文し食べているのだから

ら風は開いた口がふさがらなかつた。

「…俺か？俺の金銭感覚が狂ってるってのか…？」

そついう風も奨学金は莫大にあるためどっかのツンツン頭からしたら十分に狂っているのだろうが常盤台はその彼さえもひくような金銭感覚をしている。

「うま！何だこのカレー！！」

学食によくある大人数用の長机の一角に座る4人の1人、帝督が感激したように言う。彼が今食べているのは“インド王室御用達カレー”、5980円。なんかもうキラキラと輝いて見える。

「このカツ丼も上手いぞ！」

風の向かいに座る帝督の隣で豪快にカツ丼をかきこむ軍覇。彼が食べているのは“匠の一品カツ丼”、4800円。

「このラーメンも悪くねエ。」

風の隣に座っていた一方通行が6300円もする異常なラーメンを啜っている。

風がおかしいと思っているのはこの高級すぎる料理ともうひとつ

……

何故か周りを取り囲む常盤台の生徒たち。皆一様に4人（主に凧と帝督）を見つめている。

『食いづれえ……』

凧が3800円の Pasta をフォークでクルクルと巻き付けながら思う。

なんというか完全に包囲されている。

周囲からは「行きなよ」とか「大丈夫だよ」とかよく分からない会話が聞こえてくる。

そんな凧にとって居づらい雰囲気を打破するかのように突然凧の携帯が鳴った。

画面を見ると美琴と表示されている。

「もしもし美琴か。」

『アンタなんで常盤台にいるのよ。』

ギクッ

「ああ、講師としてな……。」

『ふうん……、で？今どこにいるわけ？』

「………近くのファミレスだ。」

『……どこにいるの？』

「食堂です。」

携帯ごしにバチツとイヤな音がしたため即座に訂正する。

『わかった。今からそっち行くから動くんじゃないわよ。』

そう言って通話は切られた。

「はあ……。」

今日一番の深いため息を吐き出す。

最もめんどくさい奴に知られてしまった。今はまだいいがもし真相を知ったらまず間違いなく参戦するだろう。その事態は避けたい。というか避けないとダメだ。

数分後、美琴が白井を連れて食堂へとやって来た。凧たちの周りを包囲していた生徒たちも美琴の姿を認めるとすぐに散らばっていった。

美琴とは凧の隣、白井は更にその隣に座る。

「で？何でうちにいるのよ、しかもこの4人が。」

「よう御坂。」

帝督が気さくに話しかける。レベル5同士ということや凧の友人ということもあり美琴はこの4人とは面識がある。



「相変わらず軽いわねアンタは。」

「そんなこと言うなよ、どうだ今度一緒に飯でも。」

「遠慮しとくわ。」

「…そうか。」

帝督がここで引き下がったのは美琴の隣のツインテからとんでもない殺気が放たれていたからだ。

「だから言っただろ？講師で呼ばれてんだよ。」

「凧が講師ねえ…。」

「なんだよ。」

「嘘ね、目が泳いでるわよ。」

ギクッ

「凧は嘘つくど絶対目が泳ぐのよねえ。」

ギクギクッ

「何しに来たわけ？」

「…………。」

凧はさすがのように隣に座っている一方通行を見る。一方通行は何も

語らず目を閉じてただ首を振る。  
そのジエスチャーはこう語る。  
「諦める」と。

凧は1度大きな溜め息を吐き再び美琴との会話に戻る。

「いいか美琴、このことは絶対誰にも言つなよ。白井もだ。」

「わかってるわよ。」

「心得ておりますわ。」

「この常盤台中学から機密書類が盗まれてる。」

「はあ!?!」

さらっととんでもない事を言いやがった凧に無意識に声が大きくなる美琴。

「でかい声だすなよ。」

「わ、わかってるわよ。」

「それと凧さんたちとはどういった関係があるんですの?」

「ああ、俺と常盤台の校長が知り合いなのは知ってるだろ? 依頼されたんだよ。」

「依頼つて…、アンタそんなバイトしてるわけ?」

美琴は凧たちがファルコンのメンバーであることは知らない。学園都市中の生徒がファルコンというチームがあるというのは知っているが、それはどちらかという都市伝説のような類いであって公には公表されていないのだ。

「まあそんなとこだ。」

「犯人を捕まえるのが依頼ってわけ？」

「そういうことになるな。」

「犯人1人捕まえるのに超能力者4人も駆り出すなんて、犯人が可哀想になつてくるわね…。」

「まあそんなわけだから美琴はあんま関わるな、いろいろ面倒くさくなるからな。」

凧のその一言が気に入らなかつたのか美琴がくっつけてかかる。

「なんで私が話をこじらせるような存在扱いなのよ!!」

「見たまんまだろうが。」

前髪からバチバチと紫電を走らせる美琴を指差して凧が言う。

ブチッ

美琴から何かが切れる音がした。

「…決めた。」

「？」

「私も犯人確保に参加するわ!!」

机をバンツと叩いて立ち上がる美琴。

「いや話聞いてた!？」

「捕まえれば問題ないんですよ。」

「美琴がいるとそれすらままならねんだよ!!」

そう叫ぶ風。見ると美琴の隣では白井が頭を抱えてドンヨリしていた。

これは面倒くさいことになった。

口には出さず密かに溜め息をつく風だった。

\*\*\*\*\*

「キルタイパー死角潜入ねえ……。」

事の内容を聞いた美琴はなんだか楽しそうだ。

現在午後6：30

生徒たちは全員下校し宿舎へと戻っている。

……美琴と白井を除いて

結局参加することになった二人を含めた六人は空き教室で作戦を練っていた。

「動くなら教師どもが帰った後だろうなア。」

一方通行が言う。

「当直の教師が1番怪しいな。」帝督が続ける。

「ここはやはり待ち伏せか？」

軍覇の意見に凧がいや、と待ったをかける。

「やるなら裏の裏の裏までかくぞ。」

ニヤツと凧がめったに見せない悪そうな笑みをつくった。

\*\*\*\*\*

『くくく…』

男は1人、妖しい笑みを浮かべていた。

今日の当直は自分であり絶好のチャンスなのだ。

『どうやら私の事を嗅ぎ回っている輩がいるようだが問題はない。私の姿は監視カメラはおるか赤外線センサーにも感知されないのだからな。』

男の手には金庫室の鍵が握られている。当直である自分が疑われな  
いようにいろいろと細工を施してある。  
人と接触する可能性も戸締り寸前の学校ならば事務員しか残ってお  
らず可能性は低い。

『問題はない…、あとは今日の書類を盗み出し、これまでのも含め  
て外部へと持ち出せば俺は大金を手に行ける…!!』

男は静かに金庫室へと歩を進める。決して監視カメラと赤外線セン  
サーに引っかからないように。

男が進む先にあるのは最後の機密書類。  
死角<sup>キルダイパー</sup>潜在が動き出した。

第18話 死角潜入【kill|diver】(後書き)

次回死角潜入編完結です！

…感想などいただけたら嬉しいです。

第19話 秋の夜に【battle to end】(前書き)

死角潜入編完結です。



## 第19話 秋の夜に【battle to end】

- P M 2 0 : 1 0

職員室に今まで残っていた教師たちも20時という時間を迎えそれぞれ帰宅の途についた。

そんな職員室に1人、まだ残っている人間がいた。

彼は教師ではない。

先月臨時で入った事務員だ。

臨時、という理由は彼が正規の採用試験をパスして雇われたのではなく、常盤台側で事務員の欠員が出たため2ヶ月という期限つきで一般採用された非常勤だからだ。

「フッフ…、俺はツいてる。まさか常盤台に入れるなんて…。」

彼が常盤台中学の事務員のバイトの話聞いたのはただの偶然だった。

当時就職活動に失敗しあてもなく学園都市を歩いていた所、ふと常盤台で事務員を募集しているとの噂を聞いた。

最初は半信半疑だったが思い切って連絡を入れてみると本当に募集しているらしく、常盤台という一流の職場につけることとその給料の高さにつられてすぐに履歴書を送った。

他にも希望者はたくさんいたようだが若かったことともとも機械には強かったこともあって無事採用されることになったのだ。

最初の2週間は彼はものすごく真面目に働いた。事務員として教師たちの想像以上に。

彼は常盤台というブランドに半ば酔っていた。

そんな時、ふと思いついてしまった。

……こんなに頑張って働かなくても、楽に稼げる方法があるじゃないか…… -

彼は事務員、当然鍵の管理や監視カメラ、赤外線センサーの警備なども任されている。

普通ならば本当に重要なものは校長が持っているのだが、彼の働きっぷりに気を良くした校長はあろうことが全てを彼に一任したのだ。

だが、このままの状況で犯行を起こせば金庫室の鍵を持っている彼が真っ先に疑われる。

だから彼は鍵を受け取った翌日には鍵をすぐ返した。

……翌日に、だ。

彼は頭がよく回る。自分が疑われないようにするため鍵をすぐに返した。だがその前に合鍵をつくっておいたのだ。誰にもバレないように。

常盤台中学の機密書類、欲しがる所は学園都市内どころか外部にも腐るほどあった。

最初は少しずつ、バレないように持ち出す。それから少しずつ盗む量を増やしていくのだ。

彼はいつかバレるだろうと思っていた。

実際盗み始めてから5日で発覚した。

だが彼は焦らない。

自分が犯人だと気づかれないことを確信していたからだ。

監視カメラや赤外線センサーに自分は引っかけかかっていないし、盗む時間も見計らい他の人が疑われるようにいろいろと小細工もしていた。

自分が捕まるなんてことはあり得ない。

『今日が終われば、俺は大金を手に行ける…!!』

彼が金庫室へ一直線に向かわず職員室に来ているのも自分が怪しま

れないための細工をしているためだ。

「…よし。」

細工を終えた彼、

犬飼 泰史は職員室を後にし、いつものように監視カメラと赤外線センサーに引つかからないルートを進んでいく。

金庫室までさほど時間はかからない。

彼の最後の犯罪が始まった。

\*\*\*\*\*

「裏の裏の裏って…、一体どーするわけ？」

現在時刻は午後20:20

凧の言葉がよく理解できなかったらしい美琴が質問する。

どうやら隣にいた白井も理解できていなかったようで美琴と同じような視線を凧へと向けている。

「まず犯人だが、まず間違いなくコイツだ。」

空き教室にある机に一枚の紙を置く。

「これって、うちの事務員じゃない。」

紙には犬飼 泰史という男の名前が記載されていた。

「ああ、監視カメラのルートや金庫室の出入りの時間を考えると実行できるのはコイツしかいない。」

「どうやって捕まえるんですの？」

白井が凧に聞く。

「まず、奴は今日必ず動く。今日は奴が当直だし今までの犯行は今日のための布石だろう。」

「金庫室前で張るの？」

美琴がイスに座りながら言う。

「いや、奴には少し泳いでもらおう。」

ニッ

と凧が笑う。

「今帝督と軍覇にはいろいろ仕掛けをしてもらってる。それに美琴と白井も参加してもらいたい。」

「そういえばあの二人見当たらないわね。」

「一方通行さんもないようですが。」

「一方通行は外だ。」

「外？」

「まあ最後のトリだな。」

タンツ

と凧は腰掛けていたイスから立ち上がる。

「美琴と白井にも働いてもらうぜ。」

犯人、犬飼泰史を捕まえるべくファルコン+2は行動を始めた。

\*\*\*\*\*

PM20:30 - -

『人の気配は…ないみたいだな。』

犬飼は金庫室手前の通路の脇から周囲を確認していた。

廊下は電気が消えているため暗く、非常口を示すもの（緑のアレ）だけが暗い廊下をうつすらと照らしている。

『どうやら嗅ぎ回っていた連中にはいないようだ…。』

近くに人がいないことを確認した犬飼は監視カメラと赤外線センサーに引っかかるないようにジグザグに金庫室へとゆっくり近づいていく。

そして金庫室の扉の前にまで着たとき、犬飼は異変に気づいた。

『!?!』

今まで薄暗かったため分からなかったのだが、通常一つしかないはずの鍵穴が10コある。

『はあ!? 一体なんだってんだ!?!』

……今から30分程前

「帝督には犬飼を混乱させてもらいたい。」

「どーやって?」

「簡単だよ、帝督の能力を応用してそっくりな鍵穴を大量に作ってくれ。」

「それだけでいいのか?」

「ああ、次は軍覇の仕事だからな。」

……

「くそ！この穴でもない！！」

いつもの位置にある鍵穴に鍵を差し込んでも鍵は開かなかった。帝督が微妙に作り変えているためだ。

ガチャンツ

7コ目の鍵穴でようやく鍵を開けることに成功した犬飼は明らかに動揺していた。

『こんなの普通じゃありえない……！！能力者……！？バカな……、一体誰が！？』

不審に思いつつも犬飼は扉を開けようとドアノブに手を伸ばす。

バヂイッ！！

「んぎゃあ！？」

つい大声を出してしまった犬飼。これは美琴が帯電させていた静電気だ。

「なんだってんだよ……。」

さすがの彼も異変に気づく、自分の犯行がバレている。しかも複数の人間に。

ガチャ……



恐る恐る扉を開けてみると、そこには誰もいなかった。彼がよく見るいつもの金庫室だ。

「…だよな、鍵は俺が持つてるんだし、いるわけないよな。」

ゆっくりと扉を閉め、内側から鍵をかける。目の前の金庫室に近づいていき、金庫の鍵を解除していかにも高そうな封筒に入った機密書類を取り出した。

「へへっ…。」

思わず犬飼から笑みがこぼれた。

その時 ……

「はい現行犯です。」

ヒュンッ

と軽い音を立てて一組の男女が現れた。  
現れたのは凧と白井だ。

「なっ!?!」

驚きのあまり声が裏返っている犬飼。

「そんなもん持ってたでしょうってんだあ?」

凧が犬飼の持つている封筒に指を差す。

「い、いやこれは…校長に頼まれていて…!!」

「こんな時間にですか?」

白井が風紀委員の腕章を取り出して肩口へと取り付ける。

「見苦しいぜ犬飼泰史、お前の犯行だってことはもうバレてるんだよ。」

凧が一步犬飼へと詰め寄る。

「…ッ!」

犬飼は動揺しているのか持っている封筒を握り潰してしまうのではないかというくらい力を入れている。

「くそっ!!」

突然犬飼は反転し扉から廊下へと飛び出した。

「お待ちなさ…!!」

「いいんだよ白井。」

鉄矢を取り出して犬飼を追おうとしていた白井を凧が抑える。

「凧さん!？」

「いいんだ白井、俺たちの役目は犬飼を追い詰めて1度逃走させることだ。後のことはアイツらに任せるさ。」

ニヤッ

凧はなんだか悪そうな笑みを浮かべて金庫室の窓から校庭のほうを見下ろした。

「なんなんだよアイツら一体…!!」

絶賛逃走中の犬飼はさっきの二人の事を思い出していた。

女の方は常盤台の制服を着ていたのどうちの学生であるということ  
は分かるがああ男は一体誰だったのか。

『あの制服…、どこかで…。』

そんなことを考えながら犬飼は裏口から脱出すべく正門とは逆方向の通路へと入る。

……入ろうとした時

「すごいパンチ」

ドガアアアン!!

いきなり犬飼の走っていた通路の壁が破壊された。

「はあ!?!」

破壊された壁の中から現れたのは削板軍覇。壁をぶっ壊した件については必要経費ということでは何とかなるだろう。

「裏口から逃げようなんて根性ねえな兄ちゃん。」

ザンッ！！

という効果音が聞こえてきそうなほど堂々と犬飼の前に仁王立ちで立ち塞がる軍覇。

「どうしても通りたいってんなら、俺を倒してから行きな。」

「くそっ！！」

犬飼はまったく戦おうとせず180度ターンして逆走を始める。壁を素手で破壊する能力者と戦おうなどは思わないだろう。

『あいつもさっきのやつと同じ制服を…、どこの学校だった…！？』

あの制服には見覚えがあった犬飼だがどうしても思い出せない。

「くそ！ここまで出かかっているのに！！」

犬飼は裏口を諦め正門から出るため下駄箱を通って校門へと向かう。

バン、と下駄箱の入口の扉を開けて校舎外へと出る。正門までは校庭を抜けなくてはならない。

1秒でも時間が惜しい犬飼は校庭を突っ切って一気に正門まで行くというショートカットを実行、全速力で走っていく。

校庭の半分ぐらいまで来たところだろうか、不意に犬飼は声を聞き

た。

「やアつと来たかよオ。」

犬飼の全身を寒気が襲つ。

『なんだコイツ…!!』

白髪に赤い目の少年、一方通行がそこに立っていた。

「ったくさつさと捕まえればいいのによオ。」

首をゴキゴキ鳴らしながらつまらなさそうに言い放つ一方通行。

「…!!」

ここでようやく犬飼はあの制服がどこのものだったのか気づいた。

「長点上機学園…!!」

しかも目の前にいるのはあの学園都市第1位。勝てる道理など存在しない。

「嘘だろ…!!?何でお前みたいなやつが…!!」

思わず一歩後ずさる。彼の本能が告げているのだ。逃げろ、と。

「まア凧の作戦だから無視なンざしねエけどよオ。」

そう言った一方通行は脚力のベクトルを操作した足を思いきり校庭に叩き込む。

一方通行を中心に校庭360度に走る無数の亀裂、その破片は犬飼にも襲いかかる。

「うわああ!!」

情けない声を発して尻餅をつく犬飼。顔は恐怖に歪んでいる。

「どオスンだ？諦めて捕まるのか？」

少しずつ、だが確実に近づいてくる一方通行。普通の人間ならばここで戦意喪失するところだが、犬飼は尚も諦めなかった。

「くそ…、捕まってたまるかよおお!!」

立ち上がり一方通行の横を走り抜けようと突っ込んでいく。

「…。」

一方通行はポケットに手を突っこんだまま動かない。犬飼はそのまま一方通行のすぐ横を走り抜けた。

「…ハッ。」

一方通行は走っていった犬飼の背中を見つめていた。

「この先に待ってんのは地獄だぜエ…。」

凶悪な笑みを残して一方通行は校舎内へ戻っていった。

「ハア…、ハア…。」

校庭を抜けた犬飼は校門前までやってきていた。

『なんでアイツは止めなかったんだ…？まあいい、このままいけば逃げられる…！』

校門まではあと20m程、周囲に人影も見えない。

大丈夫だ、犬飼は確信した。

ここまで来てしまえばもう安全だ。

「よし…！」

と、犬飼が安心して警戒心を緩めたその瞬間、

犬飼のすぐ横をオレンジ色の閃光が駆け抜けた。その数瞬後に遅れて轟音が響く。

「ぬわああ!？」

爆風によって倒される犬飼。彼の後ろからは少女が歩いてきていた。

「はあーい、用件は言わなくてもわかってるわよね？キルタイパー死角潜入さん。」

「

「レ、超電磁砲…!!」

目の前を歩いてくる茶髪の少女、御坂美琴を目の当たりにして犬飼は絶望した。

「…くそ。」

がつくりと頭を下げ諦めたような犬飼を見て美琴は一言、

「じゃ、眠っててね。」

ニコニコ笑いながら残酷な言葉を突きつける美琴。

犬飼が何か言う前に彼女の電撃が直撃し彼は意識を手放した。

「もしもし風？こっちは終わったわよ。」

『おうお疲れ、ならそいつ連れて警備員のところへ行ってくれ。』

「あんたは行かないの？」

『頼んだ。』

「はあ、わかったわよ。」

ピッ

美琴は携帯をしまい空間移動でやってきた白井とともに警備員の詰所へと向かった。



\*\*\*\*\*

「よし、帰るか。」

空き教室に再び集まっていた4人。

「結局あいつ俺らの誘導通りに動いてくれたよな。」

帝督が笑いながら言う。

「壊した壁は俺が弁償するんだろうか…。」

変なところで顔を青くしている軍覇。

「俺は何もやってねエけどなア。」

一方通行は眠たいのか欠伸を噛み殺している。

「校長にはさつき連絡しといたからもう帰っていいとき。」

4人は静かな常盤台中学を後にし、ファルコンのアジトになっているアパートへ向かう。

秋の夜空は幻想的に輝いていた。



第19話 秋の夜に【battle to end】(後書き)

作者自身なんだかわからないまま完結(笑)

次からはもう少しちゃんと構想してから書きます；

感想お待ちしております。

第20話 そうだ、修学旅行へ行こう（前書き）

今回から修学旅行編です。コメディたくさん入れるつもりです。

それとシリアス回ではないのでサブタイも英語表記を抜きました。  
シリアス回には表記したいと思います。

ではお楽しみください。

## 第20話 そうだ、修学旅行へ行こう

高校生にとって最大のイベントが存在する。

それは良くも悪くも全員が意識するものであり、ある生徒は期待に胸を踊らせ、ある生徒は絶望にうちひしがれることとなる。

“修学旅行” - -

学園都市に住む学生にとって長期休暇以外で唯一泊まりで外に出れるイベントであり数多くの生徒がこの修学旅行を楽しみにしているのだ。

もちろんそれは長点上機学園の4人も例外ではない。

「なに持ってく？」

修学旅行先のパンフレットを片手に帝督が凧の前でハイテンションで言ってくる。

「そーだなあ、海外なんだしいろいろ持ってきたいけど…」

帝督のパンフレットには表紙に大きく“120%楽しむるイギリス”と書かれている。

長点上機学園の二年生は明後日から3泊4日でイギリスロンドンへ

修学旅行に行く予定であり、凧たち2 - Aのクラスもその話で持ちきりだ。其々が適当にグループをつくり自由行動時に回る店や観光スポットなどを調べて吟味している。

「イギリスねエ。」

近くの席のイスを適当にかっぱらい凧の近くに腰掛ける一方通行が  
呟く。

「イギリスいいじゃないか。」

いつの間にか軍覇も近くによってきていて凧の後ろの席の机に寄り掛かっている。

「イギリス行ったことないけどどんなところなんだろうな。」

凧はイギリスへ行ったことがないため具体的に想像できない。だがそれは3人も同じなようで誰もイギリスには何があつてどんな所なのかという事を説明できなかった。

「おーいー旦席戻れー」

教室のドアを開けて入ってきた担任、澤ちゃんの一言でとりあえずは皆自分の席へと戻る。

「えー明後日から修学旅行なわけだが、お前らイギリスで間違つても能力なんか使っくんじゃねえぞ。俺がいろいろ上から言われるんだから。」

学園都市で超能力が開発されていることはほとんどの人間が知って

いる。だが流石に外で大っぴらに能力を使用されてはいろいろと面倒なのだ。

「特にお前らー、なんか問題起こしたらすぐに送り帰すからな。」  
ピツと指差される凧と以下3人。

「ちょっと待て!!!なんで俺らだけなんだよ!!!」

イスから立ち上がり猛然と抗議する帝督。祝勝会するときもそうだったが何故か帝督は澤ちゃんに対して強気だ。

「お前ら何かと問題起こすからなー、しかもそれが女子生徒に受け入れられてんだから尚更質が悪い。」

澤ちゃんの言葉にクラスの男子たちが一斉に凧たちの方を向く。その目からは嫉妬と殺気、そしてほんのちよっぴりの羨望が見てとれる。

考えてもみれば当然なのだ。片や学園人気1位の男子と6位の男子、残る二人も10位代と健闘、まあ言ってしまうと4人は学園中の女子から人気があるため、多少の悪さ(主に一方通行と帝督によるもの)も逆に良いという女子たちによって受け入れられてしまっている。そして極めつけには学園都市に7人しかいない超能力者。容姿、実力、人気、この全てを兼ね備えて(しまつて)いるのが凧たちなのだ。

故に男子たち、主にその人気を妬む者たちは凧たちを失墜させるべく“レベル5失墜委員会”なるものを組織しているらしい。

「帝督、諦める。」

諭すように言う凧。

「まアそう言われても仕方ねエよな。」

一方通行は自嘲気味に笑う。

そもそも凧たちがいろんな意味で目をつけられるようになったのは一年生の時の大覇星祭が原因だ。

幼少から仲が良かった凧と帝督に一方通行と軍覇が加わりやりたい放題して結果優勝してしまった大覇星祭。それによって女子生徒からは絶大な人気を獲得し、男子生徒（主に二、三年）からは熱烈なラヴコール。

当時の凧たちはそのラヴコールというなお呼び出しを全て買い先輩がたを殲滅、よって教師たちからは頭もいいし優秀なのにヤンチャななんとも言えない印象をつけられてしまった。

「まあそれはおいといてだな。」

澤ちゃんが持ってきた段ボールの箱をバンと叩いて楽しそうに言う。

「これからホテルの部屋割り、相部屋の人間を決めてもらう。部屋は二人で一部屋だ。」



キラッ

と男女ともに目がキラつく。

「まあ例年のようにうちは異性交遊など禁止はしない。今から15分やるから相手を決める。」

今の澤ちゃんの言葉を簡単に説明すると、

“異性でペアでも構わん”

瞬間、クラスメイトたちはこれをチャンスと言わんばかりにお目当ての生徒にアタックを開始する。

「楠木！お、俺と…」

「堺君！私と…」

当然4人にめクラスの半数以上の女子たちが集まってくるわけで。

特に帝督と凧の周りには5人以上の女子、一方通行と軍覇にも3人ほどが囲んでいる。

その光景を離れた席から見ているのは楓とその親友、神田 かんだみく 未来。

「いいのおく？このままじゃ一条くん違つ子にとられちゃうよお？」

「わ、私は別に…！！」

未来の発言にアタフタしだす楓。

「大覇星祭のときはいい雰囲気だったんでしょ？」

「…まあ」

大覇星祭1日目のナイトパレードの際、二人は手をつないで花火を見るというカップルにしか見えない所行をやつてのけていた。しかし今その片鱗所か面影すら見られない。

「あんた奥手すぎるわ、まあ一条くんも一条くんだけど。」

ヤレヤレと言つた表情で言う未来。彼女からしたらじれったくて仕方がないのだろう。

「そんなんだからあんな風に一条くん囲まれちゃうのよ？」

向こうを見れば複数の女子生徒に包围されている風。

「…むう」

楓だつてこのままでいいとは思っていない。しかし彼女の性格ゆえ、素直になれないのだ。

「橘…」

不意に自分が呼ばれてビクウツ!!と肩を上下させる。

「はい？」

見るとそこには何人かの男子が楓に詰め寄っているところだった。

「俺と相部屋になってくれ!!」

あ……と未来は納得する。彼女、橘楓は学園人気ランキング4位に入るほど人気があったのだ。

優秀だし人当たりもいい楓は男女問わず人気がある。

「あはは……」

愛想笑いするしかない楓に変わって未来がキツパリ言い放つ。

「残念ね〜、楓にはもう相手がいるからダメよ〜。」

「ちよ、未来!？」

顔を真っ赤にしている楓には目もくれず未来は誘ってきた男どもを一蹴する。

「何!?! 一体誰だそいつは!?!」

諦めきれないのか男どもは相手を聞き出そうと必死だ。

未来は何も言わずにスツとある方向を指差す。

それにつられて男どもも同じ方向を見る。

……そこには今なお女子に囲まれ困っている一条風の姿が。

「「いいちいじよおおおお！！！」「」

彼らは素早くレベル5失墜委員会を招集、殺気を異様に放つ男どもが風へと接近していく。

-

なんか殺気をバシバシ放つ野郎どもがこちらに近づいてくる。

「「いいちいじよおおおお！！！」「」

「ぎゃああああ！！！！」

突然のことで何かなんだかわからないまま風は委員会メンバーに押し倒され床に押さえつけられる。

「おい！なんじゃこれは！！！！」

必死に逃れようと抵抗する風。しかし委員会はそんなクソ野郎（風）の言葉になど全く耳を貸さず勝手な逆恨みが始まる。

「皆よく聞け、一条風は自分がモテるのにかかわらず我らがアイドルまでも手中に収めようとしている。これが許されるか！？」

「「許されてたまるかああ！！！！」「」

「一条風、貴様に死刑を言い渡す。」

「ちよつと待てええ!!！」

もかく風の目の前にはなんだかいろいろ危ない武器を手にした委員会の面々。

帝督、一方通行、軍覇はおもしろそうにその光景を笑いながら眺めている。

「待て、話せばわかる!!！」

なんだかわけがわからないまま殺されそうな風が必死の弁解をするが、

「だまれ裏切り者めが、もはや貴様に弁解の余地はない。」

ギューイイイイン

ドウルンドウルン

なんだか物騒な音とともに断末魔が響き渡った。

「ギヤアアアア!!！」

10分後、風だった物体は床でボロ雑巾のように打ち捨てられていた。

「…つくそ、なんだってんだ…。」

あちこち痛む身体を起こして呟く凧。

「まあお前が悪いな。」

帝督が爆笑しながら言う。

「爆笑すんな!!」

ヒィヒィ言いながら笑っている帝督にキレる凧。

「悪い悪い、でもいいかげん凧も素直になれよ。」

「は?」

「凧のことだよ、合部屋になってさっさと告うちまえ。」

「別に俺はそんなんじゃない!!」

突然慌て始める凧を見て帝督は溜め息をつく。こいつは奥手すぎる

……

ふと、

帝督と凧の隣に座っていた未来とが目が合った。二人はアイコンタクトのみで全ての計画を作成、実行に移していく。

「凧、ちょっとこっちこい。」

「凧、こっちきて。」

「は？」

「なによいきなり。」

ぐいぐい腕を引つ張られて二人の中間くらいの席に座らされる凧と楓。帝督と未来はその隣に座る。

「凧のやつは奥手だからな、これぐらいやらねえとダメだ。」

「楓も楓よ。意地っ張りなんだから。」

隣にいる二人には聞こえないようにヒソヒソと話し合う帝督と未来。一方肝心の二人は無言だ。

「……」  
「……」

先に沈黙を破ったのは凧だった。

「あ、あのさ……」

それに反応してドキッとする楓。

「な、なによ……」

「……その、なんだ。あの……」

言いづらそうに明後日の方向を見ながら言う凧。それがいけなかった。

プチッ

「なんなのよ男ならはつきりしなさいよ……」

素直になれない楓が痺れを切らしてキレてしまった。

「な、お前こそなんなんだよ!!」

それに触発されて凧も言い返して口論に発展してしまう。

「あゝあ……」

隣で見ていた二人はその口論を眺めながら諦めの溜め息をついた。

「…台無しだな」

「台無しね」

せつかくセツティングしてやったのにこれかよ、と帝督は頭を抱えて呟いた。

結局凧は帝督と、楓は未来と相部屋ということになりその日は幕を閉じた。

そして修学旅行がやってくる……



第20話 そうだ、修学旅行へ行こう（後書き）

久しぶりに楓さんを引っ張っていきます。

## 第21話 英国の出会い（前書き）

なんだか修学旅行編が好評なのかお気に入り件数が増えていますね。

作者はものすごくテンションが上がっています。

今回ちょっと短いですが導入部なのでご勘弁ください。  
ではどうぞお楽しみを

## 第21話 英国の出会い

修学旅行当日 - -

結局相部屋になれなかった凧と楓はそれぞれ帝督と未来と相部屋になることになった。ゆえに凧や帝督と相部屋になろうと考えていた女子生徒たちや楓と相部屋になるためにいろいろ目論んでいた野郎どもは目的を果たすことができず、しぶしぶ同性の友達と相部屋になるものがほとんどであった。

中には異性で相部屋になれた生徒もいるようだ。

ちなみに一方通行は軍覇と相部屋。

所変わって第23学区の空港 ……

「よし全員揃ったなー。」

ロビーでクラス全員がいることを担任の澤ちゃんが確認する。

生徒全員修学旅行時は私服のため、普段は見られない貴重な姿を見ることができるとあってなんだか皆落ち着きがない。(というか服のセンスが一発でわかってしまう)

ちなみに凧は薄手のシャツに赤いチェックの上着、カーゴパンツにブーツ、ワンポイントで首にはネックレス。

帝督はグレーのシャツにブラウンのジャケットに黒のデニム。

とまあセシス的にはまずまずな二人は他クラスからも注目の的となっている。

それによって失墜委員会の面々が殺気を放っているのだが自分たちのセシスがいかんせん良くないため攻めあぐねている状況だ。

一方通行と軍覇の私服はそのまんま。

「よーし今から飛行機に乗り込むぞ。みんな吐くなよー。」

「は？」

凧だけでなくクラスの大半が澤ちゃんの言った後半の台詞にひっかかるものを覚えて声を発する。

「…吐く？」

「まあ乗ってみればわかるから。」

へラへラしている澤ちゃんを先頭に金属探知機のゲートを抜け搭乗口へと向かう2-A御一行。

「うおお。」

思わずテンションがあがってしまう生徒たち。目の前には飛行機が何台も並んでおり圧倒的な存在感を醸し出している。

「機内食どっちにするかなあ。」

「飯かよっ」

軍覇の発言にツッコミを入れる風。

「あーそつちじゃねえぞ。」

澤ちゃんから放たれる一言。イギリス行きの飛行機は風たちの目の前にあるはずなのだが何故か担任はそこを通過して先へと進んでいく。

「どこいくんだよ澤ちゃん。」

帝督が澤ちゃんに質問するがニヤニヤするばかりで何も答えない。

そしてそこから300m程歩いたところでようやく澤ちゃんは歩を止めた。

「これに乗るんだぞー。」

「……は?」「」

風たちの目の前にあるのは確かに飛行機。それには違いない。

違いがあるとすれば、そのフォルムが異様にスリムであること。

言ってしまうえば戦闘機のようだ。

「これなー時速7000キロオーバーで移動するからイギリスまで1時間半くらいなんだぞ。」

「7000!?!?」

未知の速度に啞然とするクラス一同。  
担任は今からこれに乗れと言うのだ。

「女子にはちゃんとエチケット袋支給するから安心しろ。」

「俺らにはねえのかよー!」

男子たちの悲痛な叫びなど無視して澤ちゃんはさっさと飛行機に乗り込む。

それを見て諦めたクラスの面々はこれから襲いかるであろう強大なGにビクビクしながら飛行機に乗り込んでいく。

「…吐いたら助けてくれな？」

「そんな処理係は死んでもゴメンだ。」

帝督の真つ青な顔を見て本気で拒絶する風。実は帝督は乗り物に弱い。飛行機はおろかバスや電車でも酔ってしまうため通常は自転車を  
使用している。

「寝れそオにねエな。」

「飯なんか食ってる場合じゃなさそうだ。」

一方通行と軍覇も飛行機に乗り込む。

「よしみんな乗ったな、しっかり安全ベルトしとけよー。」

「はあ…いきなり山場だな。」

うんざりする風を尻目に飛行機は滑走路へと移動を開始。  
その数分後、彼らに乗せた時速7000キロオーバーの化物がイギリスへ向かい発射された。

余談だがクラスの男子の半分が吐き散らし半無重力状態の機内に漂ったという。

\*\*\*\*\*

「…酷い目にあつた…」

ゲツソリしながら飛行機から降りる帝督。彼は意地で吐き散らすのだけはこらえたのだが気分の悪さは限界を突破し今にも破裂してしまいそうな勢いだ。

「…大丈夫か？」

そういう風も強大なGにやられてかなりまいつている。

「情けねエなアお前ら。」

「根性が足りないんだ根性が。」

一方通行は反射を、軍覇は根性を使用したためケロツとしている。

「よしならホテルの場所はそれぞれ把握してるな？1日目は今から市内観光だから迷わずちゃんと午後6時までには帰ってくるように。」

担任澤ちゃんの一言を皮切りにそれぞれが適当にグループをつくって空港を飛び出しロンドン市内へと散らばっていく。

「うし行くか。」

凧、一方通行、帝督、軍覇の4人はロンドン市内へと入っていく。

ロンドン・・・

19世紀の産業革命によって一躍世界のトップクラスに躍進したイギリスの首都であり、伝統と革新の混ざり合うイギリス1の観光名所。

「すげーな、金髪ばっかだ。」

「見るところが違つたろうが。」

帝督も金髪みたいな髪毛をしているのでイギリス人のことは言えないのだが。

「まず何見るんだ？」



「やっぱりビッグ・ベンだろ。」

高さ95m、巨大な鐘が鳴らすその塔は150年ものあいだロンドン市民に時を告げている。

「俺ウエストミンスター宮殿に行きたいんだけど。」

軍覇が拳手して凧に言う。

ウエストミンスター宮殿とは現在は英国議会議事堂として使用している宮殿であり中世より建造されていたものだ。

「そうか、なら一端別行動だな。」

凧と帝督はビッグ・ベンへ、軍覇と一方通行はウエストミンスター宮殿へと行くことに。

「おうならホテルだな」

「じゃあな」

「しっかしここは人通りが多いなあ。」

現在時刻は午前10:00

日本との時差で眠い上にまだあの飛行機のせいで頭が重い。

「カフェってこんなにあるのかよ…。」

帝督が言う。

今二人が歩いている石畳の大通りの両側はカフェや屋台のよな店が  
乱立しカフェの机などが道路にまではみ出している。

「これじゃ車なんて通れないよな。」

「自転車も無理だろ。」

二人は苦笑しながらビッグ・ベンを目指す。

「ん？」

そのときふと風の視界に入ってきたものがあつた。

往来する人たちよりも頭1つ分高い身長の高い赤い髪の毛の男とその後  
ろを走って追いかけている日傘を差した女性。

「待ていなによステイル！女性をエスコートできぬとは問題なりた  
るわよ！！」

「うるさいですよ最大主教、<sup>アークビショップ</sup>迷惑というものを知らないんですか？」

タバコをゆらゆら揺らしている赤髪の毛の男に日傘を差した髪の毛のと  
ても長い女性がなんだか文句を言っているようだ。

「…なあ風、ロンドンであんな奴らばつかなのかな。」

「いや違つだろ。」

前方を歩いていく異様な二人を見て風と帝督は溜め息をついた。ビ

ツグ・ベンはまだまだ先だ。

\*\*\*\*\*

「ヴェルサイユ宮殿なのでございますか？」

「いやだから違っつっつてんだろオが！！ウエストミンスター宮殿だ！！」

一方通行と軍覇はウエストミンスター宮殿までの道を聞こうと近くにいたシスター？らしき人に尋ねてみたのだが：

「私もマフィンは大好きなのでございますよ。」

「話を通じねエエエ！！！！」

なんとというか聞いた相手が悪かった。

天然なのか狙っているのかは分からないがまるで話が噛み合わない。おばあちゃんと会話しているみたいだ。

「一方通行、諦めて別の人に聞かないか？」

「…そオだな、日本語話せるから丁度いいと思ってたんだが話になんねエ。」

「ウエストミンスター宮殿ならあちらでござりますよ。」

「何で今になって言うんだよオオオオ！！！！」

何と言うか一方通行でさえも対応できない女性。自身をシスターだと言っていたがこんなんでも神に仕えられるのだろうかと軍覇は疑問に思う。

「あら、そんなに疲れているように見えるのは何故なのでしょう。」  
頬に手をつけて何が何だか分からないといったような表情を見せる天然シスター。

もう何も言わないほうがいい、そう直感した一方通行だった。

「では案内するのでございますよ。」

にこやかに言うシスターの後について二人はウェストミンスター宮殿へと向かった。

第21話 英国の出逢い（後書き）

まさかの登場でした（笑）

## 第22話 科学×魔術（前書き）

全てコメディは流石に無理なのでシリアスにも突入します。

## 第22話 科学×魔術

ウェストミンスター宮殿 - -

中世よりも以前に建設され王族が使用していた宮殿。

現在は英国議会が使用しているが外装は幾度か改修されていても未だ当時の面影を残し西欧独特の雰囲気醸し出している。

「こちらがその宮殿なのでございますよ。」

天然で話が全く噛み合わないシスターに案内されてやってきた一方通行と軍覇。

ここに到着するまでの会話で二人はわかったことがある。

『こいつ思考回路がぶっとんでやがる。』

二人がそう思ってしまうのも無理はない。

ここにくるまでに幾度も道に迷いつつのかカフェで一息ついているし気がつけばまったく噛み合わない会話を延々と続けていたのだから。

「どうしたのでございますか？」

そんな二人の考えなど露知らず天然シスターは首を傾げる。

「いや…何でもねえよ。」

ここまでで話が全く成り立たないということを十二分に理解した一方通行は無理に会話をしようとしなない。軍覇も同じような感想を抱

いているらしく、珍しく暑苦しくない。

「さあさあ、中に案内するのでございますよ。」

「「は?」「

いきなりの申し出に二人は頭がついてこれなかった。

ウエストミンスター宮殿とは先程も述べたが現在は英国議会が使用している由緒正しき建造物である。もちろん一般観光客がちょっと寄っていくかなどという軽い気持ちで踏み込めるものではない。

それを十分に理解した上で一方通行は目の前にいるシスターの言葉を反芻する。

「…案内だア?」

「はい。貴方がたは学園都市の人達であるのでございましょう?」

自分たちが学園都市から来たということと言った覚えはないが何故か知っているシスター。

「何で俺たちが学園都市から来たってわかるんだ?」

「あそこに住む人達はここは雰囲気が全く違うのですぐわかるのでございますよ。」

おばあちゃん的思考回路を持つくせに変なところで勘が鋭い天然シスター。

「学園都市の方には何かとお世話になっていることですし、恩返し、



とでも言いましょうか。せっかくイギリスまで来たのですからどうぞ楽しんでいってください。」

そう言うとシスターは何やら宮殿の巨大な門を警備していた兵士のところへトテトテと小走りで向かっていき何やら話をしている。

すると警備員はこちらを見てニコツと笑い門をガラガラと開き始めた。

「はア!？」

目の前の事実が受け入れられない一方通行。一体このシスターは何者なのだろうか、一般観光客はおるかイギリス国民であつても一部しか入ることを許されない宮殿にやすやすと入場できる権力を持ったこのシスター。

「…わっけわかンねエ。」

「すげえなあ姉ちゃん。」

隣で軍覇はただ単純に尊敬の眼差しを向けている。

「さあ、内部まで案内するのでございますよ。」

「アンタ何者なんだ？」

そういえば名前も知らなかった目の前のシスター。彼は聞いてみたのだが、

「私は和食の方がどちらかと言えば好きなのでございますよ。」

「また始まりやがったアアアアア!!」

また話が噛み合わなくなったシスターに絶叫する一方通行。

彼と軍覇はこのウエストミンスター宮殿がイギリス清教の防御結界で四方を守られておりこのシスター、オルソラ、アクイナスが実はものすごい人間であるということを知らない。

そんな二人＋シスターはウエストミンスター宮殿内部へと足を踏み入れていった。

\*

「…やばい、迷った。」

一方こちらの凧と帝督は現在進行形で迷子だ。

ビッグ・ベンなど周囲360度見回してもどこにも見当たらない。

「どーすんだよ凧い、これ完璧に俺ら迷子じゃん。」

「うーん…、とりあえず日本人探すか。」

ここはイギリス、当然公用語はイギリス英語であり凧たちは日本人、多少の英語が話せないわけではないが本場の英語は早すぎて何を言っているのかサッパリ聞き取れない。

「でもそんな都合よくイギリスのことよく知ってる日本人なんていなくねえ？」

帝督の言うことも最もだ。観光で来ている日本人など知識量は自分たちと対して変わらない。そんな人達に尋ねても何の意味もない。尋ねるのであれば観光ガイドなどをしている日本人か、イギリス在住の日本人。それ以外に聞いてもムダだろう。

「うん……………」

と唸り声を風があげていると帝督が何かに気づいた。

この金髪茶髪ばかりが往来するイギリスの大通りで1人だけ真っ黒な髪の毛。しかも観光客ではないらしくカフェで英語を話し店員に何か注文している。

「おい風あの人、イギリス在住っぽいぜ。」

帝督に言われ指差された方を向いてみる。

髪の毛は真っ暗でいかにも日本人、しかも英語を話しているところを見ればイギリスにも詳しそうだ。  
風たちにとって絶好の相手。

……………しかし、しかしだ。

風はなんだかあちらへ行くのが憚られた。確かに日本人、それは間

違いないのだ。

しかし、

何故に刀をぶら下げている？

凧の最も疑問に思う点はそこだった。

しかも服装もなんだかおかしい。はいているジーンズの片方が何故か根元から根こそぎ切り取られている。なんとというかエロい。だからこそ帝督が気づいたのだろうが。

「すつみまつせくん。」

いつの間にか帝督はその女性がいるカフェまでフラフラと向かっていた。

女を前にしたときの帝督の行動の速さは呆れるのを通り越して最早尊敬に値する。

「私に何か用ですか？」

カフェでサンドイッチを食べていた日本人のもとにやって来た帝督、遅れて凧も女性の前に立つ。

目の前にして思うがやっぱりエロい。なんとというか強調されている。

「あのビッグ・ベンに行きたいんですけど迷っちゃって…」

帝督が簡単に事のあらましを彼女に話す。

「なるほど、貴方がたは学園都市からの観光客か何かですか？」

学園都市から来たということを書いてられ驚く二人。

「…何でわかったんですか？」

「学園都市はこことは正反対の街ですからね、雰囲気でもわかりますよ。」

正反対？

凧は意味がわからなかったがとりあえず彼女は案内してくれるように席から立ち上がる。

「学園都市…というか彼には借りがありませんし、ここで会ったのも何かの縁でしょう。案内しますよ。」

彼女の言った前半部分は凧にはよくわからなかったがとりあえず案内してもらえるとということで自己紹介だけ済みます。

「一条凧です。でこっちが…」

「垣根帝督、17歳です。」

なんだか帝督のテンションがやたら高い。つい一時間前まで吐きそうなほど気分が悪かったとは思えないほどに。

「よろしく一条、垣根。私は神裂火織、18歳です。」

「「ええええ！？」」

思わず本人の目の前で叫んでしまった。

本人には絶対に言えないが正直25、6だと思っていた二人。まさか一つ違いだったとは…。

「どうしたんです？行きますよ。」

神裂にせかされ慌ててその後についていく。

初めて見たときから疑問に思っているあの腰の長い刀についてはあとで聞いてみよう、そう思った風であった。

\* \*

内装は城のような豪華さだった。

オルソラのおかげでウエストミンスター宮殿に入場することができた一方通行と軍覇はそのあまりのスケールに圧倒されていた。

「いくらかかってんだか想像もつかねえな…。」

「すげえー！！」

目の前に広がる光景に感嘆の言葉しかでてこない。

「この宮殿はその昔から強大な防御結界によって守られ続けてきた偉大な宮殿なのでございますよ。」

先頭を歩くシスターが宮殿の説明を始める。今はまともだ。

「防御結界？」

聞きなれない言葉に反応する一方通行。

「あ、そちらでは伏せられているのでございましたね。何でもないのでございますよ。」

いろいろポロポロと口から零れている言葉に聞きたいことが山程あるのだがもう話が噛み合わず面倒くさくなるのが嫌だったため一方通行は敢えてそこはスルーする。

「ご堪能頂けたでしょうか？」

一通り宮殿内部を見て回り今は最初に入場した門の外にいる。

「ああ、英国貴族つてのがどれだけ金持ちなのかよオクわかったぜ。」

「キラキラしすぎて落ち着かなー!!」

と言った感想を述べるとシスターは嬉しそうな笑みを浮かべる。ほとんど悪態に近い感想であるのだがこのシスターはそんなことに気づいていない。

「楽しんで頂けたのなら幸いです。」

全く邪気のない笑顔を向けられ一方通行はそれ以上悪態をつくこと

ができなかった。

「…ありがとよ。」

ボソツ

と小さく一方通行が呟いた。その声はシスターにも軍覇にも届くことなく霧散する。彼が女性に対して礼を言うのはものすごく稀だ。日常では楓ぐらいにしか言ったことがないくらいだ（楓の場合は主に謝罪）。

「それでは次は…」

シスターはそこまで言いかけていきなり二人の前から姿を消した。

「は？」

一方通行はいきなりすぎて意味がわからなかったが隣の軍覇は何が起こったのか理解していたらしく（頭の回転が早いとかでなく単純に動体視力が良いため）、一方通行に言う。

「今のシスター誰かにさらわれたぞ。」

軍覇が言うには超高速で横からあのシスターをさらったというのだ。

「…おもしれエ。」

どうやら彼女は狙われる程の重要人物であるということを理解した一方通行が口が裂けんばかりの笑みを浮かべる。

「悪いな澤村ア、今日は派手にやらせてもらっぜエ！！」



「付き合っぜ一方通行!!」

一方通行は脚力のベクトルを操作して、軍覇はただ身体能力でシスターがさらわれた方向へと高速で向かう。

魔術大国、イギリス

二人の超能力者がその総本山で戦闘を始めようとしていた。

任務ではない。

ただ、自分たちに親切にしてくれた女性を助けるために。

理由はそれだけで充分だった。

第22話 科学×魔術（後書き）

次回

オルソラ奪還作戦

超能力者×魔術師！！

第23話 誘拐と持論と現れたヒーロー（前書き）

一方通行をかつこよくしたかったんです…!!

うまくいきませんでした（泣）

## 第23話 誘拐と持論と現れたヒーロー

「へ〜神裂さんは学園都市に知り合いがいるんですか。」

ビッグ・ベンへと向かう三人。すっかり打ち解けた神裂と自分たち（主に帝督だが）はお互いの話をしながら歩いていた。

「ええ、彼には色々と迷惑をかけてしまっているので何か恩返しをしなくてはいけないのですが…」

そこまで言っただけで何故か彼女は黙ってしまった。見れば俯いて顔を赤らめて何かブツブツ言っている。

凧が注意して聞いてみると「あのグラサン野郎…、墮天使エロメイドド…」などと言っているのが聞き取れた。

……墮天使エロメイド??

気にはなつた凧だったが言葉にするには何だか勇気がいったので口には出さず心に閉まっておく。

「あ、見えましたよ。あれがビッグ・ベンです。」

神裂が指差した方を見上げれば昔ながらの煉瓦造りの家の屋根の上からビッグ・ベンを象徴する時計が見えた。

「「「おお〜」」」

凧と帝督は改めて目にするその圧倒的な存在感に感動の声をあげる。

「すげ〜。」

「生で見るのはやっぱり違うな。」

「もう少し歩けば真下まで出れますよ。」

三人は更に近づくため再び歩き出そうとした。

その時だった、

見上げていたビッグ・ベンの前に建ち並んでいた煉瓦造りの屋根。

その上を高速で移動していく物体が目の前を通過した。

目にも止まらぬ速さのソレを、三人は確かに見た。

「人!？」

「「一方通行と軍覇!？」」

神裂と凧、帝督がそれぞれ叫ぶ。

「あの人間はアナタたちの知り合いなのですか!？」

「クラスメートだよ。でも神裂さん、よくあの二人が見えたな。アイツら全力で移動してるってのに。」

凧の言葉に神裂が返す。

「ええ、まあ。」

「凧、あいつら何かあったみたいだぞ。」

「みたいだな、つたく、早速澤ちゃんから言われたこと破っちまうじゃん。」

二人は頭上を見上げ、能力を発動。

帝督は翼を展開し、凧は空気中の水分を凝結させて足場を作りその上を走っていく。

その場に残された神裂は突然の出来事にただそこに立っていることしか出来なかった。

\*

ロンドン郊外の今はもう使用されなくなった巨大な倉庫街。

その倉庫の一つにさらわれたシスター、オルソラ。アクィナスは両手を縛られた状態で監禁されていた。

彼女の周りには20代前半くらいの男が5人、いずれも一般人ではなく、流れの魔術師だ。

そのうちの1人、リーダーらしき男がオルソラに近づき、話かけた。

「やあ、シスターオルソラ。手荒な真似をして悪かったな。」

謝罪をしているくせに全く悪びれた素振りを見せない男。顔の右側には刺青が入れられている。

「アナタたちは何故私を誘拐したのでございますか？」

「そう！！そうだよなあ。大事なのはそこなんだよ！！」

待つてましたと言わんばかりに大きく目を見開きオルソラに顔を近づけて言う男。

「理由、そんなもんはお前が一番よく分かってんじゃねえかあ？シスターオルソラ。俺たちの狙いは『法の書』だよ。」

## 法の書

9月上旬にとあるツンツン頭の少年が解決した問題の発端となった魔導書である。それを解読することに成功したオルソラ「アクイナスはローマ正教から追われる身となったが、その解読方法が間違っていたと禁書目録に言われ、彼女がイギリス清教に改宗することで問題は解決。正式に解読が誤りであったことも発表された。

その『法の書』を、彼らは欲しているというのだ。

「あの解読方法が誤りであったと正式に発表があったはずなのでこ

「ございますよ。」

「ああ、確かにイギリス清教側から発表はあったぜ。」

だがな、

と男は続ける。

「その発表が偽りだったとしたら!? 法の書という強大な戦力を手に入れたかったイギリス清教が行なった策略だとしたら!? お前がイギリス清教に改宗した以上ローマ正教も迂闊に手はだせねえ。だが!! 俺たちは流れの魔術師!! ローマ正教とイギリス清教の関係なんざ知ったことじゃねえ。」

声高らかに笑いながら言う男。

事を中心人物であるオルソラはその考えが馬鹿馬鹿しい幻想であると知っている故言う。

「イギリス清教側に偽りなど無いのでございます。私の解読方法はフェイクだったのでございますよ。」

だがこの男たちは聞く耳持たずといった様子で全く取り合おうとはしない。

「そんな戯言は解読方法を聞き出せば分かることだろ!? もつ法の書を手に入れる算段はできてるんだ!! 後はお前がそれを教えてくれればいいだけなんだよ!!」

「…何故そんなに力を欲するのでございますか?」

オルソラにとって、これほどまでに強大な力があつたところで何の



役にも立たない。

「…言っただろ、俺たちは皆流れの魔術師だ。」

男が切り出した。

「流れの魔術師ってのはきちんとした宗教組織に所属している魔術師たちから白い目で見られるもんなんだよ。」

それは学園都市でいうスキルアウトに近いかもしれない。

きちんとした宗教組織に所属していない、できない魔術師は魔術の世界では侮蔑される対象である。

「そんな俺たちだ、当然地位や権力なんざあつたもんじゃねえ。」

男はオルソラを前に話を続ける。

「俺たちは力が欲しい！！俺たちを侮蔑しやがる忌々しい魔術師どもを見返すための絶大な力が！！」

天を仰ぎ両手を広げ叫ぶ男。

「そのための『法の書』だ！！魔術師ならば魔導書がどれだけの戦力になるのか誰でも分かるだろ！？そんな分かりやすい武器が一つでいい！！俺たちになれば流れの魔術師を見下す奴らだって態度を変える！！」

それを聞いたオルソラは、彼らが不幸な境遇にあり力を欲する理由も理解した。

理解した上で、しかし言い放った。

「そんな見せかけの力で、誰も幸せになどならないのでございませよ。」

決して大きな声ではない。だが確かに芯のある声で男に言い放った。

「…あぁ？」

男の態度がガラリと変わる。おそらくこの話をすれば同意してくれるとも思っただろう。

「…できれば穩便に事を済ませたかったんだが…、どうやらそれは無理そうだな。」

リーダーの男が周りの仲間に目で合図を送る。それを受け取った男の1人が倉庫の外へと出ていった。おそらくは見張りだろう。

「さあてシスターオルソラ。少しばかり痛い目にあってもらおうか。」

降り下ろされた拳は、彼女の華奢な身体に突き刺さった。

\*\*\*

「一方通行!!」

「凧!？」

ビッグ・ベンの時計台の屋根の上で4人は1時間ぶりに再会した。

「どーしたんだよそんな急いで。」

帝督が二人に問いかける。

「俺たちを案内してくれたシスターみたいな奴がいたんだが、目の前で誰かにさらわれちまったんだよ。」

忌々しそうに舌打ちしながら事情を放つ一方通行。

凧と帝督はさらわれたという不穏なワードに反応する。

反応といっても恐怖や畏怖といったものではない。

担任、澤村にきつく言われていたことを思い出し、修学旅行1日目にしてそれをぶち破ろうとしている状況に肩を落としているのだ。

「まあそれは置いといて、連れさられた場所は分かっているのか？」

「あア、この先にある倉庫街にいるはずだ。」

一方通行は先に見える倉庫街を指差す。

倉庫街だけあって大量の倉庫が規則的に並んでおり、あの中から探し出すのは苦勞しそうだ。

「ゲッ、あん中から探し出すのかよ。」

帝督が何やらゲンナリしている。

「こりゃバレたら澤ちゃんに説教5時間コースだな。」

凧は苦笑しながら言う。まさかイギリスまできて4人で誰かと闘うことになるとは思わなかったが、予期せぬ事態には慣れているため特に動揺などはない。

「行くぞ。」

その一言で再び4人は移動を始めた。

\*\*\*

改めて見るとかなり大きな規模の倉庫街だった。

既に廃棄され使用されていないため人がおらず目撃される心配はないがこの中から特定の人間を探すのは骨が折れそうだ。

「まあここは俺に任せな。」

軍覇はそう言うとその場で拳を握る。

「すごいパンチ。」

その場で念動力の壁を破壊しその跳ね返りを利用して人間がいるかどうかを調べているのだ。

「む！？建物の跳ね返りとは違う感じがあるな、あの倉庫だ。」

軍覇が言う倉庫は一番端にある倉庫。

ここからではまだよく分からないが見張りのような人間が僅かに認められる。

「あれか。」

4人はさらわれたシスターを奪還すべく、行動を開始する。

まず動いたのは軍覇だ。音速を超える速度で見張りの目の前まで一瞬で移動し思いきり殴り飛ばす。

「むううん！！」

「げふううあ！？」

突然現れた人間に訳がわからず動揺する見張りの魔術師はただ殴り飛ばされることしかできなかった。

そして扉の前に立ったのは一方通行。

彼は脚力のベクトルを操作し思いきり扉を蹴り飛ばす。

ドガン！！

という豪快な音を立てて扉はめり込みそして吹き飛んだ。

中にいたのは4人の男と自分の知るあの天然シスター。

一方通行は凶悪な笑みを浮かべてこう言った。

「ゴミ掃除だ、てめえら生きて帰れると思うんじゃないぞ。」

魔術師と超能力者の戦いが始まる。

### 第23話 誘拐と持論と現れたヒーロー（後書き）

思いつきで書いた小説があるのですがこれ以上書く力がないためこちらに盛り込もうと思っています。

学園黙示録とのコラボなのですがとあるの世界観も壊したくないため悩んでいます；

賛否両論、意見をお聞かせ願いたいです。

よろしく願いますm（）（）m

## 第24話 魔術師と終息と彼女の住まい（前書き）

オルソラ奪還作戦終了です。

そして今も前回の後書きで書いたあれの意見をお待ちしております；  
できれば感想と一緒に頂けると嬉しいです。

でわ



## 第24話 魔術師と終息と彼女の住まい

「ゴミ掃除だ、てめエら生きて帰れると思うんじゃないぞオオオオオ！」

扉をぶち破り正面から堂々と白髪赤目の少年が乗り込んできた。厚さ180mmはある鋼鉄の扉を蹴破るなど人間技ではない。

その少年の後ろからはさらにもう1人、黒髪で立たせている髪型の少年が入ってくる。

「ガキどもが…！！人助けのつもりか!?!」

その問いには答えず、ただただ凶悪な笑みを刻む。

\*

「あの方たちは…」

身体の内を痛めつけられ朦朧とした意識の中、オルソラは信じられないような光景を目にしていた。

勢いよく吹っ飛ばされる鋼鉄製の扉、そしてそこから現れた先程知り合ったばかりの二人の少年。

「また…、私は見えず知らずの方に助けて頂けるのでしょうか…」

彼女はそれが嬉しかった。  
お互いに名前も知らない。  
それでも、こんな自分のために動いてくれる人達がいたことが。

\*\*\*

「俺たちは今回は活躍できる場所はないな。」

ぶち破られた扉の横に立つ帝督が風と言う。

「だな。何よりあんなった一方通行はもう誰にも止められねえよ。」

一方通行が珍しく本気でキレていた。

付き合いの深い風たちであっても彼のそんな姿を見るのは片手で数えられる程しかない。

「見たところ相手もただの人間ではなさそうだったけど、まああの二人なら何の問題もないだろ。」

先程倉庫内へ突撃して行った一方通行と削板軍覇は学園都市が誇るレベル5であり、それはたとえ外の世界であっても変わらない。

「まあ俺たちにできることは……」

風が倉庫の外壁に手をかける。

パキインッ

「アイツらが逃げられないようにすること……かな？」

凧が手を触れたところから一気に倉庫全体を氷の壁が覆つ。ものの数秒で倉庫は氷の城となった。

「終わるまで待つてようぜ。」

帝督は近くの資材置場に腰を下ろしている。

凧と帝督の出番はここまで。

ここから先は一方通行。

\*\*\*

「凧の仕業だなア。」

一瞬で倉庫内にまで氷が浸食してきたのを見て一方通行は大方凧が余計なお世話でもやいたのだろうと思つ。

凍らされた天井から目を離し、彼は正面を見据える。

その先には5人の男、そして先程のシスター。

そのシスターは暴力を受けたのかあちこちに傷や痣ができている。

ギリッ

一方通行は静かに奥歯を噛み締める。

「何だガキども、ここは子供が来ていい場所じゃねえよ、とつとと家に帰んな！！ギャハハハハ！！」

男の1人が一方通行に近づき、安い挑発をする。  
普段の一方通行であれば安い挑発だと一蹴する所だろう。

……しかし、

今日の彼は冷静ではない。

「……け。」

「ああ！？」

「……けつつつたんだよ。」

「聞こえねえんだよクソガキがあ！！」

そこまで言って、一方通行に突っかかった男は静かになった。

理由は簡単、喋れなくなったからだ。

ゴオッ！！

一方通行が男の顔を思い切り殴る。  
ベクトル操作されたソレの破壊力は凄まじく、風が凍らせていた壁を貫通させるほどだ。

「……………っ!!」

突然の出来事に絶句する男たち。オルソラも驚いている。

そんな男たちに向かって、彼は今度こそ聞こえるように吼える。

「退けつつつてンだよオオオオオ!!!」

足を大きく振り上げ、そのまま重力に任せて思い切り降り下ろす。  
それだけの動作なのだが、彼の足元には亀裂が走り周囲には烈風を巻き起こす。

「うわあああ!?!」

男たちは烈風に巻き込まれ壁に激突、意識を手放していく。

残されたのはリーダーの男、ただ1人。

「悪いな軍覇、今日は俺にやらせる。」

「しかたねえな。譲ってやるよ。」

そう言うと軍覇は倉庫の隅へと移動して腰を下ろし、腕を組んで居眠りを始めた。

「…さアて、後はてめエだけだぜ三下ア。」

「てめえただのガキじゃねえな…。」

リーダーの男は圧倒的な力を見て確信していた。目の前の少年が学園都市の能力者であるということ。

「…なめてんじゃねえぞクソガキが!!」

学園都市の超能力者であるうが関係ない。自分は魔術師だ。それなりに腕にも自信がある。先程の烈風が奴の能力かは知らないが、あの程度なら簡単に対応することができる。

男は着ていたジャケットのポケットからカードのようなものを取り出した。

「あア？」

見たことのない物体に一方通行が首を傾げる。

「オイオイ何だア？トランプでもしよオったのかよオ。」

「ハンッ、てめえにわからねえだろうがな、こいつはルーンって代物だ。」

そうやって男はルーンを辺り一面にばらまく。ばらまかれたルーンは地面や壁に張り付いていく。

「…くらいやがれ…!!」

男が何か呟くといきなり男の背後に無数の光の矢が出現する。

「光の粛正!!」

そう叫んだと同時に、一方通行に向かって光の矢が降り注ぐ。

一方通行は動かない。一步も。

次の瞬間、光の矢がリーダーの男に突き刺さった。

「なあ!?!ぐあああ!!」

いつの間にか自分に突き刺さっていた光の矢。それが理解できない男は荒い息を吐きながら一方通行を睨む。

「てめえの能力は風を操ることじゃなかったのかよ!?!」

「ああ?何勘違いしてやがんだこの三下が。」

くだらなさそうに男を見据える一方通行。その眼はすでに獲物を完全に手中に収めている。

「あり得ねえ...!ルーンで強化された光の矢だぞ!?それを...、触れもせずに...」

「ルーンてのが何だかは知らねエが、俺には通用しねエよ」

一方通行が目の前で顔を青くしている男に言い放つ。

「触れもせず…？お前！！まさか…！！」

何かに気づき、驚愕とともに恐怖を覚える男。

「学園都……」

しかし、

全てを言い切る前に、一方通行の拳が男の顔面へと吸い込まれていった。

ゴシヤッ

ベクトル操作された一方通行の文字通り一撃必殺の一発。

垂直に15m程吹き飛ばされたリーダーの男は凍った倉庫の壁に激突、骨が悲鳴を上げる生々しい音が倉庫内に響き、そのまま男の意識は闇に沈んだ。

一方通行はそんな凄惨な光景には眼もくれず、オルソラのもとへと向かい縛られていた両手を解放してやる。

「お強いのですね」

「誘拐されてんのにその余裕そんな態度は何なんだよ」

誘拐されていたシスター、オルソラ「アクィナス」。

身体のうちこちには生々しい傷や痣が見えるが、どうやらそれだけのようだ。

何故かニコニコしているシスターにわけがわからない一方通行はとりあえず事のいきさつを尋ねる。



科学の街、学園都市に住む彼にとってその話は絵空事か何かではないのかと疑うほどだった。

しかし、それが原因で彼女がさらわれたというのもまた事実。

「てことは何だ、その『法の書』ってのを手に入れるためにコイツらはお前をさらったってのか？」

未だに信じられない一方通行。

そこに外で待機していた凧と帝督もやってきた。

彼らにも話をして見たが、やはり信じられないといった表情が返ってくるばかりだった。

「助けていただいて本当に感謝しているのでございますよ」

ニコやかに微笑むオルソラを前に、一方通行は何も言えなくなってしまう。

それを見ていた帝督。

『おやおやあ？これはもしかしてもしかしちやったりすんじゃねえのかなあ？』

今の一方通行の態度がいつもと違うのに引っかかりを感じた帝督は勝手な妄想を開始する。

「…お前何やってんの？」

「ちょっと静かに」

隣でいきなりうんうん唸りだした帝督に不信感を憶え聞いてみる凧。しかし返ってきた素っ気ない返事に彼は確信する。

あ、こいつまたとんでもないこと考えてやがるんだ

「まあとりあえず、その人を救出できたんだからどこか安全な場所まで送らないと」

「だな」

凧の提案に同意する軍覇。

軍覇の口からはだらしなく涎が垂れており、僕今寝起きです、と猛烈に主張しているようにしか（凧には）見えない。

「それでしたら、助けていただいたお礼も兼ねて寮に案内するのでございますよ」

身体の前で両手をパンと叩き、自分の家に招き入れるというシスタ

「寮？」

「私は今寮に住んでいるのでございますよ」

「こんな人数でいったら邪魔になるんじゃないか？」

帝督が言うが、オルソラは心配無用と言った調子で答える。

「広いので大丈夫でございますよ。みんなも歓迎してくれると思いますし。」

……みんな？

4人同時に頭上に？マークが浮かぶ。

そんな4人のことなどつゆしらず、天然シスターは自分だけ1人でスタスタと先に行ってしまう。

それを急いで追いかける4人。

ちなみ一方通行が倒した男たちはしっかり縛って身動きがとれないようにし、一ヶ所に集めて放置しておいた。

現在時刻はPM15:00

彼らの忙しい修学旅行1日目はまだまだ終わらない。

第24話 魔術師と終息と彼女の住まい（後書き）

次回女子寮へ！！

## 第25話 女子寮とホテル（前書き）

お気に入り200件突破！！

読んでくださっている皆さまには感謝感謝です。

これからも拙い作品ですがよろしく願いますm | | m

## 第25話 女子寮とホテル

4人がオルソラに連れてこられたのは、西洋の雰囲気漂う大きな寮だった。

「こちらなのでございますよ」

案内されるがまま敷地内へと足を踏み入れる4人。

1人先頭に行くシスターオルソラはテクテクと進み寮の扉を開け4人を招き入れるように丁寧な挙動で入るよう促す。

「さあどうぞ、ここが私の住む女子寮なのでございますよ」

「へ〜ここが女子り…」

納得しかけた凧の言葉が急に止まった。

「女子り…」

一方通行も同じように当たり前のように口にしようとしていた単語をギリギリ飲み込む。

……女子寮？

「ちょっと待ってシスターさん。今何て言った？」

恐る恐る凧は笑顔を振り撒くシスターへと先程の疑問を投げ掛ける。

「そんな。オルソラでいいのでございますよ」

（そつちじゃねえええええええ！！）

心の中で絶叫している凧の代わりに一方通行が再び尋ねる。

「ここは女子寮なのか？」

「ええ。ここには私と同じシスターが多数住んでいるのでございます」

それを聞いた一方通行と凧は本気で引き返そうと考える。

いくらお礼がしたいと言われても女子寮に足を踏み入れるのは男として躊躇われる。

そして何よりもここはイギリス、異国の地だ。

話の通じない会話をされて困るのは目に見えている。

凧と一方通行とて男であり、女子寮という魅惑のフレーズに誘惑されていけないわけではない。

が、凧はそれ以上にそういうことに関しては臆病チキンであり一方通行は何やらオルソラをチラチラ見ながらぼそぼそと何か呟いている。

この二人はどちらかと言えば常識人なため、自由時間のリミットも迫ってくるしこのくらいでおいとましようと考えていた。

しかし

「お邪魔します」

「うお！広いな！！」

欲望に忠実な二匹の獣はまるで導かれるように扉の中へと吸い込まれていく。

帝督と軍覇、この二人は余計なところが素直だ。

「はあ……」

頭を抱えてため息をつく凧。自由時間の終わりも近づきつきあり、ホテルへ向かうためにそろそろ移動を開始しなくてはならないわけだが、見ての通り欲望に忠実な二匹の獣は扉の奥に吸い込まれ見えなくなってしまうた。

さらに扉のすぐ横には全く邪気のない笑みでこちらを見つめているシスター、オルソラ。

（これはもう諦めたほうがいいかな……）

半分ヤケクソ気味になりつつある凧がふと隣にいる一方通行を見る。すると、

「（あの笑顔は反則だろオが…、クソ）」

とかなんとか顔を赤らめつつ呟いている。

これには事そういうことに関して鈍感（自分の事については尚更）



な凧も流石に勘づく。

(あれ…？もしかして一方通行って…)

「どうしたのですか？身体が冷えてしまうのでございますよ？」

その言葉で思考を一時中断した凧はとりあえず寮内へと足を踏み入れる。一方通行もその後続いた。

「すごい造りだな」

「イギリスっぽいな！！」

軍覇がイギリスっぽいなどとわけがわからないことを言っているがおそらくは英国式の建造物とでも言いたいのだろう。

「今は丁度夕食時ですし、皆さんもご一緒にいかがでしょうか？」

「そうだな。どうせ今からホテルに戻っても澤ちゃんに説教くらうのは目に見えてるしな…」

凧は初めて入る女子寮とホテルに戻れば待っているであろう澤ちゃんの説教に半ば投げやりになっているためテンションも若干高めになっている。

4人の先頭を歩いていたオルソラが手前にあつた大きな扉を開く。

「ここが食堂なのでございます。皆さんにま紹介したいですしどうぞ入ってください」

ガチャッ

と木製の扉をオルソラが開くと中は大きな食堂になっていて300

人程のシスターらしき人たちが思い思いの食事をとっていた。

「これ皆シスター？」

帝督が何だか目を輝かせている。

「はい。皆さんシスターなのでございますよ」

ちなみに、オルソラは自分が『法の書』という本のために狙われたシスターであるということを風たちに言っではいるが、魔術関連の情報は何も話してはいない。

風たちは普通に教会にいてお祈りしているシスターが住んでいる寮へやってきたと思っっているのだ。

「オルソラ。何だそのガキどもは」

テーブルの一角でスープを飲んでいたゴスロリ系の黒いドレスを着て、傷んだ金髪が寝癖でいろんな方向にはねている女性が話しかけていた。

「シエリーさん。この方たちは私を助けてくれたのでございますよ」

「…アンタまたさらわれたのか」

呆れたように言うシエリーという女性の発言を聞いて風は思う。

(このシスターそんなしょっちゅう拐われてんのか!?)

「まあなんだ。助けてもらって感謝してるよ。コイツすごいなくな

るから大変なんだ」

シエリーは立ち上がり凧たちの前までやってきて自己紹介をした。

「シエリー＝クロムウエルだ。よろしくな」

「俺は一条凧。」

「垣根帝督です」

「一方通行だ」

「削板軍覇!!!」

「お前ら学園都市の人間だろ？」

シエリーの発言にまたしても驚く凧と帝督。昼間のエロいお姉さんにも言われたが、そんなに解るものなのだろうか。

「シエリーさん。彼らにも夕食をとって頂きたいのですが」

「ああアンタの恩人だしいいんじゃない？厨房はあいてるわよ」

それだけ聞くとオルソラは小走りで調理場へと入っていった。どうやら料理を振る舞ってくれるらしい。

「アンタらもその辺に座って休んでな」

「シエリーさんは？」

「アタシはもう食べたから。それに芸術家なんてそんなもんさ」

そう言い残してシェリーは自室へと戻っていった。

「しっかし本当に女性ばっかだな」

帝督が周りを見回して嬉しそうに言う。

軍覇は料理が待ち遠しいのかどこからか取り出した紙ナプキンを既に首元にセツティングしている。

一方通行は何も言わずに調理場をジーッと見つめていた。

凧もとりあえずは少し休憩しようと思おうと肩の力を抜いた瞬間、不意に大きな声が聞こえてきた。

「あー！？わ、私の指定席に誰か座ってます！！しかも男がぁ！！」

何事かと思つて凧が振り返るとそこには金髪みつあみの少し小さめなシスターが半分涙目で立っていた。

どうやら凧が座っている席は彼女の指定席らしい。

「シスターアンジェレネ！大きな声を出してみつともないですよ！

」！

「だってシスタールチア！！あそこは私の指定席なんですよう！！」

後ろから現れた金髪美人のシスターにしかられ反発しているシスターを見てなんだか罪悪感に苛まれる凧。

「それにどうしてこんな所に知らない男がいるんですか！？ふほう

しんにゆうですよ!!ふほうしんにゆう!!」

凧だけでなく他の3人も肩身が狭くなる。不法侵入だなんだと言われ実際女子寮に入り、事情を知っているシスターは調理場、もう1人は自室に戻ってしまい説明してくれる人間がこの場にいないのが何よりも痛かった。

「どうしたんです？」

アンジェレネと呼ばれていたシスターの後ろからもう1人現れた。長い黒髪に帯刀している女性。

凧と帝督は激しく見覚えがあった。

「「あー!!」」

「!」

凧と帝督の声に向こうも気付いたのか驚いている。

「何故アナタたちがここに!？」

「それはこっちが聞きたいくらいだ…」

疲れた表情を見せる凧を尻目に帝督が代わりに説明を始めた。

\*

「成程、そういうことだったのですか」

一頻り説明を終え、凧たち4人と神裂、ルチアにアンジェレネはテーブルにつきながら会話していた。

ちなみに凧はアンジェレネが恨めしそうにこちらを見てきたため席を変えている。

「アナタたちは学園都市から来てたんですね」

指定席に座り機嫌がよくなったアンジェレネが言う。テーブルの上には何だか甘そうな飲み物が置いてある。

「なあそれ何でみんなわかるの？」

凧の疑問も最もで、言っていないのに言い当てられるのだ。

「わかりますよ。学園都市の彼にはお世話になっていますし。ね、シスタールチア」

「不本意ではありますが彼には助けられてばかりですね」

(…また出たよ“彼”。一体どんな奴なんだ?)

「お待たせしたのでございますよ」

そうこうしているうちに調理場の奥から大きな鍋を持ったオルソラがでてきた。

それをテーブルの中央に置き、ニコニコしながら取り皿を配るオルソラ。

「うお！スゲーうまそう！！」

帝督が身を乗り出して鍋の中身を覗き込む。

「シチューだシチュー！！」

軍覇は相当腹が減っていたのかシチューを見た瞬間から両手をテーブルにバンバン叩きつけている。

オルソラが鍋に入れてもってきたのはビーフシチューだ。

「1日しか煮込んでいないのですがいかがでしょうか？」

4人はそれぞれの受け皿にビーフシチューをとり口に運ぶ。

「うま！！」

「やべえこれ！！」

「うま い！！」

「…うめエ」

上から順に風、帝督、軍覇、一方通行の感想

「お口に合ってよかったのでございます」

「これオルソラがつくったのか！？」

帝督が口をモゴモゴ動かしながら言う。

「はい、調理場は私が任されていますから」

この天然シスターは料理の腕は確かで、実際このビーフシチューは

言葉にできないくらいに美味い。

「シスターオルソラは料理が上手ですからね」

甘そうな飲み物を飲みきったアンジェレネが言う。

「ホテルなんかで食べる夕食よりも全然うまいな」

「凧に激しく同意だ！！」

そう言う軍覇はすでに4杯目のシチューをよそっている。  
一方通行に至っては

「（料理もできるって完璧じゃねエか…）」

またあらぬ方向へトリップ中だ。

帝督はそれを見てまたニヤニヤしている。

凧は何も言わずにビーフシチューを食べ続けた。

\*\*\*

20分後、ビーフシチューを全て食べ終わった凧たち4人は神裂やアンジェレネとイギリスについて話していた。

「結局ビッグ・ベンには行けなかったなあ」



凧が残念そうに言う。

「あんなことあったんじゃしょうがねえけどな」

「明日見に行けばいいのではないですか？」

「明日はグループで決まった場所を回るからムリなんだ」

このような自由行動がとれるのは今日のみで、明日はグループで、明後日はクラスでの行動が決められている。

「その自由行動の時間って何時までなんですかあ？」

「午後6時だけど」

そう言ってアンジェレネの問いに答えた凧はふと携帯の時刻を見る。

「…………え？」

画面に表示されていた時刻は

18:46

「えええええ！？」

そしてそれを見計らっていたかのように携帯が振動した。画面には凧の文字。

恐る恐る通話ボタンを押し、ゆっくりと携帯を耳に当てる。

『アンタなにやってんのよ!!!!』

あまりの怒声に鼓膜が破れるかと本気で思った。

「いや〜…ちよつとビーフシチューを…」

『澤村先生カンカンよ!!今どこにいるわけ!?!』

「…………女子寮…?」

『ぶち』

通話越しでも聞こえるほどの楓がキレた音がした。

『…へえ〜。女子寮ねえ…………』

「まで!!違うんだって楓!!これにはいろいろと深いわけが…」

『最っ低!!!』

それだけ言つて一方的に通話を切られてしまった。

「痴話喧嘩か風い」

未だに時刻に気づいていない3人に風は無言で携帯の画面を見せつけた。

「」「…………!!!」「」

一気に血の気が引いていく3人。

女子寮に来た時点でホテルまでの移動に時間がかかるため多少の時間オーバーは視野にいれていたが、まさか既に時間オーバーしているとは思わなかった。

「オルソラ！悪いけど俺らもう行くわ！！」

帝督が皿を重ねて急いで立ち上がる。

「神裂もありがとな！！」

凧はすでに扉を開けている。

「あらあら」

「騒がしい連中ですね」

台風のように去っていった4人を見て神裂たちはとあるツンツン頭の少年を思い出していた。

\*\*\*

全速力で移動したがホテルのロビーについたのは19:22。  
集合時間を1時間以上オーバーしてしまっていた。

「…どーするよ凧。澤ちゃんどこ行くか？」

「冗談だろ！？わざわざ自分から死に行くような真似しないだろ」

「なら話は決まったなア」

「根性で切り抜ける！」

澤ちゃんに見つかることなくエレベーターに乗り込み自分たちの部屋があるホテルの11階のボタンを押す。

だが、何故かエレベーターは8階で停止した。誰か乗ってくるなぐらしいか考えていなかった4人だがふと気付いた。

8階は教師たちが泊まっている階ではなかった？

「なあ帝督…俺めちやめちや嫌な予感がするんだ」

「奇遇だな風。俺もだよ」

そしてガーツという音とともにエレベーターの扉が左右に開かれ、立っていた人物を目にして4人は絶望した。

「ようお前ら。とりあえずこつちこいよ」

そこには額に青筋を立てて修羅へと化した担任の姿があった。その後みっちり説教されたことは言うまでもない。

第25話 女子寮とホテル（後書き）

次回もコメディが続きます。

1 日目がなかなか終わらない（笑）

**幕間 男の楽園と犠牲（前書き）**

今回シリアス0でお送りします。  
失墜委員会の方々の楽園のお話。

ではどうぞ

## 幕間 男の楽園と犠牲

「あゝ頭痛え」

結局あの後みつちり1時間以上澤ちゃんの部屋でお説教された凧たち4人がようやく解放されたときには時刻はすでに午後8時半を回っていた。

「澤ちゃん今回まじでキレてたな…」

説教中の澤ちゃんの顔を思い出し震え上がる帝督。

「マジで学園都市に強制送還されると思ったぞ」

一方通行も同じように澤ちゃんの顔を思い出し恐怖していた。

「冷や汗が止まらねえぜ」

軍覇も相当精神的にやられたのが異常なほどに汗をかいている。

「男子の入浴時間は9時からだからもうちょっと待たないといけないな」

凧は携帯で時間を確認する。

現在PM20:33。

凧たち長点上機学園が宿泊しているこのホテルは日本人用に造られたのかどうかは分からないが大浴場が存在する。

なので入浴はその大浴場で男女それぞれがすることになっているの

だ。  
時間は女子が午後8時から9時まで。男子は9時から10時までである。入浴順はA〜Fクラスまでが2クラスずつが20分間隔でE、Fクラスから順番に入浴する。  
時間的に今は女子のC、Dクラスが大浴場を使用しているころだろう。

「セオリー通りに覗きに行ってみるか？」

エレベーターの中、帝督が笑いながら凧に言う。

「おいおい冗談じゃねえよ。楓に殺される」

チンッ

という音とともにエレベーターが11階に到着した。

「ならまた風呂のときになア」

「またな!!!」

一方通行と軍覇は凧、帝督と部屋が違つたためここで一旦別れる。  
凧と帝督も部屋に戻るべく歩を進める。

……が、

何故か部屋の前にはAクラスの男子の面々が待ち構えていた。



「ようやく戻ってきたな一条、垣根」

「何か用か佐竹」

扉の前で腕をくんでいるクラスメイトに尋ねる風。

「貴様ら今までどこに行っていたんだ？」

その言葉はいつもの佐竹の口調ではない。

言ってしまうば、

“失墜委員会”のときのソレだ。

「何って…観光だろ」

危険な雰囲気を感じ取った風が咄嗟にそう言う。

「ほう…観光ねえ」

周りの男どもの纏う空気が変わっていくのがわかる。

「嘘をつくなああ！！橘からネタは上がってるんだぞおお！！」

「げっ！！」

（楓のやつ何言ってくれてんだよあ！！）

「おい風…こいつら目がやばいぞ」

帝督が隣で言ってくる。

「女子寮だああ!? 貴様ら外人にまで手を出しやがってええええええ!」

「何かいろいろ誤解が入ってんだろぅが!…って何だその縄! オイ! やめろっ…うおおお!」

佐竹の合図で周りの失墜委員会の面々が統率された動きで凧と帝督を縄で縛っていく。

「おいなんだよコレ!」

両手の自由を奪われ何もできなくなった凧と帝督に向かって失墜委員会リーダー、佐竹は言い放つ。

「我々はこれから高貴なる任務を遂行せねばならん。貴様ら二人にはその礎となってもらっ」

「何だよ高貴なる任務って」

縛られた状態で凧が聞く。

「我々はこれから楽園<sup>エデン</sup>への扉を開くのだ!」

「…は?」

「うおおおおお!」

周りの野郎どものテンションが最高潮になる。

「…まさかお前ら…」

「覗きかよ!!」

帝督の言葉を尻が引き継いで言う。

「貴様らには犠牲になってもらおうか。オイ!!こいつら二人を最初に浴場にぶちこむぞ!!」

うおおおおお!!

「ちょっと待てえ!!なんで俺たちが巻き込まれにやなんのだ!!」

「黙れ一条。最早貴様らに拒否権：いや人権は存在せん」

「人権も!!?だから何で俺たちが…」

「貴様ら二人ならたとえ女子の入浴中に現れても受け入れられそうだからだ!!」

「はあ!?!」

「全く恨めしいが!!我々の目の保養：ゲホゲホ、樂園のために死ぬ一条、垣根!!」

「今保養つつたる!!完全に八つ当たりじゃねえか!!」

「黙れ裏切り者があ!!」

「死ぬ一条!!」

「くだはれ垣根!！」

「我々の尊い犠牲になるのだ!！」

「羨ましいぞチキショー!！」

などと辺り一面から失墜委員会の殺気の籠った視線が二人に向けられる。

「20:40。時間だな。いくぞ同士よ!！」

「」「よっしゃあああああ!！」」「」

そこで凧は気付いた。

「おいちよつと待てお前らまさか…」

「ふん。気づいたか裏切り者。同士よ!！我々の目的は女子!！その中でも特筆すべき存在は誰だ!？」

「」「橘あ!！」」「」

「おおおい!！お前ら本気か!？死ぬぞ!！」

「貴様のように橘と仲の良い奴にはわからんのだ!！橘楓がどれ程素晴らしいか!！」

それを聞いて凧は絶句、帝督は諦めているねか俯いている。そして盛り上がる失墜委員会メンバー。

「橘の美脚!！」

「綺麗な髪!！」

「慎ましい胸!!」

本人がいたら殴り飛ばされているであろう単語を連発する女に飢えた野郎ども。

「行くぞおお!!我々の樂園のためにいいいい!!」

「うおおお!!」

こうして拘束された凧と帝督の意向をまったく無視して佐竹を中心とした失墜委員会のメンバー17人は、自らの樂園を垣間見るべく大浴場へと向かった。

(終わった…俺の人生終わった…)

凧の絶望した顔がその全てを物語っていた。

\*

大浴場があるのは地下1階である。

失墜委員会の野郎どもは現在大浴場に通じる1階の階段前に集まっていた。

「ふむ。見張りは佐藤教諭か」

もちろん佐藤教諭は女性である。

「ふん。これはかえって好都合だな。おい、垣根を連れてこい!!」

佐竹の声によつて縛られた帝督が最前線に連れ出される。

「垣根、貴様に任務を言い渡す。」

「ああ？」

「あの佐藤教諭と長話してこい。できるだけ遠くで」

佐藤教諭データ

25歳 独身

現国担当

実は垣根に少し気がある

失墜委員会調べ

「垣根、我々の為に華々しく散れ！！」

ドンッ

縛られた状態の垣根の背中を思いきり蹴飛ばし、階段から転がり落ちる帝督。

「…痛つてえ〜」

「垣根君！？」

いきなり転がり落ちてきた帝督に気がついた佐藤教諭が駆け寄ってくる。

「どうしたんです!?!いきなりこんな状態で落ちてきて」

「いや…、先生、ちょっと話しません?」

「え?いや、でも…」

「いいからいいから」

そう言うと帝督は縛られているのにもここ一番の笑顔を佐藤教諭に決め、完全に佐藤教諭をおとす。

それを階段上から見ていた失墜委員会と凧。

「(いつもはその顔が恨めしいが今回はグッジョブだ垣根!!)」

野郎どもは狂喜乱舞の渦にのまれている。

「よし、ここまでの作戦は全て順調だ。次の作戦行くぞ」

そう言うと失墜委員会は楽園へ向けて一段一段階段を降りていく。凧は縄を引きずられながらだが。

「…よし、次の作戦だ」

階段を降り、角を曲がれば大浴場の暖簾のれんがすぐそこにあるところまで漕ぎ着けた失墜委員会。

次の作戦は決まっている。

「一条を連れてこい」

そう言われて自由の利かない凧が佐竹の前へと放り出される。

「一条、貴様には超重要任務を言い渡す」

「マジで御免被りたいんだけど」

「却下だ。貴様に人権はない」

凧の切実な願いも楽園を目の前に理性が崩壊している失墜委員会には届かない。

「時間だ。やれ」

佐竹の命令で失墜委員会二人が凧を抱えて浴場の暖簾の奥へと消えていく。

「一条。我々のために犠牲になれ。ついでに女子から幻滅されるがいい！！」

数十秒後、凧を抱えて突入していった失墜委員会のメンバーが戻ってきた。

「隊長！！裏切り者を置いてきました！！」

「うむ。女子どもの悲鳴が聞こえたら合図だ！！総員準備い！！」



\*\*\*

「マジで洒落になってねえぞあいつら…」

大浴場の脱衣場にポツンと置き去りにされた凧はどうすることもできずにただ頂垂れていた。

現在は全員が入浴中のため脱衣場には誰もいないが入浴を終えた女子たちがこちらに来るのも時間の問題だ。

（こんなの凧にばれたら死ぬ！！確実に死ぬ！！）

冷や汗ダラダラで脱衣場に取り残されている凧。

そこへ ……

「 ……ん？」

何だか浴場の扉の奥から声が聞こえてくる。  
間違いなく女子生徒のものだ。

（ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！）

確実に近づいてくる足音と声。

そして ……

\*\*\*

「キヤアアアアア！！」

「隊長！悲鳴です！！」

「よし！！総員突撃イ！！」

「うおおおおおおお！！！！」

全く無意味な団結力を発揮した失墜委員会の面々は勢いよく暖簾をくぐりその先に待っているであろう楽園へと向かっていった。

しかし、

「は？」

「え？」

「！？」

「どうなってる！？」

「ばかな！！」

突撃した失墜委員会の面々から絶望の声が漏れる。

彼らの目の前にいたのは、既に着替え終わっていたA、Bクラスの女子が関節をボキボキ鳴らしてこちらを睨み付けている光景だった。

「あり得ない！！何故だ！！」

隊長佐竹が血の涙を流しながら叫ぶ。

「まったく、アンタらには1度地獄を見てもらわないとならないよね」

Aクラスの女子が失墜委員会へ詰め寄る。

「一条はどこに消えたんだ!？」

いるはずの凧がないことに気付いた佐竹が周りを見回す。

「凧にいないぜ」

凧が女子の後ろから出てきた。

「な!?! 貴様何故生きている!?!」

「いやー…、最初にでてきたのが凧で助かった」

時は5分程遡る ……

(ヤバイヤバイヤバイ!!)

ガラッ

そこから現れたのはタオル一枚巻いただけの凧だった。

「…」

「…」

流れる沈黙。

凧はこの瞬間死を覚悟したのだが、凧の反応は凧の予想とは違ったものだった。

「…なにしてんの」

縛られた状態で絶望していた凧に楓が問いかける。

「…察してくれ」

最早泣きそうな凧に楓は近づき縄をほどいた。

「まあ凧が覗きみたいなことする度胸なんかないわよね」

呆れたように言いながら縄をほどいていく楓。

凧は事のいきさつを楓に話し、楓はそれを女子の皆に話すことで凧について誤解がないようにしてくれた。

その時の女子の反応が

「一条くんなら見られても良かったのに」

みたいな雰囲気になっていたことは失墜委員会の奴らには死んでも言えない。

というわけで女子の協力を得られた凧は失墜委員会に復讐すべく、女子にわざと悲鳴をあげてもらいまんまと奴らを誘き寄せることに成功したわけである

そして時間を元に戻す ……

「貴様あああ！！我々の夢を奪うなあああ！！」

「知るか。お前らの夢に俺を巻き込むなっつ」

絶叫する野郎どもの叫びになど耳を貸さず、凧はひと足先に脱衣場から脱出した。

そのわずか数秒後、野郎どもの断末魔がホテル全体に響き渡った。

「にしても凧のやつキレたり優しかったりなんなんだ？」

佐藤教諭と別れた帝督と部屋に戻るために階段を上がりながら呟いた。

帝督は佐藤教諭の相手に疲れたのか何も言わずに階段を上がり続けている。

時刻はそろそろ午後9時。おそらく失墜委員会が血の海に沈んでいるであろう浴場に行くのは気が引けるが嫌な汗を流すためには仕方ない。

そんなことを考えながら凧は部屋のドアを開けた。

長かった1日が終わりを迎える。

**幕間 男の楽園と犠牲（後書き）**

次回

1日目の楓サイドを少しやります。

（ホテルの楽園の話からですが）

意見・感想・要望

いつでもお待ちしております。

幕間 もう1つの夜（前書き）

はい

前回の幕間の楓視点になります。

全く中身のない文章です…；

ぐだぐだ感が否めませんが目を瞑っていただけると幸いです。

## 幕間 もう1つの夜

「まったく何なのよ女子寮って！！風は何しにイギリスまで来てるのよー！！」

時刻は午後18：50ほど。

集合時刻を過ぎても一向にホテルに現れない風たち4人に何かあったのではないかと心配して電話をかけてみれば返ってきた言葉が「女子寮」ときたものだから楓の怒りが収まらない。

現在はホテルの広間で学年全員が夕食を食べている。当然のことながら件の4人はいないのだが。

「まーまー楓。一条くんにも色々と事情があったんじゃないの？」

見かねてフォローを入れてきたのは楓の隣に座っている親友の未来だ。

「どーだか！！」

相当ご立腹なのか噛んでいる割り箸をそのまま噛み砕いてしまいそうな勢いだ。

「一条くんがそんな甲斐性のないことするわけないじゃない」

「！……それはまあ、そうかもしれないけどさ……」



割り箸を加えながら俯く楓。ようは心配なのだろう。超鈍感野郎が他の女とくつついてしまわないかが。

（楓もその頑固な性格治せば上手くいくと思うんだけどねー）

未来はそんな絵空事を思い描くのだが、人間の性格などそんな簡単に変えられるはずもなく、その結果が二人とも意識してはいるのにそこから進展がない何とも焦れたい状況を作り出してしまっているのだ。

「許してやんなよ。器が大きいほうが女として成功するわよ」

「それは風には当てはまらないのよ」

ハア…と深く溜め息をつく楓を見て相当苦労してるんだなと思う未来。

実際風と楓は部屋がお隣というだけでなく小さいころから面識があるため恋愛感情以前に友達としての感情があるためお互いにその壁を越えられないでいる。

唯一越えられたと言うのならは大覇星祭1日目の夜の一件だろう。あの時は何故かうまくいつていた。未来はそれをしっかり目撃している。

「楓も素直じゃないからな」

「な、何よいきなり」

ジーンと見られていたことに気付いた楓が若干たじろぐ。

「ホントにいつか一条くん取られちゃうわよー？」

「な、なな何でそんな話になるのよー!!」

「危機感無いみたいだから言うけど一条くん相当人気あるのよ？」

ズイッ

と未来が楓に迫る。

「アンタもアンタで人気あるんだからもっと自覚持ちなさいよ」

「うっ…」

顔を赤くして言葉に詰まる楓。

この表情を楓ファンが見ていたら卒倒ものだろう。

「修学旅行なんてチャンスじゃない。この機を逃す手はないわよ？」

「…まあ確かにそうだけどさ。何か言いづらいのよね…」

人差し指をツンツンしながら俯いて小声で呟く楓。

彼女自身もこんな焦れたい関係は望ましくないため出来ることならばハッキリさせたいのだ。

「ま、この話は寝る前にでもしましょ。そろそろ入浴の準備しないといけないし」

そう言っただけで席を立つ未来。

「そ、そうね。後で…じっくり…」

それに楓も続いた。

「あ、でもその前に」

何か思い出したかのように楓は進行方向を変え、まだ食事中だったクラスメートの佐竹のもとへと向かう。

「佐竹くん」

「ん？橋じゃん。どうした？」

「風たちまだ帰ってきてないじゃない？理由聞いてる？」

「いんや。どうせ迷子かなんかじゃねえの？」

「…何かイギリス人の女子寮にいるらしいわよ」

「」「」「いいちいじょおおおおおお！！」「」「」

佐竹だけでなく周囲にいたAクラスの男子ほぼ全員の絶叫がこだまする。

それを確認した楓は未来のところへと戻っていく。

「…何言ったの？」

「当然の報いってやつよ」

何だか機嫌がよくなっている楓を見て首を傾げる未来だったがすぐにあの野郎どもを見て結論に辿り着いた。

「……一条くん生きてるといいわね」

「死んだら死んだよ」

そう言っつて二人は広間を後にした。

時間は過ぎて現在午後8時40分過ぎ。

楓と未来を含むAクラスとBクラスは現在大浴場で入浴中だ。

先程の八つ当たりで多少はスッキリしたのか楓は上機嫌で湯に浸かっている。

「それにしても広いわねこの浴場」

未来が周りを見回しながら言う。

天然の温泉をひいているのかは分からないがライオンの口からは絶えることなく湯が流れ出しており、浴槽は全部で4つ。いずれも広さは大人30人は余裕で入れるのではないかという位に広い。

それもそのはず、この大浴場はホテルの地下1階をまるまる全て利用してつくられているからだ。

そんな豪華な湯に浸かっている楓と未来は、尻や帝督が窮地に立たされているということなど知る由もない。

「そついえば未来つて誰か狙つてるの？」

そういえば未来のそういう話は全然聞かないなと思った楓が未来に言う。

「あれ？言ってなかったっけ。私削板くん推し」

「…え？」

まさかの解答に目を丸くさせる楓。

「ほら私熱血系が大好きだからさ。超ストライクなんだよね」

そう言いながら恍惚の表情を浮かべる未来。

（知らなかった…。未来ってそっち系がタイプだったんだ…）

「で？私のことなんてどーでもいいのよ。楓はどーするの？」

「どーするって…。どうしようも（ブク）ないじゃ（ブク）ない」

ブクブクと鼻から下を湯船に沈めながら話す楓。湯気でよく見えな  
いがおそらく顔は真っ赤だろう。

「うん…。とりあえず一条くんに優しくしてみたら？デレも必要  
よ」

「優しく…ねえ」

自分が素直になれていないのには自覚があるため頭では理解できる  
のだが、

「それができれば苦労してないわよ…」

如何せん本人の前ではうまく素直になれない。

「そうねえ…。あ、じゃあとりあえず一条くんに会ったら抱きついたりときなさい」

「ぶはっ!?!?」

楓がいきなりの発言で盛大に湯船の中で吹き出す音。

「な、ななな何を…!!」

「それくらいやないとアンタいつまでたってもこのままよ?」

「う…」

それを言われると何も言い返せなくなってしまつ楓。

「…もう出る」

追い詰められた結果楓が導きだした結論は逃走だった。

1人先に湯船から出て脱衣場へと向かっていく楓を湯船の中から見届ける未来。

「いつになったら進展するのやら」

呆れた調子で言うのだった。

「素直になるのが大事なのは私だって分かってるわよ……」

ブツブツいいながら脱衣場への扉を何の気なしに開く。

「……」

「……」

目の前には何故か全身縛られた状態で座っている凧がいた。

(…はい?)

突然のことでパニックになりかけるがそこでふと先程自分が行なったこと(八つ当たり)を思い出した。

一応念のために聞いている。

「…なにしてんの」

「…察してくれ」

案の定奴ら(失墜委員会)の仕業だった。

はぁ

と溜め息ひとつをついて凧は凧の元へと向かう。もちろんちゃんと着替えてからだが。

縛られていた縄を外していくと凧は驚いているのか目を丸くしてこ

ちらを見ていた。

（素直…ね）

「まあ凧が覗きみたいなことする度胸なんかないわよね」

……そしてあの惨劇がやってくるわけである。

失墜委員会のその後はとても文章で表現できるものではない為ここでは割愛しておく。

こうしてどたばたした修学旅行1日目もようやく終わりを迎える



幕間 もう1つの夜（後書き）

次回

2日目すっ飛ばして

3日目になります；

第26話 宮殿と記者会見と謎の女性（前書き）

PV2000000

ユニーク200000

を突破しました！！

皆さんいつもこの小説を読んでくださってありがとうございますm

（一一）m

感想など頂けるとものすごく嬉しいです。

これからもどうぞよろしく願います…！！

## 第26話 宮殿と記者会見と謎の女性

1日目に様々な惨状に巻き込まれた凧たち4人であったが、翌日の2日目は特にこれといったアクシデントに見舞われることもなく無事に終了することができた。

ちなみに、

1日目でやらかしてくれたAクラスの失墜委員会の面々はその後A、Bクラスの女子たちの手によって目も当てられないような状態になり、さらにその後最早修羅どころでは済まない顔をして出迎えた担任、澤ちゃんによって徹夜で説教をくらい2日目はずーっとホテルのロビーで横一列に正座して並ぶという晒し刑に処された。

そんなこんなで3日目である。

3泊4日のこの修学旅行において1番の目玉であろう場所へ向かう今日は、初日のように個人の自由行動ではなく、クラス単位でバスで行動する。

時刻はAM08:40

そんなバスの車内。

「よし全員乗ったなー？出発するぞー」

澤ちゃんこと担任の澤村先生が点呼をとり、バスはゆっくりと目的地にむかって走り出す。

「今日はあそこだろ？」

隣に座っている帝督が話しかけてくる。

「ああ。やっぱりイギリス来たんならここは行かないとダメだろ」

帝督に答える凧。

余談だが、座席は凧と帝督、その向かいが一方通行と軍覇。そして凧たちの後ろに楓と未来である。

「そろそろ着くぞ、みんな降りる準備しろよ」

まだバスに乗って20分もたっていないが、目的地に近づいてきた為澤ちゃんが声をかける。

やがてバスの窓からもその目的地を目視できるようになる。

「……お……」

クラスの中で感嘆の声が洩れる。

現れたのは豪華な宮殿。ただし、初日に一方通行と軍覇が行ったウエストミンスター宮殿ではない。

「すっげえ」

「観光客もたくさんいるなあ」

帝督と凧はその建物や周囲に集まる観光客に目を向けていた。観光客たちの目的、

それは

バッキンガム宮殿だ。

## バッキンガム宮殿

英国王室歴代の住居。壮大な建物、広々とした中庭、制服姿の近衛兵が微動だにせず直立している様子はもはやおなじみの光景と言えるだろう。

金色のレリーフが飾られた鉄門の前には観光客たちの姿も多い。

18世紀にバッキンガム公私邸として建設され、1837年のヴィクトリア女王の即位と共に王室の宮殿となった文化財である。

バスが停車し、ぞろぞろと降りる生徒たち。凧たちもその波にのってバッキンガム宮殿の目の前に立つ。

「目の前で見ると迫力あるなあ〜」

「確かにでかいよなあ」

「ウエストミンスター宮殿とはまた違った雰囲気だよなあ」

「こっちもすげー!!」

それぞれが微妙に違った感想を述べているがそこは感性の違いということで片付けておくことにする。

それにしても観光客の数が異様に多い。

というか観光客だけでなく明らかに現地の人間も多く、挙げ句の果てにはテレビ局らしき車やカメラを抱えるカメラマンの姿まで見受けられる。

凧たち、というか長点上機学園の生徒たちは何故こんなに多くの人が集まっているのか知らない。

事情を唯一知っているのは担任の澤ちゃんだけだ。

「なあ澤ちゃん、なんだよこの人ばかり」

帝督がバスの横にもたれて見ていた澤ちゃんへと質問する。

「これはまあ記者会見みたいなものだ」

「記者会見？」

「今から約1ヶ月後の11月11日の休戦記念日に関する記者会見だ」

「どついう事だよ」

帝督が意味がわからないといった口ぶりで首傾げる。

「休戦記念日ってのは第二次世界対戦のことだ。日本じゃ8月にやるがこつちじゃ11月にやるんだよ」

「てゆーかもしかしてこんなもん見るためにバッキンガム宮殿に来たのか…？」

風がバッキンガム宮殿の周りに集まっている山のような人ばかりを見てげんなりしながら言う。

「何言ってるんだよ一条〜！！イギリスの女王と王女を生で見られるなんてそうそうできる経験じゃないぞ〜？」

「女王！？？」

「王女！？？」

女王という単語に反応したのは風で、王女という単語に反応したのは帝督である。

「ああ、この記者会見には直接女王と王女がでてくるんだよ。だが

「こんな人が多いし…SPの数も相応だ」

「そう言われて人だかりをよく見てみれば明らかに一般人からは浮いた黒いスーツの屈強そうな男たちがそこかしこに散らばっていた。」

「女王ねえ…」

（一体どんな人なんだろうな）

「凧がふとそんなことを考えていると、不意に目の前を1人の女性が横切り、何故か立ち止まった。」

「？」

「不思議に思っただけでその女性を見ているとその女性は振り向いて何故かこちらにやってくる。」

「…アナタ学園都市の人間？」

「いきなりそんなことを聞かれて驚いたが、よくよく聞けば日本語だった。」

「そうだけど…日本人？」

「肩口まである不自然なほどに黒い黒髪、豪奢だが派手ではないワンピースとブラウス、そして左目には片眼鏡といった服装のおそらく30代前半であろうかという綺麗な女性。」

「いいえ、私はイギリス人よ」

「…そんな髪の毛黒いの？」

「これは染めてるから」

冷徹そうな見た目とは裏腹になかなか話しやすい感じの女性だった。

「アナタも記者会見を見に来たの？」

「まあ、成り行きだけだね。女王とか見られる機会なんて日本じゃ滅多にないし」

そんなことを言いながら凧は今の時間を確認しようとポケットから携帯を取り出す。

（どうせならバッキンガム宮殿でも撮っておくかな）

そう思った凧は携帯をカメラモードに設定し、レンズをバッキンガム宮殿のほうへと向ける

……はずがいつのまにやら黒髪の女性がフレーム内にスッポリと収まっている。

「…なにをしているんでせうか？」

「写真、撮るんじゃないのかしら？」

「いや撮るけど…！何でアナタまで枠にスッポリ入っちゃってんだよ…！バッキンガム宮殿がちょっとしか見えないじゃん…！」

「あら、私が邪魔だとしてもいづのかしら」

全くもってその通りですと言い放ちたいところだが相手は目上の人間。一応相手をたてようとここは黙っておく。

「…そうね」



黒髪の女性が何か思いついたかのように風に近づき、その手から携帯を奪いとった。

「ちよつ、なにを……」

「いいから動かないでちよつだい」

黒髪の女性は携帯を斜め上に掲げレンズをこちらに向ける。身体をくつつけてきているあたりどうやら2ショット写真を撮るつもりらしい。

(もついきなりすぎてついていけない……)

そんな諦めの表情を浮かべている風とは裏腹に隣で風の肩にちよつんと頭をのせている彼女はなにやらものすごい良い笑顔だ。なんだか貴族の写真でも撮るときのような。

カシャツ

携帯から撮影したことを知らせる電子音が鳴り、彼女は撮った写真を確認する。

「まあ携帯のカメラなんてこんなものでしょうね」

ちなみに風の使っている携帯は学園都市製のもので画素数は2000万ほどあるのだがそれでも彼女は満足していなかったらしい。

「ところでアナタは誰なんですか？」

今更ながらの質問を何故か敬語で言ってしまう風。

「…うん、そうね。とりあえず普通は男から名乗るものではなくて？」

「……一条凧です」

「そう、凧ね。いいわ、アナタのこと気に入ったし特別に教えてあげるわ。」

なんだかものすごい上から目線なのが気になるのだが彼女の性格らしいので触れないでおこう。

「リメエアよ」

「リメエアか、よろしくな」

「フフ…、そんなに気安く私の名前を呼べるなんてイギリスでも数人よ？」

クスクスと上品に笑うリメエアに？マークを浮かべる凧。

「…あら、もう行かなくてはならないわね」

「どこ行くんだ？」

「逃げるのよ」

「は？」

突拍子もない発言に呆けた声が出てしまった。

「詳しいことはそのうちわかるわ。それじゃあね凧」

それだけ言つてリメエアはバツキングム宮殿とは反対の方向へと歩いてどこかへ消えてしまった。

凧はもう1度先程撮影した写真を見る。

そこには間抜けな顔をした凧とそれに寄り添うようにして並ぶ上品な笑顔のリメエアが写っていた。

第26話 宮殿と記者会見と謎の女性（後書き）

皆さんお分かりの通り彼女です。

第27話 女王と騎士団長と拐われた王女（前書き）

修学旅行編の山場に入ります。

それといろいろ解説が必要な場面があるので後書きで解説します。

## 第27話 女王と騎士団長と拐われた王女

わけが解らないまま黒髪のイギリス人と2ショット写真を撮ってから凡そ30分後、バッキンガム宮殿の周囲に集まっていた人間たちが騒がしくなる。

どうやらそろそろ始まるみたいだ。

正直こういったイベントには余り興味がない4人はバスの側面にもたれ掛かって遠目にバッキンガム宮殿を眺めていた。

「王女ってどんな人なのかな。やっぱりお姫様みたいな感じか!」  
「?」

凧の右隣でなんだかニヤニヤしながら勝手な妄想を始めているのはご存知、垣根帝督だ。

「ボンツキュツボンがいいぞ俺は!!」

全く違う方向に話を持って行ってるのは削板軍覇だ。

「つーかこんなモン見たって何にもならねーよ」

本当に興味がないためバスの車内に戻ろうとしているのが一方通行。

「…さっきの人何者だったんだ?」

凧はこれから始まる記者会見よりも先程の女性が気になっていた。

「お？何だ女か風」

「いやそういんじゃないから。違うからそんなに目を輝かせるんじゃないねえ」

キラキラしながらこちらに迫ってくる帝督を軽く受け流し、いよいよ始まるであろう記者会見を見るためバッキンガム宮殿のほうへと視線を移した。

バッキンガム宮殿内の庭に設置された記者会見用のエリアに、何人かの鎧を着た兵士が先頭に立ち、その後ろから女王らしき女性が緑色のジャージにサンダルという格好で宮殿から出てきた。

……ジャージ？

ババツ！！

女王の後ろにいたスーツ姿の男性が女王の首根っこを掴んで猛ダッシュで宮殿内へと入っていく。

「…今の女王？」

「帝督…俺に聞くなよ」

あんなジャージ姿のおばさんが歴史と伝統ある英国王室の現女王であるとは信じられないが。

そんなことを風が思っていると何やら周囲に設置された拡声器から

怒声が聞こえてきた。どうやらピンマイクがオンになっているらしい。

『ぬぐお！？何するんだ貴様！！』

『謝罪ならしますがその前に言わせて下さい。　　テメエ公務だつ

つってんにジャージで登場してんじゃねえよボケ馬鹿コラ！！』

「……………」

「……………」

流れてくる会話に言葉を失う風と帝督。周囲にいる観光客や身辺警護のSPも啞然としている。

『いいから女王らしく！！　　いやいいです。意外なキャラクターとか誰も求めてませんから無理にサーフボードとか持ち出さないで下さい！！』

一体どんな格好で登場しようとしてんだあのおばさんは。などと思う風を置いて会話は尚も続く。

『…は？　　いやカメラうけとか狙わなくていいですからッ！！』

ちよつと待て何処に行くつもりだその頭のゴーグルを外せエエ  
エエエエエエ！！』

ブツンッ

ピンマイクが壊れたかオフになったか、拡声器から会話が聞こえてくることはなくなった。　　数分後、ドレスを着た女王と後ろでゼーゼー言っているスーツ姿の男性が宮殿内から出てきた。



女王は用意されたステージに上がり、周囲に集まった人達に軽く目礼した後、言をつむぎ始める。

「なあやっぱり意外なキャラ…」「女王！！」…むう」

釘を刺され少々不機嫌になる女王だがようやくまともな事を喋り始めた。

「皆の衆よく集まった。エリザードだ。今日集まってもらったのは他でもない、今から丁度一ヶ月後である11月11日の休戦記念日に行うパレードについてだ」

休戦記念日である11月11日、女王であるエリザードと王女は紙のポピーを胸につけロンドン中を馬車で回る。

今日はその概要についての記者会見だ。

「昨年は私と次女のキャーリサが回ったが、今年はヴィリアンと共回る」

「ヴィリアン？」

「イギリス王室には3人の王女がいてな。去年は次女のキャーリサ様だったが今年は三女のヴィリアン様が回るんだ」

凧の質問に答える担任澤ちゃん。様付けかよ。

「それでは登場してもらおう。ヴィリアン」

エリザードがそう言うのと宮殿から絵本に出てくるお姫様みたいな女性が出てきた。彼女が三女、“人徳”のヴィリアン。

「~~~~~っ!」

帝督の眼の色が一瞬で変わる。完全にロックオンした時の眼だ。

「おい帝督……」

「やっべえお姫様じゃん!」

「……聞いているか?」「めっちゃ可愛い!お姫様ちよー可愛い!」

「……(はぁ)」

駄目だこりゃ。

完全にトリップしている。

「ヴィリアン、挨拶しな」

「……ヴィリアンと申します。今年は……私が回らせていただく事となりました。どうぞよろしくお願いします……」

「健気!完璧だこれ!」

「うるさい帝督」

バッキンガム宮殿周囲に集まった人達は女王や王女の周りに集中し  
ごった返している。

「今日これからどうするんだっけ？」

澤ちゃんに聞く風。

「あん？今日はこれ見たらホテル帰るんだよ」

「は!?!？」

「馬鹿だな一条、女王や王女が見られたんだぞ？もう満足じゃないか。とゆーか移動とか面倒くさいし」

「このダメ教師!?!」

見ればバスの車内には一方通行を含め何人かの記者会見に興味の無い生徒が乗り込んでいる。帰る気まんまん。

「…じゃあ自由行動とか有り？」

「お前ら自由にしたら何が起きるか分かったもんじゃないから無し」

「澤ちゃん俺も自由行動がいい!?!」

帝督も挙手して会話に入ってくる。

「尚更却下」

「俺は!?!?」

後ろから軍覇も混ざってくる。

「いい加減にしろ、自由行動なんてダメだったの」

「けち」

「分からず屋!」

「…(だから結婚できなんだよ)」

「帝督ちよつとこい」

無表情でガシツと帝督の頭を鷲掴みにしてバスの反対側へと引きずられていく帝督。

ズルズルズル… 帝督が引きずられていく音

「ぎにゃあああああああああ!」

スタスタ 澤ちゃんが歩いてくる音

ベチャツ 原型を留めていない帝督が路面に投げられる音。

「……他に異論があるやつは?」

ニツコリと笑う澤ちゃんの身体からはどす黒いオーラが漂っている。

「いやないです」

これ以上澤ちゃんの地雷を踏めば帝督のようにぐちゃぐちゃのげちよんげちよんになってしまうと直感した為二人は首を高速で横に振ってやり過ぐす。

その後普通の表情に戻った澤ちゃんがバスの車内に戻り、凧たち3人（1名はスライム状）も渋々バスに戻るうとドアの手すりに手をかけた瞬間、唐突にそれはやって来た。

ヒュッ

ポウンッ！！

空から何かが降ってきたかと思うも束の間、一瞬で辺りが白煙に包まれる。

「何だ！？」

「これは…煙幕か！？」

「何も見えーん！！」

バッキンガム宮殿全体をスッポリ覆い隠してしまう程の量の煙幕が周囲に漂う。

「これ明らかに異常だよな……」

「っばいな。なんだか宮殿の敷地内も騒がしいし」

凧と帝督はそれだけ言うとバッキンガム宮殿へと走っていく。取り残された軍覇は未だに状況が理解できていなかった。

\*

「一刻も早くこの煙幕を除去しろ!!」

「身辺警護兵は回りを囲め!!」

「注意を怠るなよ!!」

様々な怒号が飛び交う中を風と帝督は走っていく。未だに視界は煙に覆われていてよく見えないが、それでも先程よりは幾分かマシになっていった。

「ここまで来たはいいけどどうすんだ？」

「……全く考えてなかった……」

帝督の問いにしまったといった表情で答える風。

「あら、どうして風がここにいるのかしら」

突然掛けられた言葉に反応して振り返ってみるとつい先程写真を一緒に撮った女性、リメエアが立っていた。

「リメエア。なんでここに？」

「何故って住居だもの」

「？」

頭を傾げる風をよそに、リメエアはだいぶ煙幕も除去されて視界の良くなってきた敷地内を歩いていく。

「ついてきなさい」

言われるがままにリメエアの後ろをついていく風と帝督。

彼女が歩いていく先には、女王とスーツ姿の男性、その周囲を鎧姿の兵士たちが集まって何か話し合っているところに出くわした。

「母上」

「おおリメエアか。……後ろにいる日本人は誰だ？」

（母上 ……？）

「！！！」

やっとのことでリメエアがどういう存在なのかを理解した風。つい声が出てしまう。

「王女おお！？」

「あら、今頃気がついたの？」

クスクスと笑うリメエアに対して硬直する風と帝督。  
風に至っては写真を撮ったのが王女であると理解した途端に手が震えている。

「何があつたのです？」

リメエアが話を切り出す。

「リメエア様、この話を騎士派以外の人間、ましてやこのような日本人に聞かれては……」

「構いません。それに彼らはきつと力になってくれるはずでしょう」

スーツ姿の男性がリメエアに言うが彼女は全く気にせず話を続ける。

「うむ。まあ先日のもあるし日本人ならばよからう」

エリザードが言うと軽く手を上げ合図を送り周囲にいた鎧姿の兵士たちを排除する。残ったのは女王にスーツ姿の男性、リメエアに風、帝督の5人だ。

「とりあえずその二人、名前を聞こうか」

「学園都市から来た一条風です」

「同じく垣根帝督です」

女王に訪ねられ答える風と帝督。女王には先程までのおちやらかな雰囲気など微塵もない。

「ほお、学園都市からねえ。あの少年と同じじゃないか」

ニヤリと笑う女王エリザード。見ればスーツ姿の男性やリメエアもクスクスと笑っていた。

「学園都市の人間ならば信用に足るだろう。話を進めるぞ」

エリザードが話を始めた。

「端的に言うとヴィリアンが拐われた」



「王女の誘拐!？」

「もちろん大事にするわけにもいかんから先程までいた記者やテレビ局には色々と操作をしているから一般人に知れることはないだろうが……、やられたな」

忌々しそくに唇を噛むエリザード。

「カーテナニセカンドも今や破壊され好機と見たんでしようね」

「ただでさえ Buckingham 宮殿には魔術的な防壁が用意されていないというのに」

エリザードの言葉にスーツ姿の男性とリメエアが続ける。

「どうするんです、女王」

「貴様はどう思うナイトリーダー騎士団長」

「とりあえずはヴィリアン様の救出が最優先です。騎士派を総動員して搜索しましょう」

「ロンドンにいるとは限らないのではないかしら」

「その可能性もあります。ですから範囲はイギリス国内、清教派にも協力を要請しましょう」

「あの馬鹿に頼み事なんぞしたくはないがなあ……」

「そんなことを言っている場合ではないでしょう」

「仕方ない。搜索については貴様とキャーリサに一任する。敵がど

んな奴らが解らん以上迂闊な真似はするなよ」

「ハッ」

そう言つて騎士団長ナイトリーダーと呼ばれる男性はバッキンガム宮殿内へと消えていった。

「でリメエア、お前はこいつらをどうするつもりだ」

エリザードに指差される凧たち。

「この事を知つた以上は働いてもらつたよ」

「そのガキどもにそんな力があるとは思えないんだが、お前たちは能力者かい？」

「俺は超能力者です」

「凧と同じく超能力者」

「ふむ、あの学園都市に7人しかいない超能力者か。そこらの兵士よりはよっぽど使えるね」

「でしよつ？」

エリザードとリメエアが笑う。

「それならその茶髪、お前はここに残つてリメエアや宮殿の防衛に当たつてもらつたよ」

指差される帝督。

「それからそっちの、お前は騎士団長と一緒にヴィリアンを探してくれ」

「わかりました」

言われて答える凧。

「私はあの馬鹿の所へ行くからな。リメエア、後のことは任せるぞ」

「宮殿でゆっくりと紅茶でも飲みながらやりましょうか」

凧と帝督は拐われたヴィリアンを救出すべく、科学とは正反対の街ロンドンで再び魔術と交わる。

## 第27話 女王と騎士団長と拐われた王女（後書き）

この小説でもキャラクターリサが起こした反乱『ブリテン・ザ・ハロウィン』は起きています。

しかし、都合上10月18日に起きていたこれを10月11日以前に変更しました。

クーデターが終わっていないとイギリスに修学旅行なんていけませんしねWW

なのでカーテナ＝セカンドは破壊され、もともと魔術的な防壁が用意されていないバツキングダム宮殿でヴィリアンが拐われるということになりました。

第28話 使徒の道と成りし者（前書き）

はい、イギリスロンドンを駆け巡るわけですが地名やらを調べるのが大変です……

そんな事はさておいて第28話をどうぞ。

## 第28話 使徒の道と成りし者

イギリス王室第三王女、ヴェリアンが拐われた。

一般人には伝わらぬよう騎士派や王室派が情報操作や規制をしたため無闇に混乱を招くことは無かったが、バッキンガム宮殿内では慌ただしく兵士たちが走り回り、ヴェリアンの搜索が全力で行われていた。

「煙幕が投げられた方角は!!」

「人払いのルーンは使用されていたのか!?!」

「搜索範囲を5km拡大しろ!!」

「清教派との合流地点を3箇所追加だ!!」

「すげえな、これみんな騎士派っていう組織なのか」

「いやそれは違うぞ一条君」

あまりの人数の多さに驚愕している尻に騎士団長は言う。  
ナイトリーダー

「我々はイギリス王国を守るための組織だが皆騎士派というわけではない。王室派の人間もちらほらいるさ」

会議室のような部屋に凧や騎士団長を含めた10人程が中央の机に地図を広げ集まっている。

その地図を指差して騎士団長は指示を出す。

「我々がヴェリアン様救出の主体だ。故に失敗は許されない、まず

ここでイギリス清教の人間たちと合流する」

騎士団長がバッキンガム宮殿からロンドン郊外の地点へと指を這わせる。

「捜索班の情報によるとヴィリアン様はこの地点から半径34km以内にいるはずだ」

「34kmって……」

直径70km程を捜索しなくてはならないのかと思えばなりする尻に騎士団長は言う。

「いや、実際には身を隠せる施設というのは限られてくる。王女を手元に置いているというならばそれは尚更だ」

「あ、なるほどね」

「ではまず我々は清教派と合流する。いくぞ」

騎士団長が先頭に立ち、尻を含む10人程が後に続く。王女奪還作戦が始まる。

\*

「紅茶をもらえるかしら」

イギリス王室第一王女、リメエアは今バッキンガム宮殿の一室で優雅にティータイムを満喫していた。

「何で俺が召使いみたいになってるわけ？」

半ば強引に執事のような事をさせられリメエアに紅茶を手渡す帝督。彼は騎士派とともにリメエアやバッキンガム宮殿を護衛するためここに残っているのだが、現在部屋には帝督とリメエアの二人しかおらず、必然的に帝督がそのような役回りをさせられることとなる。

「こんな事なら凧と一緒に行きたかった……」

「何か言ったかしら？」

「いえ何にも」

ファンが見たら卒倒もののスマイルを向けて言う帝督。  
その後リメエアに聞こえないように小さく溜め息をはいた。

\*\*\*

「凧と垣根がない！！」

Aクラスのバスの車内。そう叫んだのは凧だ。本来なら前の座席にいる筈の二人がいない。周囲を見渡しても見当たらないことからま



た勝手に動き回っているのだろうと想像する楓だが、一方通行と軍  
覇がここにいるのが気にかかる。自由行動しているのなら一方通行  
たちも出回っている筈だ。それが二人だけがいなくなると何か事  
情でもあるのだろうか。

「ねえ削板、 凧たちどこに行ったの？」

「凧たちか？ いや分からんなあ、 煙が晴れたときには近くにいな  
ったし」

やはり先程の煙幕。

あれは予め用意されていたものではなく突如発生させられたもの  
だったのだ。

周囲の人間たちはいつの間にかいなくなっていたし、もしかしたら  
事件が起きているのかもしれない。

「凧……」

勝手に何処かに行ってしまうのはいつものことだが今回の件はい  
つもと違つような気がする。

凧は不安を隠しきれずにいた。

\*\*\*

「あそこが清教派との合流地点だ」

ロンドンに建つ古くからの建造物。その屋根のさらに上、空中を移動しながら騎士団長は視線を移す。

合流地点として用意された場所は橋の上だ。この距離からでは誰がいるのかわからないがおそらく10〜15人程の人影が見える。

ちなみに風は空気中の水分子を凝結させて足場を造り走っている。騎士団長やその他は屋根から屋根へ飛び移るようにして移動している。

タンツ

と軽い着地音をたてて騎士団長が橋の上に着地する。それに続いて風や他の騎士派も順に橋に着地していく。

「協力感謝するよ」

「いえ、イギリスのためですから」

騎士団長と話している女性を見て風は目を丸くした。絞られたシャツの裾、根元からカットされた左足のジーンズ。そして二メートル以上ある刀。

「神裂い!?!」

「!!! アナタは!!!」

「何だ、二人は知り合いだったのか」

お互いに身体を硬直させる様子を見て騎士団長が言う。

「いや知り合いっちゃあ知り合いだけど」

「アナタがここにいるということは……こちらの世界に足を踏み入れたということですか？」

「んー、ある程度は騎士団長から聞いた」

こちらに移動している際、凧は騎士団長から超能力とは違うベクトルで使用される魔術というものの存在を聞かされた。

初めは信じられなかった凧だったが、実際目の前に存在している魔術師なるものがある以上信じるほかない。とゆうか超能力があるんだから魔術だってありそうだよな、とすぐに納得してしまった。

「神裂も魔術師だったんだな」

「彼女はロンドンで十指に入る実力者だよ」

「あれだけ私を叩きのめしておいてよくそんな事が言えますねえ？」  
心なしか神裂の表情が強ばっているような気がする。

「まあこの話は今は置いておこう。今優先すべきはヴィリアン様の救出と敵魔術師の殲滅だ」

騎士団長が集まった魔術師や騎士派に向かい指示を飛ばす。

「情報収集班によれば敵は元イギリス清教所属で今は流れの魔術師、首謀者の名はボードン＝シェイカー。居場所は今の所5箇所程にまで絞れている、ここを手分けして当たるぞ」

騎士団長は素早く人員を5班に分け、ボードン<sup>II</sup>シェイカーとヴィリアンがいる可能性のある5箇所に振り分けていく。

第1班

騎士団長

騎士派2名

探索箇所：テムズ川北西

第2班

一条 凧

神裂 火織

探索箇所：ユーロスター

第3班

アニーゼ

ルチア

アンジエレネ

探索箇所：エディンバラ

第4班

シエリー<sup>II</sup>クロムウエル

騎士派3名

探索箇所：グリニッジ天文台南東

第5班

騎士派4名

探索箇所：トラファルガー広場周囲2km

「いいか、何かあったらすぐに私がエリザード様に連絡を入れる。」

敵と遭遇した場合は迷わず殲滅せよ」

騎士団長が細身の剣を携えて周囲に言う。

凧は神裂と2人でユーロスターのセント・パンクラス駅へ。

五つに分けられたそれぞれの人間が指定された場所へと散っていった。

\*\*\*\*\*

「どっここにもいないじゃない!!」

バッキンガム宮殿の前を走る通りのど真ん中で天に向かって凧は叫んだ。

アイツ（凧）の携帯も何故か繋がらないし近くにいた気配もない。担任の澤村先生にも何も言わずに忽然と消えてしまった。

「本当になんでアイツは毎日毎日こう行方不明になるのよ……!!」

一方通行と軍覇にも探してもらったが見つけることはできなかった。クラスの皆はやれやれまたかという雰囲気で別段心配している感じはないが凧は何か引つかかっていた。

「大丈夫よ。一条君ならまたふらっと帰ってくるって」

車内に戻っていくと隣の未来が声をかけてくれる。

「ありがとう未来」

いつまでもこの場所にバスを留めておくわけにもいかないのでとりあえず凧と帝督を除く2・Aの面々を乗せたバスはホテルへと向かった。

彼らは凧たちがイギリス全土を巻き込もうとしている大事件に関わっているなどと夢にも思わずに。

\*\*\*\*\*

「あれか」

「ハイ、あれがユーロスターです」

凧と神裂がやって来たのはユーロスターロンドン側、セント・パンクラス駅。

以前のブリテン・ザ・ハロウィンによって大部分の機能を停止しているユーロトンネルだが少しずつ復旧も進みロンドンからフランスまでの一部の路線は運行している。

今凧たちはその入口にやってきていた。

「でもここってまだ進入禁止なんじゃないのか？ほらKEEP OUTって黄色いテープ貼ってあるし」

「運行は開始されていると言ったでしょう。おそらくは敵が攪乱の

為に細工を施したのでしょうか」

「……………てことは」

「ええ、ここに敵がいる可能性は高いです」

凧は両手に力を込め、神裂は“七天七刀”をとる。

「行きますよ」

「おう」

2人は黄色いテープなど無視して駅の内部へと入っていった。

内部は閑散としていて人気は全く無かった。

「本当に運行してんのか？」

「運行はしていますよ。おそらく列車も人が乗っているはずですよ。

しかし先程の進入禁止のテープで一般人は立ち入らないようですね」

「案外単純なんだな人間て」

「大人になればなるほど柔軟な思考というのは出来なくなるものですよからね。」

「なるほど、だから神裂も頭が……………」

「私は18歳ですよ!!」

顔を真っ赤にして怒る神裂。わかったからその刀を顔に突き付けな

いでもらいたい。

「とりあえず誰かいないか探すか」

「……………いえ」

神裂が凧に向けていた七天七刀をゆっくりと改札口の奥へと向ける。

「その必要は無用なようです」

カツン、

と誰もいない通路に音が反響する。

「……………おやおやあ」

凧もこちらに歩いてくる人物を認めて挑発的な笑みを向ける。

「まさかこの場所いきなりビンゴなわけ？」

現れたのは、10代後半くらいのブロンドの髪的青年。

白のYシャツに黒いベスト、黒いスラックスとホストのような雰囲気  
の青年は凧たちを見てニッコリと笑う。

「こんにちわ。まさか“必要悪の教会”ネセザリウスの神裂さんが出向いてくる  
とはね。そちらは……………知らないけど」

「私のことを知っているのですね」

「こっちは軽くスルーですかこんちくしょう」



「アナタは有名ですからねえ。聖人でありロンドンで有数の魔術師、知らない方がおかしいでしょう」

皮肉じみた笑いで神裂に言う。

「アナタ達には残念ですが王女は此処には居ませんよ」

「!?!」

「私は足止めが任務ですから」

パチンツ

と青年が指を鳴らした瞬間、

ズドオオオン!!!

「は!?!」

「なっ!?!」

入口が瓦礫に埋もれた。おそらくは他の出入口も同様に瓦礫によって塞がれているだろう。

「さて、とりあえず自己紹介といきましょうか」

両手を広げ笑みを浮かべた青年が尻たちに言う。

「魔術結社“使徒の道と成りし者”の一員、ヨナスと申します」

そう名乗った青年は次の瞬間には攻撃体勢に移る。

「以後、お見死りおきを」

ユースター内部で魔術師たちの戦闘が始まった。

第28話 使徒の道と成りし者（後書き）

はい、オリジナルです。

一応結末は考えてあるのでスムーズに投稿できるかなあと思います。

感想・意見お気軽にしてくださいm┐┌m

第29話 氷幻鏡（マジックミラー）（前書き）

戦闘描写が下手すぎますがご勘弁ください（-”-…）

後書きにアンケートがあります。

どうかご協力くださいm（-”-）m

## 第29話 氷幻鏡（マジックミラー）

瓦礫によって出入口が封鎖されたユーロスターのセント・パンクラス駅内。

魔術結社“使徒の道と成りし者”のメンバー、ヨナスと凧、神裂は互いに牽制しつつジリジリと距離を詰めていく。

「神裂、アイツ強いのか？」

「今の段階では何とも言えませんが、あの警備の中でヴィリアン様を誘拐したメンバーの一員なのでですから其れなりの使い手と見るのが妥当でしょう」

誰もいない駅の内部に二人の声だけが反響する。

「ナイトリーダー騎士団長に連絡をとれますか？」

「ちよつと待つてくれ、今やつてみる」

凧はポケットから通信用に騎士団長から受け取っていた厚紙のようなモノを取り出して携帯電話のように耳に当てる。

「……ダメだ、通信が出来ない」

「当たり前ですよ」

ヨナスが話割って入ってきた。

「何の下準備もなしに此処にいたわけがないじゃないですか。通信妨害用の魔術を使わせてもらっています」

つまりは彼は用意周到に自分たちを待ち構えていたらしい。  
凧はそう思い戦闘体勢に移行する。

「ん？君、戦えるわけ？どう見ても“こちら”側の人間には見えな  
いんだけどな」

凧の雰囲気の変化に気づいたヨナスが驚いた風に声を上げる。

「人を見かけで判断すると痛い目見るとて教わらなかったか？」

「……ああ、確かに」

ゾワッ！！

とヨナスの周囲の空気が一瞬で変わる。

先程までの落ち着いた雰囲気など微塵も存在せず只凧に対して殺気を  
を隠そうともせず放っている。

（これは……！！）

その殺気を感じ取っていた神裂は危険を感じ取る。

（いけない、彼では奴に勝てない！！）

凧の実力がどれ程のものなのか神裂には解りかねたが、たとえ実力が  
があったとしてもこのヨナスという魔術師には勝てないだろうと想  
像出来てしまう。

ヨナスという男は相当な実力者だ。おそらくステイル辺りとは互角、  
いやそれ以上に渡り合えるだろう。

その事を瞬時に理解した神裂は凧に向かって叫ぶ。

「いけない!!逃げなさい一条!!」

ゆっくり接近してくるヨナスに対し、凧は動かない。神裂は尚も続ける。

「あれはアナタの手に終える相手ではありません!!私の後ろに下がらなさい!!」

「神裂」

彼女の必死の呼びかけに、凧は短く名前を呼んで一歩前に出る。

「一条!?!」

ヨナスに対して距離を詰める凧に驚愕する神裂に凧は只前にいる敵を見据えて言う。

「男が女に守られるなんてあり得ねえ」

「なっ ……!?!」

「いいからそこで見な。俺がやるからさ」

「君が?僕とやるのかい?死ぬよ?」

凧が前に立っただのを見て嘲笑しながら言うヨナス。

「やれるもんならやってみろよ。学園都市をなめるなよ」

ヨナスを見据えて臨戦体勢に移る。

「学園都市、へえ。あの超能力を開発してるっていうあの」

「甘く見てると痛い目みるぜ」

「……そうですね」

ヨナスは右手に細いソードを持ち、風に向かってその刃先を向ける。

「殺しましょう」

低く殺気を込めて、

ヨナスは不気味に言った。

（あれは……騎士団長のフルンティング？いえ、そこまでの細さはない。バスタードソードでしょうか……）

全長170cm程の細身長剣。それを片手で振り回すヨナスを見てやはり尻を闘わせてはいけない、と神裂は思う。

「剣か」

「学園都市では滅多にお目にかかれないのではないですか？」

「まあ学園都市にそんな中世ヨーロッパの剣なんて在るわけないよな」



そんなものは眼中に無いとでも言うように一蹴する。

「……君は今の自分の状況ができていないのかな？」

ビキッ

とこめかみに青筋を浮かべながら言うヨナス。

「ん？解ってるさ。今から俺がお前を倒す、簡単だろ」

「……いいでしょう」

バスタードソードを構え、術式を発動させる。

「神裂なんだアレ？」

「おそらくは様々な術式を混合させているのでしょう。バスタードソードは“雑種”という意味もありますし」

ヨナス持つバスタードソードが切っ先から余すことなく幾重にも違った色の何かがコーティングされていく。

「あれは……複数の属性を合わせていると言ったところでしょう」

「流石は必要悪の教会ネセサリウスの魔術師、よくご存知ですね」

神裂の発言にわざとらしく称賛するヨナス。彼は尚も続ける。

「これは水と風、青と緑の術式を混合させたものですよ」

「水？」

その単語に凧がピクンと反応する。

「お前水使いなのか」

「まあそうですね。風の術式も組み込んではいませんが」

「……へえ」

凧が薄い笑みを浮かべる。彼にとって自分より上の水使いは目の上のたん瘤であり気に入らない存在である。故に、凧は容赦しない。

「フリースタウン完全零下」

凧がそう言葉を発した瞬間、セント・パンクラス駅内は凧を中心に一気に氷の膜に覆われていく。

「……へえ、君はこういう能力チカラを使うのか。氷使いかな？」

自分の周囲を瞬く間に氷の空間へと変貌させた凧を見てヨナスが呟く。

「でもまあ、こんなレベルじゃお話にならないけどね」

ズパンツ！！

ヨナスがバスタードソードを一振り。

水の術式をその刃に宿した長剣の刃は水が高水圧で振動しウォーターカッターのような形状に変化している。

「次は僕の番かな」  
「……………」

ヨナスはバスタードソードの術式を水から風へと変更、刃の周囲に小型の竜巻のような風が集まり形を成す。

「くらえッ!!」

縦に大きく一振り。

それによって刃の周囲に渦巻いていた風が凧に向かい一直線に射出される。

喰らえば勿論ただでは済まない。だが、凧は一步も足を動かさず、右手を向かってくる風に向ける、

パキパキパキ……………」

凧に向かい放たれた風は一瞬で氷の塊と化した。

「な……………!?!」

「風は凍らせないとでも思ってたのか? 風は元々は空気だろ。水分子なんていくらでもある」

「……………どうやらアナタを少々侮っていたようですね……………!!」

「少々じゃねえよ」

パキンッ

「!?!」

異変に気づいたヨナスが自らの足元に目を向ける。見れば地面を覆っている氷が足にまで浸食してきており、身動きが取れない状態に陥っていた。

「フン、この程度で私の動きを封じたつもりですか？」

「そんなわけねえだろ」

こんなもので動きを封じた気かと言うヨナスに対し、凧はくだらなさそうに言い放つ。

「本番はこれからだよ!!」

バツ

と凧は両手を広げて頭上を見上げる。

するとそこから空気中の水分子が凝結し始め、氷と化した細かな結晶は無数の刃となる。

「氷矢の雨がご所望か？」

「くツ!!」

「アイスシャワー氷雨!!」

ザアアアアア!!

凧の頭上で形成された約1000の氷の矢が雨となって斜めに降り

注ぐ。

「混合ッ!!」

降り注ぐ氷矢の雨を回避するべくバスタードソードの術式、水と風を混合させウォーターカッターの周囲を鎌鼬のような風が吹き荒れ足の氷を切り刻んでいく。

「水鎌鼬!!」

ゴアッ!!

ヨナスがバスタードソードを縦に大きく一振りすると風と水が混合された竜巻が形成されて向かってくる氷矢を吹き飛ばしていく。

「この程度で私がやられるとでも?」

「思ってねーよ」

凧は攻撃の手を休めない。氷の矢を降らせると直ぐ様次の行動を開始する。

彼がとった行動は単純明快、そのままヨナスに向かって突っ込んでいく。

「無茶です!!」

神裂が思わず声を荒げる。

「血迷ったか!?!」

ヨナスはそれを苦し紛れの特攻であると判断して嘲るように笑う。

「どこ見てるんだ」

声が聞こえたのは目の前を走ってくる風からではない。  
しかし、確かに今は風の声である。

「ッ!？」

ヨナスは驚いて後ろを振り返る。

「よお」

そこには拳を握りしめる風の姿。

「何故!? 確かにあそこに ……」

風が2人いるという事実困惑し改めてもう一度前を向く。  
そこには確かに風が走ってくる姿。  
だが、その風は次の瞬間ガシャンと音をたてて崩れさった。

「……………氷……………」

「ご名答。さっきまでお前が見てたのは氷に反射した後ろの俺だ、  
気付かなかっただろ」

背後で拳を握る風は得意気に言う。

「マジックミラー  
氷幻鏡」

ヨナスはわなわなと唇を震わせ忌々しそくに凧を見つめる。

「まさか……私が学園都市の人間などに……」

「学園都市をなめるなよ」

そう言って凧はヨナスの背中に向かって思いきり拳を振るう。

「くらえっ!!」

ドンッ!!

凧の拳がヨナスに直撃しその箇所からパキパキと氷が覆い被さるようにヨナスを包んでいく。

あっという間に氷に閉じ込められた状態のヨナスが完成する。

「ふう」

決着がついたと判断して凧は肩の力を抜いて息を吐く。

「一条、アナタはそれほどまでに強かったんですね」

離れて見ていた神裂が凧のもとへと歩み寄ってくる。

「いやあ、殺すといけないから力はセーブしたんだけどな」

「あれでセーブしているのですか!？」

「ああ、とっておきがあるからな」

ニイツと凧は笑って氷漬けにされているヨナスに近づき、徐にそれを蹴りつける。

「…………ツぶはあ!？」

きれいに首から上だけの氷を砕かれ窒息寸前だったヨナスが苦しそうに呼吸する。

凧はヨナスの髪の毛を掴み、低い声で囁く。

「王女はどこにいる?」

「ハッ、言うわけがないでしょう」

「そうか、それなら致し方あるまいな」

凧はそう言うと右手に手の平サイズの水の球を作り出す。

「さあ問題です。この水の球でお前の口を塞ぐとどうなるでしょうか」

憎たらしいほどの満面の笑みを浮かべながら楽しそうに凧はその水の球をヨナスの口に近づけながら言う。

「!?!?!?!?!」

「早く言えよ」

「……………」

「本当だな?」



「ああ」

それだけ聞くと風は立ち上がり神裂のもとへと向かう。

「王女の居所は分かったのですか？」

「おう。《 》だ」

「！！ ……これは急がなくてはなりませんね」

事態は一刻を争うと判断した風と神裂は瓦礫に埋もれた出口を強引に突破して直ぐ様王女のもとへと向かった。

## 第29話 氷幻鏡（マジックミラー）（後書き）

修学旅行編が終われば少し箸休めとして番外編を書こうと思っています。

どの話を読んでみたいかアンケートをとりたいのでこの小説を読ん  
でくださっている皆様ご協力をお願いします。

1、 凧と楓のデート

2、 レベル5たちの1年次の大覇星祭

3、 凧と楓と帝督の出会い

アンケートは修学旅行編が終了するまで受付たいと思います。

### 第30話 万人均一（前書き）

アンケート途中経過を報告します。

1、 4票

2、 1票

3、 2票

まだまだアンケート受け付けております！！  
詳しい内容は前話の後書きを御覧ください。

### 第30話 万人均一

『なに？それは本当か？』

「ええ、一条が“使徒の道と成りし者”という魔術結社の1人から聞き出した情報ですからまず間違いないと思います」

『ふむ、了解した。君達は先にそちらに向かえ。私達もすぐに向かう』

「そうですね。でわ」

通信を切った神裂と凧は現在ヨナスが吐いたヴィリアンの居場所へと向かっている。屋根の上を走る神裂と空気中の水分子を凝結させて足場を造り滑るように移動する凧が向かう先、

シティ・オブ・ロンドン

タワーブリッジの北側、タワーハムレッツにあるシティ・オブ・ロンドンは大ロンドンの東部に位置し、イングランド銀行を始め大銀行や保険会社が密集する金融特区である。

彼らの目的地、ヴィリアンがいるであろう場所はシティ・オブ・ロンドンの内部にある建造物だ。

「そこにヴィリアン王女がいるんだな？」

「おそらく間違いないでしょう。あの金融特区の中にある宗教的な意味合いを持つ建物はアレ以外にも存在しません」

「ここからどれくらい距離があるんだ？」

「全力で移動しても20分はかかりますね」

屋根から屋根へと飛び移りながら神裂は言う。

「シティ・オブ・ロンドンに繋がるタワーブリッジならば私達よりもテムズ川を搜索していた騎士団長<sup>ナイトリーダー</sup>たちのほうが早く到着するでしょうね。エディンバラを搜索しているアニーゼ部隊は時間がかかるでしょう」

「またさっきみたいな敵が出てくるかもしれないしな」

「現れるでしょうね、騎士団長なら問題はないと思いますがもし先程の通信で彼が言っていたことが奴らの目的ならば急がなくてはなりません」

「目的？」

「奴らは大規模な術式をここのイギリスで発動させようとしています」

「どんな術式なんだ？」

\*

「ふむ、やはり我々のほうが神裂たちよりも早く到着したか」

タワーブリッジ前、到着した騎士団長や騎士派の面々はまだ到着していない神裂たちを探していた。

時刻はそろそろ正午に差し掛かるうという時間帯であり、奴らの狙いがあの術式の発動であるならば残された猶予は残り5時間ほどだろうか。

騎士団長が神裂たちの到着を待っていると、ふいに騎士派の1人が力無く地面に倒れた。

「……………」

ガシャンッ

また1人騎士派が倒れる。

「……………これは」

ガシャンッ

また1人騎士派が倒れ、立っているのは騎士団長のみとなる。

「……………天罰術式か？」

「やあだなあ、そんな大層な術式じゃないよう。大体天罰術式って普通の魔術師には使えないじゃんッ」

タワーブリッジからこちらに歩いてくる女。オールバックにした茶髪に黒いボンテージのような露出度が高い衣服を身に纏う女は騎士団長を見てヒュウツと口笛を吹く。

「まさかイギリス騎士派のトップがでてくるなんて思ってなかったわあ」

「お前も魔術結社の一員か？」

「その通り。“使徒の道と成りし者”のメンバー、メノールだよお」

「先程の術式はなんだ？」

「ああこれえ？」

そう言つてメノールは懐から取り出した銀製のホイッスルをくるくると回す。

「天罰術式なんて化物じみたものじゃないよう。ただ意識を失うだけえ。言つなれば“昏倒”術式つてところかなあ」

「成程。そのホイッスルが術式の核なのだな」

「さつすがあ。まあこんなに大っぴらに見せびらかしてたらそりゃあ解るよねえ」

へらへらと笑いながらホイッスルを回すメノール。

「それでえ？騎士団長様は昏倒する前にコレを破壊できるかなあ？」

「愚問だな」

「ありやいや簡単に言ってくれるねえ」

「貴様は何か勘違いしていないか？」

「？」

意味が解らない、といった表情を浮かべるメノールに対して細剣、フルンテイングを抜きながら騎士団長は言い放つ。

「貴様ごときが私と同格だとも思っているのか？」

「……ああ、思い知らせてあげるよお」

轟ッ！！

フルンテイングを振るう騎士団長と銀のホイッスルを回すメノールがタワーブリッジ上で激突。

水面に波紋が広がる。

\*\*\*

「タワーブリッジですか？」

アニーエーゼが通信用の霊装越しに言う。  
眉間には皺が寄っていた。



「シスターアニーゼ。ここからまた移動するんですかあ？」

「そうするしかないみたいですね。他の騎士派も出払っちゃまってますし、あの下着をつけない人（神裂）や学園都市の人間だけでは手が足りないでしょう」

先程から疲れたを連呼しているアンジェレネに宥めるようにアニーゼは言う。

此処エディンバラからタワーブリッジまでは少し距離があるが向かわないわけにもいかないだろう。

「増援を呼びますか？」

ルチアがアニーゼに尋ねる。

「いえ、下手に増援を増やすと向こう側にすぐ感知されちゃいます。このまま移動しましょう」

3人はエディンバラを離れ、タワーブリッジへと急ぐ。

\*\*\*

「これは中々にイギリスの危機かしら」

バッキンガム宮殿の一室、優雅に紅茶を飲みながらリメエアはさらっととんでもないことを言った。

「どういう事なんですか？」

最早リメエアの執事と化した帝督がティーカップに紅茶を注ぎながら彼女に尋ねる。

「奴らの居場所はおそらくシティ・オブ・ロンドンの内部にあるセントポール大聖堂」

注がれた紅茶を口に含み飲み込んでからゆっくりと言う。

「アナタたち科学の街に住む人間には解らないでしょうけど、イギリスにとってセントポール大聖堂は魔術的にとても大きな意味合いを持つんですよ」

持っていたティーカップをテーブルの上に置き、一拍おいてリメエアは説明し始める。

「セントポール大聖堂にはもう1つの名前があるわ」

「もう1つ？」

「ええ、魔術的にはセントポール大聖堂というよりもこちらの名前のほうがメジャーかしらね。何しろ名前が名前だから」

「それってどんな名前なんです？」

「アナタもその人物くらいは知っているのではないかしらね」

「？」

「セントポール大聖堂。またの名を ……」

\*\*\*

「聖パウロ大聖堂？」

タワーブリッジが目と鼻の先にまで迫ってきた辺り、風は移動しながら神裂が言った単語を繰り返す。

「はい、奴らがいるであろう大聖堂。イギリス国教会の大聖堂です」

「パウロってあのパウロか!？」

「ええ、聖パウロ大聖堂とは文字通りパウロに捧げられた大聖堂なのです」

「そんな所で奴らは何しようってんだ？」

「パウロがどんな人物であったかはご存知ですか？」

「ん? ああ、異使徒だったとか」

「パウロは聖人なのですよ。彼はユダヤ教からキリスト教に改宗した際に名前をサウロからパウロに変えていますですがそのことによってユダヤ教徒から迫害も受けていました」

「？だから何なんだ？」

「ここから本題ですよ。迫害を受けたパウロは神からこう言伝を授かり、そして悟ったのです。“神の前にはユダヤ人と異邦人の区別も奴隷と主人の区別も男と女の区別もない”と」

「……つまり平等ってことか？」

「はい。これこそが聖パウロ大聖堂で発動できる大規模術式、“万人均一”です」

「それって悪いことなのか？」

「国というのは良くも悪くも王と民で成り立っています。その関係が術式によって崩され、皆が平等な力を得たならばどうしますか？」

「……まさか」

「自分が頂点に君臨したいと思うでしょう？言ってしまうはこの術式はこれまでのイギリスが歩んできた歴史をリセットさせてしまう術式なのですよ。これまで築き上げてきた社会や法律は崩壊し争いが広まる世界を導く術式なのです」

「じゃあ奴らの狙いつてのは……」

「1度リセットされたイギリスで王になることでしょう。術式の発動者には逆らえない魔術が組み込まれていますから」

「早く止めないとやばいじゃないか……！」

事の重大さを理解した凧は一刻も早くシティ・オブ・ロンドンに向かわなくてはと慌ててスピードを上げようとする

「これほどまでの大規模術式を発動させるにはそれなりの条件とリスクがあるのですよ」

凧とは対照的に神裂はこれまでと同じスピードで屋根から屋根へと飛び移っていく。

「この術式は天体の動きと密接に関わっています。おそらく発動できるのは今日の日没、それまでに術者を倒せば問題ありません」

「条件つてのは？」

「それがヴィリアン様を拐った理由です」

「王女が必要なのか？」

「より正確には王女の血液です」

「血……？」

「聖パウロ大聖堂にある祭壇の金の杯にイギリス王室の血液を注ぎそれをパウロに捧げることで“万人均一”は発動します。その量は全血液の50%」

「50！？それってやばいんじゃない！？」

「はい、人間は30%の血液を失えば命の危険に晒されます。50

%などもつてのほかでしょう」

「じゃあもし発動されたら……」

「……王女の命はないでしょう」

苦虫を噛み潰したような顔をする神裂。

一刻も早くタワーブリッジを通過して聖パウロ大聖堂に行かなくてはならない。

日没まであと4時間程、余り時間は残されていない。

「急ごう神裂!!」

「ええ!!」

「ちよーっと待ってくれよ」

唐突に聞こえた第三者の声に思わず凧と神裂は立ち止まる。

「お前ら俺たちの狙いが解ってるんだろ？」

前方から宙を歩いてくる男。ニット帽を被り白のベストを着た青年が2人に言う。

「よお必要悪の教会の神裂。ネセサリウス そっちはヨナスを倒した学園都市の奴だな、俺は“使徒の道と成りし者”のメンバー。ベリトランだ」

不敵な笑みを浮かべながらベリトランがこちらに向かってくる。

「一条、ここは私が引き受けます。アナタは早くタワーブリッジへ」

「……解った、頼んだぜ」

凧はこの場を神裂に任せタワーブリッジへと急ぐ。

「まさかロンドン屈指の魔術師が相手とはなあ」

「まさか、私に勝つつもりですか？」

七天七刀を構えベリトランとの間合いを測る。

「いやいやまさか。聖人相手に勝とうなんて思ってねえよ」

手を前にだしてパタパタと振るベリトラン。

「だが……」

一瞬で彼の表情が冷徹なものへと変貌する。周囲の空気が震え嫌な雰囲気漂う。

「殺そうとは思ってるよオオオオオオ!!」

空中で停止していたベリトランが猛スピードで神裂へと突っ込んでいく。

「死ぬ聖人ンンンン!!」

「七閃!!」

ロンドンの空中で聖人と魔術師が激突した。



第30話 万人均一（後書き）

一方と軍覇の出番がない……

第31話 首謀者と王女と赤髪神父（前書き）

アンケート途中経過の報告。

1、 5票

2、 1票

3、 2票

1の凧楓デート案が人気のようです。

皆さんアンケートにご協力ください！！

詳細は29話の後書きに。

### 第31話 首謀者と王女と赤髪神父

「…………お見事」

「貴様に贅辞を贈られてもな」

タワーブリッジ上、騎士団長と“使徒の道と成りし者”のメンバーであるメノールの鬪いは圧倒的実力によって騎士団長が勝利し、メノールは力無く橋の上に大の字で倒れている。

「止め…………刺さないのお？」

血を吐き散らしながらも嘲りの笑みを崩さずメノールは騎士団長に問いかける。

「私が依然の私ならば迷いなく切り捨てていたのだろうか」

騎士団長はメノールの問いに自嘲気味に笑う。彼の予想外の反応にメノールは思わず呆けてしまった。

「…………は？まじかよう！！騎士団長ともあろうお方が随分とまあ丸くなつちやっただもんだねえ！！」

「私はイギリスの為に行動するのだ。貴様とてイギリスの人間だ、無闇に切り捨てたりなどはしない」

そう言いながら彼はいつかの記憶を掘り出していた。

「騎士団長！！」

その声に反応して振り返ってみれば空中を凝結させスケートのように滑走してくる風の姿。

「一条君、神裂はどうしたのだ？」

「今は交戦中だ」

タンッ

と軽やかに地面に着地して風が言う。

「やっと着きましたあゝ」

ひどく間延びした声を風と騎士団長は耳にする。

「シスターアンジェレネ、アナタがもつと速く移動していればこれ程の時間はかからなかったのですよ？」

「でもでもシスタールチア！！あれはしょうがないんですッ！！」

「おやもう到着してたんですか騎士団長」

現れたのは修道服を身に纏った3人のシスター、アニエーゼ部隊。

「ふむ、おそらく手数はこれくらいだろうな」

集まった人員を吟味して騎士団長は言う。

「急ごう、ヴィリアン様を救出せねばならん」

凧と騎士団長、アニーゼ部隊はセントポール大聖堂へと向かうためタワーブリッジを渡り、シティ・オブ・ロンドンへと走る。

「……甘過ぎだよお騎士団長」

タワーブリッジ上で倒れていたメノールがニヤリツと血が流れる口元を吊り上げる。

「こおゆう時は止め刺すのが当たり前だってばあ……」

タワーブリッジを走る凧たちにはその言葉が聞こえない。

「私は足止め、これで最後だよ……」

カッ

メノールから眩い光が放たれる。

「……」

騎士団長がそれに気がつき、風たちに何か言葉を放とうと口を開く。

ドオオオオオンッ！！

騎士団長の言葉は莫大な爆発音によって掻き消され、タワーブリッジが真ん中辺りからボツキリと折れる。

「走れ！！」

騎士団長が叫ぶ。

風と騎士団長はタワーブリッジをほぼ渡り終えるところだったので無事だったが、後ろを走っていたアニエーゼ部隊は爆発による煙と瓦礫によって視認できない。

「自爆……しやがったのか？」

「やはり止めは刺しておくべきだったか……？」

ガラガラとタワーブリッジの残骸が音をたてて崩れ川へと落下していく。

立ち込める粉塵でアニエーゼたちの安否を確かめることが出来ない。

「アニエーゼ！！」

「……………！！」

僅かだが確かに風の呼びかけに反応があった。

「アニエーゼ！！無事か！？」

「私達のことはいいいので早く行つちまってください！！時間がねえんでしょう！？」

アニエーゼたちの無事を確認して安堵した風は騎士団長と共にヴェリアンの元へと向かうべく、シティ・オブ・ロンドンへと足を踏み入れた。

\*

セントポール大聖堂。別名聖パウロ大聖堂と呼ばれる聖堂の内部、日曜日によくミサなどが行われていそうな教会の祭壇に“使徒の道と成りし者”のメンバーでありリーダー、ボードン・シェイカーは居た。

彼は目の前にある巨大な十字架を見上げ、ポツリと呟く。

「もう少し、もう少しの辛抱だ……」

彼の目はとても悲しげで、触れば今にも崩れ落ちてしまいそうなほどに儚げだった。

「万人均一などを発動させてどうするつもりなのか」

言われたボードンはゆっくりと首を後ろに回し言葉の発音者を見る。そこには拘束用の霊装で両手両足の自由を奪われたヴィリアンが長椅子に座っていた。

「何って、決まっているだろう。第三王女ヴィリアン」

ヴィリアンを見据え、ゆっくりと告げる。

「アナタはこのイギリスに不満を持っているのですか!？」

ヴィリアンはそれが気に食わなかった。

先日起きたクーデターにしても母上や姉、騎士団長、そしてあの傭兵はイギリスのためを思い戦ってくれたのだ。国民にしてもそうだ。ユニオン・ジャックが発動しイギリスでは平穏を取り戻し始めている。

なのに何故、その平穏を壊すような真似をする必要があるのだろうか。

「……不満、ね」

ボードンはヴィリアンの問いに対して声のトーンを下げ、静かに紡ぐ。

「なあ第三王女。もしもの話だ」

「……」

「もしも、このイギリスで毎日何百人という何の罪もない子供たち



が死んでいたとしたら……お前はどつする？」

「!?!」

「もしも、何の罪もない子供たちが、ただの大人たちの都合で殺されているとしたら……どつする？」

「ッ……」

ヴィリアンは声を出すことができなかった。

そんな話は今まで聞いたことがない。

この男が口から出任せを言っているだけなのかもしれない。

しかし、ヴィリアンにはこの男が嘘を吐いているようには思えなかった。

「そんな……話は……」

「だから言っただろう王女様。これはもしもの話だ」

どこまでも深く暗く、冷えきった瞳でボードンはただ上を見上げながら記憶を辿っているかのようち呟く。

「あの時もそうだった……もう少し俺が早く気づいていれば、きっと……」

だから、

とボードンは付け加える。

「俺達には自由と平等が必要だ。そして俺が王とない、誰もが自由で平等な世界を造り出す」

「……そんなこと、ただの傲慢ではありませんか」

「傲慢？ああそうだ。これは俺が傲慢なだけだ。でもな、使徒の道と成りし者のメンバーは皆同じような過去を持っているんだよ」

広い教会の一室に、ボードンの声だけが反響する。

「そうさ、これは俺のエゴだ。認めるよ、だから王女、俺たちの未来の為にその尊い命を捧げてくれ」

スッ

とボードンの手がヴィリアンの頬に触れる。

（何だか最近私はよく命を狙われますね……）

自嘲気味な笑みを浮かべヴィリアンはブリテン・ザ・ハロウィンのときの事を思い出す。

あの時は味方だと思っていた騎士団長に裏切られ、絶望した。

（でも……）

あの時助けてくれた傭兵はいない。

（でも……）

ヴィリアンの顔に、恐怖はなかった。

（今回はアナタが味方ではないですか、騎士団長）

彼女には信頼できる仲間がいる。

人徳の第三王女。

他力本願の頂点を侮ってはいけない。

\*\*\*

「あれが聖パウロ聖堂とかいうやつか!？」

「そうだ、見たところ防御結界などを仕掛けている様子もないな」

シテイ・オブ・ロンドンの内部を疾走すること20分、ようやくそれらしき建造物を視認できるようになった。

「油断するなよ一条君。一般人が多いとはいえ奴らは何をしてくるか解らん」

「了々解」

シテイ・オブ・ロンドン内は平日の夕方とあって仕事帰りのサラリーマンがビルから出てくる姿が増え始めている。

何せここは金融特区、働いている人間の数も半端ではない。

更に奴らは人目も憚らずに歴史あるタワーブリッジを爆破した。おそらく一般人がいようが目的達成のために攻撃を仕掛けてくるだろう。

走り続けた凧と騎士団長はようやくセントポール大聖堂の入口にまで到達した。

「ここに敵と王女がいるんだな」

「ああ、行くぞ」

ギイッ

重々しい音をたてながら扉は開かれた。

\*\*\*

「七閃!!」

ギユオッ!!

タワーブリッジ手前の住宅街上空、神裂とベリトランの戦闘は終結を迎えようとしていた。

「ぐおっ!?!」

防戦一方。

ベリトランには正しくお似合いの言葉だろう。近づこうとすれば七閃、離れても直ぐ様距離を詰められる。

「ハア……ハア、くそが……」

「アナタには実力が足りなさすぎます」

七天七刀を携え神裂が言う。

「言ってくれるじゃんかよ……!!」

ダッ

とベリトランは神裂に一直線に走る。

「七閃」

7本のワイヤーがベリトランの肉を削いでいく。しかし、

「おおおおお!!」

身体が傷つくことにも構わず、ベリトランは向かってくる。

「はぁッ!!」

距離を詰められたため神裂は蹴りを放ちベリトランを攻撃するが、その足を掴まれた。

「!!」

「っーかまーえた」

ニイッ

と不気味な笑みを見せるベリトラン。

「俺たちは捨てゴマさ。お前らの戦力を削ぐための……なあ」

「くっ!!」

ベリトランの身体が光り始める。神裂は知る由もないがメノールと同じで。

「一緒に逝こうかあ」

ゴオツ!!

炎が舞い上がる。

周囲の温度が一気に上昇し、呼吸するたびに喉が痛くなる。

「……?」

思わず目を閉じていた神裂がゆっくりと瞼を持ち上げる。

自分は無事だ、ベリトランも生きている。

彼は自爆などするつもりではなく、魔術によって神裂を焼き払うつもりだったらしい。

その目は驚愕に満ちている。

「全く、いきなり呼び出すのはよしてもらいたいものだね」

神裂の前に立つ1人の男が言う。

「神裂も油断してもらっては困るよ」

「な……？てめえ、1800度の炎をどうやって……！？」

ベリトランが零距离で放った1800度の火球、それはあっという間に消滅してしまった。

「うん？君は神裂は知っていて僕は知らないのかい？」

煙草をくわえながら忌々しそくに目の前の敵を睨み付ける。

2m近い長身、赤い長髪、黒いコート。

どれもが神父からはかけ離れた身なり。

「簡単な話さ、君の炎は僕の炎が飲み込んだ」

「なッ！？1800度だぞ……！」

「だからどうした。僕の炎は軽く3000度を超える」

「……！！」

そこでようやくベリトランは気がついた。目の前の神父、よく神裂と共に行動していた魔術師。

「……そおか、お前が……あのルーン文字を……」

「ああ別に覚えなくていい、君は此処で灰になるんだから」

ベリトランになど微塵も興味がないというように切り捨てる。

「神裂は先に大聖堂に行け。いくらなんでも騎士団長と学園都市の

人間だけじゃ心元ないだろ」

「……では任せます」

そう言つて神裂は姿を消した。

神父はベリトランに向き直り告げる。

「選手交代だ。君も誰かと変わるか？」

「……殺すぞ」

「こっちの台詞だね」

そう言つて懐からルーンのカードを取り出し辺り一面にばら蒔いていく。

「使用枚数は2800枚。数は大したことないけど君を焼き尽くすぐらいなら造作もないだろう」

煙草の煙をはきながら神父は言う。

「死ねえ！！」

ベリトランは辛抱できなくなり巨大な火球を頭上に造り出す。

「ふっ」

煙草を投げ捨て、神父は言を紡ぐ。

「世界を構築する五大元素の一つ

偉大なる始まりの炎よ



その名は炎その役は剣 頭現せよ！我が身を喰らいて力と為  
せ！！」

神父の周囲から膨大な熱量が放出される。そして彼は言い放つ。  
その名を。

「魔女狩りの王！！」  
イノケンティウス

摂氏3000度を超える炎の巨人がベリトランの火球を瞬く間に飲  
み込んでいく。

「悪いけど、君と戯れている時間はないんだ。早々に決着をつけさ  
せてもらうよ」

膨大な熱量の中心に立つ神父は新しい煙草をくわえ、涼しげに言い  
放った。

魔術師ステイル＝マグヌス、参戦。

第31話 首謀者と王女と赤髪神父（後書き）

ステイル参戦。

でも出番これだけかも（笑）

あ、あと超電磁砲6巻買いました

### 第32話 其々の戦場へ(前書き)

お気に入り登録300件

PV300000突破!!

皆さん本当にありがとうございます!!

これを励みに更新頑張りますッ (^ ^ )

アンケート経過は

後書きに

### 第32話 其々の戦場へ

あの日、  
俺は大切な者を目の前で奪われた。

イギリス全土が裕福な富裕層だけなわけがなく、当然身寄りのない子供や貧困な子供、所謂ストリートチルドレンが存在する。

豪華な宮殿や家に住まう王族や貴族たちとは対極に位置し、その日その日を生き延びるだけでも困難な生活。

スリもやった。

強盗だってやった。

殺人だって必要があれば躊躇らわなかった。

大人たちはそんな俺たちを腫れ物扱いしてイギリスから駆逐しよう  
と追い掛け回した。

だが、生きるために行うスリは、悪いことなのだろうか。  
例えばそのスリをした相手が裏金などで有名な汚職政治家であり、  
スツた子供は両親も家もなく1日を生きること命を懸けねばなら  
ない生活を強いられていたとしたならば……それは悪いことなの  
だろうか。

俺たちは必死だった。

俺には弟がいた。

5つ年下で、病弱な弟が。決して楽なものではなかったが、2人でそれなりの生活をしていた。

弟を医者に見せる金なんてなかった。

薬を買ってやれる金なんてなかった。

だからスリをした。

強盗をした。

殺しをした。

ストリートチルドレンで保護者なんていない俺たちは捕まったが最後、未来なんて与えられない。

必死だった。

俺のことなんてどうでもよかった。

ただ、弟と笑って過ごすことが出来るのなら、どんなことでもしてやった。

それから数年後、俺が15になった時、事件は起きた。

何時ものようにスリをして根城にしていた貧困街に戻ってみると、そこにはもう何も残されていなかった。

理由は簡単だ。

僅かな金欲しさに他のストリートチルドレンが俺たちを売ったんだ。

俺たちを売った奴も一緒に捕まったらしいがそんなことはどうでもよかった。

弟、弟は

たまたまそれを目撃した奴が言っていた。此処を根城にしてたやつは全員兵士たちに連行されて行ったと。

その兵士たちがイギリスの騎士派と王室派の人間だと知ったのは弟が連れていかれてから半年後、それを命令したのが金と権力で当時の王を買収した汚職政治家だと知ったのは1年後だった。

弟は、2度と戻ってこなかった

「……………もう少しだ」

閉じていた瞼をゆっくりと持ち上げ、祭壇の上部に取り付けられた十字架を見ながらボードンは過去の記憶を思い出していた。

「こんな不条理な世界を……………変えてやる」

その瞳には復讐の色だけが蠢いていた。

\*

「もう終わりかい？」

タワーブリッジ手前の住宅街の屋根の上、3本目の煙草をふかしながら魔術師、ステイル<sup>II</sup>マグヌスは為す術の無くなったベリトランを蔑むように見据える。

「ぐッ……！！」

「解ったかい？君と僕では格が違うんだよ」

「くそがああああ！！」

自身の炎も通用しない今、ベリトランに残された選択肢は2つ、死にももの狂いで特攻を仕掛けるか、逃げるか。ベリトランが選択したのは、

ガバッ！！

逃走だった。

ステイルに背を向け全力で逃走を開始する。

「ハハハッ！！俺の任務は足止めだからなあ！！これだけ時間をかせげばいいだろッ！！」

路地裏を縫うようにして逃走を開始するベリトラン。ステイルはそれを屋根の上から無言で見下ろす。

「……まったく……」

吸っていた煙草を手の上で燃やし、侮蔑と怒りを隠そうとすることなく表情に出す。

「無様だね……僕から逃げ切れると思っっているのか？」

彼は辺り一帯に2800枚のルーンを配置してある。ベリトランがその範囲から抜け出さない限り、ステイルの勝利は揺るがず、ベリトランの敗北は免れない。

「これはまだ未完成なんだけど……まあ丁度いい実験台と思うことにしようか」

懐から更にルーンを取り出し、辺り一面にばら蒔いていく。

「魔女狩りの王」  
イノケンティウス

ゴオツ！！

と炎の巨人が現れ周囲を熱風が包む。

その熱風はステイルから逃げるベリトランにも一瞬で届く。

「チイツ！！またあの巨人かよ……！！」

チラリとステイルの方を見て舌打ちするベリトラン。

(だがあの巨人だけなら何とか逃げ切れる……！！)

思考を巡らせ自分が生き残るための算段を脳内で積み上げていくベリトランだったが、次のステイルの言葉でその算段は脆くも崩れ去



ることとなる。

「ダブル」

ゴアッ！！

イノケンティウスの隣に新たにもう1体イノケンティウスが現れる。

「コイツは魔力の消費が桁違いだからあまり無理は出来ないんだけど……まあそのうち何体でも出せるようにするさ」

懐から取り出した新しい煙草に火をつけ、天に向かって緩やかに息を吐く。

「なッ……」

一体だけならばなんとか対処し逃げ仰せようと考えていたベリトラにとっては一話にも等しいステイルの一手。彼が逃げ切れる可能性はほぼ0になる。

「やれ」

ステイルが発した言葉とともに2体のイノケンティウスがベリトラのもとへと襲いかかる。

「ヒツ……うわああああああ！！」

そして、ベリトランが逃げ切れる可能性は途絶えた。

＊＊

バッキンガム宮殿内部の一室、第一王女リメエアと垣根帝督は騎士団長からの報告を受け、立てていた仮説が正しかったということを知った。

「……やはり狙いは“万人均一”だったのね」

「どうするんです？もしそれが発動したら……」

「そこは騎士団長と一条に任せるしかないわね……あと敬語は止めて下さいな。普通にしていただけ？」

「はあ……俺も行けばよかったな」

「貴方がここを離れては誰がこの宮殿と私達を守るといの？」

「は？いや敵はシテイ・オブ・ロンドンに居るわけだし、ここに居ても……」

「考えが甘いわね。奴等が求めているのは王女の血液なのよ、それはわたくしやキャーリサも同じ。保険の意味でもわたくし達を狙っ

てくるのは目に見えているわ」

持っていたティーカップを高級そうなガラスのテーブルの上に置き、リメエアは続ける。

「キヤーリサのように軍事に能力を発揮するような人間ならともかくとして、わたくしなんてたまたま狙われなかっただけなのよ」

自嘲気味な笑みを薄く浮かべながら言う。

「……てことは」

「ええ」

帝督の予想が正しいと言うように相づちをうつリメエア。

「何時ココが狙われても可笑しくないとということよ」

いつにもなく真剣で鋭い瞳で告げるリメエア。

そしてそれは現実のものとなる。

ドガアアアンツ！！

「！！！」

「なんだあツ！？」

突如大きな震動がバツキンガム宮殿全体に響き渡る。  
そして数秒後、リメエアと帝督が居る部屋の扉を勢いよく開いた騎士派の兵士が声を荒げて報告する。

「宮殿東側に魔術的攻撃を確認！！敵襲です！！」

「やはり来たわね」

敵襲だと言つものにも関わらず慌てる素振りを見せる事なくカップに残った紅茶を口に含むリメエア。

「垣根、貴方の出番よ？」

言われた帝督は待つてましたと言わんばかりの笑みを浮かべ腰かけていたソファから勢いよく立ち上がる。

なんだかんだでストレスが溜まっているようだ。

「よっしゃ！！一仕事しますかッ！！」

軽くのびをして部屋から出ていく帝督。廊下に出てみれば攻撃を受けているのか微弱な震動が足に伝わってくる。

背後からは騎士派の兵士がリメエアの護衛のため場所の移動を提案していた。

「……………行くか」

魔術的結界が存在しないバツキンガム宮殿はカーテナがない今無防備に等しい。

騎士派が応戦しているのだろうがナイトリーダー騎士団長やエリザード、キヤーリサが出払ってしまっている現在戦力には些かの不安が残る。

帝督は廊下を走りながら状況の把握に務め、東側へと到着する。

広がるのは騎士派数十名が無惨に庭園に倒れている姿。  
そしてその先に1人の男。

見た目30代の黒スーツにサングラス、スキンヘッドという出で立ちをした男は目の前の騎士派の連中を見てつまらなさそうにぼやく。

「んだよ騎士派って騎士団長ナイトリーダーが居なきゃこんなもんなのかよ。これじゃわざわざ此処まで来た意味がねえじゃねえかよ」

強い。

帝督は直感する。

この男の闘いを直接目にしたわけではないが、転がるボロボロの騎士派とは対照的に男には傷一つ見当たらない。

「!!……なんだぁお前？」

男が帝督の存在に気がついた。

「……オッサンこそ誰だよ」

「生意気なガキだな……殺されてえのか？」

ビキッ

男の額に青筋が浮かぶ。

「やれるもんならやってみるよ、返り討ちだぜ」

挑発的に笑いながら臨戦体勢に移る帝督。

「いいぜえ。お前は内臓引き摺り出して踏み潰す……!!」

帝督と男の視線が交差する。それが引金となり、2人の戦闘が始まった。

\*\*\*

セントポール大聖堂。

聖パウロ大聖堂という別名を持ち、バチカンに並ぶとも言われる教会建築の傑作。

その扉を開いた風と騎士団長を出迎えたのは左右を巨大なコラム（柱）が支える長い廊下、天井が高く上部からは光が淡く射し込んでいる。

「……敵がいる気配はないな」

「油断するなよ一条君。敵も馬鹿ではない、何時現れるか解らないぞ」

警戒の糸を切らすことなく先へと進んでいく風と騎士団長。

平日の夕方だからか人気はない。人払いのルーンを刻んでいるのかもしれないが。

暫く続いた廊下を抜けると階段が姿を見せた。現れたのは上へと続く階段と下へと続く階段。

「一条君、私は上に行く。君には下を頼めるか」

「解った」

「ヴェリアン様を発見したら直ぐに連絡をくれ」

「騎士団長もな」

「ああ」

そう会話を交わし、2人は別々の階段へと進んでいく。風は地下を、騎士団長は最上階を目指して足を運ぶ。オレンジ色の光が射し込むセントポール大聖堂に2人の足音だけが断続的に響き渡った。

\*\*\*\*\*

「……………帰ってこない」

宿泊しているホテルのロビー。

そこで楓と未来は風たちの帰りを待っていた。一方通行と軍覇は2人の実力を十二分に知っているため特に心配することもなく自室へと戻っていった。

澤ちゃんにも2人が居ないことは報告してあるがいつも彼らは居な

くなるため今回も同じように遅刻しているのだろうという結論に至り搜索などは行われていない。

そんなわけで帰りを待つことしかできない楓は現在ロビーのソファに背を預け未来と共に凧たちの帰りを待っている状態である。

「そんな心配しなくても大丈夫よ楓。一条君のことだから道に迷ったかどっかのホテルに連れ込まれたりしてるだけだってば」

「それはそれで凧をぶん殴らなくちゃならないけど……」

「垣根君も一緒なわけだし大丈夫よ」

「でもバツキングダム宮殿での煙はおかしくなかった？」

「うん確かにねえ。あれは演出って感じではなかったわね、なんだか鎧着た人たちが慌ててたし」

「その煙が晴れたら凧は居なくなってたのよ！？普通じゃないわ！」

「わ、分かったから落ち着いて楓……周りの人がこっち見てるから……」

「はッ」

つい興奮して大声になってしまっていた楓をロビーに居た宿泊客や従業員が冷ややかな視線で見てる。それに気付いた楓が慌てて口を塞ぐ。



「とりあえず、夕食まで待とうよ」

「……………う、うん」

現在PM16:55

夕食はPM19:00であるので今から凡そ2時間後だ。

「それでもまだ一条君が戻ってきてなかったら、も一回澤ちゃんに言いにいく？」

「……………そうね」

そう言っつて腰を上げる楓。ゆっくりと自室へと戻っていく楓の背中を見つめながら未来は思う。

( 幾ら何でもあの煙は異常よね……………楓があんな心配するのも珍しいし、やっぱり何かがあるのかしら )

やっぱり一条君でトラブル体質なんじゃ？など思いながら未来も楓の後をついていく。

彼女たちはまだ知らない。

2人が国を揺るがず闘いに身を投じているということ。

そして気づいていない。

すぐそこにまで闇が迫ってきているということ。

### 第32話 其々の戦場へ（後書き）

アンケート途中経過

変動ありません。

アンケートの選択肢にはないけど番外編ならこんなものどうよ？みたいな案があれば気軽に出示してください。

内容によっては時間を見つけて番外編として案を借りるかもしれないです。

宜しくお願いしますm( )m

### 第33話 交わらない想い（前書き）

アンケートは変動なしです。

凧楓が強いかなあやっぱ

要望をくださった方ありがとうございます。  
どこかで使えるように善処します。

まだまだお待ちしてますので気軽に投稿してください!!

### 第33話 交わらない想い

「ハア…ハア…、てめえ何者だよ……!!」

バッキンガム宮殿庭園の東側、垣根帝督と対峙していた黒スーツにサングラス、スキンヘッドの男が膝を付きながら忌々しそうに目の前に立つ帝督を睨み付ける。

その帝督は睨み付けてくるスキンヘッド（以後ハゲ）にもものともせず言い放つ。

「オッサン学園都市なめてただろ」

「くっ……」

「超能力なめんなよ」

「くそが……俺の術式が効かねえだと……!?!」

ハゲの術式。

それは空気中にある酸素を使用してオゾンを生成するという妹達もどきのような術式。騎士派の連中はそれによって酸欠状態に陥り意識を失っていたのだ。ハゲはその効果範囲外にいるため無傷で相手を倒せるのである。

「てめえ……なんで意識を失わねえ……!?!」

「ん？ああこのオゾン造り出すやつのことか？」

今気付いた、とでも言うつように軽い言葉を投げ掛ける。

「残念だったな。俺の未元物質ダークマターにその常識は通用しねえ」

お決まりの台詞をハゲへと言い放ち勝負あり。

帝督はりメエアの所に戻るべく踵を返して立ち去ろうとする。

「止め……刺さねえのかよ」

膝をつくハゲが帝督に尋ねる。

それに帝督は足を止め、振り返って答える。

「オイオイ俺は高校生だぜ？殺人犯なんか死んでも御免だ」

二カッ

と笑った帝督は駆け付けた騎士派に後のことを任せバツキング宮殿内部へと戻っていく。

残されたハゲは何も言わなかった。

\*

階段をひたすら下へと降りていく。

聖パウロ大聖堂という別名を有するセントポール大聖堂の地下へと通ずる石造りの階段を尻はひたすら下っていた。

「地下ってこんな下まで降りるっけ……?」

ナイトリーダー  
騎士団長と階段の分岐点で別れてからかれこれ5分以上は経つ。  
それなのにいつまでも続く階段階段階段。

一向に変化しない周りの景色に正直うんざりしながらそれでも風は階段を降りていく。

「……お」

ふと下を見てみると階段がそこで終わっている。

どうやらあそこまでが地下に繋がる階段だったようで、階段の先には薄暗い石畳の通路が真っ直ぐに続いている。

階段を降りきった風はその石畳の上に立ち、改めて周囲を確認する。真っ直ぐに続く石畳の廊下、地下であるため沈みかけた太陽の光が届くことはなく左右の壁に等間隔で設置された小さな照明が薄暗い廊下をポツポツと照らしている。

目がつく範囲にそれらしき部屋の扉も敵らしき人物も見当たらない。

「とりあえず進むか……」

そう言って風が一步足を踏み出した時、それはやってきた。

ガコンッ

「……え？」

突如として凧を襲う浮遊感。それは決して敵からの攻撃や気のせいなどではない。

事実、凧は一瞬確かに浮いていた。

何が起きたのか、答えは単純だった。

「嘘だろ〜！？」

凧が足を踏み出し石畳に足をついた瞬間、いきなり石畳が崩れだし、そのまま凧を飲み込んでさらに下へと落下していく。

おそらくは侵入者撃退用のトラップか何かだったのだろう。

落ちていく凧はその石畳が再び形成されていくのを目にしていた。

「有り得ねえ！！」

重力に任せて落下していく凧の悲痛な叫びだけが石畳の下から響いていた。

\*\*\*

ナイトリーダー  
騎士団長は黙々と最上階を目指して階段を駆け上がっていた。

螺旋状に続く石造りの階段の左右には幾つかの切り取られた窓のよ

うな空間があり、そこから夕焼けが射し込み辺りをオレンジ色の光が包む。

現在時刻

P M 1 7 : 2 0

陽もだいぶ傾き茜色の空が広がっている。そんな夕陽に照らされるセントポール大聖堂の階段を無言で上り続けた騎士団長はようなく最上階とおぼしき広い空間に辿り着いた。

(……人が居る気配は無いな、ヴィリアン様は下か?)

ぐるっと周囲を確認しながらヴィリアンがこの場所に居ないことを悟ると風の後を追うべく今来た階段を再び降りようと足をかける。

(……ん?)

だが、そこで騎士団長は気付いた。この広間にいるのが自身だけではないことに。

僅かに洩れた殺気。

騎士団長が背を見せたためにほんの少しの油断によって気が緩み洩れた殺気を騎士団長が見逃す筈がなかった。

「出てきたらどうだ。そこにいるのだろうか?」

騎士団長の問い掛けに答える人影はない。

「そんなに私と闘うのを畏れているのか?」



挑発するように背を向けたまま騎士団長が居るのであるう人間へと言  
い放つ。

カツン……

騎士団長以外の足音が広間の中に反響する。

ゆっくりと振り返ると、そこには1人の少年（14〜15歳）が立  
っていた。

「ホウ、少年だったとは少々驚きだな」

「アンタが三大派閥の一角、騎士派の長だな？」

「そうだが、君は？」

「俺は“使徒の道と成りし者”のナンバー2、ジェインだ」

「何故ここに？」

「アンタが上にくるって言われたからここで待ってたんだよ」

「……では君は私の足止めか？」

「ハッ、馬鹿言つなよ。誰がアンタなんか足止めするか」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに両手をヒラヒラと振る。

「……俺はアンタを殺しに来たんだぜ？」

ゾアッ！！

ジェインからおぞましい量の殺気が騎士団長に向けて放たれる。

「アンタはボードンの望みを叶えるには邪魔な存在なんだよ」

だから、とジェインは付け加える。

「ボードンの望みとイギリスのために……死んでもらうぜ、騎士団長」

その言葉には返事をせず、ただゆっくりと細剣、フルンティングを抜く。

「……子供とはいえ容赦などしないぞ。こちらにも譲れないものがある」

「悪いけどこっちだってそれは同じだよ。時間だって近付いてきてるしね」

そう言っつてジェインも手に持っていた長剣を抜き、騎士団長に向かい合っつように立つ。

それ以上理由はいらなかった。

其々のイギリスの未来のために、騎士団長とジェインがセントポール大聖堂最上階で激突した。

\*\*\*

「……いつてえ……」

地下通路の石畳を渡ろうとしてトラップにハマり更に落下した凧が辿り着いたのは迷路のような場所だった。

「ったく、どんだけ下に行けばいいんだよ」

目の前には前後左右に続く道。石造りのその通路、所謂十字路の中心にいる凧だが、どこへ進んだらいいのか全く検討がつかない。

「オイオイイギリスまで来て迷路とか冗談じゃねえぞ……」

げんなりしながら上を見上げる。どれ程落下したのかは検討もつかないが随分と長い間落下していたような気がする。

普通の人間ならばこの石造りの地面に激突して即死だろうが凧は直前に身長ほどの水球を幾つもつくり、それをクッションがわりにして威力を殺して着地したため大した怪我をしてはいない。ただ服はびしょ濡れだが……

「考えても仕方ない、とりあえずは進むか」

そう言つて凧は目の前の通路を真っ直ぐに進んでいく。

今度はいきなり床が抜け落ちるなんていうトラップは仕掛けられていなかったので安心しながら地下の薄暗い通路を歩いていく。

「それにしても暗いな……」

等間隔で設置されている申し訳程度の照明ではとてもではないが全体を照らすことなどできず、照明の周囲だけが光を放っている。

「…………ん？」

真っ直ぐ続く通路を歩いていくと左右に分離している場所に突き当たった。

「どっちに行くか……………」

と口には出してみたものの別段深く考えたりすることもなく左へと曲がる。

「やっぱり迷ったときは左だろ」

などと意気揚々と言いながら曲がっていくと…………

ガコンッ

「え……………」

何だか先程も聞いたような音が響く。

それを確認すべくおそろおそろ目線を自分の足元へと運んでいく。すると、

床がない。

「またかよッ！！」

叫ぶ風は再び暗闇に落下していった。

\*\*\*\*\*

地下にある礼拝堂。  
ヴィリアンはそこにボードンとともに居た。

「もう少しだ……直に日も沈む。空に最初の星が輝けば術式が発動できる……！！」

「そんな術式は発動させませんッ」

「それはどうか女王様。今の時刻は午後5時半。6時半には日も沈むぞ？」

「騎士団長たちが必ずや阻止します」

「流石は人徳の第三王女。頼ることだけは一級品だな」

「アナタはイギリスを本当に憎んでいるのですか？」

「ああ憎いね。殺したいほどに憎い。だから変えるんだよ俺達が、誰もが笑える国にしてやるんだ」

長椅子に腰掛けてそう言うボードンの瞳はどこか悲しげだった。

「お前は行き倒れている子供を見たことがあるか？」

「……！？」

「あるわけないよな、王女様があんな貧困街へ来るわけがない。でもな、イギリスの一部はそんな奴等で溢れてんだよ」

ヴィリアンは異論を唱えることができなかった。それは彼女がその事実を知らなかったからだ。

「一部では子供が野垂れ死に、一部ではクソみてえな政治家や貴族がのうのうと食い散らかしてやがる。なあ、これが正しいのか？」

ヴィリアンはその問いに答えることが出来なかった。

人徳とまで言われる彼女だからこそ、彼に写る想いが見えてしまった。

(彼は……彼はきつと……)

揺らぐ。

今はもう自分が正しいと思えなくなってきた。

今のイギリスを壊すなんてことは許せない。

しかし、今のイギリスが完璧などとも到底言えたものではない。

そんな彼女の思考を遮ったのは、悲鳴にも似た叫びだった。

「やべえやべえ死ぬー！直撃は死ぬううー！！」

何やら礼拝堂の扉の外から聞こえてくる声が段々と近づいてくる。

（上から……？）

ヴィリアンがそんな疑問を抱いたのとドガアアアッという音とともに地面が揺れたのはほぼ同時。

「チツ、招かれざる客か」

扉の方を見て鬱陶しそうにボードンが舌打ちする。  
カツンカツンと足音が響き、しばらくしてギイツと重たい扉が開かれる。

現れたのはヴィリアンの知らない少年。  
しかし彼は自分のことを知っているようで、自分の姿を認めるとニコツと笑って言った。

「迎えにきたぜ王女サマ」

ひどくクサイ台詞だったが、ヴィリアンにそれ以上の言葉は必要なかった。

彼は礼拝堂内部へと入り、ボードンの姿を見つけると先程までの表情からは想像もつかない表情を浮かべる。

「お前がリーダーだな？」

「そういうお前は誰だ？」

「学園都市の人間だ」

「……そうか、お前がヨナスをな」

ボードンは礼拝堂の一角に立て掛けてあった槍をとり、その切っ先を尻へと向ける。

「此処に居るってことは事情は知ってるんだよな？」

「ああ、俺はお前を止めるぜ」

ヴィリアンを少し離れた場所へと避難させ、尻はボードンと向かい合う。

そして、2人の戦闘が始まる。





第33話 交わらない想い（後書き）

はやく日常パートが書きたいよ……  
戦闘描写へタすぎるから；

第34話 過去と現在と隠し玉（前書き）

修学旅行編もあと少し

### 第34話 過去と現在と隠し玉

「あア？」

PM 17:45

一向に帰ってくる気配を見せない凧と帝督に痺れをきらせた楓は現在一方通行と軍覇の部屋の前で一方通行と話している。

「まだ凧たちが帰ってきてないのよ」

「アイツらにとっちゃいつもの事だろオ」

「いやー、一方通行くん楓今正常な判断できなくなってきたからさー」

楓の後ろからひょっこりと姿を現した未来が補足として説明する。

「それより削板君わ!？」

ドアの向こうにいるはずの軍覇を想い目をキラキラと輝かせる未来。

「それよりもって未来……」

若干呆れたように未来を見る楓。

「軍覇ならもう寝ちまったぞ」

「ええ〜!?!」

「未来うるさいってば」

「うう〜…」

何やらがつくりと肩を落としてションボリする未来。本当に削板君が好きだったんだと内心驚く楓。

「ンで?そんな話を俺にしてどうしろってンだよ」

頭をガシガシと掻きながら面倒くさそうに一方通行が尋ねる。

「一緒に尻を捜してほしいの」

「面倒くせエ」

バツサリと楓の願いを一刀両断する。

「なんでよツ!?!」

「もうすぐ晩飯だからだ」

「そんなのどーでもいいじゃない!?!」

「喚くなよ……大体捜すつつつても検討はついてンのかア?」

「う………」

「闇雲に捜し回っても時間の無駄だろオが」

正論なので何も言い返すことができない。だがやはりこのままじっと待っていることができない楓は

「解った。私だけでも捜す」

強行手段にうつって出た。

「ちよつと楓!？」

スタスタと踵を返してエレベーターへと向かう楓を慌てて呼び止める未来。

「落ち着きなよ楓。アンタまで迷子になっちゃうって」

「だけど……!」

腕を掴まれた楓は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「……澤村には言っであんのかア？」

「言っていないわ……そんな大事にしたいくないし……」

一方通行に問われた楓はボソボソと俯いて答える。

「それが解ってンならもう少しジツとしてろ。アイツらが事件に巻

き込まれてると決まったわけでもねエんだからよ」

「……わかった」

渋々と言った表情で再びエレベーターへと向かう楓。後ろ姿にいつもの覇気が全く感じられないあたり本気で凧（帝督は知らないが）を心配しているのだろう。

「……チッ」

楓たちがエレベーターに乗り込んだ後、誰も居なくなった廊下で静かに舌打ちする。

「アイツら一体何やってんだ？」

虚空に投げ掛けられた一方通行の言葉に答える者などもちろんない。

\*

「お前がボードンシエイカーだな」

「そうだ」

セントポール大聖堂の最下層にある礼拝堂の中で凧と“使徒の道と成りし者”のリーダーであるボードンシエイカーが激突した。

互いに近付いては離れ、離れては近づく。  
ボードンの槍を間一髪で避けつつ氷雨を放つ。

「……お前の能力、水か？」

「いい線いつてるッ!!」

ドパンッ!!

凧の背後から津波のような水の塊が生成される。

「津波警報発令だ!!」

唸りをあげる大質量の水がボードンへと襲いかかる。

「なめるなッ!!」

ボードンは襲いかかる津波に身の丈3m程槍を振りかざす。  
その槍の切っ先が津波を切り裂き、パツクリと割れるかのように真  
っ二つに裂ける。

「……流石はリーダーってところか」

「ガキが調子に乗るなよ」

「なッ!!お前だって俺と大して年変わんないだろうがッ!!」

「俺は21だガキ」



「まじかよ……!!」

勝手に17、8だと思い込んでいた凧はなんだかよく解らない敗北感に苛まれる。

「とりあえず……死んどくか？」

ボードンは槍を構える。その切っ先が僅かに光を灯しているのを凧は見逃さなかった。

「それも何か魔術を使ってるのか？」

「ああ、まあ喰らえば嫌でも解る」

「それは是非とも御免被りたい」

ヒュッ

風を斬るような音がしたかと思えば、凧の目の前にはボードンが槍を振りかざしながら立っていた。

「ホラよ」

ドスッ

槍が凧の左肩へと突き刺さった。

「ぐああ……」

傷口からは鉄臭い液体がじんわりと滲んだかと思えば堰を切ったか

のように溢れだしてくる。

「くそ!!!」

ボードンから一端離れるため背後へと飛び退き傷口に手を当てる。パキパキ、という音をたてながら傷口から流れ出していた血が固まっっていく。

「ホオ、そんなこともできるのか。便利なものだな」

「へッ、羨ましいか?」

「全く」

軽口を叩いているがあまりこれは乱用することができない。軽い止血程度ならば問題はないのだが今のように深い傷の場合は身体を流れる血液の一部をも氷らせて止血してしまうため体温が下がり血流も悪くなる。かといって解除すれば血液を無駄に垂れ流すことになるためそれもできない。

そして極めつけに

「!?!?!?!?!」

足がふらつく。

なんだか頭もクラクラしてきた。

「効いてきたか」

「ッ……刃に毒でも塗ってやがったか……?」

「そんなことしてねえよ、それが俺が使用してる“削減術式”だ」

「……削減……？」

「この術式は対象に一撃与えることに体力、思考能力、神経伝達速度を徐々に削減していくって代物だ」

「……また面倒なもの持ってきたなオイ」

「そう言つなよ。まああと10発くらい喰らえば楽になれるんじゃないかねかな？」

邪悪な笑みを浮かべたボードンが槍を片手に暗に死ぬと言う。

「それまでにお前を倒せば……いい話だろ？」

「できるもんならな」

「やっつてやるよ……」

少しばかりふらつく足に無理矢理力を込めて目の前の敵を見据える。

「あんまり時間はないみたいだから……出し惜しみは無しだ」

そう言って風は右手を前に突き出し、告げる。

「」

＊＊

ギャリンツッ！

剣と剣が互いにぶつかり、火花にも似た光が飛び散る。

セントポール大聖堂の最上階、騎士団長ナイトリーダーとジェインはセントポール大聖堂の屋根を破壊し、壁を薙ぎ払い、床に亀裂を走らせ、歴史ある建造物を好き放題に破壊していた。

「あーあーいいの？この大聖堂貴重なものなんだろう？」

「イギリスを守るためだ。多少の犠牲はやむを得まい」

フルンティングを振るう騎士団長には一切の迷いは見られない。それはジェインも同じだった。

「そろそろ終わらせてもらっぞ」

「そいつは困る。せめて日没までは俺と闘ってもらっよ」

「そんな術式発動まで呑気に私が待つとでも思っているのか？」

「思っちゃいないさ。だから力づくで足止めさせてもらっ」

剣を構え、騎士団長を真っ直ぐ見つめるジェイン。

(……良い眼だ)

素直に騎士団長はそう思う。実力もかなり高い。おそらく騎士派の中でも上位に食い込んでくるだろう。

それゆえに、惜しい。

(理由はあるのだろうか……そちら側に堕ちるのに納得はしない)

フルンテイングを持ち直し、ジェインへと切り込む。

一瞬で距離を詰め、躊躇なくそれを振るう。

ジェインは何かの術式を剣に組み込んでいたのだろう、何かを叫んだが意味を為さない。

ソーロルムの術式。

己が認識した武器の中で標的とするものを選択してその攻撃力を0にすることによってジェインの持っていた剣の攻撃力は0にされ、ただの棒切れと化す。

ガキンッ!!

ジェインの持つ剣を弾き飛ばし、尚も攻撃の手を緩めることなくそのフルンテイングでジェインを一閃。

鮮血が周囲に散った。

ドサッ

ジェインがその場に仰向けに倒れる。

荒い息を吐きながら、まだ自分が生きているということに驚愕しているのか騎士団長のほうを見上げる。

「……何で……殺さない……？」

「……どこぞの傭兵の影響を受けたものでな。今更かもしれんが、貴様とてイギリス国民だ。女王や王女は貴様ののような輩でも決して見捨て切り捨てたりしないだろう。ならば我々が安々と切り捨てるなどできる筈がない」

「……はッ、綺麗事だなあ……」

「何とでも言うがいい。私は思い知らされたのだよ、とある少年で傭兵に……守るということをな」

「……守る、ねえ……」

ジェインは朦朧とする意識の中で、イギリスはまだ堕ちてはいないんじゃないかと思いつめていた。少なくとも目の前にいる騎士派の長はあいつらみたいな腐った連中ではない。

(……あの時も、こんな人達が大勢いれば……あんなことにならずにすんだのかなあ……)

思い出されるのは幼かった日々。自分とポードン、そしてライラ。3人で貧困街にバラックの家を造り、病弱だったライラのために薬代を稼ぐ、それがジェインとポードンの日課だった。

大した才能もないくせに親のコネや金でのうのうと暮らし自分達ストリートチルドレンをそこらのゴミを見るような目で侮蔑するクソ野郎から何度金を奪ったか解らない。

そんなことを続けていけば、当然自分たちは目をつけられる。

それでも兵士や腐った野郎の目を掻い潜り、ライラのために盗みや強盗をした。

それから暫くしたある日、それはやってきた。

いつものようにそこらを歩く一般人からスリをして金を奪い、薬を買って根城にしている貧困街の一角へと向かう俺とボードン。

『今日は大量だったな』

ボードンが嬉しそうに言う。こいつは本当に弟思いのいい奴だ。多分弟のためなら死んでもいいぐらい思ってるんだろっな。

『早くライラのところに戻ろっぜ』

『おっ』

ボードンがそう急かすので俺も彼の後に続いて走り出す。人通りの少ない裏道を通り、ロンドン郊外のスラムにある貧困街へと辿り着く。

此処には自分たちだけでなく多くのストリートチルドレンたちが住み着いている。それぞれが派閥を持ち縄張りを決め、大人顔負けの条約みたいなものまで決められている貧困街は謂わばイギリス国内にある小さな国のようなものだ。

その中でもボードンやジェインはかなり上に位置しており、存在する派閥の中でもトップクラスの實力と発言力を有していた。

『よおボードン、ジェイン。収穫はあつたか？』

貧困街の入口あたりで俺達に声を掛けてきたのは同じくストリートチルドレンで俺達の仲間、トレイン。

『おおトレイン、見るよ大量だぜ』

そう言ってボードンは盗んできた金を自慢気に見せびらかし始める。

『すげー！！今日も大量だな！！』

『ああ！！これでまたライラに薬を買ってやれる』

嬉しそうに言うボードンにトレインも嬉しそうに笑う。

『あ、そうだボードン、ジェイン』

先程までの嬉しそうな表情からは一転して神妙な顔つきになるトレイン。

『お前ら先週、政治家から金を奪っただろ？』

『あああのデブか』



『ボードンがアタツシユケースごと奪ったやつだな』

『その政治家がお前らのこと血眼で捜してるらしいんだ』

『ふーん、でもこんな辺鄙な場所そんな簡単に見つかったりしねーだろ』

ボードンが興味なさげに言う。

『俺も心配はないと思うけど一応頭に置いておいてくれよ……それに奴等がこの場所を売るかもしれないしな』

トレインが忌々しそつに奴等と言う。

奴等、とは俺達とは別の派閥をつくっている貧困街のストリートチルドレン達のことだ。自由に動き回るボードンや俺がここでの地位や発言力をもつことを良しとしていない奴等で、なにかと突っ掛かってくるのだ。

『チツ、奴等ならやりそうだな』

『だな』

『まあこの話は後にしてとりあえずライラのところ行こうぜ。もうすぐ昼だし』

トレインの発言によりとりあえず話を中断してライラがいる俺達の根城へと向かう。

『よーライラ。帰ったぞー』

『お帰り、兄さん』

バラックの中には粗末なベッドで横になっているライラが居た。ライラは身体をゆっくりと持ち上げてこちらにやってくる。

『体調はどうだ？』

『うん、今日は調子いいよ』

『そうか。でも薬はちゃんと飲んでおけよ？』

『わかってるよ』

近くのスーパーで買ってきた惣菜を壊れかけのテーブルの上に乱雑に並べながらボードンはライラに薬を手渡す。

『よし、食べようか』

ジェインとトレインもテーブルにつき、パンを片手に惣菜を食べ始める。

いつもと変わらない光景。

いつまでも続く筈だったその光景が、突然崩れ去ることになるとはこの時誰も予想だにしていなかった。

昼食をとった後、トレインとライラを家に残してボードンとジェインは再び街へと繰り出した。

3時間後。

街へと金を稼ぎに行っていたジエインとボードンが見たのは、最早貧困街の原形を留めていない程に破壊された家達だった。

『何……だよ、これ……』

凄惨な光景を目の当たりにして言葉が上手く出てこないボードン。

『まさか……!!』

ジエインは先程のトレーンの言葉を思い出していた。

『ボードン!!ライラ達が!!』

『!!……まさか!!』

ボードンも気がつき、稼いだ金や食料などその場に全て投げうつてバラックへと走っていく。

その途中にも無惨に破壊された家が幾つもあり、嫌な予感が募っていった。

そしてその嫌な予感は見事に的中してしまうこととなる。

『……』

『……そんな』

目の前にあるのは、先程まで昼食を食べていた筈の自分たちのバラツクだったもの。組み立ててあったソレは完璧に破壊され跡形もなくなっていた。

『ひでえ……………』

『やっぱりあのクソ野郎の仕業か……………？』

『！…おいアレ！…！』

ボードンが何かに気づき、残骸と化したバラツクへと駆け寄っている。

『トレイン！…！』

駆け寄った先にいたのは崩れたバラツクに下敷きになっているトレイン。

腰より下が完全に埋まっている。

『ボードン……………ジェイン……………』

殴られたのか額からは血が流れ頬には痣のようなものがあった。

『何があった！？』

ボードンが問う。

『いきなり……………黒服の奴等がやってきたと思ったら……………家を破壊し……………みんなを連れていきやがった……………』

息も絶え絶えに答えるトレイン。

『ライラが……ライラが連れてかれちゃった……』

唇を強く噛み、今にも泣き出してしまいそうなほどか細い声で言った。

『俺……それを止めさせようとして殴りかかったんだけど……ダメだった……!!』

『……そいつらライラを連れてどこに行ったんだ』

拳を握り締めるボードンが静かにトレインな尋ねる。

『多分……トラファルガー広場にあるクソ野郎の家だと思う……』

『そうか……』

『!! オイ待てよボードン!!』

踵を返して立ち去ろうとするボードンをジェインが呼び止める。

『ジェインはトレインをそこから出してやってくれ』

『お前はどっするつもりなんだよ!?!』

『……ライラを助け出す』

『だったら俺も……』

『ジェインは此処にいる。俺1人で行く』

今思えば此処で何が何でもボードンを引き留め、俺も一緒に行くべきだったんだ。

そうすれば、しばらくして帰ってきたボードンのあんな姿を見なくてすんだのに……

「騎士団長……」

「なんだ」

「俺達の目的は……変わらないよ」

でも、

とジェインは付け加える。

「ユニオン・ジャックの発動で皆が笑顔で本当に過ごせるなら……こんなことする必要もないのかもな……」

床に仰向けの状態で倒れているジェインには何が正しく、何が間違っているのかが解らなかった。

「貴様らの目的は解っている。そうまでして平等を求めるのには、

それなりの理由があるのだろう」

騎士団長はフルンティングをしまい、倒れているジエインに近寄り告げる。

「結末を見届ける。貴様らがしでかした事の重大さを受け止めた上で、イギリスの進むべき方向を見定めろ」

それだけ言つと騎士団長は背を向け、上ってきた階段を再び降りていく。

「……………」

生かされたジエインは無言で天井を見つめていた。

現在時刻

P M 1 7 : : 5 9

空には茜色に変わって深い紺色が広がるうとしていた。

\*\*\*

「……………ガフツ!？」

セントポール大聖堂最下層の礼拝堂。凧と対峙していたボードンが突然悶え始め、吐血した。

「なんだあ……！？お前、俺に何をしゃがった……！？」

凧は右手をボードンの方へと突き出しているだけだ。  
なのに、ボードンは何かしらのダメージを負っている。

「これは、あんまり人に使いたくないんだよなあ……」

体力を削られ時折ふらつく身体を強引に立たせながら、凧は言う。

「俺は水分子を操る能力者だ。学園都市にもそう登録されてるよ」

「……？」

「俺が学園都市のレベル5の中で第6位に位置付けられてるのってさ、この能力自体に研究価値や利益が見込めないからなんだよ」

「……何が言いたい？」

訳が解らない説明を始めた凧に怪訝な表情になるボードン。

「まあ聞けよ。研究価値が低いってのはさ、俺の能力は水分子を結合させるか凝結させることしかできないからなんだけど……」

そこまで言って一端区切り、ボードンへと言い放つ。

「俺の能力<sup>チカラ</sup>ってそれだけじゃないんだよ」

「……！？」



「俺は学園都市が知らない能力を3つほど隠しててさ、普段は絶対使わないんだけど都合が良いことに此処は学園都市の外。情報が洩れることはないだろ」

「……それがこの攻撃だったのか……？」

「正解」

口元の血を拭うボードンに凧は言う。

凧の隠し玉、それは水分子を操る能力者としては当然の能力、凧は今までこの能力を研究者たちには見せず、出来ないことにしていたために第6位という序列に位置していた。

もちろん隠していたのには理由がある。

学園都市において情報はとてつもなく重要な武器だ。それを大っぴらに書庫バンクに晒すなど自殺行為もいい所である。

御坂美琴のように学園都市中に存在が知れ渡っている広告塔のような役割を持つ人物でもない限り、できるだけ情報を漏洩させたくはないのだ。

ちなみに一方通行や垣根帝督なども書庫には記載されていない隠し玉を用意していたりする。

そして凧が持つ隠し玉の1つ。

これをボードンの体内に直接発動させたのだ。

イヴァヘレイション  
「蒸発」



### 第34話 過去と現在と隠し玉（後書き）

番外編アンケート経過

1、 凧楓のデート

5票

2、 凧たちの1年次の大覇星祭

1票

3、 凧楓帝督の出会い2票

受付は次話いっぱいにしたいと思います。

こんな案どうよ？も募集中なので感想と一緒に頂けたら嬉しいです

（ ^w^ ）

**第35話 決着と戦後処理と帰還（前書き）**

これにて修学旅行編完結です。

### 第35話 決着と戦後処理と帰還

「イヴァアヘレイション  
蒸発」

セントポール大聖堂の最下層、その礼拝堂。凧とボードンの対決はボードンが吐血したことにより形勢が一気に逆転した。

「ゴホツ……蒸発だと……？」

吐き出した血を拭いながらボードンは凧を睨み付ける。

「そうさ……文字通りお前の体内を流れる少量の血液を強制的に蒸発させてもらった……」

「だがそれがどうした……！！少量の血液を蒸発させたところで俺を殺すことなんて不可能だぜ……！！」

「焦るなよ……本領発揮はこれからだぜ……！！」

ふらつく身体に無理矢理喝を入れて叫ぶ。

「今お前の体内は血液という水分が減って必死に水分を補充しようとしている……」

そこで、

と風が付け加えながらボードンへ向けていた右手をグッと閉じる。

「ハイミエイト  
浸透」

「……………」

先程のように風が何かを口にしているが吐血するといった症状は現れない。

ボードンは風の攻撃が失敗したのだと思い、反撃に移ろうとしたのだが、

「……………!?!」

突然激しい目眩と頭痛に襲われた。

たまらず膝を着き頭を抱えるボードン。

「てめえ……………一体……………何を……………」

霞む視界で風を捉え睨み付けるが、それも段々と輪郭がぼやけてくる。

「簡単なことだ……………お前の回りにただよう水分子を水分としてお前の皮膚から浸透させた……………大量にだ……………」

体温が下がり風自身も身体がよろけて倒れそうになるが、それを堪

えて続ける。

「今お前の体内には許容範囲以上の水分が詰め込まれている……人体が過剰な水分を投与された場合、どうなるか知ってるか？」

「ま、まさか……」

焦点が定まらなくなってきた眼をカツと見開き言うボードン。それに凧は答えた。

「そう……水中毒だ」

水中毒。

人体に必要な以上の過剰な水分が短時間で投与された場合、細胞外液の浸透圧が異常に下がり、低ナトリウム血症によって意識障害を引き起こす危険な状態。

凧は1度蒸発によって体内が水分を求める状態を意図的に作り出し、浸透圧によって皮膚から体内へ一気に必要以上の水分を投与する。1度貧血状態をつくることで浸透圧の低下が著しくなるため意識障害を素早く引き起こすことが可能となる。

「クソが……発動時刻まであと5分だつてのに……」

此処が地下であるため外の様子は解らないがどうやら日は暮れているらしく、ボードンが何やらブツブツと悔しそうに呻いている。

ヴィリアンが生きているところを見ると、血液も抜かれていなかったようだ。

「ヴェリアン様ッ!!」

ドバンッ!!

という勢いの良い音と共に扉が開かれ騎士団長が礼拝堂へと入ってきた。

騎士団長はすぐにヴェリアンと凧、ボードンの姿を認めると先ずはヴェリアンのもとへと駆け寄っていった。

「ご無事で何より……!!」

「来てくれると信じていましたよ」

ニコツと笑うヴェリアンだが、直ぐ様凧のほうを向いて心配そうな表情を見せ顔を曇らせる。

「騎士団長！彼が私を助けてくれたのです!!」

凧はボードンを行動不能にして安心してしまったのか、両膝からガツクリと崩れ落ちた。

「一条君!!」

騎士団長が凧を地面に倒れるのを間一髪で受け止め、意識が朦朧としている凧に呼びかける。

(……騎士団長？よかった……間に合ったんだな……)



目の前で騎士団長とヴィリアンが自分の顔を覗き込みながら何か叫んでいるが全く耳に入ってはこない。

(……)

何か言いかけた風だったが、そこで意識の糸はブツツリと切れた。

ロンドンの空には、茜色の夕焼けに代わり漆黒の夜空が広がっていた。

\*

「……ん」

重たい瞼を持ち上げてうつすらと目を開ける。目の前には全く知らない白を基調とした豪華な天井が広がっていた。

「お、目を覚ましたか風が」

聞き覚えのある声がベッドの脇から聞こえてくる。

「……帝督か」

ベッドの脇にソファを置いて座っていたのは垣根帝督だった。

「無事に王女を救出できたみたいだな」

「助けたのは騎士団長だけだな……」

自嘲気味に笑う凧に対し、帝督は言う。

「お前がリーダーを止めたんだから助けたみたいなものだろ」

「ウム、その通りだ」

ガチャツ

と部屋の扉を開いて騎士団長とその後ろにくつつくようにしてヴェリアンが入室してきた。

「君が居たおかげでヴェリアン様を助け出す事ができた。騎士派の長として礼を言う」

「あ、ありがとうございます」

騎士団長とヴェリアンがそろって頭を下げる。イギリス清教を代表する騎士派の長とイギリス王室の第三王女、そんな2人に頭を下げられているという状況は本来ならばとんでもない事なのだが、未だに頭がボンヤリしている凧は事のすごさにいまいちついていけない。

「あ、帝督。今何時だ!？」

こんなことを言い出す始末だ。

『お前な……』と帝督が呆れながら言うが凧にとっては超重要問題

である。

( また澤ちゃんに説教されるのはもうごめんだ……!! )

初日の澤ちゃんの説教を思い出して頭を抱える凧。

「 10時だ 」

帝督が携帯の画面を確認しながら言う。

「 ……マジかよ、4時間も寝てたのか 」

これは澤ちゃんからのお説教決定だな、と凧が考えているとそれを帝督が否定する。

「 は? いや午前10時だぞ? 」

「 ……はい? 」

理解不能な帝督の言葉に一瞬処理落ちしそうになったがそれを堪えて騎士団長の方に首を向けて目で尋ねる。

『 ……朝? 』

「 ウム、朝食には些か遅い時間だが食べるかね? 必要ならば用意しよう 」

「 そういつ問題じゃねえよッ! 」

ガバアッ! !

と凧がベッドから飛び上がる。

午前10時？朝食？てことは俺は半日以上も寝てたってことか？修学旅行は？今日帰るって事だよな？

ズキッ

「いてて……」

そんな事を悶々と考えていたら身体に痛みが走った。どうやら想像以上に身体に負担がかかっていたらしい。

（ま、それもそうか……蒸発や浸透はかなり複雑な演算しなくちゃならないしな）

「おい大丈夫か尻？」

「ああ、大丈夫」

「修学旅行については心配しなくてもいい。私達が君たちの学校に連絡しておいたからな」

騎士団長が尻たちに向かって言う。

「連絡？」

「ああ、君たちは我々の恩人だからな。丁重にもてなさせてもらおうと君たちの担任と学園長に連絡させてもらった。飛行機の搭乗までに合流すればいいそうだ」

「そういうことだ尻。搭乗時間は午後3時だからそれまでゆっくりしよっぜ」

事前に聞かされていたらしい帝督が騎士団長に続いて言う。

(いきなりイギリス王室から連絡あって澤ちゃんたちどんな反応してんだろうな)

びっくりどころじゃ済まないよなあ、とか思いながら苦笑する。

「まあ何であれとにかく君たちには感謝している。必要なときは連絡をくれ、いつでも駆けつけよう」

そう言っただけで騎士団長は懐から取り出した名刺を凧と帝督に手渡す。

「ありがとう」

「サンキュー」

「後ほど女王が君たちに挨拶に行く筈だからそれまでくつろいでくれ」

「わかった」

騎士団長とほぼ空気だったヴェリアンが部屋から出ていった後、凧と帝督はイギリスの将来を変えうる闘いに参加していたということをやつやく実感した。

「今考えてたらスゲーよな」

「ああ、国を変えるかもしれない闘いの中にいたんだもんな」

帝督の発言に凧も同意する。

なんだか信じられないような出来事を体験し、それをゆっくりと思

い出しているよ

ドタドタドタッ！

部屋の外から喧しい足音が近づいてくる。それに伴ってギヤーギヤーと口論しているらしい声も。

『女王！！そんな恰好で彼らの前に立たないで下さいッ！！』

『何を言うか貴様！！このインパクトが大事なんだぞ！！』

『だからっていい年こいたババアがランドセルなんて持ち出すんじゃないやねえよッ！！』

『なッ！？言っただな！？ババアって言っただな！！もういい貴様の言う事など聞かん！！』

『駄々こねるのもいい加減にしるよバカ女王ッ！！貴方は女王なんですから女王らしい振る舞いをして下さい！！』

『……むう、仕方無い。ランドセルは止めるか』

『そうしてください……ってちょっと待てその水着はどこから引っ張り出しやがったああああ！！』

「……………」  
「……………」

何故かとてつもなく恐ろしいモノを想像してしまいそうになったため2人して高速で頭を横に振る。

扉の向こうが何やら静かになり、やがて静かに扉が開かれる。

「起きたみたいだねお前たち」

扉を開いて現れたのはいつものドレスを着た女王エリザードとぐったりしている騎士団長。

女王がビキニというおぞましいモノを想像してしまっていた風たちはホッと胸を撫で下ろす。

「まずは礼を言おう。我が娘を助けてくれてありがとうね」

「……女王に頭を下げられている!!」

「今更かよッ!!」

ハツとした表情で叫ぶ風に思わずツッコミを帝督がいれる。

「一応お前たちには事の顛末を話しておこうか」

近くのソファに座ってエリザードが口を開く。

「簡潔に言えば魔術結社“使徒の道と成りし者”は壊滅した。お前がリーダーであるボードンシエイカーを戦闘不能にしたのだから当たり前だな」

広い部屋をエリザードの言葉だけが支配する。

「……ボードンたちは」

「安心しな。ボードンを含め殆どの奴等が生きてるよ」

不安気に口を開く風が質問を言い切るよりも早くエリザードがそれに答えた。

「如何なる理由であれ王女誘拐など許されることではない……しかし奴等の事情も事情だ、これからのイギリスにはそういう奴等も必要かもしれない」

「そうですね……」

「話は以上だ。あとはゆっくりしている、時間になれば空港まで送ってやる」

話を終えたエリザードは騎士団長を引き連れ部屋から出ていった。

その後時間が迫ってきたため騎士団長が足を確保し2人を空港まで送ってくれた。『またイギリスに来たら連絡をくれ、すぐに駆けつけよう』と言う騎士団長と握手をして空港内へと足を踏み入れた。

その空港内のロビー。

バチーーンッ！！



2 Aの皆と合流した途端に、思いつきり楓に頬をひっぱたかれた。

「!?!?!?!」

意味が解らない凧はたたかれた頬を押さえながら楓の方を見る。

「アンター一体何やってたのよッ!!」

そこには涙目になりながら怒りのオーラを撒き散らす修羅の姿。

(どつやら澤ちゃんは生徒たちには詳しい事情を話していないらしい)

「待て楓!!これには山よりも深い事情があるんだ!!」

「めっちゃめっちゃ浅いじゃないッ!!」

あ、ヤベ間違えた。

などと冷や汗を流しているとトントと楓が凧の胸に倒れ込むように抱き付く。

「……心配……したのよ……」

「……ごめん」

よく見れば楓は小刻みに震えていた。

一晩帰ってこなかったのだからそりゃ心配もするだろう。(注 凧はやっぱりどこかずれています)

凧はそれを迎え入れるような形で楓の肩をそっと抱き寄せる。

「……心配かけて悪かったよ」

「……うん」

なんだかカップルみたいな雰囲気か漂っているが断っておこう。彼らは決して付き合っているわけではない。

そしてもう一つ、ここは多くの人が往来する空港のロビーである。

周囲からは

「あらあら」

「若いなあ」

「いいわねえ」

などの声が聞こえてくる。当の2人は全く気がついていないわけだが……。

最後に忘れてはならないのがクラスの面々である。

「いいちいじよおおおおおおお!!」

「殺せえええええ!!」

「どうせ昨日も金髪美女の家に泊まってたんだろおおお!!」

佐竹を筆頭に失墜委員会が各々の武器を携えて尻に襲いかかる。

「我らがアイドル橘楓のために死にさせ一条おおお!!」

「ギャアアアアッ!!」

イギリスの空港内に尻の断末魔が響き渡る。

こうして尻たち長点上機学園の修学旅行が終了した。尻と帝督がイ

ギリスの危機を救ったなんて他の生徒は夢にも思わずに。

### 第35話 決着と戦後処理と帰還（後書き）

アンケートの結果番外編では凧楓デート案を採用することになりました。

アンケートにご協力いただいた皆さんありがとうございますm（  
ー）m

番外編を挟んで新章はいよいよ一端覧祭です！！

**番外編 凧と楓の初デート【前編】（前書き）**

はい番外編です。

シリーズ0です（笑）

前中後編の三部作でまとめたいと思います。

では、

番外編 凧と楓の初デート【前編】

修学旅行も終わり、11月下旬に開催予定の一端覧祭に向けてそろそろ準備を始めるかあ、といった雰囲気が始めた長点上機学園。2・Aでも何やら準備を始めようかという雰囲気がクラスに充満していた。

本日金曜日。

現在5時限目。

この時間はLHRで一端覧祭でクラスでやる出し物を決める筈なのだが、翌週から始まる半日授業（午後からは一端覧祭の準備）や超巨大文化祭を前にテンションが上がってしまった生徒たちは話し合いそっちのけで騒いでいる。

担任の澤ちゃんは何やら一端覧祭の打ち合わせがあるらしく緊急の職員会議に出席しているので教室には居ない。

とどのつまり生徒たちのやりたい放題。

このクラスはレベル5の能力者が4人もいるクラスであり他クラスからも一置かれている節があるため、多少の騒ぎなら大目に見てくれたりする。

そんな若干騒がしくなり始めた教室の一角、楓の机にやってきた未来が前の席の椅子を持ってきて座る。

「楓」

そういう未来はなにやら良い笑顔を浮かべている。

「どーしたの？そんなニコニコして」

建前で楓はそう言ったが、未来がこんな意味ありげな笑みを浮かべながら自分の所にやってくる時は大概碌でもないことを考えているということを知っている。

そして実際、それは見事に的中することとなる。

「一端覧祭で一条くんに告白しちゃおう」

「ムリ!!」

未来の提案を二文字でバツサリ切り捨てる。

「何でよ、一条君のこと嫌いなの？」

意地の悪い笑みを浮かべる未来が猫なで声で楓に迫る。

「べ、別に嫌いじゃないし……むしろ……」

みるみる顔が真っ赤に染まり、「ゴニョゴニョ」と呟く楓。

「じゃあ何でムリなのよ？」

「そ、それはその……やっぱり向こうからしてもらいたいし……」

茹で蛸みたいに真っ赤になった顔で本音をポロポロと溢していく。

「一条君もただアンタも相当奥手よねえ」

ハア、とため息をつきながら未来は真っ赤になった楓を見て言う。

「し、仕方無いじゃない。なんか凧とは幼なじみみたいなものだからナーナーになっちゃってるし……」

凧とてただ凧が仕掛けてくるのを待っているわけではない。

シチュエーション作りや2人きりの時間をつくったりと色々やっているのだが、如何せん凧も奥手ゆえに上手くいかず、このままの関係がズルズルと続いて気づけばもう高校2年だ。

流石に焦りを感じ初めてきているのでこの関係を恋人へとどうにか発展させたいとは切に願っている。

(ていうか凧があんなに人気あるなんて知らなかったし……)

思い出されるのは大覇星祭初日の夜に行われた男女人気投票。1年のときも確かなかなか上の順位にいたと思うが今年は後輩ができてその人気が一気に跳ね上がったと思う。

このままではいつか凧が他の女に取られてしまうのではないかと気がでないのだ。(実際は後輩たちは凧と凧は既に付き合っているものだと思っているため後輩に関しては心配ないのだが)

「はあ……」

このままじゃダメだよなあと思いきさくため息をつくとそれをまるで待っていたかのように未来がニヤリッと口元を吊り上げる。

「じゃじゃーん!! そんなアナタに本日お勧めするのはコレ!」

ドバーンと効果音が聞こえてきそうな程の勢いでポケットから何か



を取り出し、某通販番組の司会者のような口調で話し出す未来。

「…………チケツト？」

未来がポケットから取り出したのは2枚のチケツトだった。

「そ、第六学区に新しくできるアミューズメントパーク知ってる？」

「ああ、明日オープンするってCMとかでやってたわね」

「そうそう。でね、そのチケツトを私は入手したわけなのよ」

自慢げにチケツトをヒラヒラさせながら未来は言う。

「はい、コレあげるから一条君と行ってきなさいよ」

持っていたチケツトを楓に手渡す。

「ええ！？い、いいわよ別に、未来が行く予定だったんでしょ？」

首を左右に振って受け取れないという楓に未来は続けた。

「ホントはさ…………私コレで削板君誘って一緒に行くつもりだったんだけど…………」

急に未来からどんよりとしたオーラが放たれる。

「削板君…………明日用事で研究所に行かないといけないんだってさ…………」

どこか遠い目で力なく言う未来。

「このチケットオープン当日しか使えないし……だから一条君と2人で行ってきなよ」

どんよりとした雰囲気から一転パアツと明るくなる未来。  
喜怒哀楽が激しい子だ。

「う、うん……」

ここまでしてもらって断るわけにもいかず、楓はチケットを受け取る。チケットには『ウルトラハイパーパーク』と記載されていた。

(ウルトラかハイパーかどっちかにしなさいよ)

チケットを見てそんなことを思う楓だが、とにもかくにも先ずは楓を誘わなくては話にならない。

クルリと体を反転させて教室を見回すと楓は帝督と何やら話をしていた。

普通に考えれば放課後などの人が少ない時に楓にこの事を伝えるの  
だろうが、残念ながら現在の楓は突然やってきたチャンスに正常な  
判断能力を根こそぎ失っていた。

(こ、これってもしかしてデート!? 楓とデート 楓とデート 楓とデ  
ート 楓とデート 楓とデート)

そんな状態の彼女だから、なりふり構っていらなかった。

ガタンと椅子から立ち上がり、一直線に楓の元へと歩いていく。頭

の中は依然として真っ白な常態で。

\*

「ん？」

ふと見てみれば、楓がこちらに向かって歩いてくる。何やら顔が赤いのは気のせいなのだろうか。

「どづした楓？」

目の前で立ち止まった楓に対してそう声をかける。

「あ、あのね……」

目をキョロキョロと動かしながらモジモジと楓が右手を差し出してくる。

そこにはチケットが握られていた。

「これ明日オープンとかいうアミューズメントパークか？」

「うん、その……一緒に行かない……？」

「！？」

何の気なしに話を聞いていた凧だったがその発言で一気に顔が赤く

なる。

しかも目の前の楓は頬を紅色に染め上目遣いという最強コンボ。断る理由はどこを探しても見つからないだろう。

「…………お、おお。いいけど」

隣で帝督が思いきりニヤニヤしているがここはスルーしておく。

「そ、そつか！！じゃあ明日の9時にね！！」

一気に笑顔になった楓はそのまま約束をして自分の席に戻っていった。

部屋が隣なので集場所などを決める必要もない。

(これってまさかデートか…………！？)

「よかったじゃねえか凧。一步前進か？」

帝督が茶会しているのか喜んでいるのかいまちよく解らない笑みを向けてくる。

「ま、まあな。たまにはいいかもな」

自分なりに平静を装っているつもりだがついつい顔が綻んでしまう。

「でもいいのか？」

「ん？何が？」

帝督の発言の意味が理解できなかった凧は？マークを頭上に浮かべ

ながら尋ねる。

そんな凧に哀れむような視線を投げ掛け、指で凧の背後を指し示す。

「後ろ？」

凧が指し示されたほうに振り返ってみると

ギューイイインツ

ドルルドルルン

ガチャツ

ブオンツ ブオンツ

一体どこからそんなモノ持ち出しやがったんだお前らと叫びたくなるような獲物を片手に殺気を出しまくる失墜委員会の面々。

その先頭に立つ佐竹が凧に死刑宣告を告げる。

「罪人、一条凧。奴は我らがアイドル橘楓とあまつさえデートに行こうとしている。よってここに死刑を言い渡す」

「ちょっと待てええ！！おかしいだろ！！俺は誘われただけ……」

「黙れこの裏切り者があ！！」

「橘とデートだと！？俺に変われ！！」

「橘は俺の嫁だぞ！！」

「ちげえよ俺の嫁だ！！」

「死ね一条!!」

「我ら失墜委員会の礎となれ!!」

「お前らどんだけ理不尽な理由並べてんだ!!」

凧が叫ぶが最早失墜委員会の面々には聞こえていない。

それを見て絶句する凧の肩に帝督が手をポンツとのせて言う。

「……明日まで生きてればいいな」

「何ニヤニヤしながら言ってるんだお前!!」

「死ね一条おお!!」

「うわッ、来るな!!ギャアアアッ!!」

(……なんか前もこんな光景見たよな)

目の前で無惨な姿にされていく凧を見ながら帝督はふと思う。

後には原型を失った凧がボロ雑巾のように打ち捨てられていた。

番外編 凧と楓の初デート【前編】（後書き）

次回ようやくデート開始。

番外編 凧と楓の初デート【中編】（前書き）

この番外編好評なのかお気に入り登録が増える（笑）

できたら感想がほしいです（T-T）

批評・要望もばっちりです



番外編 凧と楓の初デート【中編】

「はあ？何言ってるんだよお前……」

『……………！！……………！！……………！！』

「いやだから何で俺がお前と……」

『……………！！……………！！……………！！』

「だからおかしいだろいきなり……」

『……………！！……………！！……………！！』

「……………はあ。解ったよ……………行きやあいいんだろ行きやあ」

『……………！！……………！！……………！！』

「ああ、じゃあなあ」

ズレ

「……………はあ」

\*

本日も土曜日。

天候は快晴。

絶好のデート日和である。

ピピピピピッ

「うーん……」

カチッ

眠たい目をこすりながら目覚まし時計を止め、布団からもぞもぞと出る。

「ふあゝあ……眠た」

時刻は朝5時。

楓との待ち合わせ（部屋の前で）は9時であり、アミューズメントパークがオープンするのが10時なのでかなり早い時間なのだが、夙自身昨日はイヤに緊張してなかなか寝付けず、ようやく眠れたと思っただけ遅刻しないようにと早めにセットした目覚まし時計に叩き起こされ今に至るわけである。

「二度寝は……ムリだな。今寝たら起きれん」

睡魔を無理矢理払いのけキッチンへと向かう。テーブルにあった食パンをトースターにセットし、冷蔵庫から麦茶を取り出して喉を潤す。

『ふう』と軽く息をはいてテーブルにつく。焼けたパンにバターを塗りながら凧は今日のデートのプランを考えていた。

(とりあえず第六学区まではバスを使って……着いてからはどうしようかな、まずは遊園地からかなあ)

トーストをかじりながら何時までたってもまとまらない計画を頭の中で立て直す。

(やっぱり全部回りたいよなあ……デ、デートだし)

楓とのデートだと意識し始めた瞬間からカアツと一気に顔が赤くなる。

思えばこんなあからさまなデートなど初めてである。

大霸王祭時のナイトパレードでは2人で花火を見たりもしたが、あの時はあまりの楓の人気ぶりに行き場のない怒りを感じ半ば強引に彼女の手をとった。

(うーん……我ながら何であんなにイライラしたんだか)

忘れられがちなのもう一度此の場を借りて言うておこう。

彼、一条凧は件のツンツン頭程ではないが鈍感である。

凧にある程度の好意は抱いていたりもするがそれが恋愛感情だとは気付いていない。(帝督は完全に気付いているが)

故に、今日のデートにしても凧とのデートに緊張しているというよりは女の子とのデートに緊張している。もちろん凧だから了承したわけだが。

「さて、着替えるか」

残ったトーストを口に放り込み席を立つ。クローゼットを開いて今日着る服を吟味する。

（あいつのことだからきつと水色の服着てくるよなあ、いや秋だしベージュか？）

相手の服装と合う色の服を着ようと私服を前に顎に手を添えて唸る。

この10年ほどで楓の服の好みは把握しているため、結局一番それに合いそうな服を選ぶ。

「……よし」

選んだのは青いシャツに黒のジャケット、下もダメージ加工の黒いジーンズにブーツと全体的に落ち着いた感じで着こなす。

何故シャツが青なのか？

それは楓が青が好きでありおそらく青系の服を着てくると思ったからだ。

ピンポンッ

「あ、やベッ」

インターフォンが鳴り時計を見ればもうすぐ9時である。服装

選びに2時間以上も費やしていたのだ。

急いで身支度を整え部屋のドアを開ける。

「おはよ、もう準備できてる？」

ドアの先に居たのは私服姿の楓。

楓の予想通り薄い水色のワンピースとサブリーナ丈のデニムパンツにパンプスという如何にも女の子らしい服装で立っている。

「お、おう。今行くから」

（やばい、何だか楓が可愛く見える……）

「うん」

（へ、変じゃないかな……）

「ちょっと待ってて」

そう言って1度扉を閉める。

バタンッ

（私服は修学旅行で見たはずだったけど……いいな）

グッ

と何に対してか解らないガッツポーズをする楓。

一方扉の先にいる楓はと言つと……

（楓……私服カッコよかったな）

似たり寄ったりである。

「……………お待たせ」

数分後、準備を終えた凧が出てきて2人でバス停へと向かう。

……………若干の距離感が気になるところである。

凧の隣を歩く楓とは1m程距離がある。

これはもちろん2人の性格が影響しているからなのだが、流石にスタート直後にコレでは先が思いやられる。

「……………あのさ、もうちょっとこっち寄れよ」

「うえ！？う、うん……………」

言われた楓がトコトコと凧の隣に近寄り、寄り添うように歩く。

(はあ……………何かすげえ心臓が痛いんだけど)

(凧の隣……………あ、なんか良い匂いがする)

実は凧はキツくない香水を微量つけてきている。

年頃の健康男児なのでオシャレには大なり小なり気を使う。

……………そんな少しだけ2人の距離が縮まったのを後方10m辺りの建物の影から見つめる影が2つ。

「おゝ距離一気に縮まったよ」

「珍しく風が積極的になってやがるなア」

神田未来と一方通行だ。

「ところで垣根君は？昨日あれだけ尾行するの乗り気だったのに」

「何か急用とかでドタキャンだったよ。まったく何で俺がこんな面倒くせエ事しなくちゃいけねエンだ」

「まーまーいいじゃん。一方通行君だってあの2人がどうなるか気になるでしょ？」

「そりやまアな。いい加減イライラしてきたとこだ」

「これはくつつくいいチャンス！……あ、2人がバスに乗ったよ、私達も行こー！」

（絶対コイツ楽しんでるよなア）

削板と一緒に行けなかったからなのか自ら率先して楽しもうとしているくらいがある未来。そんな彼女を見ながら一方通行は小さくため息をつき、『面倒くせエ』と不平を口にしながらもバスへと乗り込んで行った。

「これか」

「そうみたいね」

バスを降り、少し歩くと人が多く集まっているエリアへと辿り着いた。おそらくオープン待ちで並んでいるのだろう、長蛇の列ができていた。

現在時刻はオープン10分前の09:50

凧たちも列の最後尾に並び開園を待つ。

「やっぱり第六学区は賑やかだなあ」

「そうね。やっぱり他の学区とは雰囲気が違うわ」

第六学区。

学園都市のアミューズメント施設が集結した学区であり、街全体がやや浮世離れしているのが特徴だ。

観光客を狙った詐欺も多いことが最近問題として挙げられている。

「どこから回るつもりなの？」

遠回しに『ちゃんと計画はたててきたんでしょっかね？』と楓が横に並び凧に尋ねる。

「ま、まあ一応な。最初は水族館のエリアから回ろうと思うんだけど



ど」

そう言うて尻はポケットからウルトラハイパーパークのパンフレットを取り出す。

ウルトラハイパーパーク。

ウルトラハイパーかどっちかにしろよ、とツッコミたくなるのはこの際目を瞑るが、スケール的にはまさにその通りだ。

ウルトラハイパーパークの施設内は4つのエリアに別れており、それぞれが独立して運営されている。

施設内の北側にあるのが動物園エリア。

学園都市内唯一の動物園であり一般の動物園と同じような動物が観賞できる。

施設内の東側にあるのは遊園地エリア。

ジェットコースターや観覧車などのベーシックなアトラクションから学園都市の大学生たちが開発し、安全面もしっかり考慮された試作機なども設置されており、一般の遊園地とは規模が大きく異なる。

施設内の西側にあるのがフードエリア。

和食、中華、フレンチ、イタリアンなどの様々な料理を堪能でき、学園都市内で栽培された野菜を使った店なども出店されている。

そして施設内の南側にあるのが水族館エリアだ。

クジラや鯨と言った巨大なものからクラゲやタツノオトシゴといったミニサイズまで多種多様な海の生物が水槽の中を泳ぎ回っている。

ちなみに今凧たちが並んでいるウルトラハイパーパークの入口は南側にある水族館の手前に設けられているため入場して真っ先に見えるてくるのが水族館エリアなのである。

「水族館かあ、学園都市に来てから初めて行くわ」

「俺もだつて。……お、開錠したみいだぞ」

前の列の人達が緩やかに移動を開始している。その波に乗って、凧と楓もウルトラハイパーパークへと入っていった。

その30m程後ろに並んでいる未来と一方通行。

「うーん、ここからじゃ2人がよく見えないわねえ」

精一杯背伸びをして先にいる凧たちを確認しようとするが、運が悪いくことに未来と一方通行の前に並んでいるカツプルの男が身長190はあるつかという長身であり、身長が158しかない未来が『ふんっ ふんっ』といくら頑張つてつま先立ちをしたところでその大きな背中に阻まれるだけである。

「その奇行をやめろ。関係者だと思われたくねエ」

いつまでもむーむー隣で唸っている未来と少しでも距離をとろうと横にズレる。

「む？何で離れるわけ？」

「お前の連れだと思われたくねエンだよ」

「なんでよ!?!」

「だからその奇行をやめろっつってんだ」

一方通行と未来がギャーギャーと傍目カップルのように言い合いをしている更に後方30m。

「……何故にこうなった?」

おかしい。

おかしいぞ?

確か今日は凧たちのデートを一方通行や神田と面白おかしく尾行する予定だった筈だ。

それなのにだ。

俺は今普通にこの入場待ちの列に並んでしまっている。

「帝督?」

隣からかけられた声に半ば諦めたかのように反応する垣根帝督。彼も今日ウルトラハイパーパークに客として足を運んでいた。

「……なんだよ」

隣に居る女性に力なく答える帝督。

「アンタ楽しむつもりある？さっきからちつとも楽しそうじゃないんだけど」

「……昨日いきなり電話されて連れてこられて楽しいもクソもあるか」

「さくでどこから回ろっかなあ」

「話フツといて華麗にスルーすんじゃないよ！！」

思えば昔からコイツはこうだった。

良く言えば自由奔放、悪く言えば自分勝手。

彼女から昨日かかってきた内容とは「チケット手に入れたから明日一緒に行くわよ」だ。

一緒に行かない？ではない。一緒に行くわよ、である。つまり帝督が行くことは始めから決定事項となっていたのだ。

もちろん最初は断った帝督であったが、

『来ないとアンタの秘密ばらすわよ』

の一言で帝督の参戦が決定した。

(あの秘密だけはばらされるわけにはいかない……！！！)

頭を抱えどんよりとした空気を漂わせる帝督。そんな彼とは対照的に、隣に居る彼女はなんだか楽しそうだ。

高そうな秋物のコートを羽織り、膝下まである長めのスカートからはストッキングを履いた綺麗な脚がのびている。

「あ、開いたよ帝督。ほらっ、さっさと行くよ」

そう言っただけで彼女は帝督の腕を強引に引つ張って施設内へと入っていく。

「……………はあ」

垣根帝督はもう一度盛大にため息を吐く。

これはもう諦めるしかないな、と半ば開き直り、いっそ楽しんでやるかと思いを新たにす。

(黙ってれば美人なんだけどなあ……………)

強引に引つ張る女性、

麦野沈利を見ながら思う。

今日ここに互いに居ることを知らない三者のデート(?)が開始される。

長い長い1日が始まった。

番外編 凧と楓の初デート【中編】（後書き）

ようやくデートが始まった。  
次で完結できんのかなこれ……

番外編 凧と楓の初デート【後編】（前書き）

投稿が遅れましてスイマセン；

色々考えてたら中々まとまりませんでした。  
なのでいつもよりは長めです。

でわ

## 番外編 凧と楓の初デート【後編】

デートをすることになった凧と楓、それを尾行する一方通行と未来、何故か来てしまった帝督と沈利。

しかし、ウルトラハイパーパーク（以降UHP）にやって来ているのは彼らだけではなかった。

奴等を最初に発見したのは凧だ。

水族館エリアに入り、いざ水族館内に入ろうかと歩いていると前方に何だか見覚えのある奴等を発見した。

「……げっ!!」

「? どうしたの?」

思わず顔をひきつらせて声を出してしまった凧に楓が不思議そうに問いかける。

「ちよつとこつち来い!!」

「え?え!??」

強引に楓の腕を掴み水族館の入口とは逆方向に走っていく。

「ちよ、凧!??どうしたのよ!??」

突然の凧の行動に何が何だか解らないまま連れられていく楓。そのまま2人は水族館の入口から離れた所にあつたベンチの後ろに身を潜め、ひよっこりと鼻から上だけを出して入口付近に目をやる。



「一体何なの……」

「（シッ！―あんまり大きい声出すなよ、奴等に見つかっちまう）」

「（だから奴等って誰なのよ!?!）」

そう言う凧に凧はゆっくりと前方を指し示すと、

「（……アレだ）」

指差された方向を見てみれば何ともまあ見覚えのある制服の奴等が15人程水族館の入口でたむろっている。

途端に顔をひきつらせた楓が、

「（……ねえ、アレってまさか……）」

「（認めるのは不本意この上ないが……うちの制服着てるし）」

見覚えがある制服とは凧たち長点上機学園のものであり、これまた見覚えのある顔が並んでいた。

「（……佐竹君たち……よね?）」

凧は大きいため息をつき、明らかに面倒くさそうに言う。

「（ああ、……アレは失墜委員会の奴等だ）」

おそらく凧と楓のデートを邪魔し、あわよくば自分が楓とデートしようと考えている失墜委員会15名がそこに勢揃いしていた。

「（どーするの？）」

「（どーするもこーするも……水族館は諦めるしかないだろ）」

「（ええ〜……、イルカ見たかったのに）」

「（お前は俺に八つ裂きにされるってのか？）」

「（……それは困るわね）」

「（じゃあ悪いが水族館は諦めてくれ……!!）」

「（……解った）」

楓の合意が得られた所で凧たちは失墜委員会に見つからないようにそそくさと移動を開始する。

「（今南にいるから……東側の遊園地でいいか？）」

「（うん、それでいい）」

その後2人は上手く人混みに紛れ東側へと消えていった。

\*

「ほらほら一方通行君！！楓たちあっちに行っちゃったよ！！」

「解ったからあんまデケエ声出すなよ」

凧と楓を尾行していた未来と一方通行は東側へと消えていった2人を追跡すべく水族館入口付近の物陰から出てその後を追う。

しかし、

「あ」

「あッ」

「!？」

「……」

「あん？」

ふと歩きながら入口の方を見れば見覚えのある顔がキレイに並んでいる。

向こうも気付いているらしく一方通行を、正確には一方通行たちを凝視していた。

「どーしたのー？早く行くよ」

先を歩いていた未来が一方通行を急かすように言ってくる。

これはもちろん凧たちを見失わないように急げ、という意味なのだが、事情を知らない失墜委員会たちには……

「一方通行あああああああ！！」

「貴様もそちら側の人間だったのかああ!!」

「神田は俺の嫁だぞ!!」

「死刑だっ!!」

まるで一方通行と未来がデートしているかのように映ってしまうわけ、

「被告、一方通行。貴様は我々とは相容れない存在として死刑を宣告するッ!!」

失墜委員会リーダー佐竹が何やら紙を広げそう告げると、

「うおおおお!!」

「死ぬがいいッ!!」

「俺だって甘い汁が吸いたいんじゃああああああ!!」

「天誅!!」

など様々な罵詈雑言を言いながら一方通行へと襲いかかる。

「チッ、デメエら……」

勝手な誤解で襲われる一方通行としてはたまったものではないが、こいつらは一度叩きのめさないと駄目だと思い、そのまま動かさず静止する。

「ぎゃあっ!!」

「ぐあっ!?!」

「ばへるっ!!」

「ぶぎゅッ!!」

「ぼりでんとッ!?!」

反射が設定してあるため失墜委員会の攻撃はすべて弾かれる。通常ならば骨も砕けてしまう筈のだが、どういう訳か失墜委員会は吹き飛ばされはしたものの腕を押さえているだけで重傷ではないようだ。

「オマエ等今日の所は帰れ。凧たちに手出すなよ」

「それは出来ない相談だぞ一方通行……」

ゆっくりと起き上がる佐竹が言う。

「そオカ。ならオマエ等此処に並べ。キレイに頭弾いてやるから」

「……サヨウナラ！！一方通行さん！！」

まるで統率のとれた軍隊のように完璧な敬礼を一方通行にして一目散に出口へと走っていった。

「おーい！！何してんの早くー！！」

かなり遠くから未来が一方通行に呼びかけてくる。

「……はア」

隠すこともせず、一方通行は大きなため息をついた。

「帝督、次あれに乗りたい」

「……あのさ、もうお前1人で乗ってこいよ……」

UHP東側の遊園地エリアでジェットコースターに乗った沈利と帝督。

沈利はなかなか楽しかったらしく、次あれに乗ると絶叫系のアトラクションを指差し帝督をグイグイと引っ張っていく。

帝督はと言うと、既にいっぱいだった。彼は乗り物に酔いやすい。電車やバスでも酔ってしまうというのだから、ジェットコースターなどの絶叫系など最早胃袋が激しくダンスどころではない。

(胃袋が……爆発する)

容姿端麗、頭脳明晰。

おまけにスポーツ万能と完璧超人のような垣根帝督唯一の弱点が此処に露呈した。

「沈利……お前俺が乗り物弱いこと知ってたんだろうが……」

生気のない声で帝督が沈利に問いかける。

「ん？そうだったっけ？忘れちゃった」

物凄い良い笑顔でバツサリ帝督は切り捨てられる。

「丁度いいじゃない。この機会に乗り物酔い克服すれば」

と帝督たちの前には高さ150メートルほどの円筒。頂上までゆっくり上がってそのまま落下するタイプのアトラクションがいらっしやいと帝督を待ち構えていた。

「行くよ」

「ちょ……待っ……」

ずるずると引き摺られていく帝督はその後声にならない叫びとともに無重力を体験した。

\*\*\*

「あれ楽しそうだな」

遊園地エリアにやって来た凧と楓は今正に帝督と沈利が乗っている絶叫系アトラクションに目をやりながら言う。

「なんか1人すごい人乗ってない？」

凧が目を細めゆっくりと上がっていく人達を見つめながら言う。

「ん？どれ？」

「ほら真ん中に乗ってる高校生くらいの、ものすごい拒絶してる」

「体ブンブン振ってるな。そんな嫌なら乗らなきゃいいのに」

「隣の女の子は堂々としてるのにね」

まさかそれが帝督だとは夢にも思わず好き放題言う凧たちはその絶叫系アトラクションを通り過ぎ、メリーゴーランドの前にやって来た。

「……まさかこれに乗るとか言わないよな？」

凧が言うが、

「え？乗らないの？」

と真顔で凧が返す。

「いやよく周り見てみるよ。小学生か親子しか乗ってないじゃん」

「いいじゃん別に」

（こんな辱しめを受けるのは御免だ！！）

なんとかメリーゴーランドを回避しようと凧は辺りをキョロキョロと見回してみる。

「あ！！楓、あっちにしよう！！」

「あっち？」



凧が言う方向にあったのはスパイラルウィング というアトラクション。平たく言えば回転する空中ブランコだ。

「まあ、いいけど」

(よし!!)

「でも後でメリーゴーランド乗るよ?」

(……………)

これで諦めてくれるかと思っていた凧はその一言で顔から血の気が引いていく。

あんなクルクル回りながら人目につくなんて死んでも御免な凧としては、最早メリーゴーランドが凶器にしか見えない。

その後、空中ブランコに乗った後ですっかりメリーゴーランドにも乗り、凧は燃え尽きたように馬に跨がっていた。

「きゃーッ!!」

「うるせエって」

2人を尾行していた筈の一方通行と未来は何故かジェットコースターに乗っていた。どうやら未来が我慢できなくなったらしく、『あれだけ!!あれだけ乗ろう!!』と一方通行を強引にジェットコースターへと乗せ、今に至るわけである。

(コイツ本来の目的忘れてきてねエか……………?)

今一方通行たちが乗っているのはこの遊園地エリアの目玉アトラクション、

『モンスター』という名のジェットコースターである。

なんでも学園都市の技術者と大学生が共同で開発したモノらしく、全長1780m、最高時速155km、最大高低差102mとその名の通りのモンスターマシンだ。

隣できゃーきゃー言いながら堪能している未来と違って一方通行は面倒くさいとばかりに無表情で無反応。

人形のように表情は変化せず、ただ早く終われと小さく舌打ちした。

\*\*\*\*\*

「どこで食べる？」

「うーん、和食がいいな」

メリーゴーランドを堪能（楓のみ）した凧たちはお腹が減ったため、遊園地エリアを出てフードエリアにやって来ていた。

丁度昼時とあって立ち並ぶどの店も活気に溢れている。

「お、あそこかいいいんじゃないか？」

凧が言うのはすぐそこにあった和食処。  
昔ながらの木造建築の家を改装して店にしているようだ。

「うん、いいんじゃない？」

凧もそれに合意し、2人は店内へと入っていく。

その20m程後方のオープンカフェのテーブル席、そこで凧たちが  
店内に入っていくのを未来と一方通行が見ていた。

未来はカルボナーラを注文しており、一方通行はおかわり自由のブ  
ラックコーヒーを飲んでいる。

「うん……なんだかなあ」

パスタを食べながらイマイチと言った表情を浮かべる。

「何がだよ」

「だってせつかくのデートなんだよ？なのに凧たち手も繋いでない  
し、友達かなんかと勘違いしてんじゃないの!？」

「いや現時点じゃ友達だろオが」

「それでもお互い両想いならあととはきっかけだけだと思わない!？」

「そのきっかけが中々ねエからこんな事になってんだろ」

「じゃあきっかけを作ればいいのよ!?!」

「はア？」

「協力してくれるわよね？一方通行君」

ニヤリッ

と不敵な笑みを浮かべ何やら思案する未来に一方通行は嫌な予感しか湧かなかつた。

「結構混んでるわね」

店内に入ってみるとやはり大勢の客が昼食をとっていた。

「いらっしやいませー。2名様でよろしかったでしょうかー？」

従業員の女性が確認をとり、それに頷く風たちをテーブルへと案内する。

「じゅっくりどうぞー」

テーブルにおしぼりと氷の入った水を置き、従業員は『ご注意ください』と言いつつ、再び持ち場へと戻っていった。

「ふう、やっと落ち着けるな」

おしぼりで手を拭きながら風が言う。

「そうね。なんだか午前中はせわしなかったし」

「失墜委員会のせいだ」

「よっぽど暇なのかしら……」

お品書きを見ながら楓が呆れ気味に呟く。

「どれ頼む？」

「ん？ん、俺天ぷら蕎麦」

「私は和食御膳にしよ。もちろん奢ってくれるのよね？」

「……ちょっと待て、お前それ変えろ」

『奢る』という単語が出た瞬間に凧は楓が注文しようとしている和食御膳を変更しろと言うが、

「だってこれが食べたいんだもん」

「それ値段がおかしいだろうが……」

凧が注文しようとしている天ぷら蕎麦は880円。

楓が注文しようとしている和食御膳は10500円である。

「男だったら女の子にお金の心配なんてさせないものよ」

「幾ら何でも昼飯で1万越えは高すぎるだろ……」

「すみませーん天ぷら蕎麦と和食御膳1つずつー」

「聞けよッ!!」

「あ、ゴメンもう頼んじゃった」

絶対わざとだろ、と言うことすらも忘れどんよりと肩を落とす。お金には困っていない凧だが、金銭感覚は一般の学生と変わらないため1万という大金が一食で消えていくというのはかなりのショックだった。

「さようなら諭吉……」

会計の時の凧の手は何故か震えていた。

\*\*\*\*\*

昼食を済ませ、店内から出た2人は、

「次動物園エリアでいいか？」

「まだ行ってないしね、いいよ」

と意見をまとめ、UHPの北側にある動物園エリアへ移動しようと歩き出す。

すると……、

「やあやあその初々しいカップルさん」

突然2人の前に現れたのは何故かミッーとグーイー（のキグルミ）。

ここデイズニールランドだっけ？という疑問が浮かぶが、そんなことはどうでもいいと言わんばかりにミキーが喋る。

「カップル限定のイベントがあるんだけど行かないかい？」

頑張つてツキーの声に似せようとしているのだろうが全く似ていないパチもんミッキが看板を取り出して言う。

そこには『カップル限定！ラブラブ観覧車』とマジックで書かれていた。時間がなかったのか看板に黒マジックで殴り書きしただけのようにも見えるが。

「いや……カップルじゃないし」

ボソツと凧が言った途端、

ゴソツ！！

「痛ツ！！」

凧と何故かミキーにまで殴られた。

グフィーはなにやらダルそうに立ったままである。

「とにかく！！カップル一組様ごあんな〜い」

強引に凧と凧の手をとり遊園地エリアへと連れていく横暴ツキー。

逃げないようになのか後ろから　ーフィーもついてくる。

「おい離せよ!!!」

凧の必死の抗議もミッ　ーの大きな耳には届かない。

「なあ楓もなんか言っ……………」

文句言ってやれよと言おうと凧のほつを見てみれば、

「（カップル……………？凧と……………？フフ）」

顔をほんのり赤く染めてミッ　ーの後をついて行っていた。

（おいッ!!!）

頼みの綱であった凧が陥落した今、最早抗う術など残されていない。はあ、と大きなため息をひとつ吐き、再び遊園地エリアへと向かった。

（というかこの　ッキーの声どっかで聞いたことあるような……………？）

\*\*\*\*\*

\*

およそ15分程前。



「きっかけを作ればいいのよッ!！」

オーブンカフェの丸いテーブルから勢いよく立ち上がり拳を握ってこれだ!！と言わんばかりに未来が言い放つ。

「……………どオしよオってんだ」

「ふふん、この神田未来に任せなさい」

未来はポケットから携帯を取り出してどこかへと電話を掛ける。

「……………あ、パパ？あのさ、キグルミが欲しいんだけど。……………うん、……………あーガチャピンはいいや。デイズニーとかないの？ニッキー？じゃあそれと……………うんそれ。すぐ持ってきて」

ピッ

「……………何の話をしてんだオマエ」

ガチャンやらデイズニーやら意味が解らない話を繰り返していた未来に問いかける。

「楓たちをくつつけるためよ!！」

「……………だから説明しろよ」

「とりあえずアレが届いてからね」

「アレだア？」

未来の言葉がイマイチ掴めない一方通行はとりあえず残ったコーヒーを飲み干す。

すると飲み干したカップを置いたとほぼ同時、未来の後ろに突然執事のような男が両脇に ツキーと ーフィーのキグルミを抱えて現れた。

「お持ちしました未来様」

「ん、ありがと池守<sup>いけがみ</sup>」

池守と呼ばれた男は会釈をするとどこかへと消えていった。それを呆然と眺めていた一方通行は、

「……………執事？」

「うん執事。うちの実家に居る池守っていうんだけど無理言って家からキグルミ持ってきてもらったの」

「ここ学園都市だぞ。実家って外だろオが」

「うん北海道」

(……………どオ考えてもあり得ねエだろ。さっきの電話からまだ5分も経ってなかったぞ)

「さあ一方通行君これに着替えて」

一方通行の思考を遮るように未来がグーフィーのキグルミを手渡す。

「断る」

「却下」

「……」

「早く早くっ！！楓たち店から出てきちゃっよー！！」

「俺の意思は尊重されねエのかよ」

「早くっ！！」

もう何も言わねエ、と一方通行は内心で呟きイヤイヤながらもとぼけた顔をしたキグルミを身に纏う。

見れば未来は既に着替え終わっていた。

『……で？コレに着替えてどうしよオってんだ』

キグルミを着ているため若干声が籠る。

『とりあえずこの看板にラブラブ観覧車って書いて』

はい、と未来は黒いマジックを取り出し、看板と一緒に一方通行へと手渡す。

半ばヤケクソになりつつある一方通行はマジックを受け取り乱暴に手を動かし、ファンシーさのかけらもないラブラブ観覧車という看板が出来上がった。

『よし、これ持って楓たちが出てくるの待つよ』

『フーかむさ苦しいんだけどよオ』

『我慢してよ私だって苦しいんだから』

(じゃあ着なけりゃいいだろオが……)

『口の所だけちょっと切れ込み入れよっか』

と未来が言うとミツ一の赤いパンツからゴソゴソとカッターを取り出して口の辺りに小さな穴を開ける。

(とんでもなくシユールな光景だなオイ)

パンツから取り出したカッターで口を切り裂いていく。ツキーを前にそんなことを思う。

一方通行自身も何だか思考が壊れ始めているのか普通にカッターを受け取り切れ込みを入れる。

「あッ!!楓たちが出てきたよ!!ホラ早く行くよ!!」

「ハア……」

キグルミを着た2人は風たちの元へと向かっていき、先程の光景へと繋がるわけである。

\*\*\*\*\*

＊＊

やたらテンションの高いミッ　ーと全くやる気が感じられないグ  
フィーに強引に遊園地エリアに連れてこられた凧と楓は大きな観覧  
車の前にやってきていた。

見たところどこの遊園地にでもありそうな普通の観覧車である。

「はいはいカップルのお二人様はこちらの２番目にどうぞ」

パチもんミッキーが入口のドアを開き手招きしてくるため、凧は渋  
々それに従う。

「ほぼ脅迫じゃねえか……」

中に入り隣同士で凧と座る。

「ウフフフ、ごゆっくり」

ミッキーの言葉になんだか無性にイラツとしたがドアを閉められて  
しまったためそのままゆっくりと上に上がっていく。

「……」

「……」

あれ？

俺さっきまで凧と普通に喋ってたよな？

突然襲いかかる緊張に身体が強ばる。

窓から外を見てみれば夕焼けが学園都市を茜色に染めていた。

流れる沈黙。

それを破ったのは凧だった。

「……楽しかったよな」

口から出るのは今日の感想。

「イルカが見れなかったのは残念だったけど、楓と遊んだりするの久しぶりだったし」

楓と2人つきりでごうしてどこかへ行くのは始めてだった凧だが、楽しかったというのが心からの本音だ。

565

トンッ

楓は何も言わず、自らを凧の肩にあずけた。  
自然と観覧車内で寄り添うような形になり、2人は無言のまま夕焼けを見つめる。

「……凧」

「……ん」

「今日はありがとね」

凧の肩に頭を置いて空を見つめたまま、楓が静かに呟く。

「今日は楽しかったよ」

「俺もだよ」

「……凧」

凧に名前を呼ばれ、楓のほうを見ようと視線を夕焼けから横にいる楓へと移した瞬間、

「……!？」

「……」

唇と唇が、触れた。

時間にしてほんの一瞬。

しかし、確かに2人はキスをした。

「……か、楓？」

突然の凧の行動に凧は顔を真っ赤にして言う。

凧自身も自分の大胆な行動に頬を紅色に染めている。

そして潤んだ瞳を真っ直ぐに凧を見つめ、今まで言いたくても言えなかったその言葉を、

「……凧、あのね」

目の前の大好きな少年に伝えるため、ゆっくりと口を開く。

「……」

凧は凧から視線を逸らさず、ただ凧の話を聞いている。

「私、私……」

「凧……？」

「私は、凧が……!!」

言おう。

後は、ほんの少しの勇氣だけ。

「凧のことが……」

決心し、顔を赤くしながらも言葉にして伝える……



ガコンッ

「え………?」

突如ムードをぶち壊した機械音に呆気にとられ、

プシュー

というドアが開く音と共に楓の勇氣は完全に打ち砕かれた。

観覧車が一周してしまったからだ。

「ええ………!?!」

精一杯振り絞った勇氣は無情にも台無しにされた。

「………あ、出ないと。ほら楓」

隣で絶望している楓の手を我に還った凧が手を取り外に出る。頬を染めたまま。

「如何でしたか?楽しんでいただけましたか?」

そこへやってきたあのミッキーとグーフィー。

「ま、まあ………」

言葉を濁すしかない凧に対し、楓は沸々と理不尽な怒りが込み上がってきた。

「せっかく……せっかくの……!!」

俯いたまま拳を握り締めわなわなと震え、そして

「私の勇気をどうしてくれるのよーッ!!」

怒りに身を任せた楓の右ストレートがミッキーの目玉に直撃、その衝撃で頭が吹き飛ぶ。

「え？」

「は？」

「あ……」

「ハア……」

ミッキーの中から現れた未来にわけがわからない凧たちは呆けた声を、未来はやっちゃったと冷や汗を流しながら、一方通行はこんなことだろオと思ったと言わんばかりの声を出す。

「……未来？」

「え、いや人違いじゃないデスカ……？」

苦し紛れの言い訳を発動させる未来に楓（魔の手）が迫る。

「これどういう事が説明してもらおうよ……」

顔は笑っているが内心般若のような楓に、

「ひ、ひゃい……」

未来は連行されていく。

「あ、な、凧……」

ずるずると未来を引っ張っていく楓は一旦立ち止まって振り返る。

「……また月曜日にね」

ぼそっ

と少し赤くなりながら告げる楓に、

「……おう」

観覧車でのことを思い出して恥ずかしくなりながらも凧は言った。

「ハア……」

ため息をついたのは凧ではなくグーフィーだ。

ヒョイツと頭を取り外し、凧を見る。

「一方通行ッ!?!」

「よオ凧。デートは楽しかったかア?」

ニヤニヤしながら尋ねる一方通行。

「てゆうーかお前は何をしてるんだ……?」

「…………聞くな」

肩から下が未だグーフィーな一方通行は凧から顔を背ける。

「…………ハッ、てことは帝督とかも来てるのか!？」

「いや、アイツはドタキャンしやがった」

帝督が実は来ていると知らない一方通行と凧は、

「帰るか」

「ああ」

夕焼けに染まるUHPを後にした。

(あれ…………キス、だよな?)

唇に残る感触。

確かに、凧とキスをした。

「…………ハハッ」

「んだニヤケやがって」

「何でもねえよ」

2人の関係を縮めた1日は、こうして幕を閉じた。

一方その頃、

「帝督、次あれね」

「……もう、勘弁して……」

垣根帝督は限界を越えていた。

**番外編 凧と楓の初デート【後編】（後書き）**

作者的には観覧車と一方通行のグーフィーは必須でした（笑）

次回から散々言ってきた一端覧祭編です！！

第36話 一端覧祭へfestival of the world's

PV4000000ありがとうございます!!

お気に入り登録も360件をこえ、この小説を読んでくださっている皆様には感謝感謝です(T|T)

これからも拙い作品ですがよろしくお願いします。

そして一端覧祭編です!!

と言ってもまだ準備期間ですが……

後書きに出てきたクラスの生徒の簡単なプロフィールを載せておきます。

秋の風が心地よく、日照時間も徐々に短くなり始めた10月下旬の学園都市。

その学園都市に住む学生たちは各学校で11月に行われる超巨大文化祭、一端覧祭の準備に追われていた。

一端覧祭。

11月下旬に行われる世界最大規模の文化祭である。

9月下旬に行われた大覇星祭とは違い外部向けのイベントではなく、どちらかと言えば学生や保護者が参加するイベントだ。

入学希望者の学校見学やオープンキャンパスを兼ねるため、多くの入学者を確保すべく、名門校程この一端覧祭に力を入れる。

そのため、大覇星祭の時も開放されなかった常盤台中学も部分的にだが開放される。

そんなイベントである、この一端覧祭。

名門校程力を入れるこの文化祭に、学園都市五本指の一角である長点上機学園が盛り上がっていない筈がなく……

「諸君！！今年も大いに一端覧祭を盛り上げ、多くの入学希望者を受け入れられるよう頑張ってくださいませ！！」

と、体育館のステージ上で我が校の副学園長が怒声のような大声で



話している。

あのデートから1週間後の月曜日。  
より正確には10月の最終週だ。

凧たちも含む長点上機学園の全生徒は体育館に集められこの演説を  
立ったまま聞かされているのである。

「あゝ、だりい」

凧の隣で欠伸をしながらそんな事を言っているのは垣根帝督。

「やる気になってるのは教師と生徒会ぐらいだからなア」

もう立つことすらせず胡座をかいているのは一方通行だ。

「根性だ!」

凧の後ろ、一方通行の隣で仁王立ちで話を聞いているのは愛と根性  
の漢、削板軍覇。

「さすがに1時間立ちっぱなしはキツくなってきたなあ……」

熱く語る副学園長には申し訳ないがさすがに足と精神的に限界が近  
い。

生徒たちは楽しむことくらいしか見返りのない一端覧祭は、凧たち  
の通う長点上機のような名門校はオープンキャンパスや学園PRに  
重点を置くため、学園の生徒が案内などに駆り出される。それ故に  
他校を回って楽しむという事さえも難しくなってしまうのだ。

そんな『やる気ね』オーラを全面に押し出す生徒たちをステージ

上から眺める副学園長は怒ることもせず、寧ろ予想通りといった感じで口元を吊り上げている。

「この一端覧祭は生徒たちの関心が高くないように感じられる」

コホンッ

と咳払いをして副学園長が言う。

やる気のない生徒たちに火をつけようと、

「そこでだ!!」

バンッ

と壇を叩き、一際大きな声で言い放つ。

「この一端覧祭で優秀な成果を上げた生徒、またはそのクラスには褒美を与える事とする!!」

ザワッ

先程まで静かだった体育館内の生徒たちが一気にざわざわと顔を見合わせ話し出す。

「具体的には一端覧祭開催期間の1週間!!この期間内にクラスの出し物で最も多く売上を出したクラス!!オーブンキャンパスなどの学園主催のイベントで結果を出した生徒または団体!!そして我が校にとって有益な成果をもたらしたと言える生徒またはクラス!!以上を満たすものには奨学金、または生徒、クラス単位で欲しい物を何でも1つ用意しよう!!」

ウオオオオオオ!!

副学園長の目論見通りにやる気になる生徒たち。少しばかり現金な

気もするが此処は実力主義の学園都市。ましてや名門長点上機である。

これで成果がきちんと出るならば安いものだろう。

「欲しいものなんでも1つねえ」

横を見れば何やら悪い笑みを浮かべている帝督の姿。

「自分で買えるじゃん」

「いやいや風、実費と無料はえらい違いだぜ？」

コイツとんでもなく高価なもん要求するつもりだ、と風は少しだけさっきの発言をした副学園長を哀れに思う。

どうやらやる気になっているのは帝督だけではないらしく、

「欲しいソファがあったんだよなア」

「牛丼ッ！！たらふく！！」

一方通行と軍覇も燃えていた。

「はあ………」

何でこいつらは学園都市最高の頭脳を持つてるのにこういつ時は単純なんだ。

とか思いつつも、内心実は欲しい物を検索している風だった。

\*

集会が終わったあと、各クラスではどんな出し物をするかのHRが行われている。

この出し物での売上は全て長点上機に行くが、見返りとして相応の物が送られる。

更に今年はそれプラス欲しい物を何でも1つ、というプレゼント付きだ。

盛り上がらないわけがなく、廊下からでもその熱気が伝わってくる程である。

そんな中、2 Aでは……

「という訳で、俺たちのクラスは何をやるか決めたいと思う」

澤ちゃんではなく帝督が教壇に立ち、学級委員である野田を隣に置いて話し合いを進めている。

「やるからにはもちろん賞品を狙いにいく。協力してくれ！」

「オオオオオオオオ！」「」

頭は良いのにこういう所だけ馬鹿なんだよなあうちのクラスは、と思いつつながら風はため息をつく。

「よし、じゃあやりたい出し物があれば挙手して言ってくれ。野田、

それを黒板に書いてくれ」

「わかった」

「はい」

「何だ畑<sup>はた</sup>」

拳手したのは畑という小柄な少年。

「俺は屋台でたこ焼きを焼きたい」

「ふむ、野田。書いてくれ」

カキカキ

「垣根君」

「宮崎」

「私はお化け屋敷なんかいいと思うんだけど」

「野田」

「はいはい」

カキカキ

野田が完全に書記になっている。

「はい垣根」

「何だ佐竹。失墜委員会関連は却下するぞ」

「違うよ。俺は喫茶店がいいと思うんだ」

「喫茶店か、でも今時ただの喫茶店なんて珍しくもないぞ？」

「そこはうちのクラスの特徴を生かした喫茶店にするんだ」

妙に自信たつぷりに佐竹は力説する。

「狙う客層はずばり女性！！」

「女性？」

「ほらうちの学校って男子の割合の方が多少多いだろ？だがあえて女子の客層を狙う」

「具体的にはどついう喫茶にするんだ？」

「執事喫茶だツ！！」

ドーンツ！！

と佐竹は拳を握り締めて声高らかに言う。  
それを聞いてクラスの女子は言いたい事を理解したのか俄にざわつき始める。

尚も佐竹は続け、

「ほらうちのクラスはお前とか一条、一方通行とか削板みたいな……イ、イケメンが多いだろ？他にも美形がいるし……そこを利用す

るんだ」

「なんで後半から嫉妬のオーラが出てんだよ」

「うるさいッ！！ちよつと動揺しただけだ！！」

「はあ……まあとりあえず書いといてくれ」

「はいよ」

言われた野田は黒板にスラスラと書いていく。

「垣根」

「何だ滝本」

「執事喫茶はいいと思うけど何も見す見す男子の客を切り捨てる必要はないと思うんだ」

「……確かに一理あるな」

「だろ？だから男子は執事、女子はウエイトレスの恰好をすればいいと思うんだけど。うちのクラス男子も女子も他のクラスに比べてレベル高いし」

滝本の言うように何故か2・Aは他の学年、クラスと比べても帝督や凧、楓や未来を筆頭に明らかに美男美女揃いである。

なんでも密かに2・Aの写真集なんかも裏では出回っているらしい  
(主に帝督や凧、楓など中心)

そんなクラスだ。  
男子の客層も狙えると滝本は言うように、売上的にもそちらのほうがいい。

「そうだな、佐竹。この案でいいか？」

「ああ構わん。ただ名前は俺に決めさせてくれないか？」

「店のか？別にいいけど」

「サンキュー」

「よし、今出た案の中から1つ選んで挙手してくれ」

黒板に書かれた

たこ焼き

お化け屋敷

ウェイトレス  
執事喫茶

と書かれた3つから1つを選ぶこととなった。

「風はどれにすんだ？」

「うーん、まあ無難にたこ焼きとかじゃないか？」

「甘い風！！それじゃいい結果がでないぜ！！」

「じゃあお前はどれにすんだよ」

「お化け屋敷だ！！」



「あんま変わんねえよ」

「おーいその3人、早く挙手しろよ」

帝督に言われ凧たちは適当に挙手をした。

「はい、んじゃ多数決で執事喫茶に決定な」

凧たち以外は何と全員が執事喫茶に手を挙げていた。

女子たちの思惑としては……

『垣根君や一条君の執事……』

男子たちの思惑としては……

『ウエイトレス!!』

と2つの思惑が見事に合致したためである。

「ならまずは何を出すかだが……何だ滝本」

「やっぱ執事やウエイトレスなら軽食を出す………みたいにするつもりだろ？」

「そのつもりだが」

「それじゃつまんねえ」

首を横に振って軽食という案を否定する滝本。

「ならどうするんだ？」

「うちのクラスにはアイツがいるじゃねえか」

クイクイツ

と滝本は親指である生徒を指し示す。

その先に居たのは大柄なヤンキーっぽい生徒（そう見えるだけで実際は真面目）

「……そついや金森って実家が洋食店だったか？」

「そついう事。金森に洋食を作ってもらえばいい、手伝いを俺たちですれば回ると思っんだ」

「……だそうだが金森、いけるか？」

「まあ俺以外に料理できそうなやつ5人くらいいれば何とかかな。メニューは作り置きできるハンバーグとか簡単なパスタになるけど」

「充分だな。よし、洋食で攻めよう」

「衣装は私に任せて」

そう言うのは先程お化け屋敷を提案した宮崎だ。

「執事服とメイド服なら私が作るわ」

「できるのか？」

「うん、元々お化け屋敷になっても衣装はつくるつもりだったし」

「そうか、なら宮崎に衣装は一任するよ」

「任せて垣根君」

トントン拍子に話が進んでいき、いつの間にか衣装まで用意できるようになっていた。

「一旦まとまるとこのクラスすごいよな」

「男どもの下心が見え見えだけどなア」

凧の発言に一方通行がニヤつきながら答える。

「じゃあまずはホール担当とキッチン担当を分けよう。金森はキッチンのチーフを頼む、使えそうなのを選んでキッチンをやってくれ」

「わかった。なら……」

キッチンのチーフを任命された金森は料理が得意という生徒を5人ほど選び、その生徒を集めてメニューの作成に移った。

「でホールは……」

帝督が言おうとした瞬間、

「垣根君!!」

「一条君!!」

「削板君!!」

「一方通行君!!」

「橘!!」

「神田!!」

直ぐ様名前が上がったこの6人。

「え〜?」

「面倒くせエ」

凧と一方通行はあまり乗り気ではないが、

「楽しそうだな!!」

「!!! 削板君がやるなら私もやる!!!」

なんだか軍覇と未来はやる気のように、

「メイドって……恥ずかしい……」

楓は顔を赤くしていた。

帝督は慣れているのか特に反論する様子もなく、

「じゃあ今の6人はホールな。でもこれだけだと足りないからあと5人くらい追加してくれ。残った奴はクラスの装飾と出回り担当で」

あつという間にクラスの生徒がそれぞれの役割に分かれ、仕事の確認をしていく。

「ホール担当ちょっとこっち来てくれー」

ホールのチーフに任命された会田が呼びかけにより、凧たちを含む

12名が会田のもとに集まる。

「とりあえずホールは笑顔と気持ちが一番大事だからな。一方通行、笑えよ」

「無理だ」

「まあ逆にMの客には人気でるんじゃないか？」

帝督が一方通行に向かって笑いながら言う。

「お前等頼むぞ？特に垣根や一条、橘や神田なんかはうちの看板なんだからな」

ため息をつく会田を他所に、垣根と一方通行は未だ何やら言い争いをしている。

こんなんで大丈夫か？と少々不安を抱く凧だったが、なるようにしかならないと思いきえるのを止めた。

一端覧祭開催まで

あと3週間と1日。

野田 正人

2-Aの学級委員。

バスケット部所属で髪は短めの黒。

凧や帝督などとはよく絡む。

畑 陽一

身長160cmと小柄な体格。

たこ焼き屋を案に出したのは大阪が好きだから。

宮崎 亜紀穂

楓や未来とも仲が良く、裁縫などが得意で家庭的。

帝督のファンクラブに入会している（非公式）

滝本 啓介

佐竹と同じく失墜委員会に所属しているが、失墜委員会の中ではまともなほうである。

金森 崇<sup>たかし</sup>

茶髪にがっしりした体格で見た目ヤンキーだが実際はよく気が利いて良い奴。

実家が洋食店なので料理は得意。

会田 彰太

喫茶ではホールのチーフを担当。

理由はコンビニのバイト歴が長いからである。

そのためスマイルには自信アリ。

ちなみに、大覇星祭時の人気ランキングトップ30に入っている2  
- Aの生徒は以下の通り。

《男子》

- 1位 垣根帝督
- 6位 一条凧
- 13位 削板軍霸
- 17位 一方通行
- 28位 金森崇

《女子》

- 4位 橘楓
- 9位 神田未来
- 12位 遠藤春佳（未登場）
- 22位 星野文奈（未登場）
- 23位 夏目沙希（未登場）
- 30位 殿柿千尋（未登場）

はい、ようやく一端覧祭編が始まりました。

キャラが多くて大変です（笑）

第37話 準備期間へbeginning purchase (前書き)

中身がないです……

次話への繋ぎと考えるてもらえれば結構です。



第37話 準備期間〈beginning purchase〉

翌日。

11月1日（火）

午前中通常通りの授業を受けた生徒たちは、午後から一端覽祭の準備のためクラスから活気に溢れた声が聞こえてくる。

それぞれのクラスが出し物の準備に勤しみ、内装なども変え始めている。

そんな中2 - Aでは……

「ハイッ！！気持ちを入れて！！」

「くくくくいらっしゃいませ」「くくく」

ホール担当会田チーフのもと、接客の仕方を教わっていた。

「だから固いよ一方通行ッ！！何？相手に喧嘩売ってんの！？此処はそんな喫茶店じゃないだろッ！！」

「うるせエなこれでも頑張っただよ」

「頑張ってる奴は片足重心で首をゴキゴキ鳴らしたりしないからねッ！！」

何やら会田の接客魂に火を付けてしまったようで、先程から一方通

行との終わらない押し問答が続いている。

「っっーか内装はどうするんだ？」

何やら教室の隅で佐竹が他の生徒に指示を出し、木の板を切ったり色をつけたりと内装のためであるう作業をしている。

「ああ佐竹が失墜委員会を総動員してこの教室を豪華な喫茶店にしてくれるってさ」

何かアイツ張り切ってたよな、と帝督は凧の質問に笑いながら答える。

「そこー！無駄なおしゃべりしないッ！！」

ズビシッ！！

と最早キャラが変わってしまっている会田が2人を注意し、一方通行は相変わらずやる気無さげに窓の外に目をやっていた。

「執事とメイドの喫茶店ねえ……」

はあ、と何やらげんなりしながら溜め息をつく凧に、

「お前はもうちよっと自信持てよ。折角の顔が台無しだぜ？」

営業スマイルを浮かべる帝督が言う。

「お前は自信を持ちすぎだ」

「んなことねえよ。少しばかり女子に好かれてるだけだから」

「……沈利に後で報告しよう」

「あッ！？ 凧おまつ、それは禁じ手だろうがッ！！」

「なに焦ってんだよ帝督」

日頃の仕返しとばかりに帝督をいじる凧だったが、

「……なら橘にお前が橘のこと好きだって言っぞ」

「ばっ、やめろおおおおおッ！！」

「うるさいぞそッ！！」

2人して大声で言い合っている所へ再び会田の激が飛ぶ。  
その後も幾度となくクラス内に会田の怒声は響き渡った。

\*

翌日

11月2日(水)

昨日に引き続き午後から一端覧祭に向けての準備が進められている。

「あ、青のペンキ切れちゃったよ」

内装の着色をしていた生徒から放たれた言葉。

「こつちも黄色のペンキ切れそうだぞ〜」

失墜委員会の方からも声が聞こえてきた。

「釘も足りないぞ〜」

「もともと最初にあつた量が少なかったからなあ……」

しまった、と帝督は頭を掻きながらバツが悪そうに言う。

「悪い、誰か買い出し行つてきてくれないか？」

「あ、じゃあ楓と一条君が行くよ!！」

ずい、

と何やら楓の背中を押しながら笑顔で告げる未来。

「え!?!ちよつと未来!?!」

「(いいからいいから。これを機にもう少し一条君と親密になりなさいよ)」

「え?ええ?」

未来に耳打ちされた楓は頬を赤く染めてオドオドしている。

「ん、まあいいけど」

一方の凧は買い出しだろ？と特にこれといった反応は示さず、帝督から経費を受け取っていた。それを見て若干むすつとした凧だったが、

（もともとコイツは鈍いしね……）

はあ、と溜め息を吐き、凧と2人で教室から出ていった。

（キス……したんだけどなあ）

「どうしたんだ？」

「……何でもない」

「？」

やって来たのは第七学区にある工具用品店だ。この店には凧たちが必要としている釘やペンキはもちろん、野菜の種から自転車まで幅広い(?)商品を取り揃えている。外の世界で言えばトス ムに近いだろうか。

「何がいるんだっけ？」

「まずは釘ね」

広い店内を歩きながら凧がカゴを持ち、釘が置いてあるエリアへと向かう。

店内には自分たちと同じような学生がちらほらと見え、一端覽祭の

準備に必要な道具を吟味している。

「お、ここだな」

2人は釘が売られている棚を発見、手にとろうとしたが……

「……………何だこの量」

「釘ってこんなに種類あるわけ!?!」

凧と楓の目の前に広がるのは1つのエリアにある棚全てを埋め尽くす釘釘釘。流さや細さ、プラスとマイナスなど様々な種類が用意されている。

「どれ買えばいいんだよ……………」

思えば自分は作業をしていないのでどんな種類の釘を使用していたのか解らない。それは楓も同じことで、つまり2人は何を買えばいいのかサッパリな訳である。

そんな2人が並べられた釘の前で途方に暮れていると、

「あれ、凧?」

不意に背後から聞き慣れた声が凧にかけられる。聞き慣れたというか、最早耳タコだ。

凧が手に取っていた釘から目を離し、ゆっくりと振り返ってみると案の定、常盤台のブレザーを着た御坂美琴が立っていた。その後ろには白井も居る。

「美琴か、どうしたんだ？」

「それはこっちの台詞よ。なんで釘とにらめっこなんてしてるわけ？」

「うっ……それはだな、まあいろいろあって……」

と凧が何やら言い淀んでいると美琴は隣に居た楓の方に行ってしまった。

「久しぶりですねー楓さん」

「久しぶりね美琴ちゃん」

実はこの二人相当仲が良い。いつからだだったかな、確か俺が中学に入ってから急激に仲良くなったような……

そんな事を考えている凧の隣で、美琴は小声で楓と話をしている。

「（で、最近どうなんです？告白できました？）」

「（こ、ここ告白！？……しようとした時はあったんだけど……うやむやになっちゃって）」

「（凧は鈍感なんだからズバツと言わないとダメですよ？）」

「（そうなんだけど……やっぱり恥ずかしいし）」

「（まったたく……こんな可愛い人が隣に住んでるのに凧は何とも思

わないのかしら」

「それはそうと、美琴ちゃんのほづはどづなのよ」

「(うえッ!?)」

「(ほらあのツンツン頭の)」

「(べ、別に好きとかそんなんじゃない、た、確かに感謝してるけど……)」

「(素直じゃないなー美琴ちゃんは)」

「(楓さんに言われたくないですよ)」

と女子特有の恋ばなに花を咲かせている二人の隣では、

「凧さん、いい加減観念してくださいな」

「いーや断る」

「どづしてですの!?!」

「俺束縛されるのとか嫌なんだよ」

「凧さんが入ってくれば街の治安は絶対に良くなるんですの!?!」

「何を言われようと風紀委員シヤルツメンには絶対入らねえ!?!てゆーかそれなら美琴を勧誘しろよ」



「それは散々やりましたが……無駄骨でしたの」

ガツクリと肩を落とす白井。彼女は街の治安を守るために本気で尻を勧誘しているのだが、いかんせん尻は誰かに縛られるというのが苦手だ。

やるなら自由に、だから4人でファルコンを組織したのだ。

最初は小さかったファルコンの活動も今や警備員アンチスキルのバックアップと情報操作で迅速に行動できるようになった。学園都市の殆どの学生がファルコンと言う名を知っていてもメンバーを知らないのは警備員の情報操作による所が大きい。

「悪いな白井。暇な時は支部にも顔出すからそれで勘弁してくれ」

「……仕方ありませんわね。ですが黒子、諦めませんわよ!!」

いやそこは諦めるよ、と内心想う尻だったが、ここは何も言わず引き下がっておく。

早くペンキと釘を買って戻らなくてはならないからだ。

「おーい楓、ペンキ見てきてくれるか？」

「あ、うん。解った」

「じゃあ私も付き合いますよ」

「そう？ならお願い」

楓と美琴は釘のエリアを離れてペンキのエリアへと向かう。白井もそれについて行った。

その後、無事に釘を買い、楓も目的のペンキを購入して工具用品店を後にした。

美琴に聞いた話によると常盤台もこの一端覧祭には何か大きなイベントを企画しているらしい。

時間があれば足を運んでみようかな、と長点上機へ向かいながらぼんやりと考えていた。

第37話 準備期間へbeginning purchase (後書き)

サブタイの英語は買い出しという意味です。

次の話で読者様が考案してくれたキャラ出しますのでお楽しみに  
笑)

11月7日(月)

一端覧祭の準備が始まって1週間が経過した。徐々に店のコンセプトや内装も形になりはじめ、生徒たちのやる気もそれに比例して高くなっていく。

そんな2-Aの教室では……

「垣根君〜!!」

「お どうした宮崎？」

「衣装ができたの!!着てみてくれる？」

ホール担当のメンバーが集まって会田チーフから色々と指導を受けている時に駆け寄ってきた宮崎。その手には大きな紙袋が握りられており、中には宮崎手製の執事服とメイド服が人数分入っていた。

「すごいな宮崎。これ人数分1週間で作ったのか？」

「うん、張り切って作ったの」

男女合わせて12人もの衣装をこの1週間で作ってきてしまうとは宮崎恐るべし、と風は遠目にそんなことを考えていると隣から疑問の声。

「なあそれってオレはどっちを着るんだ？」

声を発したのは風の隣で先程まで挨拶の練習をしていた“少女”。

身長は160センチ程で背丈ほどもある蒼の艶やかな髪の毛の先を三つ編みにしている少女が何やら鬼気迫る風貌で宮崎に詰め寄っていく。

「なあ亜紀穂、オレはどっちを着るんだ？」

「ずい、

と宮崎と顔がぶつかりそうなくらいまで接近して少女が問う。

「も、もちろん黎那はメイド服……」

「いやだあああああああッ!!」

「はあ……神童落ち着けよ」

「これが落ち着いていられるか帝督!!メイドだぞ!?メイド服だぞ!!そんなのオレが着られるとも思っているのかッ!？」

「いやお前女だろ」

「そういう問題じゃないんだよ!!おい風!!お前から何か言っつてくれ!!」

「まあまあ黎那……いいんじゃないか?似合っと思っぞ?」

「っつ……」

途端顔が赤くなったのは風たちと同じクラスでこの一端覧祭では水

ールを担当する神童黎那<sup>しんどうりいな</sup>。何故か一人称が『オレ』で男っぽいが歴とした女である。顔は整っているため男子からはもちろん女子からもなかなかの人気がある。

しかし彼女は大覇星祭時の人気投票では上位にランクインしていない。

その理由はというと彼女は男でも女でもなく、“神童黎那”という性別を確立しつつあり、男子にも女子にも投票されなかったためである。

彼女自身は男子のような振る舞いが目立つが。

そんな彼女が、メイド服を着用すると。

「ぜ、絶対着ないぞ！！オレも尻たちと同じで執事服がいいんだ！」

顔を赤くしながら両手をぶんぶんと振って断固拒否の構えを見せる黎那だが、その挙動は子猫のように愛らしいものであるため、誰もその意見を取り入れず微笑ましく黎那を見つめている。

「あ、亜紀穂！！今から執事服を仕立ててくれ！！」

「え〜？黎ちゃんムリだよそれは」

「な、何故だツ！？」

最早半泣き状態の黎那が宮崎の制服の裾をギュッと掴んで懇願するが……

「ミシン壊れちゃったから」

「学校の使えばいいだろう！？」

「使い慣れたミシンじゃないと失敗しちゃうから」

「そこを何とか頼むよ!!」

餌がもらえない仔犬のような瞳で黎那は宮崎に頼み込むが、

「だーめ、メイド服着なさい」

儂くも黎那の希望は砕け散った。

いやだあああああ、と叫ぶ黎那を無理矢理引き摺って宮崎はメイド服を持って教室を出ていった。

「さて、俺たちも着てみようぜ」

帝督が紙袋の中から衣装を取り出して言う。

「そうね。じゃあ私たち隣の空き教室で着替えてくるから」

未来はメイド服が入った紙袋を手に取り、恥ずかしがる楓の手を引いてホール担当の女子を引き連れ教室から出ていった。

「すごいな宮崎。これ売れるんじゃないか？」

凧は手に取った執事服を見て驚愕する。

本当に執事が着ているようなクオリティだ。細かい所までしっかりと作られている。

凧は制服を脱ぎ、執事服へと着替えていく。現在教室には内装をやっている佐竹を中心とした失墜委員会しか居ないので問題はない。

帝督、一方通行、軍覇、野田も同じように準備された執事服へと着替えていく。

執事服は二種類用意されていた。一方通行と軍覇、野田が着た執事服は黒いスーツの上着がベストタイプのもので、ズボンには細かなストライプが入っている。蝶ネクタイは赤である。

一方凧と帝督が着たのはスリムタイプの黒のスーツでズボンも同じで統一されており、白の薄い手袋を着用。蝶ネクタイは青だ。

「すごいな。サイズもピッタリだ」

野田が執事服を見ながら感嘆する。

小道具も作ってきたようで、装飾用のハンカチやピン、果てはイヤリングまで用意されていた。

「いや力入れすぎだろ」

「まあまあ凧。ここは素直に使わせて貰おうぜ」

「燃えてきたー!!!」

「暑苦しいからあんま寄んなよ」

軍覇と一方通行も気に入ったようで着心地などをチェックしている。

「これで一気に喫茶店っぽくなったな」

凧が自らの服装を見ながら言う。



「だな。後は女子たちのメイド服の様子を見て金森がメニューを作ってくれば、何でも欲しいもの1つ!!」

グツと拳を握りそう帝督が言い放つと、教室のドアがガラツと開かれた。

「お、来たか」

帝督は振り返り教室のドアの方に向き直る。

「どーよ垣根君!!みんな似合ってる?」

先陣切って入ってきたのは可愛らしい白のフリフリしたメイド服を着た神田未来。サイズもピッタリで男子と同じく小道具もばっちりなのか白いハイヒールまで用意されていた。

「似合ってるぞ神田」

「そ、そそ削板君は!?!」

「似合ってるぜ神田」

目をキラキラさせながら自分の風貌を尋ねる未来に軍覇はサラリと言い放ち、そのまま未来はフラァ、と熱に魔されるように顔を紅潮させる。

ペタリ、と床に座り込み、口元に手を当て、

「似合ってる……削板君が私に似合ってるって……似合ってる」

「ちょっと未来ちゃん、服汚れちゃうからあんま地べたに座らない

「でよ？」

後から入ってきた宮崎に注意されて未来は慌てて立ち上がる。

「さすが私ね。男子のサイズもピッタリだわ」

執事服を身に纏った凧たちを順に見ていき、満足したように宮崎が言う。

「……………あれ？凧と黎那は？」

凧は此处で気付いた。女子が5人しか居ないことに。本来ならば男子5人、女子7人の合計12人でホールは構成されているのだが、どうにも凧と黎那が見当たらない。

「あ……………、一条君あのね、凧は……………」

未来が苦笑いしながら凧に事の顛末を話す。

「メイド服恥ずかしすぎて一条君の前に出れないらしいわ」

「はあ……………？そんなもん別にいいだろうに」

「女の子には色々あるのよ」

「アイツ何着ても似合うだろうにな」

何気なく放った一言。凧は気にした風もなく言ったのだが、周りが黙っていなかった。

「うわぁ。一条君とサラリと言つてのけるわよねえ」

「お前は無自覚なのか？それとも狙つてんのか？」

「は？」

ニヤニヤしながら詰め寄ってくる未来と帝督に意味が解らない凧だったが、更に不幸は伝染し……

「いいちいじょおおおおおおおッ！！」

「お前は橋の何を見てるんだぁぁぁ！！」

「殺すッ！！クロスウウウウウ！！」

教室で作業をしていた佐竹を中心とする男子生徒たちが、各々の得物を手に取り失墜委員会を執行。  
凧へと襲いかかる。

「待てッ！！佐竹落ち着け！！」

「これが落ち着いていられるかッ！！」

「貴様は橋の何を見たんだぁぁぁぁ！！」

「まさか……もうそこまで……！！」

「許さぁぁん！！」

「待て！！まつ……ギヤアアアアアッ！！」

凧の制止もむなしく、失墜委員会の凶刃が凧へと襲いかかった。

ギユイイインッ！！

ゴドンッ！！

ザクッ！！ザクッ！！

ブチッ！！

数分後、執事服を着た肉塊となった尻が教室の隅で打ち捨てられていた。

「い、嫌だ！！やっぱりこんなヒラヒラな服は嫌だ！！」

「ほらほら黎ちゃんもう諦めな？もう着ちゃってる訳だし」

何やら廊下で聞こえる宮崎と黎那の声。どうやら未だに黎那は拒否の姿勢を貫いているらしい。

「ほら楓も。一条君待ってるよ？生きてればだけど」

「ちょッ未来！？てゆうか生きてればって！！」

「いいからはい教室入るー」

「ちょ、押さないでよー！！」

「ほら黎ちゃんも」

「うわあああああ！！」

廊下から未来にグイグイ背中を押された楓と、宮崎に猫のように首根っこを引っ掴まれた黎那が教室に入ってきた。

その瞬間、失墜委員会の野郎共の歓喜が爆発する。

「橘のメイド服うううううううううう!!」

「いつもと違うガリーリーな神童もいいッ!!」

「結婚してくれええええええええ!!」

狂喜乱舞する野郎共には目もくれず、楓は恥ずかしそうに肉塊から立ち直った尻を上目遣いでチラチラと見る。

(は、恥ずかしい……!! あっ、でも尻の執事服似合ってるなあ……)

そんな楓の肩に手を置き、未来が尻に問い掛ける。

「どお？ 一条君。楓のメイド服姿は」

「ん？ ああ、似合ってるな」 (似合ってる……!!)

言われた途端楓の顔がパアツと華やかになる。この二人は俗に言うバカップルというやつである。

一方その楓の隣では俯いて黙ったままの黎那の姿。黒いゴスロリメイド服を着用し、何故か頭に猫耳がライドオンしている。

「うう…… オレは執事服がよかつたんだ…… 執事服が……」

顔を真っ赤にして何やら言い訳を溢しているが、何やらそれが失墜委員会のツボにハマったらしく、「萌え死ぬー!!」とかなんとか野郎共が騒いでいる。

「よし。まあ一応ホールとしては大丈夫だな。あとは内装とメニュー、名前だ」

帝督がクラスの様子を見ながら確認していく。

「金森のキッチンには多分大丈夫だな。アイツしっかりしてるし」

「違うんだよ凧。俺が心配してんのはキッチンだが金森じゃねえ、問題なのは……」

「やっちまったー!!」

帝督が言い終わる前に、何やらガシャンという音と男子生徒の悲痛な叫びが向かいの調理室から響き渡る。

「……ほらな」

「あいつか……」

帝督と凧がげんなりしながら教室を出て、向かいにある調理室へと足を運ぶ。

調理室のドアを開けると、床に砕け散って散乱した皿と顔を青くする少年、そして頭を抱えている金森と他のキッチン担当の生徒たちがいた。

凧は顔を青くしている生徒に対して半ば呆れ気味に、

「……大塩、またかよ」

「凧ッ！またとはなんスか!!」

「目の前の光景見てわからんのかお前は」

「うッ……」

この皿を割ってしまった少年はキッチン担当の大塩元哉。おおしおまきんや なにかとそそっかしい奴だ。特徴とえば、

「でもこれは全責任が俺にあるわけじゃないんすよ!!」

この語尾にやたらと“ス”を付けるしゃべり方と……

「この滑る皿が悪いんす!!」

……阿呆ということだ。

それを見た帝督は深い溜め息を吐き、凧も同様に疲れた表情で大塩に言う。

「……で？お前他にはなんもやらかしてないよな？」

「ギクッ」

「……」

「……（汗ダラダラ）」

「金森、コイツ何やったんだ？」

「待って！金森言わないで!!」

「メニューにラーメンを入れろと頻りにせがんでくるんだ」

「お・お・し・お〜」

帝督が手をボキボキ鳴らしながら大塩へと迫っていく。

「待つツス帝督！！痛くしないで！！」

「何で洋食喫茶でラーメンが出てくんだコラアツ！！」

「ラーメンいいじゃないツスカ！！」

「お前が食いたいただけだろうがツ！！」

ゴンツ！！

と帝督の拳が大塩の後頭部にクリーンヒットした。

「痛った〜！！」

「はあ……また白井に報告しとくか」

ボソツと呟いた言葉に大塩が直ぐ様反応する。

「風ツ！それだけは！白井ちゃんに言うのだけはああああ！！」

そう、何を隠そうコイツは白井黒子と面識があるのだ。それは彼が  
ジャッジメント  
風紀委員第一三三支部に所属しているからなのだが、長点上機と常  
盤台という名門の風紀委員だからなのか、支部は違つがよく警羅を  
合同で行つたりしている。

彼がこんな性格なので専ら白井が手を引く形だが、やるときはやる  
らしく中々に信頼も厚い。



(この姿見てるとそんなふうには思えないよなあ……)

涙目で白井には言わないでと懇願してくる大塩を見ながらそんなことを考える。

「金森、メニューは決まったのか？」

帝督が金森に尋ねると、

「ああ、時間がかからない、作り置きができるっていう事からハンバーグとパスタ数種類、ドリンクはコーヒーや紅茶にしてデザートにはパンケーキとパフェをメニューに入れるよ」

「多いな。大丈夫か？」

「ああ、このくらいなら問題ない」

「そうか。なら頼むぜ、お前の料理にかかっているからな」

「任せとけ」

そう言って帝督と金森は笑い合う。

凧は調理室を出ていく帝督に続いて調理室を後にし、大塩は割れた皿をいそいそと片付けていた。

「まったく大塩のやつ」

教室へ戻る途中の廊下で帝督が呟く。

彼が風紀委員として活動するときにはスゴいというのは帝督も解っているが、どうにも日常大塩を見ていると全くそんな風には見えない。ダメンズを絵に書いたような男だ。

「でもアイツ一端覧祭期間中は警羅で校外を見回るんじゃないのか？」

ふと思い出したかのように帝督が言い、

「あ、そういえば白井もパトロールがどうか言ってたなあ」

凧も先日の工用具用品店で白井と話していたときのことを思い出す。

一端覧祭は大覇星祭と違い一般の来場者は少ないため、それほど人でごった返すといった心配はないが、それでも180万人の学生が一斉に参加するイベントだ。アクシデントや事件なども大なり小なり発生するだろう。

長点上機があるこの第一八学区は確か白井たちのパトロール区域にも入っていた筈だ。

ということとは、

「アイツキツチンに殆ど入れねえじゃねえかよ」

だが、と帝督は頭上を見上げて今日何度目かの盛大な溜め息をつく。

「アイツ解ってんのかな」

「絶対解ってないだろ。阿呆だし」

軽口を言い合いながら2 Aの教室のドアを開けようと凧が手を伸ばす。

ガシッ

「へ？」

突然、ドアを開けようとした凧の腕を誰かが掴んだ。

「見つけた」

腕を掴んでいるのは黒髪の少女。この色は三年生だろうか。

「……はい？」

いきなり腕を掴まれ意味がわからない凧。さらに、

ガシッ

「は？」

残ったほうの手で帝督の腕まで掴む。

「垣根君と一条君ね？」

腕を掴んだまま少女が凧と帝督の顔を交互に見て、

「探したわよ、ピーターパン!!」

訳が解らぬまま少女は爆弾を投下した。

神童黎那はぱっつあんさんが、

大塩元哉はダーツ野郎さんが考案してくれたキャラクターです。

ぱっつあんさん、ダーツ野郎さん両名とも有り難う御座いました m

(一一)m

少しでもお二人の想像と合致できていたら幸いです。

第39話 そして今年も開催人気劇《Peter Pan》（前書き）

総合評価1000Pt、

お気に入り400件突破！！

皆さん本当にありがとうございますm（）（）m

まさかこんな事になるとは夢にも思わなかった……（笑）

これからもよろしく願います！！

### 第39話 そして今年も開催人気劇《Peter Pan》

「探したわよ、ピーターパン!!」

3年生であろう女生徒から突然放たれた言葉に、凧と帝督は頭上にマークを浮かべるしかなかった。

「……ピーターパン？」

訳が解らないままに言われた言葉をおうむ返しに凧は言う。

「あれ？橘さんから話聞いてない？」

おかしいわね、と首を傾げながら先輩は凧の名を出した。

「凧の名前が出るってことは……生徒会関連の事か？」

凧の名前が出てきて先輩も関連しているというのならば、部活動以外には生徒会しか凧は思い浮かばなかった。そして事実、その予想は当たっていた。

「そうよ。自己紹介が遅れたわね。私は3年の松本さおり、生徒会の書記をやっているわ」

よろしくね、と右手を差し出されたので凧と帝督も右手を出し順番に握手をする。

真面目そうな人だなあ、というのが凧の第一印象だ。

シヨートの黒髪に淵なしの眼鏡、まさに優等生といった感じた。

「じゃあとりあえず、橘さん呼んでもらえるかしら？あと神田さんもね」

「神田も？」

帝督が『何故？』と言わんばかりの表情を浮かべて松本先輩に尋ねる。

「だって彼女は9位でしょう？」

「9位？……あ」

神田が9位、という話を聞いて合点がいった。今集められているのは大覇星祭時の人気投票でトップ10に入っていた生徒だ。凧は6位で帝督が1位、楓は4位で未来は9位だった。

「……てことはもしかしてピーターパンってのは……」

予想がついてしまった凧は憂鬱そうに松本先輩に尋ねる。

「ええ、アレよ」

ニコツと笑い、御愁傷様と言う表情を後に浮かべる。

「なあ凧、もしかして今年は……」

「ああ……ピーターパンでいくらしいな」

帝督が耳元で聞いてくるので答えると、彼も憂鬱そうなオーラを纏



いだした。

「それじゃあ4人揃ったことだし、生徒会室に行きましょう。他のメンバーも揃ってるわよ」

教室から楓と未来が出てきてのを確認すると松本先輩は生徒会室に向かってスタスタと歩き出す。

……先輩？

俺たち、執事服とメイド服着たままなんですけど？

そんな事はお構い無しに松本先輩は歩いていってしまつので、着替えるのを諦めて凧たちはその後を追った。  
楓が顔を真っ赤にしていたのが印象的だった。

\*

「失礼します。会長、2-Aの4人を連れてきました」

「ご苦労様。みんな、こっちに座って？」

生徒会室に入ると既にそこには生徒会長に副会長、大覇星祭時の人気投票で男女トップ10に入った生徒たち、そして演劇部の部長と副部長がコの字型に設置された長机に座っていた。

凧たちも指定された席につき、周りを見回す。大覇星祭の時にも思

ったことだが、やはり長点上機のトップ10だけあって皆イケメン、可愛い娘ばかりである。2 - A 以外は殆どが3年生で、事実男子は凧と帝督以外は残り8人みな3年生である。女子もほぼ3年生で2年生は楓と未来だけだが、こちらは1年生が1人、10位にランクインしている。

(えーと誰だったかなあ……大覇星祭の時に見たんだけど)

その1年生を見ながら頑張って名前を思い出そうとする凧だが、喉まで出ている答えがどうも吐き出されない。

すると、その1年生と目が合った。

目が合ったのに無視するというのもアレなので、凧は控えめに手を振ってみる。

その1年生は焦ったように凧から顔を逸らしてしまった。

(え……俺何か嫌われるような事した……?)

軽くショックを受ける凧を他所に、会議が始まった。

生徒会長が立ち上がり後ろにあるホワイトボードにペンでスラスラと文字を書いていく。ちなみにこの生徒会長、人気投票では2位である。

「えーみんな、集まってくれてありがとう。大体みんな予想はできてると思うんだけどー……」

スラスラとホワイトボードにペンを走らせながら生徒会長が言い、書き終わったのかキャップを締めてこちらに振り返る。

「今年の人気劇は、ピーターパンをやります!!」

バンツとホワイトボードを叩いて書かれた文字を指し示す。そこには『長点上機学園人気生徒合同劇 ピーターパン』と黒いペンで書かれた文字。

「またか……」

と5つ隣の席で帝督がぼやいているのが聞こえた。

『長点上機学園人気生徒合同劇』。略して人気劇とは、その名の通り長点上機学園で人気のある生徒が合同で行う劇の事だ。

一端覧祭では名門と呼ばれる学校ほど力を入れる。入学希望者を増やすためだ。では入学希望者を増やすにはどうすればいいのか、それはもちろん自分たちの学校にはこんな利点がありますよ、ということを見に来た学生やその保護者に見せ、納得させなくてはならない。

早い話が、この学校はこんな学校でこんな良い所がありますよ、ということを伝えなくてはならないわけだ。

長点上機学園の利点は何と言っても能力開発分野において学園都市ナンバーワンを誇っていることである。

学園都市をよく知らない保護者にとって超能力という未知なるものを受け入れてもらうために、生徒たちが能力を使って何かしらのパフォーマンスを行えばいいのだ。

ではどんなパフォーマンスをするのか？

そこで何代か前の生徒会が辿り着いたのが『演劇』である。演劇ならば学生や保護者も親しみがあり、それに能力を混ぜれば迫力も増す。そしてその考えは見事に的中し、それ以降毎年一端覧祭で行う劇は大好評だった。

しかし、それでは面白くない、と言い放ったのが先代の生徒会長。つまり凧たちが1年生の時の生徒会長だ。

ただ劇をやるだけでは面白くない。

第一、主人公が不細工なんてお客さんが認めないではないか。

そう言つて先代生徒会長が目をつけたのが大覇星祭の時に行われていた人気投票。

『このトップ10の人たちに劇をやってもらいましょう。ウチは殆どが高位能力者だし、迫力の面に関しても問題はないでしょ』と生徒会長はこの案を無理矢理通し、昨年は人気投票でトップ10に入つた男女各10名が演劇を行ったのだ。

半ば強制だったため出演した生徒からは反発もあったが、蓋を開けてみれば今まで以上に大好評。やはり容姿って大事だよな、と先代生徒会長は満足気に頷いていたそうだ。

そんなわけで今年も行われるこの人気劇。因みに去年は何故かスーウォーズであったことから、今年のチョイスは去年と比べれば大分マシだ。

「思い出したくねえ……」

と帝督は呻いていた。

彼は1年生の時から1位だったため去年の人気劇にも参加している。だが配役は主役ではなく、1ダ。理由を聞けば1年生で主役は荷が重いからしかなかった。

今思い出しても帝督の1ダは笑ってしまう。うちの演劇部はかなりレベルが高いためある程度の特殊メイクならやってのけてしまう。緑色になった帝督を体育館の客席で見ながら一方通行と軍覇の3人で爆笑したのは良い思い出だ。

しかし、今回は自分もこちら側である。

我関せず、というわけには当然いかない。

(変な特殊メイクとかされなきゃいいけど……)

緑色に特殊メイクされた自分を一瞬想像してみたが、余りの滑稽さに慌てて首を横に振ってそれを掻き消した。

「一条君?どうかした?」

「あ、いや何でも」

生徒会長が凧の様子を見て尋ねてきたが、とても口に出せることではないため黙っておく。

「それじゃ配役とか演出の説明は影森君にやってもらおうね」

そう言うと生徒会長は自らの椅子に座り、代わりに影森という演劇部部長がホワイトボードの前まで移動し、説明を始める。

「えー今年はホワイトボードに書いてあるようにピーターパンをやる。それに当たったの配役だが……主役であるピーターパンとウエインディはもうこちらで決定してある」

影森は手元の資料を時折見ながら説明を続ける。

「まずピーターパンだが、垣根にやってもらおう」

「俺!？」

いきなり指名され帝督は驚愕している。

「1位なんだ。当然だろう?」

「う……まあ変な脇役よりはな」

「でウエインディは、雛乃」

「はい」

そう言われニコニコしながら返事したのは生徒会長だ。

本名、五十嵐 いがらしひなの 雛乃。大霸王祭時に帝督に投票したことを全校生徒の前で言うくらい帝督ラブで、当然の如くファンクラブ（非公式）に加入している。

なんかこの配役裏がありそうだよなあ、などと風が考えていると名前が呼ばれた。

「一条はジョンな」

「はいよ」

ジヨンとはウエンディの弟でピーターパンに憧れる少年だ。

「でティンカーベルは橘」

「ええッ!？」

メイド服を着たままの楓が思わず声を荒げて立ち上がる。

「ん?何か問題でもあったか？」

「いや……ありません」

何かを言おうとしたが諦めて席につく。

こうして影森が全ての配役を言い終え、最後に一言、

「いいかお前ら、絶対この劇を成功させるぞ!!」

うわぁこの人見かけによらず熱血だなぁ、凧は思った。

かくして会議も終わり、それぞれのクラスへと戻っていく。因みに未来はタイガーリリー役だ。何故か今年は2年生が主要キャストに多く含まれている。

ふと窓から外を見てみれば夕焼けが学園都市を茜色に染めていた。

一端覽祭開催まで、  
あと2週間。



第39話 そして今年も開催人気劇《Peter Pan》（後書き）

新キャラらしき

松本さおりですが、

作者のイメージ的にはけいおんの和みたいな感じですよ。

生徒会長は大覇星祭時もちよつと出てきましたが一端覧祭でブレイク予定（笑）

第40話 接客、演技また接客へthere|soon (前書き)

投稿が遅くなり誠に申し訳ありません( - ; )

携帯がポシャって代機での執筆なのでなかなか作業が進まないです；

携帯復帰までもうしばらくかかりそうですが、何とか早く次を投稿  
できるように尽力するのでどうぞよろしくお願いしますm ( - )

m

## 第40話 接客、演技また接客へthere|soon

11月14日(月)

一端覧祭まであと1週間となった学園都市では、全ての学校が開催に向けてラストスパートをかけている。街中を見ても資材や機材を運ぶ学生や買い出し、チラシを配る学生で溢れており、学園祭特有の妙な高揚感が学園都市を取り巻いていた。

そんな中、長点上機学園では。

「垣根!!!出来たぞ!!!」

教室で金森がつくった料理を味見していた垣根に向かって佐竹が勢い良く教室のドアを開けてやってきた。

「できたって何が?」

「店の名前だよ名前!!!」

ああ、そういえば佐竹に任せてたんだっけか、と思い出した帝督。

「んで、どんな名前なんだ?」

「フッフッフー、刮目せよ!!!これがウチの名前だあッ!!!」

バツ!!!

と何やら丸めていた紙を開いて此方に見せる。そこに書かれていたのは

「……これ執事喫茶なんだよな？」

帝督が念のためにもう一度佐竹に確認をとる。おそらくこの名前を見たAクラスの生徒皆が思っただろう。

「もちろんだ」

「じゃあその名前はおかしいんじゃないのか？」

「なにをう！？この店名のどこがおかしいと言っただー！！」

「全部だアホがー！！」

「俺が苦労して考えた店名だぞー！！アホ言っなー！！」

「苦労して出した答えが何で執事喫茶『讃岐うどん』なんだよッ！  
！洋食出すっつってんだろうがッ！！」

佐竹が広げる紙に書かれていた店名、

執事喫茶

『讃岐うどん』

執事もメイドも洋食も何一つ接点を持たないこの日本食を佐竹が店名にした理由は、

「太く長く繁盛しますように」

「一端覧祭の開催期間は1週間だー！！」

頭は良い筈だがどこか大事な所が抜けている佐竹に帝督がツッコむ。

「垣根君」

「ん、宮崎か。どうした？」

「松本先輩が呼んでるよ」

宮崎に言われて教室の入口のほうを見てみれば松本先輩が手をヒラヒラと振っていた。

「ああ、もうそんな時間か」

帝督は試食していた箸を置き、机の上に置いてあった台本を手にとって教室を出ていった。

「悪いわね。時間取らせちゃって」

体育館へと向かう廊下で松本が言う。

「いやいいよ。これも賞品のためだ」

「でも『讃岐うどん』が店名なの？」

「真に遺憾なんだが……」

言われてげんなりする帝督に対して、

「いいじゃないギャップがあって」

「洋食とは対極に位置する食い物持ってきたんだぞ」

「お客は注目すると思つわよ?」

「そんなもんかねえ」

「そんなものよ」

と話しているうちに体育館の前までやってきた。中からは何やら話し声が聞こえる。帝督は体育館のドアを開け、松本と一緒に中に入っていく。

「おのれフック!!我が娘を返せ!!」

「ならばピーターパンを出せえ!!」

体育館のステージ上では衣装を纏った男子2人が演劇の練習をしており、ステージ脇では演劇部の副部長が指示を出している。ステージ下ではメガホンを持つ演劇部部长を筆頭に生徒会長や出演者、もちろん凧や楓、未来などもいた。

「出番そろそろだから、衣装に着替えて準備してね」

「はいよ」

松本先輩に言われたように帝督は演劇部から衣装を貰いステージ脇へと向かっていく。その姿を衣装を着た凧を見つけ、駆け寄ってきた。

「よう風、なんだ寝起きか？」

「衣装だっつの」

風の衣装はパジャマである。なんでも夜家からネバーランドへと向かうシーンを行っているからだそうだが。

「それよりも料理どうだった？」

「おお、流石は金森。味は完璧だった」

実は帝督も元々は演劇の練習のため体育館に居たのだが、金森に味見を頼まれたため、暫く時間を空けてもらっていたのだ。

「……………味は？」

何か引つかかるといっように風が尋ねる。

「……………味はいいんだよ」

「じゃあ何がダメなんだよ」

「……………店の名前だ」

先程の佐竹とのやり取りを思い出してしまった帝督が頭を抱えて答える。

「お、名前決まったのか」

「……………アレで決定にしてほしくはないんだがな」

「……どんな名前なんだよ」

帝督の余りの落胆ぶりに何かを感じ取った凧がおそるおそる聞いてみる。

「……讃岐うどん」

「ん？讃岐うどんなんかメニューにあったか？」

「違う。店名だ」

……一瞬間。

「……は？」

「だから、『讃岐うどん』って店名なんだよ……」

「執事喫茶と何の関係があるんだ……？」

「太く長く繁盛しますように、だそうだ」

「人生カツ！」

思わずツッコんでしまった。いくらなんでも喫茶店の名前が『讃岐うどん』で問題あるだろうと思うが、佐竹に一任した以上変更するわけにもいかないようだ。

「まあそういうことだ……俺着替えてくっから」



そう言つて帝督は衣装片手にステージ脇へと入っていった。  
これからやるシーンは帝督と生徒会長五十嵐先輩によるピーターパンとウエンディのシーンだ。五十嵐先輩は既に指定の位置でスタンバっている。

(そついや帝督に惚れてるんだっけか)

大覇星祭の人気投票時、彼女は全校生徒の前で垣根帝督ラブを表明した。聞くところによると垣根帝督ファンクラブの現会長でもあるそつだ。

そう考えるとこの配役は生徒会長が裏で糸を引いていたのではないだろうかと思うのだが、それを今聞いても藪蛇なので黙っておくことにする。

「凧」

掛けられた声に反応し首を右に回す。

「凧か」

そこにいたのはティンカーベル役の凧。

「あ、あんまりジロジロ見ないでよ……」

凧の視線に気付いてか頬をうつすらと紅く染め身体をよじる。

「いや似合ってるよ」

「笑いながら言われても全然嬉しくないんだけど」

凧がついつい見てしまうのは凧が身に付けている衣装だ。

彼女はティンカーベル役なのでもちろん衣装はそれに準拠したものとなる。結果、なんともまあファンシーな衣装を着る羽目になるわけ、

「うう……こんなを着て演劇なんてムリよ」

背中から生えたビニール製の羽をつまみながら凧が呟く。（服装としては五和の大精霊チラメイドに近い）

「これも賞品のためだろ」

「こんな格好してまでして私は賞品なんて欲しくない……」

ガツクリと肩を落とす凧を横目にステージの方を見れば帝督と五十嵐生徒会長の練習が始まっていた。

帝督はピーターパンの格好である緑色のタイツに黄緑の袖を三分丈くらいに切り落としたシャツ、頭には帽子という衣装を身に纏っている。

「ウエンディ！！今助けるぞ！！」

「ピーターパンー！！」

客観的に見ても帝督の演技は普通に上手い。凧は演劇部部長の影森に何度もNGを喰らって時間を大幅に取られたが、帝督は一発OKで次のシーンへと移っていく。

（まああんだけ女子に笑顔振り撒いてりゃ演技なんてお手のものだよな）

いつもの営業スマイルを生かして演技していく帝督を見ながら凧は小さく溜め息を一つ。

「ん？」

何だか視線を感じる。凧が辺りをキョロキョロと見回してみると、

「あ

……」

あの1年生の女の子と目が合ったが、すぐに顔を逸らされた。

（俺なんも悪いことしてないよな……？）

あらぬ方向に思考を巡らせている凧の隣で楓がムスツとしていたのに彼は気付かなかつた。

演劇の練習が終了したのは午後4時半。3時間以上も凧たちは体育館で練習をしていた。

「あー声出し過ぎて喉痛え」

衣装から制服に着替えて教室に戻る途中で帝督が言う。

「喉潰したらあの部長にどやされるぞ」

「大丈夫だよ。お」

「大部分が出来てきたな」

到着した教室を見て凧と帝督は笑う。

教室の外装は鮮やかに彩られ、誰がどこから持ち出ししてきたのか金本考案のメニューの食品サンプルまでガラスケースに入れられて展示されていた。

「なにこのムダなクオリティ」

「佐竹だな」

食品サンプルを見て苦笑いする凧に帝督が答える。

さらに上を見上げてクラスのプレートの隣を見てみれば……

「だからこれ喫茶店と関係ねーだろ」

帝督が愚痴をこぼし、

「えらい達筆だな」

凧は顔を引きつらせる。

そこにあっただのは看板。喫茶店ということまで洋風に横書きなのは問題ないが、筆で書かれた『讃岐うどん』という文字は余りにも外装のシックな雰囲気から浮きすぎていた。「ギャップとかそういう問題じゃねーだろコレ……」

これだけ見れば完全に和食処なこの看板を見ながら帝督は先程松本に言われたことを思い出して言う。

看板については後で佐竹に問いただすとして、  
とりあえず教室へと入る。

「おお」

「すごいな」

内装もほぼ完成しており、床には赤いカーペットが敷かれ、丸いテーブルにテーブルクロスをかけたものが等間隔で教室内に配置されている。

「お、戻ったか一条に垣根」

教室の端でホール勢を集めて接客指導を行っていた会田がこちらにやって来る。

「おう会田。ホールの奴らはどうだ？」

「みんな覚えがいいからな。大体はOKだよ、一方通行が全く笑わないけどな」

「まあアイツは仕方ねえな。とりあえずそのまま続けてくれ」

「了解」

帝督に指示され会田は再び一方通行や軍覇が集まるホール担当の元へと戻って行った。

「さて、俺たちも行くぞ」

「おう」

帝督に促され、凧は執事服を手に取って再び教室から出て行く。現在教室にはホール担当と内装担当の女子がいるからだ。

廊下に出ると各クラスから活気に満ちた声が聞こえてくる。

沈みかけた太陽を窓から見つめて、凧は更衣室へと歩を進めていった。

一端覧祭開催まで、  
あと6日。

第41話 そして幕が上がる〈the|day|before〉(前書き)

なんとか投稿できました。

これで準備期間は終わりです。

今回の主役は何故か軍覇になりました(笑)

## 第41話 そして幕が上がる〈the day before〉

「よしッ、オツケー!!!」

本日11月20日(日)

つまり一端覧祭開催の前日、学校は休みなのだが、一端覧祭を翌日に控えた今日はほとんどの生徒が学校に足を運んでいる。

やることは大体何処も同じで最終調整やりハーサルなど、明日のために必要な打合せを含めた確認作業だ。それはもちろん凧たちのクラスにしても例外ではなく、教室の外装と内装を受け持った生徒(主に佐竹ら失墜委員会)は今日は休息の意味も兼ねて欠席だが、ホール担当は明日の接客の最終確認、キッチン担当は明日の仕込みや配置、出回り担当はチラシの誤字がないかの確認や歩き回るルート of チェックなど、それぞれができる限りの作業を進めている。

凧を含むランキングに入っている21Aの4人は体育館で演劇の最終確認を行っており、たつた今演劇部部长でありこの人気劇の総指揮をとる影森のオーケーサインによって無事にその確認を終えた所だ。

ステージ上は明日の為にパソコンから出力された背景が映し出されており、場面に合わせて自動で背景が切り替わる。学園都市特有の技術の高さが如実に現れていた。

「お疲れ垣根。明日も頼むぜ」

演技を終えて降りてきた帝督に影森がメガホンで肩を軽く叩く。



降りてきた、というのはステージ上から体育館へ下りてきたという意味ではない。

「任せてくれ」

帝督はそう言いながら腰に装着していた金属製のベルトを外す。そのベルトからは鋼鉄のワイヤーがステージ上部まで伸びており、先程まで帝督は宙を舞っていた。

「ワイヤーの方も問題ないかー!？」

影森がステージ脇で音響などを確認していた演技部副部長へと尋ね、

「長さも強度も問題なしですー!!」

こちら側姿は見えないが副部長がそう答えた。

そう、この演劇ではワイヤーアクションを取り入れている。それは何も主役である帝督だけではない。空を飛ぶ予定のあるキャストは全員が腰に金属製のベルトを装着してワイヤーに吊られるのだ。

「もう……むり」

そう言いながら腰からベルトを外す楓。彼女はティンカーベルの役であるが故に、出演時間のほぼ全てをワイヤーに吊られた状態で過ごさなくてはならない。

「どうした橘。お前高所恐怖症だったか？」

影森が不思議そうに首を傾げる。

「そうじゃなくてこの衣装でワイヤーアクションすることに問題があるんです!!」

顔を赤くしながら楓は影森に猛然と抗議する。楓の衣装はふんわりした感じの薄黄色のドレスに羽が生えたような衣装であり、その衣装のまま宙を舞うとスカートの中が見えてしまう。

「それにティンカーベルとピーターパンのサイズがほとんど同じっていうのもすごい変だと思っんですけど……」

楓が言うことももつともだ。身長が180を越えるピーターパンの頭上を身長160のティンカーベルが飛び回る。

とんでもなく異様でシュールな光景になる。

「ああそれなら問題ないぞ」

だがそんな楓の心配などどこ吹く風で影森が言う。

「橘はパソコン使ってサイズを小さくして映し出すようにするから」

「……え？」

「だから、サイズを縮小して観客には身長30センチくらいに見えるようにパソコン使って操作するから問題ない」

そう言って影森は置いてあったノートパソコンを指差す。

何やら画面に光を灯しているパソコンに楓が目をやってみれば、そこには録画されていた楓の姿。

「これ……私ですか？」

うわぁ、と自分の姿を見て顔が引きつる。この衣装はないだろう、いくらなんでも露出が多すぎる。

肩は全て露わになっているし、胸の辺りもギリギリまで衣装の面積が削られているのだ。

そしてなによりも――

(こんな衣装を着て人前に出たら……死ぬ)

絶望感に打ち拉がれながら、もう逃げられないこの状況にいつそため込まず泣いてしまおうかとちょっと本気で考えた。

楓が体育館でガツクリと肩を落としている頃、凧は一方通行と一緒に第一八学区の大通りを歩いていた。その手には手作りのチラシを持っており、道行く人々に手渡している。

「長点上機学園です。よろしく願いします」

凧は通りの真ん中に立ち、行き交う学生や大人に次々とチラシを渡して数を捌いていく。

もともと長点上機が有名であり、人気劇が話題にもなっているというところも手伝って順調にチラシは減っていく。

ちなみに凧は劇の最終確認が帝督や楓よりも一足早く終わったために教室で暇そうにしていた一方通行とチラシ配りに駆り出されているのだ。

「おい一方通行も配るの手伝ってくれよ」

隅で腕を組んで建物の壁に寄りかかっている一方通行を見て凧が言う。

「俺にはこオいうのは向いてねエンだ」

「いやなんのためにここまで来たんだよ」

「凧の付き添い」

「手伝えよッ！！」

つい持っていたチラシを落としそうになってしまったが何とか堪えて持ち直す。

「ホラちゃっちやと働け凧イ」

「く……いつか絶対仕返ししてやるからな」

負け犬みたいな発言をしてしまった。とそんな凧にふと掛けられる声。

「あ、凧」

「げ……」

「げ、とは何よ」

凧の前に立っていたのは第一八学区には居るはずのない女子中学生。肩にかかるくらいのキレイな茶髪に花の髪留めをつけ、ブレザーに紺色のスカートを身に纏うその少女は凧の従兄弟、常盤台のエース御坂美琴その人である。

「……なんでお前がこんなトコに居んの？」

彼女が通う常盤台中学のある第七学区は長点上機学園のある第一八学区とは離れている。そう簡単に行ったり来たりできる距離ではない筈だ。

「私は黒子の付き添いよ」

「白井の？」

「そ。何でも長点上機の風紀委員と合同の会議があるらしくてね、一端覧祭の下見がてらに私も同行したってわけ」

「ああ、だから大塩が慌ててたのか」

チラシ配りに出る前にクラスで大塩が『やばい！！今日会議あったんだああ！！白井ちゃんに殺されるううう！！』などと喚いていたのを思い出しながら美琴の話を聞いていると、

「あ、これ長点上機のチラシ?」

こちらに近付いてチラシを覗き込む美琴。

「おい……あんまくっ付くなよ」

ぐいぐいこちらに体を寄せてくるせいでその……肘に何か柔らかいモノが当たってるんですけど。

「何よ今さら。照れてんの?」

ニヤニヤしながらこちらを見つめてくるので、凧は視線を美琴から逸らす。

いくら従兄弟であつても女性。対して凧も健全な男子生徒だ、それなりに意識はしてしまつ。

「とりあえず……離れろよ」

「もう、素直じゃないなあ凧は。そんなだと凧さんが取られちゃうわよ?」

「なつ、何でそこで凧が出てくんだよ!!」

「べつに」。凧もアイツくらい鈍感なんじゃないかって思っただけよ

「アイツ?……ああ、お前が惚れてる男が」

「ぶはっ!?!?」

凧の言葉に顔を赤くして吹き出す美琴。この反応からして間違いないな、と凧は結論付ける。

「ななな、何言ってるのよ!!わ、私は別にアイツなんて……」

段々と声が小さくなっていくのを見て、これはいいことを聞いたと内心悪い笑みを浮かべる。

「オイ俺は蚊帳の外ですかア？」

突然2人に掛けられた声。その主は一方通行だった。見ればいつの間にか一方通行が配る手筈のチラシが全て無くなっている。

「とつとと帰るぞ凧」

「ちょ、俺まだ配り終わってない!!」

「自業自得だ」

そう言っつて一方通行は凧たちに背を向けて長点上機への道を歩き出す。

「はぁ……」

「私も手伝ってあげるわよ」

「元はと言えばお前が……」

「え?何?」

「ナンデモアリマセン」

文句を垂れようとしたら笑顔を貼り付けた美琴からざっと5億ボルト程の電撃が飛んできたため、冷や汗を流しながら自らの身の安全を確保する。

「ほらちやつちやつと配るわよ」

凧が持っていたチラシを半分ほど奪い、往来する人々に配っていく。

「てゆうーかいいのか？」

「？ 何が？」

「常盤台が長点上機の宣伝なんかして」

「う……」

美琴が言い淀む。

長点上機学園と常盤台中学校はお互いに学園都市五本指の一角でライバル校である。

それぞれが入学者獲得のために画策している中で常盤台、それもエースと称されている美琴が長点上機のチラシを配る。まさに敵に塩を送る状態なのだが……

「まあいいじゃない。従兄弟だし」

あっけらかんと美琴は笑ってそう答える。



美琴に好かれてるやつは幸せ者だなあ。  
美琴の笑顔を見てふと内心そう思った。

帝督が演劇の最終確認を終え、凧と一方通行が学園の外でチラシ配りをしている頃、もう1人のレベル5削板軍覇はというと、

「……迷った」

迷子になっていた。

「むう。凧も一方通行もどこ行っちゃったんだ？」

実はチラシ配りに駆り出されていたのは凧と一方通行だけではなく、この軍覇も一緒に第一八学区でチラシ配りをしに行ったのだが、いつの間にか2人とはぐれて気がつけば彼は第七学区に来ていた。

「ふ、だが甘いな迷子よ！！それくらいで俺に勝ったと思うなッ！！」

迷子から叩きつけられた挑戦状に雄叫びをあげる。それを見た道行く人々が軍覇を避けるようにして歩いていくが彼はそんなことには気付かない。

「俺には文明の利器、携帯があるんだ！！これで凧を呼べば俺の勝

「ちだー!!」

訳が解らないことを空を見上げて叫びながら携帯を取り出すべく制服のポケットへと手を伸ばす。

「フッファー」

ゴソゴソ

「ファー」

ガサゴソ

「……………」

ガサゴソガサゴソ

「……………」

ピタッ

「……………教室だ」

携帯を教室に置いてきてしまった事を今思い出した。

「……………どうする」

削板軍覇は極度の方向音痴である。多分こっちだろっつというような曖昧な考えで歩き回れば結果は目に見えている。それは自身もなんとなくではあるが察しているため此処から動くのが得策ではないと

いうことは解っているのだ。

「うーむ……知り合いも見当たらんしなあ……」

大通りで立ち尽くす軍覇。周囲には明日に備えてチラシを配つたり  
買い出しに来ている学生が多く見られるが、生憎知っている顔は一  
つも見当たらない。

そんな途方に暮れる軍覇の耳に、何やら騒がしい声が届いた。

「貴様どうしてチラシを折るの!!」

「だってそのほうが持ちやすいだろ!!」

「それじゃあ貰った人が折れ線のついたチラシを貰うことになるで  
しょうがッ!!」

「痛ッ!!待って吹寄!!おでこは止めて!!」

声が出た方を見てみればまるでウニのようなツンツンな頭をしてい  
る少年と腰辺りまで伸びた黒髪と巨乳が特徴的な少女がチラシを抱  
えて何やら口論をしていた。

そんな2人を見てしまえば、間に割って入って仲裁したくなってし  
まうのが愛と根性のヲトコ、削板軍覇である。

彼は迷うことなくその2人の元へと歩んでいった。

「おいそこの少年と嬢ちゃん。あんまりいがみ合うもんじゃねえぜ」

突然掛けられた言葉に反応した2人は軍覇のほうへと首を回す。

「アンタ……誰よ」

一応初対面なため気を遣っているのか貴様とは言わずにアンタと言う吹寄。ヘッドバッドを喰らいそうになっていたウニ頭は助かったく、と目を潤ませていた。

「問われれば答えよう俺は長点上機学園2年A組削板軍霸だッ！」

どばーんッ！

と腕を組んで仁王立ちする軍霸の後ろで戦隊ヒーローの演出に使われそうなカラフルな爆発が巻き起こる。

「ぶはっ！！」

その爆発の被害を顔面にモロに受けたウニ頭が涙目になりながら咳き込む。

「長点上機……！？そんな名門が何で第七学区にいるのよ」

吹寄はまだ軍霸のことを疑っているようだ。それも当然、今現在軍霸は長点上機の制服を着用していない。宮崎お手製の執事服を身に纏っているのである。

「迷った」

「迷ったあ！？」

思わず吹寄は大声を出してしまった。

(高校生にもなつて迷子つて……)

長点上機学園の生徒ならば学園都市においてエリート中のエリートの筈だ。そんな学園の生徒が迷子？吹寄の疑問は深まるばかりだった。

「おい大丈夫かウニ頭」

「ウ、ウニ頭あ!?!」

軍覇は爆発に巻き込まれて咳き込んでいた少年へと声を掛ける。

「俺は上条当麻つて名前があるんだけど……」

「小さいことは気にすんなよウニ頭」

「気にするわ!?!」

上条当麻と名乗る少年だつてオシャレに気を遣う学生なのである。一応申し訳程度にセットしていた髪型をウニ頭と一蹴された精神的なショックは計り知れない。

「お、そうだ嬢ちゃん。チラシ俺に一枚くれ」

「え?ええ、はい」

言われた吹寄は軍覇に持っていたチラシの一枚を渡す。

受け取ったチラシを眺めてみると、そこには女子が書いたであろう丸みを帯びた可愛い字で自分たちの高校をPRしていた。どこにでもある平均的な高校なのだろうが、何故か学生みんなの気持ち

が籠もっているように感じられ、軍覇の口元は自然に弛んでいた。

「いいじゃねえか。俺も行けたら行くぜ」

「そう？あまり期待はしないで頂戴ね」

そう言う吹寄だが褒められて嬉しいのか少し頬が弛んでいる。

と、

そんな良い空気をぶち壊すような輩が。

「おゝ何々？君らの高校喫茶店でもやんのぉ？」

話しかけてきたのは金髪にピアスと如何にもチャラついた輩3人。

『君ら』というのは軍覇も上条たちと同じ高校だと思われているのだろう。

「だったら俺はこの娘に接客してほしいなあ」

チンピラの1人が吹寄の肩に腕を回し、ニヤニヤしながらそんなことを言う。

「離しなさいっ！！」

「ひゅゝ、気が強い娘っていいねえ」

吹寄が回されていた腕を払いのけようとするが男のほうが力が強い

ため引き剥がせない。

「てめえ、吹寄を離せッ！！」

「ああん？俺ら女には優しいけど男には容赦しねえぜ？」

上条が叫ぶがチンピラは腕をパキパキとならして威圧してきた。

「おら、解つたらとっと消える。俺らこれからこの娘と遊ぶからよ」

「ぎゃはははッ！！」

下品な笑い声に吐き気がする。

「吹寄を離せつてんだよッ！！」

上条がチンピラの1人に殴りかかった。

「ぐあッ！！」

その右ストレートは吹寄に腕を回していた男の顔面に見事に直撃し、男は後ろに倒れ込む。

「上条！！」

解放された吹寄が上条のもとへ駆け寄ってくる。いくら強がっていてもやはり女の子。恐怖を感じていない筈がないのだ。

「大丈夫か！？」

吹寄を抱き止めた上条が心配そうに覗き込む。

「え、ええ」

とは言うものの吹寄の肩は小刻みに揺れていた。

それを見た上条は目の前のチンピラたちに怒りを覚えるが、1対3では明らかに不利だ。隣に仁王立ちしている少年は長点上機学園在籍だと言っていたので高位能力者である可能性が高いが、そういうエリート学生はこういった街中の喧嘩には向いていないということを上条は知っていた。

(こいつは巻き込めない……どうやってチンピラどもを撒くか)

そう考える上条の前には怒り心頭のチンピラたちが。

「てめえよくもかつちゃん殴りやがったなあ!!」

「ただじゃ帰さねえぞゴラア!!」

「ぶっ殺す!!」

チンピラたちは各々手から炎やら風やら水を生み出している。

(くそ、コイツ等みんな能力者か!!)

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる上条。彼の能力チカラを使えば能力を打ち消してしまうことも可能だが、吹寄と隣の少年まで巻き込んでしまうかもしれない。それは避けたかった。

「死ねやゴラア!!」

そう言ってチンピラの1人が炎の球をこちらに向かって投げつけてくる。



「くッ……!!」

こうなればもう仕方がない。適当に応戦して逃げようと決心した上条が右手を突き出すよりも早く、上条の前に軍覇が立ちふさがった。

「削板ッ!？」

ポッ!!

と炎の球が削板に衝突し、そのまま地面に倒れる。

倒れた軍覇は動かない。

「ぎやははは!!バカだぜアイツ、自分から飛び込みやがった!!」

炎の球を投げたチンピラが笑いながら倒れている軍覇を指差す。

「お、おい削板!!」

上条は目の前で倒れた削板の身を案じて駆け寄るが、

「むううつつん!!」

突然削板がガバツと立ち上がった。

「ええ!？」

「「「ええええええ!？」」」

驚愕する上条とチンピラ3人。レベル3程度はありそうな炎の球を

生身で受けて無事なのはどう考えても可笑しい。

「チツ、ダメだなお前ら。根性、根性が全く籠もってねえ」

何事もなく立ち上がった軍覇はチンピラ3人を見据えて服についた砂を拭う。

「ああ、宮崎に作ってもらった服汚しちまった……」

「おい大丈夫なのか!？」

上条が心配そうに軍覇に尋ねる。

「心配すんな。俺は長点上機学園2年A組削板軍覇。こんな奴らに遅れはとらねえ!!」

バサツ、と執事服の上着を脱ぎ捨てる。

蝶ネクタイを外し、脱ぎ捨てた上着と一緒に上条に手渡す。

「それ持って嬢ちゃんと一緒に下がってる」

「お前はどつするんだよ!？」

「ちょっとアイツ等と拳で語り合ってくる」

そう言っつて軍覇はズカズカとチンピラに近づいていく。

「んだてめえ!!」

近づいてきた軍覇に向かってチンピラの1人が風を操ってかまいた

ちのような鋭い風の刃を形成、それを投げつける。

が、

「効かん!!」

軍覇はそんな攻撃など受けていないかのように近づいていく。

「な、なんだよコイツ!!」

風使いのチンピラが恐怖を覚えるがもう遅い。既に軍覇はその拳が届く範囲にまで接近していた。

そして、

「すごいパンチ」

「ぶぎゅるばんツ!!」

軍覇の拳は当たっていない筈なのに、風使いは吹っ飛んだ。

「「なあ!?!」」

残るチンピラ2人がそれを見て驚愕、それは上条と吹寄も同じだった。

「アイツ……やっぱり高位能力者だったのか」

「長点上機の削板……まさか」

何かに気付いたような吹寄。

「削板を知ってるのか吹寄？」

「寧ろどうして今まで気付かなかったのかが疑問だわ」

吹寄は目の前でチンピラどもを薙ぎ倒していく削板軍霸を見ながら  
呟く。

「あの人は……」

「すごいパンチ」

「げるぼッ!？」

炎使いのチンピラが吹き飛ばされた。

「としゆきー!!」

残った水使いが吹き飛ばされた炎使いの名を叫ぶ。

「くそが!!くたばりやがれ!!」

チンピラは直径五十センチ程の水球を作り上げ、それを軍霸目掛けてなげつけた。

「そんな攻撃、俺には効かん!!」

軍霸に水球が触れた瞬間、水の球は弾け飛んだ。

「な!？」

「すごいパンチ」

「ばんだっ!！」

どごーん、

という音と共に最後のチンピラがノックアウトされた。

「根性の無え奴らだ。出直してきやがれ」

「………すげえ」

上条当麻は目の前の削板軍覇という少年に目を奪われていた。学園都市に7人しかいない超能力者（LEVEL5）の第七位、最大原<sup>ナンバーセ</sup>石の削板軍覇。御坂美琴のようなわかりやすい能力ではない、寧ろ繊細すぎて研究者ですら手が付けられないその能力者が、上条当麻の目の前に悠然と立っていた。

「おうウニ頭に嬢ちゃん、もう大丈夫だぜ」

ニカッ、と真つ白な歯を見せて笑う軍覇を見て、自然と上条と吹寄にも笑みがこぼれる。

「あ」

思い出したかのように軍覇が言い、2人が何事かと思ってみれば、

「長点上機までの行き方教えてくれ」

最後の最後で締まらなかった。

学園都市を照らす夕焼けを背に、軍霸たち3人は長点上機学園への道のりを歩いていく。

やがて日は落ち、夜が訪れる。

そして東から朝陽が昇り、世界最大の文化祭、『一端覧祭』が幕を開ける。

第41話 そして幕が上がる〈the|day|before〉(後書き)

次回

よじやく―端覧祭開幕

第42話 一端覽祭開幕〈first|the|first〉(前書き)

お待たせしました。



## 第42話 一端覧祭開幕〈first | the | first〉

11月21日(月)

これまで1ヶ月近く準備に時間を割き、それぞれの学校が入学希望者を集めようと力を入れる世界有数の超巨大文化祭、一端覧祭が幕を開ける。

生徒は模擬店などの売上を伸ばすために力を入れ、教師は学校の評判を上げるために力を入れる。

大覇星祭のような外部向けのイベントではないため衛星中継などは行われませんが保護者や来年進学という学生が多く訪れるためオープンキャンパスの色合いが強くなっている。

本日は快晴。

雲一つ無い秋空が広がり、肌寒さを感じるさせる風が髪を揺らす。

AM08:05

長点上機学園2-A教室。

「キッチンの方はどうだい？」

既に執事服に着替えを済ませた垣根帝督が調理室のドアを開き、中で準備をしていた金森とその他のキッチン担当たちに問いかける。

「おう垣根。準備はバッチリだ、いつでもいけるぜ」

金森が自信たっぷり親指をたてて答えた。  
金森の後ろのキッチンを見てみればあとは解凍するだけの料理が、  
食器とともに並べられている。

「よし、9時からの開会式が終わって10時には店を開けるからす  
ぐに料理を出せるようにしといてくれ」

「分かった」

「大塩は何も触るんじゃねえぞ」

「何でっスか!?!」

金森の背後でつまみ食いをしてしようとしていた大塩を帝督が切り捨てる。

「その手に持つてるサンドイッチは何だ」

「……」

「とりあえず戻せ」

「……」

「おい大塩」

「……ッ（パクッ）」

「あッ、てめえ!?!」

まじまじとサンドイッチ（ハム玉子）を見つめていた大塩がそれを自らの口へと放り込んだ。

「吐き出せッ！！ いやいい、やっぱいいから本当に出そうとすんなッ！！」

「もぎゅもぎゅもぎゅ」

まるでハムスターのようにサンドイッチを頬張る大塩。

「……はあ、尻に言って白井に報告してもらいか」

「むぎゅ！？ 待って垣根！！ 俺を見捨てないで欲しいっス！！」

「汚っ！！ 食いながら喋るんじゃないよッ！！」

大塩の口からは咀嚼された玉子やらハムやらが吐き出され、調理室が凄惨な場へと早変わりした。

「よう尻。準備できたのか」

調理室を後にした帝督が教室のドアを開けると執事服を身に纏った尻が居た。

一方通行と軍覇はまだ着替えに行っているようで此の場には居ない。

「よう帝督。調理室のほうはどうだった？」

「大塩のせいで地獄絵図だ」

「は……？ ……ああ、なるほどな」

最初は理解不能といった顔をしていた凧だったがすぐに想像できてしまった。

「……つまみ食いでもしたのか」

「御名答」

はあ、と頭を抱えて溜め息をつく凧を余所に、着替えを終えた生徒たちがゾロゾロと教室に入ってきた。

ホール担当の凧たちは無論執事服で凧たちはメイド服だ。キッチン担当はコック帽を被り白で統一された服を着ている。内装外装を担当した失墜委員会たちは普通に制服で、出回り担当は何故かキツネとタヌキの着ぐるみだ。それも人数分色違いで。

紫のタヌキとか気持ち悪いわ。とかなんとか凧が思っていると校内放送がかかり、

『……全校生徒の皆さんにお知らせします。只今より開会式を行います。生徒の皆さんは体育館に集合してください』

放送の声はよくよく聞いてみればあの生徒会長の声であり、その放送を聞いた生徒たちはそれぞれの服装で体育館へとそろそろ歩いていく。

「……俺こんな着ぐるみの隣で歩きたくねえんだけど」

隣をスタスタと歩いていく原色ギトギトのカラフルなキツネやタヌ

キを横目に見ながら凧が眩く。

「奇遇だな凧。俺もだ」

「誰だよあんな衣装用意したの。あれじゃ客呼ぶどころか避けられちまうじゃねえか」

「俺に言うなよ……。多分演劇部の奴らから借りてきたんだろ」

「にしてももう少しまともな着ぐるみは無かったのか……？」

「どこも考えることは同じだからな。出遅れたらあんな風になっちゃうんだろ」

そんな会話をしているうちに凧と帝督は体育館に到着、中へと入っていく。

内部は来場客用にパイプ椅子が満遍なく設置され、開会式の最中は生徒がそれに座って過ごす。

ステージ上には既に人気劇の準備が完了しているため幕が降り、奥が見えないようになっていく。

「よオ凧」

「遅かったじゃねーか」

声が出た方を向いて見れば、既にパイプ椅子に腰掛けていた一方通行と軍覇が居た。既に着替えは完了し執事服に身を纏っている。

凧たちも一方通行たちの隣のパイプ椅子に腰掛け、開会を待つ。

一端覧祭の開会式は大覇星祭と違って巨大なスタジアムで行ったりはしない。一カ所で行われる開会式を各校のスライドにプロジェク

ターで投影し全校同時に開会式を行うのだ。

その放送には各校のPRのためのCMなども幾つか流されるため、まず参加校はこのCMに力を入れる。

このCMを放送させるには様々な難関を突破しなくてはならないのだが、長点上機学園は常盤台と並んで当然のごとく選抜されている。

「今回のCMって誰が作ったんだ？」

足を組んでパイプ椅子に腰掛ける一方通行が言う。

「今年は確か三年の放送部と演劇部が共同で製作したんじゃないかっ  
たっけ」

凧がその問いに答える。

凧たちは後ろのほうに座っているため全体の動きがよく見える。先ほどと比べて生徒が多くなってきたのもうすぐ開会式が始まるだろう。

前方を見てみればプロジェクターにもスイッチが入れられていた。

「ほらほら楓。あんた生徒会の仕事もあるんだから早くステージの  
トコまで行かないと」

「ちょ、ちょっと待ってよ……」

背後から聞こえたそんな会話に凧は振り返る。

「おはよーみんな」

「よっ、神田」

そこにはメイド服に身を包んだ未来と、顔を真っ赤にしてスカート  
の裾を引っ張る楓が居た。

「似合ってるじゃねえか」

帝督が言う。一方通行と軍覇も何も言わないところを見ると異論は  
ないのだろう。

「お……おはよう」

「ほら楓。あんたはあっちでしょうが」

「だって……こんな服でみんなの前に立てないわよ……」

もはや泣きそうな楓がすがりつくように未来に言い寄るが、

「橘さん、そろそろ開会式始まるから用意してねー」

生徒会書記、松本先輩の非情なる一言でやむなく楓はステージ脇の  
生徒会員が集まる控え室へと消えていった。

「神田。アイツ何かやるのか？」

「あれ？一条くん楓から聞いてない？」

「なんにもだ」

「あれ？恥ずかしかったのかな」

「？」

「楓は開会宣言を任されてるのよ」

「プロジェクターの放送が終わったあとにやるやつか？」

ここで言う開会宣言とは学校単位で行われるものであり、それぞれの学校がこれから一週間続く超巨大文化祭を成功させようと開会を宣言することだ。

当然この体育館のステージ上で生徒たちの前で“あの衣装”で言うため、楓はあまり乗り気ではなかったのだ。

『これより開会式を行います。生徒の皆さんはクラスごとで指定された席に着席してください』

生徒会の生徒である女子生徒がそう言うのと左右の暗幕が閉められ、投影された光がスライドを照らし出す。

凧たちの席は本来ならば1年生の席だが、それを知らなかった凧たちはそのままの場所で開会式を受けることに。

1年生が恐れ多くて言いに行けなかったからでもあるわけだが。

「おっ、始まるみたいだぜ」

スクリーンを見ながら帝督が言う。

「毎年毎年このくんだり要らねェと思うんだがなア」

「そうか？俺はCMが見られるから好きだぜっ！…！」



「ちよ、軍霸うるさいって」

シンと静まり返った体育館内に凧たちの声が響く。

それを見てさらに何も言えなくなる1年生、と悪循環が続く。

『——只今より、一端覧祭を開催致します』

警備員に警護された統括理事会の一人が開会を宣言した。

それと同時にプロジェクターの電源は切られ、ステージ上には生徒会役員の一員、凧がメイド服姿で立つ。

「橘——!!」

「眼福じゃあ——!!」

「メイド萌ええ——!!」

「橘先輩結婚してくださいッ——!!」

体育館にいる男子からは黄色い？声援や求婚が飛び交う。

イラッ

「おい凧顔が怖えーぞ」

「……………（イライラ）」

「凧〜?」

一体誰だ凧に求婚しやがった奴は……。探し出して身体に言い聞かせないといけないようだな。

「聞けよッ——!!」

びしっ

「あいたっ!」

帝督のチョップが後頭部に直撃した。

「顔が怖えーんだって尻。橘絡みか?」

「いやそんなんじゃないけど……」

メイド服姿の楓を見てテンションが上がっている野郎どもを見ると無性にイライラしてくる。この感情が『嫉妬』であるということには彼はまだ気付かない。

『こ、これより一端覧祭1日目を開催します。各自持ち場についてください』

つまりながらも何とか大役を終えた楓は早足でステージ上から降りていった。

余程恥ずかしかったのだろう。

開会宣言が出されたため、生徒たちは各自の持ち場へと散らばっていく。

「うし、俺たちも行くこうぜ」

「お、何だよ尻。いつにもなくやる気だな」

「やるからには売上トップを狙わねえと」

「いや俺ら午後から人気劇にも出ないといけないからな？」

「分かってるよ」

大覇星祭と同様に一週間をかけて行われる一端覧祭。長点上機学園は入学希望者獲得のために人気劇を1日目、3日目、5日目、最終日と1日置きに人気劇の開催を計画している。

午後2時から体育館で行われるこの劇の知名度を利用して更なる入学希望者を獲得しようと画策しているのだ。

「今は……53分か。急ぐぞ風。開店まであと7分しかない」

携帯を出して確認してみれば9時7分前の8時53分。慌ただしく開店の準備をしている各クラスを見ながら風たちは21Aへと急ぐ。

「よし、開けるぞ」

午前9時。

21Aが切り盛りする執事喫茶『讃岐うどん』がオープンした。

「お帰りなさいませお嬢様」

入ってきた客が女性だった場合に対応するのは風たちの役割だ。入店してきた女子校生2人を風が軽く頭を下げて出迎える。

「「ちらへどうぞ」

1ヶ月もホールチーフの会田に接客のあれこれを叩き込まれたため、ホール担当の接客は完璧である。

「あ、あのっ!!」

席へ案内する途中で女子校生2人が尻に話しかけてきた。

「なんででしょうか?」

散々練習した営業用スマイルで対応する。これには尻も苦勞させられたがようやく習得し、今ではご覧の通り女子生徒2人がうっかりときめく程に破壊力抜群だ。

「えっと……一条先輩ですよね?」

「そうです」

「「きゃーッ!!」」

いきなり歓声をあげた女子生徒を見て小首を傾げる。

「あの、あの!大覇星祭の時からファンですッ!!良かったらメアド教えてくれませんか?」

顔を赤らめながらも自らの携帯をズイッて押し出してきた。

( 帝督の言う通りになったな…… )

凧は開店前の帝督とのやり取りを思い出していた。

――――

『いいか凧。多分女の子たちはお前のアドレスとかゲットしようとしてくるだろうからにこやかに笑ってはぐらかせ』

『そんなことしてこないと思うけどなあ』

『いや。聞くところによると他校にまで俺や凧、一方通行や軍覇のファンクラブが設立されてるらしいからな。絶対そついう客がくる』

『その時は断ればいいんだな？』

『断っちゃダメだ』

『なんでだよ』

『キツパリ断ると女の子たちがガツカリするし何よりも客足が減る。それが目的でわざわざ長点上機まで来る生徒だっているんだから無碍にするわけにもいかないだろう。その事が流れて客足が途絶えるのは避けたいからな』

『だからはぐらかすってか？』

『そつだ。その時に人気劇の話題でも出して注意をそつちに惹きつ

けておけばいい』

『成程な』

『お前らもだぞー』

帝督は同じく教室で準備していた一方通行と軍覇に言う。

『わアったよ』

『了解だツ！！』

『あ、でもそれなら神田や神童にも言い寄ってくる奴らがいるんじゃないか？』

『橋を意図的に除外してんじやねえよ』

わざと楓を外しておいたのに帝督にあっさり突っ込まれてしまった。

『その点については俺たち4人で対処するから問題ない』

『実力行使ってことか？』

『しつこい客にはそうなるかもな。大体橋たちだって高位能力者だからな。滅多なバカに合わなきゃそんなことにはならねえよ』

『そうか』

『……時間だ。店開けるぞ』

――  
まさかいきなりこんなドンピシャな場面に遭遇するとは思って  
いなかったが、事前に言われていたのでそんなに焦ることもなく  
言われた通りに対処していく。

「申し訳ありません。我々執事は全員携帯などはロッカーに  
ありまして」

「あ……そうなんですか」

しゅん、としおらしく肩を落とす女子生徒。

「もしどうしても言うなら2時からの人気劇に出演して  
いますのでその時にでも」

「は、はいっ……」

バツチリだ。

風は想定内の状況にはとことん強い。

「こちらの席にどうぞ。注文が決まればお呼びください」

ペコッと頭を下げたそのテーブルから離れていく。

教室内には開店してまだ時間があまり経っていないのに  
も関わらず多くの客が足を運んでおり、なかなかの盛況  
を見せていた。

( 出回り担当が上手くやったのか……いやそれはないな。あんな原色ギトギトのタヌキやキツネについて行くわけがない )

「すいませーん、注文いいですかー？」

「今伺います」

他のテーブルから注文がかかり早足で向かった。

「このデミグラスソースのハンバーグとアイスティー」

「俺はカルボナーラとアイスコーヒー」

「かしこまりました。少々お待ちください」

オーダーをとった凧は一旦教室を離れ向かいの調理室のドアを開ける。

「金森、デミとカルボ、アイスティーとアイスコーヒーが1ずつだ」

「了解。一条、これ6卓のテーブルに運んでくれ」

「あいよ」

凧は置いてあった出来立てのベーグルとアップルティーをプレートに乗せて調理室を出た。

「お待たせいたしました。こちらベーグルとアップルティーになります」

「ありがとうございます」



そう言つて女子生徒の前にベーグルとアップルティーを置く。

「なかなか様になつてるじゃない」

「美琴ツ!？」

今まで気付かなかつたが6卓に座っていたのは常盤台の生徒、御坂美琴だつた。

「なんで美琴がここにいるんだ？」

「それ遠回しにここに居たらいけないみたいに聞こえるわよ」

「遠回しじゃなくてそう言つたんだよ」

「む、何よー。折角売上に貢献してあげようとわざわざ来てやつたつてのにー」

「本音は？」

「暇だつたから茶化しに来た」

「……はあ」

いつも美琴はこうなんだよな、と凧は頭を押さえた。

「自分の中学の仕事はいいのかよ」

「うちは長点上機みたいに全解放じゃなくて一部だけだし、私の担

当の仕事は明日だしね」

「仕事？」

「……なんかレベル5の実力披露とかどうとか……」

ずーんと顔を俯かせる美琴。彼女も好奇の目で見られるというのに耐えられないタイプの人間だ。

「お前も苦労してんだな……」

「凧たちもじゃない……」

「人気劇はみんなでやるからまだマシだ」

「うう……」

美琴は肩を落としながらもそもそもとベーグルを頬張っていた。

「一条」

そんな美琴を眺めていたらホールチーフの会田に呼ばれた。

「どうした？」

何やら神妙な顔つきの会田に凧も何かを感じ取ったのか営業用スマイルを封印して真剣な顔つきへと変わる。

「あれ見てみるよ」

そう言つて指で窓の外を指し示す会田。  
言われるがままに窓の外を覗いてみると、

「……………何だアレ」

何やら強張つた表情の会田とは違い、本当に面倒くさそうにため息をつきながら窓の外、より正確には校門付近で警備員に止められている明らかにチンピラなヤンキーたちを見る。

「何だ何だア？」

オーダーを取り終えた一方通行が楽しそうに尻の隣に立つ。

「多分……………てゆうか絶対俺たちに用があるんだろつな」

げんなりしながらヤンキーたちを見る尻。おそらくこのお祭り騒ぎに乗じてレベル5を倒して名を売ろうとする連中が集まったのだろつ。

アンチスキル  
警備員が対応にあたっているがさすがにヤンキーが20人も居ると抑えきれない。

何よりも、

「アイツ等を怖がつて学園に入ってこれない学生が出てくるじゃねえか」

帝督がイライラしながらヤンキーたちを睨みつけている。

「どつする？出るか？」

「何人も行くと売上に響くからな。この騒ぎを逆手にとってうちのクラスをアピールするなら尻と、ここは……………」

そうやって帝督はテーブルに座っているある人物へと視線を送る。

「……へ？」

「彼女に協力してもらおうぜ」

帝督の視線の先には、アップルティーを飲んでいた御坂美琴の姿があった。

「話は分かったわ。ああいう奴らには少なからず迷惑してるし、いわよ。手を貸してあげる」

「悪いな、美琴」

「その代わりに、後で何か奢ってもらおうから」

「わかったよ」

そう言いながら凧と美琴は教室を出て校門へと向かう。

「全く何も一端覧祭中来なくてもいいじゃねえかよ……」

「よっぽど名を上げたいバカが集まってるのね」

スタスタと廊下を渡り階段を降り、昇降口を越えて校門付近までやって来たとき、不良たちを視界に捉えた。  
奴らは今にも校門を突破してなだれ込んできそうな勢いだ。

「準備はいいか？美琴」

「当たり前じゃない。凧こそ間違ってもやられたりするんじゃないわよ」

「当たり前だ。うちのクラスのためだ。ど派手に行くぜツ！！」

「ええ！！」

2人は不良たちのもとへと走り出した。

第42話 一端覽祭開幕〈first|the|first〉(後書き)

やっと開催までこぎ着けられた……。

第43話 イベントとして <V> Skill | I | o u t (前書き)

短いですすいません。

次話投稿は早いうちにできると思います。

### 第43話 イベントとして〈V S | s k i l l | o u t〉

「アンチスキル警備員の人、ちょっと退いてもらっていいかな」

凧は目の前で必死にチンピラたちを抑え込もうとしている眼鏡をかけた如何にもひ弱そうな警備員に向かって言った。

「な、何ですかアナタたちは！！ここは危険ですから下がってくださいッ！！」

見るからにいつぱいいつぱいな警備員が自分たちを守るために職務を全うしようとしているのは立派だが、これでは空回りもいいところだ。

「……あっ、前にゲーセンにいた警備員じゃない！！」

「あーッ！！あの時の常盤台の！！」

どうやら美琴と彼女は面識があったらしく、二人して声を上げた。聞くとところによると鉄装という名らしい。

「と、とにかく下がってくださいッ！！」

「あー、折角の言葉なだけどさ、これもイベントの一つなんだよ」

「イ、イベント！？」

どうやら凧はイベントで通すつもりらしい。



「そ、だから邪魔しないでくださいね」

「一条だ!!!」

「第六位かつ!!」

「やっちまえ!!」

「おい隣にいるのって常盤台の超電磁砲じゃねえか!?!」

「丁度いい二人まとめてやっちまえ!!」

「……じゃああれも演技なんですか?」

罵声を吐き続ける不良たちを指差しながらおそろおそろ警備員が尋ねてくる。

「そうです」

「絶対違うでしょッ!!」

キツパリ言い切ったのに直ぐ様見破られてしまった。

「あー、美琴。その警備員さんのことは任せた」

「ちよっ!?! 私に押し付けないでよ!!!」

「いやだって知り合いなんだろ」

「顔見知りなだけよっ!!!」

面倒くさそうな役割を美琴に押し付けようとする風にな美琴が噛み付いた。

「オラ二人で勝手に話してんじゃねえぞ!!」

「舐めてんのかゴラァ!!」

「ぶっ殺すぞ!!」

「こっち来いやあ!!」

「レベル5は名前だけかあッ!？」

ブチッ

美琴のこめかみ辺りから何かが勢いよく切れたような音がした。

隣に居た凧は美琴の前髪からバツチンバツチン紫電が走っているのを認め、不良どもに向かつてご愁傷様という意味で溜め息を吐いた。

「……凧」

「……なんだよ」

「……私がやるから手、出すんじゃないわよ」

「いやそれだとウチのクラスのアピールにならねえから。少しはやらせてもらっぞ」

「……しょうがないわね」

美琴の癩に触ってしまった校門にへばりついている不良たちには本当にお気の毒としか言い様がない。

(さて……アイツ等のせいで客足が減っても困るし、イベント色を

出すか)

校門の近くまで来ているが目の前の不良たちのせいでこちらに入  
てこれない学生や、怖がってしまったている学生に向かって凧はあく  
までも明るく言い放った。

「皆さんッ!!これから長点上機学園2 Aと常盤台中学によるコ  
ラボイイベント、超能力者の戦いを始めますッ!!」

執事服のベストに装着していたピンマイクのおかげでよく声が通る。  
近くに居た人たちは

『え?これってイベントだったの?』

『こんな人たちまで集めたんだ』

などと信じてくれていた人が多いようだ。

皆純粹で助かった、と凧は胸を撫で下ろす。

「それでは始まります!!超能力者二人VS不良集団二十人の対決  
!!」

よりイベント色を出すため、凧は自らの能力を使用して辺り一帯に  
擬似的な雪を降らせる。

ここが会場であると多くの人に知らせるためだ。

それによってチンピラを怖がって近づけなかった人たちもイベント  
ということでごちらに足を運んでもらえる。

客が徐々に集まり出したのを確認して、美琴に小声で合図を出す。

「(美琴。いいぞ)」

「（OK。手加減はするから）」

「（出来るだけ派手に頼む。もっと客足を伸ばしたい）」

「（分かったわ）」

美琴は頷くと、出来るだけ大勢の人たちに見えるよう、上空に向かって放電した。

それが合図となって、不良たちは校門を突破。雪崩れ込むようにして美琴と凧へと走っていく。

「くたばれや超電磁砲ッ!!」

無謀にも素手で美琴に向かっていく不良の一人が殴りかかるが、バチィッ!!

と美琴が電撃で一蹴。派手に頼むと言ったせいかなしかいつもよりも電撃が強めな気がする。

黒焦げとなって地面に崩れ落ちた不良を見て他の不良たちの足が止まる。

「ひ、ひるむな!!」

「第三位がダメなら隣の第六位からやっちまえばいいんだッ!」

「一条からやれ!!」

美琴の実力を目の当たりにした不良たちは標的を美琴から凧へと変更。先程と同様に素手で襲いかかった。

「美琴がダメでも俺ならいけるってか？」

向かってくる不良たちを見ながら凧が呟く。

「……ナメてんじゃねえぞコラ」

イベントを装っているためあくまで小声で、しかし不良たちには聞こえるように言い放った。

すかさず凧は空気中に存在する水分子を操作、バスケットボール程の大きさの水の球体を作り出し、それを不良たちに投げ付ける。

バシヤンツ

と破裂音のような小気味のいい音が周囲に響き渡り、不良たちは全身水浸しになっていた。

「なんだあ第六位！！こんな攻撃が効くわけねえだろ！！」

「レベル5つつつても下位じゃこんなもんかあ！？」

服から水滴が垂れながらも、凧への罵倒は忘れない不良たち。

凧は動かない。

まるで自分の役目は既に終わったと言わんばかりに空を見上げている。

「てめえ舐めてんのかあ！！」

「ぶっ殺せッ！！」

などと声を荒げながらこちらに向かってこようとす不良たちに向かって、凧は空を見上げたまま言った。

「俺ばかりに気をとられていいのか？」

バチンッ

と静電気を強力にしたような音が不良たちの耳に届く。

「後は任せるぜ、美琴」

「はいはい」

不良たちを挟んで行われる会話に、彼らはゆっくりと首を回す。

そこにはいい笑顔をした学園都市第三位、御坂美琴が先程の水の球体が破裂したことによって出来た水溜まりに手を当てていた。

流石にこの状況には不良たちもマズイと判断したらしく、直ぐ様水溜まりから足を退けようとすが、

「遅いわよ」

電撃の速度に勝てる筈もなく、全員揃って仲良く感電。意識を手放していった。

それを確認した凧はピンマイクへと顔を近づけ、朗らかに集まっていた観客たちへと言葉を投げる。

「これをもちまして超能力者によるイベントを終了したいと思えます！協力してくれた常盤台中学の御坂美琴さん、不良役の二十人

の皆さんに盛大な拍手をお願いします!!」

どうやらこのイベントは成功したようで、周囲を覆っていた学生や保護者から盛大な拍手が送られた。

凧は尚も続ける。

これの目的はあくまでも不良の討伐と我が2 Aのアピール。執事喫茶の宣伝を忘れてはいけない。

「超能力者四人が参加している執事喫茶は長点上機学園3Fの教室にて営業中ですので是非お越しください!!」

そう言っつてイベントを締めくくった凧は美琴と共に観客に軽く頭を下げ、校舎へと戻っていった。

感電した不良は、その後観客と化していた警備員の鉄装に回収されることとなった。

第44話 トラブルのち劇へIt starts soon (前書き)

スランプです；

ストーリーはできてるのに文に出来ない) - " - ; (



#### 第44話 トラブルのち劇へIt starts soon

「お疲れさん風」

美琴と別れ、教室へと戻ると帝督が出迎えた。時計は9と10の間を指しており、先程のイベントの効果もあつてか客足も伸び始めているようだ。

「あんな感じで良かったのか？」

「上出来だ。不良どもが居なくなつて長点上機に来る学生も増えてきたからな。これからもっと忙しくなるだろうぜ」

「美琴のおかげもあるよな」

「だな。あの電撃姫には後でうちのタダ券でも作つて渡してやつてくれ」

「一条、垣根。客が増えてきたからホール入つてくれ」

ホールチーフの会田に言われ、二人はオーダーを取りに客席へと向かう。

現在執事喫茶の店内には風と帝督、一方通行と軍覇と会田、未来と黎那が接客に当たっている。楓は現在生徒会の打ち合わせのため持ち場を離れているのだ。

広い店内をこの人数で回すのは些か厳しいが、今はまだ昼時ではないためなんとか客を待たせることなく対応することが出来ている。

「これ人気劇が終わったあとはヤバいだろうな」

店内をザツと見回しながらチーフの会田が言う。彼らの予想では1時から3時が最も混雑するだろうと踐んでいる。

昼時ということもあるが、2時から行われる人気劇によって客足が倍増するだろう。そうなればこれだけの人数ではとても対応しきれない。

ただでさえ人気劇で四人も抜けてしまうのだ。

何か手を打たなければ混雑は解消しないだろう。

「調理室も店内として使うか？」

「いやダメだな。あそこは調理専門、客が食事をする環境じゃない」

会田の意見を首を横に振って却下する帝督。

ホールの担当を増やす、という方法が最も現実的な案ではあるが、キッチンと出回りでギリギリまで人数を割いておりホールにまで手が回らないというのが現状だ。

佐竹たち失墜委員会の面々が居るには居るが奴らがホールをすると何をしてくすか分からないのでホールに回すわけにもいかない。

「……この人数で行くしかないか」

「悪いな会田。劇が終わればすぐに戻る」

「そうしてもらえると助かる」

騒がしくなってきた店内に目を向けながら、帝督と会田は今後の対応について話し合っていると、

「オイこれ髪の毛が入ってんじゃねえかあ!？」

突如として店内に響き渡る怒声。

声がしたほうに視線を移してみれば、

「……………はあ」

そこには帝督の溜め息を誘う光景が広がっていた。

「オイこれ髪の毛が入ってんじゃねえかあ!？」

執事喫茶の窓際の一番奥の席に座る三人組の男たちがカルボナーラの皿を持って言った。

「……………不良の次は先輩かよ」

凧は頭を抱えて呟いた。

カルボナーラの盛り付けられた皿を持ってイチヤモンをつけてきたのは凧と同じく長点上機学園に通う学生。さらに詰めて言えば三年生だ。

特徴としては皿を持っている先輩がひよっとこみたいな顔をしており、その隣に座っている先輩は金髪、向かいに座っているのは巨漢の先輩だ。

いくら名門と言われる学校であっても必ずこういった輩は出てくる。彼らの目的は不明だが、このまま放っておいても埒があかない。凧は決心して先輩たちが座るテーブルへと赴いた。

テーブル前へとやって来た凧に対し、先輩三人組は依然として大きな態度で声を荒げる。

「オイこれどういう事だあ!?!」

「髪の毛入ってんじゃねえかよお!?!」

「どうしてくれんだこらあ!?!」

見れば確かにカルボナーラが盛られた皿には髪の毛が付着していた。

しかし、しかしだ。

「先輩方?ウチの従業員の中にこんなに短い髪の毛のやつは居ませんけど」

そう。

皿に付着していた髪の毛は短いものだった。

因みにこの先輩たちのテーブルにカルボナーラを運んだのはホール

担当の中で最も髪の毛の長い黎那だ。他のホールで最も髪の毛の短い軍覇もここまで短くはない。  
この髪の毛の長さに該当するのは

カルボナーラを持っているひよつと先輩。

「な、なんだその目はあー!!」

「客を疑ってんのか!?!」

「てめえ超能力者(レベル5)だからって調子に乗ってんじゃねえぞー!!」

逆ギレしてつつかかってくる先輩たち。

「料理作ったやつ髪の毛かもしれねえだろうがッ!!」

「いやそれはないですよ先輩」

キッチン担当は衛生面において徹底している。髪の毛など入らないようコック帽をつけているため、髪の毛が混入する可能性は限りなく低い。

「というわけなので、先輩たち早く消えてください」

ニツコリと営業用スマイルを浮かべて尻は言い放った。

「んだとゴラァー!!」

「てめえ喧嘩売ってんのか!?!」

「覚悟はできてんだらうなあ!?!」

ガタガタツ、と椅子から立ち上がるひよつとこ先輩と以下二人。

凧は一度会田と共に教室の端に居る帝督へとアイコンタクトを送る。それを受け取った帝督は一度小さく頷いた。

「なら先輩たち。確かめてみますか？」

「ああ？」

「この髪の毛が誰のか確認するんです」

「そ、そんなこと出来るわけねえだろうが!!」

金髪先輩が言う。

「出来ますよ」

しかし、凧はさらつと告げて首を動かす、

「神田、ちよつと来てくれ」

料理を運び終えたところの神田を呼び止め、こちらへと呼んだ。

「どしたの一条君」

「この髪の毛、誰のか特定できるか？」

「この三人の先輩たちの髪の毛を調べれば多分大丈夫」

皿に付着していた髪の毛を眺めながら未来が言う。

「というわけです先輩たち。髪の毛一本ずつもらいますよ」

「いてっ!!」

「あ!!」

「うお!?!」

慣れた手付きでひよつと先輩、金髪先輩、巨漢先輩の髪の毛を一本ずつ抜いていく凧。

付着していた髪の毛は黒だったため金髪先輩の髪の毛は抜かなくても良かったのだが、そこはまあ流れというやつだ。

「神田の能力は『クリアー念動読取』って言って、触れた物から情報を読み取ることが出来るんですよ」

「ぐっ……!!」

凧の説明にひよつと先輩が呻く。

凧は抜いた髪の毛とカルボナーラに付着していた髪の毛を未来に渡し、未来は読み取りを開始する。

先輩たち三人の髪の毛の中にカルボナーラに付着していた髪の毛と同じDNA情報をもつものが含まれていれば、めでたく犯人は先輩たちとなるわけである。

「チッ!!」

ガタツ、と椅子から立ち上がり教室から出ていこうとするひよつと先輩。

形勢が悪くなったのでずらかるうとしたのだろつが、それを凧が許す筈がない。

「はいちょっと待とうかひよつとこ先輩」

「ひ、ひよつとこ!?!」

ガシツ、と肩を掴んでひよつとこ先輩を強引に引き留める。

「神田が結果を出すまで此処に居てもらいますよ」

営業スマイルを浮かべながら肩を掴む手に力を込める。

「……出たわ」

能力を使って髪の毛を調べていた未来が一息ついた後、凧に告げる。

「そこのひよつとこみたいな人よ」

「なツ、言いがかりはやめろ!!」

未来に犯人だと言われたひよつとこ先輩は慌てふためく。

「オイヤベえぞ……」

「逃げたほうがよくねえか……?」

テーブルの方では金髪先輩と巨漢先輩がヒソヒソと何やら話しているのが聞こえてくる。



「決まりだな」

凧はそう言い、教室を見回してある人物を探す。こういう場合の適任はやはりアイツしかいないだろう。

「一方通行ッ!!」

目的の人物を見つけ、皿を運んでいた一方通行を呼び止める。

「どオした凧イ」

「この先輩たちのこと『頼み』たいんだけど」

ニイツと笑う凧を見て、一方通行も察して口元を吊り上げる。

「成程な。任せとけ、しっかり『頼まれて』やるよ」

「ひっ!!」

一方通行は凧に代わってひよつと先輩の襟首を掴み、ズルズルと引き摺りながら教室から出ていく。

これから行われるであろう一方通行の尋問を思うと若干気の毒ではあるが、自業自得、救済の余地はない。

残った二人の先輩も教室から放り出し、ようやくクリーンな執事喫茶に戻った時には時計は既に11時を差していた。

「帝督」

「おう呷。そろそろ行かないとダメだな」

「なら神田も呼ばねえとな」

呷たち長点上機学園のトップ10にランクインしている生徒が参加する人気劇の開催は2時からだが、配置などの確認をもう一度行うため三時間前には体育館に入らなくてはならないのだ。

「神田く、そろそろ行くぞ」

「あ、ハイハイ」

帝督に呼ばれ、未来はいそいそとこちらにやって来た。

呷たちが抜けるとホールは会田と一方通行に軍覇、黎那と女子一人しか居なくなってしまうのがキツイが、こればかりは頑張ってもらうしかない。

「悪いな会田。後は頼むわ」

「任せろ。その代わりちゃんと客呼び込んでこいよ」

「おう」

そう言って呷と帝督、未来は教室を出て体育館へと向かう。

一日目のメインイベントが始まるうとしていた。



第45話 人気劇、開幕へpopular play beginning

ようやく人気劇開幕までこぎつけました。

## 第45話 人気劇、開幕へpopular play beginning

時刻は正午。

凧と帝督、未来は先に生徒会として活動していた楓と体育館で合流し、演劇部部長の影森のもと、本番前の最終確認を行っていた。

「垣根ー、その立ち位置はあと三センチ左だー」

「了解」

メガホン片手に影森がステージ前に立ち、ステージ上で立ち位置の確認をしている帝督に言う。

「ここで背景切り替えるから映像班しつかりやれよー!!」

「うーっす!!」

ステージ脇から野太い声が返ってくる。

現在体育館は人気劇のための場所として作られており、体育館内には数百の椅子が規則正しく並べられ、ステージ前には大きめのプロジェクターにパソコンが配置されている。そしてステージ上には奥にスクリーン、手前に手作りの背景を置き、その場面に応じた効果音や証明はステージ脇の演劇部員たちが行う手筈となっている。

劇のための衣装に着替えを済ませた凧は、現在台本を再度読み直し中だ。

「ピーターパン、僕も連れていってくれよ……よし、大丈夫だな」

「もうちよつと気持ちを込めてもいいんじゃないかしら？」

「松本先輩」

凧にその声を掛けてきたのは生徒会書記、松本さおり先輩。

この劇では脚本を担当し、この人気劇全体の進行も任されている。

「どのへんに気持ちを？」

「そうね、この五六Pの三行目あたりとか」

「あー成程。待ってよお姉ちゃん!! ……みたいなの？」

「フフ、上手じゃない」

「どーも」

「あ、そうそう一条君。一条君も開場のために誘導に回ってくれないかしら」

「誘導？」

「開場した時に混雑を少しでも緩和できるようにキャストが観客を誘導するのよ。劇の衣装でね」

二時から開演予定の人気劇は、一時半には体育館が開場されて観客が入場を始める。座席数には限りがあるため整理券などを配布して出来る限り混雑のないよう尽力してはいるが、やはりどうしても混雑は起こる。

そこで登場するのがトップ10にランクインしているキャストの生徒たちだ。

彼らを目当てでやってくる生徒が大半なため、そちらに注意が逸れて混雑が少しではあるが解消される。

その代わりに……、

「俺らが揉みくちやにされるってわけね……」

「申し訳ないんだけどやってもらえないかしら。　男子は今三人しか誘導に回れないの」

「女子にそんなことさせるわけにもいかないしなあ……、分かった。やるよ」

「ありがとう。　じゃあ開場前になったら体育館の入口に移動してね」

「了解」

松本先輩はそう言うとステージ横へと走っていった。生徒会長に呼ばれたようだ。

凧はもう一度手に持っている台本に目を落とし、自分の台詞を確認していく。

「凧」

頭上から掛けられた声に顔を上げると、

「凧か」

劇の衣装を身に纏った楓が立っていた。

「あ、あんまりジロジロ見ないですよ……」

「いやそれでこれから劇やるんだからな？ そんなことも言ってるれないだろ」

「そ、それは分かってるけど……」

やはりまだ恥ずかしさが拭えていないらしく、長さが際どいふわふわしたスカート裾を必死に伸ばしている。

「んで？ なんか用か？」

「あ、うん。別に用ってほどでもないんだけどね」

「？」

「……この劇が終わったらさ、あの、その……」

何やらゴニョゴニョと声が小さくなっていく楓に凧は首を傾げ、

「どっした？」

「あの……今日一緒に「楓ー！！」」

楓が言った後半部分は未来の大声に遮られ、凧の耳に届かなかった。



意を決して言った言葉が無情にも掻き消された楓はガツクリと肩を落とし、「じゃあ」とだけ言ってとぼとぼと未来のもとへと歩いていった。

「……何だったんだ？」

そんなこんなで準備をしている内に時刻は午後一時二十分である。開場十分前というだけあって、入口には整理券を手にした学生や保護者で長蛇の列が出来ていた。

「うわスゲーな。これみんな劇を観に来た人たちなのかよ」

「何今更驚いてんだよ風。去年だってこのくらい居たじゃねーかよ」

「いや去年はあっち側だったからさあ、なんか緊張感が違うよな」

体育館のステージ脇にある小窓から長蛇の列を眺める風と帝督。

これまで感じていた肌寒さは感じず、十一月とは思えないほどの暖かな日差しが降り注いでいる。

自分がキャストでなければウトウトと夢見心地になれるんだろうなあ、と思いつつ、風は視線を外から体育館内へと移す。

ステージ上では生徒会長である五十嵐いからし 雛乃ひなのが立って体育館内を見

渡し、ステージ下では書記の松本が司会進行のための原稿に目を通している。

楓や未来はステージ脇で遅めの昼食をとっており、その上では演劇部部長の影森と部員たちが照明やBGMの確認を終えたところだ。

「……時間ね」

生徒会長の雛乃が腕時計を確認し、告げる。

「開場よっ!!」

凧はそれを聞いて入口へと向かい、帝督はステージ脇へと消えていく。

ガチャン、という鍵が解錠される音と共に、体育館の扉は開かれた。

体育館内に用意された座席数はおよそ一二〇〇。立ち見も含めれば一五〇〇人は収容できるように配置されていたのだが、集まった観客は役二〇〇〇、予想を遥かに上回る盛況ぶりを見せていた。

三日ある公演のうちの初日ということもあり、大勢の学生や保護者が訪れているのだ。その余りの盛況ぶりに、長点上機学園の生徒は体育館内ではなく校舎内に設置された大画面モニターで上演を観る

という特別措置まで取られることとなった。

そんな賑わいを見せる体育館のステージ脇、迫り来る開演時間を前に凧は既に疲れきっていた。

原因は入場を誘導する仕事を行った時、

『一条先輩だツ!!!』

『きゃー!!!』

『握手して下さいっ!!!』

『劇頑張ってください!!!』

などと狂言乱舞した学生（女子）に囲まれ、予想通り揉みくちやにされたからだ。

「……もう絶対あの仕事はしねえ」

頭を抱えて頂垂れる凧に、帝督は笑いながら言う。

「女子に囲まれて見えなくなってたな」

「笑い事じゃねえ……」

「まあそれだけ凧のファンが居るってことだろ？」

「限度つてもんがあるだろ……」

そんな会話を続けていると、演劇部の部員たちが体育館上部のカテナンを閉めていくのが見えた。

凧は携帯を出し、時間を確認する。

PM01:54

「（そろそろ始まるわよ）」

ステージ脇のカーテンを少し開けて松本先輩が凧たちに告げた。

「（りょーかい）」

凧は返事をするのとゆっくりと立ち上がる。

松本先輩は一度頷くとカーテンを閉め、逆方向のステージ脇へと小走りで向かった。向こうは女子の控室となっているので、生徒会長や楓にそろそろだと伝えに行ったのだろう。

「（そっか。凧はすぐなんだな）」

「（ああ、最初の場面からだからな）」

凧の配役、ウエンディの弟であるジョンはなかなかに出番が多い。

おそらくピーターパンやウエンディ、ティンカーベルの次くらいに多いのではないか。

ステージ脇で凧たちが待機していると、体育館内の照明が全て消され、真っ暗な空間の中に、ビーツという上演前特有の音が響き渡る。

数秒経ったのち、静かにステージ上を覆っていた幕が上がっていく。

『皆さん、この度は長点上機学園に來場していただき、誠にありがとうございます』

進行担当の松本先輩がステージ下でマイク片手に滑らかに話し出す。

『我々はこの日のために、毎日練習を欠かさずやってきました』

凧はただ静かに松本先輩の話を聞いている。それは帝督も同様だった。

『それではこれより、長点上機学園人気生徒合同劇を開演致します。どうぞお楽しみください』

「行くぜ、帝督」

「成功させるぜ、凧」

松本先輩の話が終わり、そして、人気劇が始まった。

第45話 人気劇、開幕へpopular play beginning

次回ピーターパン内容です。

第46話 壇上の物語〈main event〉(前書き)

約1ヶ月ぶりの投稿です；

遅れて本当に申し訳ありませんf；|；

なんとか上がりました。

そしてこの間に

お気に入り登録500件突破！！

皆さんありがとうございませす！！

ではございませす。

## 第46話 壇上の物語〈main event〉

光が遮断され暗闇に包まれた体育館内を、ステージ上の照明だけが淡く照らし出す。

ゆっくりと上がった幕の向こうには、こちらをじっと見つめる一五〇〇の眼。

（うわ……こんなに集まってたのか。間近で見るとスゴいな）

凧は大勢の観客を前に身体が強張っているのを感じていた。

最初の場面は夜。ウエンディたちの部屋で兄弟たちが会話をするところから劇がスタートする。

ステージ上では凧の他にウエンディ役の生徒会長、五十嵐雛乃と弟役のランキング八位の三年生が衣装を纏い所定の位置につく。

「『時代は一九 年の冬』」

ステージ脇でナレーションを務める松本先輩の声が体育館内に響く。

「『ロンドンの住宅街に、父ダーリングと母エリザベス。姉のウエンディ、弟のジョン、そして未っ子のマイケルの五人が仲良く暮らしていました』」

用意されたキングサイズのベッドに入っている凧たちが会話を始める。真ん中にウエンディ役の生徒会長五十嵐、その右にジョン役の凧、左にはマイケル役の三年生という構図だ。それぞれが衣服に小型のマイクをつけているため、観客にもしっかりと台詞が聞こえる



ようになっている。

「ねえお姉ちゃん、本を読んでよ」

「ダメよマイケル。いい子はもう眠らなくちゃ」

「だって眠くならないんだもん」

「なら目を閉じて羊を数えましょう？きつとすぐに眠くなるわ」

「僕も聞きたいな」

「もう、ジヨンまで」

子供部屋に似せてつくられたセットの中央のベッド内で進む会話。凧は緊張しながらも、嘸まずに劇をスタートさせることに成功した。

「ダメよジヨン、マイケル。明日は皆で水族館に行く予定でしょう？早く眠らないと、明日一人だけ置いていかれちゃうわよ？」

悪戯っぽく言う五十嵐会長に、マイケル役の三年生は渋々といった感じで納得し、顔まで目一杯に布団を被った。

五十嵐が電気を消す仕草をしたのと同時にステージ上のライトも消され、三人が眠りについた。

穏やかなBGMが流れ出し、ナレーションを担当する松本先輩が再び台詞を口にする。

「『その夜のことでした。ウエンディは、海賊に襲われたところをピーターパンに助けられるという夢を見たのです』」

演劇部によってステージ上を暗い紫と淡い紫の混色の光が緩やかに照らし出す。

「『夢であるにもかかわらず、それはとてもリアルなものでした。そして』」

「はっ！」

ガバツ、とウエンディ役の五十嵐が布団から起き上がる。

それに気付いたのか、両隣で眠っていたジョン役の凧とマイケル役の三年生も目をこすりながらモゾモゾと布団から体を起こした。

「どうしたの姉さん」

「何でもないわジョン。ちょっと夢を見ただけ」

「僕も見たよ夢！」

ウエンディの話にマイケルが食い付く。

そこでふと、ジョンが部屋の異変に気付いた。

「姉さんあれ……」

ジョンが指差すほうにウエンディとマイケルも視線を向ける。そこにあっただのは木馬。

しかし、何故かその木馬は揺れていた。

「揺れてる……?」

ウエンディは不思議そうに首を傾げた。

その隣でマイケルは自分の夢の話を書いてくれないことを不服に思ったのかプンスカしながらウエンディに詰め寄る。

「僕の夢の話を書いてよお姉ちゃん!」

「なあにマイケル、一体どんな夢を見たっていうの?」

泣きじゃくる子供をあやすようにウエンディが優しくマイケルに問い掛ける。

「僕、助けてもらったんだ!」

目を輝かせながらマイケルが言う。

「助けられたって、誰にだよマイケル」

横からジョンも会話に参加してきた。

「ピーターパンさ!」

「!?!」

「えっ!?!」

マイケルの発言にウエンディとジョンは目を見開いた。それもその筈。

「……僕もピーターパンに海賊から助けてもらった夢を見たんだ」

「私もよ。ピーターパンが助けてくれたの」

「『驚くべきことにこの夜、ダーリング家の子供たち三人はピーターパンに助けられるという全く同じ夢を見たのです』」

背景が夜から朝へと変わり、淡い黄色の証明が風たちを照らし出す。

「こんなことってあるのかしら……」

むう、とウエンディが首を傾げる。ジョンもそれは思っていたようで、

「三人全員が同じ夢を見るなんて、普通なら有り得ないことだよ」

「ピーターパン！ピーターパン！！」

まだ幼いマイケルは夢の中で見たピーターパンに興奮しているのか先程から布団をボフボフと叩いている。

「ねえこれって何かのメッセージとかじゃないのかな」

大人のような凝り固まった脳では辿り着けないような答えに辿り着いたのはジョンだった。

「メッセージ？」

「そう。だって普通なら有り得ないだろこんなこと、もしかするとピーターパンは実在していて何かのメッセージを出してきたのかも」

「しない」

「そんなこと有り得ないわ」

ジョンの意見を有り得ないと切り捨てるウエンディだが、内心この現象の説明がついていないためあながちその可能性もなくはないと考えていた。やはり長女とはいっても少女、子供というのは柔軟な思考能力をもっているものである。

「ねえ姉さん。今夜、確かめてみない？」

「確かめるって、何を？」

「この夢の理由さ。本当に何か意味があるのなら、今日の夜もきつとピーターパンが現れると思うんだ」

「ピーターパンが来るの!？」

目をキラキラと輝かせるマイケルの頭をウエンディが優しく撫でながらジョンに言う。

「……分かったわ。私だって気にはなるし、木馬が揺れていた理由がもし本当にピーターパンなら会ってみたいしね」

「『ウエンディとジョンは頷き合い、今夜寝ずにピーターパンが現れるのを待つことにしたのです』」

松本先輩によるナレーションが入り、一度幕が下りた。

「つぶはー、緊張したー」

一区切りついてステージ脇に戻ってきた凧は大きく息を吐いた。実はこの場面が凧が役を務めるジョンの最も台詞が多い場面だったりするのである。

「なかなか様になってたぜ凧」

用意されたパイプイスに腰掛けたところに緑色の衣装を身に纏った帝督がやって来た。彼の出番ももうすぐだがこれといって緊張している様子はない。

「落ち着いてんなあ帝督」

「去年もやってるからな。それにヨードに比べりゃ何だってマシになるんだよ」

「一方通行と軍覇もう寝てやがったぞ」

「アイツらに真面目に劇見ろって方が無理だろ」

「お疲れ〜一条君」

帝督とそんな会話をしていると奥からメイクを終えた未来がやって来た。

彼女は村長の娘、タイガリー役なのでインディアンを模した服装をし、顔には両頬にヒゲのようなペイントをしている。

「おう神田。もう出番だったか？」

「ううんまだ先よ。一条君のほうが先にステージに戻るし」

先程幕が降りたステージ上では再び幕が上がり、ウエンディだけが残って一人思考するシーンが始まるうとしていた。

そのシーンが終われば再び凧たちがステージ上に戻り、いよいよピターパンと対面するシーンを迎えるわけである。

ということは。

「……凧も出るわけだな」

苦笑いしながら凧が言う。それに未来も苦笑いで返した。

「凧まだ更衣室から出てこないのよねえ」

やれやれと言った感じで首を横に振る未来。

「まああの衣装じゃステージ上にかかるのは恥ずかしいよな」

帝督も同情するように言う。

観客たちには凧は手の平サイズに見える（どういう技術を演劇部が使用しているのかはわからないが）らしいが、膝上一五センチ以上はありそうなフリフリのスカートに妖精らしい羽がついた衣装は劇という名目があっても着るのに抵抗があるだろう。

「でもそろそろ橘も出番だろ？呼んできたほうがいいんじゃないか？」

帝督がステージ上を横目に見ながら言う。楓が役を務めるティンカーベルはピーターパンと共に登場するため帝督と同じタイミングでステージに出るのだ。

凧たちがステージに行ってからなためまだ多少の時間的な余裕はあるが、早いに越したことはない。

「そうね。ちょっと私呼んで……」

そこまで言って、未来はステージ脇の一番奥にあるカーテンの裾を掴みながら俯いている人影を発見した。

言うまでもなく、  
橘楓本人である。

「……」

無言のままカーテンを掴み続ける楓に未来が近づいていく。

「ほら楓。もうすぐ出番だよ？」

「み、未来……」

すでに泣きそうな顔をしている楓に未来は『はあ』とため息を一つ。

「ほら頑張らないと。せっかくお客さん来てくれてるんだよ？」



「うう〜……」

いつもの楓からは想像もできない程に弱々しい姿を前に、楓は若干鼓動が早くなっていたりするが、それはこの際置いておく。

「……そろそろだな」

ステージ上を確認しながら、楓が言う。

場面はそろそろ再び夜を迎えようとしており、楓もステージ上でジョン役を演じなくてはならない。

ピーターパンを待つシーンだ。

「ほら楓、そんなところに座ってないでこっち来なよ」

未来は無理矢理楓の腕を引っ張って立たせ、こちらに連れてこようとしていた。

ズルズルと連れられる楓の目からは今にも涙が出てきそうである。

「むりよ……こんな衣装絶対むりよ……死ぬ、恥ずかしさで死ぬわ……」

ぶつぶつと念仏のように言葉を放つ楓に、

「（ちょっと一条君、どうかしてよ……！）」

未来が助け船を求めた。

「（いやこんな楓今まで見たことねえぞ！）」

「（幼なじみでしょ！？だったらどうにかして！このままじゃ劇に

出られないわよー!!」

「(どうしろってんだよ!!)」

「(とりあえず励まして!!)」

未来の『早く行けよ』という全身から発せられるオーラに圧倒された凧は、おそろおそろパイプイスに蹲る凧のもとへと向かう。パイプイスの上で体操座りをし、膝に顔を埋める凧に凧は静かに話しかけた。

「……凧」

ピク、と凧の体が反応し、ゆっくりと顔を上げる。上目遣いで涙ぐんだその表情は凧を真っ赤にさせるには十分すぎる破壊力だ。

「凧……」

「……折角あなたたくさんのお客が来てくれてるんだからさ、ステージに上がるうぜ」

「こんな衣装じゃ恥ずかしくて死ぬわよ……!!」

背中に装着されたビニールの羽を引っ張りながら凧が言う。

「似合ってるって」

「っ!?!」

わんわん。

凧は爆弾を投下した。

「に、にに似合ってる……?」

楓の顔が先程の恥ずかしさ以上に赤くなる。

「それに掌サイズにしか観客には見えねえんだから気にすることないだろ」

凧がそこまで言うと、楓はパイプイスからすつと立ち上がった。

「（似合ってる?似合ってる、似合ってる……）」

似合っていると反芻しながら、楓は意を決し、

「やるわ!」

拳を握りしめて高らかに宣言した。  
それを見ていた帝督と未来は、

「凧やるな」

「楓もどこか単純なのよねえ」

苦笑いするしかなかった。

ウエンデイが思案するシーンも終わり、ステージ上の照明が一端消される。

「（一条君、永井（ランキング八位の三年生）急いで）」

生徒会長である五十嵐に小声で急かされる。その間に再び子供部屋のセットが準備され、凧と永井が指定された位置へとつく。

パツ、と照明が点灯しステージ上を照らし出す。

「『昨日見た夢の真相を探るべく、ウエンデイたち三人は寝ずにピーターパンが現れるのを待つことにしました』」

松本先輩のナレーションを皮切りに、再び劇が進行する。

「ピーターパン、来るのかな」

「分からないわ。だからこうしているんでしょう？」

「くるよ！ピーターパンはきつとくるよ！」

三人でベッドに入りながら、ピーターパンがやって来るのを待つ。時刻はもうすぐ夜中の十二時を回ろうとしていた。

真冬のロンドンには極寒で、部屋内では大きな暖炉の中で薪がごろごろと燃えている。

それから時間は経過し、子供たち三人も襲い来る睡魔に抗えなくなってきたころ、欠伸をしていたジョンがその異変に気付いた。

「……なんだか寒くない？」

「本当ね、冷たい風を感じるわ」

腕をさすってウェンデイも肯定する。

暖炉の火が消えてしまったのかと思いきちらを見てもみるが、相も変わらず薪を燃やしている。

「窓が！！」

不意に、マイケルが窓のほうを指差して叫んだ。

ウェンデイとマイケルもそちらに視線を移すと、寒さの正体を知った。

「窓が……開いてる？」

訝しげにジョンが言う。

確かに窓は閉めたはずだ。彼自身の手で鍵をかけたのだからそれに間違いはない。

それなのに、窓が半分ほど開いていた。

「『閉めたはずの窓を不思議に思いながら考える子供たち、その時でした』」

「……なんだか寒くない？」

ジョン役の凧がそう言っている頃、ステージ脇では、

「そろそろだな」

ステージ上を確認し気合いを入れる帝督と、

「ええ（似合ってる……似合ってる）」

まだ若干トリップ中の楓がスタンバイを完了させていた。

「楓、垣根君。二人とも頑張ってたね」

その後ろから未来がエールを送っている。

楓はステージ上に上がるが地面に足はつけない。ティンカーベルという配役ゆえに宙に浮いていなくてはならないため、リハーサルのようにすでに腰にはワイヤーが装着されていた。

パソコンとプロジェクターと学園都市の技術によって観客からは楓が小さく見えるようになるためワイヤーも人目では装着されているとは解らない。

「『 その時でした』」

松本先輩のナレーションを合図に、明るい照明が暗いものへと変わり、楓と帝督も気を引き締める。

「（行くぞ橘）」

「（ええ）」

二人はステージ上へと躍り出た。

照明が暗くなり、そろそろだなと風は思う。いよいよ主役、ピーターパンの登場だ。

「窓から突然、光の球が部屋に入りこんできたのです」

ふわあ、とテニスボールくらいの光の球が子供部屋をうろつき、木馬に当たって光が弾けた。

「あ！」

「え!?!」

「あああ!?!」

三人揃って驚愕の声を上げる。それもそのはず、光の球が弾けたと思ったらその粒子が人の形をつくりだし、その人間が木馬に跨がり遊びだしたのだ。

言うまでもない、その人物は。

「『ピーターパン！』」

緑色の衣装を身に纏ったピーターパン（垣根帝督）がステージ上に姿を現した。



第46話 壇上の物語〈main event〉（後書き）

次回劇の後半です。

もう少しコメディが続きますが一端覧祭が終わればシリアス突入の予定です。

## 第47話 急転直下〈under layer〉

「まったく何だうるせエな……」

「おう起きたか一方通行」

腕を組んで眠っていた一方通行がゆっくりと瞼を持ち上げて鬱陶しそうに呟く。

それを聞いた隣に座る軍覇が声を掛けた。

「帝督が出てきたんだ」

「……この女どもの歓声はそのせいか」

耳をつんざくほどの女子たちの歓声が一方通行の睡眠を妨げる。さららら、

「この男どもの歓声はなんでだ？」

体育館内では女子だけでなく男子からも野太い歓声がそこかしこからあがっていた。

「ああ、それは橋が出てるからだな」

言われて、ステージ上を確認する一方通行だがどうにも楓の姿が見つけられない。

「……どこにも居ねエじゃねエか」

「いや居るって、ホラ」

軍覇の指差したほうを注意深く凝視してみる。すると、

「……………何だあの小せエの」

帝督の肩辺りをふわふわと飛ぶ小さな人形。それはよく見れば楓にそっくりだった。

「だからあれが橘なんだって」

「あア？ いつから長点<sup>ウチ</sup>上機は人体実験を開始しやがったんだ？」

「いや違っただろ！ステージ前見てみる、あのプロジェクターと上からの光を使って小さく見せてるんだとよ。ま、俺にも原理はさっぱり解んねえけどな」

不穏なことを口走る一方通行に軍覇がすかさずツッコむ。普段では見られない軍覇がツッコミ役になってしまっている。

「……………あア？」

不意に一方通行が目を細めた。

「どっつした？」

雰囲気の変化を感じ取ったのか軍覇の口調も真面目なものへと変わる。

一方通行が見ていたのは演劇が進行中のステージ上ではなく、その

正反対。

体育館の正面入口だ。体育館内の周りは暗幕によって光を遮断されているため暗く、ステージ上の照明だけが体育館をぼんやりと照らし出しているが、少しだけ、正面入口の前の暗幕から光が射し込んでいた。

自然に、というわけではない。一方通行は確かに見ていたからだ。

僅かに開いた暗幕の向こうからこちらを凝視する、獣のような眼を。

(アイツは……、いやまさか……！)

演劇が行われている最中にも関わらず、一方通行はガタンと荒々しく席を立ち上がり体育館の入口へと歩いていく。

「(ちょ、一方通行!?)」

小声で軍覇が叫ぶも、一方通行には最早聞こえていない。暗幕を払いのけ、体育館から出ていってしまった。

(一方通行……?)

ステージ上のベッドに身を預けていた尻にも、椅子から立ち上がった一方通行が早歩きで体育館の出入口へと向かっていくのが見えて

いた。

観客の殆どは今しがた登場した帝督と楓に大歓声を送っているため一方通行の行動は一部の人間しか気付いていないだろう。

(一体どうしたってんだ……?)

「(どうしたのかしらね一方通行君)」

凧が思案していると、同じく一方通行の様子に気付いた生徒会長五十嵐がベッドの隣から小声で話しかけてきた。

「(分かりません。でもあの様子……)」

「(ただ事じゃないって感じだったわよね)」

演劇に支障が出てはいけないため口もほぼ動かさず、目線も合わせないで二人は会話をしていく。

現在ステージ上では帝督演ずるピーターパンが木馬で遊ぶシーンで観客は皆そちらに注目しているため凧たちの会話には気がつかない。

「(何があったのかは分からないけれど、今は劇に集中しましょう)」

「(ですね)」

それだけ言い合って、二人は再び劇へと入っていった。

ピーターパンの演劇が予定通りに進行している頃、体育館を飛び出した一方通行は長点上機学園の裏庭にやってきていた。庭、と言っても小さなものではなく、巨大な石が幾つも置かれ、地面は芝で覆われている庭というよりは草原と言ったほうが適切なよ  
うな場所だ。

そんな裏庭にある一つの巨大な石の上に座る人物。一方通行はその人物を忌々しげに見上げて言う。

「テメエ……！ 一体何しに来やがった！？」

普段冷静沈着な一方通行からは想像もできないような憤りを感じさせる声に、石上に座る人物はニッコリと微笑みながら告げる。

「やだなあ 一方通行。そんな恐い眼で見つめないでよ」

軽口でも叩くような人物に、一方通行はギリツと奥歯を噛む。

「ちよつと様子を見にただけさ。学園都市の『闇』から抜け出した一方通行が、一体どんな学園生活を送っているのか気になってね」

『闇』。

その単語が意味するところは、言うまでもなく学園都市暗部。

今まで語られることはなかったが、一方通行は三ヶ月前、つまり八月まで学園都市暗部に身を置いていた。そしてその事実はおそらく、『ファルコン』のメンバーである凧や帝督、そして軍覇でさえも知らなかった。

八月、更に言えば三一日。この日、一方通行は一人の少女を救って学園都市の『闇』と手を切った。

切った筈だ。

これまでのように学校に通って夙たちと冗談を言い合い、家に帰れば五月蠅いジャージ女と研究者、そして常盤台の超電磁砲によく似た少女となんでもないような時間を過ごす。

そんな当たり前の一日が、一方通行は好きだった。

だがそんな日常は今まさに壊されようとしていた。

目の前の人間によって。いや、人間と言ってもは語弊がある。正確には『人間達』によって、だ。

「まあ君を見にきたのはほんのついでだよ。本命は違ってね」

「……何だと？」

「今日、一端覧祭開催日。学園都市の五本指全ての学校がスキルアウトの集団に襲撃される」

「ッ!？」

突然の言葉に、思わず目を見開いた。

「何もそんなに驚くことはないだろう？ 前触れならあった。一度スキルアウトが長点上機を襲撃したじゃないか」

言われて一方通行は思い出す。執事喫茶営業中に校門に押し寄せていた如何にも不良たち。今思えばあの時点で気付かなくてはならなかったのだ。いくら一端覧祭期間中で外部からの来客も多く、警備も通常よりは甘くなるからといって必ず学校に何人か警備員は配置される。そんな学校を白昼堂々と襲撃してくるということは、よつぼどの馬鹿かその後にある大事の布石。どちらかと問われればそれはもちろん後者だろう。

「学園都市が誇る超能力者（レベル5）を四人も要する長点上機学園、第三位と第五位が所属する常盤台、第四位の君臨する王来王華、そして公立の頂点吉左右高校にエリート女子中の御巫。この学園都市の五本指を、スキルアウト総勢五〇〇人が潰す」

石上に腰を下ろしている人物はまるでおもちゃで遊ぶ子供のように楽しそうに言う。

「……何でそれを俺に言うんだ」

「別に？ ただの気まぐれだよ。遊びには障害がないとつまらないだろう？」

「ハッ、学園都市の五本指がスキルアウトなごに負けるとでも思ってるのか」

「んん？ それなりの装備をさせているに決まってるだろう？」



しれっと、一方通行の意見を食い潰した。

「渡したのは演算を阻害する妨害電波を発する簡単な装置だけどね。何も知らないただの能力者はさぞかし驚愕するだろうねえ」

「……何が目的だ」

「俺たちは手を貸しただけ。申し出てきたのはスキルアウトのほうさ。能力者に一泡ふかしてやりたいってね」

もしこの場に二人以外の人間が居れば卒倒しそうな会話が、隠そうともせず続けられる。

一方通行は小さく舌打ちし、殺意の籠った瞳で上を見上げ、

「……磨り潰すぞ」

対し、石上の人物はそんな一方通行を見ても何の動きも見せない。学園都市第一位、まさしく最強の怪物を前にしてもその表情から微笑みは消えなかった。

「やめときなよ。余計な被害を出すのはこっちとしても好ましくないんだから」

諭すかのように一方通行に話しかける。

「……おっと、もうこんな時間か。じゃあ、俺はこれで失礼するよ。またね一方通行」

「！ 待ちや」

「

一方通行が言い終わるよりも早く、その男は姿を消した。後には残された一方通行と吹き抜ける風によって芝が靡く音、そんな中、拳を握りしめながら一方通行は呟く。

「……………」  
『最下層の住人』  
アンターレイヤー

何かが始まるうとしてしている。そう思わずにはいられなかった。

「フック！！村長の娘、タイガーリリーを返すんだ！！」

「フハハハ！ならば力づくで奪い返してみるんだなピーターパンよ！！」

体育館内で行われている劇も終盤に突入し、観客たちのボルテージも最高潮に達しようとしていた。

ステージ上にはピーターパンとティンカーベル、ウエンディにフック船長とタイガーリリーが出ており、これからまさに超能力を使った戦闘シーンが始まるうとしていているところだ。

ステージ袖に一旦下がっている風は用意されていた休憩用の椅子に

腰掛けパツクのお茶を飲んでいた。

（順調だな。観客の反応もいいし、このままなら大盛況間違いなしだ）

先程までのパジャマから熊のキグルミに衣装をチェンジした凧の出番は、ピーターパンがタイガーリリーを助け出した後のラストのフツクとの直接対決のみとなっており気楽に次の出番を待つ。

気持ちに余裕が出来てきたからなのか、ステージ上では気にしないようにしていた先程の一方通行の行動が気にかかるようになってきた。

（何のために出ていったんだ……？）

ただ単にトイレなどに行っただけなのかもしれないが、観客席を覗いてみてもまだ彼は戻ってきていない。その可能性は低いだろう。

（アイツ、何かを追いかけていくみたいだったな……）

答えの出ない問題に凧が頭を抱えている、その時、携帯が点滅し震動した。

携帯を手にとって相手を確認する。そこには今まさに思考していた

【一方通行】の文字が。

凧はメールボックスを開き、送信されてきたメールを確認する。

「……は？」

文章入力欄に入力されていた文字は単純明快。

【気をつける】

一体何を？ と凧が思った瞬間、不意にそれはやってきた。

轟ッ！！

体育館全体を縦揺れの震動が襲う。そしてどこからか聞こえる爆発音。間違いない、長点上機のどこかが爆発した。

「気をつけるってこれのことかよ……！！」

体育館内を包んでいた歓声は、一瞬にして悲鳴へと変貌した。

## 第47話 急転直下〈underlayer〉（後書き）

学園都市の五本指は長点上機と常盤台以外完全オリジナルです。ご了承ください f ^ | ^ ;

あと活動報告のほうに短いですが新作の予告のようなものを載せておきました。

よろしければそちらもご覧ください。

第48話 五本指と進行する計画 <bottom in the dark>

お待たせしました。

今回風の出番が少なすぎる……

第48話 五本指と進行する計画へbottom in the dark

長点上機学園を突如として襲った謎の爆発、それは一ヶ所に留まらず同時多発テロのように各地で発生していた。発生場所はいずれも学園都市が誇る五本指の学校。

一端覧祭で賑わう学園都市も、この爆発で陽気な雰囲気など消しとんでしまった。

「校内で爆発!?!」

「学舎の園でも発生したようです!」

常盤台中学の敷地内を疾走する学園都市第三位の超能力者、御坂美琴と風紀委員の腕章を腕に装着した赤みがかった茶髪をツインテールにした少女、白井黒子。

彼女たちは爆発音を聞いていち早く行動を開始していた。

「まさかウチを狙ってくるなんて……、凧たちの長点上機のこともあつたから可能性としては考えてたけど」

爆発音がした校庭へと急ぐ美琴。その横をピッタリと並走する白井もその表情は曇っている。

「一端覧祭期間を狙ってくるなんて事前に計画を練っていたんでしょうね」

常盤台中学はその生徒の全員が強能力者（レベル3）以上の能力者である。そんな中学を狙う以上、相手も相当の手練と見るのが妥当だろう。既に他の生徒たちは離れたところへと避難を開始しているらしく、美琴たちの進行方向からは生徒たちが波のように押し寄せてくる。

「本当ならばお姉様にも避難していただきたいところですが……」

「そんな悠長なこと言ってる場合じゃないでしょうが」

押し寄せる人波をスルスルと避けながら、白井はポケットから筒状の携帯を取り出して操作したのち耳にあてる。数回のコール音が鳴って電話は繋がった。

『白井さん！？ 大変なんですよ、各地で謎の爆発が……！』

「分かっていますわ、常盤台でも爆発が起きていますの。他にどの場所で爆発が起きたか分かりますの？」

『現在確認されているのは常盤台のほか長点上機学園に王来王華学園、吉左右高校に御巫中学です』

（全て学園都市五本指の学校……偶然ではありませんわね）

通話しながらも思考を巡らせる。爆発が起きたのは全て五本指。これは偶然ではない。犯人はおそらく、意図的に五本指を狙ったのだ。一端覧祭という警備員の警備も甘くなるこの期間を狙って。

「分かりましたわ。初春は警備員に連絡を、五本指の学校近くの風紀委員の支部にも」



『了解です。また何か情報が入り次第知らせますね』

そう言つてプツツと通話は切れた。白井は携帯をしまい、美琴とともに校庭へと繋がる通路をひた走る。

「！！ アレね……」

美琴が呟く。

その視線の先にはもうもうと立ち込める粉塵。さらにその先には、鉄パイプやナイフを手にした男たちの姿があつた。その数はざつと一〇〇。

「スキルアウト……！？この爆発はアイツらの仕業なの！？」

「どうやらそのようですわね……」

見たところ爆発されたのは校庭近くにあつた体育倉庫のようで、屋根は半壊し粉塵が舞つていた。

「お姉様はここで待っていてくださいな」

「へ？」

何故？ と言わんばかりの表情で白井を見つめる美琴に、半ばあきれたように白井が言う。

「見たところアイツらは無能力者（レベル0）のようですしわざわざお姉様が出る必要ありませんわ。それに……」

ややジト目で美琴を見据え、

「そんな戦いたくてたまらなそうなウズウズしているお姉様をあそこに行かせるわけにはいきませんもの……」

「なっ!? 私がいつそんな顔してたのよ!？」

必死で否定するも全てを見透かしているかのように白井は大きなため息をつき、ビシツと美琴に指を突き立てる。

「いいですかお姉様! お姉様は一般人、パンピーですよ!?! それをむやみやたらに首を突っ込んで風紀委員の意味がありませんの!?! 少しは常盤台のエースとしての自覚をお持ちになってもっとおしとやかになさってくださいな!?!」

日頃の鬱憤を全て吐き散らすかのように白井の口から次々と止めどなく溢れてくる叱責の声に美琴は耳を押さえてあらぬ方向へと視線を向ける。

「ですから……って聞いてらっしゃいますの!?!」

「わ、分かってるわよ!?! でも今回はそうもいかないでしょ!?! 見なさいよアレ。ウチの子たちも応戦しようとしてるってのに、常盤台の(・)(エ)(・)(ー)(・)(ス)(・)(がボーツと見てるわけにもいかないでしょ?」

常盤台のエース、という部分にやたらと力を込めて言う美琴を見て、白井は思わずこの日一番のため息をはいた。

「分かりましたの……でも無理だけはしないでくださいませお姉様。

見たところアイツら、顔が余裕に満ちていますわ。きっと何か手を打っているはずですよ」

「わかってるわよ。でもね黒子」

言って、美琴はポケットから一枚のコインを取り出す。それを前方に掲げ、勢いよく指で弾く。クルクルと回転しながら宙を舞うコインはやがて重力に任せて落下を始め、美琴の指へと戻ってきて

「私に小細工が通用するとも思ってたのかしらッ!」

その細い指にコインが触れた瞬間、目も開けられないほどの莫大な光量を撒き散らしながらオレンジ色の熱線が校庭に集まっていたスキルアウトのもとへと放たれる。一瞬遅れてやってきた轟音とともに校庭を否応なしに挟りながら突き進むコインは、その余波だけでスキルアウトたちを吹き飛ばした。

「さあて、常盤台ウチに喧嘩売ったってことは……覚悟はできてんのよねえ!」

学園都市第三位、最強の電撃使い（エレクトロマスター）の代名詞とも言える必殺技、『超電磁砲レールガン』をブツ放した美琴は、残る八〇名ほどのスキルアウトが居る校庭へと駆け出した。それに続いて白井も空間移動テレポートし、能力に自信のある常盤台の生徒たちも雪崩れこんでいく。能力的に見れば圧倒的に不利なはずのスキルアウトたち。

しかし、彼らはそこから動こうともせず、ただその顔に不気味な笑みを張り付けていた。

「何だアイツら？」

常盤台と同じく第七学区にある五本指の1校、王来王華学館。  
その校舎の窓から校門に集まるスキルアウトたちを見下ろしながら、  
麦野沈利は呟いた。

「結局この一端覽祭期間にこういうことが起きるってわけよ」

背後からかけられた声に反応して、麦野は視線をそちらに移す。そこに立っていたのは金髪碧眼でブレザーの制服の前ボタンを全て外している少女。

「フレンドか」

つまらなそうに言う麦野に納得がいかないのかフレンドは両手を上げ下げしながらにやらの言っている。

「アイツらがおそらくうちの学校の校舎の一部を爆破したんだろうな」

再び窓の外に視線を向ける麦野が口元を吊り上げながら言う。  
ここ、王来王華学館は校舎の一部が爆破された。予め爆弾を仕掛けていたのか能力によるものかは不明だが、外壁の一部が跡形もなく消し飛ぶほどの威力だ。既に生徒の大半は避難を完了させ、教師たちはその誘導、アンチスキル警備員として状況の悪化を防ぐために尽力して

いる。

「……むぎの」

そんな緊急事態な校舎の中に、小さく声が響く。その声を耳にした  
麦野は窓の外に向けていた視線を外し、声の主が立っているほうに  
振り向いた。

「滝壺。どうかした？」

そこに立っていたのはブレザーの制服を着たフレンドとは違い学校  
指定のピンクのジャージを着た滝壺理后。

「……外のスキルアウトたちが騒がしくなってきた」

「みたいね。フレンド、行くわよ」

「結局私たちじゃないとイツらの相手はできないってわけね」

「滝壺はここで待機。必要があれば他の生徒に協力してやって」

「わかった」

的確に指示を出した王来王華の女王は、そのまま窓を開けて三階の  
校舎から勢いよく飛び降りた。

普通の人間であれば、それは自殺行為に他ならない。

しかし、彼女は学園都市第四位の超能力者（レベル5）、『原子崩  
し（メルトダウン）』。

三階からの飛び降りなど何の障害にもならない。  
飛び降りたと同時に腕を下にかざし、メルトダウンを放射して落  
下速度を殺す。

タンツ、と軽い音とともに校門前に軽やかに着地した麦野は目の前  
のスキルアウトたちを睨み付けるようにして言う。

「ハンツ、たかだか無能力者（レベル0）や低能力者（レベル1）  
程度の雑魚の集まりが五本指に喧嘩売るなんていい度胸してんじや  
ない」

突如として現れた学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）  
を前にしてしかし、スキルアウトたちは歪に口元を吊り上げた。

「麦野だ……」

「あれが第四位」

「学園都市の最高峰」

「フヒヒ……」

口々に漏れる言葉は絶望などによるものではなく、どす黒い狂喜。  
その場に居るスキルアウトの誰もが、超能力者（レベル5）に対し  
て恐れなど抱いていなかった。

「オイオイ何だよその態度は」

そんなスキルアウトたちを一瞥し、麦野は僅かに口元を吊り上げ呟  
いた。

「ブチコロシ確定ね」

直後、轟音とともにメルトダウンナーが掃射された。

## 第一八学区。

長点上機学園も居を構えるこの学区でも、爆発は発生していた。校門周辺には他の五本指と同じく金属バットやナイフを手にしたスキルアウトたちが大勢集まり、しきりに罵声を浴びせている。

「全く……外野がギャーギャーと超うるさいですね」

## 私立御巫中学。 みかなぎ

学園都市中学校において常盤台と並び二翼と称される超名門校である。在校生徒は全て強能力者<sup>レベル</sup>3以上、常盤台のように超能力者（レベル5）は在学していないが在校生徒三〇〇人のうち九一人が大能力者（レベル4）という能力開発分野においてトップクラスに位置する中学校だ。

「スキルアウトごときが私たちを襲撃するなんてハッキリ言って超頭が高いです。身の程を思い知らせてやりましょう」

昇降口の下駄箱からローファーに履き替えながら、そう漏らす少女はダルそうに呟いた。

「最愛ちゃん。や、やっぱここは警備員アンチスキルに任せましょうよ」

最愛と呼ばれた少女、絹旗最愛がスタスタとスキルアウトのもとへと歩いていく中、その後ろをトテトテと気弱そうについてくる少女が言う。

「何言ってるんですか麻利也。アナタだって風紀委員としての責務を超全うしてください」

「こ、これは明らかに越権行為ですよ〜」

若干涙目になりながらも腕に風紀委員の腕章を装着しているあたり、彼女の真面目な性格が見てとれる。

結局そのままズルズルと絹旗についていくこととなってしまった弥富麻利也は、最前線である校門へとやってきてしまった。

校門前で待ち構えていたスキルアウト達は校舎の中から現れた二人の少女を目にして、邪悪な笑みを更に深める。

「お？ 何かガキが二人も出てきたぞ」

「あれが御巫のトップか？」

「楽勝じゃねえか」

「フへへ……」

「『あの人』の言う通りだったな」

「これでエリートだと調子に乗ってる奴らを叩きのめせるぜ……！！」

「何をごちゃごちゃ言ってるか超理解不能ですけど、御巫の敷地に足を踏み入れた以上、無事に帰れるとは超思わないことです」

「ジャ、風紀委員ですっ！ 器物破損、不法侵入の罪であなた方を



拘束します！！」

絹旗はセーラー服のリボンをシユルシユルと外しながら、麻利也は右腕につけた風紀委員ジャッジメントの腕章を示しながらスキルアウトに向かって言い放つ。

「なんだあお嬢ちゃん。俺たちに二人で勝とうってのかあ！？」

痺れを切らしたらしいスキルアウトの一人が、金属バットを振りかざしながら絹旗へと迫る。

対して、絹旗の取った行動は至ってシンプルなものだった。

「超バ力ですか？」

ただ、悪戯に相手を罵倒するだけ。その場からただの一步も動くことなく。

「ああ！？ テメエ何言つて」

スキルアウトの言葉が最後まで言われるよりも速く、ゴガンツ！！という衝撃音が男の頭部辺りから響いた。スキルアウトの男はそのままグラリとよろめき、手にしていた金属バットを手放して地面に倒れ込み動かなくなった。

そんな男を見て目の色が変わるスキルアウトたちに、絹旗は憮然として言う。

「超ナメてんですか？うちには九一人の大能力者（レベル4）がいるんです。たった二人で超特攻するわけがないでしょう」

見れば、二階の校舎の窓からこちらを見ている生徒が数人、昇降口から狙いをつけている生徒が数人見受けられる。

「……成程な」

スキルアウトの一人が、腑に落ちたように頷いた。

「つまり、油断なんざ微塵もしてねえってことかよ」

「当然でしょう？ 五本指にスキルアウトが喧嘩売るなんて普通なら超有り得ません。あるとしたら何らかの策があると考えるのは超当然のことです」

それを聞いた男は、満足気に笑った。

「オーケイ。なら油断してたからスキルアウト（レベル0）に負けました、なんて言い訳はしねえよな」

ポケットをゴソゴソとまさぐり、やがて小さな正方形の箱を取り出して絹旗に見せる。

「これが何だか解るか？」

「ハッ、そのサイコロを使って双六でも超やるつもりですか？」

余裕の笑みを崩さない絹旗に対し、男は言った。

「キャパシティダウンで代物を知ってるか？」

「爆発!？」

体育館内からでも明らかに異常と分かる爆発音を耳にして、凧は持っていた携帯を握りしめた。

体育館内からは当然悲鳴が木霊し明らかに観客たちが動揺しているのを見てとれる。こうなってしまうてはもう、まともに演劇を続けることなど出来ない。

「『皆さん、落ち着いてください!』」

そんな悲鳴と喧騒に包まれた体育館内に、松本先輩の声が轟く。

シ…………ン

と体育館内が静まり帰ったことを確認して、松本先輩はステージ脇にいた凧へと小声で指示する。

「ジメント一条くんは爆発があった場所を見てきて頂戴。校内にいる風紀ジャム」

委員もみんなそっちに向かわせるから。垣根くんにはこっちの誘導をしてもらうわ」

「（了解。なら軍覇も連れていきますよ）」

「（わかったわ）」

二人はそれだけ言い合ってそれぞれの仕事へと向かう。

ステージ上に居た楓にも目配せし、こちらについてくるようにと合図する。

「軍覇!!」

「凧、何だ今の爆発音は？」

「分かんねえ。だから今から俺たちで確認しに行く、ついてきてくれ」

「おう」

体育館内がざわめく中、特に動揺することもなく観客用に設置されたパイプ椅子にもたれかかっていた軍覇と合流し、楓がやってくるのを待つ。

「凧!!」

数分して、ティンカーベルの衣装から学園の制服に着替えを済ませた楓がステージ脇の扉からやって来た。

「楓。これから三人で爆発現場を見に行く。多分昼前に来てたスキ

ルアウトの仲間たちの仕業だろっけどな」  
「垣根くんや一方通行くんは？」

「帝督には体育館の避難誘導を五十嵐さんたちしてもらおう。一方通行はどこかに行っちまって消息不明だ」

「そう、とりあえず急ぎましょう。でも凧……」

言葉を濁す凧に、意味がわからないと言った表情で頭上に？マークを浮かべる凧。

そんな彼を見かねて、軍覇が代弁した。

「凧、衣装」

「……あ」

自らを見てみれば、そこにはモコモコとした茶色い毛で覆われている衣装。熊のキグルミそのままだった。

「……とりあえず、着替えてくれる？」

「おう……」

学園都市の『闇』。

そこには様々な暗部の小組織が存在し、『表』と決して交わることなく、密かに息づいている。

そんな学園都市の、  
『闇の“底”』。

そこはたとえ統括理事会であっても干渉することを許されない、文字通り不可侵の世界。この闇の底について認知しているのは学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーと一握りの暗部の人間のみ。

『表』の世界とは隔絶され、光の届かないこの闇の底は、『アンダーレイヤー 最下層』と呼ばれる。

そこに住まう住人。

彼らを『表』の常識で推し測ることなど出来ない。

法律も。  
事象も。  
思想も。

学園都市において誰も知る、超能力者（レベル5）は七人しか居ない。という常識でさえも。

「あ、お帰り葵<sup>あおい</sup>」

第二二学区の地下街よりも更に深い、コンサートホールのような空間に陽気な少女の声が響く。

「ただいま紫津葉<sup>むらさき</sup>」

「上はどうだった？今は一端覧祭の期間中なんですよ？」

紫津葉と呼ばれた見た目高校生くらいの少女は、水玉模様の傘を開いたり閉じたりしながら問い掛ける。

「ええ。懐かしい顔に会いましたよ」

「懐かしい顔？」

「一方通行です」

「……うーん、知らないなあ」

学園都市に住む者ならば誰もが知る最強の超能力者の名を、彼女は知らないに興味なさそうに呟いた。

「それよりも計画のほうはどうなの？」

「ええ。問題はありませんよ、全て順調です。あのテの機械はなかなか大掛かりな作業が必要ですが、目標期間内には終わります」

「そっか……やっとだね」

先程までの陽気な雰囲気が消え、消え入りそうな小さな声で少女が

ポツリと呟く。

「ええ、もうすぐです」

白衣を着た青年は、だだっ広い半球状の空間を見上げて言った。

「私たちの計画。『全能力者の抹消』は、目前だ」



第48話 五本指と進行する計画へbottom in the dark

麦野とフレンド、滝壺は同じ高校に。

絹旗は見た目中学生なので別にしました。

第49話 台無しにした罪へ capacity | down (前書き)

お待たせしました。

## 第49話 台無しにした罪へ capacity down

「ひどいな……」

目の前に広がる光景を前に、凧はポツリと呟いた。凧と楓、軍霸の三人は爆発音がした校門前へと到着したが、辺りに広がる粉塵と大勢のスキルアウトたちの姿を確認して奥歯を噛んだ。

どうやら爆破されたのは一端覧祭用に校門近くに建設されていた簡易テントらしく、食べ物屋の看板や紙皿などが無惨に散らばっていた。

スキルアウトたちには長点上機の風紀委員ジマツジメントが対応しており、その中には大塩の姿も認められた。

「大塩!!」

「あ！ 一条!!」

スキルアウトと睨み合っていた大塩のもとへと三人は駆け寄る。

「状況は!?!」

「マズイっスよ。うちの風紀委員ジャツジメントは総勢一七人。それに対してスキルアウトたちは軽く一〇〇人はいるっス」

「警備員アンチスキルへの連絡は?」

凧と大塩の会話を聞いていた楓が質問する。

「既に近くの詰所には連絡してあるっス。でも各地で似たようなことが発生してるらしくて、警備員アンチスキルの大部分は御巫中学みかなぎのほうに出張っちゃって援軍はあまり望めないっスね」

「つまり私たちで何とかするしかないってことね」

「根性で学園を守るぜ!!」

こんな会話をしている四人を、血気盛んなスキルアウトたちが見逃す筈もなく、

「なに余裕こいてんだクソがああ!!」

スキルアウトの一人が背を向けていた大塩へと金属バットを振りかざす。

「! 大塩!!」

凧の叫びと金属バットが振り下ろされたのはほぼ同時。しかし、その冷たい金属バットが大塩に触れることはなかった。

「……ふう。油断も隙もあつたもんじゃねえっス」

グラァ、と襲いかかってきたスキルアウトはよろめき、そのままガツクリと膝を折って地面の上に倒れこんだ。

「……すげえな」

凧は思わず感嘆の声を漏らす。

「これでも風紀委員ジャッジメントっスからね」

スキルアウトに対して背を向けたままそう言う大塩の両手には、真つ黒な拳銃が握られていた。

「普段の大塩とは全く別人よね」

楓の発言に大塩は苦笑いで返す。

ウエボンクリエイト  
武器創作。

大塩はこの大能力者（レベル4）である。

正体不明の物質を武器のように創り変えて使用するこの能力は、垣根帝督の未元物質データマターと通ずる部分があるかもしれない。

因みに武器創作は大塩が勝手に名乗っている能力名で、正式な名称ウエボンクリエイトは『不灰物質グレイマター』。

弾丸までは生成できないので、生成した拳銃に合ったサイズのゴム弾を大塩は常備している。

ジャコン、とゴム弾を再び装填し、大塩はスキルアウトたちのほうへと向き直る。

「いや、しっかし数が多いっスねえ」

言葉のわりに笑顔の大塩はベロつと舌なめずりし、周囲を見渡す。

「俺も手を貸すぜ」

その大塩の隣に立つ凧が言う。

「私もよ？」

「俺もだぜ！」

凧とは逆隣に楓と仁王立ちの軍覇が立ち、目の前に群がるスキルアウトたちを見つめる。

「超能力者（レベル5）が二人にあの（・・・）橘が加勢してくれるなんて、頼もしい限りっスねえ」

一端覽祭。

みんなこの日のために一生懸命に準備してきた。一ヶ月もの期間を使い、最高のものにしようと精一杯頑張ってきたのだ。

それを、どんな理由があるのかは知らないが、めっちゃめっちゃにしようとしているスキルアウト。無惨にも散らばった露店の残骸が、凧の怒りを静かに湧き上げる。「……許せねえ」

ポツリと、自分にしか聞こえないような声で凧は呟いた。

突然の災害ではない。

不幸な事故でもない。

ただ、人為的。

望んだことではない。

望まれたことでも、当然ない。

ただ、悪意に満ち満ちた所行。

そんな横柄が、許されていいはずがない。たとえば、そこにどんな理由があつたとしても。

「……………ん？」

そこでふと、凧の目にスキルアウトの一人がポケットから何かを取り出しているのが映った。

「あれは……………？」

サイコロのような、一辺三センチほどの四角い箱。面の一つが開閉できるようになっているのか、スキルアウトの男が蓋を開けるようにして立方体を開閉させる。

「くくく……………」

その男から漏れる、不気味な笑い声。

「第六位と第七位の超能力者（レベル5）か……………こいつは大量だぜ」

「……………んだと？」

まるで学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）、軍隊と単独で闘える火力を持つ人間を圧倒できるというような発言に、凧の眉が怪訝そうに動く。

「今の台詞、聞き捨てならねえな」

気に障ったのか、軍覇も睨むようにして立方体を手にしているスキルアウトを見る。

「まるで俺たち相手に勝てるような言い草だな。本気で言ってるのか？」

「ああ。そのままかだよ、ハイドロコマンド水分支配」

男は邪な笑みを隠そうともせずと言う。

「今日、俺たちスキルアウトは新たな歴史を創る。そして学園都市の常識を覆してやるんだよ」

「歴史だと？」

「そつだ。今まで散々蔑まれて腫れ物扱いされてきた落ちこぼれの俺たちスキルアウト（レベル0）と、その能力によって優等生と呼ばれるお前ら（能力者）の立場が今日、逆転する！！」

興奮を抑えきれなくなったのか、徐々に言葉に熱がこもっていく。そして手にしていた立方体を突き出した。

「コイツはそのための第一歩さ！！学園都市で五本指と称される超エリート校の能力者をこの道具で無力化する！！」

「何訳の解らないこと……！！？」

言いかけて、突然の頭痛が風を襲った。

脳の奥に杭を打ち込まれるような痛みが、断続的に襲いかかる。



「っ!?!? ……これは!?!?」

手で頭を押さえながら、うめくようにして風がスキルアウトを睨み付ける。

「コイツは『キャパシティダウン』で代物だ。聞いたことないか? もともとはもっと巨大な機械だったらしいが、『あの人』のおかげでここまでの小型化に成功したらしい」

「キャパシティダウン……?」

聞いたことない単語に頭を働かせようとするも、脳を襲う鈍痛が深く思考することを許さない。

「一種の音響兵器みたいなもんさ。コイツから発せられる音波が能力者の演算能力を大幅に阻害して能力を使うことを封じる。ま、流石に超能力者(レベル5)であるお前を完全に無力化することは難しいが大能力者(レベル4)クラスまでなら能力を封じられると思っせ」

いやらしい笑みを浮かべながら、スキルアウトたちは皆ポケットから同じ立方体の箱を取り出しそれを開く。

酷い頭痛が風を襲い、働こうとする脳を無理矢理に阻害する。どうやらそれは能力者全員に当てはまるらしく、楓や大塩も頭を押さえ、顔を苦痛に歪めていた。

「ギャハハ!! こうなっちまえばただのガキだ!! 俺たちに勝てるわけがねえ!!」



そこに立っていたのは、正拳突きで構えて停止している学園都市第七位、削板軍覇。

「なあ！？なんで能力を普通に使えるんだ！！コイツ（キャパシテイダウン）が効いてねえつてののか！？」

「む、確かに少し頭がきんきんするが。それがどうした！！俺は頭痛なんぞに負けん！！」

少し頭がきんきん。

その言葉を聞いてスキルアウトの男は開いた口がふさがらなかった。

少し頭がきんきん？

これはそんな生易しい代物ではないはずだ。レベルが上がるほどにその頭痛も酷くなり、楓や大塩のように立っているのが精一杯、少なくとも同じ超能力者（レベル5）である水分支配ハイドロコントロールのように頭を押さえて動きを止めるくらいの効力はあるはずなのだ。

それをこの男は。

何事もなかったかのように普通に能力を行使して俺たちを薙ぎ払つてのけた。

「有り得ねえ……！！」

「根性で出来ないことなんてないんだ！！」

そう叫び、軍覇はもう一発スキルアウトたちに向かって『すごいパインチ』を撃つ。目に見えない衝撃波がスキルアウトたちを吹き飛ばし、その数を減らしていく。

「……よし」

しばらく頭を押さえて動きを止めていた凧も、ようやく俯いていた顔を上げた。

「なあ!？」

それを見て更に驚愕するスキルアウト。

「ありがとう凧」

「助かったっス」

苦痛に顔を歪めていた凧と大塩も、キャパシティダウンを使われる前の状態へと戻っていた。

「バカな!! 一体どうやって!？」

有り得ない現状に今度はスキルアウトの頭が働かなくなる。今日のために散々シミュレートは積んできた。レベル1からレベル4までそれぞれの能力者にキャパシティダウンを試し、どの程度の効果を得ることができるのか幾度となく確かめてきた。

こんなことは一度たりともなかった。

こんな、突然効果が消失してしまうようなことは。

「さあて」

凧の言葉に、スキルアウトの肩がビクツと震える。信用しきっていた道具の効果がなくなった今、彼らスキルアウトが

すがれるものなど何も残されていない。

絶対の信頼を置いていたキャパシティダウン。その効力が失われた。それだけで、スキルアウトたちの戦意を奪うには充分だった。

残された七〇名ほどのスキルアウトたちを取り囲むようにして立っている長点上機の風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>。彼らも風たちと同様に苦痛から解放されていた。

そんな風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>や風たちを見て、ようやくスキルアウトの一人がキャパシティダウンが効かなくなった答えに辿り着いた。

視界に捉えたのは、耳。

両耳が、氷漬けになっていた。

「氷……!?!」

「その様子だと気付いたみたいだな。キャパシティダウンは効かなくなっただんじゃない。俺が物理的にその妨害音波を遮断したんだ」

風が自分の耳をトントンと指で叩きながら言う。

「そのキャパシティダウンってのは音波で脳内の演算能力を阻害する装置なんだから。だったら話は簡単だ。その音波を聞こえなくしちまえばいい」

「そんなこと……簡単にできるわけが……」

「確かに、完全に音波を遮断するってのは不可能だ。いくら耳を氷で塞いだって完璧に防音できるわけじゃない」

だから、  
と凧は一拍おいて。

「鼓膜を氷らせた」

「!?!」

凧の発言に、スキルアウトのほとんどが驚愕して目を見開く。

「音つてのは鼓膜が震動して察知するもんだ。なら鼓膜が震動しないように氷らせてしまえば、理論的には音は完全に遮断できる」

「音すべてを遮断しちまうから、ホントに何も聞こえないんだけどな」と付け加えて凧は笑う。

「とりあえず……」

ゆっくりと右腕を持ち上げ、照準を定める。

「その厄介な箱、壊させてもらっぜ」

瞬間。

スキルアウトたちが手にしていたキャパシティダウンが氷塊へと変化した。

「なっ!!凍った!?!」

「これでもう鼓膜を氷らせてる必要もないな」



第49話 台無しにした罪へ capacity | down (後書き)

なかなか更新できず申し訳ありません( - ; )



第50話 その先にあるのは〈After-that〉（前書き）

はやいもので50話です。

皆さんこの小説を読んでいただきありがとうございます。

なかなか更新できずに申し訳ありません（^ー^；）

一応、これで一端覽祭編は終了です。

煮え切らないところもありますが、それは次章に持ち越しというところまで……。

## 第50話 その先にあるのは〈After that〉

「凧!！」

校門付近でスキルアウトたちを殲滅した凧たちは生徒たちの避難を体育館内で行なっていた帝督のもとへと戻ってきた。

避難は既に完了しており、つい先程まで人気劇であれほど盛り上がっていた体育館内も今はパイプ椅子が乱雑に散らばり閑散としている。

「あの爆発はなんだったんだ？」

現場に居合わせなかったために事情を知らない帝督が凧に問い掛ける。凧たちが帰ってきたことで帝督と避難誘導を行っていた生徒会長の五十嵐先輩や松本先輩も駆け寄ってきた。

「一条くん。外の様子は？」

五十嵐先輩が尋ねる。

「とりあえずは落ち着いたよ。爆破されたのはクラスの模擬店だったけど負傷者は出ちやいない」

「そう……」

ホッ、と胸を撫で下ろして安堵の息を吐く五十嵐先輩。

長点上機学園では既にスキルアウトたちを警備員が拘束し、一応の形では事態は収束に向かっていた。

だが、腑に落ちない点が多々ある。それを口にしたのは凧だった。

「……………どうして、アイツらは長点<sup>じゅんちん</sup>上機を狙ったんだ？」

「単なる逆恨み……………って感じではなかったよね、アレは」

凧の疑問に同調するように楓も先程のスキルアウトたちを思い返す。

「今大塩たちが支部で色々調べてくれると思うけど」

言いかけたところで、凧の携帯のバイブレーション機能が作動した。ポケットから取り出してディスプレイを見てみればそこには【白井黒子】の文字。凧は通話ボタンを押して携帯を耳にあてがう。

「もしもし白井か？」

『凧さん！先程大塩さんから連絡を受けましたの、お怪我ありませんか！？』

「大丈夫だ。こっちのスキルアウトたちは全員<sup>アンチスキル</sup>警備員に引き渡したから」

『そうですよ。こちらのほうも粗方片付けましたわ』

「ん？そっちにも似たような連中が現れたのか？」

眉をひそめて疑問を口にする。それは余りにも不可解だったからだ。

（長点上機と常盤台、学園都市を代表する五本指が揃ってスキルア

ウトに襲撃だと……？)

『凧さん？』

思考の海に沈みかけていた凧を白井の声が現実に引き戻す。

『常盤台や長点上機学園だけではありません。王来王華<sup>おうちいおうか</sup>や御巫<sup>みかなぎ</sup>、吉左右<sup>よしかみ</sup>まで襲撃されているんです。』

「全部五本指の学校じゃねえか……！」

ますます偶然として片付けられなくなる。最早これは人為的と考えるのが極自然と言えるだろう。

「風紀委員<sup>フジキイメン</sup>はどこまで調査できてるんだ？」

凧がそう聞くと受話器ごしの白井が僅かに押し黙る。数秒の沈黙の後、ゆっくりと声が発せられた。

『……本来であれば超能力者（レベル5）であろうと凧さんのような一般の方に情報を開示するわけにはいかないのですが……事態は思ったよりも深刻なようです。』

沈痛な声が受話器から流れる。

「……どういうことだ？」

『スキルアウトたちが使用していた『キャパシティダウン』という代物はご存知おありですわね？』

「ああ」

言われて先程のスキルアウトたちが手にしていた立方体の小型の箱のようなものを思い出す。

『アレはあのようなスキルアウトたちが簡単に手に入れられるような代物ではありませんの』

「そういえば……、小型化がどうか言ってたな」

『ええ。キャパシティダウンはもともと車の後部座席ほどのサイズですの。それをあれほどまでに小型化する技術がスキルアウトにあるなんて考えられませんわ』

「確かにな。でもそうだとすると……」

辿り着いた答えは、どうやら白井も同じようだ。

『ええ。彼らの後ろにそれほどの技術を擁する人物、または組織が存在するはずですわ』

「そついった奴らに心当たりはないのか？」

『残念ながら……スキルアウトの携帯の通話履歴や監視カメラの映像を調べましたが有力な情報は得られないままですの……』

「そつか、」

何か解つたら教えてくれ、とだけ白井に伝えて尻は携帯を閉じてポケットに仕舞い込んだ。

「白井からか？」

帝督が尋ねる。

「ああ。どうやら襲撃されたのは五本指の学校だけらしい」

「ああ？スキルアウトの奴らはわざわざ五本指だけを狙ったってことかよ」

怪訝そうに眉をひそめながら帝督は言い、

「美琴ちゃんたちは大丈夫だったの？」

「おう。向こうも一段落ついたらしい」

心配そうに問いかけてくる楓に凧はそう答えた。

「……とりあえず」

これまで話の聞き役に徹していた松本先輩が体育館内をぐるりと見回して、

「これ、どうにかしないとね」

乱雑に散らばったパイプ椅子や埃にまみれた暗幕など、収集がつかなくなった体育館内。人影は凧たち以外に認められず、集まっていた観客たちの姿は消え失せていた。

「このままじゃとても一端覧祭を継続できないわ。まずは元通りに

しない。幸いまだ初日だし、なんとか巻き返せるんじゃないかしら」

一端覧祭としては最悪のスタートを切ることとなってしまったが、幸いにしてまだ一端覧祭は開催初日である。とても簡単とは言えないが、それでもまだ残りの六日で巻き返せる可能性は残されている。

「そうね。劇だってまだあと二回チャンスが残されてるんだし、みんな協力すれば何とかなるわよ」

こういう時に頼りになるのはやはり生徒会長という役職を背負っている五十嵐雛乃先輩だった。

すぐさま他の場所で避難誘導を行っていた生徒会のメンバーに連絡をとり、事件が解決したので心配はいらないということを送信によって学園中に流したのだ。

それによって訳が解らないままに避難を強いられていた生徒たちは一応の平静を取り戻し、一般の来場客もホッと胸を撫で下ろした。

午後三時四七分。

長点上機学園に襲いかかった一連の事件はこうして幕を降ろした。

そこにある、大きな闇に気付かないまま。



第50話 その先にあるのは〈After-that〉（後書き）

次は他の五本指の顛末を少しいれて次章に進みます。

**幕間 蘭星奈の一端覧祭（前書き）**

幕間です。

今回は人気ランキング10位の一年生視点の一端覧祭。

モブじゃないです。

今後もちゃんとでてきます（笑）

## 幕間 蘭星奈の一端覽祭

こんにちわ。

私は蘭星奈。

長点上機学園の一年生です。

え？

知らない？

あはは……。

それはそうですね。

私、ほんのちよっぴりしか登場してませんから。  
でもちゃんと登場はしてるんですよ。

……一言も喋ってはいませんが。

ええと、何て言うか。

長点上機学園の人気ランキングで唯一トップ10、第十位にランク  
インした一年生……って言ったらわかってもらえるでしょうか。  
（ちなみに初出は第39話です）

今回はこんな私が見た、一端覽祭までをお話したいと思います。

「そういえば星奈。アンタって10位に入ってたから今年の人気劇に出ないといけないんじゃないの？」

「ふえ？」

一端覧祭開催前のある昼休み。一つの学習机を囲みながら昼食をとる私の友達の一人が、不意にそんなことを言い出しました。

「人気劇って……？」

私はその単語に全く聞き覚えがなかったので、手にしていたパツクの牛乳の残りをズズツとストローで飲みながら聞くと、

「はあっ！？アンタ人気劇知らないのっ!？」

まるで信じられないものでも見たかのような形相で友達は私に言いました。耳が痛い……。

「一端覧祭でやる劇のことよ星奈」

私の隣でサンドイッチを優雅に食す友達が教えてくれました。

え？

それって私も出なくちゃいけないの？

「アンタ整った顔してるもんねー。可愛らしいっいたらないわ」

「そ、そんなことないよ…… / / /」

不意にそんなことを言われて体の内側からカアツと熱くなるのを感じる。恥ずかしいからそんな大声で言わないで、クラスのみんながこっち見てるから……。

「だって実際投票結果に出てるでしょーが。まあ四位の橋先輩までは別格だとしてもうちの学園で十位ってすごいことだって」

しかも一年生はアンタだけだしね、と付け加えた友達は購買で買ってきた焼きそばパンの袋を開けながら言います。

確かに、四位に入ってた橋先輩や二位の五十嵐先輩、一位の先輩はずば抜けてキレイで美人だと女の私から見ても思う。しかも能力レベルも高くて強いしカツコイイときたものだから完璧と言わざるをえない。

「そんな先輩たちがやる劇に私が……？……むりむりむり！」

想像するのもおこがましく感じて私は両手をぶんぶんと振った。もともと人前で何かをするということが得意ではないし、どちらかというとシャイな私がそんな一端覧祭で披露するような劇に参加するなんて考えられない。

「私、生徒会の人に言って劇を辞退させてもらってくる……」

ガタツと椅子から立ち上がって生徒会室へと向かおうとする私に、焼きそばパンを頬張りながら友達はふと言いました。

「そういえば劇って男女合同だから、男子の先輩とも一緒じゃなかったっけ？」

シュバツ!!

と流れるような動きで私は即座に椅子に戻りました。

「それホント……？」

「お、おう。そうだったはずだよ」

ズズイ、と詰め寄る私に焼きそばパンを食べていた友達はたじろいでいました。

「そっか。一条先輩がいるからね」

サンドイッチを食べ終えた友達が気付いたように言った途端、私の顔は真っ赤に染まりました。

「あゝなるほど。アンター一条先輩のこと好きだったもんね」

「う……」

「カッコイイもんね〜一条先輩。スタイルいいし運動できるし極めつけに超能力者（レベル5）ときたもんだ」

「う……」

「他にも長点上機にいる超能力者（レベル5）はイケメン揃い。彼らとの距離を縮めるためにこの学園に入学してくる女子もいるくらいなものね」

「う……」

一条先輩たちと私との差をまざまざと見せつけられたみたいで、私は肩身がせまくなって小さくなってしまった。

（（小動物みたいだな））

そんな私を見て彼女たちがこんなことを思っているなんて知る由もなく。

いいじゃないか。

たとえ無謀だとしてって人を好きになるのは自由な筈だ。

それに、私が一条先輩に対して抱いているのは好意でなくあくまでも憧れ……のはずだ。うん、なんか言い切れないけど。

そんな思考をする私に、友達の一人が言った。

「でもさ星奈。一条先輩って橘先輩とデキてるって専らの噂だよ？」

「う……」

そう。

私が尊敬する一条先輩は、クラスメートであり幼なじみの橘先輩と付き合っている、という噂が流れているんです。事の真相は定かじ

やないけど、火の無いところに煙は立たないというし、その可能性もあるんだろうなあ……。

「橘先輩じゃ分が悪いよなあ」

グサツ

「あの人キレイなものね」

グサグサツ

「後輩想いだし先輩からも好かれてるし」

ドスッ！

「一条先輩の幼なじみってアドバンテージは大きいわよね」

ドスドスッ!!

……私の心に言葉の棘がまるで散弾銃のように撃ち込まれます。

「で、でもっ。その劇に出たらもしかしたら一条先輩と親しくなれ



るかもしれないし！」

「アンタに話しかける勇氣があるの？」

「うう……」

「星奈ってホントにシャイね」

当たっているだけに返す言葉もない私は、ただ黙ってもそもそと昼食をとるしかありませんでした。

それから一週間がほどたち、一端覧祭の準備期間に差し掛かってクラス内でもワイワイと準備が始められました。

ちなみに私たち1Cはお化け屋敷をすることになり、大きな白い布を裁断したりどこから手に入れたのかマネキンの首に赤いマジックで血を表現したりと、お化け屋敷の雰囲気になんか近づくように皆頑張っています。

「星奈」

ん？

何だろ……

ポイツと投げられたものを両手でキャッチしてソレを見てみると、

「キヤアアアっ!!」

思わず悲鳴を上げてしまった。だって、それは落武者の生首を模したマネキンだったんだから。

「うはは！上出来上出来」

「もうっ、やめてよゆっちゃん！」

精巧に作られた（ショーウィンドウに設置されているようなマネキンの首に髪の毛のような黒い糸をつけ顔を描いて血を足し、頭に折れた矢が刺さっている）落武者のマネキンを投げてきたゆっちゃん、本間由紀ちゃんほんま ゆきはケラケラと笑ってる。

ちなみに焼きそばパンを食べてた女の子です。

「由紀、やめなさい」

「めぐちゃんっ」

私はめぐちゃん、咲元恵ちゃんさきもと けいのもとへと駆け寄ります。ちなみに昼食と一緒に食べていたもう一人の友達で、お姉さんみたいな感じ。

「よしよし」

「うう……」

お姉さんていうか、もうお母さんみたいかも。

そんな風に賑やかに準備していた私たちのクラスの扉が、突然ガラ

ツと開いた。

「失礼するわね」

入ってきたのは赤茶色の綺麗なショートヘアの毛に赤淵の眼鏡が知的な印象を与える生徒会書記、松本先輩だった。

「蘭さんはいるかしら」

ドキッ、と私の鼓動が早くなる。きつとアレのことだ。

「人気劇のことで打ち合わせがこれからあるんだけど」

……やっぱり。

私は松本先輩のもとへと向かっていった。

「ああ蘭さん。ごめんなさいね時間取らせちゃって」

「い、いえ。大丈夫です」

「そう。なら先に会議室に行ってくれないかしら。私まだ二年生の教室に行かないといけないから」

二年生？

それってまさか

「それって一条先輩たちがいるクラスですか？」

「そうよ。あそこクラスに四人もいるから色々大変なのよね」

(うわわわあ……)

てことは、一条先輩に会える!?  
やったー!!!

会議室の場所を教えてもらった私は、逸る気持ちを抑えきれずに早速で会議室へと向かった。

ガラスと会議室のドアをスライドさせて中に入ると、既に三年生の先輩たちは設置されたコの字型の長机の席にそれぞれついていた。

「こんにちわ蘭さん。あなたはあそこに座ってね」

ホワイトボードの前に立っていた生徒会長である五十嵐先輩にそう言われて、私はいそいそと指定された席につく。

(やっぱり綺麗だなあ。五十嵐先輩)

相変わらずの美貌。

絹のように透き通った髪の毛が一層美しく見えた。

それから十分くらい経ったかという時、不意に会議室のドアが開いた。そこから入ってきたのは松本先輩を含めて五人の先輩。一条先輩の登場に嬉々としていた私だが、更に私の目を奪うような光景がそこには広がっていた。

それは。

(し、しし、執事服!?)

何故か一条先輩や垣根先輩は執事服を、橘先輩や神田先輩はメイド服を着用していた。きつとクラスの出し物の衣装なんだろうな。

席についた一条先輩はやっぱりカッコよくて、執事服を着ているせいなのか更に輝いて見える。

すると。

一条先輩と目があつた。

(……っ!!////)

しかも、手まで振ってくれてる。

でもやっぱり、私には手を振り返す勇氣なんてなくて……。

結局、黙って顔を真っ赤にしたまま俯くしかなかった。

それからは劇の練習でほとんど毎日一条先輩と顔を合わせるようになったけれど、まだ一言も話せてない。あ、ちなみに私の配役はネ

バーランドの住人だった。

一端覧祭三日前となった今日も今日とて練習練習。といってもほとんど完成に近いから、立ち位置や出てくるタイミング、ワイヤーアクシヨンのリハーサルなどが主な項目で、私なんかは出番も台詞もそんなに多くないから、今はこうして中庭にあるベンチで自販機で買ったココアを飲みながら休憩中だ。

「はあ」

劇の練習に参加してみte思ったのは、やっぱり一条先輩と橘先輩はすごく仲が良いってことだった。

( やっぱりあの二人、付き合ってるのかなあ…… )

キレイに澄んだ秋空を見上げながら、無意識にため息がでてくる。

ドカッ

いきなり私の隣で誰かがベンチに腰掛ける音が聞こえた。  
私は空からベンチの横へとゆっくり視線をうつす。

一体誰だろう。

そんなことをボンヤリと考えていた私は、その人を見た瞬間にビシッと固まってしまった。

「た、橘先輩!？」

「ん? ああ蘭さん。お疲れさま」

隣に座っていたのは、ミルクティを口にする橘先輩だった。

突然の状況に脳の理解が追いつかずテンパる私に、橘先輩は優しく笑って話しかけてくれた。

「劇の練習はどう?」

「あ……、ハイ。楽しいです」

「本当に?」

橘先輩が私の顔を見て問い掛ける。私はなんだか居たたまれなくなつて、橘先輩から逃げるように視線を逸らした。

「何だか緊張してるみたいだから。そんなに気張らなくてもいいんだよ?」

その言葉に、私はハッと橘先輩のほうを向いた。

潜在意識のどこかで、私は劇がイヤだと思っていたのかもしれない。もともと人前に立つのは苦手だし、由紀ちゃんみたいに率先してみんなを引っ張るタイプでもない。

いや、多分そうじゃない。

きつと、私は心の何処かで橘先輩に嫉妬してたんだ。

キレイだし、

優しいし、

一条先輩の幼なじみ。

そんな完璧すぎる橘先輩に。

でも、こんな私に橘先輩は優しく声をかけてくれた。

ああ、私、嫌な子だなあ……

こんな優しい先輩に嫉妬しちゃうなんて。

「一年生は蘭さんだから困ることもあるかもしれないけど、私  
や未来が話を聞くから」

「あ、ありがとうございますっ」

ああ。

どこまでもつきぬけて優しいんだ。

「あの、」

「ん？」

「橘先輩って、緊張とかしないんですか……？」

「するわよ」



「そんなんですか？」

意外だなあ。

緊張なんて全くしないと思ってた。

「だってあの衣装よ！？緊張するに決まってるじゃない！！恥ずかしくて死にそうよ！！」

持っていたミルクティの紙カップを握り潰しながら叫ぶ橘先輩。

「あはは……。あの衣装は恥ずかしいですもんね」

「死にたくなるわよ……」

顔を赤くして俯く橘先輩は、とても可愛らしかった。何だか意外な一面を見てしまったからなのか、親近感が湧いてきて最も聞きたかったことを口にしてみた。

「橘先輩」

「なあに？」

「橘先輩って、一条先輩と付き合ってるんですか？」

「げほげほっ！？」

激しくむせる橘先輩の目を真っ直ぐに見つめる。

「っ、付き合ってるわけじゃないわよ」

おどおどしながら答える先輩だけど、どうも納得いかない。

「本当ですか？」

「本当だってば」

「じゃあ、一条先輩のことどう思ってるんですか？」

「な、何でそんなこと聞くのよ」

「一年生の間で噂になってますから。一条先輩と橘先輩は付き合ってるって」

『そ、そうなんだ』と言いながら視線を逸らす橘先輩に、私はずいっと近づいて尋ねた。

「一条先輩のこと、好きなんですか？」

「……」

数秒の沈黙の後。

「……そうね」

橘先輩が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「風のこと、好きだよ」

「……やっぱりそうなんですな」

「でもね、アイツ鈍感だから全く進展しないのよ。幼なじみだからかもしれないけど」

言って恥ずかしそうに笑う橘先輩を見てたら、私も自然と口を開いていた。

「……私も、好きです。一条先輩のこと」

「……そう」

橘先輩は怒りも悲しみもせず、ただ私の言葉を受け入れてくれた。

「じゃあ、ライバルね」

ニツ、と笑う橘先輩に、私は思わずキョトンとしてしまった。

「今から私たちは友達でもありライバルよ。お互い、あの鈍感男に悩まされてるわけだしね」

言って橘先輩が差し出してきた右手に、私もゆっくりと右手を重ねる。

「よろしくね、星奈」

「……はいっ、楓先輩！」

橘先輩って、やっぱりすごいなあ。

私だったら、きっとこんなこと言えないよ。

でも、どんなに可能性が低くたって諦めない。私も一人の女なんだから。

繋がれた右手に一度視線を落とし、再度橘先輩を見て、私もニツと微笑んだ。

一端覧祭当日は、驚くほどに落ち着いていた。あれから楓先輩や未来先輩と仲良くなつてリラックステキなからなのか、今私は緊張よりもむしろワクワクしながらステージ袖で劇が始まるのを待っている。

(うわ、こんなにお客さんいるんだあ……。あ、由紀ちゃんめぐちちゃんも来てくれる)

ステージ横の幕からこっそり観客席を見てみれば、開演一五分前とあつて体育館内はお客さんでいっぱい。よくこんなに入れたなあと変なところで感心している私に、衣装を着た楓先輩と未来先輩がやってきた。

あれ？

何だか楓先輩から負のオーラが……。

「どうしたんですか？楓先輩」

楓先輩は無言でうなだれているため隣にいる未来先輩に尋ねる。

「いやあ、この衣装着てあの観客みたら恥ずかしさがメモリを振り切っちゃったみたいだね……」

アハハ、と乾いた笑いを見せる未来先輩。

「え、今更ですか？」

「らしいよ。ま、一条くんが何とかしてくれるでしょ」

「一条先輩がですか？」

「ほら、こつ見えて楓って単純だから一条くんに褒められたら絶対やる気になるよ」

「そんなものですかね？」

「そんなもんなのよ」

その時の私は半信半疑だったけれど、その後本当に一条先輩に褒められて復活した楓先輩を見て未来先輩の予想が侮れないことを知った。

本番が始まると、流石に緊張して喉が渴いてきた。ステージ上では一条先輩や五十嵐先輩が役を演じきっていて、私はそれを袖から見ながら自分の出番に備えてもう一度台詞を復習。

よし。

大丈夫。

(あ、もうすぐ出番だ)

この後一度ステージの照明が落とされ、三年生の先輩と入れ替わりで私がステージに立つ。

松本先輩のナレーションとともに、照明が落とされる。その瞬間だった。

ドオオオオン!!

体育館全体を震動させるような轟音が響いた。

(な、何!?何なの!?)

パニックになる私を、観客の悲鳴が更に後押しする。何かわからな  
いけれど逃げなきゃ、そう思い、観客の人たちと同じで体育館の出  
入口へと向かおうとすると不意にその肩を掴まれた。

涙目になりながら振り返ってみれば、

「一条先輩……?」

険しい表情を浮かべる一条先輩が目の前に立っていた。

「落ち着け蘭。俺たちが平静を失ってちゃ皆を守れないだろ」

「守る……?」

「あの爆発音が何なのかはわかんねえが良い予感は全くしない。まずは観客を慌てさせず安全に避難させなきゃいけないだろ」

ポンス、と私の頭に手を置きながら、

「お前には観客を体育館から講堂にまで避難誘導してほしい。体育館には五十嵐先輩たちが残るから、お前は講堂に行ってくれ」

頭に置かれていた手が私の髪をクシヤ、と撫でて。

「できるか?」

そんな目で言われてしまったら、答えなんて決まってる。

「……はいっ!!」

この時は始めて一条先輩と話した、なんてことは気にもとめず、ただ避難誘導に全力を注いだ。途中で由紀ちゃんともぐちゃんも手伝ってくれて、大きな混乱を起こすこともなく無事に避難を完了させることができた。

後から未来先輩に聞いた話だけど、あの爆発を引き起こしたのは一〇〇人のスキルアウトで、それを一条先輩や楓先輩、削板先輩たち

が鎮圧したみたい。

やっぱりすごいな。

一条先輩も楓先輩も。

一端覧祭初日は大変なことになっちゃったけど、先輩たちと協力して立て直し、三日目からの公演は成功させることができた。

台詞を噛みそうになっちゃったけど、上手く楓先輩がフォローしてくれたからなんとか乗りきることができた。

クラスのお化け屋敷もなかなか好評だったみたいで売上もよかったんだけど、体育館内や壊された校内の修理をするという理由で援助金はもらえなかった。

残念だったなあ。

ちなみに売上の一位はダントツで一条先輩たちの執事喫茶だったらしい。

なんでも二位に二倍以上の売上差をつけたとか。

私は執事喫茶に行けなかったから残念だったけど、行ってきた由紀ちゃんがすごく興奮していたのを覚えてる。垣根先輩の執事服姿に完全に惚れたんだって。



終わってみればあつという間だった一端覧祭。  
私も他の皆も初日の騒ぎ分を取り戻そうとするかのような盛り上がりですごく楽しかった。

何より、一条先輩と話せたのが一番の収穫かな。

楓先輩は強敵だけど、負けないんだから！

第51話 Ability-disappearance(前書き)

今話から最終章となります。

一端覧祭も終わり十二月に突入した学園都市で起きる事件とは……。

今回短いですf^\_^ ;

でわ。

## 第51話 Ability-disappearance

アクシデントに見舞われた一端覧祭もその後はこれとあった災難に会うこともなく終了し、季節は本格的な冬が到来することとなった。登下校する生徒たちは手袋やマフラーで防寒し、たびたび口から吐かれる白い息が更に冬であることを思わせる。

本日、十二月二日。

天候、曇り。

「おーっす凧」

ガラスと教室の前側ドアを開けて中に入ると、既に登校していた帝督から声が掛かる。

「おっ」

それに適当に返しながら、凧は自分の席についた。

「今日も寒いな」

「最低気温三度らしいぜ」

「誰か暖房入れてきてくれよ」

などと教室内での話し声に耳を傾けつつ、凧は携帯のディスプレイに目を落とした。

そこにはなんの知らせもなく、ただ無機質な待ち受け画面が表示されているのみである。

(……)

一端覽祭の初日から、一方通行は学校に来ていない。先生たちには研究所に缶詰とって誤魔化してあるが、実際は凧たちにも何の連絡もなく、行方を眩ませている状態だ。

「一方通行から何も連絡ないのか？」

いつの間にか背後にやってきていた帝督が問う。

「ああ、連絡もつかねえし、一体どこにいるんだか」

「まあアイツのことだからそのうちフラッと帰ってくんだろ」

帝督はそう言うが、何時もなら無愛想な一方通行であつてもメールの一通や二通くらいはしてくるはずである。まして学校を無断で二週間近く休んでいるのだ、流石に何かあったのではないかと思うようになる。

だが心配したところで自分にできることはなにもない。

そう結論づけて一旦思考を打ち切った凧は、窓の外に視線を移す。

そこにはどんよりとした雪雲が空を覆っており、まるで俺の心情みたいだな、と凧は自嘲気味に微笑んだ。

学園都市。

ここに住まう人口二三〇万人の共通知識として真っ先に挙げられるのが『超能力』だ。手から炎を出す、空間移動する、音速の三倍でコインを飛ばす、という摩訶不思議な現象をいっさいがっさい科学で解明し、学生たちの脳を『開発』することでその能力を発現させる。

学園都市外の人間から見れば、それはまるでマンガのヒーロー。自らが欲した力、望んだ力を手にして、物語の主人公であるかのように悪党をばったばったと薙ぎ倒す。

それが学園都市に行けば可能なのだと、誰もが心のうちで思いこの街を訪れる。

しかし、実際超能力と呼ばれるものを手に入れられるのは全学生の四割、さらに日常生活で便利と感じられるほどに強力な能力者はさらに少ない。大半は最初の身体検査システムスキャンで無能力者（レベル0）、『落ちこぼれ』の烙印を押されるのだ。

みんながみんなヒーローになれるわけじゃない。そんなこと、わかっているはずだ。

でも。

どうして。

俺は。

私は。

能力者になれないんだ。

俺だって。

私だって。

能力者になりたかった。

表面上では何とも思っていないようでも潜在意識で確かに存在する能力者への羨望、そして嫉妬。

全学生の六割、つまり約一〇〇万人もの学生が抱く思いが、学園都市に充満している。

そしてその不満や嫉妬が、思わぬ形で爆発することとなる。

なんでもない冬の日の、なんでもない昼下がり。

昼食後とあつて重たくなる瞼を必死に持ち上げ睡魔と格闘する凧だったが、健闘虚しく彼のノートにはミミズが這ったようなシャーペンのあとが残されていた。

その後ろでは帝督も頬杖をついて目を閉じ、向かい側では軍覇がイビキをかきながら巨大な鼻提灯を膨らませている。

うつらうつらと記憶が混同する脳で、凧はなんとなく一端覧祭のときのスキルアウトたちを思い出していた。

(アイツら……一体、どこであんなも、のを……)

キャパシテイダウン。確か以前に美琴から聞いたことがあったような気がして脳内を検索するも、寝ぼけた脳は全くもって回転しない。

(ああ、むりだ。眠てえ……)

机にふさった凧は、睡魔に身を任せてそのまま意識を手放した。

ピシッ

「っ!？」

ガバツといきなり風は頭を上げて飛び起きた。それは先生に当てられたからでも、机からずり落ちたからでもない。

今まであったものが欠落したような感覚。

不自然に冴える脳。

そして覚える違和感。

その異変を感じていたのは風だけではなく、帝督や楓、更にはクラスマートフォン全員が脳に感じる違和感に気付いていた。

「帝督……」

「風、お前もか」

「ああ。頭から何かが零れ落ちたみたいな感覚がしたんだ」



「俺も同じだ。突然脳の奥で何か弾けたみたいな小さな衝撃があった」

ふむ、と顎に指を当てて考えこむ。先程までの睡魔など吹き飛んでしまった。今が授業中だということなど気にも止めず頭に感じた異変を話し合う生徒たちによって教室内はザワザワと騒がしくなる。

そこで一人の生徒が愕然と言うのが耳に届いた。

「嘘だろ……?」

それは、風が求めていた答えでもあった。

「能力が、使えない……!??」

とある最強の水分支配

最終章  
能力消失編

第51話 Ability-disappearance(後書き)

能力消失編スタートです。

## 第52話 失ったチカラ

「能力が、使えない……!？」

寒さも厳しくなった十二月のある日。

生徒の一人が発した言葉が引金となって、クラスメートは各々能力を行使しようと演算を開始する。

が。

「ウン……」

「何で演算できなくなってるんだ！」

「能力が発動しない!？」

「どうして……」

やはり、誰も能力を発動させることができなかった。

そして、それは超能力者（レベル5）たる凧や帝督であっても例外でなく、

「……やっぱりダメだな」

「俺もだ。うんともすんとも反応しやがらねえ」

凧と帝督も能力を発動することができなくなっていた。

「どうなってんだ？いきなり能力が使えなくなるなんて……。しかも複数人が同時にだぞ」

「俺に聞かれたって解らねえよ。情報も少なすぎるし、あまり騒ぎすぎるのも得策じゃないな」

帝督の問いに首を横に振って答える風。

「……確かに。……あ、軍覇。お前はどなんだ？」

ハッと気付いたように帝督が後方にいた軍覇に言う。

彼は世界でも稀な自然に超能力を発現させた人間、『原石』だ。世界中探しても数えるほどしかない原石の中で、削板軍覇という少年は『世界最高の原石』と呼ばれている。学園都市の科学者であっても複雑すぎて調査することができない彼の脳ならば、あるいはこの理解不能な現象の影響を受けていないかもしれない。

しかし。

「ダメだ。俺も全く反応しねえよ」

拳を開いたり閉じたりしながら訝しげに軍覇も言った。

学園都市で能力開発を受けた学生だけでなく、天然の能力者であっても能力を発動することができない。

（一体どうなってんだ……？）

理解不能な事態を目の前に、必死に答えを模索する凧だったが、

ガシャアンツ！！

突然の物音によって思考を中断せざるを得なくなってしまった。

「何だ！？」

「窓ガラスが割れる音したぞ」

「何だっつてんだよ」

などとクラス内で話す声が聞こえる。

どうやら今の物音は凧たちのクラスの隣である2 Bかららしく、様子を見にいこうとしたAで授業をしていた先生が扉に手をかけた刹那。

「キヤアアアツ！！」

Bクラスであろう女子生徒の悲鳴が学園内に響き渡った。

「っ！？」

その悲鳴にいち早く反応した凧は教室を飛び出して隣のクラスの扉を勢いよく開く。

「……………!?!」

開かれた扉の先に広がっていたのは、割れた窓ガラス。規律なく乱れた机。恐怖し教室の隅に固まる女子生徒。それを取り囲む男子生徒。

そして、

暴れ回る二人の生徒の姿だった。

「どうなってるんだよ……………!!」

「あ……………、一条!」

凧の姿を認めた一人の男子がこちらにかけよってきた。

「よかった……………!一条、アイツらを、アイツらを止めてくれ!!」

「落ち着け。何があつたか最初から詳しく話してくれ」

「あ、ああ……………」

凧に宥められて男子生徒は何度か大きく深呼吸し、少し落ち着いたところで口を開いた。

「さつき、いきなり頭にピシッて何か走つたんだ。そしたら……………能力が使えなくなつて、しかもみんな使えなくなつてさ。それでみんな喋りこんでたら、いきなりアイツらが立ち上がって椅子

を窓に向かって投げ込んだんだ」

（やっぱり能力が使えなくなってるのか……長点上機<sup>うち</sup>だけ？それとも……）

そう思った凧はポケットから携帯を出して画面をスクロール、目当ての人物を見つけ通話ボタンを押して耳に当てる。

はたして、すぐに電話は繋がった。

『もしもし凧！？』

通話口越しから聴こえる声を確認して、凧は口を開いた。

「美琴か？ちよつと聞きたいことが」

『そんなことより大変なのよ！！』

「だからちよつと待って。人の話を」

『なんか常盤台<sup>つち</sup>の生徒みんな能力が使えなくなっちゃってるのよ！』

「だから人の」

『そつちは！？まさか長点上機もみんな能力使えなくなっちゃってるわけ！？』

「だーっ！！ちよつとは人の話を聞けっ！！！」



美琴の矢継ぎ早に繰り出される言葉に待ったをかけるべく凧が通話口越しに声を張り上げた。

『あ、ごめんごめん……』

あはは、と受話器越しに苦笑いしている美琴の姿が容易に想像できたが、それはともかくとして話を進める。

「やっぱり常盤台そうちでも同じことが起こってたんだな」

『同じってことは長点上機そうちも状況は同じみたいね』

「ああ。能力が使えなくなっちゃった」

『こつちもよ。いきなり頭に変なノイズみたいなのが走ったかと思つたら演算自体ができなくなっちゃったの』

常盤台中学でも長点上機学園と同じように能力の発動ができなくなるといふ現象が発生していた。

第一八学区と第七学区という離れた区画に存在している学校で同時に同じ現象が起こる。これは偶然で片付けていい問題なのだろうか。

(そんなわけないよな……これは、同時多発的な何か。もしかしたら学園都市中と同じことが起こってるかもしれない……)

「一条!」

そこまで考えて、またもや凧の思考は遮られた。遮ったB組の男子は、懇願するように凧に詰め寄る。

「は、はやくアイツらを止めてくれ!能力が使えない俺たちじゃど

うしようもないんだよ!!」

見れば机を持ち上げて暴れている生徒二人を他の男子生徒たちが必死に押さえ付けていた。

「って言っても俺も能力使えなくなっちまってるし……っ」

能力が使用できる状態の凧であれば、彼らを凍らせて動きを止めることなど造作もないことだ。すぐに事態を終息させることができるだろう。

が、今この場において凧は能力を行使することができない。いくら学園都市が誇る七人しかいない超能力者（レベル5）であっても身体能力はこれらの学生と大差ない。特別な武術の心得でもない限り、机を振りかざして暴れる学生を押さえることなどできはしない。

（クソツタレ……！能力が使えないと俺は何もできないのかよ……！！）

『ちよつと凧！聞いているの!?!』

ギリツと齒噛みする凧に通話口越しから美琴が叫ぶ。

「はいちよつと一条そことけな」

「え……?」

不意に背後から聞こえた声に振り返ってみれば。

「澤ちゃん……?」

いつもとは明らかに雰囲気の違い、2 Aの担任、澤ちゃんこと澤村が立っていた。

「一条、邪魔だ」

ズイツと風を押し退けてBクラス内に入り、スカズカと暴れ回る生徒のもとへと向かっていく。

「さ、澤村先生！」

「よし。いいぞお前ら、危ないから離れてるよ」

すると澤村は白衣のポケットに突っ込んでいた右手を出し、

男子の腹部に思いきり正拳突きを叩き込んだ。

「えええええ！？」

愕然とする風など全く気にせず、もう一人の男子にも同じように正拳突きを叩き込み、二人ともを気絶させた。

「うし。とりあえずはこれでいい。誰かこいつらを保健室まで運んでやってくれ」

パンパンと手を叩きながら言う澤村に言われて、生徒の何人かが気絶した生徒二人を担いで教室を出ていく。

『風っ!!!』

「うおー！」

通話状態のままであったことを忘れかけていた風は携帯から発せられた美琴の怒声に身体を硬直させる。

『あんだ私を居ないもの扱いしてんじゃないわよ!!!』

「あ、悪い悪い……。ちょっと騒ぎがあつてな」

『騒ぎ?』

「ああ。生徒二人がいきなり暴れだしたんだ」

『常盤台いちばんちではそんなこと起こってないけど?』

「なに?」

『うちは皆能力が使えないってざわついでるだけ……。ってヤバい。先生がこっちに来たから切るわよ』

慌てたように矢継ぎ早にそう言ったかと思えば、プツツと通話は切れてしまった。

(常盤台は何も起きてないのか……)

ふむ、と考える風に、こちらにやってきた澤村が肩にポンと手を置いて風にしか聞こえない小さな声で囁いた。

「（このあと俺の研究室まで来い。垣根や削板、橘と神田も連れてな）」

「は？」

何事かと聞こうとするも、澤村はスタスタと教室を出て下の階へと降りていってしまった。

「一体何なんだ……？」

話が全く掴めない凧は、ただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

「一年や三年のクラスでも？」

自分のクラスへと戻ってきた凧は、騒ぎによって自習となったために席を移動している帝督から話を聞いていた。

「らしいぜ。隣のBクラスだけじゃなくて一年や三年からも暴走した生徒が出てるらしい。今は教師どもが対応に当たってるが、それも時間の問題かもな」

「でも常盤台じゃそんな暴走した生徒は出てないって言ってたぜ？」

「そこなんだよな。もしかしたらこんな事態になってんのは長点上機（俺たち）だけかもしれないけど、そうだとしたら常盤台まで能力が使えなくなってる意味がわからねえ」

「能力が使えなくなるって点なら、一端覧祭の時のスキルアウトたちが使ってたキャパシティダウンを誰かが使ったんじゃないか？」  
凧の発現に、帝督はかぶりをふる。

「アレは俺たちの演算を阻害する装置だって話だろ？今みたいに演算すらできない状態を作るなんて不可能だ」

クラス内は凧や帝督と同様にこの騒ぎについての話で持ちきりだ。  
凧たちのクラスでは幸い暴走した生徒は出ていないがいつ自分が暴走するかも解らないために震えている生徒もいるが。

「ま、何にしても澤ちゃんに話を聞こうぜ。凧の話だと何か知ってる風だしな」

帝督が言い、それに同意しようと凧が口を開いた

その刹那。

校外の交差点で、轟音とともに大規模な火柱がうねりを上げた。

第52話 失ったチカラ（後書き）

感想もらえると嬉しいですm( )m



**第53話 動き出す元超能力者（前書き）**

連日投稿です。

ではお楽しみくださいm( )m

### 第53話 動き出す元超能力者

空へと向かって昇る火柱が、どんよりと曇った空を朱色に染める。その規模は教室の窓からでもはっきりとわかるほどに巨大なものだった。

「何だつてんだ……!？」

凧は窓から見える火柱を視界に捉え言葉を漏らす。

「……オイオイ。これって結構ヤバいんじゃないか？」

帝督も抱いた感情は凧と類似していた。

突然能力の行使が出来なくなったと思ったら生徒がいきなり暴れだし、止めと言わんばかりに交差点近くから上がった火柱。

これはもう異常事態であると認識せざるを得ないだろう。

「とりあえず澤ちゃんの所に行こうぜ」

ガタツと帝督が椅子から立ち上がり、軍覇と楓、未来を手招きする。

「ねえ凧……」

「今の段階じゃ情報が少なすぎて何とも言えない。一先ず澤ちゃんの所に行こう、澤ちゃんて確か専攻がAIM拡散力場だったから、俺たちが能力が使えなくなった理由もわかるかもしれない」

そう。

あんなズボラな見た目（ヨレヨレのワイシャツの上にとてもではないが白いとは言えないすすけた白衣）とは反して、我がが担任澤村の専攻科目はA I M 拡散力場である。

能力者とは切っても切り離せないA I M 拡散力場の専門知識を有する澤村ならば、この騒動の原因に辿り着けるかもしれないのだ。

「よし、なら早速澤ちゃんの研究室に行こうぜ。じゃないと

」

帝督が言いかけて、その先を遮ったのは教室に取り付けられている緊急放送用の装置から流れる音楽だった。

「!?!」

数秒の後、放送が入る。

『全校生徒に緊急連絡。学園都市各地で暴走能力者が多発、決して校舎から出ないらしいように。繰り返す』

ザワツと慌ただしくなる教室内を尻目に、凧たちは直ぐ様教室後ろ側の扉を開けて廊下へと出た。

「学園都市各地……、やっぱり長点上機や常盤台だけじゃなかったってことかよ……!」

研究室へと急ぐ凧たち。渡り廊下から見えた武装して校外へと出ていく教師、アンチスキル警備員たちの姿を見て、彼らは急いで澤村のもとへと向かった。

「っふ〜……。危なかったあ……………」

常盤台中学の教室内で凧と通話していた所を教師に見つかりそうになったが、なんとかやり過ごしてホッと一息つく美琴。だが当然、頭の中では様々な疑問が渦巻いていた。

（長点上機学園では暴れだした生徒がいるってのに、常盤台にはそんな生徒一人もいないわよね……………）

しかもこれまた愛用のゲコタケータイでネットニュースをチェックして知ったことだが、この能力者が能力を使えなくなったという一連の騒動、全くニュースになっていない。

こんな長点上機学園と常盤台という学園都市屈指の名門で発生している事態だ、当然他でも発生している可能性もあるし、暴走した生徒を鎮圧するために警備員も動員されているだろう。明らかに日常とはかけ離れていることに周囲も気付く筈だ。

であるにも関わらず、学園都市全体ではそんな雰囲気を全く感じない。

いや、少し違うか。と美琴は考える。

これは人為的に情報操作をして騒動を学園都市外部に悟られないよ

うにしている。  
つまり意図的に騒動を感付かせないようにそういった雰囲気を作り出しているのだ。

（能力者の能力消失……。もし今学園都市が外部組織に攻め込まれでもしたら、とてもじゃないけど応戦なんてできないわね）

常盤台では現在何事も無かったかのように授業がとりおこなわれているが、果たして校外はどうなのか。

いつ長点上機のように暴走し出す生徒が現れるかも解らないこの状況で、自分はこんな場所でシャーペン片手に何をしているんだ。

（夙たちはどうなったのかしら……。校外の情報が欲しいんだけど……）

そう思いスカートのポケットから端末を取り出し電源を入れるが、

（しまった……。能力が使えないんじゃないかとともにハッキングも無理か……。！）

彼女のスキルである電磁波や電気信号を利用したハッキングも、能力が使用できなければ行使することなどできない。

（授業も抜け出せない、情報も集められない。……。まさに八方塞がりね）

身動きが取れないこの状況下においてしかし、御坂美琴という少女に『諦める』という選択肢は存在しない。

ハードルが高ければ高いほど、道が険しければ険しいほど。

それを打破したいと思うのが御坂美琴という人間である。

(上等じゃない……!!)

しんと静まり返った教室内に響くのは、カリカリとシャーペンを走らせる音。

その音に混じって、僅かにカコカコと携帯のキーを叩く音。

御坂美琴の戦いが静かに幕を開けた。

ドバンツ!!

と勢いよく研究室の扉を開けた先に待っていたのは、呑気にコーヒーをすすする担任、澤村だった。

「お、来たかお前ら。どうだ一杯飲むか？」

「呑気だなオイ!!」

凧渾身のツッコミを華麗にスルーし、自身の少し大きめのデスクに澤村は腰掛ける。

「冗談だ。まあまずは座れ、話はそれからだ」

言われて凧を含む五人は予め用意されていたパイプ椅子にそるぞれ

座る。

「聞きたいことはわかってる。お前らの能力が使えなくなった原因が知りたいんだろ？」

「ああ」

「率直に言っただけにも根本的な原因はわからん」

「澤ちゃん専門がA I M拡散力場だろ？何か解んねえのかよ」

帝督の問いに澤ちゃんこと澤村は一拍おいて、

「確かにこの一連の騒動にA I M拡散力場が関係してる可能性は高い。しかもこの能力の消失は学園都市各地じゃない。ほぼ全域で起こってる」

「学園都市全域で!？」

五人全員が驚愕する。

「何故かニュースには挙げられてないが、これは学園都市上層部が隠蔽しようとしてるからだろうな」

「どういうことですか？」

これまで黙っていた楓が尋ねる。

「学園都市ってのは言っちゃえば科学的かつ人口的なプロセスを経て組み上げられた超能力者養成機関だ。『超能力』なんてもんを大

々的に公表して開発してる以上、超能力者が能力を使えなくなりま  
したなんて学園都市を根本から否定してるようなもんだ。そうでな  
くても外部組織に情報が漏れるのは避けたいだろうしな」

「なるほど……」

納得した楓の隣で、凧が言う。

「能力が使えなくなったのは、何が原因なんだよ」

「もしAIM拡散力場が関係してるとしたら、それを利用して各個  
人の能力に干渉してるのかもしれないな」

「一体どうやって……？」

「能力が使えなくなる瞬間、何か異変を感じなかったか？」

「……あつたとすれば頭の中に何かが割り込んでくるみたいな感覚」

「脳か……。なら高周波や超音波の類いかもしれないな」

「人間じゃ聞き取れない超音波の音波で俺たちの脳内をぶっ壊した  
ってことか？」

帝督が会話に割って入る。

「ぶっ壊した、というよりは『自分だけの現実』パーソナルリアリティを認識できなくな  
った、というほうが言い回し的には近い気がするがな」

ズズツ、と澤村は冷めかけたコーヒーをすすする。



「もう一つ。暴れ出した生徒についても聞きたいことがあるんだ」

「何だ？」

「長点上機で暴れ出した生徒は何人くらいいるんだ？」

「ざっと五十人てとこだ」

「常盤台は誰も暴走してないらしいんだよ」

凧の言葉に、澤村はやっぱりか……とため息をついた。

「実はな、うちの学園で暴走した生徒つてのは全員漏れなく無能力者（レベル0）なんだ」

「……」

それで腑に落ちたと凧は納得する。

美琴が在籍する常盤台中学は在校生全員が強能力者（レベル3）以上という超エリート学校だ。

対する長点上機学園もエリート学校であることに間違いはないのだが、この学園は別段能力者じゃなくては入学できないわけではない。情報処理や運動能力など、一芸に秀でていれば充分にやっていけるのだ。

その無能力者が、能力者が能力を失った途端に暴走するようになった。

ここから導き出される答えは。

「俺たちが能力を使えなくなった“何か”が影響して、無能力者が暴走したってことか……？」

「何分この状況じゃ確定とは言えないが、もし仮に能力を使用できなる音波を流したとして、それを聞いたレベル0が暴走する可能性はある」

「どうやって？」

「能力者の脳内に作用する音波つてのは無能力者の開発しきれない脳には負担が大きいだろっな。そうでなくても普段は演算で使用しない部分に強引に作用させちまうんだから」

まあ、と残っていたコーヒーを飲み干して澤村は続ける。

「今話したのはあくまで推測にすぎん。深読みしすぎても現段階じゃ情報が少なすぎてどうしようもないからな」

「じゃあ俺たちはどうしたらいいんだよ」

「おそらく校外はスキルアウトみたいなレベル0で溢れてる。今は学園内で待機するのがいいだろうな」

「でもそれじゃ騒動の解決には繋がらない！！」

「冷静になれ一条。超能力者（レベル5）のお前も能力が使えなきやただの高校生だ。そんな一介の学生が暴走したスキルアウトや学生と立ち回れるってのか？」

「ッ……」

「凧……」

心配そうに凧を覗き込む凧に、凧は一度視線を合わせる。

「……でも、」

凧がなお食い下がろうと視線を凧から澤村に戻したのとはほぼ同時、

ポケットに仕舞っていた携帯が震動し、  
長点上機学園の校門をガンガン叩く金属音が鳴り響いた。

「何だぁ!?!?」

「きゃぁぁ!」

帝督や未来が慌てる中、凧は携帯を取り出して表示に目をやる。

(美琴からか……?)

そう思いながら視線をディスプレイに落とすと、そこには予期せぬ人物の名前が表示されていた。

「アクセラレータ一方通行……!？」

第53話 動き出す元超能力者（後書き）

はい。

なんだか理屈っぽくなってしまった回ですが矛盾点がないか心配です（^| ^:）

しっかり調べておかしくないようにしたつもりですがもしかしたら矛盾するところがあるかもしれません（- -:）

もしあれば指摘していただけると有難いです。

感想などもお願ひしますm（| |）m

第54話 それがどうした(前書き)

連日投稿です(^| ^)  
でわ。

## 第54話 それがどうした

「アクセラレーター一方通行……!?!?」

凧の携帯への着信は、音信不通であった一方通行からのものだった。

「もしもし?お前、今どこにいるんだよ!?!?」

通話口越しに言うと、少しして反応があった。

『……悪い。連絡しなかったことは謝る』

「そんなことはいい。どこにいるんだ?」

『学園都市に居る。心配すんな。それよりもだ、今起こってる事件は知ってるよな?』

「……ああ、能力者が能力を失ってることだろ」

『そオだ。凧、今回のこの事件には関わるな。例えそれが『ファルコン』としての任務だとしてもだ』

「何?」

『ただでさえ能力が使えねエんだ。無理して首突っ込むことはねエ』

「待てよ。それはお前だっで一緒だろ?」

『……俺を誰だと思ってやがる。学園都市最強の超能力者、一方通行だ。規格外なんだよ俺はな』

凧には一方通行が自分たちを巻き込まないように遠ざけようとしている風にしか思えなかった。

もしかすると、一方通行はこの事件の根幹に関わっているのかもしれない。

「ハッ、能力が使えない一方通行なんてただのヒョロモヤシじゃねえかよ」

こんな軽口が出てくるのは、きつと凧自身分かっているからだ。

一方通行の思いを。

『お前に言われたくねエよ凧。……とにかく、絶対だ。絶対に学園から外に出るんじゃないぞ』

凧の返答を待つことなく、一方的に通話は切られた。凧はゆっくりと携帯を閉じ、心中で一方通行に謝罪する。

(悪いな一方通行……。指をくわえて見てられるほど、俺は大人じやねえんだよ！)

携帯を乱暴にポケットに滑り込ませ、澤村に背を向けて凧は走り出す。

「一条!!どこに行くつもりだ!!」



「ごめん澤ちゃん！やっぱ黙って見てるなんて俺にはできない！！無理矢理暴走させられてる能力者がいるってんなら、それを助けてやりたいんだよ！！！」

「お前は能力が使えないんだぞ！！！」

「そんなこと解ってる……。でも、」

凧は一度立ち止まり、制止する澤村のほうへと向き直って断言する。

「それがどうした」

「！！！」

「能力が使えなくなっただって俺は俺だ。こんな状況に陥ってるってのに、見過ごせるわけねえだろ！」

凧の瞳に、迷いなど存在しなかった。

「ま、そーゆーことだわ」

ポン、と凧の肩に手を置きながら、澤村に向かって帝督が言う。

「止めてもムダだぜ澤ちゃん。俺も凧も、黙ってられるわけねえだろ？」

「俺もだぜ澤ちゃん！！能力が使えなかるうが、俺は根性で何とかするからな！！！」

結局、考えていることは五人とも同じだったわけである。

このまま学園に留まったところで、危険度は大して変わらない。現在だって校門では警備員アンチスキルが暴走した無能力者（レベル0）の対処に追われているのだから。

「はあ……………」

クシャツと髪の毛を搔いて、澤村は諦めたかのようにため息を一つ。

「……………分かったよ。お前らを止めてもムダだったことは、よく分かった」

「澤ちゃん……………」

「だが忠告だ。今の学園都市は暴走能力者で溢れてる。さっきの火柱を見ただろう？おそらく無能力者が“何か”の影響を受けて演算に必要な回路が無理矢理こじ開けられて能力が暴走してるんだ。くれぐれも戦おうなんて思うんじゃないぞ」

「……………ああ」

「それから神田」

「はい？」

凧と会話していた澤村は視線を未来のほうへと向けて、

「お前は残れ」

「何で!？」

ガーン!!

とシヨックを受けたように未来が叫ぶ。

「コイツらが動く以上バックアップは必須だ。俺とお前でコイツらをサポートすんだよ」

「何で私が!!」

「お前パソコン得意だろ？」

「イヤ!! 私は削板君に付いてくんだもん!!」

「まあまあそんなつれないこと言うなよ」

軍覇と離れることに極大な不満を漏らす未来だが、そんなことはお構い無しに澤村は未来の肩を掴んで離さない。

「気をつけてな」

ヒラヒラと手を振る澤村と絶望にうちひしがれる未来を研究室に残して凧、帝督、軍覇に楓の四人は校外に出るべく昇降口へと向かった。

(うがああああ！！)

校外で発生している一連の騒動などまるで無いことであるかのよう  
に優雅に授業が進められる常盤台中学。その教室内の一角で少女、  
御坂美琴はイライラしながら端末のスイッチを強引に切った。

(何なのよあのセキュリティ！能力さえ使えればあつという間なの  
にいいい！！)

うがあああ！と頭をかきむしる美琴にクラスからは好奇の視線が向  
けられるが、そこは常盤台のエース。極上の作り笑いでその場をや  
り過ぎした。

(ダメだわ……、私じゃこれ以上の情報は集められない)

能力が使えない美琴が端末を使って得られた情報は三つ。

一つはこの能力者の能力消失が学園都市中で発生していること。

二つ、無能力者(レベル0)の学生が暴走してしまうこと。

三つ、このことを上層部は外部に隠匿しようとしていること。

(まずは何で能力が使えなくなったのかを調べないと……！)

だが現在の美琴ではどう足掻いてもこれ以上の情報を収集するこ  
とができない。

これより先には、より専門的な技術を擁する人間が必要だ。

能力が使えなくても情報収集能力が高く、尚且つ無能力者(レベル

0)でない。

美琴はそんな人物に心当たりがあった。

「先生、」

「どうしました？御坂さん」

端末と携帯をポケットに仕舞ったまま手を挙げて立ち上がる。

「ちょっと頭が痛いので保健室に行つてきてもいいですか？」

「まあ大丈夫ですか？行つてください」

ありがとうございます、と先生に軽く頭を下げて美琴は静かな教室を出る。

向かう先は、保健室がある南側とは正反対。  
昇降口のある北側だ。

先生に見つからないように早足で移動しながら美琴はポケットから携帯を取り出し、目当ての人物の番号を見つけて通話ボタンを押す。

数回のコールの後、電話は繋がった。

「もしもし、初春さん？」



第54話 それがどうした(後書き)

初春参戦。

佐天は……？

超電磁砲組は登場予定です(^w^)

第55話 陥落の五本指（前書き）

お待たせしました（＾Ｏ＾）



## 第55話 陥落の五本指

能力者の能力消失。

無能力者（レベル0）による能力の暴走。

この二つが同時に発生した場合、これまで学園都市で築かれていた力関係は瞬く間に逆転する。

置かれた状況は、正にそれだった。

元々学園都市で力を持ち、上流に位置していたのは長点上機や常盤台のようなエリート校に通う高レベルの学生だ。

外部で力を持つ不良やチンピラのような素行の悪い連中は、学園都市内に限って力を持たない。

否、持てない。

『超能力』というオカルト紛いの不確かなものを科学の力で無理矢理解明し学生の脳に植え付ける。

ここまで大々的に公言している以上、学園都市ではやはり能力者ありきという風潮が存在している。当初は夢と希望に溢れて学園都市にやってきた学生も、無能力者と判断されやがてはスキルアウトへと成り下がる。

そんな学生が全てとは言わない。が、学園都市には一八〇万人の学生が居住し、その実に六割が無能力者（レベル0）である。

つまり今現在。

学園都市には約一〇〇万人の暴走能力者が発生している計算になる

。

「え……避難？」

長点上機学園の1 Cの教室内で教師から言われた言葉に、星奈は思わずおうむ返しのように口を開いた。

「ほら星奈。行くよ」

他の生徒が教師の言葉に従って次々と席を立ち移動を開始するよう  
に、隣の由紀も星奈に声をかける。

「ゆっちゃん……」

「幸いうちのクラスにはまだ暴走するやつは居ないけど、隣のクラスは四人も暴れだしたやつがいるんだ。仕方ないさ」

「でも、」

何だか腑に落ちない。

そんな気持ちが心中で渦巻いていることに、星奈自身も気が付いていた。

「星奈、体育館に行こう？」

逆隣から恵も声をかけるが、星奈は体育館内への避難に意味があるとは思えなかった。

（体育館に避難したって、暴れだす人はきつと出るよ）

「星奈？」

由紀の声に、星奈はバツと椅子から立ち上がる。

とりあえずは誘導に従っているが、隙があれば抜け出してしまおうか、とシャイな彼女としてみれば大胆な思惑を胸に教室を出る。

そしてその思惑は、すぐさま実行されることとなる。

理由は簡単。

星奈は見てしまったからだ。体育館へと移動するために通った渡り廊下の窓から、昇降口への階段を駆け降りていく凧たちの姿を。

（一条先輩！？）

そこからの星奈の行動は早かった。

直ぐ様体育館へと向かう生徒の列を離れ、反対方向である昇降口へと駆け足で向かう。

「星奈!？」

「ちよ、どこ行くだよ!!！」

その様子を目撃した恵と由紀も星奈につられるようにして列から離れ、その後を追った。

受話器越しに聞こえる切羽詰まった声に、やはりここでもか、と美琴は内心で舌打ちした。

『御坂さん!？ 大変なんです、佐天さんが！ 佐天さんが!!！』

言われて美琴は思い出した。底抜けに明るい性格をしているからつい忘れがちになってしまっているが彼女、佐天涙子もまた超能力者に憧れる無能力者（レベル0）だということ。

「まさか佐天さんも……?」

『急に頭を抱えて苦しそうにし出したと思ったら、いきなり倒れちゃって……!!！』

「倒れた……？」

まさか佐天さんは、暴走を自らの内に強制的に封じ込めようとしたのだろうか。

レベルアップ幻想御手事件の時も意識を失っている佐天さん。やはりそれも、無能力者ゆえの能力者への憧れ、嫉妬が原因だった。

いつも笑顔で明るい、そんな佐天が美琴は好きだった。

『今柵川中学は大混乱なんです！どうにか抜け出してジャッジメント風紀委員の支部まで行きたいんですけど、暴走した人たちの対処でアンチスキル警備員も出払っちゃって校内の治安は最悪なんです！！』

初春の声は、電話越しでもはっきり分かっってしまうくらいに、震えていた。

その声を聞いた瞬間、美琴の中で何かが弾けた。

目的が完全に切り替わった瞬間でもあった。

（佐天さんを、初春さんを……。こんなに苦しめるのは、どのくらいだ……！！）

暴走を必死で抑えるため、脳の処理が追い付かなくなって意識を失った佐天さん。

自分の周りで友達が次々と暴走し、一番の親友が倒れた。怖いはずなのに、それでも風紀委員ジャッジメントとしての責務を全うしようと思える初春さん。

（誰だ……）

胸の内から沸々と沸き上がる紅蓮の感情。

（私の大切な友達を苦しめるのは……）

こんなにも、怒りを感じる。向ける矛先は。

（誰が皆を……！）

事件の真相を暴くという当初の目的は完全に切り替わり、この一連の黒幕を突き止めることに全力を注ぐと決めた。

「初春さん。できるだけ早く抜け出して支部に来てくれる？初春さんの力が必要な」

『は、はい！すぐに行きます！！』

勇む初春の声を聞き届けたあと、美琴はゆっくりと携帯をポケットに仕舞う。

バチッ

髪の中から無意識に放たれる青白い紫電が、彼女の怒りの限界を現していた。

「で？ 一体どこを目指すつもりなんだよ風」

澤村の研究室を出た風たち四人は一先ず学園を出るため昇降口へと走る。

学園内では先程放送によって体育館への避難命令が発令されたため押し寄せる人並みを掻き分けながら。

「本当は近くの風紀委員の支部に行ければいいんだけど、大塩も他の仕事に駆り出されてるみたいだし、少し遠いけど白井や初春たちの支部に向かおうと思う」

「でも外には暴走した能力者が大勢いるんじゃない……」

風の提案に不安げな声を漏らす楓。それに対して風は心配ないとも言うように言う。

「だな。だから第七学区に向かう前に長点上機つちの隣にある警備員アンチスキルの詰所に行こう。そこでゴム弾とか警棒を拝借できるはずだ」

「パクるの間違いだろ」

「それは今更な発言だぜ帝督」

一階に下りる階段を駆け降りながら、凧は続ける。

「さっきの火柱見ただろ。多分暴走した無能力者は能力を使える。理由はよくわからねえけど、警備員アンチスキルが出張ってる以上ハツキリ言っ  
て戦闘は避けられないと思っただほうがいい」

「そうなたら能力が使えない俺たちじゃ太刀打ちできねえな」

「ああ。だからあくまでも拝借する警棒やゴム弾は闘うためじゃない。そこから逃げるために使うんだ」

おそらく暴走した無能力者には身体的な制限リミッターは存在しない。そうでなければ、能力が使用できるようにはならない筈だ。本来人間は脳からの信号によってその潜在能力は一割、よくて三割程度に抑制されているが、今回の無能力者の暴走。これは能力者が演算を不可能にする何か特殊な超音波、または高周波の影響を無能力者が受けて発生したものだと思はれている。

（きっとその超音波か何かを学園都市中に蔓延させてる装置があるはずだ。それさえ見つけて破壊できれば……！）

そんなことを脳内で考えながら下駄箱からローファーターを取り出して履き替えていると、



「い、一条先輩!!」

不意に背後から聞いたことのある声が。

反射的に振り返ってみれば、そこには一端覽祭で知り合った後輩の姿があつた。

「蘭!?!お前こんなところで何してんだよ!?!」

それは凧にもバツチり当てはまる質問だが、自身はそれに気付いていない。

「あ、あの……。一条先輩がこっちに走っていくのが見えて……。だから、」

口ごもりながらも自らの思いを伝えようと星奈が口を開いた、その矢先。

昇降口のガラス製の扉をぶち壊して、無能力者（レベル0）であるう暴走能力者数人が押し寄せてきた。

「っ!!!警備員の足止めは効果無しってことかよ!!!」

凧は舌打ちし、昇降口から離れるべき正門とは逆方向に位置する裏門へと向かって走り出す。正門近くに在る警備員の詰所からは遠ざかってしまつがこの際仕方がない。

今この場で戦闘になってしまつよりは遙かにマシだろう。

「走れ！今の俺たちじゃアイツらを止められない！！今はとにかくアイツらを撒かないと！！！」

オロオロと狼狽える星奈の手を強引にとつて、凧たち七人は裏門へ繋がる通路をひた走る。

「まったく最近うちの学校スキルアウトやら無能力者やら、狙われすぎじゃねえのか？」

半ば呆れるように帝督が言う。背後をチラリと見てみれば、しつかりと三人の暴走した無能力者が追ってきていた。

「言えてるな。確かにうちや常盤台何かは狙われ過ぎてる」

「もしかしたら一端覧祭のアレも何か関係が　　　　ってうお！？アイツ炎投げつけてきやがった！！！」

轟！！

という唸りを上げて暴走能力者の一人が手の平大の炎を投げつける。チリチリと肌を焼くイヤな感覚を覚えながらもそれを間一髪で交わしながら、凧たちは裏門へ繋がる廊下の曲がり角に差し掛かる

が。

ダダダダッ！！

と無数の足音が曲がり角の向こうから聞こえ、それが暴走能力者であると瞬時に察知した凧はすぐ横の二階へと続く階段を駆け上がる。

全員が階段を上りきったところで顔だけだして一階を見てみれば、やはり現れたのは自我を失ったレベル0だった。それも一人や二人ではない。十人程度居るのではないだろうか。

「オイオイ……、」

凧は額から垂れる汗にも構わず、

「どつやって長点上機学園（こ）から抜け出せばいいんだよ……！！」

募る焦燥、長点上機学園の北舎は完全に暴走能力者によって墮とされていた。

第55話 陥落の五本指（後書き）

何やら物騒な事態になってきましたf^| ^ ;

次回はもっと物騒になってしまおう予定です。

## 第56話 学園からの脱出

突然だった。

脳内の至るところが悲鳴を上げた。

だが、苦しくなどなかった。寧ろ清々しいほどの爽快感が全身を包んだ。

嗚呼。

俺は。

私は。

能力者になれたんだ。

恋い焦がれ。

待ちわびた。

これで落ちこぼれだと周囲から蔑まれることも、自らに劣等感を感じることもない。

そうだな、先ずは。

俺たちを、私たちを。

散々見下してきた、能力者たちに一泡吹かせてやるうじやないか。

学園都市中の無能力者（レベル0）の意識が、思考が纏め上げられる。それがまるで、己が意思であるかのようだ。

纏め上げられた約一〇〇万人もの狂気が、元能力者へと襲いかかる。自分が知らず知らずのうちに踊らされているということなど、夢にも思わずに。

甘かった。

内心で舌打ちしながら少女、御坂美琴は毒づいた。

常盤台中学を裏門を利用して抜け出したまでは順調だった。

しかし、第七学区の大通りには目を見張る数の暴走した無能力者（レベル0）が溢れ、建物の陰に隠れた美琴はそこから動けなくなってしまうていた。

(そうよ……、よく考えたらこの学区が一番学生が多いんじゃない……!!)

ここ第七学区は中高生が中心に住む学区だ。『学舎の園』のように高級感溢れた建造物もあれば、スキルアウトが好んで根城にするような寂れた裏路地まで雰囲気は雑多で、故に様々な学生がこの学区に集結している。

(これじゃ ジャツメン風紀委員の支部まで行けないじゃない……!!)

もどかしさに唇を噛み締めるも、周囲には大勢の暴走能力者。

いくら超能力者(レベル5)の超電磁砲レールガンと言えども能力を行使できなければただの中学生。

腕力などで暴走し制限リミッターが外れた男子学生に敵うはずもない。

進むことも出来ず、かといって後退することもできない。

(どうする……? もう強行突破で突っ切るか……)

元来勝ち気な美琴だ。守りに入るといふのは得意ではない。

いつに来るかもわからない好機チャンスを待つよりも、自らの手で好機チャンスを作り出す。

彼女が出した結論は、しかし、目の前に現れた少年によって結局のところ好機チャンスが訪れるという結果となった。

「え……?」

目の前で繰り広げられる戦闘。大気が軋ませる風も、大質量を誇る巨大な水も、現れた少年は何事もないかのように避ける。

そして、その手を暴走能力者へと向けて。

殲滅はあっという間だった。圧倒的な実力差によって暴走能力者は見事に全員気絶させられている。

建物の陰からその一部始終を目撃していた美琴だが、完璧としか言い様がない光景だった。

（急所は外しつつ的確にダメージを与えられる箇所を最小限の動きで……、スゴい……）

その戦闘技術の高さに舌を巻きながらも、同時に美琴はその人物に見覚えがあったことに驚愕していた。

（アイツは……、）

「オイ」

どつちら向こうもこちらの存在に気がついていたらしく、カツカツと歩いてくる。

どこまでも白い髪。

血よりも紅い双眼。



「こんな所で何してんだオマエ」

美琴の前に立つ人物、一方通行は気だるそうに呟いた。

「くそ、これじゃ外に出られねえ……!!」

長点上機学園北舎の二階階段付近。正門と裏門から雪崩れ込むようにして侵入してきた暴走無能力者によって進路を塞がれてしまった凧たち。

脱け出すには正門、裏門の何れかに向かわなくてはならないが、そこから暴走能力者が侵入してきたことを考えるとそこを使うのは好ましくない。

(かといってアイツらがここから離れるまでこの場で待機ってのもリスクが高すぎる……!!)

そんな折。

不意に凧の携帯から着信音が鳴り響いた。

「……！」

バツと携帯を取り出して直ぐ様通話ボタンを押す。もしこの音が暴走能力者に聞こえてしまっていていけば、いきなりの修羅場が待っているからだ。

そんなピリピリとした場の雰囲気になくそぐわず、通話口から聞こえてきたのは危機感ゼロの陽気な声だった。

「おっ、繋がった。どうだ一条、うまく学園からは脱け出せたか？」

思わず携帯を握り潰してしまいそうになりながらも何とかそれを押し留めた凧は周囲を気にしつつも口を開く。

「脱け出すも何もねえよ。正門の警備員アンチスキルのバリケードも突破されちゃったみたいだし、裏門からも暴走した無能力者（レベル0）が校内に侵入してやがる。これじゃ脱け出すに脱け出せねえ」

「やっぱりか。校内の監視カメラの映像を見たが北舎はほぼ暴走能力者によって陥落したと見ていいだろう。生徒は体育館に避難させているから問題はないが……、お前ら今どこにいるんだ？」

「裏門前の廊下のところにある階段を二階まで上がったところ」

「よし、いいか。今から俺と神田でお前らを校外までナビゲートする。神田に校内の見取図を橋の携帯に送信するから指示してくれ」

言われて風は楓に携帯を開くように言い、再び携帯を耳に当てる。

『まずは四階まで上げれ』

「四階？裏門や正門は一階だろ」

『そこはもう使えない。暴走能力者が溢れ返ってるからな』

「じゃあどうするんだよ」

『四階の渡り廊下を使って南舎に行け。そこから学食の搬入口のある一階まで下りろ』

「南舎に暴走した無能力者は？」

『今のところは数人だ。周囲を警戒してさえいれば大丈夫だろう』

現在風たちが居る北舎二階階段の踊り場付近に暴走能力者の姿は見えないが、おそらく一階は無数の暴走能力者が蠢いているだろう。

となると残される選択肢は上だ。

「……わかった。なら澤ちゃん、学園を出るまでのナビゲートを頼む」

『任せておけ』

風は携帯を通話状態のまま制服の胸ポケットに滑り込ませ、帝督たちのほうへと振り返る。

「今から四階の渡り廊下に向かう。そこを渡って南舎に向かうんだ」  
「南舎……、ってことは学食とか運び入れる搬入口から脱け出すってことか？」

流星は学園都市第二位の頭脳を持つ男、垣根帝督。理解が早いのは楓や星奈たちも同様らしく、皆一様に頷いてみせた。ただ一人、削板軍覇を除いて。

一人頭上にクエスチョンマークを浮かべる軍覇はそのままに、凧たち七人は四階へ行くために階段を駆け上がる。

時折窓ガラスが割れる音が耳に届くが、今はそれを気にしている暇はない。

一刻もはやく学園を出て警備員アンチスキルの詰所へと赴き暴走無能力者への対抗手段を手に入れなくてはならない。

ここまで能力が使えないことが不便なのか、と走りながら凧は小さく舌打ちした。

今更ながら学園都市という街の規格外さに驚かされる。

たった十年やそこらこの地に住んだだけで、『超能力』というオカルト紛いの存在を当たり前のように受け入れ活用しているのだからチラリと窓から外に目をやれば、暴走した無能力者（レベル0）の仕業であるう黒煙がもうもうと立ち込めていた。

（学園都市は一体どうなっちまうんだ……！？）

日常とはかけ離れた現実を前に、先程よりも大きな舌打ちをするこ  
とで少しでも平静を取り戻そうとするも、押し寄せるのは不安と焦  
燥。

そんな思いを押し留め、凧たちは一路四階渡り廊下を目指す。

学園都市には学生たちの目には決して触れることのない『闇』が存  
在する。

勉強に励む通常の学生とは無縁の、足を踏み入れることのない暗闇。  
その『闇』に住まう者は、皆が皆そこに居ることを望んだわけでは  
ない。どうしようもなく闇へと堕ちた者も少なくはないだろう。

しかし、例えどのような理由であっても一度『闇』へと堕ちた人間  
は再び『表』の世界に戻ることはできない。

それは書類上、あるいは事実上であっても同義だ。

まるで片道切符のように、帰りは用意されていない。そんな学園都市の『闇』の最下層に住まう住人。

『最下層の住人』  
アンダーレイヤー

彼らは書類上、事実上ともに永久に『表』の世界に戻ることはできない。光の下を歩くことができない。

「どうだった？」

第七学区のとある廃ビルの地下、真っ黒な日傘をクルクルと回しながら錆びれた椅子に腰かけて少女は問い掛ける。

その部屋に静かに足を踏み入れてきた青年は、その問いに対して静かに答えた。

「問題ないよ。ここの装置は正常に作動した。学園都市中に蔓延したAIM拡散力場を介して、能力者は能力を失った。計画通りだ」

白衣を纏った青年は口元を吊り上げ、割れた窓から外を見る。

「もう少しなんだ……」

「葵……」

「もう少しで、僕らの悲願は果たされる」

その瞳には、憎悪だけが色濃く写し出されていた。

第56話 学園からの脱出(後書き)

新キャラ参戦(＾O＾)

葵というのは超重要キャラです。

感想お待ちしてます(＾W＾)



## 第57話 根幹へアクセラレータ

『その通路を右に曲がって美術室まで行け。あと十四秒で暴走した能力者と入れ違いになる』

アンチスキル  
警備員の詰所へと向かうため長点上機学園からの脱出を目指す凧たちは、現在南舎三階の美術室付近にまで来ていた。

長点上機学園は総生徒数一〇〇〇人にのぼる超巨大学園だ。それに比例して校舎の規模も大きいため、移動にもそれなりの時間を必要とする。

「美術室を越えたら直線距離で三〇メートル先にある階段を上がって渡り廊下の近くに出られるわ」

神田から送信された校内のマップをホログラム映像で確認しながら楓が言う。

「今のところは順調だな。このまま行けばスムーズに脱け出せるかもしれないねえ」

凧の隣を走る帝督が余裕そうに言うが、

『油断するんじゃないやねえぞ垣根。監視カメラでチェックしてるからって死角に暴走した能力者が居ないとは限らないんだから』

直ぐ様澤ちゃんから釘が刺された。

確かに安心できる状況などでは到底ない。いくら各場所に設置された監視カメラでおおよその暴走した無能力者（レベル0）の現在地

は掴めるとはいえ、やはりそれもおおよそでしかないのだ。

同じく五本指の一角、超お嬢様学校である常盤台中学のように十メートル間隔で監視カメラや赤外線センサーが設置されているというのであれば安心もできるが、生憎と長点上機学園はそうではない。

必ず存在する死角からもしも暴走した無能力者が現れた場合、凧たちが全滅するという可能性だってあるのだ。

「な、なあ。これって結構やばい状況なんじゃないのか？」

「う、うん。何だかよくわかんないけど……」

凧たちの後ろを走る由紀が、隣を走る星奈へと尋ねる。彼女たちは半ば無理矢理凧たちと行動をとる事となってしまうため、凧や帝督らの会話からおおまかな全体像しか理解できていないのだ。

出来ることなら凧にどういふことが説明を求めたいが、如何せん切羽詰まったような姿を見てしまっただけでは尋ねるに尋ねられない。

「（どうやら私たちが能力を使えなくなった音波か何かの影響で無能力者が暴走してるみたいね）」

由紀とは逆隣を走る恵が冷静にそう言った。

「（それと長点上機学園から脱出するのは何の関係があるの……？）」

「（多分この事態は学園都市中で発生してるんじゃないかしら。もしそうなら能力が使えない状態で暴走した無能力者と鉢合わせたら

一貫の終わり。だから一条先輩たちは防具や武器がある警備員アンチスキルの詰所に向かおうとしてるのよ」

「さ、流石めぐちゃん……。頭良いね」

「（このくらいなら誰でもわかるわよ）」

私解らなかったんだけど、という自虐の念は心中に留め、星奈は凧の背中を追う。

そんな時だ。

不意に、その背中が停止したのは。

凧が停止したことで帝督や軍覇、楓も足を止め、それにつられて星奈たちも立ち止まる。

（一条先輩……？）

何故立ち止まったのか疑問に思い覗き込むようにして前に視線を向けて、ようやくその理由に星奈は気がついた。

「……ったく」

凧は前を向いたまま、持ったままの携帯の通話を切った。

「何だよ澤ちゃん……。このルートには居ないんじゃないの？」

四階へと上がる階段前の通路で立ち止まった凧たちの目の前には、自我を失った無能力者（レベル0）の学生たちだった。

「一方通行……!?!」

第七学区の大通り。建物の陰から飛び出した美琴は、目の前に立つ白髪の少年に向かって駆け寄った。

美琴も凧から一端覧祭以降一方通行の行方が分からなくなっているということは聞いていたためいきなり現れた一方通行に心底驚愕していた。

「こんなトコで何してんだよお前。今の学園都市の状況解ってねエのか？」

「わ、分かってるわよ!!」

小馬鹿にするような物言いに反射的に反論する美琴だが、一方通行は全く気に留めず、

「……さっさと避難場所に戻りやがれ。さっきで解つただろ。能力が使えねエ能力者なんか、ただのガキでしかねエってことがよ」

それは、一方通行なりの美琴を気遣ったの言葉だったのかもしれない。『能力が使えないのだから安全な場所で待機している』という

意味を含んだ、彼なりの優しさだったのかもしれない。

だが、彼はここで致命的なミスを犯した。

美琴の性格を理解していなかったのだ。

「……アンタ、私が役立たずだって言いたいのかしら……？」

バチッ

と髪の毛先から漏電させる美琴。

「そうは言ってねエだろオが。俺はただ」

「うっさいわね！！私はこんな所でグズグズなんかしてらんないのよ……！」

先程までの勝ち気な表情から一転、その顔が悲痛に歪んでいく。

「はやく、はやくこの事件を解決しないと……っ」

能力が使えなくなってしまった自分のためではなく、意識を失った大切な友達のために。

御坂美琴は立ち止まるわけにはいかない。

そして、それを一方通行は痛いほどに理解してしまった。

(…………チツ)

本来自分はこの柄ではない。そんなことは言われるまでもなく解っている。

だからこれはほんの気まぐれ。

学園都市第一位の、ほんのちょっとのおせっかい。

「…………どっだ」

「え…………？」

「お前が行きたい場所はどっだって言ってんだよ」

「どっだって…………」

「連れてってやるっつってんだよ」  
「相変わらず無愛想に。」

「俺が連れてってやる」

それでも彼は、少女をほっではおけなかった。

「…………風紀委員第一七七支部」

「そおか。行くぞ」

「ちょ、ちょっと待ってよ!?!?」

スタスタと歩き出す一方通行に、美琴は慌てて付いていく。

(……そういえば)

一方通行の隣を歩く美琴は思い出したように疑問を抱く。  
それは、この事件の根幹に関わるような疑問。

(どうしてコイツは、能力を使えるのかしら……)

ザワツ、と美琴は背筋に冷たいものを感じた。

第57話 根幹へアクセラレータ〈後書き〉

なんだかあまり話が進まない……。

すいませんなるべく早く次話投稿します。

感想くれると嬉しいです。



第58話 AIM拡散力場 (前書き)

お待たせしました(^o^)

第58話 AIM拡散力場

『希望』と『絶望』は紙一重だ。それまでに築き上げてきたものが瞬く間に崩れ落ちる瞬間、仲間だと思っていた者に裏切られた瞬間。そして、今まで信じていた『世界』が真っ黒に塗り潰される瞬間、これまで抱えていた希望は、一瞬のうちに絶望の底へと叩き墮とされる。

そんな出来事がさも当然のように起きているのが学園都市という科学の最先端都市の本質であるということにはほとんどの人間が気づかない。

墮とされた絶望の底が、どれほど深いものなのかも知らず、日々『絶望』だけが増えていく。

「御坂さんはまだ来てないみたいですね……」

運良く暴走した無能力者（レベル0）と鉢合わせることなく風紀委員第一七七支部へと辿り着いた少女、初春飾利は認証式の電子ロックを解除して美琴がまだ到着していないことを確認すると、一直線にパソコンのもとへと向かい起動ボタンを押す。

（御坂さんが来るまでに、少しでも多くの情報を……！！）

猛スピードで画面に表示される情報をスクロールし、キーボードを叩く。

膨大な量のデータを瞬時に理解、処理して解析していくさまはまさに守護神<sup>ゴルキーパー</sup>。

守護神<sup>ゴルキーパー</sup>として、彼女もまた事件の渦中へと。

初春が支部にて画面とにらめっこしているころ、当の美琴はというと第七学区の寂れた裏路地を白髪の少年と歩いていた。

美琴が白髪の少年へと向ける視線は、疑惑そのもの。

「ねえ、何でアンタは能力普通に使えるのよ」

「……」

「ねえ、私の話聞いてんの？」

「……」

「……（ブチッ）」

バチンッ！

と毛先から漏電させる美琴。

「……え？」

美琴はその現象に驚愕した。

（能力が……使えた……？）

もう一度、確認のために演算を開始する。

（やっぱり……）

次もやはり、バチンッと紫電が走った。

これまで演算しようにも出来なかったというのに、不意に使えるようになった能力に美琴は半ば呆然としているが、そういえば、と一方通行が現れたときのことを思い出す。

（私……髪の毛先から漏電してた）

「……オイ」

そこで美琴の思考は一方通行の声によって遮られた。我に帰ってそちらを向く。

「俺から離れたら能力が使えなくなるからな」

「は？」

「……っと。着いたか」

ピタッと一方通行がある建物の前で立ち止まる。それは美琴の目的地である風紀委員第一七七支部。ジャッジメント

「ホラよ。道案内はしてやった、後はここで大人しくしてるんだないやいやちよつと待て何でアンタから離れると能力使えなくなるのよ、という美琴のマシガンのような口撃など全く意に介さず、一方通行はベクトル操作によってあつという間に彼女の前から姿を消した。

「もつっ！ちゃんと私の質問に答えなさいよーっ！！」

叫んで、美琴は暴走した無能力者がまだ辺りにいるかもしれない可能性を思い出す。一方通行の話信じるならば、自分はもう能力が使えないのだ。むやみやたらに大声を出すのは愚の骨頂。そう思い至った美琴はそそくさと建物内に入っていった。

「あつ、御坂さん！！」

既に解除されていた電子ロックの扉をくぐって第一七七支部内に足を踏み入れると、パソコンと向き合っていた初春がクルリと振り返って駆け寄ってきた。

「よかった、無事に辿り着けたんですね！」

「え、ええ。初春さんも無事みたいね」

「はい。運良く暴走した学生と鉢合わせませんでしたから」

「佐天さんの状態は……？」

「……この学区の病院に搬送されたんですけど、未だに意識は回復していません」

悲痛な表情を浮かべる初春を前に、美琴は唇を噛んだ。だが今ここで怒りをぶつけてもどうしようもないということは解っている。静かに握られた拳が、僅かに震えていた。

「……何か分かった？」

「ええ。ちよつとこれを見てください」

言って初春はデスクへと駆け寄ってキーボードを叩く。数秒の後、画面に新たなウィンドウが表示された。

「これは？」

「衛星が観測したものを基にして算出したAIM拡散力場のグラフ

です」

表示されたのは幾つもの折れ線グラフが立体的に並べられたグラフだ。

「そしてこれがある時間から学園都市中で発生した音波のグラフです」

初春はカタカタとキーボードを叩いて、更に別のウィンドウからグラフを表示させる。

タタンツと初春がエンターキーを叩くと、表示されていた二つのグラフが画面の中央で重なり合う。

「!?!? これは……!?!」

「はい。御坂さんが考えている通りだと思えます」

画面を見て驚愕する美琴に、初春も同意する。

二つのグラフは、内部の立体的な折れ線グラフまで寸分の誤差もなくピッタリと重なり合っていたのだ。

これが意味するのは。

「AIM拡散力場を介して特殊な音波を流してること……!?!」

AIM拡散力場。

正式にはAn - Involuntary - Movement拡散力場。

直訳すれば『無自覚』という意味である。

これは能力者が無自覚に発してしまう力のフィールドのことで、とても微弱で専用の精密機械を使用しなくては人間には観測できないレベルだ。

しかし、このAIM拡散力場を利用して『自分だけの現実』パーソナルリアリティに干渉することができる。

代表的な例としては少年院などで利用されているAIMジャマーだろう。だがこれは能力を打ち消すというよりは照準を狂わせて暴走を誘発させる代物で、更に使用には大量の電力や演算能力などが必要になる。

「AIMジャマーとは、勝手が違う……？」

「そうみたいですね。このAIM拡散力場を利用するのは間違いないみたいですけど、少年院みたいに限られた施設だけに使用するならともかく学園都市中に蔓延させると必要な電力は学園都市中で発電できる総量を超えてしまいます」

「しかも能力の照準が狂うとかじゃなくて完全に使えなくなっちゃってるのよね」

モニタを眺めながら顎に指を添えて美琴は思考する。

学園都市中最高クラスの頭脳をフルに活用した結果として導き出されるのは、やはり何か特殊な音波をAIM拡散力場を通じて学園都市中に流し、『自分だけの現実』パーソナルリアリティに干渉する、というものだ。

しかし、やはりその答えにも幾つかの疑問が生じる。



（今回のこれは演算自体が出来なくなってる……。つまり、『自分だけの現実』バーチャルリアリティを認識できなくなってる……？）

初春が次々にスクロールさせていくウィンドウに向けていた視線を、ふと窓の外へと向ける。

（暴走した無能力者……）

何故無能力者（レベル0）だけが暴走したのか。

答えが喉まで出かけているのに解らないようなもどかしさに、美琴は奥歯を噛み締めた。

現れたのは長点上機学園の生徒ではなかった。恐らくはこの近くの中学校か高校の生徒だろう。着用していた制服から大体の見当はつく。数にして三人。皆男子だ。

「オイオイ、この通路は安全なんじゃなかったのかよ澤ちゃん……！」

帝督が毒づくが、凧はそれどころではなかった。

(チツ……、どうする？この人数だ、全員が無事に突破できる方法なんて思い浮かばねえ……！)

凧の背後には六人。さらに四人は女子だ。彼女たちを無事に逃がすことが最優先、そう結論づけた凧は隣に立つ帝督と軍覇に視線を向ける。

凧の意図を瞬時に汲み取った帝督と軍覇は小さく頷くと、

「橋、その一年つれて西側の階段から四階に行け」

「行くぞ」

帝督が顔だけ背後を向いて指示し、軍覇が振り返って先頭に立ち、西側の階段へと向かう。もう東側の階段は破棄し、そちらに回ったほうがいいと考えたのだ。

「でも！」

「いいから行け！」

戸惑う凧に振り返ることなく叫ぶ凧。叫んだのは、暴走した無能力者(レベル0)をここに集めて凧たちをスムーズに脱出させようという意図もあったからだ。

「凧ッ!!」

抵抗する凧の腕を軍覇は無理矢理引っ張り、一路来た道を引き返し

て西側の階段へと向かった。

「……さて」

静寂が訪れた美術室前の廊下で帝督が呟く。

「どつするよ凧。こいつら目がイッてるぜ」

「だな。しかもアイツ手の平から電撃バチバチさせてるし」

自嘲気味に笑って凧は答える。

「闘って勝てると思うか？」

「いや無理だろ。空手でもやっつてれば別なんだろうけど、残念ながら貧弱な学生だからな」

「だよなあ……、」

帝督の問いに凧は答え、そして出した答えは。

「……逃げるか」

逃走。

否、闘走。

楓たちが安全に長点上機学園から脱け出すまで、凧と帝督が時間を稼ぐ。幸か不幸か、先程凧が叫んだおかげで北舎に侵入していた暴走した無能力者のほとんどが三階に集まってきていたため、引き付けるという意味では百点満点だ。

だが、

それは逆に危険度も百点満点であるということも意味している。

「命懸けだな」

「こんなことに命かけたくなえけどな」

一度だけ視線を合わせ、それを皮切りに風、帝督と暴走した無能力者たちとの命懸けの鬼ごっこが幕を開けた。

第58話 AIM拡散力場（後書き）

ども、晃甫です。

今回中々に大変でした。まずAIM拡散力場とは何ぞやということ  
で調べ、パーソナルリアリティを調べ、と調査尽くしの今話。  
満足していただければ幸いです……。。

でわ。

## 第59話 能力破壊

学園都市という科学の最先端に行く超能力都市には、AIM拡散力場という能力者が無自覚に発してしまう微弱な力のフィールドが満ち満ちている。

それはとても微弱で、専用の精密機械を用いなくては人間には観測できないレベルではあるが、確かにそれは存在する。

学園都市中の総人口二三〇万人のうち実に一八〇万人が能力開発を受けた学生であり、言ってしまうえば、この東京都三分の一程の面積を有する学園都市には能力者一八〇万人分のAIM拡散力場が蔓延しているということだ。

「これを利用して、俺が直々に製作した能力者の脳に作用する特殊な音波……、いやこの場合は電波だな。それをAIM拡散力場を介して学園都市中に蔓延させたわけだ」

第三学区にある高級感溢れるホテルの一室。室内に置かれたこれまた高級そうな皮張りの黒いソファに腰を下ろす青年が、目の前のテーブルに並んだチキンの一つを手に取りながら言う。

「……だが副作用もあったのだろうか？」

チキンを頬張る青年とは対面に位置するソファに美しい姿勢で座る女性が口を挟んだ。

「まあな。こればかりはどうしようもないと割り切るしかない。

脳に作用する以上、どうしても無能力者（レベル0）には負担が大きくなりすぎるからな」

チキンのせいで指に付着した脂を舐めとりながら、何の気なしに青年は言った。

「……………剛徳司」

「何だよ」

「私たちの目的は何だった？」

「あ？能力者をただの学生に戻すことだろ」

「そうではなく、その根幹にあるものだ」

「解ってるさ水城」

「……………葵の計画通りに進めるんだ」

「問題ない。全ては予定通りだよ。俺が造った……………そうだな、『能力破壊』シターバランスとでも名付けようか。この電波で、たとえ超能力者（レベル5）だろうがただの学生に成り下がる」

ガツチリとした肉体がソファの背凭れにドカッと埋もれる。

「葵はどうしてる？」

ふと思い出したかのように、剛徳司と呼ばれた青年は向かいの女性に問い掛けた。

「いつもの場所だ」

「そうか」

興味なさそうに相づちを打って、剛徳司はガラス張りの窓の外に目をやる。

もうもうと立ち込める黒煙、破壊された建物、そして学生のものであろう悲鳴。それらを目の前にして、彼は満足げに微笑んだ。

「うおおおおッ!?!」

顔の隣を音速を超える電撃が走り抜ける。長点上機学園の三階を疾走（逃走）する凧と帝督は、背後に迫る十数人の暴走した無能力者（レベル0）と命懸けの鬼ごっここの真っ最中だ。

「ヤバい！これ洒落になんねーッ!?!」

「喋ってないで脚動かせて!?!」

「って帝督、頭下げろ!?!」



「は？　　ってうお！？」

帝督が頭を下げた瞬間、燃え盛る業火が頭上を通り過ぎた。

「~~~~ツ！！」

声にならない危機感を全身が感じている。もしも喰らえばただではもちろん済むはずがない。下手をすれば取り返しのつかない大怪我をする可能性だってある。

「……………　能力つておっかねえな！」

「奇遇だな風！俺もおんなじこと考えてた！！」

二人は叫びながら二階へと下る階段を駆け下りる。行き当たりばったりに逃げるだけでは結末など目に見えているため、風たちは予め逃げる場所を決めていた。

それは。

「帝督！！」

「わかってる！！」

ドバンツ！！

と目的の部屋の扉を勢いよく開け放つ。

室内に入ったと同時に扉を閉め、鍵をかけて凭れかかった。

ドンドンツと扉を叩く衝撃が背中に伝わるが、そんなことなど気

に留めず扉を破られないように必死に押し返す。

しばらくして、扉を叩く音と衝撃が止まった。

「……………止まったか？」

「みただいな」

荒い息を吐きながら、二人は少しして安堵した。とりあえずはやり過ごせたようだ。

「でもいつ扉を破られるかわかんねえからな。急ぐぞ」

「おう。軍覇たちが長点上機（こゝ）から脱け出すまでは時間を稼がないといけねえからな」

凧の言葉に帝督も同調する。

二人が逃げ込んだのは、長点上機学園の二階にある大食堂だった。

教室の何倍もある広さの食堂は、科学がいくら進歩してもこれだけは譲らない、とでもいうように食券の販売機と並べられた長机というどこの学校にでもあるようなものだ。

彼らが立て籠るのにこの場所を選んだのには幾つかの理由がある。

まず一つはこの広さ。教室五つくらい縦にぶち抜いたような長方形の大食堂は、逃げ回るにしても立ち回るにしても都合がいい。

「帝督あったか？」

「おう、予想通りだ」

そして第二に、資材が豊富であるということだ。この大食堂は当然のごとく厨房と繋がっている。全校生徒一〇〇〇人にも上る学生が集まるのだから、当然それに比例して厨房も巨大になるのだ。故に、調理器具などのバリエーションも富んでおり、暴走した無能力者（レベル0）に対抗できる武器になりそうなものを調達しようと考えたのだ。

「いいのあったか呷く？」

「んー、とりあえずはこんなもんじゃねえかなあ」

言って厨房から出てきた呷が手にしていたのは生地などを伸ばす時に使う木製の伸ばし棒。だが通常と違うのは、それが長さ八〇センチに届きそうなほどに長いことだろう。

「お前それ一步間違えたら撲殺犯になるんじゃないやねえか？」

「そんな明らかに凶器持つてる奴に言われたくねえよ」

呷の伸ばし棒を笑う帝督だが、その手にはしっかりと出刃包丁が握られていた。

「大丈夫だってこれ研がれてないやつだから」

ほら、と言って出刃包丁の切っ先を見せる。

「いやそういう問題じゃねえだろ……」

げんなりする凧など気にせず、帝督は鼻唄混じりに出刃包丁を振り回す。

それに対して凧が止める、と口に出そうとした瞬間。

鍵を掛けた大食堂の入口の扉が、轟音とともに破壊された。

「!!!」

「来やがったな……!」

凧と帝督はそれぞれもった道具を構え、破壊された扉から大食堂へと足を踏み入れてくる暴走無能力者たちへと視線を向ける。

入ってきた暴走無能力者は四人。いずれも能力を行使しているのか掌や周囲から炎や水を漂わせている。

「帝督。予定通りに行くぞ」

「任せとけっ」

二人は一度だけ視線を合わせると、直ぐ様それぞれが逆方向へと走り出す。それにつられるようにして暴走無能力者たちも凧と帝督それぞれを追いかける。

凧たちが大食堂を選んだ三つ目の理由。

それは。。。

「帝督！警備員アンチスキルの詰所で会おうぜ!!!」

「おう!!」

ここ大食堂には唯一、出入口が四カ所在るからだ。

広大な大食堂に出入りする学生は膨大なため、通行の利便性を図るため設置された東西南北の扉。

暴走無能力者たちが侵入してきた北口は捨て、凧は東口、帝督は西口の扉を蹴破つて勢いよく廊下へと飛び出す。

追ってくる学生は二人ずつに別れたため、必然的に一人が二人を相手にすることになるが、二人で四人を相手にするよりは遥かに効率がいい。

向かう先はもちろん四階の南舎へと繋がる渡り廊下。凧は先程放棄した東階段から、帝督は軍覇たちが先行したであろう西階段から南舎を目指す。

命懸けの鬼ごっこの第二ラウンドが始まった。

## 第59話 能力破壊（後書き）

ども、作者です。

今回前半に新キャラ二名が出てきました。

お察しの通り葵に並んで重要キャラになります。  
そして実は、このキャラたちは夙たちよりも先に出来上がっていた  
キャラだったりしますWW

第60話 『規格外体』 (前書き)

お待たせしました。

## 第60話 『規格外体』

物語には、必ず『始まり』と『終わり』が存在する。何らかの『原因』によって物語は始まり、何らかの『理由』によって物語は結末する。

言ってしまうば、それは一冊の本のようなものだ。ただ違うのは、本のように先読みして結末、『終わり』を予め知ることはできない。

この学園都市で発生している能力消失事件が、どのような結末を迎えるのか解らないように。

「こつちには全く暴走した無能力者（レベル0）が居ないのね」

「多分校門を守りきれなかった警備員が南舎の周りを警備してるからだろっな」  
アンチスキル



凧たちと別れ、無事に四階の渡り廊下を渡って南舎へと移動した軍覇や楓、星奈たちは、その静寂さに驚愕していた。

あれほど暴走した無能力者（レベル0）たちが暴れ回っていた北舎とは違い、南舎はいつもと変わらない至って普通の光景が広がっていた。

「……この辺りに暴走無能力者がいる可能性は？」

『んーと、四階は大丈夫みたい。そのまま目の前にある階段を使って三階まで降りちゃって大丈夫だよ』

携帯越しに話しかける楓に、受話器越しから未来が応答する。

「あの、橘先輩」

不意に、背後からついてくる由紀が楓に声を掛けた。

「なに？」

「これから私たちがどうするんですか？」

言われてみれば、と楓は思い出す。そういえば彼女たち三人は半ば無理矢理自分たちと同伴することになってしまったのだ。本来ならば、体育館に避難していなければならぬ生徒たち。

だが今から体育館に避難させるといっわけにもいかない。体育館へ行くには、北舎の一階を通らなくてはならないからだ。

(やっぱりここはせめて詰所まで一緒に来てもらったほうがいいわね……)

結論を出した楓は星奈たちのほうへと向き直り、

「ごめんなさい。とりあえず今は一刻も早く長点上機学園から脱け出さないといけないの。詳しくは向こうで話すから、今は私たちについてきてくれる？」

事態が飲み込めないまま行動するというのは精神に多大なストレスを与えるものだ。何をしているのか、これから何をしなくてはならないのかという目処が全く解らないままに動くというのは不安と恐怖を募らせる。

「……わかりました」

しかし、彼女たちはそれで納得してくれた。

返事したのは星奈だったが、残りの二人も同意しているようで静かに頷く。

「ありがとう」

楓は微笑んでそう言うと、再び携帯を耳にあてがう。

「未来、この先は？」

『んーと、その通路を左に曲がって東側階段に向かって。西側には数人だけ暴走無能力者の姿が監視カメラに映ってる』

「わかった。削板くんそこ左！」

「了解!!」

前方を走る軍覇へと指示を出し、楓も再び走り出す。目指す一階の搬入口まで、着実に近づいている。

(何事もなく脱出できればいいけど……)

先程別れた凧と帝督を思いながら、楓は階段を駆け下りていった。

「あつぶね!!」

襲いかかる氷の矢を間一髪で避けつつ、凧は東階段を目指して疾走する。大食堂東側の出入口を蹴破り、そのまま廊下へと飛び出した凧は現在階段を駆け上がって三階の廊下を必死に走っていた。

長点上機学園は広大なため東、西、中央階段が存在する。凧がたった今駆け上がっていたのは食堂近くの中央階段だ。この中央階段は上がったところが広大な空間と直結しているため三階までで終わっ

てしまっている。

つまりそこからまた東側階段へと移動しなくては渡り廊下へと辿り着けないのだ。

「くそっ！こんなことなら帝督の西側にしとけばよかった！」

息切れを起こしながら愚痴を溢しても事態は何も進展しない。現に背後からは二人の自我を失った無能力者（レベル0）が唸り声を上げながら追いかけてきているのだ。

（このままじゃ渡り廊下までにコイツらを振り切れねえ！となると……）

チラリと風は手元へと視線を落とす。その手に握られた木製の伸ばし棒を見ながら、

（最終手段のつもりだったけど、やるしかねえか……）

あまりにもリスクの高い行動だ。能力を奪われた一介の学生が、理性を失っている暴走無能力者と立ち回るなど。

だが、もう残されている道はこれしかない。

渡り廊下まで逃げたとしても、彼らに着いてこられては元もこもない。

「仕方ねえ……！」

覚悟を決めて、風は東側階段手前の廊下で立ち止まってクルリと振

り返る。

「こいよ能力者。元超能力者（レベル5）が相手になってやる！！」

ゴッ！！

と襲いかかる炎や電撃を交わしつつ、凧は二人の暴走無能力者の懐へと飛び込んでいく。

「うおおおおおおおおおッ！！」

手にした木製の伸ばし棒を振りかざし、咆哮とともに凧は目の前の『ヒト』へと降り下ろした。

「…………ふう。どうやら撒いたみたいだな」

四階の渡り廊下の前で周囲を見渡した帝督は暴走無能力者が追っつこないことを確認し、ホッと胸を撫で下ろした。

「凧のやつ大丈夫か…………？先に行ってるなら別にいいんだがな」

別に凧が暴走した無能力者（レベル0）にやられるのを心配してい

るわけではない。

これ以上集団が分断されてしまうことを帝督は恐れているのだ。

初め七人いたメンバーは二人と五人に別れ、更に二人は別々になった。

（これ以上時間を失いたくはねえ……、軍覇たちのほうも気になるしな。かといって風が行方不明になっちまうのも芳しくねえし……）

どちらを取るか。二者択一を迫られる。

そんな時だ。

突然、校舎全体が縦揺れに襲われたのは。

「何だあ!？」

反射的に廊下の柱に掴まりバランスをとろうと試みるも、その余りの衝撃に堪えられず帝督は立って倒れ込んでしまった。

数秒続いた震動は、やがて何事も無かったかのように止まった。

「止まった……のか？」

倒れた際に打った頭をさすりながら起き上がる帝督は、何事かと窓から外を見渡す。

「な……！？」

彼は思わず我が眼を疑った。

地震のような縦揺れは、最新鋭の技術が導入されていた建物をことごとく破壊していた。崩れた瓦礫が地面を剥がし、舞い上がった粉塵が風に乗って学園都市全域に到達する。

大怪獣が暴れ回りでもしたかのようなその凄惨さにただただ息を呑む。

「んだよコレ……！？」

有り得ない。

こんなこと。

絶対に。

たとえ天災であろうがここは学園都市だ。あらゆる耐震対策が施された三〇メートルの建設ビルが一瞬で倒壊するなどまず有り得ない。

「一体何がどうなってんだよ……！」

学園都市第二位の頭脳を持ってしても事象の説明がつかない。

「……？」

ふと遠くに視線を移すと、そこに何か違和感を感じた。言ってみれば、白人一〇〇人の中に黒人が一人だけ混じり込んだような、明らかな違和感。

その正体に気がついたのは、視線が合ったからだ。

『ナニカ』と垣根帝督の視線が交わった瞬間、帝督は直感的にこれが『ナニカ』の仕業であることを確信する。

「アイツか……！」

「おっ、今眼え合ったか？」

長点上機学園から五〇〇メートルほど離れた雑居ビルの屋上。そこから楽しそうな声を漏らすのは、燃えるような真っ赤な髪の毛の青年。

アシンメトリーの髪の毛が、粉塵を含んだ風でサラサラと靡く。



「ふうん……。アイツが第二位か、なかなかいいカンしてんじゃねえか」

おそらく俺がこの縦揺れを起こしたことに第二位は気付いている。これが能力であるということも、だ。

「いいね、いいよ。実にいい！興味が湧いてきた！！」

学園都市の『最下層』には、常識などなんの当てにもならないほどの人間が存在する。

アンリミテッド・メンバーズ  
『規格外体』

その内の一人は、燃えるような真っ赤な髪の毛が特徴の青年であるらしい。

「楽しくなってきたなあ……！！」

事態が、急転する。



第60話 『規格外体』（後書き）

急展開すぎた……（ - ” - ; ）

第61話 疑心暗鬼(前書き)

お待ちしましたm( )m

## 第61話 疑心暗鬼

「…………ふう」

持っていた木製の伸ばし棒を適当に投げ捨て、凧は軽く息を吐いた。回りには出血はしていないものの気を失った状態で廊下にノビている学生が二人。

「痛つてえ……………」

能力による攻撃ではないものの手加減というものをしない拳はなかなかの威力を持つ。それを頬に喰らった凧はグイッと腕で殴られた部位を拭う。口内が鉄の味に満たされているが、今は気にしている場合ではない。

「早く凧たちと合流しねえと……………」

踵を返し、階段へと足をかけようとした瞬間、唐突にそれはやって来た。

「うおっ!?!」

突如として襲った直下型の大きな揺れに足を踏み外した凧は丁度踊り場のところに転げ落ちた。

「な、なんだってんだ……………」

後頭部に手を添えながらゆっくりと起き上がり、状況把握のために

近くの窓から外を見渡してみる。

「……………嘘だろ……………？」

視線の先に広がっていたのは、まるで台風が直撃でもしたかのよう  
に破壊された学園都市の街並み。

しかし風が信じられなかったのは、破壊された学園都市の街並みな  
どではなかった。

（何で……………長点<sup>こ</sup>上機学園は崩壊せずに残ってるんだ……………！？それに  
幾つかの建物は何もなかったみたい……………！！）

破壊された街並みよりも風の眼に更に異様に映っていたのは、長点  
上機学園を含む幾つかの建造物。

まるで先程の大規模な直下型の揺れなど無かったかのようにそこに  
建つビルや店舗は、ある種揺れよりも恐ろしく見えた。

「これが天災……………？有り得ねえだろ……………！！」

これによって風は人為的なナニカであることを確信する。

それと同時にもしこれが超能力によるものであれば、地形すら容  
易に作り替えてしまえるほどの強大な能力者の仕業であるといつこ  
とも。

「……………急がねえと」

確認したところ隣の警備員<sup>アンチスキル</sup>の詰所はところどころ崩れていたがどう  
やら全壊は免れたようだ。ならば一刻も早く長点上機学園から脱出<sup>ジャッジメント</sup>  
し、武器を手にして風紀委員の支部へと向かわなくては。

言い表せない粘ついた不安を抱えながら、凧は再び渡り廊下への道を走り出した。

「お姉様!!」

ジャケット  
風紀委員第一七七支部に、赤茶色のツインテールを揺らしながらズカズカと踏み込んでくる少女の声が響き渡る。

「く、黒子!?!」

ギョッ、という表現が一番適切であろう表情を浮かべ、美琴は思わず一歩後退る。

「全く、常盤台中学から出ていったかと思えばやっぱりここにいらしたんですね。今学園都市中で起こっている騒動をきちんと理解していますの!?!」

どうやら白井はまたむやみやたらに首を突っ込んだ美琴にぶんすかしているらしく、左右のツインテが白井の叱責に合わせてフリフリ

と揺れていた。

「そ、そんなことわかって」

ふと、そこで美琴は疑問に思った。

「ねえ黒子。何でアンタはこの騒動のことを知ってるのかしら……？」

そう。

可笑しいのだ。

常盤台中学は周知の通り生徒全員が強能力者（レベル3）以上という中学校だ。

それはつまり暴走する無能力者がいないことを意味している。

現に常盤台中学では何事も無かったかのように平常時と同じく授業が続けられていたのだ。

であるのに、何時彼女はこの事態を知った？

実際に校外に出て分かったことだが、常盤台中学の近くには暴走無能力者の姿は見当たらなかった。

それはつまり、校舎の窓から外を見たくらいではこの事態を把握できないということの意味している。

それに気になるのはここまで来るための移動手段だ。白井の能力は大能力（レベル4）の『空間移動<sup>レポート</sup>』だが、察しの通り今学園都市では能力を行使することが出来ない。



(早すぎる……)

もしも仮に、白井が『空間移動』テレポートが使えた場合、連続してテレポーターする場合の速度は時速二八〇キロを超える。美琴が常盤台中学を出てからこの支部に到着するまでの距離と時間差を考えても妥当だろう。

が、しかし。

超能力は使えない。

ただの杞憂かもしれない。そう自身に言い聞かせて、美琴は目の前に訝しげに眉を潜める白井の返答を待つ。

「そんなの決まっていますの」

対する白井はいつもと何ら変わることもない態度で、

「わたくしは風紀委員ジャッジメントですよ？ 警備員アンチスキルからの応援要請があったからに決まっていますわ」

「あ、そうなんだ……」

返ってきた答えにホッと胸を撫で下ろす。今日の自分はどうかしている。いくらなんでも私の後輩を怪しい眼で見るなんて。

「それで初春、何か情報は掴めたんですの？」

「はい、このグラフを見てください」

パソコンの前で作業する初春の隣に来た白井は、現状把握のためにウィンドウに表示されたグラフに目を通していく。

「……信じられませんの」

それを見た白井は驚愕していた。それもそうだろう、このグラフが正しいのであれば、学園都市中に蔓延しているAIM拡散力場を介して各個人の自分だけの（パーソナル）<sup>リアリティ</sup>現実に干渉しているということになるのだから。

「私もまだ信じられませんが、このデータに間違いはありません」  
カタカタとキーボードを叩きながら言う初春の横で画面をジッと凝視している白井はなにやら考え事をしているようだ。

そんな白井の背中を見ながら美琴はハア、と小さくため息をついてひとりごちる。

（どうかしてるわ……。自分の後輩を怪しむなんて人道的に間違ってる）

きつとこの理解不能な事態のせいで無意識のうちに頭が混乱しているのだろう、と適当にあたりをつけて落ち着くためにひとまずはと大きく深呼吸する。

「お姉様、どうかしましたの？」

そんな美琴を見て、白井が心配そうにこちらを窺う。

「ええ、もう大丈夫よ」

深呼吸によつて幾分か落ち着きを取り戻した美琴はそう言って微笑む。

そんな時だ。

何気無く言つた初春の言葉に、無くなつたはずの猜疑心が再び呼び覚まされたのは。

「そういえば白井さん。いつ警備員アンチスキルからの応援要請なんて来たんですか？」

「!?!」

思わず目を見張る。

今、初春さんは何と言つた？

一気に高まる警戒心を胸に、美琴は白井へと視線を向けた。

「何を言ってますの初春？ 携帯に応援要請のメールが届いたでしょっ?」

「え？ あ、本当だ。ここに辿り着くことに必死で全く気がつ

きませんでした」

携帯のメール受信ボックスから目当てのメールを見つけた初春は苦笑いしながら内容に目を通していく。何気無い二人のやりとり。しかし、美琴はそんな通常の会話をする二人に多大なる違和感を感じていた。

ナニカが可笑しい。

ゾワッ、と。

背筋に悪寒が走るのを美琴は感じた。

「どうかしましたかお姉様？」

「どうしたんですか御坂さん？」

普段と変わらない筈の二人も、今の美琴には限りなく怪しく見えた。

「……ね、ねえ黒子」

「なんですの？」

「あんだ、本当に黒子よね……？」

「？ 一体何を言ってますのお姉様？」

突拍子のない問いに白井は困惑したように顔をひきつらせる。

もう止める。

美琴の心が、悲鳴を上げる。

これ以上親友を疑うなんて。

しかし、否定できない自分がいることに彼女は気付いていた。ナニカが違う。

そんな疑心暗鬼に陥った美琴に拍車をかけるかのようにそれはやってきた。

「なっ!?!」

「キヤアッ!?!」

ズズンッ!?!と。

大規模な直下型の揺れが襲いかかった。あまりの揺れに立っていられなくなった美琴は近くのデスクに寄り掛かってなんとかバランスを保つ。

十数秒もの間続いた揺れがようやく収まったころ、美琴は自分のポケットが僅かに振動していることに気が付いた。

それどころではないと思いながらもゲコ太デザインの携帯を取り出し、画面に目をやる。

「っ!?!」

着信を示す画面の下部には、有り得ない名前が表示されていた。

【白井 黒子】

自然と手が震える。  
有り得ないのだ。何故なら白井は美琴の目の前に居る。携帯を手にしている様子もない。

じゃあ。

じゃあ。

こ（・）れ（・）は、一体何だ？

恐る恐る通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。携帯越しに聞こえてきたのは、

『お姉様！？ 一体どこにいらっしやるんですの！！』

聞きなれた、とある少女の声だった。

呆然自失に陥って言葉が出ない美琴をよそに、受話器の向こうからはマシガンのように言葉が吐き出され続ける。

『さっきの揺れを心配してお姉様の教室に行ってみればおりませんし！聞いてみれば保健室に行ったそうではありませんか！！では何故保健室のベッドはもぬけの殻なんですの！！』

「く、黒子……？」

黒子だ。

この受話器越しにいるのは、確かに私がよく知る後輩だ。

じゃあ。

目の前に居るのは？

この黒子は、誰だ（・）？

『今どこに居るんですのお姉様！？直ぐにわたくしもそちらに向かいますわ！』

「……………ジャッジメント風紀委員の支部よ」

それだけ言って美琴は終話ボタンを押した。ゆっくりと向けられる視線の先には、こちらを窺うように見る白井の姿。

「どうなさいましたのお姉様？」

「……………ねえ、黒子」

疑念が確信に変わる。

「あなたは、誰……………？」

「あれが搬入口だな」

「見た感じ近くに暴走した無能力者（レベル0）は居ないみたいだけど」

軍覇、楓、星奈たちは南舎一階の搬入口のすぐ手前までやって来ていた。目の前の角を曲がればすぐに搬入口に辿り着き長点上機学園から脱出することができる。

「未来、搬入口近くの監視カメラに何か映ってる？」

携帯を耳に当てて楓が澤ちゃんの研究室にいる未来に尋ねる。

『んーと、少なくとも校舎内には居ないみたい。搬入口から出てからは何とも言えないけど、警備員の詰所アンチスキルってすぐだから多分そのまま行けると思う』

「わかったわ」

「橘、行けるのか？」

「ええ。近くには居ないみたい。このまま一気に詰所まで向かいましょう」

「おうっ」

言って、まず軍覇が搬入口へと飛び出す。それに続いて星奈たち三人、最後尾に楓が続く。やはり周囲に暴走無能力者の姿は見えず、軍覇たちはそのまま搬入口から長点上機学園を抜け出し、校外へと踏み出した。

「警備員の詰所アンチスキルってのはあれか？」



「所々崩壊してるみたいだけどあれね。さっきの揺れのせいかしら」  
長点上機学園の隣に設置された警察の交番ほどの大きさの警備員アンチスキルの詰所は、先程の直下型の揺れによって屋根や外壁があちこち崩壊していたが、なんとかその原形を留めていた。

五人はなるべく人目につかないようそそくさと詰所の入口まで移動して扉に手をかける。

「…………電子ロック…………？」

「みたいだな」

「それって専用のキーがないと開かないんじゃないか……………」

「あちゃー」

「困りましたね……………」

上から順に楓、軍覇、星奈、由紀、恵である。

入れないし！！

という楓の悲痛な叫びが、第一八学区の一角に無情に響き渡った。

「ハハッ」

第七学区に在る、学園都市統括理事長の本拠地とされる建物、『窓のないビル』。

その内部で、普段ならば決して出さないであろう小さな笑い声を出したのは男性にも女性にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見えるニンゲン。

嘗て世界最悪の魔術師として名を馳せた人物。

アレクスター・クロウリー

「面白い。実に面白い」

彼にしては珍しく、その口元はつり上がっていた。

「『アンリミテッド・メンバーズ規格外体』。あの異常者たちが、よくもまあこんなことを実行させたものだ」

それは単純なる称賛だった。

「見届けてやるう。お前たちの目論見がどうなるのかをな」

何もない空間に突如として現れたウィンドウに表示されているのは、五年程前の実験データだった。

その実験名は 。

【第一次能力者回路改造実験】

## 第61話 疑心暗鬼（後書き）

ども、晁甫です。

何だか早足になってしまいました。が第61話です。

最近風の出番が少なくなってきたことが悩みです（ - - ” - - ）

今回ですが重要ワードとしては最後の実験名、これはのちのち大きく関わってきます。

あとは二人（？）の白井については次回に持ち越しとさせてもらいます（ ^ - ^ ）

ではまた次回に。

第62話 完全同化(前書き)

お待たせしました。

今回試験的にパソコンからの投稿となっております。

あとがきにアンケートがあります。ご協力くださいm ( ) m

## 第62話 完全同化

一言に『信じる』と言っても、その意味合いは多岐にわたる。相手の言葉を信じるのか、相手自身を信じるのか。

また信仰宗教のようなものを信じるのか、それは人によって様々だ。

一重に『信じる』という言葉をお口にすることは造作もないが、それは酷く曖昧なものだ。上辺だけの言葉などいくらでも吐き出すことができる。しかしそれに意味など全く在りはしない。

人間とは醜いもので、他人から信じられることを望む生物だ。

例えばそれが偽り、虚像のものであったとしても。本来ならば相手を信じるという行為は、お互いの信頼関係が確かにそこに存在して初めて成り立つものだというのが、

では、逆に『信じられない』。即ち『疑う』とは何なのか。

それは、人間関係の終焉を意味する。

「あんたは、誰……？」

震える声で、恐る恐る美琴は目の前に立つ少女に向かって呟いた。

「誰ってお姉様、わたくしですわよ？」

対する白井は困ったように首を傾げ心配そうに美琴を見つめている。

嗚呼。

あくまでもシラを切るつもりなのか。

内心で毒づく美琴は、さらに言葉を紡ぐ。

「今ね……、電話がかかってきたの」

「そのようですわね」

「その相手ね、……あんたからだったのよ」

「っ！？」

驚愕に白井は目を見開く。それはそうだろう、目の前に居るはずの人間からの着信だ、これで疑われないというほうが不可能だ。

「お、お姉様……？」

「答えなさい。私の後輩に成りすましてる、あんたは誰？」

先程までの震える口調ではなく、詰問するような強い口調で美琴は白井に言った。そのすぐ横では初春が『え？え？』とあたふたしている。

「あんたは何者なの？」

もしも能力が使える状態であつたならば間違ひなく全身から漏電しているであろう美琴に問い詰められ、やがて白井は諦めたかのように口を開いた。

「……はあ。もう暫くは大丈夫だと思つたんだけど、どうやって本人は携帯を取り戻したのかしら」

先程までのお嬢様口調とは違い、気だるそうに白井『だった』人間は目を細めながら言う。

「ま、仕方がないか。そろそろ潮時だよねえ」

刹那。

白井『だった』人間は、一瞬にして別人へと変貌していた。

「っ！？」

その出来事を理解できない美琴が絶句する。白井だと思われた人間に変わってそこに立っていたのは、肩を越えるほどの透き通るような紺の髪を手で弄る女性だった。



「初めまして、超電磁砲<sup>レールガン</sup>」

「あなた……、何者なの？」

「『最下層の住人<sup>アンダーレイヤー</sup>』、と言っても解らないわよね。そうね、アナタの知らない世界の住人てところかな」

「ふざけないで！」

飄々と話す目の前の女に苛立ちが募る。美琴には理解できない、何故白井に成りすましてこの場に現れたのかが。

「ん〜？ 何でここに現れたのか解らないって表情<sup>カオ</sup>してるわね」

余程解りやすく顔にでていたのか美琴の考えはあっさりと見破られた。

「簡単なことよ。ちよつと偵察にね」

「偵察……？」

訝しげに眉を顰める美琴に対し、あっけらかんと女は続ける。

「そ。アナタたちが余計な所にまで足を突っ込んでいないか態々見に来ただけど、どうやら手遅れだったみたいね」

手遅れ？余計な所？

未だに脳内で意味が解らない単語がグルグルと回る中、ふと当たり前すぎて見落としていた点に気がついた。

「あんだ……、どうして能力が使えるのかしら？」

さも当然のように目の前で行使されていたのでつい忘れてしまっていたが、今現在に限って学園都市で能力は使えない。成りすまisdarouが何であるうが、こんな事は不可能なのだ。

更に美琴には気になった点が一つ。

「それに、学生って年齢じゃないわよね」

目の前の女、彼女はどう見ても高校生には見えなかった。二十歳は過ぎているだろうと適当にあたりをつけ、美琴は続ける。

「この学園都市に能力開発を受けた大人なんて聞いたことないんだけど？」

後に美琴は思い知る。

この世界には、踏み込んではいけない世界が存在するということに。

気が付けば、美琴の体は床に叩き付けられていた。

「ガッ……！？」

体中を駆け巡る痛みを歯を食いしばる。初春の悲鳴が支部に木霊した。

「だから、それが余計なところなんだってば。って言っても私も少

「は喋っちゃったんだけどさ」

「……ッ？」

受け身が取れなかったせいで腹部に強烈な痛みを感じながらもなんとか立ち上がった美琴は頭に疑問符を浮かべる。

「あんだ……、何者なの……？」

「……まあいいか。どうせ超能力者は全員処分する予定なんだし」

一人でなにやらぼそぼそと俯いて呟いていた女性は、やがて何か吹っ切れたかのように美琴の方へと顔を向けた。

「私は加瀬<sup>かせ</sup> 祢遠<sup>ねおん</sup>。さつきも言ったけど、『<sup>アンダー</sup>最下層の住人<sup>レイヤー</sup>』……  
もつと言えば、『<sup>アンリミテッド・メンバーズ</sup>規格外体』の一人」

加瀬と名乗った女はゆっくりと美琴へと歩み寄る。それは文字通りのカウントダウンだった。

「……まさか、あんだが学園都市に……」

「ご明察。そうよ、私たちが学園都市に蔓延するA I M拡散力場を介して各能力者の『自分だけの（パーソナル）<sup>リアリティ</sup>現実』に干渉する電波を流したの」

あっさりと、彼女は真実を口にした。

そして美琴もようやく理解した。コイツが元凶、佐天さんや他の無能力者（レベル0）を苦しめている張本人だということ。

痛みをも凌駕する怒りが溢れ出す。握りしめられた拳からはポタ

ポタと赤い液体が垂れ、床に斑点模様をつけていた。

「あんたが……、」

わなわなと唇が震える。

「あんたが佐天さんをおおおおおおおお!!」

怒りが頂点に達して加瀬へと突っ込んでいく。しかし、振りかざされた真つ赤な拳が加瀬の顔面を捉えることはなかった。何故なら。

「御坂さん!!」

「!?!」

目の前に佐天涙子が現れたからだ。

ギョツとして体を強張らせる美琴だったが、すぐにこの佐天も加瀬が成りすましていると判断し再び拳を握る。

が、しかし。

「優しいんだね、第三位」

その一瞬の迷いが命取りとなる。

「親友には手は挙げられないよね」

元の姿へと戻った加瀬は、突き刺すように美琴の鳩尾に拳を叩き込んだ。

「……カツ……！」

込上げる不快感に口を開けば、胃液が溢れる。想像を絶する痛み  
に床でのた打ち回る美琴だったが、今の攻防で解ったことがあった。  
それは。

「あなたの能力……、メタモルフォーゼ肉体変化ね……？」

「あら。流石に気付いちやったか」

この反応を見るに自分の予想は正しかったのだろうと美琴は思案  
する。未だに腹部を襲う痛みが和らぐことはなく彼女の顔を引きつ  
らせるが、それでもゆっくりと立ち上がる。

メタモルフォーゼ  
肉体変化。

その名の通り自らの肉体を思い通りに作り変える能力である。と  
はいっても遺伝子レベルでの変化は不可能なため、例えば巨大な怪  
獣なんかに変化すると人間サイズのミニマム怪獣が完成してしまっ  
たりする。

この能力者は『テレポート空間移動』よりも更に希少で、学園都市の中でも  
僅か三人しか存在しない。

「そう、確かに私の能力はメタモルフォーゼ肉体変化。でも私は他の野暮な二人のよ  
うな上辺だけの能力じゃないわ」

「上辺……？」

「さっき私がアナタの親友に肉体を変化させた時、一瞬でも本物だ  
と思ったでしょう？」

「!?!」

美琴は反論することが出来なかった。確かに思ってしまったのだ。たとえ一瞬であったとしても、佐天さんであると。

いくら何でも目の前で姿が変わればそれが偽物であるとわかる。

だが、分からなかった。

「どうして……!?!」

「簡単な話よ。あの時あの場に居たのは確かに佐天涙子というアナタの親友だったんだから」

「なっ!?!」

加瀬の発言に美琴だけでなくデスクの下で震えていた初春までもが驚愕した。

「私はただの肉体変化じゃない。遺伝子レベルでの変化が可能なの。言うなれば『完全同化』<sup>アミンレイト</sup>、遺伝子レベルで同じなんだから本物よ」

「そんな能力……、書庫<sup>バンク</sup>には一つも……」

「あるわけないでしょう？ 言ったじゃない。これは踏み込んではいけない世界、一般人が手を出していいものじゃないのよ」

さて、と加瀬は呟いて美琴のほうへと近づいていく。

「こんなに話したのは解つてるとおもうけど冥途の土産ってやつよ。

超能力者（レベル5）は全員処分、これは葵の命令だしね」

鼻と鼻が触れるか触れないかというところまで接近した加瀬は、美琴の耳元で囁くように言った。

「ばいばい」

その言葉を最後に、美琴の意識は深い海の底へと沈んでいった。

## 第62話 完全同化（後書き）

ども、晃甫です。

早いものでこの小説ももうすぐ100万PVを突破しようとしています。

なのでそれを記念して一本番外編を書きたいと思っていますが、前回の如く読者様がたにアンケートをとって何を書くか決めさせてもらいたいと思っています。

案としては

- 1 季節外れだろうがなんだろうがバレンタインデー
- 2 前回割と好評だった凧凧ルート
- 3 他のある小説の作者様とのコラボ

3についてはそういった申し出があった場合ですが、正直やってみたい（笑）

他にもこんなの見てみたい、とかラブコメ、ギャグなどの希望でもいいので、是非意見を聞かせてください。

よろしく願います。



### 第63話 少年の苦悩（前書き）

連日投稿です。

総合1500P突破しました！！

昨日さっそくアンケートにお答えいただいた読者様、ありがとうございます！このアンケートは7月いっぱいまで受け付けることにしますので皆様アンケートにご協力ください！！

詳しくは62話のあとがきにあります。

## 第63話 少年の苦悩

この地球には何十億もの人間が息づき、生活している。規模の大ききから言えば比べるまでもないが、何百万人も人間が暮らしているという点においてそれは学園都市も同じだ。

何百万、何十億という人間が存在している以上、そこには必ず一握りの異常者イレギュラーが存在する。

歴史上それはイエス・キリストであったり、異邦人パウロであったり。生きる時代によって様々だが、超能力を公にして大々的に超能力者養成機関として科学の街を作り上げている学園都市で言えば、最も分りやすいものは原石だろう。人工的なプロセスを積み上げて発現させた能力とは違い、天然物の能力者。

だがこれは『特殊』や『希少』であつたとしても『異常』ではない。

『異常』とは、常識とは異なると書くものだ。それは言うなれば学園都市の常識とは全く異なるものである。

学園都市に住む者であれば常識の、『能力は学生でなくては使えない』。これは能力開発を大人が行えないからであるが、この常識に全く反する者が存在する。

そんな『異常者』イレギュラーである彼らは総称して『規格外体』アンノーマル・メンバーズと呼ばれる。

この『異常者』イレギュラーこそが、今回の事件の発端なのだ。

「……………何で邪魔するのかなあ」

ジャケット  
風紀委員第一七七支部。美琴に限界まで近付いた加瀬は、不快感を隠そうともせずに行った。

加瀬の目の前には意識を失った美琴が床に倒れているが、これは彼女の仕業ではない。

「ねえ、一方通行」

倒れている美琴を挟んで加瀬と向き合っていたのは、白髪の少年だった。

「御坂美琴（レベル5）は全員処分るのが葵の命令だったはずだけど、どうして君がこの場に現れるのかな？ しかも殺すんじゃないかって気絶させただけなんて」

明らさまな嫌悪を一方通行へ向ける加瀬だが、その程度で彼は揺らがない。

「コイツは俺が殺す。だからテメエはさっさと帰れ」

「……ま、今回はそれで納得してあげるよ」

到底納得などしていないようだが、加瀬は首を横に振って一方通行とすれ違い、そのまま支部から出ていった。

残ったのは意識がない美琴、一方通行、そして。

「オイ」

一方通行の言葉に反応して、ビクツと小動物のように怯える少女。

初春飾利だ。

デスクの下に頭を抱えて踞って小さくなっている小動物は、恐る恐るといった感じで一方通行のほうを向いた。

「……あ、一方通行……さん？」

「あア」

「ど、どうして御坂さんを……？」

初春にとって一方通行は凧と同じ長点上機学園に通う学園都市第一位の高校生、という認識でしかなく、先ほどまでここに居た加瀬という女性と彼との関係性が理解出来なかったのだ。故に初春は問う、美琴を攻撃した理由を。

「……………」

しばし無言でその場に佇んだままだった一方通行だったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「オマエは知らなくていい」

出てきた言葉は、明らかな拒絶だった。

「さっきの女も言ってただろオが。この世界には踏み入れちゃいけないエ世界つてのがあんだよ」

「そ、そんな……！」

途中で異を唱えようとした初春をあっさりと無視して、淡々と無表情で一方通行は続ける。

「いいか、ここであつた事は忘れる。これは懇願でも妥協でもね

エ。命令だ」

「……ッ！」

思わず身を強張らせる初春。彼女も一方通行から発せられる殺気に気付いたのだろう。ガタガタと震えている。

一方通行はそれを見てほんの一瞬だけ寂しそうな表情を浮かべ、倒れたままの美琴を担ぎ上げる。

「み、御坂さんをどこへ……」

その問いには答えず、一方通行は美琴を担いだままゆっくりと彼女の方へと歩み寄って行く。

そして、彼は初春にしか聞こえないような小さな声で。

「  
」

「  
え？」

その後、首に走る衝撃を認識した時には初春の意識の糸はぶつ  
つりと切れてしまった。

だが意識が無くなる寸前、彼女は確かに見た。

今にも泣きだしそうな程に儚げな、彼の横顔を。

南舎の搬入口から無事に脱出することに成功した帝督は、その出  
口で風を待っていた。一人で先に警備員アンチスキルの詰所に行こうかとも考え  
たのだが、やはりこれ以上人数がバラけてしまうのは痛い結論を  
出し、近くの外壁に寄り掛かって風を待つことにしたのだ。

「遅っせーなあ風。まさかやられたか？」

やることなく時間を持って余しているせいか思ってもいないことがつい口をついて出る。

風がやられる？ そんなことは有り得ない。能力が使えなかつたがこの考えは決して覆らない。根拠など一つも存在しないが、強いて言うならば小さい頃からの付き合いだからだ。

それよりも、と帝督は思考を変える。

(あの赤髪野郎……、一体何者だ？)

脳裏に過るのは大規模な揺れがあつた時に視界に捉えたアシンメトリーの赤髪の男。どう見ても一般人とは思えない、むしろこの騒動の根幹に関わっているのではないかと思わせるほどに帝督にはあの男が異常に見えた。

と、そんな時だ。

聞き慣れた声が、自分の名前を呼んだのは。

その声が出た方に顔を向ければ、帝督の予想通りの人物がこちらに向かって走ってくる。その人物を見た瞬間、彼はニツと口元を吊り上げた。

搬入口を駆け抜ければ、そこには見知った人物が腕を組んで外壁に寄り掛かっていた。

「帝督!!」

「よう風。無事みてえだな」

「当たり前だろ」

軽口を叩き合い、お互いの無事を確認すると二人は揃って警備員アンチスキルの詰所へと走り出す。軍霸たちからは大分遅れをとってしまったが、まだ追いつけない差ではない。

走るペースを若干速めつつ、詰所へと向かう途中で帝督が口を開いた。

「なあ風、さっきの揺れのことなんだが……」

「ああ、あの地震みたいな」

「あの揺れの犯人かもしれない奴を見た」

「はあ!？」

突然のカミングアウトに思わず吹き出す風だったが、帝督がふざけているわけじゃないと分かると直ぐに表情を引き締めた。



「……本当か？」

「赤い髪の奴だった。長点上機学園から距離はあったが確かにソイツと眼が合った」

「ならソイツのことを調べるためにも、早く支部に行かねえとな」

「おう」

言つて、二人は詰所の前に集まっている人ばかりを発見した。なんだか見覚えのある幼馴染、根性漢、最近知り合った後輩。

言つまでもない、楓に軍覇、星奈たちである。

なにやら楓が『入れないし！』と喚いているのが聞こえてきたため、電子ロックが解除できないのだろうと凧は思いながら彼女たちのもとへ合流するのだった。

第七学区の今は使われていない廃ビル。裏路地に位置しているせいか昼間だというのに辺りは薄暗く埃っぽさが拭えない、そんな廃ビルの一階を一方通行は歩いていった。

カツコツと足音が反響する中、彼はエレベーターの前で立ち止まるが、電気がきていないために動かないことを思い出して小さく舌

打ちし踵を返して階段で地下へと向かう。取り壊し予定でもあるのか、階段を下っていくとあちらこちらにそれらしき機材がぞんざいに置かれており、それらに適当に眼をやりながら一步通行はさらに地下へと下りていく。

最終的に一方通行がやってきたのは、日の光など全く届かない地下十四階。切れかけた蛍光灯が怪しく明滅を繰り返す通路を通って目的の部屋で立ち止まる。

一步通行はノックをすることなくベクトル操作によってバガンツ！！と扉を破壊し、ズカズカと部屋内に入っていく。

内部は研究室のようだった。

幾つかのデスクに学園都市製のパソコン、試験管やビーカーのようなものまで見える。どういう理屈かこの部屋にだけは電気がきているらしく、明るい部屋の奥から現れた汚れた白衣を纏った青年が小さく手を挙げた。

「やあ、ご苦労だったね一方通行」

「御託はいい。さっさと用件を話せ」

取りつくしまもないとはこのことか、と青年は苦笑してビーカーで温めていたコーヒーをマグカップに注ぐ。

湯気のたつコーヒーをズズツと一口含んで、彼は言った。

「単刀直入に聞くよ。第三位はどうした？」

「殺した」

「祢遠から話は聞いたけど、なんであの場面で乱入なんかしたんだ

い？」

あの野郎話しやがったのか、と内心で毒づく一方通行だがそれを表情には出さず、青年の質問に淡々と答えていく。

「あいつが出るまでもねエだろ。俺一人で充分だ」

「ふむ。まあそれならそれでいいんだけどさ、始末はちゃんとしたんだろうね？」

「当たり前だ」

「そう。ならこの話はこれで終わりだ、仕事の話をしようじゃないか」

言って、青年は机の引出しから何枚かの資料を取出して一方通行のほうへと差し出す。クリップで止められた数枚の資料を受け取り、それに眼を通そうとペラツと捲った瞬間、彼の身体が凍りついた。

「それが次の君の仕事だ」

残ったコーヒーをぐいっと飲み干して青年は言う。

「天塚あまつが……、テメエ……！！」

憤慨する一方通行だが、天塚と呼ばれた青年は全く動じない。むしろ楽しんでいるかのようにその口元は吊り上っていた。

「さあ頼んだよ。ギブアンドテイク、そうだろ？」

「……ッ!!」

一方通行が握りしめた資料の表紙には、こう書かれていた。

高能力者処分リスト

第63話 少年の苦悩（後書き）

アンケート途中経過

1・ 1票

2・ 1票

3・ 1票

好みが分かれるんでしょうか（笑）

第64話 とびっきりのヒーロー（前書き）

お待たせしました。

今回短いですすいません（<―>）

でも後悔はしていない！笑

そんなわけで第64話です。

アンケートの途中経過はあとがきに。

## 第64話 とびっきりのヒーロー

御坂美琴という少女は感情的、直情的な勝ち気な少女だ。それは良く言えば素直、悪く言えば短気とも言える。

目の前で困っている人が居たら助けるだろうし、友人が傷付けられたのなら黙ってはいない。そんな性格であるから人望があるのだろうし、超能力者（レベル5）の広告塔としても成り立つのだろう。

しかし、そんな彼女だからこそ。

目が覚めた時に見知った病院のベッドの上だということが納得が行かなかった。

ここは第七学区の『冥土返し（ヘヴンキャンセラー）』が勤務する病院。その一室で美琴は意識を覚醒させた。

「ここは……っ」

ズキン、と加瀬に殴られた腹部が悲鳴を上げる。それによって美琴は支部での出来事を思い出したが、

（……何で私は生きてるの……？）

加瀬祢遠と名乗った女性。

彼女は確かに『ばいばい』と言った。あの言葉が冗談でなかった

ことくらい分かったし、だからこそ死をも覚悟したのだが、目覚めてみれば真っ白なベッドの上だ。

話が繋がらない。

「おや、目が覚めたんだね？」

そんな深い思考の海に沈む美琴を呼んだのは、白衣を纏った壮年の男性。名札のところにカエルのシールを貼っているのは狙っているのかいないのか定かではないが、『冥土返し（ヘヴンキャンセラ―）』ことカエル顔の医者だった。

「全く、今日は大忙しだよ。意識を失う学生が何百人と運び込まれてくるし、君みたいな怪我をした学生も次々にやって来るんだ」

病室の入口辺りの壁に寄り掛かってそう言うカエル顔の医者は一度美琴のほうへと視線を向け、

「……その怪我、相手は素人じゃないね？」

「……ッ！」

ハッとなつて美琴はカエル顔の医者へと顔を向ける。

「その怪我、一歩間違っていたら内臓を損傷していたかもしれないんだね？」

「……っ」

「先に言っておくけど、その状態で病院から出ることはこのボクが



許さない。絶対安静、これが今の君の仕事なんだね」

美琴が何か言うよりも先にカエル顔の医者は釘を刺した。彼女の性格を考えれば当然の対応だろう。

「それに彼もこれを予想して君を此処に連れてきたんだろうしね？」

「彼……？」

美琴の頭上に疑問符が浮かぶ。現状、彼女は何故この病院のベッドの上にいるのか理解できていないのだから無理はないが、美琴には全く心当たりが無かった。

（殺される寸前だった私を助けてここまで連れてきた……？ 一体誰が？）

そんな美琴の疑問など解りきっているとしてもいうように、カエル顔の医者は口を開いた。

「一方通行、と言えば解るかな？」

「……！」

一方通行？ 彼が私をここまで運んだというのか。何故？

そういえば彼と別れる前、この騒動には首を突っ込むなと忠告を受けた。そんな程度で引き下がるわけがなかったからあのまま騒動の解明を試みていたが、結果はこのざまだ。

「なんだか彼はとても悲しそうな表情カオをしていたよ。君ともう一人を抱えてここまでやってきた時も無言で去っていったからね」

「もう一人……?」

「君の隣のベッドに居るだろうか?」

言われて美琴は左隣のベッドとの仕切りになっていたカーテンを勢いよく開く。

そこに眠っていたのは、親友の一人である花飾りを頭に乗つけた少女。

「初春さん……!!」

「安心するといい。彼女に外傷は全くない、軽い脳震盪だよ」

それを聞いて安心した美琴だったが、ここで先ほどの疑問が再び浮上する。

どうして一方通行は殺されかけていた私を救いこの病院まで運びこんだのか。

それにこの騒動が起こっている中彼が普通に能力を使用していたことも気にかかる。加瀬と言った女も『完全同化』なる能力を使用していたことから、両者には何か関係があるのではないだろうか。とにかく、先ずはこの病院を出ないことには始まらない。

のだが。

「言った筈だね? 君はしばらく絶対安静。この病室から必要以上に出ることは一切禁止するよ」

またもや美琴の心理を読んでいたカエル顔の医者に釘を刺されてしまった。

そんなに自分は考えていることが顔に出てしまっているのだろうか、と若干凹みながらも美琴はそれに反論する。

「こんな所で油を売ってるわけにはいかないのよ！ 急がないと学園都市はあいつらに……！！！」

「きつと彼は君の行動を予測した上で此処に連れてきたんじゃないかな？」

「え……？」

「君は素直過ぎるからね。 目覚めればこう言いだすことを彼は分かってたんだね」

意味が解らない。 美琴はカエル顔の医者言葉を黙って聞いていた。

「今更外に出た所で何処も危険でいっぱいだ。 それこそ二の舞になることは目に見えている」

「っ……」

静かに、カエル顔の医者は続ける。

「一方通行は君をこの病院に入院させることで、危険から守りたかったんじゃないかな？」

言われて、美琴は言葉を失った。 一歩通行が、自分を守るために

この病院に連れてきた？ そんな証拠はどこにもないし、カエル顔の医者を買勝手な妄言かもしれないが、不思議と腑に落ちている自分がいることに美琴自身気が付いていた。

「君たちの事情は知らないが、外は危険だ。身を挺して守ってくれた彼の思いを無碍にすることは僕には出来ない。だから君はここにいろ。彼と、彼の友人たちに任せろんだね」

「え……？」

カエル顔の医者が言った『彼の友人』という単語に反応してカエル顔の医者顔の顔を見てみれば、うっすらとした笑みを浮かべていた。

「友人つて……」

「彼が去り際に言ったんだよ。来るなど言っても絶対に来る往生際の悪い友人たちが、この事件を解決するだろうつてね」

一方通行の友人。そんなもの態々言うまでもない。既に美琴の脳内では完全に誰かわかっている。

ニツと笑うカエル顔の医者と同調するように、美琴もまた口元を吊り上げた。

そうか。

あいつらか。

なら、ここは一方通行の厚意に甘えようじゃないか。ヒーローは遅れてやってくるとはよく言ったものだ。

もうすぐやって来るんじゃないか。

超能力が使えなからうが関係ない。絶対に揺らがない芯をもつ、とびっきりのヒーローが。

## 第64話 とびっきりのヒーロー（後書き）

アンケート途中経過

1・1票

2・1票

3・3票

コラボが票を集めつつあります。そうならばまずはこの駄作とコラボしてもいいという作家様を見つけないと……！！

アンケートまだまだお待ちします！！

詳しくは第62話のあとがきに。

## 第65話 彼女の名は

電子ロックとは本来防犯のために電気を使ってロックやロック解除を行う鍵である。

殆どが二十四時間オートロック設定のため、ドアを閉めるだけで自動的にロックされ非常に便利な代物だ。

ここ学園都市中ではこのオートロック式の電子ロックは風紀委員ジャッジメントの支部や警備員アンチスキルの詰所、教師用のマンションなどで採用されており、ホテルの部屋のオートロックのように締め出される危険を防ぐためカードや暗証番号、はたまた指紋や網膜といった生体認証によってロックを解除できる機能が取り付けられている。

それはつまり風たちの目の前に聳え立つ警備員アンチスキルの詰所も、例に漏れずこの電子ロックがついているというわけなのである。

もしこの電子ロックが生体認証や教師しか所持していない専用のカードだったならばこれまでの風たちの努力は水泡に帰してしまふところだったが、不幸中の幸いにもこの電子ロックには電卓のような数字が書かれたキーが幾つも並んでいた。

つまりこれは暗証番号で解除するタイプの電子ロックだ。

「つつつてもどうやってこの暗証番号を当てるかだよなあ……」

電子ロックの前で風は頭を抱えた。回りの連中も解除の見当がつかないらしく各々難しい顔をしている。

「適当に押してみたら？」

とりあえず、といった感じで楓が凧に提案してみるが、

「いや、多分この電子ロック何回か間違えたら認証できなくなるやつだ。無闇に押してダメでしたじゃそれこそ無駄だろ」

学園都市中製の電子ロックに限った話ではないが、こういったものには入力制限が設けられている。大体のものは入力を三回間違えるとエラーを起こして入力自体が出来なくなり、質の悪いものになるとそのまま通報するものまである。

「じゃあどうすれば……？」

「うーん……、美琴が居ればなあ……」

御坂美琴は学園都市最高の『電気使い（エレクトロマスター）』。彼女ほどのレベルになれば電気信号を解読して電子ロックを解除するなど赤子の手を捻るよりも簡単なことだ。

ジャッジメント  
事実風紀委員第一七七支部にも無断で出入りしているし。

「とは言っても今はアイツも能力が使えないのか……」

「だはあ、と大きな溜め息が凧の口から吐き出される。

能力が使えたならば帝督や軍覇の能力でどうとでも出来たのだが、今は兩人とも一介の高校生。

「ここをスルー……ってわけにもいかねえしな」



風たちが目指すのは第七学区の白井たちが所属する風紀委員第一  
七七支部。ただでさえ第七学区は学生が密集している学区だ、手ぶ  
らで向かうには不安とリスクが大きすぎる。

この七人という大所帯は暴走した無能力者（レベル0）たちの格  
好の獲物になるのは目に見えているからだ。

「俺が全力でこれ殴ってみるか？」  
「やめる」

軍覇の提案をすぐさま一刀両断する。  
万が一それで機械が暴走でも起こしたら一貫の終わりだ。

「あ、あの！」  
そんな時だ。

「わ、私にそれ見せてくれませんか!？」  
少し頬を赤らめた星奈がズビシッ!! と勢いよく手を挙げてそう  
言ったのは。

「……すげ」

風は開いた口がふさがらなかつた。

理由は簡単、今目の前で電子ロックを弄っている蘭星奈にある。

「これは学園都市と提携してるマーベラスロック社の最新モデル……。このモデルなら……」

などとぶつぶつ言いながらいそいそと手を動かしている我が校の後輩。

確か警備員アンチスキルの詰所は嚴重なために暗証番号も四桁や五桁なんかではなかつた筈だが、そんな風の考えなどどこ吹く風とばかりに星奈は理解不能な作業を経て二つ二つ番号を探り当てていく。

そして電子ロックについていた赤いランプが緑に変わった瞬間、プシューッと自動扉が開いた。

当人の星奈は腕でおでこのあたりを「ふいー」と言いながら拭いて満足げに、

「開きましたよ」

彼女の物凄い個性とくぎが発覚した。

アンチスキル  
警備員詰所の内部は業務用のシステムデスクに大量の書類が詰め込まれた大きな棚。コーヒーマーカーなんてものまである。言ってしまうえば職員室のようなものだ。

ただ一つ違うのは、椅子や机の上に置かれたヘルメットや防弾ベスト。  
そして。

「お、この部屋みたいだな」

帝督が開いた扉の先にあったのは、武器庫のような空間だった。綺麗に並べられた警棒やゴム弾専用ライフルなど何種類かの学生鎮圧用の道具を凧たちはそれぞれ手に取る。

「うおッ！ これって軍隊が採用してる最新モデルじゃねえか！！」

「マガジンの中は流石に全部ゴム弾やペイント弾だけだな」

なにやらM4のような銃を手に取って驚いている帝督に凧はマガジンの中身に目をやりながら答える。

そんな凧は何やらロッカーの扉を順番に開き、中を物色し始めた。

「一条先輩、何してるんですか？」

凧の背後から声を掛けてきたのは先程驚くべき特技を披露した後輩、蘭星奈である。

「おう蘭。ちょっと警備員アンチスキルの武装を拝借しようと思ってさ」

教師たちの個人ロッカー内部をゴソゴソと物色する凧の目的は携帯型のインカムだ。それを装着していれば装着した者同士で連絡が取れるため、万が一離れ離れになってしまった場合でも対処することが出来る。

「あつたあつた。これだ」

「インカム、ですか？」

「ああ。これがあればそれぞれ離れた所に居ても連絡がとれるだろ」

それぞれのロッカーから人数分のインカムを（無断で）拝借した凧はそれを各人に配布する。

皆思い思いの装備を着用し、暴走した無能力者（レベル0）に対応できるよう準備していく。

「ん？ 着信？」

ふと凧はポケットに仕舞い込んでいた携帯が震動していることに気がついた。

取り出してディスプレイに目をやればそこには見知った従妹の名前。

「もしもし、美琴か？」

御坂美琴からの着信だった。

「ああ。今から第七学区に向かうつもりだ……は？襲撃!？」

受話器越しに聞こえてくる内容に耳を疑うも、どうやらそれは事実であるらしかった。

「大丈夫なのか!? ……わかった。直ぐにそっちに向かう」

そう言って風は終話ボタンを押して通話を終わらせた。

「風、どうしたの?」

「状況が変わった。第七学区にある病院に向かう」

「おいおい風。とりあえず状況を説明しろよ」

「……美琴たちが居た風紀委員の第一七七支部が襲撃された」  
ジャッジメント

「!?!」

その場に居た全員が固まった。無理もない、襲撃などこれまで何処か遠い国の出来事のように感じていたのが突如その中心に放り込まれたのだ。

改めて感じる身の危険に恐怖したのは特に星奈たち一年生の三人だ。彼女たちは本当にただの高校生だ。風や帝督、軍覇のように超能力者（レベル5）でもなければ、風紀委員などでもない。

学園都市という科学の最先端都市のぬるま湯に浸かりきっていた彼女たちに非はない。

むしろこの状況が異常なのだから、誰も責められやしないだろう。

「それで、美琴ちゃんは……？」

「腹部に攻撃を受けたらしいが問題はないらしい。今は意識もはつきりしてる」

「そう……」

安堵の息を吐く楓に対し、帝督の表情は強張ったままだ。

「風、御坂は誰に襲撃されたんだ？」

最も重要、もしかするとこの一連の事件の根幹に関わってくるかもしれないことを帝督は口にした。

美琴が暴走しているとはいえ大人数でも無い限り無能力者（レベル0）にやられるとは考えにくい。現在彼の脳内で最も容疑者としての可能性が高いのが、長点上機学園から眼が合った赤髪の男。何か得体の知れない、のっぺりとした不快感が帝督の心中で渦巻いていた。

「それは俺たちが向こうに到着してから話すってさ。どうやら色々と事情がありそうだ」

「そうか……」

納得の行く答えが得られるのは病院で直接御坂と面会してからかと帝督は一応の形で得心し、机に立てかけてあったゴム弾専用のライフルを手取る。

「みんな準備は出来たみたいだな」

凧は周りを見渡して全員がそれぞれ道具や武器を持っていることを確認すると、

「行くぞ。こっからが本番だ」

現在凧たちの居る第一八学区から美琴が居る第七学区までは歩くとかなりの距離がある。幸いなことに電力自体はまだ異常をきたしていないため、無人のモノレールなら今も通常通り稼働しているはずだ。それならば大して此処から距離はない。七人という大所帯であつても何とか第七学区へと向かえるはずだ。

意を決した凧たちは、暴走無能力者の蔓延の外へと飛び出した。目指すは美琴の居る病院。もしかしたらそこでこの事件の真相が解るかもしれない。

手にした特殊警棒を握りしめ、凧は第一八学区を駆ける。

何も無い。

ここには、何も有りはしなかった。

無機質な研究室。見るだけで痺ましく、吐き気さえも催す実験器

具の数々。

実験結果の数値を伝える研究員であろう男たちの声だけが、彼ら  
が自分と同じ人間であるということを確認させた。

特例能力者多重調整技術研究所。通称、『特力研』。  
虚数研、叡智研。

ここ学園都市の暗部には頭のイカれたマッド・サイエンティスト  
たちによる人体実験が行われている。それは目を背けたくなるよう  
な内容のものばかりで、体のいい実験名をデータ上で明記してい  
るが実際のところはチャイルドエラーや特殊な能力を発現させた能  
力者を悪戯に壊しているだけだ。

一方通行はこれを端的に地獄と言った。

しかし。

青年、天塚葵あまつかあおいはそれを否定する。

地獄とは、こんな生易しいものではないと。

一方通行に書類を渡し、彼が部屋から出て行ったのを確認すると  
葵は静かに瞼を閉じた。

瞬間、脳裏に焼き付いて離れない思い出したくもない光景が鮮明  
にフラッシュバックしてくる。

噴水のように溢れ出す鮮血。抉り出される臓器。断末魔のような  
悲鳴。

その全てが葵を引きずり込まんとしているのを感じ、葵はゆっく  
りと瞼を持ち上げた。

「……………桔梗……………」



消え入りそうなほどに小さな声で葵はそう呟いた。

もう一度、あの日に戻れるのならと何度思ったことだろう。  
お前を救う為に、何度拳を握ったのだろう。

もうすぐだ。

葵の顔が邪悪に歪む。そこにあるのは純粹な憎しみ。

「もうすぐだよ桔梗。俺たちが……学園都市を変える」

## 第65話 彼女の名は（後書き）

アンケート途中経過

1・1票

2・1票

3・5票

という感じでコラボ案が突っ走っています。

まだまだアンケートへのご協力お待ちしています！！

## 第66話 守るべき幻想（前書き）

活動報告にも書きましたが実家に帰省中でした。  
いやあ実家っていいですね、癒されます。

まあそんなわけで第66話です。

## 第66話 守るべき幻想

『特殊』、『希少』といった言葉が使われるモノは大抵の場合研究価値や利益といった面で重宝される。

それは他とは違い圧倒的に数が少ないからであったり、難解だったりするからなのであるが、学園都市だけに限ってしまえば真つ先に挙げられるのは『超能力』だ。

学生の脳を様々な理由をこじつけて開発と称し弄り、超能力を現させる。不思議なもので、小学生が能力開発を受け全く同じカリキュラムを受けても発現する能力というのはそれぞれ違う。

ある者は『発火能力』<sup>バイロキネシス</sup>であったり、またある者は『水流操作』<sup>ハイドロハンド</sup>であったり。そういった割とポピュラーな能力に目覚める者もいれば『空間移動』<sup>テレポート</sup>のような学園都市内で数えるほどしかない『希少』な能力に目覚める者もいるのだ。

天塚葵という青年もまた、そういった『特殊』な能力に目覚めた者の一人だった。

彼は所謂『チャイルドエラー』<sup>モルモット</sup>だった。

身寄りもおらず、また特異な能力に目覚めた葵は研究員たちからすれば格好の実験動物<sup>モルモット</sup>だっただろう。

直ぐ様彼はとある研究所へと引き取られた。

薄暗く、冷たい研究所。葵はそれだけで理解した。理解してしまつた。ここが研究所とは名ばかりの人体実験場であるということに。当時一〇歳だった葵が研究員に連れられ通された部屋には十数人の子供たちが居た。上は一五歳くらいの少年から下は六歳くらいで

はないかという少女まで様々だが、子供たち全員に共通していたのは彼らが『特異』な能力に目覚めていたということだ。皆一様に俯き、その眼に生氣など存在していなかった。

逃げ出すこともできず、ただ自分の命が消えるのを待つことしかできない。牢獄、という表現がピッタリなその部屋で葵もやがて表情を失った。

言葉を発することもせず、毎日繰り返される実験を淡々とこなすだけ。この部屋に入って初めて言葉を交わした一つ年下の少女は、その一週間後忽然と姿を消した。初めて一緒に食事を摂った同い年の少年は、翌日耳をつんざかんばかりの断末魔と共に肉塊へと成り果てた。

それを特に悲しむわけでもなく、手にしていた書類に何かを書き記していく研究員たちを見て葵は確信する。

嗚呼、此処は狂ってる。

此処では感情は邪魔にしかない。

余計なモノは、捨ててしまおう。

天塚葵の精神は完全に崩壊した。

もう二度と戻ることはない。そう思っていた。

彼女が現れるまでは。

「くそ……ッ！」

第一八学区にある駅構内。あと少しで第七学区へと向かうモノレールに乗り込めるというタイミングで、最も遭遇したくない者たちと遭遇してしまった。

言うまでもない。暴走した無能力者（レベル0）だ。

改札の手前に彼らの姿を確認し、凧たちは現在一時的に近くの階段に身を潜めている。

「どうする。これ使って強行突破するか？」

帝督が持っているゴム弾専用ライフルに目をやりながら言う。このゴム弾は学園都市製で殺傷能力を極限まで抑えつつ、適格に意識を刈り取る優れたものだ。弾には限りがあるため早々多様したくはないが、こういった場合の為に態々警備員アンチスキルの詰所から拝借してきたのだ。出し惜しみもしてられない。

「見た所数は四人。この人数なら無駄弾を使うよりも近接戦で対処したほうがいい。俺と軍覇で行く、帝督はここから援護してくれ」

「りょーかい」

「任せろ凧!!」

ジャキッ、と三段式の特殊警棒を握る凧と素手の軍覇が静かに立ち上がる。

「…………え？ お前素手？」

「おう」

何も持っていない軍覇に対して凧が尋ねる。確か詰所に居た時は凧と同じ特殊警棒を手にしていた筈なのだが。

「警棒持ってたよな？」

「どっかで落とした」

意味ねーじゃねーか！！ と叫びたくなるのを何とか堪え、その変わりに盛大にため息を漏らす。

「つたく…………。素手で行けるんだな？」

「当然だ！！！」

今更聞くなと言わんばかりに声を張り上げる軍覇。

それが開戦の合図となった。

暴走無能力者たちがその声に反応して凧たちを捉えたのだ。

「行くぞ軍覇！！！」

「おうよ！！！」

先手必勝。

凧と軍覇は階段を駆け下り暴走した四人のもとへと正面から突撃していった。

繰り出される突風に怯むことなく、迫り来る大質量の水を掻い潜り暴走無能力者の一人の懐まで潜り込んだ凧は手にしていた特殊警棒を目の前の学生の腹へと叩き込んだ。

バリッ！！

という音と共に警棒が紫電を撒き散らし、暴走した無能力者（レベル0）は意識を失ってその場に崩れ落ちた。

凧が握っている黒光りの特殊警棒の根本にはボタンが設けられており、それを押すと高圧電流が流れる仕組みとなっている。ちなみに警棒の素材は電気をよく通す学園都市製の特殊金属で出来ている。

「おらあ！！！」

凧のすぐ隣では軍覇が学生の一人に右ストレートを叩き込んでいた。能力が使えないため『アタッククラッシュ念動砲弾』ほどの威力はないが、それでも学生の意識を刈り取るには十分な威力があったらしい。

残りの二人も同様に倒し結果として、凧と軍覇はあっさりと暴走無能力者の鎮圧に成功した。

「なんだ歯ごたえがねえな」

「手ごたえな」

思い切り間違えている軍覇を訂正し、凧は周囲を見回す。



(この辺りにはもういないか……?)

とりあえず周囲に他の人間の気配はしない。凧は階段で待機していた帝督たちにインカムで連絡し、七人全員が改札を突破した。

モノレール自体は案外早くやってきた。完全に機械化され運転も停止も自動なこの代物、車内はやはり誰も乗っていないかった。

「当たり前っっちゃあ当たり前か」

「だろうな。こんな時に呑気にモノレール乗る奴なんざいねえよ」

無人の車内でそういう凧と帝督は流れていく外の風景に目をやり、そして絶句した。

「なっ……!!?」

「オイオイまじか……!!」

いつもならば学生の通学路として賑わいを見せ、周りに出店なども出ていた第七学区の大通りは今や見る影もなかった。

デパートのショーウィンドウは破壊され無惨にガラスが砕け散り、暴走した学生の仕業があちこちで火の手が上がっていた。

流れていくそれらの風景に焦燥と怒りが募る。

誰だ。誰が学園都市をこんな風にめちゃくちやにしゃがった。

「誰が首謀者か知らねえが、問答無用でぶっ飛ばす……!!」

凧は強く拳を握った。

第七学区は第一八学区の隣に位置する学区だ。モノレールならば二十分ほどで学区内に入ることができる。移りゆく景色も徐々に変化していくのが分かった。

凧を含む七人は全員が同じ車両に乗車している。車両の前方には凧、星奈。真ん中あたりに帝督と楓。そして後方に軍覇と由紀、恵だ。他に乗客が居ないためか少々多めにスペースを取っている。

しかし、その行為が仇になった。

バゴンッ!!

という轟音と共に突如としてモノレールが輪切りにされたのだ。

「!?!」

予想だにしない事態に頭が真っ白になるが、直ぐに緊急事態であると悟った凧は叫ぶ。

「凧!!」

「ふえ!?!」

咄嗟に一番近くに居た星奈の手を取り自分のほうへグイッと抱き寄せる。このモノレールが走っているのは地上約十五メートル。そのまま落下したらまず只では済まない、瞬時に判断した凧は星奈を庇うようにして抱きながら落下していく。

(チッ……!なんとか受け身とらねえと……!!)

落下の最中にふと後方に目をやれば、凧と同じく楓を庇って落下していく帝督の姿が見えた。

(……いかん。羨ましいとか今はそんなこと言ってる場合じゃねえ！！地面が直ぐそこまで来てる！！)

グイッと強引に身体を反転させた凧は星奈に負担がかからないように気をつけながら柔道の受け身の要領で背中から地面に激突した。

ゴドンッ！！

と鈍い音がコンクリートの地面に響き渡る。

「い、一条先輩……！」

凧の腕の中に居た星奈が慌てて声を掛ける。幸いにして彼女はかすり傷一つ負うことはなかった。

「つつ……」

しかし、やはり凧は無事では済まなかった。

それも当然と言えば当然だろう。

高さ十五メートルからのダイブなど自殺行為に等しい。能力が使えたならば空気中の水分子を操作して緩衝材にすることもできたが、現在彼はただの高校生。近くにはクッションになるような茂みなどもなく、よってコンクリートへと何の対処もしないまま落下したのだ。

気休め程度に受け身をとってはみたものの、それもこの高度では

あまり意味がない。精々痛みを和らげる程度のものだ。

「ッ……、ガハッ！」

肺が圧迫され潰れそうになる。

身体中の骨が軋み悲鳴を上げる。

それでも、何とか風は立ち上がった。

「……蘭、大丈夫か……？」

「私は大丈夫です。それより先輩がつ！！」

「帝督たちとは……、チッ。随分離れちまったみたいだな……」

周囲を見渡して帝督たちを探してみるが、それらしき人影は見当たらない。

時速一二〇キロで移動するモノレールから放り出されたのだから距離が出来てしまうのは仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「それよりも……、何だっぺいきなりモノレールが輪切りにされたんだ……」

星奈の肩を借りてとりあえず移動を開始する風たち。此処は人目に付きすぎる。ただでさえ能力が使えないというのに今の一件のせいで所持していた特殊警棒もどこかに落としてしまった。更にこの騒ぎだ、すぐにでも暴走無能力者がやって来るかもしれない。

「解りません。でも能力者の仕業には間違いないですね」

「……まさか美琴たちを襲撃した奴らか？」

だとしたらマズイ。

狙われているのは恐らく美琴と同じ超能力者（レベル5）。  
星奈まで巻き込まれてしまう可能性がある。

「蘭、お前先にあの病院に行け」

「え……？」

「俺を抱えたままじゃ時間のロスだ。早くこの事件の真相を知らないといけない」

「そんな！先輩を置いていきません！！」

断固として拒否の構えを見せる星奈に、凧は耳をトントンと指で叩いて言った。

「何のために詰所からインカム拝借してきたんだよ……。こういう状況でもお互い連絡が取れるようにしろ。俺は大丈夫だ、少し休んですぐに追いつく。……だから、行け」

それ以上、凧はもう何も言わなかった。

そしてそれは星奈も同じ。

「……………」

無言のまま一度だけ頷き、星奈はカエル顔の医者が勤める病院へと駆け出した。

「……ッ」

星奈が見えなくなったのを確認すると、凧はビルとビルの間細い路地へと這うようにして入っていき、壁に凭れかかるようにして崩れ落ちた。

「……ッハア、ハア」

モノレールから落下したダメージは思った以上に凧の身体に蓄積されていた。一歩歩くたびに身体中に激痛が走る。体内の臓器が引っ掻き回されているかのような痛みで顔を歪めながら荒い息を吐き続ける凧に、インカムからの音声が届いた。

『誰か聞こえてる！？』

聞き違えるはずもない、幼なじみの声だ。

『誰か聞こえない！？誰か！！』

確か凧は帝督と一緒に落下していたはずだ。その凧がこうして叫んでいるということは帝督は凧を守ったということだろう。

凧の問い掛けに答えてなりたいが、その余裕さえも最早なかった。

（クソッ……、他のやつらは無事なのか……？）

いや、それもあるがと凧は思考を中断してモノレールの残骸が横たわる大通りにチラリと目を向ける。

（あんなことが出来るのは能力者しか考えられない。でも今学園都

市では能力が使えない……。てことはやっぱり……)

「正解だ」

凧の思考をまるで読んだかのように、唐突にその声が割り込んできた。

カッン、コッンと地面を鳴らす足音が凧の方へと一歩ずつ近づいていく。

「……誰だ、お前」

痛む身体を無理矢理動かして声がした方向に顔を向ける。

「そうだな。規格外の能力者ってところだ」

そこに立っていたのは、指に幾つもの指輪を嵌めた大男だった。

第七学区の病院は看護師が廊下を忙しなく行き交い、患者が次々に運び込まれ半ば騒然としていた。

「緊急患者です!!」

「部屋に運び込め!こちらは手一杯だ!!」

運び込まれてくるのは学生ばかり、しかも決まって外傷はないのだ。検査したところによれば運び込まれてくる学生の九割以上が脳に異常をきたしているということが判明した。

そんな検査結果が記された書類を机の上に置いて、カエル顔の医者は小さく息を吐いた。

「これは明らかに脳の容量を超えている。これでは回路が焼ききれてしまう可能性だってあるんだね」

顎に指を添え、無言で考えを巡らせるもそれらしい解答は導き出されない。運ばれてくる学生はいずれも無能力者(レベル0)、脳内の回路が焼き切れる寸前で意識を失い倒れて此処に搬送されている。

「一体何がどうなっているんだ……」

カエル顔の医者が眉間に皺を寄せそう呟いている丁度その頃、美琴の隣のベッドで療養していた頭に花飾りを装着した少女、初春飾利が目を覚ました。

「ん……、ここは……?」

「初春さん!!」



初春が目覚めたことに気がついた美琴が自分のベッドから飛び降りて初春のベッドの脇へと移動する。

「御坂さん……？私は……」

まだ意識がはつきりとしていないのかぼんやりと呟く初春だが、瞬時に何があったのかを思い出した。

「だ、大丈夫ですか御坂さん！！ケガとかしてないですか！？」

「え、ええ平気よ。心配してくれてありがとう」

「そうですか、」

ホッと胸を撫で下ろす初春。自分も入院しているのだから人の心配をしている場合ではない筈だが、それはどうやら棚に上げているらしい。

「初春さんこそ大丈夫？あの医者が言うには軽い脳震盪らしいけど」

「あ、はい。問題ありません」

そう言う初春の頭上にはやっぱり花飾り。あれ初春さんが眠っている間に取り外そうと思ったけど出来なかったのよねえ、とどうでもいいことを考えていた美琴だったが、次に初春が口にした単語で一気にそんな考えは吹き飛んだ。

「一方通行さんが！一方通行さんが言っていたことがあるんですッ  
！！」

『高能力者処分リスト』。

そう書かれた書類を握り締め、白髪の少年は第七学区のとある路地裏を歩いていた。

陽が届きにくいのもあつて薄暗く、ひんやりとした冷たい空間を一人歩く一方通行の表情は苛立ちに満ちている。

（天塚の野郎オ……！！）

苛立ちの原因は言わずもがな、天塚葵だ。彼の言いように動かされているという憤りと、それに抗えない自分の弱さとは相まって今の彼を苛立たせていた。

『高能力者処分リスト』、その名の通り高能力者を処分するため  
のリストだ。中には処分する人間の個人情報などが記載されている。

こんな仕事、全うな人間ならば行える筈がない。一方通行は舌打ちする。

(クソツタレ……、あの野郎才俺が出来ないと分かっただけこの書類を渡しやがった……！)

一度は手を切っていたかと思っていた学園都市暗部。しかし、この闇は簡単に一方通行を手放そうとはしなかったようだ。

(俺をもう一度暗部に……？ハッ、くだらねエ猿芝居だ)

天塚葵は分かっているのだ。これを受け取った一方通行が取るであろう行動を。そしてそれがどんな影響を及ぼすのかを。

「……上等だ」

グシャ、と握り締めていた書類を更に握り潰し、一方通行は言う。

「思惑通りだろオが何だろオが、俺は俺のやりたいよオにやる」

静かに。

学園都市最強の怪物が動き出した。

それは誰の為でもない、自分の勝手な幻想を守る為に。

彼は再び堕ちてゆく。



## 第66話 守るべき幻想（後書き）

アンケートの結果コラボ案に決定しました！！

つきましてはこの小説とコラボしてやってもいいよという作家様を募集中です（<―>）

自分でもコラボについて他の作家様をあたってみますが……。よろしく願います。

（もしも何人かの作家様とコラボできることになった場合は複数話書くつもりです。）

## 第67話 為すべきコト（前書き）

この話を書き上げて思ったんですが、今回シリアス回なのかギャグ回なのか分からなくなってます（汗

それとコラボ案のお話ですが何人かの方からそういったお話をいただきました。本当に有難うございます！！

勝手とは思いますが今回はとある作品とのコラボとさせていただきます。

どの作品かはまだ明かせませんが、皆さん知ってると思う。

## 第67話 為すべきコト

病院には案外早く辿り着くことが出来た。緊急車両が入口付近に何台も停車され、内部も人でごった返していたがそんなことお構い無しに少女、蘭星奈はその中に突撃していった。

(病室は確か三階……。とにかく片っ端から探さないと!!)

耳に装着したインカムで誰かに尋ねれば早いだろうに、と思うだろうが、生憎と今の星奈はそこまで冷静ではない。

(一条先輩……!!)

自分を庇って傷だらけになった大好きな先輩。その先輩が、『行け』と言った。泣きそうになっていた私に、それでもそう言ったのだ。

(先輩のためにも、早く情報を!!)

階段を駆け上がる星奈の表情には強い決意が現れていた。

自分に出来ることをやる。

一見すれば簡単そうだが、実はとても難しいそれを、星奈は実行すべく最初の病室のドアを開いた。

「…………チツ、剛徳司め。また勝手に出ていったな…………？」

学園都市内部にあるとある研究施設。一見するとただの研究棟にしか見えない真っ白な建造物だが、実際には内部は全く異なる空間が広がっている。

西洋の城を連想させる広い空間にはこれまた西洋風のシャンデリアや骨董品が置かれ、真っ赤なカーペットが床を覆い尽くしている。そんな空間の中央に置かれた小さなテーブルと椅子に腰掛けて呆れたようにそう言ったのは二十歳くらいの女性。アッシュベージュの背中まで届く長髪を結び上げ、黒いタートルネックのセーターの上に白衣を纏うその女性は可愛らしいというよりも美しいという印象を与える。

「どしたの英吏<sup>えり</sup>」

と、そんな女性に声を掛けたのは英吏と呼ばれた女性とは対面に座る女性。

「ああ祢遠<sup>ねおん</sup>。剛徳司の奴が勝手に行動しているのよ」

「またあ？あの筋肉バカ今度は何しようってのよー」

肩にかかるほどの紺の髪を指で弄りながら祢遠は呆れたように言



う。

「どうせどっかの能力者でも狩りに行ったんでしょー？」

「おそろくね。奴は頭は良いのに辛抱ができないから」

「ほんつと頭が良いのかバカなのか分かんないわ」

それはそうと、と英吏は一旦話を切り上げて新たな話題を切り出す。

「第三位、超電磁砲はどうしたの？」

「ん？？なあんか第一位が殺したとか言ってたけど、実際は甚だ疑問だよねえ」

「葵はそれについては？」

「なーんにも。泳がせてるのかわらないけどそんなまどろっこしいことしなくていいのよね。どうせ皆殺しちゃうんだから」

「皆殺しが私たちの願いじゃないわ。学生をただの人間に戻すことよ」

「だとしても超能力者（レベル5）は処分なんですよ？」

「それは学園都市の根底にあるこれまでのプロセスを破壊するためよ」

「むづ。私そんな難しい話聞きたくない」

不貞腐れたようにむくれる祢遠。どう見ても二十歳を超えているのだが、その反応のせいか明らかに幼く見えた。

「……はあ。いいわ、剛徳司もそのうち帰ってくるでしょう」

「誰を狩ってるのかなあ」

日常とは明らかに逸脱している会話を続ける女性のうち一人は静かに背もたれに背中を預け、一人は興味無さそうに髪の毛を弄る。そんな彼女たちが『特異』な存在であることなど、学園都市の住人は知る由もない。

現れたのは身の丈二メートルはあろうかという巨体に黒のタンクトップ、その上から白衣を纏うという姿をした金の短髪の大男だった。

「よお。初めまして、でいいんだよね？」

「……？」

大男が言う言葉の意味が解らず無言で睨み付ける凧。  
その反応の意味を理解したのかすかさず大男が口を開く。

「ああそつだよな。俺とお前はこうして直接会うのは初めてだ。いや書類上では何べんもお前の顔写真とにらめっこしてたからよお」

(……何だと?)

痛む身体を無理矢理たたき起こし、凧は大男の進路を妨害するかのように対面に立つ。

俺の書類とにらめっこ?

そんなこと只の人間に出来るわけがない。

その理由は至って単純、俺が超能力者(レベル5)だからだ。

学園都市中の頂点、七人しかいない超能力者(レベル5)は最高級の機密として扱われそこの人間がほいほいと閲覧できるものではない。

もし本当に書類を手に入れているとしたら、今目の前に立っている大男は統括理事会クラスの権力を有しているのか、違法にハッキングして手にしたのかのどちらかだ。

「お前……、何者だ……?」

「さっきも言ったと思うんだがな、規格外の人間だと」

冷酷な笑みを浮かべる大男から放たれているのは、明らかな殺気だった。

瞬間、凧は確信する。

コイツは自分を殺しに来たのだと。

「自己紹介してもいいんだが、必要もないと思ってな」

五本の指全てに指輪が装着された手を開いたり閉じたりしながら大男は凧に向かって、

「どうせお前はここでくたばるんだ」

刹那。

凧の身体から、真っ赤な鮮血が噴き出した。

「ぬづ……。これからどつすりゃいいんだ」

「いや削板先輩。病院に行くって一条先輩が言ってたじゃないですか」

「そつだ凧！無事なのかーッ！！」

「（……ダメだ、会話が成り立たない）」

輪切りにされたモノレールから落下した軍覇、由紀、恵だったがこの窮地を軍覇持ち前のタフさが救い、とりあえず人目につかないように店員が居ないファミレス（当然客もいない）に入ったわけだが、話が全くとっていいほどに噛み合わなかった。

「ねえ恵。私がおかしいのかな？」

「大丈夫よ由紀。私も会話が成り立たっていないもの」

「凧！今行くぞー！！」

「ちょっとストップストップウウウウウウウウウウウッ！！」

テーブル席から勢いよく立ち上がり外に飛び出そうとする軍覇の腕を掴んでそれを阻む由紀。

「お、落ち着いてください削板先輩！！」

「そうですね。とりあえず今は何でモノレールが破壊されたのか考えましょう」

「悠長なこと言っていないで恵も手伝ってよッ！！」

必死に軍覇の服の袖を掴む由紀からのSOSを受けても恵はドリンクバーから勝手に淹れてきたコーヒーを飲んでいるだけで動かな

い。というか、いくら能力が使えないとはいえ男子学生、しかも能力が複雑すぎて研究者でさえも匙を投げた『最大原石』である学園都市第七位の超能力者（レベル5）だ。由紀の力だけで止められる筈もなく、

「うオオおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

ドガシャアアアアッ！！ という軽快な破壊音と共に窓ガラスを突き破った軍覇はそのまま猛スピードで走り去ってしまった。残された由紀と恵はというと、

「……ねえ恵」

「何？」

「助けてもらっておいて言うのもなんなんだけどさ」

「うん」

「あの人バカだろ」

第67話 為すべきコト（後書き）

次回はちゃんとシリアスになる……予定です。

**第68話 本物のヒーロー（前書き）**

連日投稿です。

今回ギャグパートは無いで（笑）



## 第68話 本物のヒーロー

『才能』とは得てして得られるものではない。

当人の望む望まないに関わらず、潜在的に存在する『才能』を人工的なプロセスを幾つも経て無理矢理に発現させたのが超能力というものだ。

段階的に言えば最も『才能』を持つ者が学園都市の最高峰である超能力者（レベル5）、『才能』が無いと判断されたのが学生の六割を占める無能力者（レベル0）だ。

もちろんこの超能力だけが『才能』の全てではない。

しかし一つの判断基準として超能力がある以上、必然的にそれを手にして喜ぶ人間は、他の人間よりも優れていると悦に浸る人間は現れる。自分がこの街で上位に位置していると解りやすく認識できるのがこの超能力であるからだ。

しかし逆にその『才能』に恐れを抱く人間というのがいる。

彼らはその余りにも強大な『才能』を嫌うのだ。いつか間違いを犯し、人を傷付けてしまうかもしれない、通常の人間とは駆け離れた己の『異常性』を恐れを抱く。

学園都市内で行われている能力開発を学生は例外なく受けているためそれが普通であると何の疑問も抱かない。常識として認識してしまっているからだ。

だがそれは学園都市内だけで通じる常識であって世界共通ではない。

強大な『才能』を開花させてしまったが為に、普通を求める人間

というのもし少なからず存在する。

そんな普通を求める人間たちのきっかけを作ったのは、とある一人の少女だった。

『すごいで！この少年は間違いなく超能力者（レベル5）になる才能を秘めているッ！！』

拘束器具が取り付けられたベッドに寝かされている少年、天塚葵と実験結果が出力された用紙を見ながら研究員たちが狂喜している。天塚葵が秘めていた『才能』は、それほどまでに凄まじいものだった。

『……………』

天塚葵に表情はない。この場所では何を言おうが無意味、それを理解していたからだ。自分たちは奴らの実験動物モルモット、それ以上の価値など存在しない。

『おい052番、もう戻っていいぞ』

052番。

これが此処での葵の名前だった。

言われて拘束器具をはずされた葵はゆっくりと起き上がり、そのまま檻のような少年少女が收容された部屋へと歩いていく。

此処にやってきて数ヶ月は脱走しようと試みたりもしたが、全てムダだった。

(俺は此処で死んでいくんだ……)

そこに疑問さえ浮かばなかった。毎日消えていく他の子供たち、明日は自分かもしれないのだ。

部屋に戻り、隅で膝を抱えて踞る。実験のせいで身体中に注射の痕が出来ているが、それは葵だけでなく部屋にいる全員に言えることだった。

死にたい。

葵にとって此処は地獄よりも苦しい場所だった。能力を使って自殺を図ろうにも手を特殊な機材で拘束されているため出来ず、ただ死を待つだけの毎日。

通常のこの年ごろの子供たちが持つ瞳の輝きなどあるはずもなく、光を失った虚ろな瞳だけがこの研究所を見つめていた。

そんなある日だ。

『116番、入れ』

部屋の番をしている研究員に言われ、この部屋に一人の少女が入ってきたのは。

『……………』

葵は特に興味も持たず部屋の隅に座っていたが、ふとその少女がこちらにトタトタと小走りでやってきて顔を上げた。

『……………何』

正直口を開くのも億劫だったが、返ってきた言葉に葵はその口が塞がらなくなる。

『ねえ、私とお友達になつて？』

見た目一〇歳ほどの腰までであろうかという長髪の少女は、にこやかにほほ笑んだ。

彼女は後に、葵のとしての光となる。

「ひっ……、お前は、一方……ッ」

第七学区と第一八学区の境界近くに建つ寂れた建造物。スキルアウトが根城にでもしているのか内部には不自然な黒い皮張りのソファが置かれ、内壁にはこれでもかというくらいにスプレーで落書きがされている。

そんな落書きだらけの内壁に、不自然な赤い花が咲いていた。

それが人間の血液、もつと言えば頭部を粉碎したことで飛び散った血液であるということは、床に壁に凭れかかるようにして横たわる頭部の消えた幾つもの死体を見れば明らかだった。

吹き抜けの内部に立つ白髪の少年は、目の前で無様に横たわる死体を一瞥してポケットからとある書類を取り出す。

(これで……、残るは十九人か)

頬に付いていた返り血を指でなぞり、それを書類上に付着させる。殺した人間の名前を血で消したのだ。

殺したのは明らかに学生だった。それは着用している制服からも容易に判断することができる。

『表』の人間。

自分とは違う世界を生きている人間。

守るべき、存在。

だが、今となっては一方通行にとってそんなものは些細なことだった。

（俺は守る。守らなくちゃならねエ、例え誰を犠牲にしよオが俺たちの世界を……！）

一度心に決めてしまえば、後は簡単だ。

己の望むまま、赴くままにその手を振るうだけ。

たったそれだけで自分の幻想が守られるというのならなんと容易いことなのだろう。

「……ハハッ」

自然と口から笑いが漏れる。

「ハハ、ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

雄叫びのような笑いが込み上げる。

しかし、同時に心中から込み上げる虚無感にも確かに一方通行は気付いていた。

「垣根君！垣根君ッ！！」

悲痛な叫びが辺り一帯に響き渡る。

第七学区のモノレールが破壊された通りから少し離れた広場。

そこに楓と帝督は落下していた。時速一〇〇キロを超えるスピードで走行していたモノレールから放り出される形で落下した楓たち。当然無事では済むはずがなかった。

「誰かつ！聞こえてるの！？」

必死にインカムに声を荒げて問い掛ける楓だが、返答が得られない様子は一向にない。

楓の目の前で踞る垣根帝督は荒い息を吐き続けるだけで動かない。落下の際楓を庇って背中から激突したせいでもしかしたら脊髄を損傷している可能性もあった。

「垣根君！垣根君！っかりして！！」

不幸なことに、この広場に人影は全くない。時間帯がまだ学校がある時間であるし、何よりもこの騒動だ。無闇やたらに外に出てくる人間などいないだろう。

そして不幸というのは伝播し、重なる。

ジャリッ。

広場に誰かがやってきたのか砂を踏み締める足音が楓の耳に届い

た。

ジャリッ、ジャリッ。

足音は迷うことなく一直線にこちらに向かってきてきているようで、段々と足音が大きくなっている。

楓の脳裏に美琴が襲撃されたという事態が過る。

(まさか……っ)

冷や汗が背中を伝っていくのが分かる。

こっという時に限って嫌な予感とは的中してしまうものだ。

ゴクリ、と生唾を飲む音が大きすぎるくらいに聞こえた気がした。尚も足音は近付いてくる。

絶対絶命。

正に言葉の通りだった。

……ピタッ。

足音が止まる。

(……どうすれば……！)

橘楓は長点上機学園に在学する高校生だ。それはつまり、高位の能力者であるということを暗に意味している。

彼女の能力は大能力(レベル4)の『インターラフト念動干涉』。念動力の一種テレキネシスで相手や物の動きに干渉するもので汎用性も高い。



所謂学園都市において最も強いタイプの人間なのだが、やはり能力が行使できない現状ではただの女子生徒でしかない。

背後から感じる気配に怯える楓に、近付いてきた人間は口を開く。

「あの一、大丈夫ですか？」

現れたのは楓とは真逆、学園都市において何の力も持たない人間、所謂無能力者（レベル0）、落ちこぼれ。

しかしそれには些かの語弊がある。

何の力も持たないのではない。

彼は。

この少年は。

自身の内から湧く感情に従って真っ直ぐ進もうとする者。

橘楓はまだ知らない。

このツンツン頭が特徴的な黒髪の少年が、まじうとこのない本物のヒーローであるということ。

不幸は伝播する。

しかし、もたらされるのが災厄ばかりとは限らない。

今回もたらされたのは、神の奇跡さえも打ち消す幻想殺し（イマジンブレイカー）だった。

## 第68話 本物のヒーロー（後書き）

一步通行が居たスキルアウトの根城というのは超電磁砲のBIG SPIDERのアジトをモデルにしています。

そして今まで全く出番がなかったツンツン頭まさかの参戦！！

第69話 ただの通りすがり（前書き）

お待たせしました。

## 第69話 ただの通りすがり

蘭星奈は混み合う病院の廊下を走っていた。

御坂美琴が見つからない。

凧に言われるがままに病院へとひた走り、内部を探し回る星奈だったが一向に御坂美琴という名前の表札を発見できずにいた。

（違う。……違う、違う。見つからないっ！一体どこにいるのよ御坂美琴っっ！！）

彼女は御坂美琴と面識がない。つまり顔だけで判断するということができないのだ。名前だけが頼りのため、それが発見できなければ全くの無駄骨となってしまう。

「……っ。もうっ、どこに居るのよ御坂美琴っっ！！」

半ばヤケクソ気味に廊下を走りながら叫ぶ。同じ場にいた患者や看護婦たちはポカンとしていたが、周りの目など気にしていられなかった。

「……はい？」

それは不幸中の幸いか。

病室から出ていた御坂美琴は、偶然にも自分の名を叫びながら走り回る高校生を目撃していた。

（あの制服って確か長点上機の……）

星奈の身なりから適当に推測し、走りながらこちらに向かってくる少女を呼び止めようと美琴が口を開こうと、

「……………へ？」

「ん？ にゃわあああああああッ!？」

するよりも早く、星奈が押し倒す形で二人の少女は激突した。

「……………痛っ〜」

「あ、ごめんなさい!! 急いでて……………!!」

頭を擦りながら起き上がる美琴に慌てて頭を下げる星奈。

「あー大丈夫大丈夫。それよりもさ、人探し？」

「え？ うん、御坂美琴さんて人を探してるんだけど……………」

「それ私」

「……………へ？」

「私が御坂美琴」

未だに理解が追いついていないようなので今一度言う。

「あんたが探してる御坂美琴ってのは私のことよ」

美琴のこの言葉を聞いてようやく、星奈の理解が追いついた。

「……ええっ!? 御坂美琴って年下ああ!？」

「いやそこは驚くとこじゃない」

「どうやら星奈は美琴が学園都市第三位の超能力者（レベル5）であるという情報しか知らなかったようで、

「とっ、常盤台中学なの!？」

「……はやく事情を説明しなさいよ」

星奈のほうが美琴よりも二つほど年上のはずなのだが、どうも美琴は彼女がそうは見えなかった。下手すれば年下なんじゃないかと思ってしまうほどのそそっかしさのようなものを兼ね備えている。だが、事情を説明しろと言われた途端に星奈の表情は一変する。

「一条先輩に言われてアナタのところに駆け付けたの」

先程までとは打つ変わって真剣な眼差しの星奈がそこに居た。

「……凧が此処に来てないのも何かありそうね」

美琴も何かを感じ取り、今この場で深く言及しようとはしない。

「私の病室に行きましょう。もう一人もそかに居るから」

「もう一人……?」

凧からは美琴の元へ行け、としか言われていない星奈は首を傾げ

る。それを見て美琴は少しだけ口元を緩め、

「凧の親友からの伝言を預かってる、とびっきりの風紀委員よ」  
ジャンジメント

意味が解らなかった。

目の前を覆い尽くす深紅の液体。鼻腔をつくような臭いが充満し、直後に尋常でない激痛が身体中を駆け巡る。

その痛みを知覚してようやく、凧は横薙ぎに身体が切り裂かれた  
ということを理解した。

「ガッ……、ハアッ……!？」

肩口から脇腹にかけて鋭利な刃物で切り裂かれたような傷口からは止めどなく血が噴き出している。

どんな手口でこの攻撃が行われたのか、一切凧には解らなかった。  
何せ目の前の男は両手を白衣のポケットに突っ込んだまま動いていないのだ。



「お前は……、ふむ第六位のレベル5、水分支配ハイトロコマンテか。なら殺しちまっても葵も渋い顔はしねえだろ」

どこから取り出した端末と風を見比べてそう言う大男、剛徳司ゴウトクジはつまらなさそうに言う。

何処ぞのヤクザを連想させる金髪に白衣の上からでも判る筋骨隆々の肉体。であるにも関わらずその白衣が知的なイメージをも醸し出している。風の目の前に立つ剛徳司とはそういう男だった。

「……ツハ、お前……」

「ん？ 何だまだ喋る余裕が残ってたのか」

地面に倒れ血に染まりながらも睨み付ける風を見て関心したように。

「流石は学園都市の頂点、と言った所か？ まあ能力が使えねえんだから関係ないかもしれないがな」

「お前……、まさか……？」

「多分お前が考えてる通りだぜ。俺……、いや俺たちがこの事件を起こした張本人だ」

隠そうともせず、剛徳司は口を開いた。

「だが安心しろよ。別に国家転覆をしようなんざ思っていない。ただ俺たちの願いを叶えるためには必要なんだよ。そして邪魔なんだ、」

超能力つてものがな」

「何で……、」

「それをお前に言っただけになる？」

『残念だが、』と剛徳司は付け足し、

「俺は祢遠のようなお人好しじゃないんでな」

それだけ言っただけで、再び凧目掛けて不可視の攻撃が放たれた。避ける余力など残されているはずもない。既に失血死の危険もあるほどの大量の血を流していたために眼も霞み体温も下がり始めていた。これで終わる、剛徳司は確信した。

そして。

「ああ？」

剛徳司は怪訝そうに眉をひそめた。

理由は単純。

彼の目の前。

そこに、とある人物が立っていたからだ。

「そこまでだ」

凧と剛徳司との間に割って入るようにして現れたのは剛徳司と同じく金髪の少年だった。

「誰だ、てめえ」

苛立たしいのか舌打ちしながら剛徳司が問い掛ける。

「なに、怪しい者じゃない」

逆立たせた金髪に学ラン。その内側にはアロハシャツを着た少年。装着されたサングラスのせいで表情は上手く読み取れないが、新着二メートルを超える大男を目の前にしても少年はなんら動じていなかった。

「通りすがりの魔術師だ」

「上条くんね。先ずはお礼を言うわ、ありがとう」

「気にすんなよ。俺があそこを通りかかったのは偶然なんだから」

楓が広場で出会った少年、上条当麻の背中には未だに意識が戻らない垣根帝督が背負われ、それに併走する形で楓は病院への道を走っていた。

幸いにして広場から病院までそう遠くはない。すぐに病院の建物らしきものを視界に捉えることが出来た。

「それにしても何であんなところに居たんだ？」

「モノレールから放り出されたのよ……」

「はあ!?!」

さらりとんでもない事を言った隣の少女に驚愕する上条。

「モノレールから放り出されるって一体どんな状況だよ……」

「そつえば上条くんて能力者なのよね?」

『俺の意見はスルーですか』と若干凹みながらも上条は楓の質問に即答する。

「いや、俺は真正銘のレベル0、無能力者だ」

「え？ でも君能力の暴走とかしてないわよね？」

「ああ。俺って少し特殊だからな」

「？」

「……っと、この病院だよな」

そう言われて正面に目をやると病院の正面玄関前に辿り着いていた。病院はやはり混雑しており緊急搬送の救急車などが頻繁に出入りし、ここからでも内部の慌ただしい声が聞こえてくる。

楓と帝督を背負った上条は一先ず中に入ろうと自動ドアをくぐって内部に足を踏み入れた。

「うわ……、これみんな学生かよ……！！」

病院内は怪我や意識を失った学生で溢れ、今にもパンクしてしまいそうな状態だった。

「どうすんだ？ とてもベッドが確保できるような状況じゃないぞ？」

「そうね。一先ず病室に行きましょう」

「病室？ どの？」

「風の従妹が入院してる病室よ。彼女が回復していたらベッドが借

りられるかもしれないわ」

頭上にクエスチョンマークを浮かべる上条を先導し、楓は階段を上って行く。

目指す病室はもちろん、御坂美琴の居る病室だ。

「アンリミテッド・メンバーズ  
規格外体？」

美琴に連れられ病室にやってきた星奈は、美琴が言った単語を復唱するように言った。星奈はベッドの横のパイプ椅子に座り、ベッドに腰掛ける美琴の隣には同じ入院服のようなものを着ている頭に花が咲いた少女も座っている。

「ええ。あの女……加瀬って言ったわ。アイツが言うには、同じメンバーの人間がA I M拡散力場を介して私たちの『自分だけの（パーソナル・）現実』<sup>リアリティ</sup>に干渉する特殊な電波を学園都市中に流してるみたい」

「だったらその電波を止めれば……！！」

「その機械が何処にあるのか分かれば苦勞はしないわよ」

「あつう……」

なにやら年齢的な立場は完全に逆転してしまっている。

「そのモノレールが破壊されたつても多分奴らのうちの一人の作業ね。能力を使えない学生にそんな真似できるとは思えないわ」

「暴走した無能力者って可能性は？」

「ないわね。いくら能力が使えるって言っても実際見た限りじゃ精々レベル2〜3程度よ。モノレールを輪切りにする程の威力があるなんて考えられない」

だとしたらマズイかもしれない。

星奈は率直にそう思った。

現在風はモノレールが破壊された場所からそう離れたくないビルアンリミテッド・メとビルとの間の路地に居る。もしもモノレールを破壊した『規格外スペース体』なる能力者がまだ近くに居た場合、身動きが取れない風は恰好マトの標的になるのではないか。

「一条先輩……!!」

自然と口から漏れる不安の声。

しかし美琴はなんら心配している様子もなく、

「大丈夫よ」

星奈の抱える不安を払拭するかのよう。

「風にはたくさん味方がいるんだから」

「ありました」

と、ここでようやく今まで一言も会話に口を挟まず自前のノートパソコンを叩いていた初春が顔を上げた。

「場所は特定できた？」

「ええバッチリです」

ニツ、と笑う初春に美琴もサムズアップで応える。

「……？ 何がわかったの？」

一人事態が飲み込めていない星奈がオロオロしながら美琴に尋ねる。

初春が手に入れた情報はこの事態に終止符を打つための重要なもの。

「現在この学園都市では電力供給が滞っていてまともに機械類は稼働していません。病院などは非常用のバッテリーに切り替えてなんとかやっているという状況です」

「これも多分アイツらの仕業なんでしょうね」

「であるにも関わらず、ただ一箇所だけ電力の消費量が桁違いの場所がこの学園都市内にあります」



クルツと自分の膝の上に置いてあるパソコンを回転させて星奈と美琴に見えるように画面を見せる。パソコンの画面上には白黒が反転した学園都市内部の地図表示されており、いくつかの赤い光点がその中で点滅している。

「この赤い点は一定以上の電力が断続的に消費されている場所を示したものです」

「てことは……」

「はい。この一番電力消費が激しい場所に、『アンリミテッド・メンバーズ規格外体』のアジトと見られるものがあります」

言われて、星奈と美琴は画面を食い入るように見つめる。電力消費が最も激しい場所。それは。

「第七学区……！？ この近くじゃない……！！」

美琴が驚愕し声を出したのと、病室のドアが開いたのはほぼ同時だった。

「美琴ちゃん!!」

病室のドアを勢いよく開いた楓はベッドに腰掛けていた美琴のもとへと駆け寄って行った。

「大丈夫だった!? 襲撃されたって聞いたけど……」

「楓さん大丈夫ですよ。私はこの通り……」

言いかけて美琴の動きがピタッと停止した。

美琴の視線の先は楓の後方。

何だか激しく見覚えのあるツンツン野郎が誰かを背負って立っている。

言つまでもないが、上条当麻である。

「な、ななな何であんたがここにいんのよッ!!」

傍目に見ても顔を真っ赤にしている美琴に上条はやれやれといった様子で、

「見りゃ分かるだろ? 怪我人運んでんだよ」

ほら、と言って背負っていた帝督の方を見る。

「垣根!? 一体何があったのよ!?!」

「それは私が説明するわ」

星奈と話していた楓が美琴のほうを向いて言う。

「美琴ちゃんたちにも、なにがあったのか話してもらおうよ」

## 第69話 ただの通りすがり（後書き）

ということでもたまたまた原作キャラの金髪サングラスが参戦です。

超能力が使えない現在の学園都市で魔術サイドのキャラはとても重宝します（笑）

ようやくこの章も中盤といったところでしょうか。

まだまだ完結まで時間はかかりそうですがのんびりと頑張っていくたいと思います。

第70話 邂逅（前書き）

お待たせしました。

## 第70話 邂逅

例えば。

この世界には『偶然』や『奇跡』としか形容することができないような出来事がある。

九回裏ツーアウト満塁でサヨナラホームランが飛び出した。

残り時間0秒でブザービーターによって逆転勝利した。

サイコロを振ったら十回連続で同じ目が出た。

これらの事象は専ら『奇跡』や『偶然』と評されるが、実際のところそうではない。

九回裏ツーアウトでサヨナラホームランが飛び出したのは、打者が血の滲む努力によって引き起こしたのだ。

ブザービーターを決めた選手は、それだけの技術力と精神力を兼ね備えていたのだ。

サイコロを十回連続で同じ目を出せたのは、それだけの運の持ち主だったのだ。

本当の意味での『奇跡』や『偶然』は、この世界では稀にしか起こりえない。

そしてもちろん、風の目の前にタイミング良く金髪サングラスの男が現れたのも、『偶然』というわけではなかった。

無能力者（レベル0）が暴走したことでひとまず学校から脱出した上条と土御門。しかし校外も状況は大して変わらず、暴走した無能力者（レベル0）によって建物は破壊されていた。

『くそっ、一体どうなっただよ！？』

『落ち着け上やん。今は状況を整理することが先ですたい』

上条当麻と土御門元春。

彼らは二人揃って無能力者、つまりはレベル0であって今日の前で暴走している学生たちのようになっても可笑しくはないのだが、如何せんこの二人は少々特殊な人間であるため暴走などといったことにはなっていない。

第七学区の本来は通学路として学生が往来する大通りを走る二人。途中現れる暴走した無能力者（レベル0）を拳一つで撃退しながら目的も無いままに走り回っていると、

ゴシャアアアアアアアアアッ！！！！

という強烈な破壊音が耳に届いた。

『な、何だっ！？』

『何かが地面に叩き付けられたみたいなきだぜい』

と土御門が言うのが早いか、上条は既に音がした方向へと走り出していた。

『ちよ、おい待てよ上ちゃん!』

制止の声も届いていないのかぐんぐんスピードを上げ走っていく上条の後ろ姿を追うべく、土御門もそちらへ向かおうと

ドシヤッ

した足を、上条が走っていった方向とは正反対に位置するビルとビルとの間にある路地裏へと向かう。

その周囲にだけ漂う明らかに殺伐とした空気に肌がピリつくのを感じる。

(一般人が出せる空気ではないな。ということは……)

土御門はビルとビルの中の路地へと入っていった。

そこで見たのは、金髪の白衣を纏った背丈二メートルはあろうかという大男と血溜まりに沈む学生の姿。

(あれは……高校生か?)

辺り一面に付着している血液の量から考えても重傷なのは間違いない。どうやら意識はあるようだが動くだけの体力は残されていないようだ。

厄介な場面に出くわしてしまった。単純に土御門はそう思う。本来ならばこういった人助的な役割は上条の筈なのだが、件の彼は



何処かへと走り去ってしまいこの場には居ない。

畜生あのツンツンめと内心で毒づいてもあとの祭りである。

そうこう考えていると金髪の大男が高校生に止めを刺すべく右手を振りかざした。

(チツ……!!)

ここで咄嗟に二人の間に割り込むようにして飛び出してしまう辺り、上条の影響を受けているなと土御門自身も思う。

全く、何時の間に俺はこんなにも人間に甘くなっただか、と苦笑しながら、彼は大男の前に躍り出た。

『ああ?』

怪訝そうに顔を顰める大男。

『そこまでだ』

『誰だてめえ』

『何、怪しい者じゃない』

サングラスの奥から覗く鋭い眼光。

そして少年は告げる。

此処学園都市とは正反対、所謂オカルトという存在を。

『通りすがりの魔術師だ』

「……っ？」

固く閉じられていた瞼をゆっくりと持ち上げてみると、目の前に金髪の学生服を着た少年が立っていた。見たところ自分と同一年かそれよりも下。しかしそれとまるで反比例しているかのように纏う雰囲気は常人と駆け離れていた。

結論から言ってしまうえば、一般人ではない。

『ファルコン』として活動していると、たまにこういった人種と敵対することがある。

まるで学園都市の闇に身を置くような、普通の学生には決して纏えないような空気を纏う少年。

そんな少年が、不意にこちらに振り返った。

「意識があつたか」

「お前……は、」

「土御門元春。誠に不本意なんだがこんな場面に出くわしちゃった以上、目の前で人が殺されるってのは寝覚めが悪い。此処は俺に任せとおけ」

それだけ言つて土御門は風近づき、出血している部分を探して手をあてがった。

「な……に、を……？」

「ちょっとした応急措置だ。とりあえず失血死の心配だけはないように処置しておく」

ポウツ、と。

土御門が手を添えていた部分が温かい光を放つ。

数秒の後、止めどなく溢れ出していた血液が止まっていることに  
凧は気が付いた。

「一体……どうやって……、」

「何、大したことはしていない。それよりもジツとしている。折角  
塞いだ傷口を開きたくなかったらな」

そう言う土御門の口からは、一筋の血が垂れていた。それをグイ  
ツと拭い、立ち上がって剛徳司の方へと向き直る。

「さて、待たせたな」

「てめえ、何故超能力を使える？」

訝しげに問い掛ける剛徳司に、土御門はあっけらかんとして答える。  
る。

「それは、ほら。アレだよ。俺は神様から愛されてるから超能力を  
使えるんだよ」

「……ふざけてんのか」

にやははー、とふざけた態度で振る舞う土御門に沸点の低い剛徳司は拳を握り締めるが、

「やめておけよ剛徳司。お前じゃあ俺には勝てない」

「ッ！？ てめえ何で俺の名前を！？」

突然土御門が口にした言葉でその動きが停止した。

「知っているぞ。豪徳司塊土。貴様は『アンリミテッド・メンバーズ規格外体』の一人で能力は……」

「……てめえまさか暗部の人間か？」

「言っただろう。俺は通りすがりのただの魔術師だ」

もう言葉は不要とでも言うようにバツサリと剛徳司の問い掛けを切り捨て、土御門は身体の前でゆっくりと拳を握る。それはボクシングのファイティングポーズに酷似していたが、一つだけ異なる点があった。

指と指との間に挟まれた四枚の小さな紙、両手で計八枚の和紙のような上質の紙に何やら文字が記されたものを手にしていることだ。

「ハッ、その紙吹雪みてえなので何しようってんだ？」

馬鹿にするように言う剛徳司に、土御門はその小さな和紙を自分の周囲にばら蒔いて、

「剛徳司、陰陽術というものを知っているか？」

「ああ？」

いきなり出たオカルトワードに顔をしかめる。

「古くは飛鳥時代以前にまで遡る古来より伝わるものなんだが、」

言つと、土御門と凧を囲むようにして配置された八枚の和紙が仄かに発光を始める。

「俺はそれを魔術として扱う。超能力者なんかじゃないんだよ」

「は？魔術？何を言つてやが……」

剛徳司が言葉を言い終わるよりも早く、爆発的に光量が増した和紙が弾け飛んだ。

「ッ！？」

目も開けられないほどの光量に剛徳司は手で顔を覆う。影すらをも飲み込むような光が周囲を包み込み、そしてその光が消えると。

「……チツ、逃げやがったか」

剛徳司の前に確かに居た筈の土御門はもちろん、地面に崩れ落ちていた凧までもが姿を消していた。

(どうする……？相手は怪我人背負った高校生、まだそう遠くには行つてねえ筈だ。探し出して処分するか……)

いや、と剛徳司はその考えてを振り払うように首を何度か横に振る。

（葵が俺の行動に気付いていないわけがねえ。全員参加の協議も直に始まるし、ここは一度戻ったほうが得策か……）

そう脳内で結論付けた剛徳司は、何故あの少年が自分の名を知っていたのかという疑問も無理矢理飲み込み、逃走した土御門たちを追うことなくその場をあとにした。

カッン、コッンと。

建物内部に反響する足音が一つ。

その足音は酷く不気味だった。

アクセラレータ  
一方通行。

学園都市の最高位であるレベル5、更にその中で頂点として君臨する序列第一位の少年である。

右手に握られた何枚か束ねられた書類は、すでに真っ赤に血塗られている。

（あと四人……か、）

『高位能力者処分リスト』に目をやりながら、一方通行は人気のない第七学区の通りを歩く。

決めたのだ。

彼らを守ると。

決めたのだ。

もう躊躇わないと。

であるのにも関わらず、彼は胸にポツカリと穴が開いたかのような空虚な感情を抱え込んでいた。

（何だ……）

俺は一体、何を迷っている？

第三学区の高級ホテルの一室。最高級クラスのスイートルームのその部屋に、天塚葵を始めとする『アンリミテッド・メンバーズ規格外体』の五人が介していた。

「剛徳司、電波の発信状況は？」

「全く異常なしだ。能力者に作用するように作ったせいで無能力者の脳内回路を暴発させちまうのがちと難点だがな」

「それは構わないよ。むしろ好都合ととるべきだ」

高級そうなソファに凭れかかる剛徳司にキングサイズのベッドに腰掛ける葵が答える。

「葵、超能力者（レベル5）たちはどう処分するんだ？」

「ん？それについては問題ないよ」

英吏の問いに薄く笑みを浮かべて。

「きつと向こうから来てくれる筈だからね」





## 第70話 邂逅（後書き）

第70話とキリのいい話数までできましたので次回は100万PV突  
破記念番外編です！

ちなみにコラボする作家さんは2名なので番外も2話書きます。

100万アクセス突破記念コラボ？

『とある双子と夏祭り』

(前書き)

100万アクセスを突破したことを記念に作成したコラボ小説第一弾です。

今回はみんなが執筆中の『とある双子の第二人生』とコラボさせていただきました。みんな本当に有難う御座いました。

番外ということもあり、いろいろ好き勝手やらせていただきました

(汗)

第二人生ファンの方には申し訳ないかもしれませんが、後悔はしてないので(笑)

ただあまり絡ませられなかったような……。  
私の文章力と構成力のせいです……。

でわ。

「凧」

「ん？ 凧か、どうしたんだ？」

とある夏休みの一日、家のインターホンを押されたのでドアを開けてみれば、そこには若干頬を紅潮させた少女、橘楓が何故かもしもじしながら立っていた。

「あのさ、今日の夜にある夏祭りのこと……、知ってる？」

「夏祭り？ ああ、第七学区の一角で大々的にやるやつか」

「そう、それ」

「そりゃあれだけ学園都市中にチラシが張ってあれば知ってるけど」

寝起きとあって未だに意識が完全覚醒していない凧は欠伸をしながらそう答える。対する凧は更に顔を紅潮、というか茹で蛸のように真っ赤にさせて身体の前で人差し指をつんつんさせながら。

「……な……い？」

「は？」

余りにも小さすぎて聞き取れなかった声を聞き取るべく凧はもう一度問う。

「何だ？」

「一緒……かない？」

「一緒？」

？

今日は別に楓とパールックになってしまっているというわけでもない。

と、そんな『何を言っただお前』的な表情を浮かべる風には、  
ならなくなったのかプルプルと震えだした楓は、

「っだー！！ もうっ、ちょっとは察しなさいよ！！」

キレた。

「はっ？ ちょっと、待てよ楓！ 何でいきなりキレて……分かった分かったからそのどこから取り出したでかいハンマーを振りかざすのは止めるッ！！」

明らかにそれ収納できる大きさの武器(エモ)じゃないだろうというハンマーを取り出した楓を何とか宥め、落ち着いた所でもう一度問う。

「で？ 俺に何の用なわけ？」

「ええ……、まさかそこからやり直すつもり？」

『（このくそ鈍感野郎……）』などと小声でぶつくさ言う楓の精神状態など露知らずの風に完全に呆れ果てたのか、

「……はあ、」

一際大きな溜め息を吐いて、楓はやっとのことで本題を切り出した。

「夏祭り、一緒に行かない？」

そもそも何故、未来に後押しされなければ碌にデートの誘いも出  
来ない楓が突然こんな行動を取ったのかというと、答えは簡単、楓  
を後押しした人物が未来以外にいたからだ。しかも複数。  
それは昨日に遡る。

第七学区にある某ファミレスチェーン店、『Joseph's』。  
その店内の一角を陣取り雑談、というかガールズトークに華を咲か

せている少女たちがいた。

『で？ 楓さん。凧とは何か進展あったの？』

ドリンクバーから調達してきたメロンソーダに浮かぶ氷をストロ  
ーでつつきながら正面に座る楓に質問するのは常盤台の制服を着た  
少女、御坂美琴だ。

『進展って……』

『あつ、それ私もすごい興味あります』

美琴の隣に座る常盤台とは違う制服を着る少女がそれに同調す  
る。

『ちょっと梓ちゃんまで……、』

美琴の隣に座る柵川中学の制服を着用した学園都市第七位の超能  
力者（レベル5）、工藤梓はアイスティーを口にしながら、

『だって気になるじゃないですか。私だけじゃなくて皆気になって  
ると思いますよ？ね、佐天さん』

梓が自分の正面、楓の隣に座る同じ制服を着た少女にそう言えば、

『もっちりなんですよ！！ 私としては早くくつついちゃってほしい  
んですけどねえ』

少女、佐天涙子はテーブルから身を乗り出して意気揚々と言い放  
った。

『ちよつ、涙子ちゃん声が大きい……』

慌てて佐天を押し留める楓の顔はこの時点で既に真っ赤である。

『あれ？ そついえば初春や白井さんは？』

『ああ。黒子たちは何だか残務処理に駆り出されてるらしくて夏休みなのに支部よ』

『梓さんは行かなくていいんですか？』

『私はほら、まだ新米だから』

佐天の問い掛けに体の良いことを言っている梓だが、実は明俊はその残務処理に駆り出されている。要は兄を犠牲にしてガールズトークを選んだのである。

（お兄ちゃんには悪いけど、楓さんの恋の行方のほうが大事よね……！）

普段優等生な工藤梓はこうしてたまに兄を犠牲に息抜きをしているのだった。

『でもあの鈍感を振り向かせるにはそれなりのことしないと絶対無理よねえ』

そう言つのは風の従妹である美琴だ。風とは十年來の付き合いである彼女は、如何にあの少年がそつち方面に疎いのか痛い程に理解している。



『一条先輩ってそんなに鈍感なんですか？』

やってきたパフエにスプーンを刺しつつ尋ねる佐天。

『鈍感なんてもんじゃないわよ佐天さん。凧はアイツとおんなじくらいに……っ』

『アイツ？』

その瞬間、美琴は『しまった！！ うっかり口を滑らせたッ！！』  
としか形容できないような表情を浮かべ、話の流れが楓から美琴へと一気に変化した。

『御坂さん！！ 誰なんですかそのアイツって人は！！ もしかして彼氏さんとかですかっ！？』

自身にそう言った話が無いからなのか猪突猛進のごとく食い付く佐天に思わずたじろぐ美琴。

『か、か彼氏ッ！？ ちち、違うわよッ！！ アイツはそんなんじゃないわよ……っ』

後半部分が尻すばみになってしまっているが、そんなことお構い無しに佐天の尋問は続く。

『もしかして以前言ってたあの高校生さんですか！？』

『ちち違うわよッ！！ 大体、私はそんな浮わついた感情アイツに持ち合わせてなんかいないわよ』

ズズッ！！ とグラス内のメロンソーダを飲み干して、

『それよりもっ！今は楓さんの話でしょーが！！』

ようやく脱線しまくった話が本題へと戻る。そのタイミングを見計らっていたかのように、梓が制服のポケットからA4サイズのチラシを取り出した。

『楓さん。凧さんとの仲を進展させるために、こんなのでしょうか？』

テーブルの上におかれたチラシに目を向ける楓たち。

『夏祭り？』

『はい。今日の夕方から第七学区の通りを中心に大々的に開催されるものなんですけど』

『おおっ！！ いいじゃないですか夏祭り！！』

すかさず佐天が食い付く。それと同様に美琴もその夏祭りに興味を持ったのかジーツとチラシを凝視している。だがその視線は何故かそれは夏祭りに対してのものではなく、チラシの下部に記載されているものに向けられていた。

『どっしたの御坂さ……、ははあん』

美琴のしているものが何か気付いた梓が意味ありげに口元を緩める。

『御坂さん。それを見に行きたいわけね』

『っ!?! いや私は別にゲコ太シヨ一なんて全然!?!』

チラシ下部に書かれていたゲコ太シヨ一の告知部分を見て言う梓に咄嗟に手をぶんぶんと振って全否定する美琴だが、しっかりと顔に『行きたい』と出てしまっている。

『まあそれはそれとして、どうですか楓さん。行きませんか?』

『うん……。でも凧と二人つきりっていうのは……』

『なら私たちと一緒に行きましようよ。もともと私もお兄ちゃんと行くつもりだったし。御坂さんたちも行きますよね?』

『ええ。私たちも元々行くこうかと思ってたところだし。佐天さんも行くわよね?』

『もちろんですよ!! 初春たちも呼べたらいいんですけどね』

『黒子も言ってたけど今日の夏祭りに警備員アシチスキルの補佐で風紀委員ジャッジメントは駆り出されるんでしょ?』

『……あれ? 梓さんは行かなくていいんですか?』

『私はほら、まだ新米だから』

『『いやいやいや』』

工藤梓の案外ダークな一面を目撃した瞬間だった。

『……うん、そうね。凧を誘ってみるわ。ありがとう美琴ちゃん梓ちゃん、涙子ちゃん』

夏という開放的な季節と少女たちのごり押しもあって通常よりも若干ハイテンションになった楓は拳を握って意気揚々とファミレスをあとにし、凧の住む学生マンションへと向かったのだった。

という意図のもと、凧を誘うことに成功した楓は直ぐ様梓に連絡その旨を伝えた。

時刻はそろそろ午後六時を回ろうとしているが空はまだつつすらと明るく、八月特有の陽の長さを感じさせる。夏祭りが開催されるこの日だけは完全下校時刻を過ぎても警備員アンチスキルに補導されるということもないため、まだ出店も完全に動き出していないこの時間帯であっても学生の姿がそこら中に見られる。

そんな学生でごった返す祭の端にある街灯の下で、一条凧と工藤明俊は携帯を気にしつつ待ち人を待っていた。

「明俊、お前ジャッジメント風紀委員の仕事いいのか？」

「それが、御坂が白井に何か吹き込んだらしくて俺と梓は夏祭りに参加してこいって言われたんです」

学園都市第二位のレベル5である明俊に第六位である凧、更にはこの後合流するであろう人間のうち第三位の美琴に第七位の梓。こうしてよく考えてみるとものすごい面子が集まるわけだが、当の本人たちは全く気がつかない。

「なあんかイヤな予感がするんだよなあ」

「奇遇ですね凧さん。俺も梓に意味ありげな笑みを浮かべられてから悪寒が止まらないんです」

因みに、凧は楓からの注文があったため青を基調とした爽やかな浴衣だが、明俊はつい先程まで残務処理に駆り出されていたために柵川中学の夏服のままだ。

「……つと、あれじゃないか？」

凧が指差す先を見て、

「ああ。あの集団ですね」

明俊もその姿を認める。彼らの視線の先には四人の少女。

「凧お待たせ」

「ええ、お兄ちゃん何でその格好なの？」

「風情がないわね全く。少しは一条先輩を見習ったら？」

「お……、お待たせ」

上から順に美琴、梓、奈津美、楓である。

「……………っ」

思わず凧は言葉を失った。

「……………凧？」

水色をベースに淡い水玉をあしらった浴衣を着た楓に、思わず見とれてしまったとは口が避けても言えない凧は、

「ん？ ああ。まさに馬子にも衣しよ……………」

「死にさらせーッ！！」

「ぐへおッ!？」

照れとは正反対の怒りで顔を真っ赤にした楓のボディブローが炸裂した。

「あれ？ 奈津美、お前どうして此処にいるんだ？」

確か予定では佐天が来るはずだったんじゃない、と考える明俊に、

「あら、その言いようじゃまるで私に来るなって言ってるように聞こえるのだけど」

ツンとした態度で答える奈津美。その態度に何かヤバい気配を感じ取ったのかさかさず明俊はフォローを入れるために奈津美を一度じっと見つめる。彼女は妖艶さを漂わせる紫をベースにした花柄の浴衣を身にまとい、その容姿と相まってとても中学生には見えない美しさがあった。

そんな舐めるような視線に気が付いたのか奈津美が訝しげな視線を向ける。

「な、なによ……」

「いやさ。よくよく見て思ったんだけどさ」

腕を組んだ態勢のまま如何にも真面目な雰囲気醸し出しながら。

「奈津美って結構巨にゅ……」

「死になさい」

一体その華奢な体のどこからそんな尋常じゃない力が出てくるんだと言わんばかりの怪力でアイアンクローをかます奈津美。凧と明俊。女性の扱い方が解っていない辺り、案外似た者同士だったりするのかも知れない。

「お兄ちゃん最低……」

自らの胸を隠すように手で覆いジト目で明俊を睨む梓。彼女にとって胸は身体的なコンプレックスである。

二人仲よく地面に沈む凧と明俊が復活してからも、彼女たちの機嫌はなかなか治らなかつた。

「あつ、ゲコ太のお面!!」

「ちよ、美琴!?!」

明らかに小学生向けな綿菓子とお面がセットの屋台。その中にゲコ太のお面を見つけた年がいもなく突撃していく美琴を追い掛けている明俊。

「あ〜んゲコ太〜」

「おい御坂やめろ。周りの小さい子からの視線が突き刺さってるんだ」

「今そこから助けてあげるよ〜」

「聞いちゃいねえ!!」

常盤台のEースは両生類癒し系マスコット、ゲコ太にご執心。そんな二人から少し離れた場所に佇む梓と奈津美。

「……………」  
「……………」

彼女たちは明俊にご執心だった。

(なんだろこのモヤモヤした感じ……。よく分からないけどお兄ちゃんとお御坂さんがあんな楽しそうに話してるのを見ると、なんか嫌だな……………)



(イライラするわ、果てしなくイライラする)

それが『嫉妬』という感情であるということに、彼女たちはまだ気づかない。

しかし、気付かないというだけであって彼女たちの行動力は並大抵のものではない。

結論、彼女たちはこのよく分からないイライラした感情をどうにかするにはとにかく美琴と明俊を別々にすればいいのだと本能が告げたらしく、他人が見たらトラウマ間違いなしの笑みを浮かべながらゆつくりと明俊たちのもとへと歩み寄って行く。

「御坂さあん」

ひどく間延びした梓の声が美琴の耳に届く。

「梓さん、どうし……ヒツ!?!」

後半部分に悲鳴が混じっていたのは、当然梓の笑顔を見たからである。

「随分と楽しそうね御坂さん……?」

その隣では奈津美がなんとも言えない表情で立っていた。

二人とも、AIM拡散力場とは全く違う、何か背後に般若の顔のようなものがうつすらと見える禍々しいオーラを漂わせて。

「御坂さあん。お兄ちゃんとそんなに楽しそうに話しちゃって、上条さんのことはいいんですかあ?」

「ぶふぁッ!？」

「思わず食べていた綿菓子も嘔き出る。」

「な、なんでアイツの名前が出てくるのよ!？」

「あら、アイツって上条さんのことだったのね」

悪戯な笑みを浮かべ奈津美がくすくすと笑う。

「お、おい梓、奈津美。お前ら一体どうしたんだ？」

「お兄ちゃんは黙ってて」

「明俊は黙ってなさい」

異様な彼女たちの纏う雰囲気割って入ろうとした明俊だったが、梓と奈津美によってあつという間に蚊帳の外へはじき出されてしまった。

「さあ御坂さん。たあつぷりオハナシしましょうか……」

「聞きたいことはたくさんあるのよ。明俊との関係、とかね……」

普段冷静な彼女たちからは信じられないほど低い声はさらに美琴の顔を引きつらせる。

そしてオハナシという名の尋問が始まった。

明俊たちがそんなことになっているころ、初春にお土産を買っていくと言って駆けて行った佐天と別れた凧と楓は現在進行形で二人っきりのデート（凧はそうは思っていないだろうが）の真っ最中だ。そろそろ花火が上がるらしく、人の数もテンションも最高潮に達しようとしている。

「向こうの河川敷で花火上がるらしいぞ。見に行くか？」

「う、うん……」

「？ どうした？ 顔赤いぞ、熱あるんじゃないか？」

「だ、大丈夫よ」

実際のところ、楓は全く大丈夫ではなかった。熱があるとか具合が悪いとかいうわけではない。

緊張で今にもパニックに陥りそうになっているのだ。

（私だけ！？ 私だけこんなに緊張してるの！？ 凧は平気そうだし……まさか他の女とこういうことすでに経験済みとかッ！？）

緊張のせいで思考回路までも熱くなってしまうているのか完全に方向を見失ってしまっている。

と、そこに。

「ほら、離れるといけないだろ。早くしないと始まっちゃうし」

凧が楓の手を取った。

ごくごく自然な動作で。

(……はあ)

ここで楓の思考回路も正常な働きをするようになり内心で大きなため息を一つ。

(全く……素でこういうこと平然とやっちゃうのよねこの男は)

天然とかもうそんなレベルで収まる話ではないと楓は思う。この男は誰彼構わずこういうことをするのだ。だから当然楓のライバルも多い。『幼馴染』というとてもないアドバンテージさえ効果が薄くなってしまいそうな程に。

でも。

今は。

今この時だけは。

私だけの。

「ふふっ」

「なんだよいきなり」

ふと零れた笑いに凧が不思議そうに言う。

「……なんでもないっ」

言っつて、楓は繋いだ凧の手に自身の細い指を絡ませていく。  
はたから見れば完全に恋人同士。そんな二人は河川敷に向かって  
歩幅を合わせ歩いていく。

神様。

今この時だけは、私だけの彼でいさせてください。

上がった一発の花火に思いを乗せるように、少女は瞳を閉じ、そ  
う願った。

100万アクセス突破記念コラボ？

『とある双子と夏祭り』

(後書き)

次回もコラボが続きます。

100万アクセス突破記念コラボ？

『とある光学の魔法少年』（前書き）

はいコラボ第二弾です。

今回はコルサ号さんが執筆中の『とある光学の超高密度収縮粒子砲戦記』の光雄とコラボさせていただきました。

コルサ号さんありがとうございました。

今回一人称で書いたため若干違和感があるかもしれませんが番外なので気にしないでくださいW

それとレベル5の人数と序列上、番外に限り麦野は故人ですWW

100万アクセス突破記念コラボ？

『とある光学の魔法少年』

よっ。

俺の名前は葛城光雄。

十六歳の高校生をやってる。

早い話が所謂テンプレ的な展開で神様とかいう訳のわからんジジイのもと』とある魔術の禁書目録』の世界に転生した転生者ってやつだ。

いや転生ってマジもんなんだよ、俺もこうやって体験するまで米粒ほども信じてなかったけど。

「あつちい〜……」

九月が始まって暫く経つてのに八月上旬を思わせる灼熱の太陽光が俺の体力を容赦なくかき氷機のようにガリガリと削っていく。

「光雄」

「んん……？」

背後から俺の名前を呼ばれた気がしたのでなけなしの体力を使っ  
てゆっくりと振り返る。

「おおっ……一条」

「……お前ミイラみたいに干上がってんぞ」



俺の目の前に立っていたのは一条凧。この学園都市に七人しか居ない超能力者（レベル5）の一人だ。

「お前も大覇星祭の準備で買い出しか？」

「ああ……、こちらら只今パシられ真つ最中だよ……」

そういえば一条ってあの長点上機学園の生徒なんだよな。原作じやあ一方通行が前に籍だけ置いてた学校ってくらいで常盤台と同じ五本指とは思えない影の薄さだったけど。

「俺も買い出しの途中だ。さっきまで軍覇も居ただけど、アイツまた迷子に……」

軍覇？

ああ削板軍覇か。

アイツって長点上機の生徒だったっけ？

そんな描写原作には無かったような気がすんだけど、不思議と違和感はねえな。

「一条んところは気合い入ってんだろ？」

「まあな。去年優勝しちまってるから今年もみたいな空気流れてるし」

「おーおー流石レベル5は言うことが違いますねえ」

「いやお前に言われたくねえよ」

いや俺もお前に言われたくないけど。

学園都市第六位で水流操作系の頂点、ハイドロコマンド『水分支配』なんて異名を  
持つてる一条には。

俺だつて一応学園都市第四位の超能力者、『光学収縮加速装置』  
通称『光学使い（プラトニックマスター）』なんて御大層な通り名  
もらっちゃいるけど俺の演算能力なんかじゃ応用できるレベルもコ  
イツとは全然違うし。

そもそも俺と一条が知り合ったのは本当に偶然だ。たまたまとあ  
る夏休みにセブンスミストに（無理矢理）マリオンとやって来た俺  
はそこで自分と同じように無理矢理橋に連行された一条 後  
に知ることだが とぼったり出会ったのが始まりだ。

なんかあれだな。

お互い女に尻に敷かれるつつう似たようなところがあつたからな  
のかはよく判らんがそこから何故か意気投合、今じゃたまにメール  
するくらいには仲良くなった。

つーか一条つて主人公フラグ建ちすぎじゃね？

同じクラスに一方通行、垣根帝督、削板軍霸つてまじチート級だ  
ろ。その上御坂美琴が従妹つて……。

誰得な設定だよオイ。

まじその辺の安い二次小説とかにありそうな設定だけど大丈夫だ  
よな？

神様はちゃんとした『とある魔術の禁書目録』の世界に転生させ  
たんだよな？

決して原作名とある魔術の禁書目録とかじゃないよな？

……なんか不安になってきたぞこんちきしょう。

大体さ、まず一方通行と垣根帝督が普通に学校生活を楽しんでるあたりもう違うだろ。こいつら原作じゃ犬猿の仲だったし、もしこれが俺が転生したことによる正史の歪みとかだったらしようがねえけどさ。

今日の前に居る一条だって俺が知らないだけで原作で登場してたキャラなのかもしれねえし。

いやでもこんな都合主義的な人物設定……。

いや流石に神様もそこまで馬鹿じゃ……。

いやでも……。

やっぱ……。

……だめだ俺の思考回路が断線する。

「光雄？」

そんな風に俺の脳内が大変なことになっていると一条が声をかけたきた。

「うん？」

「買い出し。どうせセブンスミストの雑貨屋だろ？ 一緒に行こうぜ」

あ、そうだ。  
俺買い出し頼まれてたんだっけか。

「おう。ちゃっちゃと買って戻らねえとクラスの奴らに何言われるか分かんねえしな」

そんなわけで俺と一条は一路セブンスミストへと向かった。

……あれ？ 一条の通う長点上機って第十八学区じゃなかったっけ？  
何で隣の第七学区まで来てんだ？

店内に入った俺たちは目的の材料や用具をそれぞれ調達し、今は同じく店内にある喫茶店のようなカフェで一息ついている。クラスの奴らには早く帰ってこいとか言われてたけどそんなこと知るか。俺の自由もちったあ保障してもらわにややってられん。

「ふう。あらかた必要なものは買えたかな」

「ああ、持って帰るのが面倒だけどな」

ペンキやら木材やらを大量に買い込んだ所為でとんでもない重量になった買い物袋を両手に持って高校まで引き返すとか地獄だろ。ただでさえこんな暑いつてのに勘弁してくれ……。

「ん……？」

「どした一条」

「いや、なんか果てしなく見覚えのある後姿が居たなと思って」

「どこだ？」

「ほらあれ」

どれどれ？ んん？

……ゲツ、あいつつてまさか。あ、こっちに気付いた。

「風じゃない。それに魔法少年」

「魔法少年言うなッ！！ それに今日は普通に制服だろうが！！」

やってきたのは名門、常盤台の制服を着た中学生、御坂美琴。また厄介なのが現れたなあ……。

「あなたなんか今失礼なこと考えなかった？」

「いえ滅相もございません」

こいつ読心術でも習得してんのか！？

「美琴も大覇星祭の買い出しか？」

「ええ。なんか資材とかが足りなくなっちゃったみたいだね」

「こっちもだよ。しかも何でかセブンスミストまで買い出し来る羽目になっちまったし」

「第十八学区にだってお店はあるでしょ？」

「霧ヶ丘が買占めたらしくて売り切れ状態だったんだよ」

霧ヶ丘……、確か結標とか風斬とかが在籍してた学校だったか。  
あそこも確か能力開発には力入れてたからこの大覇星祭には気合い  
入れてんのかねえ。

「そういうことね。……ところで、何であんたが凧と一緒に居るわけ？」

そんなジト目でこっち見るんじゃないかねえ。

「まあ超能力者（レベル5）同士のお付き合いってとこだ」

御坂と関わると碌なことになりやしないからな。こついう時は適  
当にあしらうに限る。

「そついやあんたもレベル5だったわね」

「そゆこと。っつーか時間はいいのか？」

「え？ あつ、時間やばいから私は行くわね。じゃあね凧と魔法少  
年」

「魔法少年じゃねえッ！！」

とか言いつつもあんな恥ずかしい格好で街中を歩いていた経歴が  
あるため強くは反論できなかつたりする。

そんな俺の反論など全く無視して御坂はエスカレーターを駆け降りて行った。

「……さて、俺たちもそろそろ行くか」

「だな。流石に戻らねえと吹寄にどやされそうだ」

一条に言われ、俺は両手にビニール袋を持って立ち上がる。外は相も変わらず暑そうだがこの冷房の効いた店内に居たおかげでなんとか学校までは干上がらずに戻れそうだ。

俺は外に出るために一階まで降りようとエスカレーターに足を踏み出し……

……た瞬間、いきなりエスカレーターが停止した。

「うおおおッ!?!」

いきなり停止したせいで足を踏み外し盛大にエスカレーターから転げ落ちる。

「大丈夫か光雄」

「もうちょっと心配そうに言ってくれ……」

思いつきり棒読みじゃねえか。

停止したエスカレーターを降りながら一条は訝しげに言う。

「停電……？いやいくら電力を消費したってこの学園都市じゃ有り得ないだろ……」

「ブレーカーが落ちただけなんじゃねえの？」

「それなら直ぐに復旧するか非常用に切り替わる筈だ」

言われてみれば変だな。昼下がりのこんな時間帯つても可笑しいし。店員が慌ててるところを見るとなんかイヤな予感がすんなあ……。

なんて思っていると。

びんぽんぱんぽん、とデパートとかで迷子を預かっているとよく流れる音楽が流れてきた。

「なんだあ？」

『店内の皆さんにお知らせします』

いかにもな男の声が店内に響き渡る。

おいおいまさか……。

『セブンスミストは我々『ドライブ』が占拠した。店内の人間は速やかに一階の入口前まで移動しろ』

うわあ……。また面倒くさいことに巻き込まれたなあ。

「マジかよ……。また面倒なことになったなあ」



ああ一条。やっぱり俺ら似た者同士だね。一条のぼやきを耳にして  
そう思った。

「どうするよ光雄。大人しく『ドライブ』とかいう訳のわからん奴  
らの言うこと聞いて一階まで降りるか？」

「はあ。まあそれが一番面倒くさくはなさそうんだけどさ」

多分そのメンバーが各階で俺らを見張ってんだろつな。客に紛れ  
込んでたらなかなかこつちからじゃ見つけれねえし。

「でもさ」

「……ああ」

やっぱり風とは気が合うみてえだ。

「大人しく捕まるなんてできるわけねえだろうが」

面倒は早いこと片付けるにこしたことはねえ。さあ、ちゃちゃっ  
と片付けようぜ。

そう結論つけて俺と風は不審に思われないう極力首を動かさず  
に周囲を見回す。ふむなるほどな、この階で怪しいのはあの二人だ  
な。明らかに周囲を警戒してやがる。つーかあれじゃ一般人に紛れ  
込む意味ねえんじゃねえか？

「一条」

「ああ。あの柱に凭れ掛かってる奴とトイレの前で一般人に紛れて  
る奴だな」

この階だけで犯行グループの人間（まだ確証はないけど）が二人もいるってことは『ドライブ』とかいうわけの分からんグループは十人くらいの複数犯てところか。

「光雄、俺はあの柱のところに居る奴を叩く。お前はトイレ前に居る奴を頼む」

「あいよ」

一条にそう返して俺はゆっくりとそいつの元へと歩いていく。さて、どうしようかねえ。

とりあえず穩便に話しかけてみるか？ ……いや無理だろ。あいつ腰のベルトのところにスタンガン持つてるし。

ん？ なんでそんなこと解るのかって？

俺は『光学使い（プラトニックマスター）』だから。光つてのは電磁波の一種だからな、ちよいと応用すりゃあ電子機器の信号くらい読み取れるってわけよ。

はあ。こうなりゃ面倒だけど体に直接話を聞くしかねえみたいだな。

「ちよいとそこのお兄さん、一階に行けって放送あったけどお兄さんは行かなくていいんですかあ？」

「あん？ ……ああそうだね。すぐに行くよ」

こいつ『あん？』とか言いやがったぞ。

「そういう猿芝居はいいんだよ犯人の一人。ちょっとオハナシ聞かせてもらえますう?」

「!?!? てめえ、一体何者だ……?」

犯人Aがスタンガンを取り出しながら脅すように言う。つかこな武器に頼っていると見ると多分無能力者（レベル0）だな。

「正義の味方でーす」

出来る限りバカにするように犯人Aに向かって言い放つ。  
こういう犯人って単純バカが多いから多分逆上して……

「舐めてんのかテメエツ!!」

……ほらね。スタンガン振りかざして襲いかかってきました。  
ほんと単純で助かる。

「あらよつと」

「ぐあッ!?!?」

目の前で視界を奪う程度の光を発光させる。これではしばらく目は見えないだろ。

「とりあえずアンタらの目的とか吐いちゃってもらえる?」

「誰が言うかよ……!?!?」

口が堅いのか。まあ関係ねえけど。

「……ん？　なんだか皮膚は熱く……」

「なあアンタ。『アクティブ・ディアンイル・システム』って知ってるか？」「あつつうつうつうつうつッ！！」

『アクティブ・ディアンイル・システム』  
通称ADS。

もとはアメリカが開発した光学兵器だ。

ミリ波の電磁波を人間に向けて照射すると誘電加熱によって皮膚の表面温度を上昇させることができ、これを受けると火傷したような錯覚に陥る。

「ちなみに殺傷能力は無いらしいんだけどさ、死ぬよりも苦しいかもなあ」

「分かった！！　話す！！　だからこれを止めてくれえッ！！」

チツ。ギブアップ早いな。

こんがりウエルダンにしても良かったんだけど。

渋々ADSを止める。

「んで、目的とグループの人数は」

「お、俺たちは八人だ……。ボスは大能力者（レベル4）の隔絶領域、目的は金だ……」  
アイソレイシ

「金だあ？にしちゃあ随分とデカイ店を狙ったもんだな、セブンスミストなんてカメラの数尋常じゃねえだろ」

「ハッ……、カメラなんかボスね能力の前じゃ何の役にも立たねえよ」

ボスねえ。その隔絶領域アイソレイションてのがどんな能力かはわかんねえけど、聞いた感じ厄介かもしんないな。

「吐いてくれてありがとよ。っつーことでアンタはここで寝てろ」

俺は犯人Aの意識を手刀で刈り取り得た情報を脳内で吟味する。

リーダーはレベル4の『隔絶領域アイソレイション』。今の下っぱの反応を見た感じ相当その能力を信頼されてるみてえだな。目的は金、下衆みてえだからボコ殴りにしても良心が痛む心配はないな。

……さて。

「光雄」

「おう一条。そっちはどうだった？」

「ボスの名前と能力だけ吐かせた」

「そっか。こっちは目的と人数は解ったぜ」

「なら情報交換と行こうぜ」

俺は一条と吐かせて手に入れた情報を交換した。

……林道冊子りんどうさしねえ。こんなやつ原作キャラに居たっけ？  
もしくはモブ？

「こいつが主犯でことで間違いないみたいだ。もう警備員はセブンスミストの入口前まで到着してるみたいだし、どうする光雄」

凧は念のため、とでも言うように俺に尋ねてきた。

答え？

そんなもん決まってるじゃん。

「ブツ倒す。だってそのほうがカッコイイだろッ!!」

魔法少年じゃカッコつかねえけど今日は制服だからな。こんなときくらいカッコつけてもいいじゃん。面倒くささよりもカッコよさ取るよ俺は。

「決まりだな。じゃあ光雄はその林道って奴を相手してくれ。俺は人質にされてる客と残りをやっつくから」

「おK」

「んじゃ、行くぜッ!!」

そう言うつと凧は右手を柱に当てて演算を開始する。

おお、あつという間に柱を伝って二階まで氷の城みたいになっちゃった。流石水流操作系の頂点。セブンスミストを内側だけとは言え氷漬けにするとか規格外すぎんだろ。

「うしっ、行くか」

俺は氷漬けにされたエスカレーターを滑り台みたいにして一階まで降りていく。

お、あの広場の集団が人質にされてる客たちだな。周りには『ドライブ』とかいう奴らが何人が居るけど……アイツがリーダーかな。明らかにぶんぞり返ってるし。

周りは一条が片付けてくれるって言っし、俺は俺の仕事をしようかね。

あ、ちなみに一階のこの広場の辺りだけ一条は氷らせてない。足場とかの問題で。

「やあやあ犯人さん。ご機嫌いかがですかあ？」

「ああ？」

身長二メートルはありそうな大柄のスキンヘッド（見るからにモブ）が怒気を込めた眼で俺を睨む。

うん。やっぱりこいつ原作に登場すらできなかったモブだな。超電磁砲の一話で出てきた強盗のほうはまだキャラが立ってたわ。

「何だてめえ。一体どっから沸いてでやがった……！？」

「普通に上の階から降りてきたんだけど」

「……大人しく人質になる気はねえみたいだな……！！」

そう言っつて男は振りかざした右手を乱雑に横に振るつた。

瞬間。

「ッ!？」

俺の真横から見えない衝撃が襲いかかった。

なんだ今の……。  
これが『アイソレイション隔絶領域』とかいう能力なのか？

「見えなかっただろう？ これが俺の能力『アイソレイション隔絶領域』だ」

あ。直ぐにそういうこと言っただな。ホントやつすいキャラだなあ。

「『アイソレイション隔絶領域』ねえ。名前からして空気を隔絶、収縮して攻撃したってところか？」

「ほう。なかなか頭のイイ野郎もたいだな。だが分かった所で俺の見えない攻撃は避けられねえぞッ!！」

再び林道が腕を横薙ぎに振るう。うお!？ 腕横に振るったのに攻撃真上からきたぞ!!

ああそうですか。ヴェントさんのパターンですか。

「ガキがしゃしゃり出てくんじゃねえよ!! 俺の能力はお前みてえな並の能力者に負けるほど弱くねえ!!」

確かに見えない攻撃するのは厄介かもしれねえな。

……ただしそこらへんにいる並の能力者だったら、って話だ。

「運が悪かったなあ」



ゆつくりと俺は林道を見据える。

「生憎、俺は並の能力者じゃねえんだよ」

『隔絶領域』。確かに稀な能力だ。名前からしても奴の言動からしても自分と相手とを隔絶して攻撃を防いだりできるんだろ。俺頭悪いから原理とか全く知らねえけど。

「知ってるか？ 光つてのは波動と粒子の二面性を持つんだ」

「ああん？ 何が言いてえ」

「波動つてのを強調する場合は光波つて言われるんだけど……、これって何を引き起こすか知ってたか？」

林道は知らないのかただ不機嫌そうに俺の話を聞いている。ここで攻撃してこないあたりホントはいい奴なんじゃね？ とか思う俺がいたりする。

「反射。屈折。……そして、回折」

原作知識を持つてる俺だから分かるけどそう。十五巻で一方通行と戦った垣根が使った戦法だ。正直、この能力を貰った時から一回はやってみたかったんだよな。

回折。

簡単に言ってしまうえば幾何学的には到達できない領域に回り込んで伝っていく現象のことだ。

つまり、林道がいくら俺との間に到達できないような隔絶された

空間を創ろうが俺には関係ねえ。

てかこうやって自分が同じ攻撃してみても改めて思っけど垣根まぢチート。

「あつづああああッ!!」

回折によって焼けるような痛みを受ける林道の叫びが広いホールに響き渡る。

叫びながらもこつちに走ってくるあたりまだやる気はあるようだ。ふむ、なら根こそぎ戦意を刈り取るとしようか。

「喰らえ林道!! 俺の超必殺技!!」

言つて右手を突出し、光子を集め収縮させていく。ジェット機が発射する前のような耳をつく甲高い音とともに俺の右手に収縮されていく光を見て、林道はようやく俺の正体を悟つたらしい。

「光……!!? お前。まさか第四位の魔法少ね……」

「喰らえ超高密度収縮粒子砲一万分の一ッ!!」

魔法少年という禁句ワードが聞こえたために言いきられる前に発射した。威力は一万分の一に抑えたから死にやしないだろうけど。

はあ、俺も御坂みたいになかつこいいあだ名がよかつたなあ……。

よりもよつて何で魔法少年!? ……いや解つてるよ俺がそんな恰好して出歩いたからだよ。

「終わったみたいだな」

「おう一条。そつちも終わったんか」

「まあな。下つ端瞬殺して客を避難させてただけだし。こんなボラ  
ンティアみたいなことしてたら白井にまた風紀委員ジャッジメントに入れって勧誘  
されちまうよ」

「俺なんか不名誉なあだ名が広まってんだぞ……」

これからはもうあんな服着ない。

騒ぎにならないよう警備員のいないセブンスミストの裏口からこ  
っそり脱出して俺は切実にそう思った。

100万アクセス突破記念コラボ？

『とある光学の魔法少年』(後書き)

次回からは本編に戻ります。

## 第71話 守るべきモノの為に

人間は予想だにしない出来事には対処するのに時間がかかる。それは脳内に可能性として抽出されていなかったが故に身体的、精神的に余裕というものが無くなるからだ。良くも悪くもそういった『予想外の出来事』というものはやはり唐突に降りかかる。

絶望にうちひしがれ、死をもなんとも思わないほどに荒廃した天塚葵の前に現れたのは、そんな彼にとって『予想外』な少女だった。

『116番、入れ』

部屋の番をしている研究員の一人に連れられこの牢獄のような部屋に足を踏み入れてきたのは、見た目十歳ほどの腰までであろうかという黒髪を持った少女だった。

天塚葵は、そんな少女に興味を抱くこともなく部屋の隅で膝を抱えたまま動かない。葵に限らず、現在この部屋にいる十数人の少年少女たちは皆一様に動こうとしない。それが無駄であるということが解っているからだ。研究所では何をしても無駄。ただの消耗品のように自らの身体を弄くり回され、最期はゴミのように捨てられる。

そんな地獄で、何を思ったのか部屋に入ってきた少女はトタトタと踞ったままの葵のもとまでやってきた。

『……………』

葵は近づいてきた少女を見向きもせず、ただ膝を抱えて下を向く。対して、やってきた少女は小さな口を開き、『予想外』の事を言った。

『ねえ、私と友達になつて？』

言われた瞬間は、葵は目の前の女の子が何を言っているのか分からなかった。友達？ そんなものこの場所には必要のないものだ。

『私、116番で言われているの。本当はちゃんとした名前があった筈なんだけど、もう忘れちゃった』

『……………俺に話しかけるな』

こいつと関わると碌なことにならない。そう直感した葵はこの少女を遠ざけようと拒絶した。

『ねえ、聞いてる？』

『……………』

『ねえってばあ』

『……………』

『052番さん』

『……………ッ』

半ば反射的に顔を上げた。そこには中腰でこちらを見下ろす少女の姿。

何故顔を上げたのか理解出来なかった。潜在意識のどこかで数字で呼ばれることを嫌っていたとでもいうのか。

『……何』

ボソツと。

そう呟いた少年に少女は優しく微笑んで。

『お友達になろうっ?』

小さなその手を、そっと少年のもとへと差しのべた。

「……ん、」

一条凧はボヤけたままの視界を鮮明にするため幾度か目をこする。

「はっ!？」

そして数秒の後、勢いよく起き上がった。見渡せばそこは白を基調とした病室で、自分を取り囲むようにして楓、美琴、帝督、星奈、上条、初春、土御門が居た。

「俺は……、一体……?」

「お前は剛徳司という男に襲撃され重傷を負ったんぜよ」

未だに前後の記憶が曖昧な凧に土御門が説明する。

「ッ!! そうだ俺身体を斬られて……ッ!!」

身に付けていた手術着の胸元を開いて自分の腹部を確認するが。

「傷口が……ない？」

そこには傷痕など残っていなかった。

「『冥土返し(ヘヴンキャンセラー)』が治療したんだ。当然と言えば当然だな」

「凧大丈夫……?」

凧が心配そうに顔を覗かせる。

「ああ。何とかな」

「全く、凧まで襲撃されるなんてどうなってんのよ」



隣のベッドに座っている美琴が呆れたように言った。ちなみに風のベッドの隣に美琴、更に隣に初春のベッドがあり、風の向かい側には帝督のベッドになっている。

「一条も目覚めたことだし、もう一度初めから説明といこうか」

金髪サングラスの少年土御門が真剣な口調でそう言うと、初春がノートパソコンを開いてカタカタとキーを叩き出した。

「先程も言いましたが、彼らのアジトというのはこの第七学区のある研究所の地下にあると思われます」

パソコンのウィンドウに表示された第七学区周辺の地図の一点に赤い光点が点滅している。

「この研究所のどこかに超能力者のAIM拡散力場に干渉する電波を流している装置があるはずです。それを破壊出来れば……」

「俺たちも超能力が使えるようになるってわけか」

『はい』と初春は尻に肯定の意を示した。そして同時に、それが困難であるということも。

「どうやらこの装置、他の研究所の装置とも連動しているようなんです」

「連動？」

「そうです。調べてみたところ断続的に桁違いの電力が使用されて

いるのは今言った研究所です。それとは別に三ヶ所、桁違いとまでは行きませんがそれでも通常よりは遙かに多くの電力を消費している施設が第七学区内にあります」

カタカタとキーボードを叩くと画面上にオレンジの光点で新たに三ヶ所の場所が点滅を始める。その三ヶ所は赤い光点を中心に、円を描くように点在していた。

「連動ってことはその四ヶ所で同時に電波を流してることか？」

「いいえ。先程も言ったように電波が流されているのは最も電力消費の激しい赤い光点の示す研究所だけみたいですよ」

「なら一体どういう意味だよ？」

「簡単に言ってしまうえば『委託』です」

初春はパソコンの画面に視線を落とし、第七学区の地図とは別に新たなウィンドウを開いた。そこに示されていたのは矢印が研究所の間に幾つも行き来する、リサイクルマークのような図だ。

「この赤い光点の研究所で装置を破壊しても、他の三ヶ所へとデータが転送されてそこで電波を流されてしまうみたいなんです。かといってこの大元の装置を破壊しない限り私たちの超能力は使えないままですよ」

「……………てことは一番手っ取り早いのは……………」

凧の辿り着いた結論に、初春も首を縦に振ることで同意する。

「第七学区内にある三ヶ所の施設にある装置を破壊してデータ転送を阻止した上で、本体である装置を破壊すること。これがこれから私たちがすべきことです」

それに、と初春は付け加えて。

「本体を破壊しなくても媒介となる施設が減ることで電波を蔓延させる効力が弱まって超能力を使えるようになるかもしれません」

「……よし。なら俺のやるべきことは決まった。……お前らに強制なんかしない。下手すれば命だって危ないかもしれねえ、現に俺と美琴は襲撃されたし、帝督だって怪我をした。だからここから先に関わるかどうかはお前らが決める」

周囲に漂う張り詰めた空気。それを破ったのは、正面のベッドに座っていた帝督だった。

「今更そんなこと聞くんじゃないやねえよ風。少なからず俺たちは関わっちまってんだ、この期に及んで見てみぬフリなんざできるかよ」

ニツと不適な笑みを浮かべる帝督に、怪我の影響など微塵も感じられなかった。

「私だってそうよ風。だいたい、やられっぱなしで黙ってられるわけないじゃない」

「美琴……」

「なんだかまたとんでもなく不幸な事件に巻き込まれちまってるけど見過ごせるはずねえ。俺も協力するぜ」

「上やんに同じく。それに俺の力は役に立つと思っぜい」

上条と土御門も揃って言った。口には出していないが、おそらくは楓や星奈、初春も全員が同じ気持ちなのだろう。

自分たちの街、大切なものを守るために。  
彼らは皆立ち上がる。

「……そうか」

凧は呆れたように小さく溜め息を吐くが、それはどことなく嬉しそうにも見えた。

「初春。その三ヶ所の施設の場所の詳しい情報をくれ」

「分かりました。直ぐに出します」

そう言って画面に表示された情報に目を通して少し考えたあと、凧は口を開く。

「北にある施設には美琴、東には帝督と土御門が行ってくれ。南には俺と上条で行く」

「ちょっと凧！私はっ!？」

「私もですー一条先輩っ!！」

自分たちの名前が呼ばれなかったことに声を荒げる楓と星奈。だが凧は決して邪魔だからとか足手まといになるからといった理由で彼女たちを外したわけではない。

「楓、蘭。俺はお前らに危険な目に会って欲しくないんだ」

「だからって……!!」

「分かってる。これは俺の我が侂だ。だけど譲れない、俺はお前らに待っていて欲しいんだ」

「でも……ッ」

「帰ってきた時、お前らが居場所を用意してくれなきゃ俺たちの居場所が無くなってるかもしれない。だからさ、信じて、待ってくれ」

「凧……」

それ以上、楓も星奈も抗議をすることはなかった。これ以上食い下がったところで凧は絶対に折れない。いくら言ったところでムダだと理解したのだ。

「……わかった。でも凧、絶対に危ないことはしないで」

言いながらも楓はそんなことは不可能だと確信していた。この状況が既に異常であるというのにどこに危険でない場所があるというのか。更に凧のあの性格だ。

「分かってるよ」

であるのにも関わらず、凧は二つ返事で楓に微笑んだ。

少しでも楓を安心させるために言ったものだというのは楓自身もちろん気付いていたが、それでも少女は少年の笑顔で少しだけ安堵していた。

「一条先輩……」

「蘭。お前も、楓と初春と一緒にここで待っていてくれ」

「はいっ」

ポンポンと星奈の頭を叩いて、凧は帝督たちのほうへと視線を移す。既にそこにのどかな雰囲気など存在していない。

「よし……」

一度小さく息を吐き、帝督、土御門、美琴、上条と順に顔を合わせ。

「行くぞッ!!」

既に陽も暮れた学園都市。深い紺色の夜空を背に散り散りに走っていく少年少女と、規格外な能力者たちとの戦いの幕が上がる。

## 第71話 守るべきモノの為に（後書き）

はい。というわけで次話から総力戦ということになります。

どうも私を書くこんな大勢vs大勢みたいな展開になってしまう……。

葵たちの過去を示しながら進ませていきたいと思っておりますが、早足にならないように徐々に明かしていくつもりです。

楓と星奈は今回他のメンバーと比べると火力不足が否めないために病院で初春とともに風たちのサポートに回ってもらいました。

次回はいよいよ戦闘回です!!

第72話 真意と再会（前書き）

遅くなり申し訳ありません；  
私用で一週間パソコンが使えない状況にありましてやっとの投稿です。



## 第72話 真意と再会

『お友達になろうよ』

はにかんだ笑顔を浮かべた少女は、その小さな手を少年に差し出した。

『……………』

部屋の隅で踞ったままの少年は、差し出された手をジッと見つめて。

『……………』

『ふふっ』

ゆっくりと自らの手と差し出されたその手を重ね合わせた。

病院からこっそりと抜け出した風、帝督、美琴、上条、土御門。

こっそりと言うのは主に凧帝督美琴の三人がカエル顔の医者から絶  
対安静と釘を打たれていた為だ。更に陽も暮れ視界も悪くなる。暴  
走した無能力者（レベル0）と鉢合わせないという確証などどこに  
もないため、病院という安全な場所で身を休めるとというのが最善の  
手なのだろうが。

（佐天さんを苦しめてる奴らをほっておけるわけない……！！）

美琴を始めとする五人全員が同じ想いを抱いていた。

学園都市を脅かし、超能力を奪ったばかりかあまつさえ無能力者  
をも暴走させてしまうような電波を流している『規格外体』アンリミテッド・メンバーズなどと  
いう奴らを野放しになどできるはずがない。

「……っ」

凧はギリツと奥歯を噛み締めていた。

（どうしてだ……）

それは病室を出る直前、ふと思い出したかのように初春が言った  
言葉を反芻しているからだ。

『あ、そつだ凧さん』

『んっ？』

『私が風紀委員の支部で襲撃されたとき、一方通行さんからの伝言  
を預かってたんです』ジャッジメント

『一方通行が!?!』

『はい』

『……どんな内容なんだ』

『第七学区、総合科学研究所』

その総合科学研究所は、初春のパソコン内で赤く点滅している地点、即ち奴らのアジトがある場所だった。一方通行が初春を介して風へと残したこの伝言の真意、それを知るべく過去を辿っていく。

思えば一方通行が不自然な行動を取るようになったのは一端覧祭の人気劇の途中いきなり席を立った時からだ。あの時の一方通行の表情は壇上にいた風からは窺い知ることが出来なかったが、いきなり体育館を飛び出していったあたり余程のことがあったのだろう。

(あの時の一方通行に一体何があったってんだ……?)

更にその後、一端覧祭の期間を含む一週間彼は完全に消息を絶つ。当然始めは何があったのかと思ったりもしたが一方通行は学園都市の頂点に君臨する超能力者だ。事件に巻き込まれていたとしても単独で解決できる火力を持つ彼ならば心配するだけムダだと思うよう

になった。

そんな矢先、学園都市中の能力者から超能力が奪われた。

そしてそれをまるで見計らっていたかのように突然鳴った風の携帯。画面に表示された『一方通行』の名前。

『この事件には関わるな』

そう釘を刺されたが、蓋を開けてみればしつかりと関わってしまっている風。

もしかしたら一方通行には分かっていたのではないだろうか。風を止めようとしたところで止まるわけがない。巻き込まれ、事件の核心に迫っていくに決まっていると。

だからこそ、初春に風への伝言を残した。

いずれ辿り着くであろうこの事件の答えに、風を導くために。

「ッ………」

そうだとっても風には解らないことがあった。

(なんで一方通行はいきなり姿を消したんだ……しかも奴らのアジトを知ってる……?)

「一条？」

そうして思考の海から凧を現実に引き戻したのは隣を走る上条だった。

「どうしたんだ？ 何か考え事してるみたいだけど」

「……いや、なんでもない」

「……そうか。それよりも前見るよ。あれが例の建物じゃないか？」

上条に促され、走りながら前方を見る凧の目に入ってきたのは明かりの消えた君の悪い工場だった。周囲をコンクリートの壁と有刺鉄線で覆ってはいるが辺りに警備員の姿は見当たらない。

「本当にここなのか？」

上条が首を傾げる。確かに見た目は明かりの点いていない不気味な工場、という印象でしかないが耳を澄ませば微かに機械の稼働音らしき音が聞こえてくる。

「見た目は虚像<sup>タミ</sup>。やっぱここで間違いないな」

言うやいなや、凧は警備員のいない入口から堂々と内部に足を踏み入れた。

「（ちょっと一条さああああんツ！？ あなた様は一体何をなさってるんでせうかああああッ！！）」

「ん？ 決まってるんだろ。中の機械ブツ壊しに行くんだよ」

「（何正面から堂々と不法侵入してんだ！！ ばれちゃうでしょうがッ！！）」

小声で静かに怒鳴るといふ器用なテクニクを披露している上条の心配をよそに、凧はスタスタと敷地内を進んでいく。

「ああそれなら問題ねえよ。この工場、目的の機械以外稼働してないから。当然監視カメラなんかも動いてない」

「それを先に言えっ！！」

しれつと言ふ凧に怒鳴り散らす上条だったが慌てて口を塞いで凧を追って敷地内へと足を踏み入れた。

工場の内部は閑散としていた。工場としてすっかり稼働していたのは随分昔なのか内部は埃が溜まり設置されていたいくつかの機械は錆びて使いものにならなくなっていた。

「本当にこんなところにその電波を委託できる機械が置いてあんのか

「？」

「ああ。えーと初春が言うには……、」

凧はポケットから携帯を取り出し初春から転送されてきた工場内部の見取図を開く。それによるとこの工場は全部で4フロアあるようだ。地上に2フロア、地下に2フロアだが、何故か地下二階の見取図だけが不自然に消失していた。

「地下二階まであるはずなんだけど、そこだけ見取図がないな」

「地下一階までなんじゃねえか？」

「いや初春に限ってそんなミスはしない。となると……誰かが意図的に地下二階の見取図を消したってところか？」

となると怪しいのはその地下二階だ。凧と上条はその機械が地下二階にあると踏み地下へと繋がる階段を降りていく。カッソ、コッソと二人の足音が広く暗い工場内に反響する。非常用出口を示す標識の明かりしか照らすものがない工場内で、その足音は暗闇に吸い込まれるようにして消えていく。

果たして、やはり地下二階は存在していた。階段を降りて地下一階に到達すると、更に下へと続く階段が在ったからだ。

「やっぱりな」

「どつするんだ一条」

「決まってる。降りるぜ」

二人は意を決し、さらに下へと潜っていった。地下二階へと続く階段を降りる過程ですぐに風はこれまでとの違いに気が付いた。

「明るい……？」

これまで非常用の明かりしか光源がなかった工場内部だが、地下二階に差し掛かるといきなり全体を照らす蛍光灯が白い光を放っていたのだ。

「どうやら地下二階にだけは電力供給がされてるらしいな」

地下二階に降りて長い通路を歩きながら風が言う。白で統一されたその通路は、病的にまで純白だった。

「真っ白だなあ」

「埃一つ落ちてない……。定期的に人が出入りしてるのか？」

その後も歩き続ける風と上条は、長さにして一〇〇メートルほど通路を直進したところでT字路に差し掛かった。

左右のどちらに何があるのかを示す標識はない。両方に視線を向けるが、どちらも扉があるだけで見たところ双方に違いはないようだった。

「どっちに行く？」

上条が風に問い掛ける。風はしばし黙りこんだが、

「……右に行こう」



結論をそう出して、凧は丁字路を右に曲がった。上条もそれに続き、目の前のこれまた純白の扉を開く。

そこには。

「ッ！！」

凧の眼が見開かれる。扉の先に広がっていたのは地下二階とは思えないほどの広大な空間。東京ドーム程はあるのではないかという円状の空間の中心に鉄塔にアンテナをくっつけたかのような巨大な機械が鎮座している。

しかし。凧が驚愕したのはこの光景を目の当たりにしたからではない。

凧の視線の先。

巨大な機械の丁度真下に佇む、白衣を着た一人の大男。凧はその男に激しく見覚えがあった。忘れるはずがない。つい数時間前、自分の身体を切り裂いた張本人なのだから。

グッと拳を握る。大男は相変わらずポケットに手を突っ込んだまま佇んでいる。

「剛徳司……！！！」

「よお第六位。元気そうだなによりだ」

「うんぐんぐん」  
剛徳司塊士。

アンリミテッド・メンバーズ

『規格外体』の一人である大男が居るということは、あの巨大な装置が破壊すべきものであるということ間違いないだろう。

「葵の言う通りだったな。本当にそっちから出てきやがった。わざわざ出張る手間が省けたぜ」

「てめえの後ろにある装置を破壊すれば、委託とやらはできなくなるみたいだな」

聞いて剛徳司は関心したようにヒュウツと口笛を吹いて。

「よく調べたな。その通りだよ第六位。ん、後ろにいるのは幻想殺し（イマジンプレイカー）か？ また厄介なのを連れてきやがってまあ」

剛徳司が訝しげに眉をひそめて風の横に立つ黒髪の少年に眼をやる。

「なんだよ。俺がいちやまずかったのか？」

「いんや。ただ異能の力なら全て打ち消しちまう馬鹿げた右腕を引っ提げてきた奴が居るのかってだけの話だ」

広大な空間に二人の少年と一人の青年。数だけで見れば少年たちが有利と取れるかもしれないが、方や未知の能力を持つ規格外体。方や超能力を奪われたレベル5とレベル0である。単純な戦力なら結果は火を見るよりも明らかだろう。

ただし、少年たちの表情は変わらない。

「……御託はいいんだよ剛徳司」

「ああん？」

我慢の限界を迎えたのか、低く唸るような声を呷が發した。今にも皮膚が裂けそうなほど力を込めて拳を握り。

「お前を倒さねえとその装置を壊せないってんなら、さっさとお前を片付けるだけだッ!!」

「いいねえ。俺としてもそっちのほうの話が早くて助かるぜ。今度こそためえは殺す……!!」

直後、地下から発生した大規模な衝撃が地上へと駆け抜けた。



## 第72話 真意と再会（後書き）

どうも晃甫です。

一週間ほど更新できず申し訳ありませんでした。

前書きにも書きましたが私用で福岡に行っておりパソコンが全く使えませんでした……。

さて今回ですがようやく佳境に突入できたかなあといった所でしょうか。

一方通行が残した伏線もここで少しだけ回収しています。まだ伏線張ったままな感じですが（笑）

次回は葵の過去と凧たちの戦闘回になると思われます。

## 第73話 アルテアローズ

可笑しな奴。

それが少年が少女に抱いた最初の感情だった。

この地獄のような研究所にやって来た以上、少女も何かしらの『特殊』な能力に目覚めた能力者なのだろう。ならば此処に来た時点で自分がどのような扱いを受けることになるのかということも幼いながらに理解しているはずだ。実験動物<sup>モルモット</sup>として身体中を弄り回され、ゴミのように捨てられる末路。希望などあるはずもなく、そこにあるのは闇よりも暗く深い絶望。

であるにも関わらず、少女はいつも笑っていた。

身体中に注射針の痕をつけられても、痣だらけになっても。その小さな身体では到底受けきれるものではないような痛みを受けても、少女はいつも笑っていたのだ。

名前などないその少女は何故か少年をえらく気に入ったようで、部屋にいるときはいつもすぐ隣にくっつき時間を共にした。

少年にしても、少女に対して不快感の類いは抱かなかつた。

それが少年の人生で初めて人間の温かさを感じたからだということに、この時の少年はまだ気付かない。

『なんだ。また傷だらけになってきたのか？』

『だって、実験のためとか言っただもん』

時間が経つにつれ、少年と少女は互いを守るために一緒にいるようになった。体力的にも実験に耐えられるようになってきた少年とは違い、まだ幼い少女はいつ実験で命を落としてしまつか分らない。実験を終えて部屋に戻ってきた少女の傷を見て、看病するのが少年の日課になっていた。

『えへへ、いつもありがとね』

頬を赤らめながらはにかむ十二歳の少女。その顔を見て自身の顔も熱を帯びていくのが少年にも分かった。

『ほら、診てやるから腕出せ』

『はい』

少年に言われるがままに少女はボロ切れのような服の袖を捲り、注射を打たれた箇所を見せる。

『……また限界量を測るための実験だったのか』

見せられた注射痕から、少年は忌々しげにそう言った。少女の発現した超能力は他人の能力に干渉し、自らの演算能力を付加させることでその能力を底上げさせるという『能力負担（AIMアシスタント）』という名の能力だ。

実験内容としては少女が荷担できる能力者の限界人数、限界容量

を科学薬品によって計測し限界量を引き伸ばそうというものだった。研究者たちはこの希少な能力を最大限に生かす、という大義名分のもと少女の身体を弄ぶ。幼い気な少女にとって耐え難いような実験だった。

『……よし、いいぞ』

少女の腕を診て出来る範囲で処置をした（隠し持った傷薬を塗るなど）ところで少年は少女の服の袖を元に戻した。

『ありがとう』

いそいと礼を言って少女はちよこんと少年の隣に座る。今この部屋には彼らを含め八人の少年少女が居るが、話をしているのはこの二人だけで残りの六人は死んだように動かない。

少し前までは、少年は残りの六人と同じだっただろう。何にも興味を示そうとせず、生に対する執着さえも最早無いに等しい、そんなとても『生きている』とは言えない荒んだ心を内に持つ彼らと。

だが、少年は少女と出会い、変わった。

それは偶然で、巡り合わせで、奇跡なのかもしれない。

少年はこの時、生まれて初めて『運命』という確証のないものを信じてみようと思った。



『ねえ、』

ふと、少女が口を開いた。

『何だ？』

『052番、なんて名前イヤでしょ？』

『当たり前だ』

何を今更といった感じで少年は隣に座る少女に返す。数字で区別されることに抵抗を持たない人間など居ない。まして実験動物モルモットのよ  
うに扱われるのならは尚更。

『だからね、貴方の名前を考えたの』

『名前？』

『そう。貴方の名前』

そう言う少女は少し恥ずかしそうに、それでいて嬉しそうに。

『いつも私の身体を看てくれてるし、そういう意味合いの名前を考  
えたのよ』

臆面もなく真っ直ぐこちらを向いてそう言う少女に、若干頬を赤  
くしながらも少年は問い掛けた。

『どんな名前？』

そして少女は告げる。  
彼にとって、生涯の宝と言っても過言ではないその名を。

『葵』

『葵……？』

『紫色の花なの。アルテアローズとも言ってるね、ギリシャ語で『治療』って意味もあるの』

そしてなにより、と少女は付け加えて。

『私が好きな花なの』

そう言って微笑む少女の頭を、少年は優しく瞳を向けながら二度三度と撫でた。気持ち良さそうに眼を細める少女に、ならばと口を開く。

『なら、俺も名前つけるよ』

『ふえ？』

『名前。お前だっていつまでも数字で呼ばれるの嫌だろ？』

『付けてくれるのっ！？』

嬉しそうに瞳を輝かせる少女に見合う名前を授けるべく、必死に

脳内を検索する。

こんな自分にも広い心で接してくれた。  
こんな自分を救ってくれた。

そんな彼女に似合う、最高の名前を。

『……桔梗』

『桔梗？』

『ああ。俺が一番好きな花だ。紫と白色のキレイな花。お前にピッタリだろ』

『桔梗、かあ。えへへ』

名前を貰ったことが嬉しいのか、少年から貰ったから嬉しいのかは定かではないが、少女はとても嬉しそうに微笑んだ。

葵という少年と、桔梗という少女。

二人はこの地獄のような場所で、かけがえのないものを手に入れた。

「おもしれえな、その右腕」

振りかざされる右腕を興味深そうに眺めながら剛徳司は呟いた。上条の突き出す拳をその体格からは信じられないほどのしなやかさで交わす大男は、上条だけでなく凧への警戒も怠らない。

「どうやら本当に超能力を打ち消しちゃう代物らしいな。この眼で見るとまでは信じられなかったが」

タンツ、と二人から一度距離を取って後ろに下がった剛徳司。彼に対して、二人は既に息が上がり始めていた。

それも考えてみれば当然のことだ。上条はいつものことながら、凧は能力を封じられているが故に慣れない肉弾戦を強いられている。体力の消耗も普段よりも何倍も早い。

「一条、どうすりゃいい？」

「どうするったって……、まずはアイツの能力ぐらい知りたいところだけだな」

いや、と凧は脳内でその言葉を否定する。彼は実際に奴の能力による攻撃を受けているのだ。その正体までは掴めていないが、まるで鋭利な刃物で切り裂いたかのような切り口から簡単な推測くらいは出来る。

（風力使い（エアロマスター）……？ 鎌鼬の要領で切り裂いたのか……？）

確かに高位の風力使いならばそのようなことも出来るのだろうか、引つかかることがある。

風力使いは、ここ学園都市において『バイロキネシス発火能力』や『電撃使い』(エレクトロマスター)』と同じく最もポピュラーな超能力の一つだ。規格外とまで言われるような能力ではない。

(何か違うな……。俺たちじゃ想像できないような特殊な能力ってことか……!!)

「おいおいどうしたよ。そんなところで突っ立ったままで動かなくなっちゃうやがって。ビビってんのかあ?」

剛徳司の挑発に簡単に乗るほど二人は愚かではないが、相手の本質が見えてこないことへの焦燥は募っていくばかりだ。

どうにかして奴の超能力の正体を暴かねばならない。そのためには先ず奴にその能力を行使させることだ。

「上条」

「うん?」

「まずはアイツの能力が何なのか知らないと話にならねえ」

「そうだな。……でもどうするんだ?」

きつと一条のことだ。何か俺には考え付かないようなすごい考えがあるんだろう。

そう考えていた上条は、数秒前の自分の考えを即座にゴミ箱にぶ

ち込んだ。

「お前アイツに突っ込め」

「……はい？」

「聞こえなかったのか？ 仕方ないからもう一回だけ言ってやる。

お前アイツに突……」

「はいストーーーーップッ！！ おかしいよな？ 絶対それおかしいよな！？ さっきのやり取り見てなかったのかよお前！！ 肉弾戦で手玉に取られてたじゃん俺！！ なのに突っ込めとか鬼かアンタ！！」

「えー？ だってお前の幻想殺し（イメージブレイカー）じゃないとアイツの能力封じれないだろ」

「それ以前の問題だっつってんだろッ！！ 能力使うまでもなくやられちゃうの俺！！」

最早泣き出しそうになっている上条をどつどつと宥めながら風は、

「冗談はさておき」

「冗談に聞こえねえんだよ！！」

怒り心頭の上条だったが一応の平静は取戻し、再び剛徳司の方へと向き直る。

その大男の背後には今なお稼働し続ける巨大な装置。あれを破壊

するためにも、目の前の敵を排除しなくてはならない。

「…………あれ？」

その時、ふと風は疑問に思うことがあった。

それは目の前に平然として存在していたが故に今まで気が付かなかった疑問。

(何でコイツ、学生じゃないのに能力が使えるんだ…………?)

気付いたそれは、小さな小さな突破口だった。

### 第73話 アルテアローズ（後書き）

どうも晃甫です。

今回でようやく少年と少女の名前の由来までたどり着くことが出来ました。

葵と桔梗はどちらも花の名で、どちらも白を含んでいます。この白が研究所の地下の白ともつながるんですがね。

そして風上の戦闘ですがこれがなかなか進まない……。

超能力封じられた状態でこの正体不明な能力者に勝つって物凄く難しいですよ（汗）

次回は帝督サイドも入ってくる予定です。



## 第74話 訪れし悲劇

葵と桔梗。

互いが互いへと与えたその名は、二人にとってかけがえのない宝物になった。

そして時間が経つに連れて芽生える自然な感情もまた、二人にとってかけがえのない……。

『ただいま葵』

『お帰り桔梗』

いつもの部屋に実験を終えて戻ってきた桔梗を待っていた葵が迎える。これまでならばこの研究所で有り得なかった光景がごく自然に繰り広げられていた。

『ほら腕出して』

『今日は薬品の本数少なかったから平気だよ』

『ダメだつてば。薬塗っておかないと赤く爛れてきちゃうから』

『はい』

研究所にやって来たころとは違い、葵は面倒見の良い兄のような性格に変化していた。それは紛れもなく、桔梗という少女がもたらした大きな変化で、彼女もまた、その天真爛漫さで少年の心を癒している。

葵と桔梗がこの研究所にやって来て、もうじき八年になる。正確な年齢は自分自身よく分かっているが数え始めた年齢で言えば葵は十八歳、桔梗は十六歳になる。

この八年で訪れた大きな変化と言えば前述の通り葵と桔梗の出会いだが、研究所全体から言えば研究内容の方向がある一つの方向の定まったことだった。

今現在この檻のような部屋に居るのは葵、桔梗を含めて八人。その全員に当てはまるのは皆十五歳以上ということだ。これまでならば小学校低学年ぐらいであろう少年少女も実験に参加させられていたのだが、この人選も研究内容が定まったことに大きく関係していた。

『おーい英吏ー』

『何？』

桔梗に英吏えいりと呼ばれた同い年くらいの少女は立ち上がって葵たちのいるところまでやってきた。この少女は今から二年程前にこの研究所にやってきて以来、葵たちと仲よくなった人間の一人だ。年齢は桔梗と同じらしいのだが、如何せん桔梗が子供っぽいのも相まって英吏はとても大人びて見え、お姉さんのような役割を担うようになっていた。

『袂たもと遠とほわあ？』

『さつき投薬実験だとか言っつて出いて行いったわ』

『そついや円まどかや塊かいじ土も居いないな。皆実験か』

ぐるつと部屋内部を見渡して目当ての人物が居ないのを葵が確認する。祢遠、円、塊土。この三人も英吏と同じくこの研究所で過ごすうちに仲を深めていった少女少女たちだ。現在研究所にいる八人のうちの六人はこういったグループを作り、この地獄のような研究所で過ごしている。

ちなみに、これら全ての少年少女たちの名前を考えたのは桔梗である。

『最近一日に行う実験の回数が増えたわよね。前までは多くても一日に二回だったのに、今じゃ日に四回することだってザラだし』

英吏が不審げにそう言う。

確かにここ数か月で実験回数は格段に増加した。それも従来のような猟奇的な実験ではなく、薬品や電気信号を介したまともなモノに。それは被験者である葵たちからすれば喜ぶべきことなのであるが、これまでの研究所の実態を知っているが故に何か裏があるのではないかという不信感が拭えないでいる。

事実、そういう実験になってから新たな実験体（子供）はこの研究所に連れてこられていない。さらに簡単になった実験であるにも関わらず一人、また一人と子供はこの部屋から消えて二度と戻ってはこない。

『研究内容が変わったってことだよな』

『そうね。しかも新しい実験体を連れてこないってところを見ると、その実験も終わりに近づいてるのかもね』

『ねえ何の話してるの？』

難しい顔をして話し込む葵たちに割って入ったのはつまらなさそうに頬を膨らませている桔梗だ。本当に英吏と同年齢なのだろうかと疑ってしまうくらいに彼女は幼く見える。

『実験の話さ』

『実験って私たちがいつもやってる？』

『ああ。何か裏があるんじゃないかってさ』

『ふうん』

聞いておきながら大して興味を持っていなかったのかあっさりとその話を聞き流した。

そんな桔梗に真剣な空気をぶち壊された二人はプツと息を吐いてこの話を打ち切った。

今思えば、此処ではつきりさせておかなくてはいけなかった。そうすれば、あまりにも大きすぎる犠牲を出さずに済んだかもしれないのだから。

そして、その日はやって来た。

『052番、116番、178番、335番、389番、402番。』

出る』

いきなりドアを開いてズカズカと入ってきた白衣を着た数人の研究者に番号を呼ばれ、葵を始めとした六人は部屋から連れ出された。いつもと様子が違うのは奴ら（研究員）の表情を見ればすぐに理解することが出来た。

戻っていたからだ。

あの頃の、狂気に満ちた悍ましい表情に。

一言も話さない研究員に連れられてやって来たのはいつも実験を行っていた研究棟ではなく、ドーム状の広々とした空間だった。その内部にはいくつもの実験機材らしきものが設置され、その中心にカプセルタイプのベッドのようなものが六つ、円状に並べられていた。

ここでようやく、葵たちを連れてきた研究員が口を開く。

『喜べ』

訳が分からない葵たちに、狂気に満ちたその瞳で訴えかけるように。

『君たちは選ばれたのだよ！！ 学園都市の常識を覆す、その第一歩となることに！！』

『常識………？』

未だ理解が追いつかない葵だが、研究員が持っていた資料の表紙に記載されていた字を読むことは出来た。

そこにはこう書かれたいた。

【第一次能力者回路改造実験】

この日を後悔しなかった日など、後に一日もない。  
全ては、この日より始まった。

「ここか」

「そうみたいだぜい」

第七学区の東にある装置を破壊するためにやってきた帝督と土御門の前に聳え立つのは、寂れたアパートだった。まるでここだけが他の場所から隔離されてしまっているかのように廃れてしまっているそのアパートの扉を手動で開き、埃っぽい中へと入っていく。

「しかしこんなトコにそんな大層な装置が置いてあんのか？ 見

た感じたただのボロアパートにしか見えねえんだが」

頭の後ろで腕を組みながら歩く帝督は周りを見回しながらそう呟く。

それに対して土御門は。

「いや。案外こういつた寂れた場所に重要なものを置くのは正しい。なにせ人が来ないからな。木を隠すなら森、とは違うがよく考えられてる」

そうして通路を歩き続ける二人は、やがて現れたエレベーターの前で歩みを止めた。

どうやら電気系統は正常に作動しているらしくエレベーターも動いているようだ。

「どうするよ、乗るか？」

「それ以外に方法はないな。なにせ装置があると考えられる地下三階にはエレベーターを使わないと降りねん」

「だよな。行くぜ土御門」

「おう」

二人は小さなエレベーターへと乗り込んだ。目当てのボタンを押したそれはゴウンと一度揺れた後降下を開始する。

「装置つてのは見てすぐにそれと判るもんなのか？」

「ああ。学園都市中をカバーできるほどの電波を発信できる装置だ、

目を引くほど巨大なモノのはずだ」

チンツ、と小気味のいい音を立てた後、降下を止めたエレベーターの扉が左右に開く

「ッ!？」

「チツ!！」

と同時。

開いた扉の先から無数のナイフが飛来してきた。

帝督はエレベーターから飛び出して左に避けることで、土御門は身を屈めることで無数のナイフをかわす。

「……チツ、随分と手荒なご挨拶じゃねえか」

転がるようにしてナイフを躲した帝督は服についた埃を払いながらゆっくりと立ち上がり、ナイフの出所へと視線を向ける。

その先に立っていた人物は、一度見たら忘れない、忘れられない人物だった。

「てめえ……ッ!！」

今でもはつきりと網膜の裏に焼き付いて離れない。

長点上機学園で大きな揺れが発生したとき、校舎の窓から見た景色の中、もっと言えばとあるビルの屋上に平然と立ち、眼が合った人間。

業火よりも赤い髪、少年というには些か大人びすぎている風貌。そして研究員が身に着けているような白衣。



「よう。あの時以来だな未元物質<sup>ダークマター</sup>。そっちにいるのは……知らねえな、お前の連れか？」

『アンリミテッド・メンバーズ  
規格外体』

そのうちの一人に違いなかった。

赤髪の青年の後ろのは細長い円筒状の大きな装置が設置されており、それが初春の言っていた『委託』を引き受けるための装置であるということとは二人の目から見ても明らかだった。

あれを破壊しさえすれば学園都市に蔓延している電波をとめることができる。帝督はゴキツと腕を鳴らした。

「てめえの後ろのソレ（・・・）、ソレをぶっ壊しさえすりゃあいいんだろ？」

彼自身、フラストレーションは既に限界値を悠に超えていた。これまでその強大な超能力を駆使して事件を解決してきた帝督だ。その要である超能力を奪われ、生身での戦闘を余儀なくされることのストレスは半端ではない。

「最も、それは帝督だけでなく凧や軍覇にも言えることだが。」

「クハッ、オイオイお前それは俺を倒すってことか？」

馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに笑う赤髪の青年に対し、今度は土御門が口を開く。

「貴様舐めているのか？ 俺たちが何の下調べもせずこんな敵の本拠地に出向くわけがないだろう」

「ああん？」

「貴様のことは既に調査済みだ。『規格外体』の一人、みなしまどか船首円」

ピクン、と僅かに船首の眉が動く。

「……どうやらお前もただのバカじゃあねえらしいな」

髪と同じで燃えるように赤いその双眼で帝督たちを睨みつける。

「だったら見せてもらおうじゃねえか。超能力が使えねえこの状況で、どうやって俺を倒すのかをなあッ！！」

同時、真っ赤な閃光が帝督と土御門へと襲い掛かった。

しかし。

「残念だが……」

「この俺に、そんな常識は通用しねえ」

学園都市が誇る最高位の超能力者と魔術師は、真向からそれと相対した。

耳を塞ぎたくなるような轟音が、建物全体に響き渡った。

## 第74話 訪れし悲劇（後書き）

ども、晃甫です。

というわけで今回でかなり葵の過去が明らかになり、分かりやすすぎる伏線は次回回収という感じですね。

もうすでにお分かりの方もいるとは思いますが『規格外体』の面々が超能力を使えるのはこの実験のせいです。

そしていとくとくと土御門が戦闘開始ということでドンパチやらせませすよ（笑）

第75話 そして現代へと（前書き）

これにて葵の過去は終了。

次回からは再び現代に戻ります。  
でわ。

## 第75話 そして現代へと

後悔先に立たず、とはよく言ったものだ。

後悔とは『後に悔やむ』と書くようにその事象の結果として抱く感情の一つだ。

過去はいくら願っても変えることが出来ないように、どれだけ後悔したところでその事象が変化するわけではない。

後悔した所で何も変わらない。

過去は変えられない。

ならば。

これから先。即ち、未来。

未来を変えよう。

もう二度と、悲劇を生み出すことがないように。

### 【第一次能力者回路改造実験】

研究者が脇に挟んでいた複数枚がクリップで留められた資料の表

紙にそう印字されていたのを見て、葵は怪訝そうに眉を潜めた。

(回路改造……？一体俺たちに何をさせようっていうんだ……？)

『さあ、こちらへ来るんだ』

戸惑いを隠せない六人の手を無理矢理引いて、研究者たちはカプセルタイプの装置にそれぞれを寝かせるように配置する。装置の中に寝かされた葵たちの頭にはヘルメットに無数のコードをくっ付けたようなものを被され、手足を特殊合金で出来た鎖で縛られた。

『これは一体……』

『黙っていたまえ。舌を噛むぞ』

口を開いた葵を研究者の一人がそう言って黙らせる。

一体これは何の実験なのか実験名からしか推測することができない彼らにとつて内にあるのは恐怖しかない。

葵も桔梗も、そして他の四人も同様に顔を強張らせ研究者たちの動きをジッと見つめていた。

『ねえ……』

ふと、隣の装置に寝かされている少女から声が掛けられた。誰か確認するまでもない。

想い人、桔梗だ。

『どつした……？』

『これ、何の実験なのかな……』

平静を装っているつもりなのだろうが、葵には言葉の端々から垣間見える怯えが手にとるように分かった。

そんな彼女を安心させるために。

彼は努めて明るく。

『いつもと同じだよ。別に心配する必要なんてないさ』

『でも……』

解ってる。

この実験がこれまでの実験とは根本的に違うということくらい。

それでも、最愛の少女のために少年は声色を変えないで言う。

『桔梗。大丈夫だよ。この実験が終わったらまた部屋でお菓子食べ』

『よし』

『……うんっ』

桔梗が大好きなアーモンドの乗ったクッキー。それをまた皆で食べよう。いつものように、何事もなかったかのように。

『……よし。準備はいいか、始めるぞ』

研究者のその言葉を聞いた瞬間、葵は鼓動が早くなるのを感じた。口の中がカラカラで喉が渴き、動いてもいないのに呼吸が早くなる。

(そうか……。俺も無意識のうちに怖いと思っていたのか……)

自嘲気味に薄ら笑いを浮かべる葵は、できるだけ表情に出さないように瞼を下ろした。

直後。

カチツ、と何かのスイッチを入れる音が耳に届いたと同時に。

『う……アアあゝあゝあああああッ！！！！』

身体中の血管が破裂し、あちこちの臓器がむちゃくちゃに暴れまわっているのかという激痛が襲いかかった。

最も酷かったのは頭だった。

脳味噌を素手で鷲掴みにされ、そのままグチャグチャに握り潰されるかのような擬似的な感覚が絶え間無く葵を襲う。

『うああ……ガアあああああッ！！』

ビクンツと縛られた身体が痙攣を起こす。特殊合金で出来た鎖がギシギシと軋むが、それさえも引きちぎってしまいそんなほどの力で強く拳が握られていた。

絶え間無く身体を破壊するかのごとく襲いかかる激痛。

脳を内側から破裂させるかのような激痛。

強く握りすぎて爪が皮膚を食い破り溢れ出す血液にも気がつかないほどに、度を超えた激痛が葵を覆い尽くす。



そしてそれは、やがて葵の脳内である変化を引き起こす。

ブチンッ

例えるならば、脳に絡み付いていた鎖が壊されて解き放たれたよ  
うな、そんな感覚。

先程までの身を引き裂かんばかりの痛みが嘘のように消え失せ、  
その代わりに冴え渡りまるで入れ替わったかのような脳内。

かと思えば、消え去っていた筈の激痛が再び襲い掛かってきた。

コレハナンダ？

コノ感覚ハナンダ？

俺ハドウナツタ？

俺ハ……誰ダ？

自我を保っていることすら最早不可能なほどに葵の脳内は錯乱し  
ていた。断続的に続いてきた激痛と意味の解らないスッキリとした  
爽快感が目まぐるしくいくらいに入れ替わりながら、葵の身体を根本  
から造り替えていくように。

『ガッ……ガアアアアアアアアアアッ！！！！』

喉が裂けそうな程の絶叫。

だがそれは、葵だけに限った話ではなく、この実験に参加させら  
れていた六人全員に言えることだった。

『ぎゃあああああああああッ！！』

『ウアアアアアアアアア……ッ、あああああッ！！』

『ぐぎゃあああああああッ！！』

『イヤアアあああああッ！！』

一人の例外もない。

葵の隣に寝かされていた、桔梗であっても。

『アア……アアアアアアアア！！』

(き……きよ、う……)

錯乱した状況下で、葵は虚ろながら桔梗の叫びを聞いていた。

助けないと。

だが、腕が、脚が。思うように動かない。どれだけ動けと念じても、ピクリとも四肢は動いてはくれない。

ヤメロ

桔梗の絶叫を耳にしながら葵は吐き捨てるように願った。

モウ、ヤメロヨ

願ったところでこの現状が変わるわけではない。

願ったところで実験が終わるわけではない。

『……める』

身体中を駆け巡る激痛を押し殺して、葵は口を開いた。それしか

できなかったのだ。こんな馬鹿げた実験に参加したせいで苦しむ桔梗を、これ以上見ていたくなかったから。自分の身体のことなどどうでもよかった。

ただ、大切な人を守りたかっただけ。

『やめる才おおおおおおッ！！』

ブチブチッ、と特殊合金できていた拘束具が弾け飛んだ。そのせいで葵の四肢から血が垂れているが、彼はそんなことはどうでもいいと言うようにカプセルタイプの実験装置から飛び上がり隣に寝かされている桔梗のもとへと駆け寄って行った。

『桔梗、桔梗ッ！！』

葵が拘束具を破壊した時点で実験は中断、または終了していたのかすでに桔梗をはじめとした五人の絶叫は聞こえなくなっていた。少年の前に横たわっていたのは、少年に名を与え、絶望の淵から救いだし、そして愛した少女の変わり果てた姿だった。

身体の至る所から出血し、ピクリとも動かない。

『き、きょう……？』

信じたくなかった。気を失っているだけだと思っていたかった。もう一度あの屈託のない笑顔を俺に向けてくれると信じたかった。

『なあ、起きてよ。実験は終わったんだ、早く部屋に戻るっ』

桔梗の肩を掴んで揺さぶる。無意味であると、心の奥底で理解しながら。

『実験前に言ったじゃないか。お菓子、アーモンドクッキー一緒に食べるって約束しただろ……？』

桔梗の頬に一粒の滴が垂れた。それが葵の目から溢れ出した涙であるということに彼は気付かない。

『……うあ』

葵の顔がクシャクシャに歪む。涙と鼻水で汚れたその顔で血塗れの桔梗を見つめ、受け入れた。

彼女の死を。

『うわあああああああああああああああ！！』

泣いた。研究者の目も憚らず、ただ思い切り泣いた。

『六人のうち五人が成功。これは偉大なる成果ではないか』

唐突に、研究者の一人がそう呟いた。この実験場の上にあるモニタールームから見下ろす研究者たちは歓喜に沸いているようだった。

『早速これを学会に発表しなくては』

『直ぐに論文にまとめたまえ』

『成功体の五人をすぐに回収。失敗作は処分しろ』

……今、何と言った？ 処分？ 桔梗を？

ふざけんじゃねえ

『元はと言えば……てめえらの所為じゃねえか』

ゆらりと桔梗が眠るカプセルから離れて立ち上がる。見据える先は言つまでもない。

お前らが奪つた。

お前らが殺した。

俺の大切な人を。

俺が愛した人を。

『皆殺しだ……!!』

憎悪に満ちた眼は、研究者たちに向けられていた。実験によって更なる『特殊』な存在へと変貌した葵を一介の人間である研究者たちに止められる筈もない。ただ一方的な殺戮がこの研究所で行われた。

『……………』

桔梗の亡骸を抱きながら、葵はいつもの部屋に戻ってきていた。

気を失っていただけの四人には目を覚ましてもらい、部屋の外で待機してもらっている。

『桔梗、覚えてるか？ この場所でお前は初めて会った俺に友達になろうって言ったんだ』

部屋の隅で蹲ったまま生きることが諦めていた少年を救い出した小さな手。その手は今は冷たく、動かない。

『傷だらけで帰ってくるお前を手当てするのが、俺の日課だったなあ』

手当用の訪台や傷薬も、もう必要ない。

『ほんと、手のかかる妹みたいで……』

桔梗を抱く腕が小さく震えだす。

『ほんと……』

それから先を、言葉にすることが出来なかった。嗚咽としゃくりで声が出せず、涙で桔梗を直視することができない。葵の頬を伝う涙が零れ、桔梗の頬を濡らす。とめどなく溢れる涙に抗うことが出来ず、葵はもう一度大声で泣いた。涙も声も枯れるまで、ひたすらに泣いた。

ひとしきり泣いたあと、ゆっくりと桔梗を床に下した。思い切り泣いたからなのか、今は桔梗の死を容易く受け入れることが出来た。

『桔梗……。お別れだ』

自分と桔梗の思い出の詰まったこの場所で安らかに眠れ。

『桔梗、俺さ。ずっと言いたかったことがあるんだ』

こんな形でしか伝えられないということが、残念なのだけれど。少年は伝える。心から抱く、この感情を。

『ずっと……好きだった』

燃え盛る研究所を眺めながら、葵は一つの決意をした。もう二度とこんな悲劇を生まないように。

能力者なんてものを、ここ学園都市から廃絶させよう。そうすれば、自分たちのような思いをする子供はいなくなる。

『葵……』

『ん、英更か』

背後に立っていた英更の言葉に振り返る。彼女もまた悲しいはずなのに、それ以上に悲しんでいる葵を前にしているからなのか悲しそうな素振りは見せない。

『桔梗のこと……』

『それ以上は言つな。解ってるわ』

もう一度だけ、燃え盛る研究所に眼を移して。

『安らかにな……桔梗』

葵を含めた五人は姿を眩ますためにその場を後にする。社会的には実験中の事故で全員が死亡、火災によって研究者たちも死亡ということにしてあるからだ。

これより先、『規格外体』と名乗るようになった彼ら五人は能力者をただの人間に戻すための研究を開始。

そして、時間軸は現代へと巻き戻り。



## 第75話　そして現代へと（後書き）

なんか書いてて重くなり過ぎたような……。

この過去を通して言いたかったのは葵にもそれなりの理由、正義があるってことです。ただの悪役という枠にはまらないキャラですからね。

第76話 規格外の能力（前書き）

今回から戦闘回です。でわ

## 第76話 規格外の能力

始まりがあれば、何れ必ず終わりを迎える。それが一分か、一年か、はたまたそんな年月が米粒のように思えてしまうほどの長い年月かは解らないが。

始まりは謂わばある意味での終わりだ。

何かが始まれば、同時に何かが終わる。そのまた逆も然りである。

人為的に発生させられたこの事件も、始まった以上は必ず終わる。それがどのような形で決着し、終息するのかまでは分からないが。

「そうか。報告ありがとう英吏」

第七学区にある『アンリミニテッド・メンバーズ規格外体』の拠点、総合科学研究所。その地下の一室でソファに背中を預ける葵は手に持った端末のボタンを押し、英吏からの通信を切った。

「どうやら君の予想通り彼らは三つの施設にやって来たようだ」

応接室のように大理石の机を挟んで対面に座る少年に、葵は笑みを浮かべてそう言った。

「当たり前だろオが。アイツは絶対にこんな事件を見過ごしたりはしねエ」

対面に座る少年、一方通行はドカッと大理石の机に足を丸投げし、頭の後ろで腕を組んで答える。

「いいのかい？ 折角君がこちらに来ることで彼らの安全を保障しようという話だったのに」

「どの口がほざきやがるこの能面野郎が。そんな話したくせにバツチリ殺そオとしてンじゃねエか」

一方通行が舌打ちした後、葵は静かに立ち上がって出入口へと向かう。

「一方通行。君もこの学園都市の本質を目の当たりにしているだろう」

「あア？」

「ここは腐ってる。熟れすぎた果実のようだ。そんなもの、さっさと樹木から切り取ってしまわなければならない」

「……ハッ、その果実とやらが超能力だとも言いてエのか？」

「正にそうだ。君だってそんな能力がなければ、学園都市第一位な

んて立ち位置がなければ、あんな地獄は見ずに済んだのだよ」

学園都市暗部。

凧と出会う前の一方通行が身を置いていた嘗ての居場所。日常的に非人道的な実験が繰り返され、多くの人間が犠牲となっていく。そんな掃き溜めのような居場所。

一方通行自身、そこから這い上がるまでは自分は一生この場所から表の世界へ戻れることなどないと思っていた。

「確かに俺を闇から引き摺りだしてくれたってことだけには感謝してる。だがな、超能力は学園都市の根幹にあるようなモンだ。それを無くすなんざ不可能だ」

一方通行の言うことも最もである。

ここ学園都市の代名詞とも言える超能力。それを求めてやってくる人間が大多数を占めるこの街で、いくら個人のAIM拡散力場に干渉する電波を流し続けてもそれが永久的に継続できるとは思えない。何れはこの事件が外部に漏れ、自分達が弾圧される可能性が高いだろう。

「それにだ。凧たちが動いてる以上、必ずお前らの野望とやらは達成出来ずに終わるぜ」

相手を小馬鹿にするように口元をつり上げた一方通行が、ドアの前で立っただままうごかない葵の背中に向けて言い放った。

「……君は余程彼らを信頼しているんだね」

対して、葵は背を向けたままドアのぶを掴む。

「ならば君は彼らが此処まで辿り着いた場合、どちらにつくんだい？」

「……………」

「仲間を取るのか、君自身のもう一つの願いを取るのか」

「……俺は、」

「今は言わなくていいさ。時が来れば自然に判ることだ」

葵は一方通行の返答を待たず、ドアのぶを回して部屋を後にした。残された一方通行の苦痛に歪んだ表情を見ることがなく。

超能力が使えない、というのはやはりとんでもなく厄介だったと今更ながらに凧は実感する。

「オラオラ逃げてばっかじゃ何時まで経ってもあの装置はブツ壊せねえぞぉー!!」

正面から押し寄せせる謎の衝撃波を間一髪のところど回避しつつ、  
凧は横目で上条のほうを見る。

（上条の右手で打ち消せてるってことはやっぱりこれも超能力……、  
一体何の能力何だ？）

衝撃波に向けて突き出された上条の右手は、衝撃波に触れたと同時  
に甲高い音を発して消滅させてしまった。ということは剛徳司は  
自身の持つ何らかの超能力によってこちらを攻撃してきているとい  
うことになるが、『バイロキネシス発火能力』や、『ハイドロハンド水流操作』のように目に見える  
ような解りやすい超能力ではないらしく、一向に剛徳司を倒すため  
の糸口が見えてこないのである。

（大体何でアイツは普通に超能力が使えるんだ！？ 耳栓でもして  
んのかよ！！）

耳栓などしたところで脳に直接作用するこの電波を防げるはずな  
いは重々承知しているが、解決の糸口さえ掴めない現状ではこう  
考えてしまうのも仕方ない話だ。

「一条！ どうすりゃいいんだ！？」

上条が右手を突き出して剛徳司の攻撃に耐えながらこちらに訴え  
てくるが、正直今はそれどころではない。アイツが能力を使用出来  
る理由を知らないことには対応の仕様もないのだ。

現段階のこちらの戦力は上条の右腕だけ。超能力の使えない凧は  
戦力にもカウントされない。

戦況は圧倒的不利。

（考える考える考える。何でアイツは能力が使えるんだ？ 大体アイツ学生って年じゃないだろ、能力開発を受けられるのは学生だけだし。何より大人になれば超能力は使えなくなっちまう筈だ）

学園都市とはその名の通り学生が大半を占める学生の街。故に能力者など大して珍しくないわけだが、不思議なことに大人の能力者は全くと言っていい程存在しない。

大人に能力開発することが不可能であるということを差し引いても、超能力を使用する大人はいないのだ。

おかしくはないだろうか。

ならば、幼い頃に能力開発を受けた学生は成長するとどうなるのか。

答えは簡単、超能力が使えなくなるのだ。

『超能力』とは『自分だけ（パーソナル・）の現実』リアリティを自覚することによって発現する。それは言うなれば不可能なことを出来ると錯覚することで引き起こすものだ。掌から炎を出す、空を飛ぶ。通常の間人であれば一笑に臥すそんな夢物語のようなものを出来ると信じることで、超能力は発現される。

だからこそ、能力開発を行うのは子供。

子供は柔軟な考えをすることができる。更に発想も豊かだ。人生を長く過ごすうちに凝り固まってしまった大人の脳では、例え能力開発を行った所で超能力など発現しない。

学生のうちに脳を開発した学生であっても同じ事が言える。

大人になるにつれて徐々に『自分だけの現実』が自覚できなくなってくるのだ。今までは出来ていた、信じていたことが絵空事だと



思うようになる。常識に縛られるようになる。

そうなってしまえば、もう超能力は使えない。例外はない。個人差はあるものの、いずれ能力は使えなくなるものだ。

そうであるにも拘らず、目の前の二十歳前後だろうかという青年はごく当たり前のように超能力を行使している。

(何か理由がるはずだ……！　じゃなきゃ大人が能力を使うなんて有り得ない……！！)

「！！　一条ッ！！」

唐突に上条が風の名を叫ぶ。それに反応した風はハッとして前方に注意を向けるが。

「ッ！！」

遅かった。

無数の衝撃波が、碌にガードの態勢も取れていなかった風を直撃した。

「一条！！」

声を荒げた上条が風のもとに駆け寄ろうとするが、突然足を止めた。視線の先、膝を付きながらもこちらに来るなどでも言うように

突き出された風の腕。

「大丈夫だ……。それより、アイツの能力を早いとこ暴かねえと……」

ゆっくりと立ち上がる風だが、その身体の所々からは赤い液体が滴り落ちていた。

「ほお。なかなかタフだなお前」

「てめえに褒められても、何にも嬉しくねえよ……」

「まあそうつれなくすんなよ。お前らにヒントをやるうってのに」

「ヒント……だと？」

怪訝そうにする風に、剛徳司は楽しそうに続ける。

「ああ。俺だけがお前らの情報を持つてるってのはフェアじゃねえからな。俺の能力くらい教えてやるよ」

「ハッ……、そんなのに騙されると思ってたのか？」

「信じる信じないはお前らの自由だ、好きにしろよ」

そして剛徳司はあっさりと自身の能力名を口にした。

「『アスリルレーション自在振動』」

「これで間違いないのよね」

第七学区北側に位置しているとする雑居ビルの地下四階。一見するとテナント募集中の古びた建物だったが、内部、それも地下へ足を踏み入れるとそこはもう別世界だった。学園都市内でも最先端の機械があちこちに散りばめられ、外見とのギャップに驚かされる。そしてその中央に聳える大きな装置。初春に確認したところこれが電波を委託できる装置の一つで間違いないようだ。

「あとはこれをどうやって破壊するかよね」

超能力が使えたならば『電撃使い（エレクトロマスター）』の美琴にとって機械を使いものにならなくする方法など幾らでもあったのだが、生憎今はただの中学生。力技で破壊、というわけにもいかない。

適当に弄ってみようにも内容が高度すぎて美琴でも手が出せない。

（とりあえずそこらへん殴ってみるか）

竹を割ったような性格をしている彼女は行動も単純だったりする。

「だめだめ。それ大事なモノなんだから壊しちゃ」

「!?!」

不意に背後から聞こえてきた聞き覚えのある声に反射的に振り返る。

「アンタ……!!」

忘れるはずもない。

ジャッジメント  
風紀委員の支部で対峙したその女を。

「はあ。やっぱりあんなガキンチョに止めさせるなんてのが間違いだったのよねえ。自分でやるのが一番確実だし安心だわ」

ガキンチョ、とは恐らく一方通行のことを言っているのだろう。  
現れた女は面倒くさそうに前髪を弄りながら。

「さて。今度こそ殺すよ、超電磁砲レールガン」

「加瀬かせ……、祢遠ねおん……!!」

『アシミレート完全同化』を有する規格外の人間との戦いが幕を開ける。



## 第76話 規格外の能力（後書き）

ども、晃甫です。

今回独自解釈が多々ありましたが、作者の勝手な考えなので（汗  
大人が能力開発を行えない、というのはなんとなくこの理論で合  
っているような気もするんですが……、成長した学生については完  
全に想像です……。

もしこんな理由だ、というのがあれば是非に教えてください。

突然の番外〜前編〜（前書き）

なんの前触れもなく番外なんて書いてすいません。

以前活動報告に一本なにか書きたいなあなんて書いたところ親切にも案を出してくださった読者様がいまして、今回はそれを書きました。

というか、本編はシリアス展開過ぎて作者自身が我慢できなくなっただからです。

たまにはギャグだつて書きたいんだ！！ といった感じでほぼ欲望のままに書き殴ったものです。

最近空気だった軍霸さんに出番をあげたかったんだ（笑）

でわ。

## 突然の番外〜前編〜

凧たちが『規格外体』と戦闘を繰り広げているころ。

「ん？」

全力疾走を続けていた白い特攻服のような学ランを身に纏った少年、削板軍覇は突如としてすつとんきような声を発した。

「つかしいなあ。第七学区の病院てどこだ？」

長点上機学園を脱出し、御坂が襲撃されたとの一報を受けて第七学区の病院を目指して走り続け……ていた筈のだが、いつの間にか全く見覚えのない場所に立っていた。

迷った、と言えば確かにそうなのだろうが、それ以前に此処がどこなのか全く検討がつかない。

学園都市、という科学の最先端の街に先程まで居た筈の少年が現在立っていたのは、

「お、標識が出てんじゃねえか。なにになに……？ 『第三新東京市』？ 聞いたことねえな」

突発的番外



削板軍覇。

「気が付いたら次元移動してました」

カツ！ という擬音が聞こえてきそうなほどに照り付ける灼熱の太陽が真上に昇る真昼間。軍覇は訳がわからぬままコンクリートで舗装された道路のど真ん中で突っ立っていた。

学園都市よりも数段田舎のように見受けられるこの場所だが、軍覇自身いつの間にかこんな所にやって来たのか全く心当たりがない。

大体昼というのがまず可笑しい。彼が学園都市を疾走していたのは夕方。もっと言えば限りなく夜に近い夕方だ。更に学園都市は真冬だったというのに今ここでは忙しくなく蝉が鳴いている。

このことを考えればいくらなんでも有り得ない現象が起こったという事に気が付いてもいいのだが。

「……俺ってまさか半年以上も走り続けてたのかッ!？」

残念なことに削板軍覇はこの上なく馬鹿だった。

「まあこんなところまで来ちゃったもんはしょうがねえ。さっさと学園都市に戻るか」

そう言ってクルリと反転して走り出す軍覇。

十分後。

彼は全く同じ地点に舞い戻っていた。  
言うまでもない、迷子である。

「迷った!!!」

削板軍覇は極度の方向音痴である。それは北と南を間違えるとか、そんなレベルではない。

一〇〇メートル先に見えている本屋に行くのに学園都市を出て静岡まで行ってしまふほどの言ってしまうえば最早方向音痴の極地だ。

学園都市第七位の超能力者、とは言っても彼は能力開発を受けていない原石である。彼だけに限って、レベル5「頭が良い」という図式は当てはまらない。

「うっむ。どうしたものか」

そんな軍覇にも一応危機感というものはあるらしく、顎に指を添えて真剣な表情で周囲を見渡す

グウッ……。

「……腹、減った」

が、彼はシリアスを瞬く間にシリアルに変える男だ。

とりあえず腹ごしらえ、という結論に達した軍覇は再び炎天下の街中を歩き出す。

よくよく街並みを注視してみれば、どこことなく学園都市の外と似通っていた。

「……そついやあ、俺以外の人間が見当たらねえな」

と軍覇が溢した瞬間。轟音と目も開けていられないような閃光が街を覆った。

「!? なんだッ!？」

視界を奪われながらも軍覇は轟音がした頭上を見上げる。

徐々に回復してきた視界が捉えたのは。

「……なんだ、ありゃあ……!？」

化物。

怪物。

そう形容するのが最も適切であろう巨大な物体が、ゆっくりと上空から接近してきていた。

否、ゆっくりではない。実際は音速など悠に超える速度で“降ってきて”いるのだ。

「気味悪いなオイ……」

この時の軍覇は知る由もないが、周囲に人間が見当たらなかったのはこの近辺に非常事態警報が発令されたため。

そして上空から迫り来る目玉に羽が生えたような怪物の名は第八の『使徒』。

そして。

紫色の巨大なロボットが、軍覇を跨いだ。

「今度はなんだあッ!？」

常識はずれの軍覇であつても驚愕の連続。こんなもの、学園都市ですらお目にかかったことはないのだ。

ゴアッ!! と巨大なロボットが走り去ったことによる突風が建物を吹き飛ばしていく。

そのロボットは落下してくる怪物をバリアのようなもので受け止めた。脚が地面にめり込むが、そこに現れたのは新たな二体のロボット。

一体は赤、一体は黄色。

軍覇はそれをジッと凝視していた。

恐怖から目が離せないのではない。  
むしろ逆。

彼の瞳は今までにないくらいキラッキラに輝いていた。

「カッ……」

思わず叫んでしまう。

「カツコイイイイイイッ!」

そしてその声をたまたま拾ったのが弐号機パイロットである少女。

「えっ!?! 人間!?!」

一瞬そちらのモニターを見てみれば、何やら歓喜しながら叫ぶ真っ白な出で立ちの少年が非常事態警報が発令された街中で騒いでいた。

『アスカッ!』

ハッと初号機パイロットの声で正面に向き直る。そんなことに気を取られている場合ではない。今はこの使徒を殲滅することが最優先だ。

『弐号機、早く……!』

「わかってるっちゅうのおおおおッ!」

叫びながら取り出したプログレシブナイフが、使徒のコアに突き刺さる。それをだめ押しと言わんばかりに膝で押し込んで破壊する。

(さっきの男……一体……?)

削板軍覇は知らない。

ロボットだと言ったあの巨人の名が、『エヴァンゲリオン』であるということ。

そして気付かない。

次元移動したのが、学園都市と同じ場所にあるが、全く別の都市だということに。

その後、軍覇は使徒の血の海に飲み込まれないようにということ  
で式号機によつて保護され、一路特務機関NERVへと向かうこと  
となった。

当然、この時はエヴァに乗るパイロットたちは保護した少年がど  
れだけ常識はずれなのかを知らない。

当の軍覇はエヴァの掌で爆睡中だが。

突然の番外〜前編〜（後書き）

てな感じですが、一応、一応ですが最終的には本編につながります。  
勢いで書きちゃったけどこれ、受け入れてもらえるのかなあ……

突然の番外〜中編〜（前書き）

この番外は前中後編の三部構成で行きたいと思います。



## 突然の番外〜中編〜

「……で？ この子が保護した男の子ってわけ」

「そうなるわね」

ネルフのとある部屋で、二人の女性がエヴァからの映像を机上のパソコンで確認しながら話している。

一人は肩よりも短い金髪で白衣を纏い、ネコをあしらったマグカップでコーヒーを飲んでいる女性、赤木リツコ。そのリツコが少し訝しむように。

「でも可笑しいのよ」

「どづいこと？」

そうリツコに問い掛けるのは、背中まで届く長髪の女性、葛城ミサトだ。

「この子、どの学校にも記録や登録がないのよ」

持っていたマグカップを口につけ、コーヒーを口に含む。

「学校側のミス、とかじゃないの？」

有り得ない、とミサトはリツコに笑いかけるが。

「あの子の制服、第三新東京市のどの中学、高校のものでもなかっ

たわ

リッコはそんなミサトの意見を否定するかのようになぞらえた。

「……それってどういうこと？」

頭上にハテナマークを浮かべるミサト。改造制服、という線が最も妥当なのだろうがこの第三新東京市の学校の全てがブレザーのため学ラン自体が珍しい。

「第三新東京市外からやってきた少年、ということでしょうね」

「コードレッドが発令されてたあの戦場のど真ん中に何の用事があったって態々来るわけ？」

「私に聞かないで直接本人に聞いてみればいいんじゃない？」

飲み終えたマグカップをデスクの上に置き、リッコはクルリと椅子を回転させて。

「彼、今シンジ君たちと一緒にいるみたいだから」

「で？ アンター一体あんなトコで何してたわけ！？」

正面に立つ白の学ランを纏う少年に向かってプラグスーツを着たままの少女、惣流・アスカ・ラングレーが詰め寄る。

その後ろには碇シンジと綾波レイがその光景を黙って見つめている。

「削板軍覇！！ 十七歳ですッ！！」

「そういうことを聞いてんじゃないわよッ！！」

ズパアンッ！！ という擬音がバツチリ当てはまるような鋭いツッコミが軍覇の頭部を襲う。

「オイオイ見ず知らずの人間にいきなり暴力とは随分とヒステリックなじょーちゃんだな」

が、当人は全くダメージを受けていないらしくケロツとしている。

「アスカの全力のピンタを喰らいながら効いていないだって……！？」

「彼、人間じゃないのかも……」

後ろの二人は言いたい放題言っている。

「はあ……。話がずれまくってるわね。とりあえず聞くけど、アンタ第三新東京市の人間じゃあないわよね？」

「……第、なんて？」

「……(ブチッ)」

「ア、アスカ落ち着いて!! 一般人に危害加えちゃだめだよ!!」

「離しなさいシンジッ!! コイツ私のこと舐めてるわッ!! 目にも見せてやらなきゃ気が済まないのよ!!」

ギャーギャーと喚くアスカを後ろから羽交い絞めにして必死に押え付けるシンジ。そんな二人を黙って見守るのはレイで意味が解らず首を傾げているのが軍霸なのだが、その動作が更にアスカの神経を逆撫でしていることにはやはり全く気付かない。

「……アナタ、どうやってあの場所に行ったの？」

「ん？ 知らん。ただ全力で走ってたらいつの間にかあそこに居たんだ」

「そう……」

「何でアンタはそれで納得してんのよ……」

レイと軍霸の一連の会話に怒りを通り越して呆れるアスカ。どうやら幾分かは平静を取り戻したらしい。シンジもホッとしたのかアスカを解放していた。

このままじゃ話が進まない。そう確信したアスカはとりあえずミサトたちに話を聞こうと部屋を出て指令室に向かおうとするが、

「あ」

それよりも早く、ミサトが部屋にやってきた。

「その少年。ちょーっち話聞かせてもらえらう?」

二十九歳という三十路寸前の女とは思えないほどにこやかなウインクをして、ミサトはシンジたちを残してリッコの待つ部屋へと戻って行った。

「名前は?」

「削板軍覇だ」

「……変わった名前ね」

「そうか?」

リッコの待つ部屋へとやって来た軍覇は現在リッコからの質問攻めに合っていた。とは言っても軍覇の想定外の答えのはなかなか苦労しているようではあるが。ちなみにミサトはそれを隣で見て爆笑している。

「……もう一度聞いわよ? あなたの住んでいる所は?」

「学園都市」

「だからあッ!! それはどこにあるって聞いているの!!」

リッコが珍しく取り乱している。それもそうだろう。これまで全

く耳にしたことのないような単語ばかりが軍覇の口から吐き出され続けているのだから。

いくら優秀な科学者である彼女でも知りもしないものについて考察することは出来ない。

「だから東京の西のほうだって。ん？ 西ってどっちだ？」

「……もうそれはいいわ。じゃあ、学園都市っていうのはどんな街なの？」

はあ、と溜め息をついてリツコは話を進める。どうやらこの少年の頭の中には夢物語がひろがっているらしい、という結論に達した上で。

「そっぴやアンタそんな白衣着てるってことは学園都市の研究者かなんかか？」

「いやだから……」

「でも俺を研究しようたってムダだぜ。俺の能力は複雑すぎて手が出せねえみたいだからな」

「……え？」

今、この少年はなんと言った？

能力？ それは一体何を指しているのだろうか。もしかして超能力？ そんなものが本当にあるとでもいうのだろうか。いや、有り得ない。先ほど結論に達したはずだろう。

しかし、研究者の本質とでも言うのだろうか、どうも彼の言葉に

惹かれている自分がいるというのも事実である。

だめでもともと。聞いてみる価値はあるのではないか。

「……能力？」

恐る恐る聞いてみると、あっさりと答えは返ってきた。

「おう。あのヒステリック女たちは能力開発受けてねえのか？ あ、俺も受けてねえけど」

ヒステリック女って誰だ、という疑問も一瞬浮かんだがすぐに虚空へと吹き飛ばし、彼が言った能力開発という単語をゆっくりと吟味する。

「能力開発、というのは一体何なの？」

常識的に考えてみれば、まず信じないだろう。だが余りにも当たり前のように言う軍覇の言葉を、意外にもすんなりと受け入れてしまっていることにリッコ自身気付いていた。

「おう。まあ此処は学園都市じゃあねえみてえだから能力開発なんて受けてるわけねえか」

「その、能力開発を受けると能力というのが使えるってこと……？」

「ああ」

すんなりと肯定の意を口にする軍覇。隣で聞いていたミサトもなにやら興味を抱いたらしく、リッコのすぐ傍までやってきて耳打ちする。

「（ねえ。もしも、もしもよ？ 本当にその能力つてのがあったら見せてもらえばいいんじゃない？）」

あくまで軍覇の言っていることが世迷言であると決めつけたままで、だ。それは含み笑いの表情を見れば明らかであり、リッコも何も全てを鵜呑みにしたわけではない。

ただ、目の前の少年が全くの嘘を言っているとも思えなかった。一応の理屈は通っていたからだ。

「……軍覇君。もしよければ、君の言うその能力というものを見せてもらえないかしら」

「ん？ 別にいいぞ」

これまたすんなりと、軍覇は頷いた。

「でもなあ……」

「どうかした？」

後頭部をガシガシと搔いて難しい顔をする軍覇に、ミサトが尋ねる。

今更できないとは言わないよな？ とでも念を押すかのようなミサトの態度にリッコは小さく溜め息を吐いた。

しかし、軍覇の口から出たのはミサトやリッコの想像を遙かに超えるものだった。

「ここで能力使ったらこの部屋吹き飛ばかもしねえぞ？」



「……は？」

吹き飛ばす？ この部屋が？

いくらなんでもそれは無理だろう。リッコはミサトと共に苦笑する。

此処は私室とはいえ特務機関ネルフ、人類にとっての最終防衛ラインだ。当然壁やガラスにもちよつとやそつとでは破壊されないように幾つかの特殊な素材を混合し使用されている。その強度は拳銃はもちろん、ライフルやショットガンなどでは傷一つつかない。

「一応手加減はするけどよ。俺の能力って自分でもよく解らねえから何が起きるか分かんねえぞ」

軍覇は右足を後ろに下げ、ゆつくりと右拳を握る。

どうやら殴ろうとしているのは部屋の内壁のようだ。

リッコとミサトはその行動をただ見ているだけ。本当に能力、超能力とやらが使えるのだろうか、ということよりも実際は壁なんて殴って何をしようというんだといった感じで。彼女たちにとって能力と言われて連想するのはテレパシーやテレキネシスの類なのだろう。軍覇を見る目が若干呆れたものになっている。

が。

「すごいパンチ」

ドゴシヤアアアアアッ！！ という猛烈な破壊音と共に吹き飛ばされる壁だったものの破片が舞い、壁に空いた大穴を目の前にして二人は言葉を失った。

「いけねえ。やっぱ壊しちゃった」

「……………（あんぐり）」

突然の番外〜中編〜（後書き）

よくよく考えると軍覇ってかなりチートw

突然の番外〜後編〜（前書き）

ごめんなさい三部作では収まり切りませんでした……。。

## 突然の番外〜後編〜

「信じられないわ……」

「私だって同じ気持ちだってば」

リツコとミサトは数時間前にあつた出来事を思い出しながら、目の前に開いた巨大な穴を見つめてそう溢した。

『超能力』というものは非科学的で、そんなものは存在しないと決めつけていた二人の考えは常識はずれな少年によって瞬く間にぶち壊され、ただあんぐりと口を開くしかなかった。

「『超能力』か。あんなもの見せられた以上信じるしかないわねえ」

苦笑いのミサトがそう言い、リツコもそれに同意する。

……というか、現在リツコの脳内環境は大変なことになっていたりする。

（超能力……！？ 一体どんな原理でどんな現象が起きてるのかしら……。し、調べたい！！ あんな研究しがいのある人間初めてだわ……！）

ゾクゾクと身体を震わせながら恍惚の表情を浮かべるリツコを目にしてミサトの苦笑いがひきつった笑みに変わり、内心で軍覇の身を案じる。

(大丈夫かしら彼……)

「超能力者あッ!? こんなバカ面したバカシンジよりもバカなのバカがあッ!?!」

同日の夜。

行く宛のない軍覇は致し方なくシンジ、アスカも居候中のミサト宅に泊めさせてもらうこととなった。ちなみに部屋はシンジと同室である。

夕食の席でガタンツと椅子から立ち上がって軍覇を指差しながらバカを連呼したアスカは、

「超能力なんてそんな非科学的なものあるわけないじゃないッ!」

「そうは言っても私は目の前で彼の超能力を目の当たりにしてるのよ!?! 疑いようがないわ!」

缶ビールの二本目のプルタブを開けた風呂上がりのおミサトがアス

かに座るよう促しながら答える。

「僕は超能力、あると思うけどな」

「アンタは黙ってなさいよバカシンジ！」

やはり男の子とあってそういう類いのものには憧れを持つのか、シンジは超能力というものは肯定しているようだ。だがその意見をアスカは真向から否定する。

「だから！！ もしこのバカがミサトの言うように本当に超能力者だっけ言うんならその証拠を見せてみなさいよ！！」

なまじ優秀な頭脳の持ち主だと常識的ではない事象に対して否定的になる傾向があるが、アスカはまさにその典型とも言える性格のようだ。

と、これまで全く話を聞かずにひたすらシンジの手料理を頼張り続けていた軍覇がようやく口を開いた。

「ぼ。ごえぼつじょくわ」

「飲み込んでから喋りなさいよッ！！」

「ぼごあっ！！」

「きたなッ！！ 吐き出すんじゃないわよッ！！」

まるでハムスターのように両の頬に限界まで食べ物を詰め込みながら喋っていた軍覇は、アスカの異常にキレのあるツッコミによりそれが爆発。吐き出された食べ物正面に居たアスカに被弾した。ここまでわずかに二秒。

「ああもう最悪！！ お風呂入ってくる！！」

「アス力はそうとだけ言って浴室へと駆け込んでいった。  
残された三人はというと。」

「大丈夫？ 軍覇くん」

「おお。にしてもあのじょーちゃんは何をそんなに怒ってた？  
まさか近頃のキレやすい子供なのか！？ いかん、ならばカルシウ  
ムを摂取させなければ！！」

「いやキレてるのは軍覇くんのせいだと思っただけど……」

「仕方ないわよねえ。こんなところでグンちゃんの超能力を使わせ  
るわけにはいかにもの」

「どういうことですかミサトさん？」

「壁に大穴開けられたらーたまりもないってことよー」

軍覇の能力を知らないために頭上に疑問符を浮かべるシンジに対  
し、早くも三本目のビールに手を伸ばしているミサトは昼間のこと  
を思い出しながら再び苦笑した。



翌日。

今日も今日とて灼熱の太陽が容赦なく地球を照らしている。最高気温は三十五度を超えると朝の二ユー・ス番組で言っていた通り、外に出た途端思わず室内に引き返してしまおうかと思わせるほどの暑さだった。

「あつづく。全く日本の夏はなんでこんなに暑いのかしら」

手でパタパタと扇ぎながらアスカがそう零す。シンジもカッターシャツのボタンを外して隣を歩いている。

だが。

そのシンジの隣には真夏だというのに学ラン（しかも白）に袖を通して平然と歩く少年。

彼の名は愛と根性のヲトコ、削板軍覇。

「……見てるだけでこっちが暑くなってくるんだけど」

「僕もだよ……」

二人してげんなりしているがそんなことお構いなしにハイテンションでスキップしながらついてくる軍覇。彼の脳内からは『規格外アンリミテッド・メ』との戦闘のことなど忘却の彼方へと吹き飛ばされてしまっているようだ。

「ちよつとアンタ。その腰に手を当てながらスキップするのやめなさいよ。鬱陶しいから」

「ん？ どうしたじょーちゃん」

「だからそれやめなさい！！」

「む？」

しばし考えた後、ポンと納得したように手を叩いて。

「やっぱり学ラン着たくなつたのか？」

「…………（ブチブチッ）」

「アスカッ！！ だから一般人に危害を加えちゃマズイってば！！」

「コイツ一回殺す！！ 殺してやる！！」

再びブチ切れたアスカを羽交い絞めにして抑えるシンジ。真夏日にこんなことさせないでくれよと言いたくなるが、言えばまたアスカが煩いので心の内に留めておく。

「なんだカルシウムが足りてねえな。牛乳飲むか？」

「飲むかッ！！」

なにやら懐から取り出した牛乳瓶を得意げに差し出してくる。が、明らかに乳白色からはかけ離れた色をしている。例えるならばヤク〇トのような感じだ。これは牛乳としては完全にアウトだろう。

「軍覇くん…………。それいつから持ってるの？」

「三カ月くらい前から俺の非常用飲料として携帯している」

「……………」

なにやらその場が凍りついた。

真夏だというのにここだけ肌寒さを感じるほどに。

と、そんな固まった空気をぶち壊したのは突然鳴ったシンジの携帯の着信音だった。シンジは制服のポケットから携帯を取り出して液晶に視線を移す。

「あ、もしもしミサトさん。どうしたんで……………非常招集!?!」

非常招集、という単語を聞いてアスカの表情がガラリと変わる。

「……………はい。すぐに向かいます。……………え？ 彼もですか？ はい、わかりました」

通話を終えたシンジは携帯を再びポケットに仕舞い、アスカと軍覇へと向き直る。

非常招集。これの意味することはアスカも理解していた。このところ何度も聞いている単語。即ち。

「使徒ね」

「うん。すぐにネルフに向かおう。軍覇くんも一緒に」

「はあ!? ちょっと待ちなさいよバカシンジ!! どうしてこのバカを連れて行かなくちゃいけないのよッ!!」

「しょうがないじゃないか。リッコさんが連れてこいって言うてるみたいなんだから」

「異議ありよ！！ 避難させるなら学校でいいじゃない！！ ネルフに連れて行く必要なんてないわよ！！」

ただでさえ『超能力』なんて胡散臭いものを使うと自称しているこんなバカを、態々ネルフ本部に連れて行く必要などないと言うアスカに対してシンジは困ったように答える。

「しょうがないだろ！？ ミサトさんからの命令なんだから！！」

「ぐ……」

そう言われてしまうとアスカとしても反論できなくなる。ドイツに居た頃に所属していたユーロ空軍であってもここネルフであつても上官の言うことは絶対なのだ。逆らうことなどできない。

「……はあ、解ったわよ」

「どうしたんだ？」

「軍覇くん。僕たちに付いてきて」

言われるがまま、軍覇はシンジ、アスカと共にネルフ本部へと向かった。

「来たわね」

「ミサトさん。軍覇くんまで連れてこいなんて一体どういうことですか？」

ネルフ本部へとやって来たシンジ、アスカ、軍覇は既に指令室で待機していたミサトに詰め寄った。主にアスカがだが。

「ミサト!! このバカをネルフに連れてきてどうしようってのよ!!」

「どうしようって。そんなの決まってるじゃない」

「はあ!?!」

全く話の全容が掴めないアスカは素っ頓狂な声を上げた。『決まってる』と言われても彼女にはこの如何にもバカそうな少年がどんな人物なのか把握できていないのだ。把握できていないものについて結果だけを話されても納得や理解など出来るはずもない。

「彼にも、使徒と戦ってもらおうのよ」

「はあ!?!?!」

先ほどよりも数倍大きな声で、今度こそアスカは理解不能に陥った。

「戦う!? コイツが使徒と!? 冗談もほどほどにしてよミサト!」

「嘘でも冗談でもないわアスカ。これは碇指令からの命令なのよ。今にも殴りかかってきそうなアスカに対して悠々とそう告げる。

「コイツがエヴァに乗るって言うの!」

アスカという少女はエリート意識が異常に強い。エヴァンゲリオンに乗れるのは選ばれたエリートだけ。シンジのように親の七光りでパイロットになった人間や、レイのようにお気に入り選ばれたパイロットのような人間は深層心理では認めてはいない。彼女にとってエヴァとは唯一与えられた自分の居場所であり、使徒の殲滅とは自分にしかできない存在意義なのだ。

それを、ぼつと出の身元もよく分かっていないような少年が行うと。

納得など、出来るはずがない。

「こんなやついらないわ! 私たちだけで充分よ!」

「アスカ……」

「着替えて出撃するわ!」

そうとだけ言って、アスカはミサトの返事も待たずに更衣室へと向かった。残されたシンジと軍覇は呆然としていたが、

「シンジ君軍覇くん。すぐに準備して。……始めるわよ」

ミサトの言葉で、軍覇を含めた四人のチルドレンの使徒殲滅作戦が始まる。

「すみませんおならが出ました!」

「……はやく行きなさい」





突然の番外〜後編〜（後書き）

次できつと番外は最後です。

**突然の番外〜終幕〜（前書き）**

番外はこれで終わりです。

次回からは本編に戻ります。

## 突然の番外〜終幕〜

「総員、第一種戦闘配置！！」

「地对空迎撃戦用意！！」

ネルフ本部の指令室は嘗てない慌ただしさに包まれていた。それもそのはず、前回の使徒から中二日、負傷したエヴァ零号機はまともに戦闘など出来るはずもなく、初号機も両腕を現在修理中。まともには戦えるのは弐号機のみなのだ。

「目標は？」

「現在進行中です！！」

いつもの位置で腕を組んで巨大なモニターを静観するその隣では冬月が苦い顔をしていた。

「……早すぎるな」

「こちらの都合に合わせてくれるほど向こうも優しくはないということだ」

「駒ヶ岳防衛線突破されました！！」

モニタに映された今回の使徒。地上からの弾幕の雨を受けても全てATフィールドに弾かれ、一瞬にしてそれらは轟音とともに破壊された。

「第一から十八番装甲まで損壊！！」

「十八もある特殊装甲を一瞬で……!?!」

圧倒的な防御力と攻撃力を併せ持つ今回の使徒。

第十四の使徒、ゼルエル。

「エヴァの地上迎撃は間に合わないわ!! 弐号機をジオフロント内に配置!! 本部施設の直援に回して!!」

現状、考えうる最善の指令を飛ばすミサト。機体が無事な弐号機でアスカを出撃させ、シンジとレイにはバックアップに回して援護させるというのが今回の作戦だ。

しかし。

「葛城三佐」

「はい」

ゲンドウがゆっくり口を開いた。そこから告げられたのは、到底常識では有り得ないような指示。

「本気ですかッ!?!」

「当たり前だ。すぐに彼も初号機、零号機とともに出撃させたまえ」

「……正気の沙汰とは私は思えません」

「二度は言わん。早くしろ」

「……………」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、ミサトは踵を返して少年たちの待つ控室へと向かった。

こんな作戦、有り得ないとミサトは思考する。  
「こんな、こんな。」

一人の少年が、生身で使徒と戦うなど。

控室。

既にプラグスーツに着替えを済ませたシンジ、レイと未だに白ラシンの軍覇は、ミサトから作戦の内容を聞かされていた。ちなみにアスカは迎撃のため一足早く式号機で出撃している。

「本気ですかミサトさん!?!」

「気乗りはしないけど、これが碇指令が下した作戦内容よ」

「そんなッ!! 使徒相手にエヴァにも乗らずに突っ込むなんて自殺行為もいいところだ!!」

今回の作戦。

先に出撃していた弐号機と軍覇が使徒を殲滅。修理の官僚していない初号機と零号機はそのバックアップに回るといふものだ。当然、こんな作戦にシンジは異論を申し立てた。

「軍覇くんそんな危険なマネさせるって言うんですか!」

「……………」

「ミサトさん!」

「行くぜ」

シンジの問い詰めに答えたのは、当人である軍覇だった。

軍覇の答えに驚愕するシンジに向かって彼はストレッチしながら続ける。

「あの怪獣。倒さねえとこの街がめちゃくちゃになっちまうんだろ。だったらそんな野郎は俺が叩きのめしてやる」

「でも軍覇くん、あれは……………」

「俺は」

何か言おうとしたシンジの言葉を遮って、軍覇は拳を握りしめて言う。

「目の前で起こってる事から目を逸らして逃げ出すほど、根性なしじゃねえんだよ!」

それだけでもう十分だった。ミサトは無言で頷き、シンジとレイも各々の配置に向かった。

「グンちゃん。準備はいい？」

「おう！！」

ミサトの問いに両の拳を打ちつけながら答える軍覇は地上まで通じるエレベータに乗せられた。このエレベータは弐号機が戦っているエリアまで直接繋がっており、地上に出た瞬間からアスカとともに使徒の殲滅を開始する手筈となっている。

「削板軍覇、発進！！」

言ったのはミサトではない。軍覇だ。なにやらテンションが上がっているらしく、エレベータが上昇を始めたと同時に内部でそう叫んでいるのが聞こえてきたのだ。

そんなハイテンションな軍覇をよそに、使徒はジオフロント内へと侵攻しようとしていた。

「あと一撃で全ての装甲は突破されますッ！！」

（頼んだわよ、アスカ。グンちゃん……）

そして、装甲は突破された。

巨大な地鳴りとともにジオフロント内に使徒が降りてきた。

その真下には既に迎撃の準備を終え銃を構えている弐号機の姿。

「おいでなすったわね！！」

目標を確認したアスカは照準を合わせ、勢いよくその引き金を引





に異常を来しても無理はないほどの痛みに襲われながら、それでもアスカはギロリと目先使徒を睨みつける。

「こんのおおおお!!」

「アスカ、やめなさい!!」

司令部からの静止の声も聞かず突撃する弐号機。そんな恰好の獲物を使徒が見逃すはずもない。再び伸びた腕が今度は神経接続がなくなつたままの頭部を狙う。

「全神経カット!! 急いで!!」

ミサトの指示が飛ぶが間に合わない。

刹那。

「だーいたん不適にハイカラ革命」

弐号機の頭部に迫っていた使徒の腕を、真っ白な少年が歌を歌いながら弾き飛ばした。

「!?!」

「グンちゃん!!」

突如として現れた少年はそのまま弐号機の頭部に着地する。  
驚愕しているのは弐号機に搭乗していたアスカだ。

『ちょ、ちょっとアンタ!! 一体どういつつもりよ!!』

「ん？ この声はじょーちゃんか。またかけえのに乗ってんなあ」

『そんなことはどうでもいいわよッ!!』

両腕が切断されるといふ恐ろしい痛みさえも忘れてツッコミを入れる。

弐号機の頭上に仁王立ちする軍覇はしかし、何のことやらと首を傾げていた。

『……ッ。いいわ、これが終わったらたっぷりとアンタを絞ってやるから!!』

「いや俺雑巾じゃねえぞ？」

『……（ブチンッ）』

『アスカストップストップ!!』

もう何度目かになるアスカの血管がぶちギレる音が通信機越しに聞こえたシンジは初号機の内部と必死に叫んでいた。

いい加減軍覇も何故彼女が怒るのか理解してもいいころなのだろうが、いかんせん彼にはアスカの心理が読み取れないようである。

「うっしつ。じょーちゃんあとは俺に任せとけ」

式号機の頭をバシバシと叩きながら言う軍覇に、アスカは訝しげに尋ねる。

『任せるってアンタ。どうするつもりよ?』

「決まってるんだろ」

『?』

意味が解らないのか頭上にハテナマークを浮かべるアスカに対して、まるでそれが当たり前だとも言わんばかりに軍覇はしれっと言っただけだ。

「ちよっくらあの根性なしと拳で語り合ってくる」

『はあ!?!』

『ちよ、軍覇くんいくらなんでもそれは無理だよ!!--』

『……無謀すぎる』

とんでもない発言にアスカのみならずバックアップに回っていたシンジやレイからも声が掛けられる。

が。

「よっしやあッ!!--」

何やら勝手に自己完結させている軍覇は式号機の頭から飛び降り、使徒へと一直線に駆け出した。

式号機の頭から飛び降りるといふ行為だけでも常人には決して出来ない行為ではあるが、それ以上にチルドレンたちを驚かせたのは軍覇による次の行動だった。

相手は使徒。

その上ネルフが用意した重火器では傷一つ付かないほどの強力なATフィールドを有する最強の使徒だ。

それは式号機の破損状態が証明している。

そんな的にちっばけな人間が単騎で突っ込むこと自体自殺行為以外の何者でもないのだが、その少年だけは勝手が違った。

「うおおおッ！！ 喰らえ！！ すごいパンチ！！」

いきなり使徒の顔面付近まで大ジャンプしたかと思えば右の拳を握りしめ、そのまま使徒に向かって突き出した。

その拳が使徒のATフィールドと衝突した瞬間、甲高い衝突音が響き渡る。

通常ならば人間の腕などあつという間にひしゃげて原形をも留めないはずだが、この削板軍覇という少年は使徒と互角に張り合ったのだ。

『うそでしょ……！？』

その様子を式号機内で啞然と眺めるしかないアスカ。

こんなこと有り得ない、と脳内では思っただけでもこうして実際に目の当たりにしてしまつては認めざるを得ない。

『まさか……ホントに超能力者なの……！？』

「ちっ、中々硬えなコイツ」

ATフィールドに拳を叩き込んだ軍覇だが、それを破壊するまでは至らなかった。精々傷を付けるのがやっと、と言った感じだ。

「ハッ、根性のねえ野郎かと思ったら中々に根性のある野郎じゃねえか」

なにやらしい笑顔でそんなことを言う軍覇は再び拳を握り、目の前の標的へと狙いを定める。だが、それは使徒としても同じことだ。現状、最も脅威なのは軍覇の攻撃である以上使徒も当然の如く迎撃してくることになる。

ゼルエルの両腕がトレットペーパーのように伸縮し軍覇を襲う。式号機の両腕を吹き飛ばしたあの攻撃だ。

喰らえば大ダメージ。

掠っただけでも大けがは免れない。

「うらあああアッ！！」

雄叫びと同時に、軍覇は跳んだ。

それは人間離れた大ジャンプではなく三メートル程のジャンプ。それによって使徒の攻撃を回避した軍覇は、そのまま使徒の伸びきった腕に着地した。

勢いよく使徒の腕に飛び乗った軍覇はそのままコアのある場所まで猛ダッシュで向かう。その時速は音速を軽く超え、一瞬もしないうちにその拳をコア目掛けて振りぬいていた。

「すごいパンチッ！！」

轟ッ！！ という衝撃音が響く。  
だが軍覇の拳と使徒のコアとの間にはATフィールド。またしても彼の攻撃は阻まれた。

「まだまだあッ！！」

今度は左腕を振りかざす。歯を食いしばり、叩き込む。

「すごいパンチ！！ ダブル！！」

左の拳を叩き込んですかさず右の拳もATフィールドへと打ち込んだ。  
んだ。

ピシッ、と亀裂の入った音が聞こえ、拳の打ち込んだ箇所にはひび割れが入る。

『うそ……』

その光景にアスカは信じられないものでも見ているかのように呆然と声を漏らし。

『すごい……』

シンジは歓喜に満ちた表情でそれを見つめていた。

「……………ッ根性オオおおおッ！！」

止めと言わんばかりに大きく振り上げられた右拳が、軍覇の叫びとともにATフィールドに振り下ろされた。

瞬間。

絶対領域であるはずのA Tフィールドが、窓ガラスが割れるかのように碎け散った。

「今だ碇！！ やれええええ！！」

軍覇の言葉とともに初号機、零号機がコア目掛け一斉に乱射する。着弾による硝煙で使徒の近くにいた軍覇までもその中に飲み込まれてしまった。

数秒後。

目も開けられないほどの閃光とともに使徒が爆発した。

余波で周囲の建物が軒並み破壊されていく。

『軍覇くんツ！！』

初号機内でシンジが叫ぶ。

いくらなんでもあの爆発に巻き込まれて無傷でいられるはずがない。すぐさま軍覇を救助するために爆発の中心点へと向かう。

しかし。

『居ない……』

そこに、削板軍覇の姿はなかった。

忽然と姿を消した少年は、二度とシンジたちの目の前に現れることはなかった。

「んあ？」

気が付くと、軍覇はどこかの研究所らしき建物の前に寝ていた。辺りを見回しても使徒などという存在は見当たらないし、そんなものが暴れまわっていたという形跡も見当たらない。

「……？　ありゃあ夢だったのか？」

とりあえず地面に胡坐をかいて腕組みし考えてみるが、答えが見つかるはずもない。

「ふむ。わからん」

一先ず風たちの言っていた病院に行かなくては、ということをややく思い出した軍覇は立ち上がり目の前の研究所らしき建造物に目を向ける。

「……道聞か」

極度の方向音痴を（一応）自覚している彼は一刻を争うこの状況で最も合理的な手段を使うことにした。と。そのとき。

建物の内部から現れた人陰を見つけた。



丁度いいと思い、軍覇はその人陰へと近づいていく。

「……ん？」

そこでようやく気が付いた。

軍覇の目線の先にいるのは、これまで散々見てきた顔の少年。向こうもこちらに気がついたようで、ゆっくりとこちらに接近してくる。

白すぎるほどに真っ白な髪。

アルビノを思わせる深紅の双眼。

「一方通行……!」

これまで消息を絶っていた少年が、軍覇の目の前に立っていた。



突然の番外〜終幕〜（後書き）

というわけで迷っていた筈の軍覇が敵の本拠地に真っ先に到着しました（笑）

## 第77話 辿り着いた結論

臥薪嘗胆。

これはもともと復讐のために身を苦しめ、心を励ますことを言っただものだ。

目的を遂げるために発憤努力し、成功を期して辛苦を重ねる。向上を求めて苦しい道へと自ら進む。

言ってしまうえば、自分の目的を遂げるためにどのような苦難の道でも突き進み、成功を手にしようとする者のための言葉だ。

ならば。

ある目的のために動く葵。

それを阻止することを目的に行動する風。

自らの目的のために他の目的を利用しようとする一方通行。

彼ら全てに、臥薪嘗胆は当てはまるのだろうか。

「一方通行？」

軍覇の目の前に立っていたのは、毎日顔を合わせていた親友と呼べる存在である少年。

軍覇と同じ超能力者（レベル5）にして、その頂点に君臨する第一位。

アクセラレータ  
一方通行。

「丁度良かったぜ一方通行。ちょっと道を聞きたかったんだ」

知り合いを発見したことでどこか安堵した様子の軍覇が何の気なしに一方通行に近づいていく。

対し、一方通行は小さく口元を吊り上げて。

「何だア？ 超能力が使えねエってのにお前どオやって此処まで辿り着いたんだ。まさか迷子とかってンじゃアねエよなア？」

向けられたのは、明らかな敵意だった。

それが解らないほど軍覇も間抜けではない。一方通行の対応を見て直ぐに目付きが変化した。

「……………どういうつもりだよ」

「……………何にも知らねエンだなア、お前」

軍覇の様子に頭をガシガシと掻きながら溜め息を吐く。

「見て解ンねエのかよ軍覇。俺は」

一切の躊躇いもなく、少年は告げた。

「敵だ」

「……そうか」

これ以上の問答は無用だと悟ったのか、軍覇はそれ以上何も言わずゆっくりと腰を下げる。それは軍覇の臨戦態勢。しかし彼は忘れてしまっていた。現状、この学園都市では超能力が使えないということ。

「オイオイ、解ってンかア？ お前は今超能力は使えねエンだぞ」

「それはお前だって同じだろうが」

「同じ……ねエ」

言って、一方通行はその表情を歪ませる。

ゆっくりと蹴り出された小石。それは音速の速さで軍覇の真横を通過した。

『ベクトル操作』。

学園都市二三〇万人の頂点に君臨する能力が、何事もないかのように揮われた。

「残念だが、俺は能力が使えるンだよ」

「……ッ！！」

それは、圧倒的な戦力差を示していた。  
それでも、しかし軍覇は退こうとはしない。

「能力なんざあったってなくたって関係ねえ。そんなんで俺の全てを体現できるわけがねえんだ」

握られた拳に自然と力が籠もる。

「来いよ一方通行。どんな理由があるのかは知らねえが、てめえのその根性叩き直してやるッ!!」

「……いいねエ。やっぱそうじゃねエと、ツマンネエよなア!!」

同時。二人は地面を蹴った。

能力を失った第七位と、最強の超能力者が激突する。

剛徳司塊士。

彼が初めて自身に宿る能力の片鱗に気付いたのは学園都市に来て二年、小学五年生の冬だった。

その日はいつにも増して寒く、吸い込んだ空気が肺で瞬く間に温まり吐き出す息は真つ白に染まる。それが何だか楽しくて、剛徳司は意味もなく息を吐き出しながら目的の場所へと向かった。

彼がやって来たのは、近所のとある公園だ。小学生というのは学園都市に限らないがやはりアクティブで、冬休みに突入してからはほぼ毎日この公園で友達数人と遊んでいた。

剛徳司はこの時点で身体測定はレベル2、異能力者判定。そこらにいる小学生としてはそこその能力で、これから先の伸びしろによつてはレベル3に届くかどうかという至つて平凡な少年だった。

寒かった、というのもあり、剛徳司は自身の能力で皆と温まろうと自らの能力を発動させた。身体測定で判定された彼の能力は『摩擦』によつて温度を変化させる、という学園都市において別段珍しいものではない能力。まだレベル2ということもあり大した効果も期待できなかったが、周りの友達にこの能力を見せびらかしたいという子供心も働いたのだろう。

それがいけなかった。

特に何も考えず、自身の能力を発動させた剛徳司は、次の瞬間我が眼を疑う。

一緒に温まろうと近づいてきた友達全員が、絶叫とともに数メートルも吹き飛ばされたのだ。

能力の暴走。



否、これが剛徳司塊土という人間の持つ本来の超能力だったのだ。

今まで自分が使用していた超能力は、その強大すぎる能力のほんの一部、片鱗に過ぎなかったのだ。身体検査では到底測定できるはずのない程に、強大で、度の過ぎた能力。

『アスリルレーション自在振動』。

これまでの摩擦を起こすという能力はこの『自在振動』の極僅かな部分でしかなかった。

幼い体と精神力では、到底扱いきれるものではなく、そこまでしか能力として使用できていなかったのだ。

それが、突然目覚めた。

学園都市で最も高い攻撃力を誇る能力。

それを聞きつけた研究者たちは、早速剛徳司を引き取った。言うまでもない、葵や桔梗がともに過ごしたあの研究所である。ちなみにこの頃はまだ桔梗はここには居ない。

それから先は実験の連続。数年の時を経て、ある実験を境に彼はついに『規格外』の存在となった。

「『アスリルレーション自在振動』？ 何だそれ、一条聞いたことあるか？」

「いんや全く。初めて聞いたよ。だが油断すんなよ上条、それが真実かどうかわからないんだから」

「オイオイ信じてねえのか？ ったく最近のガキは人を信じるってことを知らねえ」

予断を許さないこの状況で剛徳司は不適に笑う。それは負けるはずがないという絶対的自身のもとに向けられた笑み。こんな奴らに負けるはずがないと思えるから本来ならばデメリットしかないはずの自らの能力を晒すという行動も取れるのだ。

結論を言ってしまうえば、凧と上条は完全に見下されている。

それを理解した凧は怒りに顔を歪ませるが、能力が使えない自分では今のところどうすることもできない。頼みの綱は上条の右腕に宿る『幻想殺し（イマジンプレイカー）』だが、それも肉弾戦となれば全く意味を為さなくなる。

（くそ……、どうする。奴の能力が解ったって止めようがないんじや勝ち目なんてない。アイツが能力を使える秘密をやっぱり暴かねえとためか……！！）

限界まで頭回転させる凧だが、いつまでも思考することは許されなかった。

「いつまで突っ立ってんだおらアアあああッ……！」

剛徳司の攻撃が再開されたからだ。

見えない衝撃波が無数に繰り出され、それを寸でのところで横に躲す。だがそれも、いつまでも避け切れるものではない。

「ガハツ！！」

「ぐあー！！」

凧も上条も、その衝撃波を腹部にモロに喰らった。

これまでにないくらい激痛が二人を襲う。

「どうだ？ 痛えだろ。これが俺の能力の本質だからな」

痛みに顔を顰める二人に向かって剛徳司は続ける。

「『振動』ってのはよ、音や衝撃波をさせるほどの強度の振動は構造物や人体に重大な影響を与えるんだよ」

『振動』はモノが振動することだがそれには幾つかの種類が存在する。分子や固体中の原子の運動エネルギーが基準となる位置を中心に振動運動を繰り返すことで発生する熱振動。大きな地面の振動によつて引き起こす地震動。

その中でも剛徳司が特に戦闘中に多様しているのが。

「超音波が俺の能力のキモだ」

「超音波……だと？」

超音波。

人間の可聴域を超える20kHキロヘルツ以上の高周波を指すが、これは一秒間に二万回以上の振動によって引き起こされる現象である。

「そうさ。まあ別に隠してるつもりもねえから教えてやるよ。ま、知ったところでどうにもできやしないだろうしな」

そう言って剛徳司は懐から一本のナイフを取り出した。その刃の部分を撫でるように一度触れ、適当にナイフを振るうと。

ドオツ！！ という音と共に、近くにあった機械が真っ二つに両断された。

「なツ！？」

驚愕に眼を見張る風に対し、心底楽しそうに白衣の大男は口を開く。

「こういう刃物に超音波振動を加えると、刃物と対象との摩擦力が減って極端に切れ味が増すんだよ。……こんな風になツ！！」

言葉と同時にナイフを二人めがけて振るう。

風と上条は咄嗟に身をかがめて何とかそれを避けたが、背後にあった実験装置が一刀両断された。もしこれが直撃したら人体など紙切れのように切り刻まれる。そう思わせるには十分なほどの切れ味だ。

「くそ……！！」

能力は使えないから攻撃しても大したダメージは与えられない。奴の攻撃を全て防御するのはほぼ不可能。

事実上、凧と上条は剛徳司に王手をかけられている状態だ。

打開策が未だに見つからない中、剛徳司の攻撃が更に激化する。

「おら、避けれるもんなら避けてみるや小僧どもオオおおおッ！  
！」

白衣を勢いよく広げて内から現れたのは数十のナイフ。無論、それら全てに超音波振動が加えられている。凧と上条に正確無比に投げられる凶悪な凶器。

当然、その全てを避け切れるはずもない。

「くそっ……！！」

投擲されたナイフの一本が、凧の腕を掠めた。

ほんの少し、触れるか触れないかというくらいのもだった。

しかし。

それは、凧の腕の肉を容赦無く削ぎ取った。

「ッ、がああああッッ！！？」

左腕の肘よりも少し下の部分が真っ赤に染まる。

「一条！！」

「余所見してんじゃねえぞ小僧！！」

「！！ぐああ！！」

負傷した凧のもとへ駆け寄ろうとした上条の右足に、剛徳司の投げたナイフが触れた。噴水のように噴出す真っ赤な鉄臭い液体が、真っ白な空間を埋め尽くす。

圧倒的。

これほどまでに強大な敵を前に、凧は成す術を失った。  
超能力は使えない。

近接先頭においても実力差がはっきりしている。

どうする。

どうすル。

どうスル。

ドウスル。

ドウスル。

刹那。

凧は結論に辿り着く。

剛徳司は自らの脳の回路を改造することで大人と呼べる年齢に達しても超能力を使うことが出来ている。この状況で何故能力が使えているのか。

能力の演算をするために使っている脳の回路が違うからだ。  
それならば全ての辻褄が合う。

(なら……俺も……)

たどり着いたのは、誰も予想だにしないことだった。  
自らの脳回路を意識的に作り替えるという、到底無謀な結論。  
たかだか一人の少年が、何の機材もなしに回路を作り替えるなど  
出来る筈がない。

(何をしようとしてやがる……?)

剛徳司は膝をついたままの凧が何かをしようとしているのを感じ  
取っていた。無理やりに演算を開始しようとしているかのような感  
覚だと、理解した彼はそこから動かない。最後の悪あがきを見届け  
ようという絶対的自信からの行動だ。

上条も凧を見つめていた。

否、目が離せなかった。

覚えがあつたからだ。

凧の全身から漂う、その感覚に。

(まさか……、いや、有り得ない!! でもこれは、この感じは…  
…!!)

上条の表情が驚愕へと変貌する。

もう間違いない。これは、過去幾度となく経験しているものだ。

そしてようやく理解した。

凧が今、やろうとしていることを。きっと凧は理解していない。  
自分がやろうとしていることが、一体どんなものなのかということ  
を。

「これは……、」

無意識のうちに言葉が漏れ出す。

「魔術……!？」



## 第78話 二つのタタカイ

人間は未知なるモノの存在を嫌う。

それは自らの脳内では処理しきれず、そのものの本質を掴めないことを恐れているからだ。故に人間は己の理解できる範囲だけの防壁を無意識のうちに周りに構築し身を守っている。

だがそれでは新たな選択肢など選べるはずもないのだ。超えられない壁を目の当たりにした時、そこで諦めて歩みをとめてしまうのか。未知を恐れず、新たな道へと足を踏み入れるのかは結局は自己次第である。

未知は、案外身近なところにも転がっているのだから。

「魔術……だと……!？」

今正に起こっている事象を前に、上条は我が目を疑った。それは『魔術』というものを知っているが故の驚愕。『魔術』が一体どんな人間のために作られ、使用されてきたのかを端的にはあるが認知している上条には、目の前の光景は『信じられない』の一言につ

きる。

『魔術』。

一般的には異世界の法則を無理やりに現実世界に適応し、様々な超常現象を引き起こす技術である。ここまでならば、上条の住む学園都市で開発されている『超能力』と大した差はないように思われるが、実際のところそうではない。

魔術はこつも表現される。

「真の奇跡に人の手で追いつこうとすること」

「才能のない人間がそれでも才能のある人間と対等になる為の技術」

早い話が、超能力を使用できる才能のある人間に追いつくために開発されたのが、この魔術というものなのだ。

異世界の法則を無理やりに使う、とはつまり現実世界の法則に当てはめることであり、これは学問であることを意味している。しっかりルールを守らないと使用することができないのだ。

だが、逆を言ってしまうえば正規の手順さえしっかりと踏めば素人でも行使することができなのが『魔術』である。

いくら能力開発を行なったところで才能のない人間には使用することのできない『超能力』と違うのはここだ。

ここで再び上条は蹲りながらも魔術を行使するために魔力を生成しようとしている尻へと視線を向ける。

(一条……、魔術なんて知らないよな……?)

いや、と上条はその考えを振り払うかのように頭を振る。かぶり

問題なのはそんなところではない。

真に問題なのは、『超能力者』である風が『魔術』を使用しようとしていることにある。

超能力者でありながら同時に一流の魔術師でもある人間を、上条は一人だけ知っている。

土御門元春。

上条は彼が『必要悪の教会』ネセサリウスの魔術師であり重度のシスコンであるということぐらいしか情報を持っていないが、彼の本質は陰陽博士として最高位であり、風水を得意とする天才魔術師だ。学園都市潜入の際に能力開発を受け魔術使用に大きく制限を受けてしまったために、滅多に魔術を使わなくなった。

否、使えなくなったのだ。

『超能力』というものを行使できる、即ち才能のある人間が使用しようとするると身体に過負荷がかかりその結果死んでしまう可能性のある。使用する術式の規模にもよるが、異能者の使用時にどの程度の反動がくるのかは決まっていないため、博打性が高くなる。

土御門の場合、能力開発によって発現した無能力（レベル0）の『肉体再生』のおかげで何度かなら魔術を使用できるようだが、それでも危険性は変わらない。

そして風の場合、危険度は更に増す。

彼は魔術サイドを知らない真正銘科学の街の住人だ。（厳密に言えばイギリスへの修学旅行時に魔術というものに触れているが本人にはその自覚はない）

土御門はまだ回復系の能力を使えるため気休め程度に傷を癒せるが風は違う。彼の能力は『水分支配』とよばれるものだ。回復系統

の能力など使えるはずがない。ということは魔術を使用する際の拒否反応とも言えるそれをカバーできるものが存在しないのだ。上条がそういった類のものを使えば話はまた変わってくるが、生憎彼にはそんな都合のいい能力は携わっていない。

「ガハッ!」

突如、風の口から赤黒い液体が吐き出された。苦悶の表情を浮かべる風を見てそれが身体にかかる過負荷によるものだと理解した上条は叫ぶ。

「やめろ一条ッ!! そんなことしたらお前の身体が!!」

この際どうして風が魔術などというものを使えるのかはどうでもいい。そんなことよりも上条には風の容態が心配だった。電波によって超能力が使えない以上、剛徳司を倒すには確かに魔術は有効な手段かもしれない。しかし風が倒れてしまっただけでは元も子もないのだ。

だが風は魔力の生成を止めようとはしない。それどころか、一層その生成を強めようとしている。

「一条ッ!」

悲鳴にも、懇願にも似た上条の叫び。そんな声を耳にして、蹲って血まみれの風は、ほんの少しだけ上条へと視線を向けて。

「

」

瞬間。

風を中心に莫大な魔力とともに目も眩む光が真っ白な地下を覆っ

た。

「加瀬……祢遠……！！！」

第七学区の北側にあるとある雑居ビルの地下四階。最先端の実験装置や器具のひしめくその部屋で少女、御坂美琴は白衣を着た女と対峙していた。

「やあ超電磁砲。今度こそ、殺すよ」

『アンリミテッド・メンバーズ規格外体』の一人にして、学園都市でも僅か三人しかいない肉体系変化系の『完全同化』の能力を持つ女。

加瀬祢遠。

「アンタが出てきたってことは、その装置が電波を委託できるってことで間違いなさそうね」

「へえ、よく調べてるじゃない。そうよ、これが超能力者たちから能力を奪ってる電波を発信できる装置。なんて言ったかな、確か剛徳司は『相乗阻害』とか言ってたっけ」

「それと大元を破壊すれば私たちは能力が使えるようになるってわけね」

「ま、そういうことになるかなあ」

加瀬は特に隠そうともせず、目先の少女に答える。実験器具に埋めつくされたこの部屋の中央に鎮座している一際大きな装置。円筒状のその装置さえ破壊してしまえば、本体を破壊してもこれに委託することはできなくなる。

だが加瀬は破壊されるなど有り得ないとも言いたげに口角を釣り上げて。

「できれば、だけどね」

「ッ……。言ってくれるじゃない……!!」

余裕の態度を崩さない加瀬に対し拳を握る美琴。  
その前髪から、青白い火花が散る。

「!?!」

加瀬はその光景を前に怪訝そうに眉を潜めた。

(紫電が……散った?)

今も流れ続けている電波のせいで通常の能力者が能力を行使することは不可能な筈だ。しかし、美琴の前髪で散った火花。あれは美琴が漏電していることを示している。つまり。

(能力が……使えてる……?)

電波の効力が切れている様子も見られない。しかし現に美琴はバチバチと漏電させている以上、何らかの対処法で能力を使用可能な状態にしているのだろう。

「……へえ。一体どんな手品を使ったのかな？」

「ちよつと優秀なハツカーさんが知り合いにいてね」

そう言う美琴の首筋にはなにやら電極のようなものが取り付けられていた。

チョーカー型のスイッチがあり、本体からは二本のコードが伸びている。

「……成程。その白い電極が秘策ってわけ？」

「流石にバレるか。そうよ。これが私“たち”の秘密兵器」

首筋の電極に手を添えて美琴は告げた。

「なにもアンタたちだけがこういうのに詳しいわけじゃないってこと」

美琴が装着している電極、その開発者は何を隠そう初春飾利である。学園都市中に蔓延しているAIM拡散力場に干渉する電波。これをなんとかしないことには能力を使うことが出来ない。

ならば、その電波を阻害する装置を作ってしまうえばいい。ということだ。動いたのが初春だ。発信されている電波を解析し、それを相殺する電波を脳に発信する形で能力を使えるようにする。

そしてそれは成功した。  
今美琴が装着しているのが『規格外体』の流している電波を相殺させる電波を断続的に脳へと送る電極だ。

ただ。

当然これは完成品ではない。

短い時間で中学生が作ったものなど所詮限界がある。それは有効時間と個数。

個数は当然初春が個人で制作したために美琴が使っているもの一つしかない。美琴が所持しているのは病院を出る時、唯一単独での行動になる美琴がいいだろうとの風の発言によって決まったからだ。そして有効時間。急造品であるためバッテリーに制限が付いてしまっているのだ。

バッテリー残量。時間にして凡そ二十分。

それを超えてしまえば、美琴は再び能力の使えないただの中学生へと成り下がり、事実上の敗北が決定する。

規格外の能力者と制限時間。

美琴はこれよりこの二つと戦わなくてはならない。加瀬に敗北するのは論外。電極のバッテリーが切れてもその結末は同じ。

(二十分……、それまでにコインを……倒すッ！！)

制服のポケットから取り出したコインを宙に弾き、落下してきたところを思い切り弾く。



開戦の合図となるレールガンが勢い良く撃ち出された。

第78話 二つのタタカイ（後書き）

はい、どうも昇甫です。

何やら色々とぶちこんだこの回でしたが収集がつかなくなりそうで  
怖い（笑

とりあえず言いたいののは、

美琴、一方通行化（笑……ミサカラレータ？  
それともミコトラレータ？

……ダメだいいネーミングが思いつかない；

## 第79話 つまらない矜持（前書き）

既にお気づきの読者様もいるかとは思いますが、現在一話から修正中です。少しでもまともなものにしようと思っておりますので、そちらにも目を通していただけると幸いです。

## 第79話 つまらない矜持

「ふいー。何とか間に合いましたあ」

第七学区の病院。その一室にて頭に花飾りを乗つけた少女、初春飾利は額を手の甲で拭って小さく息を吐いた。深夜とも言えるこの時間帯に未だ病室に明かりが灯っているのはこの部屋だけで、本来病院が定めている消灯時間など思いつきりブツチしてしまっているのだが、これは冥土返し（ヘヴンキャンセラー）から特別に許可が下りているので問題はない。

「全く末恐ろしいですよ」

そんな病室に居るのはベッドで先程まで作業していた初春とその隣に椅子を引つ張り出してきて腰掛けている白井。

日中は風紀委員として生徒たちの避難誘導を担当していた彼女は夜になり、凧たちが出ていったのと入れ違いになる形でこの病室へとやって来たのだ。

「学園都市に流れている電波を解析してそれを相殺する電波を発する電極をこんな短時間で作るなんて人間業ではありませんわ」

「いやあ、私にできることはサポートぐらいしかありませんから」

照れくさそうに頭を掻く初春。そのせいか頭の花から花粉のようなものが舞い上がっているが本人は全く気付いていないようだ。

「……でもアレは所詮試作品です。長くは保ちません」

「……ですわね」

初春急造の電極の持続時間は凡そ二〇分。  
それを過ぎれば電極はただのガラクタに成り下がる。

「お姉様……」

憂いを帯びたその表情からは美琴を心配する白井の心情が手に取るように分かる。

なんと言っても美琴は昏間に一度襲撃を受けているのだ。大丈夫だと本人は言っけていても必ず何処かにダメージはまだ蓄積されているはずだ。

「大丈夫よ」

そんな白井に声を掛けたのは、今しがた病室に入ってきた楓だった。一緒に一階のロビーの自販機に飲み物を買に行った星南も帰ってきた。

「美琴ちゃんも風も、きつとみんな無事で帰ってきてくれるわ」

「楓さん……」

「そうですよ白井さん！ 私たちが御坂さんたちを信じなきゃ一体誰が信じてあげるんですか！！」

ふんすっ！！ という擬音が聞こえるようなほどに気合いの入った初春が白井を励ます。

「それキャラが違いますわよ初春」

「レスポールとかあれば完璧ですかねえ」

「メタはダメですよ！！」

「レッドテイルの総長みたいに私も戦えたらよかったですけど」

「それも禁つ止ですよ！！」

初春の数々のメタ（？）発言に白井の怒涛のツツコミが入れられる。

それだけで、場が和んだのか病室からは暖かな笑いが洩れた。

「きっと大丈夫。学園都市最強の超能力者（レベル5）たちなんだから」

「……はいですの」

少女たちの切なる祈りが彼らに降り注ぐ。

「おうおうテメエだな？ 昼間地震みてえな地響き起こしやがったのは」

「クハツ、そいつは誤解だぜ第二位。アレをやったのは俺じゃない剛徳司さ」

燃えるように赤い髪を持つ白衣を着た青年。その白衣の内側はパンクな格好だった。黒を基調とした革靴やジーンズ、ギラギラしたアクセサリーなども手首にあしらわれている。

「で？ 此処まで来たってことは目的はアレなんだろ？」

青年 船首円みなむねまるは自らの後ろにある巨大な装置に目をやった。それが本体からの電波を委託できるモノで間違いないようだ。

「そういうこつた。さっさとテメエを始末してソレを破壊させてもらうぜ」

「バカか？ お前らは今超能力が使えねえんだぜ。そんな状態で俺を倒すって言うのかよ」

超能力が使えない学園都市第二位。超能力が使える『規格外』の能力者。どちらが有利なのか述べるまでもない。

しかし。

「その通りだ。船首円」

金髪にサングラスという特徴的な身なりの少年は当たり前前だと言

わんばかりに即答した。

「別に俺たちにはお前を倒す必要などない。その装置さえ破壊してしまえば、あとは本体を潰すだけだからな」

「だから俺がそれをさせるとでも？」

土御門と帝督。二人を小馬鹿にしたような船首に、土御門は静かに口を開く。

「ここから先は 殺し合いだ」

瞬間。

土御門の纏う空気が豹変する。

そして告げる。

自らの背負う、その名を。

「F a l l e r e 8 2 5 (背中刺す刃)」

それは魔法名。

魔術師にとつての核と言っても過言でないそれを口にした土御門は、懐から幾つかの折り紙を取り出した。

「 場ヲ区切ル事。紙ノ吹雪ヲ用イ現世の穢レヲ被工清メ禊ヲ通シ場ヲ制定(それではみなさん。タネもシカケもあるマジックをこたんのうあれ)」



それは魔術発動のための詠唱。これこそが土御門が船首を倒さずとも装置を破壊できると言いきった所以、『赤ノ式』。

帝督は土御門が術式を発動させるまで彼を守ることが役目だ。実際は帝督には土御門が何故能力を使えるのかさっぱり理解出来ないが、今はそんなことを気にしている場合ではない。使えるならば好都合、対抗手段を得られるのだから。

「界ヲ結ブ事。四方ヲ固メ四封ヲ配シ至宝ヲ得ン（ほんじつのステージはこちら。まずはメンドクセエしたごしらえから）」

そんな土御門の詠唱を、船首は怪訝そうに見つめていた。能力が使えないという大前提があるにも関わらず、目の前の敵からは何か危険な雰囲気を感じるのだ。

(……何だ？ アイツは一体何をしようとしている……?)

船首は知る由もない。ここ学園都市という科学の街に住む以上知り得ない、超能力とはベクトルの違うもう一つの異能の力。

尚も土御門の詠唱は続く。

「折紙ヲ重ネ降り神トシ式ノ寄ル辺ト為ス（それではわがマジックいちざのナカマをごしょうかい）」

土御門の周囲が俄に発光を始める。懐から取り出したのは小さな円筒形の容れものに入った、四つの折り紙。

「四獣二命ヲ。北ノ黒式、西ノ白式、南ノ赤式、東ノ青式（はたらけバカども。げんぶ、びゃっこ、すぎく、せいりゅう）」

取り出した折り紙たちを自らの周囲四ヶ所に投げる。東西南北に配置された折り紙たちは互いに共鳴し合うかのように発光を始めた。

「式打ツ場ヲ進呈凶ツ式ヲ招キ喚ビ場ヲ安置（ピストルはかんせいした。つづいてダンガンをそつてんする）」

継続される詠唱。土御門の口からは赤い液体が垂れ、アロハシヤツの腹部からも血が滲んでいるが、そんなことお構い無しに詠唱は続く。

だがそれが終わるまで待つてくれるほど、『規格外体』は優しくはない。

「何をしようとしてるのは知らねえが、とりあえず死んどけ」

船首が土御門に向かって駆け出す。詠唱中の土御門に攻撃を防ぐ術はない。

「行かせるかよッ！」

そんな土御門と船首との間に割って入ったのは、垣根帝督。未元<sup>マター</sup>物質も生み出せない、翼も現出させられない第二位は、ただ土御門の前に立って両手を広げた。

「何の真似だよ第二位。死にてえのか？」

「んなわけねえだろ」

自殺行為にも等しい行い。しかも相手の能力も何なのか把握でき

ていないこの状況で、それでも帝督は立ちはだかる。

「カツコイイなあ。惚れちまいそうだが垣根帝督ウウウウッッ！」

船首の右拳が、帝督の顔面を捉える。繰り出されたのは何の変哲もない、ただの右ストレート。

その筈だったが。

「ッ!？」

殴られた帝督は、数メートルも垂直に吹き飛ばされた。筋骨隆々の肉体を持つ人間でも難しいような荒業を、帝督とさして変わらぬ体格の船首は造作もなくやってのけた。

「なんだあ？ 呆気なく吹っ飛びやがってさっきまでの威勢はどうしたよお!？」

「ガフッ……、テメエどんな手品使ってやがる……!」

ヨロヨロと立ち上がる帝督。切れたのか口内は鉄の味がした。溜まった血液を床に吐き出し、船首へと視線を向ける。

「手品なんかじゃねえ。これが俺の能力なんだよ」

「んだと……!？」

「『ダブル multiplier認識倍化』、つつつても解んねえか」

船首は帝督を殴った右手を開いたり閉じたりしながら帝督、そして土御門へと視線を移す。

「丑ノ刻ニテ釘打ツ凶巫女、其二使役スル類ノ式ヲ（ダンガンにはとびつきりきょうぼうな、ふざけたくらいのものを）」

土御門の詠唱は佳境に入っていた。終了まであと僅か。それまで帝督が踏ん張ってくれば『赤ノ式』が発動する。

「厄介なもん持ち出しそうだなあ。やっぱアイツ先に潰し  
「行かせねえって、言ってるんだろッ！！」

船首の前に、再び帝督が立ちはだかる。現状、土御門の魔術しか有効な手段がない以上つまらないプライドなど捨てる。

学園都市第二位だとか、長点上機のトップだとか、『ファルコン』のメンバーだとか。そんなつまらない肩書きなど不要。

必要なのは今、この状況を打開できるだけの力を持つ切札。それを土御門が持っているというのなら、自身はサポートに徹しよう。

但し。

やられっぱなしじゃ、終わらない。

「人形二代ワリテ此ノ界ヲ（ピストルにはけっかいを）、釘二代ワリテ式神ヲ打チ（ダンガンにはシキガミを）」

船首の拳が、何発も帝督の身体へと吸い込まれるように浴びせられる。

それでも、帝督は倒れない。

「  
鎚二代ワリテ我ノ拳ヲ打タン（トリガーにはテムエのて  
を）」

途端。土御門の周囲に配置された四つの式神を模した折紙が眩い光を放つ。それはやがて巨大な炎へと形を変えていく。当人である土御門は吐血しながらもうつすらと笑みを浮かべ。

「喰らえ。長距離、広範囲砲撃『赤ノ式』」

その後、土御門が発動させた『赤ノ式』は目標物である装置へと着弾し、大規模な爆発を巻き起こした。

第79話 つまらない矜持（後書き）

帝督土御門回でした。

## 第80話 禁断ノ匣

人間の能力には限界というものがある。

もともと人間の身体能力には『制限』<sup>リミッター</sup>がかかり本来の三割程度の力しか使用することはできないし、才能という壁は何時の時代であつても努力する者に立ちはだかる。

学園都市は、正にその限界を表したような場所だ。

無能力者（レベル0）で終わる者はそこが才能の限界。どれだけ努力しようが超能力者（レベル5）には届かない。

自らの限界を痛感し、そこで挫折してしまう者は多い。いくら努力したところで、それは才能という壁に瞬く間に押し潰されてしまふのだから。

その行動や思考は間違いではない。才能があれば能力は開花するのだろうし、才ある人間はそれだけでアドバンテージを得る。張り合おうとするだけ無駄な努力だというのも頷ける。

しかしそこで諦めてしまえば、もう伸び代は存在しない。無駄な努力など存在しない以上、いくら時間がかかろうがそれが報われる時が来るかもしれないのだ。

限界はそこが終着点ではない。それより先が、必ず存在する。

限界なんてものは、超えるためにあるのだから。

視界が閃光によって利かなくなつたのと、着弾に伴う轟音が響き渡つたのはほぼ同時だつた。

長距離、広範囲砲撃『赤ノ式』。土御門が発動させたこの術式が、正確無比に装置を破壊した。それに伴って周囲一体に舞い上がる火の粉や粉塵が部屋を埋め尽くす。

「ゲホゲホッ、つたく土御門の野郎ちつたあ加減しろつてんだよ」

そんな中そう溢したのは垣根帝督。船首にさんざん攻撃されていた帝督だったが、それでも致命的なダメージは受けておらず手でパタパタと粉塵を払いながら立っていた。

「装置は……跡形もねえな」

向けられた視線の先には、最早原形すら残つておらず燃え散らかつた装置の残骸。これでは電波の委託などできるはずもないだろう。

「つと……、土御門の奴は……」

この術式を発動させた本人である土御門を目視できないため、帝督は辺りを軽く見渡す。ようやく晴れてきた粉塵の先、目当ての人物の姿があつた。



血塗れで倒れる、土御門の姿が。

「土御門ッ！！」

慌てて駆け寄った帝督に抱き抱えられる土御門。その身体のあちこちに出欠が見られ、学生服の内側に着たアロハシャツは真っ赤に染まっている。

「オイしつかりしやがれ土御門ッ！！」

「……ニヤァ、ちいとばかり無茶すぎたみたいだぜい」

自嘲気味な笑みを浮かべるその顔は真っ青で、とてもじゃないが戦えるような状態とは言えなかった。本来ならば魔力を生成した時点で身体に過負荷がかかる。それを無視して魔術を使えば、こうなるのは目に見えていた。

だが土御門はこうするしかなかったのだ。帝督が超能力を使えない今、こちらに残された対抗手段は土御門の『魔術』と上条の『幻想殺し（イマジンプレイカー）』、初春急造の電極しかない。

出し惜しみなどしていられる筈もない。

兎も角、三つの装置を破壊しさえすればこの状況を一気に逆転できるかもしれないのだ。

そのために上条と土御門、電極を所持する美琴を別々に配置し、装置の破壊を狙った。そして事実、土御門は装置の破壊に成功した。

「どうやら俺は戦えそうにない……、垣根……後は頼んだぞ……」

「土御門……」

見るからに重傷の土御門をそつと床に降ろし、ゆっくりと立ち上がる。

土御門による攻撃で装置は破壊されたが、それだけだ。根本的なものは何一つ解決していない。

それを片付けるのは帝督の役目だ。

「そつだな……」

いつもクールに冷静に。

垣根帝督という少年はそんな性格の少年だ。常に数手先を予見し、最良の一手を放つ。言ってしまうえば、感情に流されない。

「たまには、アツくなったっていいかもしれねえ……!!」

土御門の決死の行動を前に何も感じないなら、それはもう人間ではない。それくらい帝督にも理解できた。自然と身体の芯が熱くなるのを感じる。自分でも驚くくらい今の帝督は感情が高ぶっていた。それは土御門の行動のせいなのか。それとも。

「……おー煙てえ。まったくいきなり変なもん使いやがって。一体どんなカラクリだ?」

粉塵の向こうから現れた、船首みなしを見つけたからなのか。

「まあそんなことはどうだっていい。……チツ、装置はもうダメだな」

チラリと横目で装置の残骸に目をやった船首は忌々し気に舌打ちした後、再度帝督へと向き直る。

「甘くみてたよ第二位。まさか超能力が使える奴がいるなんて思ってもみなかった」

土御門の魔術を超能力だと思っている船首の口調は台詞とは裏腹に、とても楽しそうなものだった。

「テメエの思い通りに事は運ばねえってことだよ」

「らしいな。まさかお前まで超能力が使えるとか言い出すのか？ だったら剛徳司の野郎一発ぶん殴るぜ」

「さあな、それは」

これ以上無用な話に付き合いつもりなどないと言つよつに帝督は少しだけ身を屈めて。

「テメエの眼で確かめてみるよッ!!」

勢い良く、地面を蹴って飛び出した。

「……………成程ね」

御坂美琴は放った超電磁砲レールガンの先に在るものを見つめて、小さくそう呟いた。地下という狭く限られた空間でレールガンをぶっぱなしなどしたら生き埋めにでもなってしまうようなものだが、この建物案外しつかり造られているのかビクともしていない様子だった。

そして何より。

美琴が放った超電磁砲は、加瀬に被弾してはいない。

背中に嫌な汗がドツと噴き出すような嫌悪感を覚えながら、美琴は正面に立つ加瀬“だった”人間を見据える。

「……………そりゃ私の超電磁砲だって相殺される筈だわ」

「ふふ。納得できるんだ」

「認めたくはないけど、仕方ないじゃない」

キツとその人間に向けて敵意を剥き出しにして。

「相手が私だっていうならね……………!!」

美琴の正面に立っていたのは御坂美琴そのものだった。

当然本人ではない。

しかし加瀬の『完全同化』<sup>アシミレート</sup>は現実上には不可能な遺伝子、細胞単位での肉体変化が可能だ。妹達のよう<sup>シスターズ</sup>なクローンではなく、見た目や能力が完全に御坂美琴本人に成ることができる。

流石に記憶や衣服までは変化させられないため口調や白衣そのままの美琴が立っていることになるわけだが。

「全く気味悪いつたらないわね……！！」

目の前に写る鏡の中の自分が勝手に動き回っているかのような錯覚に陥りそうになりながらも、美琴は脳内で演算を開始する。

電極の持続時間は二〇分しかないのだ。ちまちまと小出しにして戦えるほどの余裕などない。

「アンタに構ってられる時間は……ないのよッ！！」

言葉と同時、十億ボルトもの電撃が加瀬へと放たれる。眼ですら追えぬ電撃だが、それは加瀬には届かなかった。躲したわけではない。美琴が放ったものと全く同じ電撃によって相殺されたのだ。これが加瀬が規格外と呼ばれる所以でもある。肉体変化によって成り代わった人物の能力を自分のものとして使用することができる。

細胞単位での肉体変化が可能に加瀬にのみ許された、言うなればワンオフ・アビリティである。

「どうしたの？ そんな攻撃、全然当たらないんだけどッ！！」

言いながら加瀬は美琴目掛けて同じ電撃を放つ。

「なめんじゃないわよ!!」

それを干渉することで横に逸らす。同じ発電系の能力者の場合互いに干渉し合うこともできるため、このままではギリ貧。能力に使用制限のある美琴が圧倒的に不利だ。加瀬にしてみればこれ以上戦局を大きく変える必要はない。負けないように相殺できる能力を使っていれば、向こうのほうから勝手に負けてくれるのだから。

そんな局面をどうにか打破するには、やはり加瀬を倒すしかない。

(でもどうやって……? 私の電撃はみんな相殺されちゃうし……電極の使用時間も気になるところね)

これといった打開策も見つからず、時間ばかりが流れていく。

一向に見つからない答えに美琴が頭を悩ませていると、不意に加瀬が口を開いた。

「そういえば、アナタ確か二万体のクローンがいるんだっけ? 今の私みたいな」

ピクン、と美琴の身体が僅かに反応する。

「学園都市最強である一方通行の絶対能力者(レベル6)への到達のために使い古された哀れなモルモット。今の学園都市には数人しかいないんだっけ?」

「……何が言いたいのよ」

「そんな怖い顔しないでよ。ちょっと思ったの」

俯く美琴に、加瀬は続ける。

「モルモットであるアナタのクローンって、どんな気持ちだったのかなあって」

「どんな気持ち……ですって？」

「気になったことはない？ だってアレは殺されるために量産された実権動物なのよ？ それを知らながらも従ってたアレは、どんな心境だったのかなあ」

易易と、加瀬は美琴の心に土足で上がり込んだ。

それはかつての過去。まだ一方通行が闇の底に居た頃の、遠い過去。  
去。

『シスターズ妹達』と呼ばれる美琴のクローンは、ある実験のために利用されていたのだ。

「……あの娘たちは、モルモットなんかじゃない」

「ならなんだって言うのよ」

「決まってるじゃない……」

バチン、と紫電を撒き散らし、激昂した美琴は加瀬を睨みつけて叫ぶ。

「人間よッ！！」

加瀬が触れたのは、開けてはいけない『バンドラボックス禁断ノ匣』。

美琴にとっても、一方通行にとっても。

相殺されようが干渉されようがもう関係ない。

ありったけの力を込めて、全身全霊の超電磁砲<sup>レールガン</sup>を撃ち込んだ。



## 第80話 禁断ノ匣（後書き）

というわけで美琴の過去（妹達について）をちよろちよろっと語らせようかなと。

あ、一つ言うと原作と違って一方通行を止めたのは上条さんではありません。

そのへんに凧や葵が絡んでくる感じですよ。

## 第81話 怪物と怪物

嘗て、学園都市最強である能力者を更に進化させようという実験計画があった。

その実験に関わっていたのは、二人の超能力者。

用意されたのは、とある能力者から生み出された二万體ものクローンと二万通りの戦闘シミュレート。

それは余りにも非人道的な実験。公になれば関係者全員の首が飛ぶだけでは済まないような規模のものだった。

被験者：一方通行

実験内容：二万通りの戦闘環境で量産能力者を二万階殺害することで被験者、一方通行を『絶対能力者（レベル6）』へと進化させる。

実験名：絶対能力進化

「アンタは今、私の心に土足で入り込んだ……ッ!!」

「……へえ。で？　こんな超電磁砲レーザーガン如きで私を倒せるとでも思ってるわけ？」

第七学区北側の雑居ビル、その地下四階。ごちゃごちゃと実験装置が乱雑に散りばめられたその部屋で、学園都市第三位、御坂美琴と『規格外体』アンリミテッド・メンバースの一人である加瀬祢遠は対峙していた。平然と美琴の放ったレーザーガンを自らの放ったレーザーガンで相殺した加瀬に対して、美琴はその拳をキツく握り締め敵意剥き出しで加瀬を睨み付けている。

「あの娘たちはただのクローンなんかじゃない……!!　あの娘たちにはあの娘たちにしかない感情を持つてるのよッ!!」

「ハッ、たかだか十八万で製造できるような実験材料になにをそんなにアツくなってるんのよ。だいたい、DNAをアナタが提供したからアレが生み出されたわけでしょ？」

「違う!!　私はあんなこと、望んでない……!!」

今にも泣き出しそうなほどに悲痛に顔を歪める美琴。彼女は昔自身のDNAを研究者に提供している。それがあんな実験に利用されるとは夢にも思わず。

筋ジストロフィー。それが聞かされた病名だった。徐々に筋肉が衰え、やがては動かなくなってしまうと言われる病気はしかし、美

琴の能力を持つてすれば回復させることができるかもしれない。

困っている人を救えるかもしれない。

そう言われた美琴に断る理由などある筈もなかった。もともと正義感の強い彼女だ、多くの人の役に立てるといふのならそれはとても誇らしいことだと思っただろう。

幼かった彼女は気付かなかったが、本当はその時点で気づかなくてはならなかったのだ。

何故、学園都市に大勢いる『発電能力者』の中で自分が選ばれたのか。

何故、まだせいぜいレベル1の自分の能力を活用しようとするのか。

全ては、仕組まれていたのだ。

「どうであれ、アナタがあの結果を導いたことに違いはないでしょう?」

「違うッ!! 私は!!」

音速を超える雷撃の槍が放たれるが、加瀬はそれを造作もなく同じ雷撃の槍で相殺した。

「無駄だつてば。私にそんなちやちな攻撃は通用しない」

「ッ……!!」

「あ。いいこと思いついちゃった」

何か考えついたらしい加瀬が楽しそうな声を上げる。しかし声色とは裏腹に、その表情は邪に歪んでいた。

「こんなの、どうかなあ？」

瞬間。美琴は言葉を失った。

加瀬の言葉と同時に、今まで正面に立っていた自分そっくりな人間はナリを潜め、その代わりに現れたのは、先ほどとは別の意味で美琴そっくりの少女。

「アンタ……まさか……」

無意識のうちに声は干上がり、その顔からは血の気が引いていく。ホンモノと間違えてしまつのも無理はないほどによく似た少女が、やがて口を開く。

「……お姉様」

シスターズ  
妹達、そう呼ばれる少女の一人が、目の前に立っていた。

「はあ……はあ……」

「ンだア？ さっきまでの威勢は何処いきやがったンだよ軍覇ア」

防戦一方。

軍覇と一方通行との戦いそのは言葉が正しくピッタリなものだった。考えてみればそれも無理はない。単純な戦闘、つまり身体能力だけならば細身の一方通行よりも圧倒的に軍覇が有利だろうが、一方通行には超能力がある。それだけで戦況はあっという間に逆転してしまう。学園都市最強の能力者ともなれば尚更だ。

「……解らねえ」

「あア？」

身体中ボロボロになった軍覇の口から漏れたのは、たった一つの疑問だった。

「何で、お前は敵側ていしやにいやがるんだ」

「……………」

「俺の知ってる一方通行は、そんな根性なしじゃなかったはずだぜ」

ただ純粹に問う軍覇を前に、これまで毅然と振舞っていた一方通行の心が僅かに揺らぐ。

これは個人の問題だ。そこに、風たちまで巻き込むわけにはいかない。そう思っていた。

「……ハッ、何を言ってんだ俺は。しっかり巻き込んでしまってるじゃねエかよ……」

自嘲気味に軽く笑った一方通行。その次の瞬間にはしかし、完全に表情が消えていた。

「なあ一方通行、一体何が……」  
「うるせエよ」

軍覇の言葉を遮り、ギリッと歯噛みしながら低い声で呟く。

「お前にや関係のねエ話だ。首突っ込んでくるンじゃねエ!!」

轟ッ!! とベクトル操作によって発生した烈風が軍覇に襲いかかる。コンクリートの地面をやすやすと引き剥がす威力の烈風をモロに喰らった軍覇はそのまま数メートル水平に吹き飛ばされた。

「……なんだ一方通行、この根性のねえ攻撃は……」

だが、削板軍覇は立ち上がる。

「お前にどんな事情があるのかは知らねえ……。もしかしたらとてつもなく大切な理由があるのかもしれない……」

一方通行は、何も話そうとはしない。それが軍覇には悲しく、苛立たしかった。

どうして相談の一つでもしてくれなかったんだ。  
自分たちは、仲間じゃなかったのか。

「……そんな攻撃じゃあ、この俺を倒せはしねえぞ一方通行あぁッ  
！！」

ありつたけの想いを込めて咆哮する軍覇を前に、ついに一方通行もナニカが切れた。

「……オマエに何が分かるってんだ」

抑え込んでいた感情が、湯水のように溢れだしてくる。

「オマエに俺の、何が分かるってんだよオオオオオオッ！！」

一度溢れ出した感情は、もう抑え込むことなどできはしない。感情に流されるままに、一方通行は吼える。

「ならどうしろってんだ！！俺にはアイツらを守る資格なンぞね  
エってこと解ってんだよッ！！」

足の裏にかかるベクトルを操作することで、弾丸の如く軍覇の懐へと一瞬で潜り込む。突き出しされた凶悪な右手が、軍覇の腹部に叩き込まれた。

「ッ……！！！」

触れるだけで人を簡単に殺められる一方通行の両の腕。それをモロに受けた軍覇が無事な筈がない。



「ガフッ……」

口からは血が吐き出され、足取りは覚束無い。

「……ねえな」

それでも、倒れない。

削板軍覇は、決して倒れはしない。

「……効かねえなあッ！！」

雄叫びとともに繰り出された右ストレートが一方通行の顔面目掛けて繰り出される。

それは一方通行に触れるか触れないかというところでゴキッ、と嫌な音を立てて弾かれてしまった。見れば軍覇の右手中指がだらしなくプランと垂れ下がっている。

「無駄なんだよッ！！」

怒号とともに振り降ろされた脚によって、地面が爆発したかのよう隆起していく。その破片と烈風に巻き込まれて、軍覇は近くの外壁に叩きつけられた。

「ガッ……！！」

ミシミシと身体中の骨が軋み、悲鳴を上げている。肺や胃が押し上げられて呼吸もままならない。視界はぼやけ、今や一方通行の姿でさえはつきりとは認識することもできない。

しかし。

それらが軍覇にとって倒れる理由にはならない。

「一方通行……」

瓦礫を退かし再び一方通行へと接近する軍覇は、ボロボロになりながらも退く気はない。身体中に襲いかかる激痛など意識の外に追いやり、一方通行の顔を睨み付ける。

「こんなんじゃ俺は倒れねえ……」

額から流れる血も、乱れた呼吸も全て無視して。

「見せてやるよ、本物の根性ってヤツを！！ お前にどんな理由があるのかなんか知ったことじゃねえ。曲がらず腐らず正面に行く男は、親友の道を正すために立ち上がることが出来るんだッ！！」

突如。

ゴアッ！！ と軍覇の身体を得体の知れないなにかが包む。

超能力が使えない現在の学園都市でその現象は有り得ないことだ。しかし、彼は『世界最大の原石』と称されるほどの少年。人工的な手順を踏んで発現した学園都市の超能力者でない、所謂原石である軍覇は本人でさえも解らないような力を使う。研究者たちでさえ複雑すぎて手が出せないような代物だ、蔓延している電波が干渉しているAIM拡散力場の届き得ないところの能力ならば、あるいは使えるのかもしれない。

兎角、軍覇を包む何かしらの能力は一方通行にも理解できるものではなかった。いや、理解できたところでもやることは変わらない。それは二人とも解っていた。だからこそ、最早言葉など不要。

軍覇は湧き出るその力に抗うことはせず、そのまま前に駆け出した。反射されようが関係なくただ、前へ。

対して一方通行の取った行動も至ってシンプル。まるで正面衝突でもするかのように軍覇と同じく正面へと飛び込む。

音は置き去りにされ、周囲には衝撃波が荒れ狂う。

学園都市最強の超能力者と、世界最大の原石。

怪物と怪物の激突は、学園都市中に轟音と地響きを齎した。

## 第81話 怪物と怪物（後書き）

どうも晃甫です。

今回は美琴、軍覇一方回となりました。

ここでようやく何故一方が敵側についているのか少しずつ明らかになってきたと思います。

まあ、あの実験の延長とでもいった感じですけど（汗

最終章とか言っておきながらなかなか話が進みませんが広い心で受け入れてもらえると幸いです（^。^；）

次回は風上、帝督回です。

## 第82話 覚醒、未知の先（前書き）

前回のあとがきで凧上、帝督回と書きましたが帝督回は入れられませんでした（汗）

## 第82話 覚醒、未知の先

何かを得るためには、それと同等の代価が必要となる。  
。 某錬金術漫画の受け売りではないが、等価交換は確かにこの世界の真理の一つだ。

効き目が強い薬には、それに比例した副作用が存在する。プロ野球選手になろうとするのなら、それと同価値の努力をしなければならぬ。社長となって企業で成功したいのなら、それに見合うだけの知識と人望を身に付けなければならない。

それは例えるならば天秤のようだ。どちらにも傾くことなく水平を保ったままの秤。世界とはそうして均衡を保っている。

等価交換。

それは当然『魔術』や『超能力』にも言えることである。

それを手に入れるために、自らの大切なものを犠牲にしてきた者は多い。やはりそれは『魔術』と『超能力』、双方に言えることで、超能力者（レベル5）、またはそれすらも測れない規格外の能力者ともなれば、一体どれほど人間を捨ててきたのか想像することもできない。

そんな『人間』を捨ててきた人間の一人である天塚葵は、本拠地あまつかあおいである研究所の一室でモニタに目を向けていた。

白を基調としたその部屋には学園都市製の最新パソコンと機材が置かれ、天塚葵はそんなパソコンを操作しモニタに呼び出した各地のカメラの映像に目を通す。

映し出されていたのは、電波委託の可能な装置が設置してある建造物の内部。そこで戦闘を繰り広げる『アンリミテッド・メンバース規格外体』と超能力者たちの姿。

だが三台あるモニタのうち、一台は真っ白で映像を見ることが出来なくなっていた。

（これは……剛徳司が居る場所か。一体何があつたんだ？）

ノイズが走り砂嵐にはなっていないことからカメラ自体が故障したわけではなさそうだが、剛徳司の能力でこうなるとは思えない。

だとするなら。

（幻想殺し（イメージブレイカー）か……？ いやないな、彼の能力はこんなものじゃない。だとすれば……）

脳裏に過つたのは先程の一方通行との会話。確か一条凧と言った名の第六位が、この計画を食い潰す、と。

「……ハハッ」

無意識に漏れた小さな笑い。それは一方通行の言葉の通りになっているのかもしれないという高揚感から来るものだった。

「おもしろいよ一方通行。君の言う通り、簡単に事は運ばないみたいだ」

笑みを浮かべる天塚の表情に、焦りの色など一切なく、心底楽しそうに真っ白なモニタを見つめる。他のモニタは正常に戦闘の様子を写しているが、そんなもの眼中にないとばかりに天塚は真っ白なモニタを見つめ続ける。

「時は来たれり、」

天塚葵がモニタを見つめ口角を吊り上げている頃、同じ建物内部の一室で水城英吏みずき えりは小さく溜め息を吐いていた。この部屋は自分だけに宛がわれた私室のためごちゃごちゃした研究機材や書類などは全くなく、年相応の落ち着きのある部屋だった。そんな私室にある一人用のソファに腰を下ろし、嘆息する。



「はあ……。祢遠も塊土も戦闘狂すぎるわね」

本来ならば祢遠は風紀委員の支部を襲撃した時に第三位を、剛徳司はモノレールを破壊した時に第六位を抹殺できたはずだ。一方通行や土御門といった障害が入ったからといってそれほど大きな問題にはならない。

それを祢遠はあっさりと引き下がり、剛徳司は逃走した敵を追おうともしなかった。

これでは時間の無駄でしかない。兩人ともより長く戦いたいだけなのだ。効率が悪すぎる。

「円はまだマトモだけど、それでもあっちよりよね……」

赤毛のチャラ男を頭の隅で想像し頭を抱える。「規格外体」と呼ばれるだけあってそれぞれが超能力者（レベル5）と同等以上の力を持つが、やはりと言うべきか性格が破綻している。常識人と呼べるのは唯一この水城だけで、後の四人はどこか人格が破綻している者ばかりだ。

「一方通行……。彼をこのまま此方に縛っておくのはもう難しいか……」

思考を切り替えて一方通行のことを思案する。

彼は葵の言うなれば伝でこちらに引き込んだ人材だ。当然謀反の可能性は高い。学園都市最強と言われる第一位が謀反し敵側についたとしても勝算は十分にあるが、それでもやはりリスクは付きまとう。

それならば早々に対策を打つべきだ。そう先程葵に進言してはみたものの、

『いいんだよ彼はアレで。きつと面白いことになる』

との言い分によりあっさりとは却下されてしまった。

全く、口調や身なりから冷静で物腰やわらかそうに見える葵もやはり性格がどこか破綻している。言ってしまうえば興味のあるモノに対してどこまでも貪欲なのだ。それはもう、見ていて気持ちのいいくらいに。

「そういう所はアレイスターと大差ないわね……」

ふう、と再び小さく息を吐く。そんな人格破綻者の集まりとも呼べる『アンリミテッド・メンバーズ規格外体』だが、それぞれの願いはただ一つ。

皆に平和を、平等を。

『超能力』なんてものが人工的に開発できるようになってしまったせいで自分たちは規格外と呼ばれ、そしてそんな超能力に魅せられた狂った科学者たちによってあの悲劇は引き起こされた。もう何年も昔になるが、これまで一日たりとも彼女を忘れたことなどない。

「桔梗……」

超能力者の消滅。

学園都市を根底から覆すような巨大すぎる計画だが、水城たちにはそれを実行し得るだけの力と、能力がある。

そして事実、ここまで特に問題なく事を運ぶことに成功している。にも関わらず、水城には小さな不安要素があった。

(こんな計画……アレイスターが気付いていない筈がない。であるにも関わらず干渉してこないってことは、これも奴の言う計画とやらプランの許容範囲内だとも言うの……？ なら私たちの計画は……)

そこまで考えて、水城は首を横に何度も振ることで思考を中断させた。やめよう、一度思い浮かんでしまつたら、何だか本当にそうなってしまいそうだから。

一抹の不安を胸の内に押し留めて、水城はソファから立ち上がり部屋の外へと向かう。

自らの悲願のために、もう立ち止まることなど許されないといい聞かせるように。

周囲を膨大な光が埋め尽くし、眼も開けられないような空間の中心。そこに一条風は立っていた。

(これが……)

断続的に襲いかかる頭が割れんばかりの激痛が思考を度々遮るが、なんとなく凧は理解していた。

(これが……魔術……?)

十月下旬の修学旅行。そこで英国第三王女の救出に携わった凧はナイトライダー騎士団長と名乗る男性からこちらの超能力とは違うベクトルで使われる魔術というものの存在を聞かされていた。それは『才能の無い人間』がそれでも『才能のある人間(超能力者)』に追い付くために生み出されたもので、それを超能力者が使おうとすればどんな惨事を招くのかということも。

理論的に理解していたわけではない。凧は科学サイドの人間、オカルトの分野については全くの素人だ。こんな突発的に魔力を生成できる筈がない。

なら何故このような事態を招いたのか。それは凧が出した結論が大きく関係している。

学園都市に蔓延している電波。それは超能力者の無意識に放つAIM拡散力場に干渉し、『自分だけの(パーソナル)現実』リアリティを認識できなくすることで能力を発動できなくさせるといふ代物だ。学園都市に住まう学生は皆例外なくこのAIM拡散力場を発しているため、超能力は使用できなくなってしまうた。

しかし、おかしい。

では何故目の前の青年は能力が使えているのだろうか。大体、超

能力は学生でなくては使用できないというのが学園都市での常識だ。それをさも当然のように目の前で大人と言える年齢の男が能力を振るえば、嫌でも気にかかる。

そこで思い出したのが、騎士団長の言っていた言葉。

『魔術とは、超能力とは違う脳の回路を使って』

使用する脳回路が異なる。これならば、ある程度のごことは説明できようになる。

だが、それも所詮は“ある程度”でしかない。

確証を得るには、自ら確かめる他ない。

そう結論付けた風はいつもとは違う回路を使う意識をして演算に入り、そして。

魔力の生成に至った。

それはただの偶然で。

まだまだ魔術と呼ぶにはチンケで。

身体への負担で意識が飛びそうになる。

だが。

この八方塞がりの状況を打破するには、この上ない選択だった。

「一条ッ!」

凧は知る由もないが魔術というものがどんなもので、超能力者が魔術を使おうとするとどんなことが起こるのかを理解している上条が叫ぶ。

そんな上条のほうをそつと見て、凧は小さく口を動かす。

ダイ ジョ ウ ブ

瞬間。真っ白な部屋を更に上から塗り潰すかのような閃光が凧を中心に瞬いた。

凧を中心に起こった莫大な光量を前に、剛徳司は我が目を疑った。

(オイオイ一体なんだってんだこりゃあッ!? コイツらは超能力が使えるえ筈だ!!! だってのにさっきから感じる肺を圧迫されてるみてえな不快なコレは何なんだよッ!?)

自らが制作した『カウンターバランス能力破壊』という名の電波によって超能力者(レベル5)だろうが何だろうが一介の学生へと成り下がる。その筈だ。

しかし現実はどうだ。確かに能力を封じ込めていたはずの少年の内から湧き出る、この正体の掴めない謎の圧迫感。

剛徳司は背筋にドツと汗が噴き出すのを感じていた。

嫌な予感程度のものではない。剛徳司の身体全身が目の前少年は危険だと赤信号を発している。

「……なんだってんだ、」

額から垂れる汗にも構わず、剛徳司は正面から眼を離さない。いや、此の場合離せない、といいのが適当だろう。

閃光が収束し、現れたのは先程まで自分が追い詰めていた筈の第六位の超能力者(レベル5)。全身を痛め付け、もう虫の息だった筈の少年。

「なんだってんだよオオおおおッ!!!」

剛徳司が大声を上げて取り乱す。原因など言うまでもない。

正面、学園都市第六位の超能力者（レベル5）が、剛徳司ですら  
知り得ない未知の扉を開けて立っていたからだ。

「……bwqh」



第83話 dark and dark (前書き)

お待たせしました。

### 第83話 dark and dark

学園都市に住まう少年、一条凧は何処にでも居る、極々普通の高校生である。

極々普通の家庭に生まれ、至って平凡な幼少期を経て、少年ならば小さい頃誰もが夢見るようなヒーローになれるかもしれない超能力とやたらに惹かれ、学園都市の門を叩いた。

至って平凡。

極々普通。

それが普通と呼ぶには些か疑問を持つようになったのは、一体何時からだっただろうか。

学園都市に来て間も無く、凧は後に学園都市第二位の超能力者となる少年、垣根帝督と出会う。思えばこの時から既に彼の生い立ちが『普通』ではなかったのかもしれない。

何を基準に『普通』と言うのか、その境界はひどく曖昧だが、今の彼の人間関係を洗い出してみればどれだけ『普通』ではないかが理解できるだろう。

学園都市で七人しかいないレベル5の一人であり、さらにそのうちの殆どと面識を持ち、科学とは正反対の魔術にまで僅かだが触れている。

学園都市第一位、一方通行のように『最強』というわけではない。

学園都市第二位、垣根帝督のように『常識外』でもない。

学園都市第七位、削板軍覇のように『世界最高の原石』でもない。

一条凧とは、言うなれば『特殊』。

能力が、と言うわけではない。その人間関係、繋がりが特殊なのだ。そして何より、根本的に彼が特殊であると言う理由、それは。

魔術師と超能力者という正反対の世界の住人である、二人の混合ハイブリッドであったことだ。

「なんだってんだ……」

剛徳司は今正に目の前で起こった事象が信じられず、ほぼ無意識に言葉が漏れ出した。同時に、背骨の代わりに背中に氷柱をブチ込まれたような悪寒を感じている。

剛徳司の全神経が目前の少年は危険だと悲鳴を上げている。こんなこと、生まれてこの方感じたことのない危機感だ。

故に、剛徳司は咆哮する。

「なんだってんだよオオおおおッ!!」

叫ぶことで、少しでも自らの内から沸く『恐怖』という感情を吐き出そうと。

上条当麻は前方に捉えた風の姿から、目を離すことができなかつた。先程まで剛徳司のされるがままに飄られ続けていたと思えば突然視界が真っ白に、そして立っていた風の姿。

「どっ……なつてんだ……?」

上条の理解できる許容範囲などとうに超えてしまっているが、それに更に上乘せするが如く理解不能な現象が突き付けられる。

「一条……?」

震える口からかろうじて出せた友人の名前が、真っ白な空間に霧

散していった。上条の視線の先、自分の前に立つ形で凧が剛徳司と向かい合っている。その表情までは伺い知ることは出来ないが、それはむしろ幸運だったかもしれない。凧の纏う普通とは明らかに異なるその雰囲気、地下空間一帯を支配しているように思える。これまで炎の魔術師や世界に二〇人といない聖人、果ては天使なんという得体の知れないものとまで戦ってきた戦歴を持つ上条でも、その異様な空気に身体を動かすことが出来ない。

そして、上条は耳にした。

とても人間が発したものとは思えない、その声を。

「……bwqh」

凧の口から零れたのは、どこかノイズがかった、酷く聞き辛いものだった。それは到底人間が出せるような音域ではなく、一種の獣のうめき声にも似た声。

そんな声に上条が僅かに眉を顰めた、その直後。

バギンッ！！ と氷が割れたような音とともに、凧の周囲に無数の塵のようなものが出現した。かと思えば、それは瞬間に一箇所集まり、何かの形を作り始める。ここでようやく、上条は出現したのが塵ではなく氷の結晶のようなものであることに気が付いた。極小の氷の結晶が周囲からかき集められて生成されていくそれに、上条はどこか見覚えがあった。

既視感。

何時のことだったか、自分はコレを何処かで一度目撃しているよ  
うな気がしてならなかった。

(……………！！！)

そして、思い出す。

生成されたソレの完成形を目にして、かつての記憶の中から掘り出されたもの。それは。

「……ミーシャ……？」

上条が見つめる先、風の背から“生えている”翼のような氷の結晶は、嘗てとある海辺で見たものとてもよく似ていた。

『御使墮し（エンゼルフォール）』。

大天使を地上へと文字通り引き摺り墮とすこの大魔術によって媒体とされた本名、サーシャ・クロイツエフの背に展開されていたものと今の風の背から現出した氷の翼のようなものはそっくりどころか、上条の目には全く同じにしか見えなかった。ご丁寧にも、頭上にはミーシャの時と同じように天使の輪のようなものが浮遊している。

そしてこれ等の事象を前に、上条は一つの仮説に辿り着く。

（まさか……一条にも天使が……！？）

そう思い至るのは極自然だろう。前にも似たような経験をしている上条ならば尚更である。しかし、当然の如く『御使墮し』などという大魔術は発動していない。もしも発動していたとしたら、前回

のように其々の見た目と中身が別々になってしまっているはずだ。そしてもちろん、凧の肉体を媒体にして天使が降臨したわけでもない。

パキパキツ、と音を立ててその翼らしきものが動き出す。左右対象に生えたそれは別の動きをしているところを見ると、まるで意志があるかのような錯覚に陥りそうになる。

「な……にを……？」

動き出したそれを見て上条は呆然と眩く。やっとのことで脳内の整理が完了したためか、先ほどよりも幾分かは冷静さを取り戻しつつある上条は、そんな凧をただ見つめることしかできない。

それは恐怖からではない。身の程を弁えたからだ。このまま自分が戦っても足でまといにしかならない。なら、自分が必要とされる場面までは、今は。

強く握られた拳からは赤い滴が零れる。爪が皮膚を喰い破ったことによるものだ。

悔しくない訳がない。ここまで来たというのに、ただ仲間が戦うのを傍観することしか出来ないという実情に情けなさど腹立たしさで今にも拳を床に打付けそうになる。

「一条……」

動き出した翼は、まるで蛇のように自由自在だった。  
剛徳司はそれに異様な気味悪さを覚える。

「……なんだってんだよこいつは……！！　ほんとに人間か!？」

目の前の少年のその異様な姿に、悪寒が全身を駆け巡る。こんなデータ、葵から貰い目を通した書類の中には一切記載されていないが、隠蔽されていたのか、本当に突然発生したのかは定かではないがどちらにしろ、先程までであった余裕は剛徳司の中から完全に消え失せた。

目線の先　。

そこに居たのは、つい数分前とは全くの別人へと変貌した少年。背中からは氷柱のような大きな翼が形成され、その周囲には微細な氷の結晶が漂っている。彼が原因なのか、部屋全体の空気が冷たく、室温が下がっているようだ。

俯いたまま動かない少年を倒すべく、剛徳司は最大限の能力を<sup>チカラ</sup>振るう。

「オオオオツ!!!」

『<sup>アスリレーション</sup>自在振動』によって超音波振動を風に向けて放つ。

超音波は水や生身のような柔らかい物質に対してはある程度すり抜けるが、金属や骨のように硬い物質に対しては反射するという性質を持つ。



反射する、ということとはつまりそのエネルギーを直に受けているということであり、秒間二万回以上振動している超音波を人間が攻撃として受ければ深刻なダメージを受けるのは間違いない。

しかし。

そんな超音波による攻撃は、氷の翼によってあっさりと防がれてしまった。

「んなッ!？」

驚愕に目を剥く剛徳司。前述の通り、超音波は硬い物質に対して反射する性質を有する。当然、氷も硬い物質として反射され、破壊されているはずなのだ。

「なんで、砕けねえ……!？」

通常の氷ならば間違いなく粉々に砕け散っている筈だ。それほどの攻撃力が超音波にはある。

(普通の氷じゃねえってのか……!？ だったら……)

思考を切り替えた剛徳司は別の角度からの攻撃へと移る。  
砕けないのならば、溶かせばいい。

振動を自在に操る能力を持つ剛徳司にとってそれは造作もないこと、熱振動を引き起こせばいいのだから。

熱振動とは原子が振動することで発生するものだ。固体中の原子や分子が持つ運動エネルギーが振動運動をすることで熱を帯びる。

だが、ここで剛徳司は気付く。

(……………待てよ、もし奴が能力が使える状態にあるとして、アイツの能力は……………!!)

瞬間。

熱振動を引き起こす前に、凧の背後の翼が勢い良く振り降ろされた。

「ゴ……………、ガア!!」

その翼は剛徳司の腹部に直撃し、身体をくの字に折れ曲げさせる。白衣の上からでもありありと分かる筋骨隆々の肉体が紙切れのように吹き飛ばされた。

壁に激突した剛徳司は、ズルズルと床に崩れ落ちる。口からは血が垂れ、左腕は折れたのはだらしなく垂れ下がっている。

そんな剛徳司のもとへ、これまで動かなかった凧がゆつくりと歩き出す。凧と剛徳司との距離は、まるで剛徳司の残りの命を現しているかのようだ。一步、また一步とその命の終わりが迫る。

「……………チツ！」

折れていない右腕で攻撃するも、いとも容易くそれは氷の翼に阻まれる。

「……………」

気づけば、剛徳司の目の前に凧は立っていた。そして剛徳司は目にする。これまで俯いたままで見えなかった、その表情を。

「……………d守wgv死」

「　　ッ！！　まさか、お前、まさ　　」

何かを悟った剛徳司が言葉を言い終えるよりも早く、無情なる氷の翼が叩きつけられた。肉が潰れる生々しい音が地下空間に反響する。

幾度となく振り下ろされる氷の翼は、標的の原形が判らなくなるまで止まることはなかった。

「……………」

「いち……………じょう……………？」

虐殺、という言葉がピツタリな行為に胃から込み上がるものを必死で抑え、上条は再び動きを止めた凧に背後から声を掛ける。

その声が引金となったのか、操り人形の糸がプツリ切れたかのように膝から床に倒れる凧。いつの間にか背中にあった翼は消え、気温も元に戻っていた。「一条ッ！！」

倒れた凧のもとへと駆け寄り、その身体を確かめる。意識はない

が目立つた外傷はなく、呼吸音が聞こえるため最悪の事態には至らなかったようだ。超能力者が魔術を使った場合のリスクを考えれば、凧は幸運だった。死んでいても何ら不思議ではなかったような状況で敵の一人を倒し、一命もとりとめたのだから。

とりあえず装置の破壊を、ということ近く（何故か）あった某大乱闘に出てきそうな大きなハンマーを上条は手にとり、思いきり振りかぶってから全力で装置に叩き込んだ。

もしかしたら爆発するんじゃないか、と叩き込んでから思い至り冷や汗を流した上条だったが爆発するなんてことはなく、稼働を停止しただけに留まった。

「……うし」

装置が止まったことを確認し、上条は地上へと出るために凧を背負う。

そして、その異様な冷たさに愕然とした。

「ッ!? 一条!?!」

凧の身体は、比喻でもなんでもなく氷のように冷たかった。

（やっぱり身体に負担がかかって!!）

これは一刻を争うと判断した上条は凧を背負って地上への階段を掛け上がる。走ることで凧に負担がかかってしまうとも考えたが、これはそんな悠長なことをしてられる場合ではない。

「くそつ。絶対、死なせたりなんかしねえからな!!」

魔術なんて科学の街とは正反対のものにまで手を出して敵を倒そうとした仲間を、死なせるわけにはいかない。

歯を食い縛る上条は、太もみに溜まる乳酸など無視して第七学区の病院へとひた走る。

荒い息と走る足音だけが、夜の学園都市に溶けて消えていった。

### 第83話 dark and dark (後書き)

ども、晁甫です。

さて今話ですが、凧の変貌がやはりメインとなっております。

正直、翼なんて発想は安易すぎかなとも思っただんですが、やっぱり翼になってしまいました(汗)

ただ他の二次小説などと同じになると読者様はごっちゃんになる恐れがあったので翼だけでなく周囲にもなんか色々と漂わせてみました。

凧の両親が超能力者と魔術師だった、というのは完全なる後付設定ですが、丁度よさそうなのでこうなりました(笑)

さて次回は凧は満身創痍で楓たちの待つ病院へと戻ってきてしまっただけですが、そのへんと美琴回になる予定です。

第84話 妹達と正体（前書き）

お待たせしました。

遅くなり申し訳ありません；

## 第84話 妹達と正体

『シスターズ  
妹達』。

かつて超能力者の量産は可能か、という命題に基づき始まった『レイオノイズ量産能力者計画』で生産された二万体のクローン。しかしその実験結果は散々なものだった。量産されたクローンはオリジナルである第三位、御坂美琴と同じ能力開発を行なったのにも関わらず大元のパーセント程度の力しか発揮することができずに実験は失敗。実験が頓挫したことで居場所をなくした二万体のクローンたちはそのまま処分されるかに思われた。

しかし。彼女たちはそこで処分されなかった。計画されていたとある実験のターゲットとして拾われたからだ。

『絶対能力進化』。

学園都市最強の被験者、一方通行を前人未踏のレベル6へと進化させようという実験。その過程として必要だったのが、二万通りの戦闘環境で量産能力者を二万回殺害すること。

彼女たちは恰好のモルモットだった。実験は順調に進み、一人、また一人と『シスターズ妹達』は実験の犠牲として屠られる。

そんな実験に気付き、止めようと奔走した御坂美琴。

実験をする中で芽生えてしまった罪悪感を必死に塗りつぶし、レベル6を目指した一方通行。

そして、この実験に関わったもう一人の超能力者（レベル5）。従兄妹と親友、両方を救うために拳を握った少年。一条風。



三者三用の心が複雑に絡み合ったこの実験は、とある夏休みの出来事だった。

第七学区北側にある雑居ビルの地下四階。そこで少女、御坂美琴は信じられない、信じたくない光景を目の当たりにしていた。

「お姉様……」

抑揚のない、ひどく味気ない声が美琴を不快にさせる。同時に激しい動揺が彼女の胸中に押し寄せてくる。

自分が通う中学である常盤台の制服に身を包み、頭部には少女らしからぬゴツい軍用のゴーグル。

そして、  
自分と同じ顔。

『<sup>システムズ</sup>妹達』と呼ばれる量産クローンが、美琴の目の前に立っていた。

これは加瀬が肉体変化した姿であって、本物の彼女たちではない。そう頭で理解してはいる美琴だが、本能の部分で彼女は攻撃を躊躇っていた。

「ッ……」

思わず下唇を噛む。

一体何の嫌がらせだ。彼女たちを見せられたら、否応なしにあの記憶が蘇ってきてしまう。これでは相手の思う壺だと解つていても、美琴の顔は苦悶に歪む。

「……何のつもりよ……」

ギリツ、と奥歯を噛み締め美琴は自分そっくりの人間へと問い掛ける。

「？ 何のことでしょうか、とミサカはお姉様オリジナルの言葉の意味が分からず首を傾げます」

『妹達シスターズ』の反応は本物と全く同じものだった。それがさらに美琴のフラストレーションを上げていく。いつの間にか握っていた拳からは、ポタポタと血が垂れていた。

許せない。

美琴の脳内に最初に浮かんだのは、自分の傷口を抉るような行いそのものではなく、まるでモノのように妹のことを扱おうとする加瀬に対して。

「……私のことを卑下したり、蔑んだりするのは構わない」

ポツリ、と口を開きそう溢す。ワナワナと震えるその拳を握り締め「でもね、」と付け加えて。

「あの娘たちをモノみたい扱ってバカにするようなことは許さな  
いっ—！」

直情的な美琴だからこそ、自分よりも他人が食い物にされるようなことが許せなかった。そんな彼女に対して、肉体変化した加瀬は。

「……はあ」

やれやれ、と言った感じで小さく息を吐いた後、一瞬にして先程までの白衣を纏った姿に戻っていた。

「全く……興奮めだわ第三位。こんなクローンぐらいで動揺しちゃって、やっぱり超能力者（レベル5）なんだと言っても所詮は十  
四歳の中学生ね」

そんな加瀬を見て、内心で美琴は安堵していた。先程まで感じていた怒りも当然あるが、あのままの姿で自分が攻撃できたかと問われれば、おそらく答えは否だ。実際、美琴は本能の部分で攻撃することを躊躇っていた。

それを考慮すれば、加瀬が能力を解いて元の姿に戻ってくれたことは彼女にしてみれば好都合だった。

（よし……あの娘たちの姿じゃないっていうならまだ手のうち用がある……）

そう思っていた美琴だったが、その考えは次の加瀬の発言によって瞬く間に塗り潰されることとなる。

「……しょうがないなあ」

加瀬が呟いたその言葉の意味合いを図りかねるうち、その真意を美琴は知る。

「これ……あんまり好きじゃないんだけどなあ……」

ソレ（・・・）を目の当たりにして美琴は後悔した。思えば加瀬の『アシミレート完全同化』という能力を知った時点で思い至っていなければならなかったのだ。彼女の持つ、その能力の汎用性と異常性に。

白衣を纏った二十歳前後の女性が加瀬の本当の姿だと、誰が言った？

『アシミレート完全同化』は、文字通り完全に相手に成り代わることができる能力。白衣の女性がその能力で成った姿でないとという可能性がない筈がない。

そして美琴は生まれて初めて戦慄する。

『シスターズ妹達』に成ったときよりも、学園都市第一位に成られるよりも、そんなことが小さなことに思えてしまつくらいに。

「……なん、なのよ……それ……」

「んん？　これが私、加瀬祢遠の本体だけど」

それは『人間』と呼ぶには余りにも歪で。

それは『生きている』と呼ぶには余りにも理ことわりから外れ過ぎていた。

異形。

そう表すことが適切であろう姿に、美琴は足がすくむ。

彼女の前に居たのは、全身を覆うほどの切傷を付け、片眼を失った無惨な女性だった。

第七学区、『冥土返し（ヘヴンキャンセラー）』の勤務する病院へと辿り着いた上条は、全身から噴き出す汗にも構わずその自動扉をくぐった。

今すぐにも風を『冥土返し』に診せなくては、本当に命が危ない。

「あれ？ 上条さん、どうしたんで 風さんッ!？」

とそこに声を掛けてきたのは、丁度ロビーの自販機でいちごおでんなるものを購入していた初春だ。始めは上条が戻ってきたことを不思議に思っていたようだが、彼の背に力なく背負われた風の姿を認めて顔色は一気に豹変した。

「すつ、すぐに先生のところへ!!」

「分かってる!! ……初春は他の奴らを病室から呼んできてくれ」

つい大きな声を出してしまった上条は慌てて口を噤み、初春に楓たちにこのことを伝えるように頼んだ。初春はそれに頷いて急いで病室へと走っていく。その姿を確認し、上条はあの力エル顔の医者がいるであろう院長室へと向かう。風を背負った状態でここまで全力疾走してきたために膝は笑い、十二月だというのに上条の額には大粒の汗が浮かんでいるがそれを振り払うように院長室の扉をノックというよりは叩くようにして上条は内からの返事を待たずにその扉を開けた。

「先生!!」

「君か。少しはマナーというのを守ってもらいたいんだけどね？」

院長室には自分用の椅子に腰掛けてコーヒーカップを持ったカエル顔の医者が、少し困ったような表情でこちらを見ていた。しかし、その表情は上条の背後の凧を見た瞬間に医師のそれへと変わる。

「……………何があつた？」

「俺にも何が何だか全然分らないんです……………！！ 一条が戦つてたら突然……………」

「……………とにかく、直ぐに彼を集中治療室に運ぶよ」

言つてカエル顔の医者は直ぐに立ちあがり病院内にいる医師や看護師を緊急招集して凧を担架に寝かせ、運び出す。身体が氷のように冷たくなっていることも然ることながら、吐き出される荒い息がことの深刻さを物語っていた。院長室を出たカエル顔の医者は直ぐ様手術衣に着替え治療室の中へと入っていった。

「……………ッ」

院長室を出て待合室の長椅子に腰を下ろした上条は、先ほどまでの出来事を整理しようと必死に頭を働かせていた。

『アンリミテッド・メンバース  
規格外体』の一人であるあの大男。奴の『アスリルレーション自在振動』という能力によつて自分たちは窮地に追い込まれた。そこで突然始まつた、凧の魔力生成。能力者が魔力を生成し魔術を行使しようとすれば一体どうなってしまうのかよく知っている上条からしてみれば、凧のしたことは自殺行為にも等しい行いだ。いくら対抗手段が他に無かつたとはいえ、自らを犠牲にしてまで得る勝利に意味などあるのだろうか。

(……いや、違う)

そこまで考えて、上条は頭かぶりを振る。

(一条は守ろうとしたんだ……俺を)

魔術使用中の時の凧の立ち位置を思い出し、上条は思う。凧の立ち位置、それは上条と剛徳司との間に割って入るような位置だった。理由は簡単。守ろうとしていたのだ。無能力者である上条を、規格外の能力者から。どんなに自分が傷ついたとしても、仲間を傷つけないように。

(くそ……)

情けない。ただそれだけが上条の心中を埋め尽くしていた。結局、自分は足手纏いにしかならなかったのだ。

『幻想殺し(イマジンプレイカー)』なんて神様の奇跡さえも打ち消してしまうような代物を持っていても、なんの役にも立たなかった。最初から最後まで守られっぱなしだった。

これでは、何の意味もないじゃないか。

「……終わらせねえ」

赤いランプが点灯中の集中治療室に視線を移して、上条は拳を握る。

「このままじゃ、終わらせねえ……!! 一条、死ぬんじゃないぞ。今度は俺が、お前を守る番だ」



勢いよく病室の扉を開いてやってきた初春に、その室内にいた全員の視線が集まった。

「初春ちゃん、どうしたの？」

「初春、病院では静かにですの。第一、消灯時間はもうとっくに……」

「大変なんですっ!!」

白井の声を遮って、初春は叫ぶ。

その慌てように只事ではないと判断した楓たちは先を促す。

「どうしたの……?」

言いようのない不安にかられながら、楓は今想像してしまっている事が外れてくれることを願う。

だが、そういう時程、悪い予感というのは的中してしまうものらしい。

初春の口から出たその内容に、楓は呆然と呟いた。

「  
風が……?  
」

## 第84話 妹達と正体（後書き）

ども、晁甫です。

今回は美琴、凧上病院の話となりました。

加瀬についてはこの能力を考えたときから擬態やらなにやら考えていたんですが結局こうなりました。

帝督や軍覇回はこの美琴回がある程度進まない構成上書けないのでそつちをお待ちの読者様はもうしばしお待ちください（-”-）（

第85話 a girls decision (前書き)

手が進むつちにと書き上げました。

第85話 a girls decision

既にとつぷりと陽も暮れて、誰もが寝静まった学園都市。その第七学区のとある病院の一室で、楓は星南、白井と初春のベッド近くでガールズトークに華を咲かせていた。消灯時間を実に三時間ほど過ぎてしまっているが、そこはカエル顔の医者の計らいによってこの一室だけ未だに部屋の明かりは灯ったまま。

「で？ 結局蘭さんは一条先輩のことが好きなんですの？」

「なっ、ななな何でそんなこと聞くのかなっ！？」

「隠してもムダですよ。黒子には全てお見通しですよ」

やけにいい笑顔で星南にずっと詰め寄っていく白井。こんな非常事態だというのに何を呑気なと思うかもしれないが、彼女たちの本心はこういった明るく盛り上がる話をしていなければ、今にも不安に押し潰されそうになってしまふからだ。凧や美琴たちのことはもちろん言つまでもなく信じているが、それでもやはり不安というのは付き纏うもので、万が一を考えてしまふのだ。もし凧の傷口が開いたら、もし美琴の襲撃時のダメージで相手に追い詰められていたら。一度考えてしまったことはそう簡単に払拭できない。

故に、こうして彼女たちはガールズトークという緊張や不安とは無縁の話をする事で少しでも気を紛らわせようとしているのだ。

現在の標的は、専ら星南のようだ。白井の尋問のような質問責めにボロボロと喋ってしまう彼女は恰好の獲物ターゲットとなっていた。

「私もきちんとそこらへん聞きたいかなあ」

「ちょっと橘先輩！？何を言ってるんですか！？」

「さあさあきつちりきつかりこの黒子に吐いちゃってくださいな」

頼みの綱でもあった楓までもが敵に回り完全に孤立状態の星南の目尻にはなんだか涙が溜まっているようにも見えるが、そんなの知るかと言わんばかりに彼女たちの口撃は続く。

「どこに惚れちゃったわけ？」

「……あの、その……」

「なんですの？」

「か、かつこいい、とこ……る」

顔を真っ赤にしてモジモジよ答えるその姿に小動物染みた何かを感じ楓が若干ときめいたのはここだけの秘密である。

「まあ確かに、一条先輩ルックスはなかなかですわね」

「あ、黒子ちゃんもそう思うっ？」

「ええまあ。身長も高いのでそれなりに見映えはいいほうですし」

「そつなのよねえ。だからアイツ狙いの子も回りに多くって」

言って楓は『しまった』と言うような表情を浮かべた。喋りすぎたのは分かっている。そして、今まで星南に向いていた矛先がこちらに緊急変更されるといふことも。

「橘先輩。先輩は一条先輩のこと、どう思ってるんですか？」

案の定、星南が仕返しとばかりにこちらに詰め寄ってきた。

「ど、どつって……」

一端覧祭の人気劇の練習の時、楓は星南に一度そんなようなことを言っているため、そこまで焦る必要もたじろぐ必要もないのだが、改めて問われるとなんだか気恥しい。

「聞くまでもありませんわよ」

そんな答えに迷う楓に助け舟を出したのは白井で、そんな分かりきったこと聞く必要はないというようなニュアンスで星南に言ったのを聞いて心の中で感謝していた楓だが。

「まあ、一応本人の口から確証はとりたいですけど」

助け舟として差し出され乗り込んだのは泥の船だったということに楓はよつやく気が付いた。

「くく黒子ちゃん？ なにをそんな意味が解らないことを言うのかな？」

明らかに動揺している楓を見て楽しんでいるのか、白井はニヤリと笑って。

「あら。ここに同じ男性を好きになった女性が居るんですよ？  
どうせなら腹を割って話すほうがいいじゃありませんか」

自分自身に男の影がないからなのか、今日の白井はやけに積極的  
のようだ。星南だけでなく楓までもが彼女の尋問に屈服しようとし  
ている。

「そ、そういつ黒子ちゃんはどうなの！？」

追い詰められて咄嗟に出た苦し紛れの一言だったが。

「わたくしですか？」

思いの外反応した。

反応したと言ってもそれは顔を赤くしたり、オロオロしたりとそ  
んな少女らしく可愛らしい反応ではなくむしろ『は？ 何言ってる  
だ』的な反応である。

「わたくしにはお姉様がいますもの。お姉様以外は眼中にありませ  
んわ！」

「ああ、……そう」

「白井さんて百合なんですね……」

既に黒子の本性を知っていた楓は呆れるようにして、先程まで初  
春の看病などをしており風紀委員ジャッジメントとしての白井しか知らなかった星  
南は若干頬を引き吊りながら白井の御坂武勇伝を聞くこととなった。



楓も星南も、そして白井も。こんなありふれた日常が続けばいいと心の何処かで願いながら。

「そっいえば初春ちゃんは？」

「言われてみれば飲み物を買いに行くって言ったまま戻ってきませんね」

ふと楓がこの場に居ない初春のことを切り出した。彼女は一頻りガールズトークしたのち飲み物を買いに一階のロビーにある自販機へと向かったのだが、この三階の病室とロビーはエレベーターを使えば数分で行き来できる距離である。たとえ階段を使ったとしても十分はかからない。

「遅いですわね初春」

などと三人が溢していると。

ガラッ！　と勢い良く病室の扉が開き、息を切らした初春が飛び込んできた。

突然のことに目を丸くする三人に対して、初春は目尻に涙を溜めて叫ぶ。

「たっ、大変なんです！！」

一体何が？　と普段の三人ならば思うのだろうが、今この場合に限っては三人の脳内に浮かぶことは同じだった。

即ち、凧たちの身に何かあった。

(まさか……)

楓は胸の内から湧くザワザワとした感情を必死に否定しようとするが、初春の次の言葉でそれは現実のものとなってしまふ。

「楓さんが……、楓さんが……っ!!」

こういう時に限って、嫌な予感というのは当たってしまうものだ。そしてそれは楓にとって最悪の宣告となった。

「呷っ!!」

初春からの一報を受けた楓たちは一階の集中治療室前まで駆け込んできた。

深夜ということもあった辺りには人一人いない  
いや、壁に沿って設置された長椅子に、頂垂れたままの上条の姿があった。

しかし楓は上条には目もくれず集中治療室の扉の前へと走っていき、扉の上にある手術中であることを示す赤く点灯したランプを見上げる。

「……どっつて」

込み上げてくるものを押し止めることができず、楓はポツリと咳く。

「どうしてよー!」

「橘先輩……」

「どうして!?! 何でアイツばかりこんなに傷付かなくちゃならないのよ!?! 昼間だって今だって、どうして……!?!」

ついには堪えきれなくなって溢れ出す涙とともに崩れ落ちるようにして冷たい床に座り込む。星南も白井も初春も、そして上条も何も話そうとはしない。楓の嗚咽だけが、暗い病院の廊下に溶けて消えていく。

「……橘、さん」

そんな空間で言葉を発したのは、今まで長椅子に座り込んでいた上条だった。彼は立ち上がったへたり込む楓のもとまで歩み寄る。

「……ごめん。俺が足手まとிட்டったんだ……」

「……」

「一条が俺を守ろうとしてくれて、それで」

「もう、言わないで……」

上条の言葉を遮って泣きじゃくる楓は小さく続ける。

「分かってる……。上条君に非はないし、アイツがああいう性格だから、無茶するってことぐらい、分かってる……」

『でもね、』と彼女は付け加えて。

「私のこの気持ちは、一体どうしたらいいのよっ!!」

いつも自分よりも前を歩く凧。

私の知らないところで危ない橋を渡っている。

私には何の相談もしない。全部自分で背負い込んで、全部自分で片付けようとする。

私は、そんなに頼りない人間なんだろうか。

好きな人と対等ではないのだろうか。

いつまでも守られてばかりじゃ、いつまで経っても強くなれやしない。

「凧……」

今正に手術中であろう集中治療室内にいる凧に向かって、楓は泣き腫らした目を向ける。

「もう、守られっぱなしにはならない」

言って楓は立ち上がる。すぐ傍に立っていた上条の耳元で小さく何かを囁いて、楓は病院の出口へと向かう。

「え？」

耳元で囁かれた言葉を反芻しながら上条がそちらを向くが、既に楓は走り出していた。

「ちょ、橘先輩!？」

「どこに行くんですの!？」

星南や白井たちの静止の声も聞かず、楓はそのまま病院を飛び出し真夜中の学園都市に消えていった。

「どうしよう追いかけたほうが!！」

「わたくしが行きますわ!！」

幾らなんでもこんな状況の学園都市を一人で行動するのは危険すぎる。直ぐ様白井がそのあとを追って走り出した。

「上条さん、楓さんはなんて……?」

病院に残った初春に問い掛けられた上条は、視線を病院の出口へ向けたまま答える。

「『風の』とよろしくね』って……」

「ホラホラぼさつと突っ立ってんじゃねえよッ！！」

ゴバツ！！ と地面が隆起し、それによって捲れ上がったコンクリート片の雨が間髪入れずに帝督へと降り注ぐ。

「くそがつ！！」

帝督はそれを横に転がることで何とか避け、直ぐに立ち上がって態勢を立て直す。視線の先には燃えるように赤いアシンメトリーの髪をした男、『アシリミッド・メンパース規格外体』の一人、みなしまじか船首円。

「まったく逃げ足だけは一級品だなあ。第二位の名が泣くぜ？」

「ハッ、んなもん犬にでも食わしとけよ」

憎まれ口を叩く帝督だが、その疲労は限界近くまで溜まっていた。土御門の魔術行使を邪魔されないように身体を張り、更に現在倒れ

た土御門を庇いながら船首の攻撃を間一髪で避け続けているのだ。  
土御門と船首、両方を警戒しなくてはならないため精神的にキツ  
く精神力がガリガリと削られていくのを帝督自身も知覚していた。

（不味いな……、やっぱ能力が使えねえってのはとんでもなくネツ  
クだぜ。これじゃ防戦一方、じり貧にしかならねえ……）

『カウンターバランス能力破壊』を委託できる巨大な装置は土御門が発動させた『赤ノ  
式』で破壊することに成功したが、問題はこの規格外の能力者をい  
かにして倒すかだ。逃げる、という選択肢も浮かん だがそれはす  
ぐに却下された。たとえここで上手く逃げ切ることが出来たとして  
もそれでは根本的な解決にはならない。

そして何より、船首の能力が簡単に逃してくれるとは思えなかつ  
た。

「チツ、本当に厄介な能力だ」

吐き捨てるように言う帝督。船首の能力、それは人間である  
以上必ず触れているモノを支配する能力。

「クハツ、そう言うなよ。お前の『ダークマター未元物質』に比べりゃ俺の能力  
なんざ可愛いもんだぜ。俺の  
」

人を小馬鹿にしたような態度で、青年は自身の能力名を告げた。

「『グラウンド・ゼロ地盤掌握』よりはよ  
」





第85話 a girls decision (後書き)

ども晃甫です。

というわけで今回は主に楓回となりました。今までただのヒロイン的立ち位置だった彼女ですが、ようやく参戦です。

サブタイの意味は『少女の決意』と言ったところですかね。  
次回からは帝督、美琴回となります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0444q/>

---

とある最強の水分支配《hydro command》

2011年10月26日02時01分発行